

荒砥宮田遺跡Ⅱ

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

古代・中近世の調査

荒砥前田遺跡

昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

弘仁9年洪水被災の水田と
復旧島の調査

2004

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒砥宮田遺跡Ⅱ

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

古代・中近世の調査

荒砥前田遺跡

昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

弘仁9年洪水被災の水田と
復旧畠の調査

2004

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

前橋市の旧荒砥地区では、昭和56年度から国道50号の北側地域を対象にした県営荒砥北部圃場整備事業が始まり、平成3年度まで行われました。圃場の対象になった地域は、県内でも有数の埋蔵文化財密集地で、多くの埋蔵文化財が記録保存の対象となりました。

当事業団では昭和56年度から59年度にかけて、事業地域内の埋蔵文化財の発掘調査を行いました。本来なら発掘調査後、直ちに報告書を刊行する予定でしたが、諸般の事情により、平成5年度から整理事業を開始し、これまでに8遺跡、12冊の調査報告書を刊行いたしました。平成15・16年度には、昭和58年度に発掘調査を実施した荒砥宮田遺跡の整理事業を実施し、ここにその報告書の第Ⅱ分冊を上梓することとなりました。

荒砥宮田・荒砥前田両遺跡は、縄文時代から中・近世にかけての複合集落遺跡です。多くの遺構・遺物を検出したことから、整理事業は2年計画で行うこととしました。第2年次の今年度は、古代および中近世の竪穴住居や掘立柱建物・溝・土坑とその出土遺物を対象に整理作業をおこない、その成果を本報告書で報告しました。赤城山南麓地域の当該期の集落研究に新たな資料を加えることとなりました。

発掘調査から報告書刊行まで、群馬県農政部土地改良課、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、一方ならぬご指導・ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されることを願い序といたします。

平成16年9月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は1983(昭和58)年度の県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴う荒砥宮田遺跡の発掘調査報告書の第2分冊および1981(昭和56)年度の県営圃場整備事業荒砥南部地区に伴う荒砥前田遺跡の発掘調査報告書である。両遺跡の調査年度は異なるが、前橋市市道10号線を挟んで、遺構面や遺構内容が連続した遺跡であることから、合冊の報告書とした。

2. 荒砥宮田遺跡は、群馬県前橋市荒口町80番地等に所在した。遺跡名は、遺跡のある旧村名である「荒砥(あらと)」に、字名の「宮田」を付して「荒砥宮田(あらとみやた)」とした。

荒砥宮田遺跡の発掘調査は、群馬県農政部、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期 間 1983(昭和58)年8月23日～1984(昭和59)年3月24日

管理・指導 小林起久治(常務理事)、白石保三郎(事務局長)、大澤秋良(管理部長)、
松本浩一(調査研究部長)、近藤平志(総務課長)、細野雅男(調査研究第3課長)

事務担当 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏(職員)
野島のお江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子(補助員)

調査担当 細野雅男、下城正(主任調査研究員)、鹿田雄三(主任調査研究員、現県立伊勢崎東高等学校教諭)、相京建史、藤巻幸男、小島敦子、徳江秀夫、斉藤利昭(調査研究員)

3. 荒砥前田遺跡は、群馬県前橋市今井町北原225-16番地他に所在した。遺跡名は荒砥宮田遺跡同様、遺跡のある旧村名である「荒砥(あらと)」に、字名の「前田」を付して「荒砥前田(あらとまえだ)」とした。

荒砥前田遺跡の発掘調査は、群馬県農政部、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期 間 1981(昭和56)年10月1日～1982(昭和57)年3月31日

管理・指導 小林起久治(常務理事)、沢井良之助(事務局長)、井上唯雄(調査研究部長)、
近藤平志(総務課長)、細野雅男(調査研究第3課長)

事務担当 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏(職員)
野島のお江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子(補助員)

調査担当 石坂 茂(調査研究員)

4. 両遺跡の発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次の通りである。

期 間 2003(平成15)年4月1日～2004(平成16)年9月30日

管理・指導 小野宇三郎(理事長)、住谷永一(常務理事)、神保侑史(事業局長)、萩原利通・矢崎俊夫(管理部長)、右島和夫(調査研究部長)、植原恒夫・丸岡道雄(総務課長)、相京建史(資料整理課長)

事務担当 高橋房雄(経理係長)、竹内 宏(総務係長)、須田朋子・吉田有光(主幹)、田中賢一(主事)、
阿久沢玄洋・栗原幸代・佐藤聖行(主任)、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、
本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂(補助員)

編 集 小島敦子(専門員)

本文執筆 徳江秀夫：第1章-2、赤沼英男：第6章-1、植崎修一郎：第6章-2、
新倉明彦：第7章-3、飯森康広：第7章-4、小島敦子：その他

遺構写真 調査担当者

遺物 写真 榑崎修一郎：人骨・獣骨、佐藤元彦(係長代理)：その他

遺物 観察 大西雅広(専門員)：中近世土器、新倉明彦(専門員)：石塔類、小島敦子：その他

保存 処理 関 邦一(係長代理)、土橋まり子(嘱託員)、小材浩一(補助員)

器械 実測 田中富子、富沢スミ江、伊東博子、岸 弘子(補助員)

遺物 整理 星野幸恵、佐々木茂美、真庭和子、新井重明、何 英姿、笛木広美、松浦久美子、菊池透、
および 大塚京子、織田友子、木暮芳枝、馬場信子、儘田澄子、新井雅子、丸橋富美子、田中のぶ子、

図面作成 田中富美子(補助員)、

委託関係 財団法人岩手県文化振興事業団 (株)測研

5. 石材同定にあたっては飯島静雄氏(群馬県地質研究会会員)にご教示を得た。
6. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
赤沼英男(岩手県立博物館)、藤澤良祐(瀬戸市埋蔵文化財センター)、井上唯雄、鹿田雄三、関口巧一、
前原 豊、群馬県農政部土地改良課 群馬県農政部前橋土地改良事務所 荒砥北部土地改良区 群馬
県教育委員会
7. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび(財団法人)群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管して
いる。

凡 例

1. 荒砥宮田遺跡の調査に用いたグリッドは、調査区全体をカバーできるように、100mの大グリッドを設定し、その中を5×5mの小グリッドとした。グリッドの呼称は100mの大グリッドを独立した単位とし、北西コーナーの交点をA-0とし東から西方向に1から20まで、北から南方向にaからtまでとし、Aa-1のように呼称した。グリッドの南北ラインは、座標北から西へ26°偏っている。
2. 荒砥前田遺跡の調査に用いたグリッドは、調査区全体をカバーできるように、5×5mのグリッドを設定した。グリッドの呼称は南東コーナーの交点をA-0とし東から西方向に1から11まで、南から北方向にAからQまでとし、A-1のように呼称した。グリッドの南北ラインは、座標北から西へ23°偏っている。
3. 本書で使用した国家座標は世界測地第IX系の新座標によるものである。
本書では国家座標を図示する際には、既報告の周辺遺跡や『荒砥宮田遺跡I』との関連を考慮して、世界測地系に基づく測地成果2000による新座標とそれ以前の旧座標を併記した。旧座標は破線で示した。
4. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用した。
5. 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を使用している。
6. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

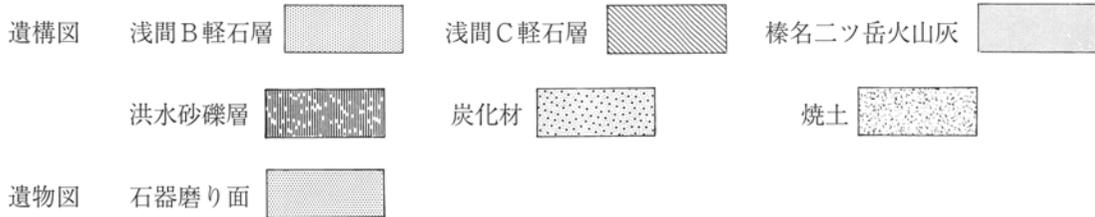
遺構図 住居 1：80 掘立柱建物 1：80 柱穴列 1：80 火葬跡 1：20 その他の土坑墓 1：40
土坑 1：60 井戸 1：60 溝断面 1：60 畠 1：100 水田 1：200

遺物図 土器 1：4 土器拓影 1：3 砥石 1：3 石製品 1：4 石造物 1：6 小型石器 1：1

7. 遺物番号は種類ごとの連番で、下記のように種類の記号を付した。記号番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。

土器 記号無し 石器 S 金属器 M

8. 図中で使用したスクリーンパターンは以下のとおりである。



9. 遺物写真図版の倍率は、土器は原則として1/4、土器破片は1/3、石器は砥石・小型石製品1/4、石鉢・石臼1/6、石造物1/9に近づけるようにした。

10. 遺物の重量の計測にあたっては6000gまでは1g単位、20kgまでは50g単位、20kg以上は100g単位の秤を使用して計測した。ただし、6000g以下のものでも、秤台部より大きなものは1g単位の秤で計測しているため、1g単位となっているものがある。

11. 大型石像物の実測にあたっては展開ではなく四分法で行ったが、右半は断面のみとした。

12. 掘立柱建物の平面図の重複遺構は、煩雑を避けるために、柱穴に関係するものに限った。したがってエレベーション図に表現された遺構が、平面図に描かれていない場合がある。詳細は全体図を参照願いたい。

13. 各地図の使用は以下のとおりである。

第1図 国土地理院発行、20万分の1地勢図（長野・宇都宮）

第2図 前橋市土地改良事務所発行、県営圃場整備事業荒砥北部地区計画概要

第3図 『群馬県史』通史編1付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡I』第5図を修正して使用。

第4図・第6図・第7図・第127図・第128図 前橋市発行、昭和49年測図現形図47

第5図 国土地理院発行、2万5千分の1地形図（大胡）

第8図・第129図 前橋市発行、平成10年測図現形図47

14. 各遺構の記述にあたっては以下のような点に留意して記述した。

住居 位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形にはほぼ分類して記載した。規模は遺構確認面での上場で計測した。なお、竈付設住居では竈の部分を含んでいない。面積は住居の上場でプランメーターの3回平均値を計測した。方位は北方向に最も近い壁の方向を計測した。床面は傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。炉・竈はそれぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。所見では各住居の調査から考えられることがらがあれば記述した。また出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載したが、表現は不統一である。縄文時代は土器型式名、古墳時代については世紀で表した。特に古墳時代前期の歴年代については、確定していない状況もあるが、基本的な考え方は第6章で詳述した。

その他の遺構 土坑・溝・墓等については、住居に準じて記述した。

なお近年火山噴出物の名称は「1噴火輪廻の堆積物」を基本単位とするテフラ名で総称され、性状の異なる堆積物の層相は記号化されているが、本報告書では直接遺構を覆っている堆積物を旧来の通称で記述した。今後の課題としたい。

町田洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス日本列島とその周辺』

目次

序

例言

凡例

第1章 調査に至る経過

1. 県営圃場整備事業と発掘調査……………1
2. 荒砥前田遺跡の調査……………2
3. 荒砥宮田遺跡の調査……………3

第2章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と地形……………5
2. 周辺の遺跡……………8

第3章 発掘調査の方法と概要

1. 荒砥宮田遺跡の調査方法と概要……………14
2. 荒砥前田遺跡の調査方法と概要……………20

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

1. 古代……………24
 - (1) 概要……………24
 - (2) 1区の遺構と遺物……………24
 - (3) 2区の遺構と遺物……………30
 - (4) 3区の遺構と遺物……………38
 - (5) 4区の遺構と遺物……………45
2. 中近世……………45
 - (1) 概要……………45
 - (2) 1区の遺構と遺物……………48
 - (3) 1北区の遺構と遺物……………151
 - (4) 2区の遺構と遺物……………153
 - (5) 4区の遺構と遺物……………180

第5章 荒砥前田遺跡の遺構と遺物

1. 中近世……………181
2. 古代……………191
3. 古墳時代……………203

第6章 自然科学分析……………207

1. 出土遺物の形状と組成からみた荒砥宮田遺跡における平安時代の鉄器製作活動について
赤沼英男
2. 荒砥宮田遺跡出土人骨
榑崎修一郎
3. 荒砥宮田遺跡出土馬歯
榑崎修一郎

第7章 発掘調査の成果と問題点……………231

1. 荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡調査の成果
小島敦子
2. 荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡の洪水災害復旧について
小島敦子
3. 荒砥宮田遺跡出土の石塔類・石製品について
新倉明彦
4. 荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡・荒砥諏訪西遺跡の屋敷遺構について
飯森康広

参考文献……………253

遺構一覧表……………255

遺物観察表……………273

報告書抄録……………302

写真図版……………303

付図1 荒砥宮田遺跡1区・1北区中近世遺構全体図

付図2 荒砥宮田遺跡1区掘立柱建物・柱穴列位置図

付図3 荒砥宮田遺跡1区柱穴全体図(1)~(3)

付図4 荒砥宮田遺跡2区古代・中近世遺構全体図

挿図目次

第 1 図 荒砥宮田遺跡の位置……………1	第 45 図 1 区68号溝 橋脚ピット……………77
第 2 図 県営圃場整備事業荒砥北部地区と 昭和58年度工事区……………2	第 46 図 1 区溝の土層断面 (1) 10・12・13号溝……………79
第 3 図 試掘トレンチと調査区……………4	第 47 図 1 区溝の土層断面 (2) 15・20・21・24号溝……………80
第 4 図 群馬県中央部の地形と荒砥宮田遺跡……………5	第 48 図 1 区溝の土層断面 (3) 40・41号溝……………81
第 5 図 荒砥宮田遺跡周辺の地形……………6	第 49 図 1 区溝の土層断面 (4) 42・44・59・82号溝……………82
第 6 図 荒砥宮田遺跡周辺の遺跡分布……………9	第 50 図 1 区溝の土層断面 (5) 64～68・44(72)・48・71号溝……………83
第 7 図 古代～中近世の遺跡分布……………12	第 51 図 1 区溝の土層断面 (6) 73・83号溝……………84
第 8 図 荒砥宮田・前田遺跡の発掘区と 前田遺跡の基本土層……………15	第 52 図 1 区溝の土層断面 (7) 91・94号溝……………85
第 9 図 荒砥宮田遺跡の基本土層……………16	第 53 図 1 区溝の出土遺物 (1) 1・3・12号溝……………86
第 10 図 荒砥宮田遺跡調査区の位置 (調査時)……………21	第 54 図 1 区溝の出土遺物 (2) 12・17・20・21・42・46・62号溝……………87
第 11 図 荒砥宮田遺跡調査区の位置 (現状)……………23	第 55 図 1 区溝の出土遺物 (3) 40・41号溝……………88
 荒砥宮田遺跡	
第 12 図 1 区東谷地浅間B 軽石直下面と土層断面……………25	第 56 図 1 区溝の出土遺物 (4) 68号溝①……………89
第 13 図 1 区洪水層上島……………27	第 57 図 1 区溝の出土遺物 (5) 68号溝②……………90
第 14 図 1 区洪水層上島土層断面図……………29	第 58 図 1 区溝の出土遺物 (6) 68号溝③……………91
第 15 図 水田耕作土出土遺物……………30	第 59 図 1 区溝の出土遺物 (7) 68号溝④……………92
第 16 図 1 区洪水層下水田と土層断面……………31	第 60 図 1 区溝の出土遺物 (8) 68号溝⑤……………93
第 17 図 2 区東谷地浅間B 軽石下水田……………33	第 61 図 1 区溝の出土遺物 (9) 72・73号溝……………94
第 18 図 2 区東谷地浅間B 軽石直下水田土層断面……………35	第 62 図 1 区溝の出土遺物 (10) 72号溝……………95
第 19 図 2 区4号住居と出土遺物……………37	第 63 図 1 区溝の出土遺物 (11) 59・75・78・79号溝……………96
第 20 図 2 区7号住居と出土遺物……………38	第 64 図 1 区溝の出土遺物 (12) 94号溝……………97
第 21 図 3 区浅間B 軽石下面……………39	第 65 図 1 区井戸の出土遺物 (1) 1・4号井戸……………98
第 22 図 3 区浅間B 軽石下面土層断面……………41	第 66 図 1 区井戸の出土遺物 (2) 2号井戸……………99
第 23 図 4 区浅間B 軽石下面……………43	第 67 図 1 区井戸の出土遺物 (3) 2・18・36・48号井戸……………100
第 24 図 4 区浅間B 軽石下面土層断面……………43	第 68 図 1 区井戸の出土遺物 (4) 53・54号井戸……………101
第 25 図 1 区の掘立柱建物位置図……………47	第 69 図 1 区井戸の出土遺物 (5) 59・61・66・67号井戸……………102
第 26 図 1号掘立柱建物跡……………48	第 70 図 1 区井戸 (1) 1・2・3・4・5号井戸……………103
第 27 図 2号・3号掘立柱建物跡……………49	第 71 図 1 区井戸 (2) 6～12・14～16号井戸……………104
第 28 図 4号・5号掘立柱建物跡……………51	第 72 図 1 区井戸 (3) 13・17～23号井戸……………105
第 29 図 8号掘立柱建物跡……………52	第 73 図 1 区井戸 (4) 24～33号井戸……………106
第 30 図 9号・10号掘立柱建物跡……………54	第 74 図 1 区井戸 (5) 34～38・40～42号井戸……………107
第 31 図 11号掘立柱建物跡……………55	第 75 図 1 区井戸 (6) 43～50号井戸……………108
第 32 図 12号・13号掘立柱建物跡……………57	第 76 図 1 区井戸 (7) 51～59号井戸……………109
第 33 図 14号・15号掘立柱建物跡……………58	第 77 図 1 区井戸 (8) 60～67号井戸……………110
第 34 図 17号掘立柱建物跡……………60	第 78 図 1 区108号土坑と出土遺物……………111
第 35 図 6号掘立柱建物跡……………61	第 79 図 1 区土坑出土遺物……………112
第 36 図 7号・16号掘立柱建物跡……………63	第 80 図 1 区土坑 (1) 円形①……………113
第 37 図 18号・19号掘立柱建物跡……………64	第 81 図 1 区土坑 (2) 円形②……………114
第 38 図 20号・21号掘立柱建物跡……………66	第 82 図 1 区土坑 (3) 楕円形①……………115
第 39 図 25号・26号掘立柱建物跡……………67	第 83 図 1 区土坑 (4) 楕円形②……………116
第 40 図 23号・24号掘立柱建物跡……………68	第 84 図 1 区土坑 (5) 隅丸方形・隅丸長方形……………117
第 41 図 29号・30号掘立柱建物跡……………69	第 85 図 1 区土坑 (6) 方形①……………118
第 42 図 27号掘立柱建物跡……………71	第 86 図 1 区土坑 (7) 方形②……………119
第 43 図 28号掘立柱建物跡……………72	第 87 図 1 区土坑 (8) 方形③……………120
第 44 図 1 区溝と圃場整備直前の地割り……………74	第 88 図 1 区土坑 (9) 方形④……………121

第 89 図	1 区土坑 (10) 方形⑤	122
第 90 図	1 区土坑 (11) 長方形①	123
第 91 図	1 区土坑 (12) 長方形②	124
第 92 図	1 区土坑 (13) 長方形③	125
第 93 図	1 区土坑 (14) 長方形④	126
第 94 図	1 区土坑 (15) 方形か	127
第 95 図	1 区土坑 (16) 細長方形①	128
第 96 図	1 区土坑 (17) 細長方形②	129
第 97 図	1 区土坑 (18) 細長方形③	130
第 98 図	1 区土坑 (19) 細長方形④	131
第 99 図	1 区土坑 (20) 細長方形⑤	132
第100 図	1 区堅穴状遺構 (1) 1・2号堅穴状遺構	133
第101 図	1 区堅穴状遺構 (2) 4・5号堅穴状遺構	134
第102 図	1 区堅穴状遺構 (3) 6・8～10号堅穴状遺構	135
第103 図	1 区堅穴状遺構 (4) 11・12号堅穴状遺構と出土遺物	136
第104 図	1 区堅穴状遺構 (5) 13・14号堅穴状遺構	137
第105 図	1 区堅穴状遺構 (6) 15～19号堅穴状遺構	138
第106 図	1 区18号堅穴状遺構出土遺物	139
第107 図	1 区堅穴状遺構 (7) 20号堅穴状遺構と出土遺物	140
第108 図	1 区堅穴状遺構 (8) 21号堅穴状遺構と出土遺物	141
第109 図	1 区堅穴状遺構 (9) 22～25号堅穴状遺構と出土遺物	142
第110 図	1 区堅穴状遺構 (10) 26号堅穴状遺構と出土遺物	143
第111 図	1 区堅穴状遺構 (11) 27・28号堅穴状遺構	144
第112 図	1 区27・28号堅穴状遺構出土遺物	145
第113 図	1 区堅穴状遺構 (12) 29・30号堅穴状遺構と出土遺物	146
第114 図	1 区土坑墓 99・153号土坑と出土遺物	147
第115 図	1 区遺構外の出土遺物 (1)	148
第116 図	1 区遺構外の出土遺物 (2)	149
第117 図	1 区遺構外の出土遺物 (3)	150
第118 図	1 北区土坑	151
第119 図	1 北区溝・井戸と出土遺物	152
第120 図	2 区1・2号井戸と出土遺物	153
第121 図	2 区火葬跡・土坑墓・土坑の分布	154
第122 図	2 区火葬跡 (1) 2号土坑	155
第123 図	2 区火葬跡 (2) 3・30号土坑	156
第124 図	2 区火葬跡 (3) 39・12号土坑	157
第125 図	2 区火葬跡 (4) 18・37号土坑	158
第126 図	2 区50号土坑と出土遺物	159
第127 図	2 区土坑墓 (1) 1・10・23・24・25号土坑と出土遺物	161
第128 図	2 区土坑墓 (2) 27・31号土坑と出土遺物	162
第129 図	2 区土坑墓 (3) 40・41・42号土坑と出土遺物	163
第130 図	2 区土坑墓 (4) 44・45・48号土坑と出土遺物	164
第131 図	2 区土坑墓 (5) 51・70号土坑と出土遺物	165

第132 図	2 区土坑墓 (6) 53・61号土坑と出土遺物	166
第133 図	2 区土坑墓 (7) 62号土坑と出土遺物	167
第134 図	2 区土坑墓 (8) 63・65号土坑と出土遺物	168
第135 図	2 区土坑 (1) 円形	169
第136 図	2 区土坑 (2) 楕円形	170
第137 図	2 区土坑 (3) 方形	171
第138 図	2 区遺構外の出土遺物 (1) 土器	172
第139 図	2 区遺構外の出土遺物 (2) 古銭	173
第140 図	2 区遺構外の出土遺物 (3) 石造物①	174
第141 図	2 区遺構外の出土遺物 (4) 石造物②	175
第142 図	2 区遺構外の出土遺物 (5) 石造物③	176
第143 図	2 区遺構外の出土遺物 (6) 石造物④	177
第144 図	2 区遺構外の出土遺物 (7) 石製品①	178
第145 図	2 区遺構外の出土遺物 (8) 石製品②	179
第146 図	4 区の遺構と表土遺物	180

荒砥前田遺跡

第147 図	1 号掘立柱建物跡	182
第148 図	2 号掘立柱建物跡	184
第149 図	3 号掘立柱建物跡	185
第150 図	4 号掘立柱建物跡	186
第151 図	5 号掘立柱建物跡	187
第152 図	中近世の土坑・井戸・溝	188
第153 図	中近世の遺構全体図	189
第154 図	浅間B軽石下水田と出土遺物	193
第155 図	洪水層上島と出土遺物	195
第156 図	洪水層下水田出土遺物	196
第157 図	洪水層下水田	197
第158 図	洪水層下水田土層断面	199
第159 図	古墳時代遺構全体図	201
第160 図	8～11号溝土層断面	204
第161 図	8・9号溝出土遺物	205
第162 図	4・5号土坑と出土遺物	205
第163 図	遺構外の出土遺物	206

第 6 章

1. 図 1	Na 1 の外観と試料の組織観察結果	215
図 2	Na 2 の外観と試料の組織観察結果	216
図 3	Na 3・5・6 の外観と試料の組織観察結果	217
図 4	鋼製鉄器に含有される Cu・Ni・Co 三成分比	218
2. 図 1	2 区48号土坑出土歯残存図	225
3. 図 1	荒砥宮田遺跡出土馬歯残存図	230

第 7 章

1. 第164 図	1 区・1 北区遺構全体図	232
第165 図	2 区遺構全体図	234
2. 第166 図	荒砥宮田・荒砥前田遺跡の古代の田畠	237
3. 第167 図	荒砥宮田遺跡出土の石塔	238
4. 第168 図	荒砥宮田・荒砥前田遺跡の掘立柱建物	243
第169 図	荒砥宮田遺跡の建物変遷	245
第170 図	荒砥諏訪西遺跡の建物変遷	249

表目次

荒砥宮田遺跡

第1表 県営圃場荒砥北部地区における 昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	3
第2表 周辺遺跡の概要	10
第3表 各調査区の遺構	15
第4表 荒砥宮田遺跡の土坑墓の出土遺物	160

荒砥前田遺跡

第5表 荒砥前田遺跡洪水下水田計測表	197
--------------------	-----

第6章

1. 表1 調査資料の概要	214
表2 No.1釘の分析結果	214

表3 No.2鉄塊の分析結果	214
表4 鉄滓・羽口先端の分析結果	214
2. 表1 荒砥宮田遺跡2区出土人骨一覧	219
表2 荒砥宮田遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表	228
3. 表1 荒砥宮田遺跡出土馬歯計測値及び比較表	230

第7章

第6表 主な溝出土遺物の時期	233
第7表 土坑墓出土古銭の初鑄年代	235
第8表 荒砥宮田遺跡掘立柱建物の柱間計測表	240
第9表 荒砥諏訪西遺跡掘立柱建物の柱間計測表	247

写真目次

第6章

2. 写真1 2区12号土坑出土火葬人骨	220
写真2 2区40号土坑出土人骨	222
写真3 2区40号土坑出土歯	222
写真4 2区42号土坑出土人骨	223
写真5 2区42号土坑出土歯	224
写真6 2区48号土坑出土歯	225
写真7 2区50号土坑出土人骨	227
写真8 2区50号土坑出土歯	227
3. 写真1 荒砥宮田遺跡出土馬歯	230

荒砥宮田遺跡

PL1-1 1区南東部浅間B軽石下面全景(北から)	
2 1区南東部浅間B軽石下面検出状況(北西から)	
3 1区南東部浅間B軽石下面検出状況(北東から)	
4 1区南東部浅間B軽石下面土層断面(南西から)	
5 1区東谷地浅間B軽石下面全景(東から)	
6 1区東谷地浅間B軽石下面全景(北西から)	
7 1区東谷地北壁土層断面(南西から)	
8 1区東谷地北壁土層断面(南から)	
PL2-1 1区1号畠近景(東から)	
2 1区1号畠検出状況全景(北東から)	
3 1区2号畠全景(北東から)	
4 1区2号畠土層断面(東から)	
5 1区3号畠検出状況全景(東から)	
6 1区3号畠作業風景	
7 1区3号畠全景(東から)	
8 1区3号畠土層断面(東から)	
PL3-1 1区3号畠断ち割り土層断面(南東から)	
2 1区3号畠断ち割り土層断面	
3 1区4号畠全景(南から)	
4 1区5号畠全景(南から)	

5 1区洪水層下水田全景(南から)	
PL4-1 1区洪水層下水田全景(南西から)	
2 1区洪水層下水田耕土土層断面近接	
3 1区洪水層下水田北半全景(東から)	
4 1区洪水層下水田南半全景(北東から)	
5 1区洪水層下溝全景(北から)	
6 1区洪水層下溝近景(南から)	
7 1区洪水層下溝南端(南から)	
8 1区洪水層下水田アゼ交差点	
PL5-1 2区東谷地浅間B軽石下水田南壁西端土層断面(北から)	
2 2区東谷地浅間B軽石下水田南壁西端浅間B軽石層(北から)	
3 2区東谷地浅間B軽石下水田全景(北から)	
4 2区東谷地浅間B軽石下水田南半部全景(北東から)	
5 2区4号住居全景(西から)	
6 2区4号住居竈全景(西から)	
7 2区7号住居全景(南から)	
8 2区7号住居竈全景(西から)	
PL6-1 3北区浅間B軽石下全景(北から)	
2 3北区浅間B軽石下全景(南から)	
3 3北区浅間B軽石下全景(北から)	
4 3北区浅間B軽石下全景(南西から)	
5 3北区浅間B軽石下土層断面A-A'	
6 3北区浅間B軽石下土層断面C-C'東半部(北から)	
7 3北区浅間B軽石下土層断面B-B'南端部(北から)	
8 3北区浅間B軽石下土層断面B-B'中央部(西から)	
PL7-1 3中区浅間B軽石下全景(東から)	

	2	3 中区浅間B 軽石下全景 (西から)		4	1 区68号溝底面掘削痕
	3	3 中区浅間B 軽石下北壁土層断面D-D' (南東から)		5	1 区68号溝橋脚ピット (西から)
	4	3 中区浅間B 軽石下B層		6	1 区68号溝橋脚ピット (東から)
	5	3 南区浅間B 軽石下全景 (北から)		7	1 区68号溝橋脚ピット (北から)
	6	3 南区浅間B 軽石下全景 (南から)		8	1 区68号溝遺物出土状態
	7	3 南区浅間B 軽石下土層断面E-E' (北から)	PL15-1	1	1 区72号溝全景 (西から)
	8	3 南区浅間B 軽石下土層断面E-E' 西端 (北東から)	2	1 区72号溝全景 (西から)	
PL8-1	4	4 区浅間B 軽石下西半部全景 (東から)	3	1 区72・73号溝と14号掘立柱建物跡 (南から)	
	2	4 区浅間B 軽石下西半部全景 (南西から)	4	1 区73号溝全景 (西から)	
	3	4 区浅間B 軽石下西半部全景 (西から)	5	1 区75号溝西半全景 (西から)	
	4	4 区Le~m-0 ライン土層断面 (南東から)	PL16-1	1	1 区75・76号溝全景 (西から)
	5	4 区浅間B 軽石下1号溝全景 (南から)	2	1 区82号溝 (47号井戸) 全景 (北から)	
	6	4 区浅間B 軽石下埋没谷土層断面 (南から)	3	1 区83号溝全景 (北東から)	
	7	4 区4号溝全景 (北拡張区) (北から)	4	1 区83号溝底面工具痕	
	8	4 区4号溝土層断面 (南から)	5	1 区94号溝全景 (南東から)	
PL9-1	1	1 区23号掘立柱建物跡全景 (東から)	6	1 区94号溝南東隅全景 (北西から)	
	2	1 区27号掘立柱建物跡全景 (東から)	PL17-1	1	1 区1号井戸全景
	3	1 区29号掘立柱建物跡全景 (東から)	2	1 区2・3号井戸全景 (北西から)	
	4	1 区30号掘立柱建物跡全景 (北から)	3	1 区2・3・4号井戸低全景 (南から)	
	5	1 区26号掘立柱建物跡全景 (北東から)	4	1 区4号井戸土層断面 (南から)	
	6	1 区10号掘立柱建物跡全景 (北から)	5	1 区4号井戸全景 (西から)	
	7	1 区11号掘立柱建物跡全景 (北から)	6	1 区5号井戸全景 (東から)	
	8	1 区7号掘立柱建物跡全景 (北から)	7	1 区6・7号井戸全景 (北東から)	
PL10-1	1	1 区11・19号溝全景 (南から)	8	1 区8号井戸全景 (南西から)	
	2	1 区12・17・14号溝全景 (南東から)	PL18-1	1	1 区9・10号井戸全景 (北東から)
	3	1 区12・17号溝全景 (南東から)	2	1 区11・12号井戸全景 (南東から)	
	4	1 区12・17号溝全景 (北西から)	3	1 区37号井戸土層断面 (南から)	
	5	1 区13号溝全景 (北東から)	4	1 区47号井戸土層断面 (南から)	
	6	1 区14・19号溝全景 (南東から)	5	1 区1号土坑土層断面	
PL11-1	1	1 区14号溝全景 (南東から)	6	1 区1号土坑全景	
	2	1 区15・18号溝全景 (北から)	7	1 区2A号土坑土層断面	
	3	1 区16号溝 (13・15号井戸) 全景 (南西から)	8	1 区2A号土坑全景	
	4	1 区18号溝全景 (北西から)	PL19-1	1	1 区10B号土坑全景 (北西から)
	5	1 区18号溝全景 (南西から)	2	1 区11A号土坑全景	
	6	1 区19号溝全景 (南東から)	3	1 区12C号土坑全景 (東から)	
PL12-1	1	1 区20号溝土層断面 (北から)	4	1 区16号土坑全景 (西から)	
	2	1 区20号溝全景 (北から)	5	1 区15・17号土坑全景 (北西から)	
	3	1 区20号溝全景 (南から)	6	1 区23号土坑全景 (北東から)	
	4	1 区21号溝区画全景 (北から)	7	1 区90号土坑土層断面 (南から)	
	5	1 区21号溝北辺全景 (東から)	8	1 区92号土坑土層断面 (南から)	
	6	1 区21号溝東辺全景 (北から)	PL20-1	1	1 区110号土坑土層断面 (東から)
	7	1 区21号溝区画内全景 (北東から)	2	1 区112号土坑土層断面 (南から)	
	8	1 区37号溝全景 (西から)	3	1 区123号土坑土層断面 (南東から)	
PL13-1	1	1 区40・41号溝全景 (東から)	4	1 区土坑の土層観察	
	2	1 区40・41号溝西半全景 (西から)	5	1 区2号竪穴状遺構土層断面 (西から)	
	3	1 区59号溝全景 (北から)	6	1 区2号竪穴状遺構全景 (北東から)	
	4	1 区42・43号溝全景 (南から)	7	1 区3号竪穴状遺構周辺全景 (北西から)	
	5	1 区62号溝全景 (北から)	8	1 区4・6・8・9号竪穴状遺構全景 (北から)	
PL14-1	1	1 区68号溝土層断面 (南から)	PL21-1	1	1 区7号竪穴状遺構 (16・17号井戸) 全景 (北から)
	2	1 区68号溝全景 (東から)	2	1 区8~13号竪穴状遺構全景 (西から)	
	3	1 区68号溝南東隅全景 (東から)	3	1 区14~21号竪穴状遺構全景 (西から)	
			4	1 区20号竪穴状遺構土層断面 (南から)	
			5	1 区21~23号竪穴状遺構全景 (西から)	

	6	1区24~26号竪穴状遺構全景 (西から)		6	2区72号土坑全景 (北西から)
	7	1区27・28号竪穴状遺構全景 (西から)		7	2区73号土坑全景 (北東から)
	8	1区29・30号竪穴状遺構全景 (西から)		8	2区50号土坑全景 (北西から)
PL22-1	1	1区Ca~h-9~14グリッド全景 (北から)	PL28-1	2	2区2号土坑土層断面 (南から)
	2	1区C・Da~i-11~2グリッド全景 (北東から)		2	2区2号土坑近景 (北西から)
	3	1区Cd~i-11~18グリッド全景 (北西から)		3	2区2号土坑全景 (北西から)
	4	1区C・Et~b-15~1グリッド全景 (東から)		4	2区3号土坑土層断面 (南から)
	5	1区Ck~q-11~15グリッド全景 (東から)		5	2区3号土坑全景 (東から)
	6	1区Cq~i-13~15グリッド全景 (北から)		6	2区3号土坑遺物出土状態 (東から)
	7	1区Cb・c-13・14グリッド全景 (北から)		7	2区3号土坑全景 (東から)
	8	1区Cc~h-10~12グリッド全景 (北から)		8	2区2・3・4号土坑全景 (南東から)
PL23-1	1	1区Cf・g-15~18グリッド全景 (西から)	PL29-1	2	2区12号土坑土層断面 (東から)
	2	1区Cd・e-18・19グリッド全景 (南から)		2	2区18号土坑全景 (南東から)
	3	2区1号溝全景 (南から)		3	2区12号土坑全景 (東から)
	4	2区1号溝土層断面A-A' (南から)		4	2区30号土坑全景 (西から)
	5	2区1号井戸土層断面 (南東から)		5	2区37号土坑全景 (北東から)
	6	2区1号井戸全景 (北西から)		6	2区37号土坑遺物出土状態 (北東から)
	7	2区1号井戸全景	PL30-1	2	2区37号土坑土層断面 (南から)
	8	2区2号井戸全景		2	2区39号土坑土層断面 (西から)
PL24-1	2	2区4号土坑全景 (北東から)		3	2区39号土坑全景 (北から)
	2	2区6号土坑全景 (北東から)		4	2区39号土坑全景 (北から)
	3	2区7号土坑全景 (南から)		5	2区39号土坑遺物出土状態 (北から)
	4	2区8・9号土坑全景 (北東から)	PL31-1	2	2区1号土坑土層断面 (南から)
	5	2区17号土坑全景		2	2区10号土坑土層断面 (北西から)
	6	2区34号土坑全景 (西から)		3	2区10号土坑全景 (南から)
	7	2区36号土坑全景 (南から)		4	2区10号土坑遺物出土状態 (南から)
	8	2区46号土坑全景 (南から)		5	2区23号土坑全景 (南東から)
PL25-1	2	2区14号土坑全景 (北東から)		6	2区25号土坑全景 (東から)
	2	2区16号土坑全景 (南西から)		7	2区27号土坑全景 (東から)
	3	2区20号土坑全景 (西から)		8	2区27号土坑遺物出土状態
	4	2区26号土坑全景 (東から)	PL32-1	2	2区31号土坑全景 (北東から)
	5	2区35号土坑全景 (南から)		2	2区31号土坑遺物出土状態 (北西から)
	6	2区52号土坑全景 (北から)		3	2区38号土坑全景
	7	2区54号土坑全景 (北東から)		4	2区40号土坑全景 (西から)
	8	2区67号土坑全景 (北東から)		5	2区41号土坑全景 (北から)
PL26-1	2	2区43号土坑全景 (南西から)		6	2区40号土坑遺物出土状態 (北から)
	2	2区15号土坑全景 (南西から)		7	2区44号土坑全景 (北西から)
	3	2区55号土坑全景 (北から)	PL33-1	2	2区42号土坑土層断面 (南から)
	4	2区19号土坑全景 (東から)		2	2区42号土坑全景 (西から)
	5	2区21号土坑全景 (北から)		3	2区42号土坑全景 (南西から)
	6	2区28号土坑全景 (北西から)		4	2区42号土坑遺物出土状態 (南から)
	7	2区47号土坑全景 (東から)		5	2区45号土坑土層断面 (南から)
	8	2区5号土坑全景 (北東から)		6	2区45号土坑全景 (南西から)
PL27-1	2	2区57号土坑全景 (西から)		7	2区45号土坑遺物出土状態 (南西から)
	2	2区64号土坑全景 (南西から)		8	2区48号土坑全景 (北西から)
	3	2区68号土坑全景 (北東から)	PL34-1	2	2区48号土坑遺物出土状態
	4	2区69号土坑全景 (北東から)		2	2区51号土坑全景 (北から)
	5	2区71号土坑全景 (北から)		3	2区51号土坑遺物出土状態 (西から)
				4	2区53号土坑全景 (北東から)
				5	2区61号土坑全景 (北東から)
				6	2区61号土坑遺物出土状態 (南東から)
				7	2区65・66号土坑全景 (北東から)
			PL35-1	2	2区62号土坑全景 (北から)
				2	2区63号土坑全景 (北東から)
				3	2区70号土坑全景 (西から)

- 4 2区3号井戸骨・古銭出土状態
5 2区五輪塔出土状態
6 4区1号土坑土層断面(南から)
- PL36 1区水田 2区4・7号住居 1区1・3・12号溝出土遺物
PL37 1区12・17・20・21号・40・41号溝出土遺物
PL38 1区40・41号・42・59・62号溝出土遺物
PL39 1区68号溝出土遺物
PL40 1区68号溝出土遺物
PL41 1区68号溝出土遺物
PL42 1区68・72・73号溝出土遺物
PL43 1区73・75・78・94号溝出土遺物
PL44 1区94号溝 1・2・4号井戸出土遺物
PL45 1区18・36・48・53・54号井戸出土遺物
PL46 1区59・61・67号井戸 8・40・42・56・100・108・146号土坑出土遺物
PL47 1区184・225・297号土坑 18号竪穴状遺構出土遺物
PL48 1区18・20・21・24・26・27号竪穴状遺構出土遺物
PL49 1区27・28・29・30号竪穴状遺構 99・153号土坑出土遺物
PL50 1区遺構外出土遺物
PL51 1区遺構外出土遺物
PL52 1区遺構外 1北区1・3号溝 2号井戸 2区2号井戸 2区1・7・27・50号土坑出土遺物
PL53 2区31・40・41・44・45・50・53号土坑出土遺物
PL54 2区51・61・62・63号土坑出土遺物
PL55 2区65号土坑 2区遺構外出土遺物
PL56 2区遺構外出土遺物
PL57 2区遺構外出土遺物
PL58 2区遺構外出土遺物
PL59 2区遺構外出土遺物
PL60 4区1号溝・4区遺構外出土遺物
- 荒砥前田遺跡
- PL60 溝・土坑出土遺物
1 荒砥前田遺跡から荒砥宮田遺跡西方を望む(南から)
- PL61-1 荒砥前田遺跡から荒砥宮田遺跡東方を望む(南西から)
2 掘立柱建物跡群(北から)
3 2号掘立柱建物跡全景(東から)
4 1・3号掘立柱建物跡全景(北から)
5 3号掘立柱建物跡全景(南から)
- PL62-1 1号井戸全景(東から)
2 2号井戸全景(東から)
3 6・7A・7B号溝土層断面(北から)
4 6・7A・7B号溝全景(南から)
5 1号土坑全景(北から)
6 2号土坑全景(北から)
7 3号土坑全景(東から)
- PL63-1 浅間B軽石下水田全景(東から)
- 2 浅間B軽石下水田 アゼ近景(東から)
3 浅間B軽石下水田 アゼ近景(南から)
- 4 浅間B軽石下水田 作業風景(手前は洪水層下水田・南から)
5 浅間B軽石下水田 北壁土層断面(白色層浅間B軽石・南から)
6 浅間B軽石下水田 東壁土層断面C-C'(西から)
7 1~3号溝全景(東から)
8 浅間B軽石下水田 東壁土層断面D-D'(西から)
- PL64-1 洪水層上畠検出状態(東から)
2 洪水層上畠全景(北から)
3 洪水層上畠土層断面と畝間溝(南から)
4 洪水層上畠土層断面(南から)
5 洪水層下水田全景(西から)
- PL65-1 洪水層下水田全景(東から)
2 洪水層下水田 5号溝全景(東から)
3 洪水層下水田 5号溝水路近景(北東から)
4 洪水層下水田 5号溝水路脇のアゼ(北東から)
5 洪水層下水田 5号溝水路土層断面
6 洪水層下水田の带状区画(西から)
- PL66-1 洪水層下水田 アゼ沿いの水路1(北から)
2 洪水層下水田 アゼ沿いの水路1近景(東から)
3 洪水層下水田 アゼ沿いの水路2全景(東から)
4 洪水層下水田 アゼ脇の精査作業(東から)
5 洪水層下水田 直線的にのびるアゼ(西から)
6 洪水層下水田の区画
- PL67-1 洪水層下水田の区画
2 洪水層下水田の傾斜
3 洪水層下水田 調査状態
4 洪水層下水田耕作土下の榛名二ツ岳火山灰(北から)
5 基本土層A地点(北から)
6 基本土層B地点(東から)
- PL68-1 8号溝全景(南から)
2 8号溝土層断面B-B'(南から)
3 9・10号溝全景(北から)
4 10号溝土層断面(南から)
5 11号溝全景(南西から)
6 4号土坑全景(東から)

第1章 調査に至る経過

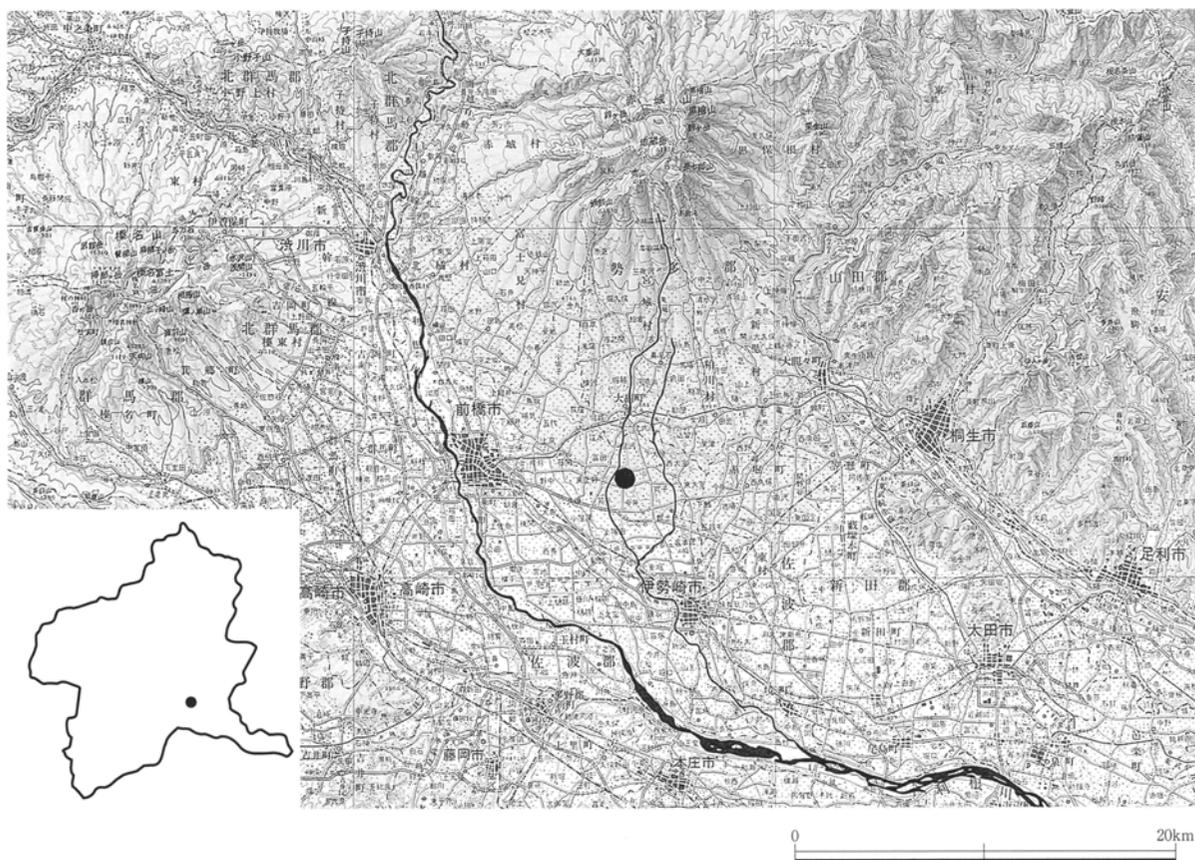
1. 県営圃場整備事業と発掘調査

荒砥宮田・荒砥前田両遺跡は、群馬県前橋市の東南部、JR両毛線の駒形駅から北北東に約3.7kmの距離に位置する(第1図)。この地域は赤城山南麓の裾野にあたり、市街地の東に広がる農村地帯である。遺跡は、そのうち旧荒砥村地域で実施された大規模な県営圃場整備事業に伴って発掘調査された。荒砥地区の圃場整備事業は1974(昭和49)年度から1981(昭和56)年度にかけて実施された荒砥南部地区と、1981(昭和56)年から1991(平成3)年にかけて実施された荒砥北部地区に分かれ、通算17年間にわたった。

圃場整備事業の対象地内には多数の古墳群や女堀遺跡をはじめとした周知の遺跡が多数存在し、古くから考古学的に著名であり、注目されてきた地域で

ある。圃場整備事業地の実施にあたっては群馬県農政部と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地を圃場整備事業の対象区域から除外することが不可能であり、かつ事業の実施により埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。これらの地域における発掘調査は、原則として、新たに計画される道水路や切り土部分を対象とすることで合意された。

発掘調査は1974(昭和49)年度から1984(昭和59)年度まで群馬県埋蔵文化財調査事業団が対応してきたが、調査量の増加に伴い、1982(昭和57)年度以降の発掘調査は事業団と群馬県教育委員会が分担し、1984(昭和59)年度以降の調査は、群馬県教育委員会と荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、1991(平成3)年度で全て終了した。



第1図 荒砥宮田遺跡の位置

第1章 調査に至る経過

整理事業は、1981(昭和56)年度から1984(昭和59)年度まで調査をした8遺跡について、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下事業団)が群馬県教育委員会の委託を受け、1993(平成5)年度から整理事業を実施し、2003(平成15)年度までに7遺跡14冊の発掘調査報告書を刊行している。本年度はその第13年次にあたる。

2. 荒砥前田遺跡の調査

荒砥前田遺跡を調査した昭和56年度は、荒砥南部圃場整備事業の最終年度にあたり、その範囲は荒口町、今井町、二之宮町にわたる約90haにおよんだ。工事に先立って、全対象区域の遺物分布調査を実施し、包蔵地の有無とその範囲を把握した。工事計画



2. 荒砥前田遺跡の調査

により遺跡の破壊される恐れのある区域については、この調査結果を基にして発掘調査を行う地点を定め、さらに包蔵地としての認定漏れの防止や遺跡範囲を確定するために、工事の対象区域に適宜トレンチを配置して確認調査を行った。

その結果、発掘調査を必要とする遺跡として、荒口町の女堀と前田遺跡、今井町の北原遺跡と北三木堂遺跡および今井神社古墳群、二之宮町の青柳遺跡の6遺跡がリストアップされた。これら6遺跡のべ面積は15haを越える広大なものであり、それを単年度内に調査を終了させることは困難であることから、幾つかの工事設計変更がなされたが、それでも最終的に10haを越える調査面積となった。

荒砥前田遺跡は市道10号線の南側の微高地にある水田で、圃場整備にともなって切り土となる5000m²が調査対象範囲となった。調査は工事期間との関係から前述した荒砥北原遺跡や荒砥北三木堂遺跡と同時進行させなければならなかったために、困難を極めた。また、浅間B軽石や洪水層が残存しており、遺構確認面は4～5面と複雑な調査となった。

3. 荒砥宮田遺跡の調査

荒砥宮田遺跡を調査した昭和58年度は、荒砥北部地区圃場整備事業の3年次にあたり、第4工区、荒口町・荒子町地内が事業対象地域であった(第2図)。

第4工区はA～H工事に分かれていたが、後述するように委託者との調整の結果、A・B工事の区域について財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を担当した。他の工事区域では、第1表に記したとおり、荒砥諏訪西遺跡、荒砥諏訪遺跡、諏訪遺跡、諏訪西遺跡、柳久保遺跡、川籠皆戸遺跡、堤東遺跡が発掘調査された。

調査を開始するに先立ち、工事行程との調整を測り、発掘調査を円滑に実施するため分布調査を実施した。分布調査は5月に調査担当3名が第4工区全域を踏査し、遺物分布の地点、密集度、種類、時期などを記録した。

さらに7月に発掘調査区とその対象面積を確定することを目的に、分布調査の成果をもとにした試掘調査を実施した。先の分布調査で荒砥川に面したA・B・C工事対象地では広範囲にわたり古墳時代の土器片の散布が見られ、集落の存在が充分想定された。このため、切り土工事対象地は20mに1カ所の割合で、道水路新設地域は対象地の幅に最低1カ所のトレンチを配置し、大型掘削重機による試掘調査を実施した。試掘調査の記録にあたっては遺構および遺物包含層の有無、遺構確認面の深さ、軽石を主とした土層の堆積状況を明らかにするようにした。

その結果、表土下に堅穴住居あるいは溝、土坑などの諸遺構あるいは浅間B軽石の堆積が広範囲で確認された。これらの事前作業を基礎資料として前橋

第1表 県営圃場整備荒砥北部地区における昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

工事	遺跡名	調査主体	調査担当者	面積	期間
7-1区	荒砥荒子遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・相京建史・中沢 悟 小島敦子・菊池 実・斉藤利昭	9,800m ² 前年度含	1983(昭和58)年4月1日 ～1983(昭和58)年5月10日
4区	荒砥宮田遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭・細野雅男 下城 正・相京建史	20,265m ²	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4区	荒砥諏訪西遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭	36,620m ²	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4区	荒砥諏訪西遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭	1,930m ²	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4区	諏訪西遺跡 諏訪遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	井上唯夫・徳江 紀・神保侑史 西田健彦・松田 猛・調査補助 員松村和男	9,300m ²	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日
4区	柳久保遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	徳江 紀・神保侑史・西田健彦 松田 猛	1,200m ²	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日
4区	川籠皆戸遺跡 堤東遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	徳江 紀・神保侑史・西田健彦 松田 猛・調査補助員松村和男	10,500m ²	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日

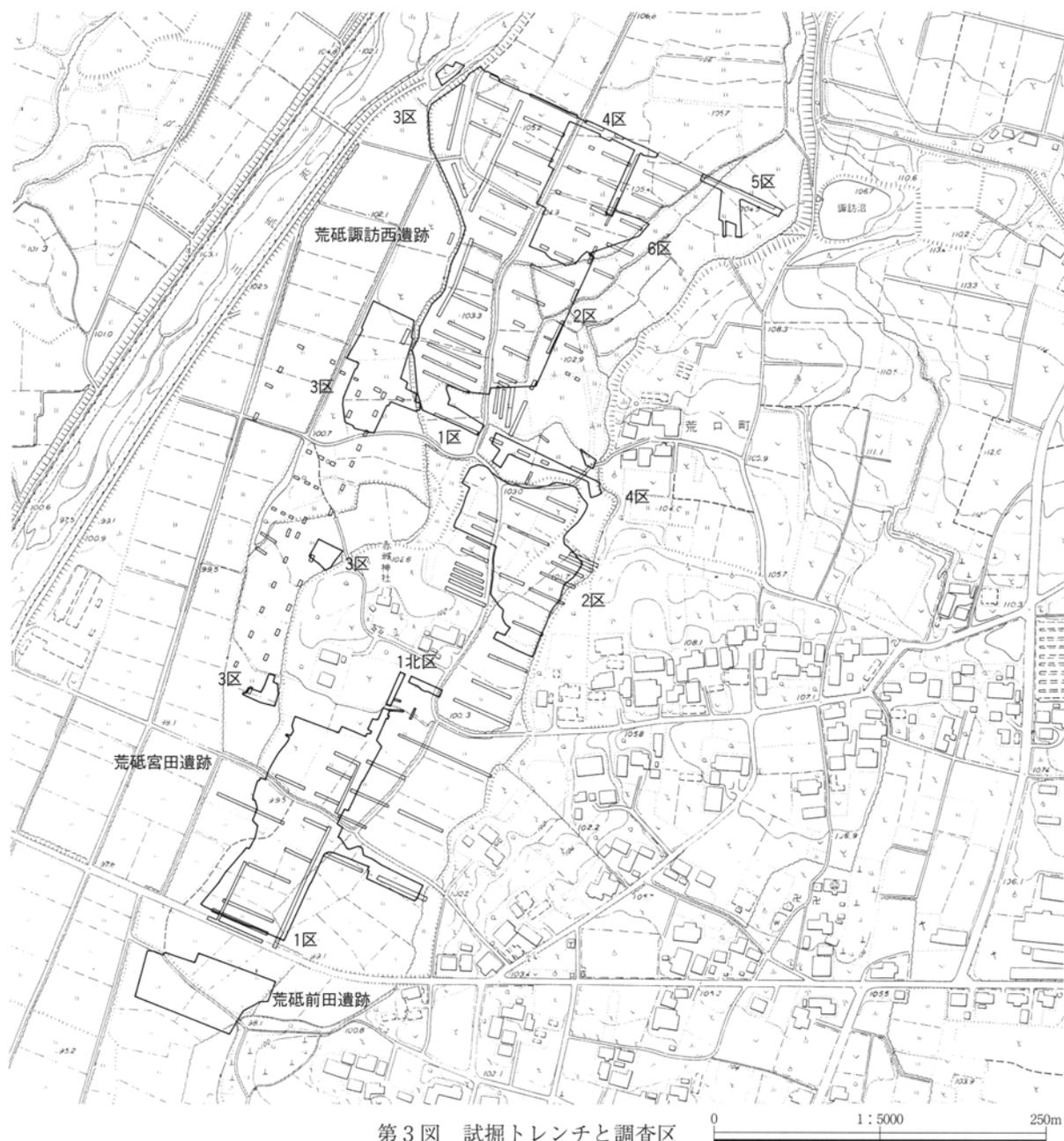
第1章 調査に至る経過

土地改良事務所と協議し、遺構が検出された地域は発掘調査を実施することとし、遺構が確認されなかった部分については調査対象地から除外することとした。また工事による掘削高が遺構確認面までおおよばないと確認された場合も調査対象区から除外した。

しかし、遺構検出量が多く、広範囲に及んだため、当初予定していたA・B・C工事区内の全ての調査対象地域について事業団の体制だけでは終了できない状況が生まれた。そこで、C工事区については群馬県教育委員会文化財保護課が担当し、A・B工事

については事業団が対応した。1983(昭和58)年度の調査担当は第1表の通りである。

事業団が担当したA・B工事は、集落遺跡のある台地部分がほとんど切り土部分となったため、試掘調査の対象地は広範囲にわたった。これらの試掘調査結果および確定した調査区は『荒砥宮田遺跡Ⅰ』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003)に詳述した。最終的な調査区域は、切り土部分・新設の道水路部分を対象とした6カ所で、その面積は試掘調査分の5,700㎡を含め36,620㎡である。



第3図 試掘トレンチと調査区

第2章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と地形

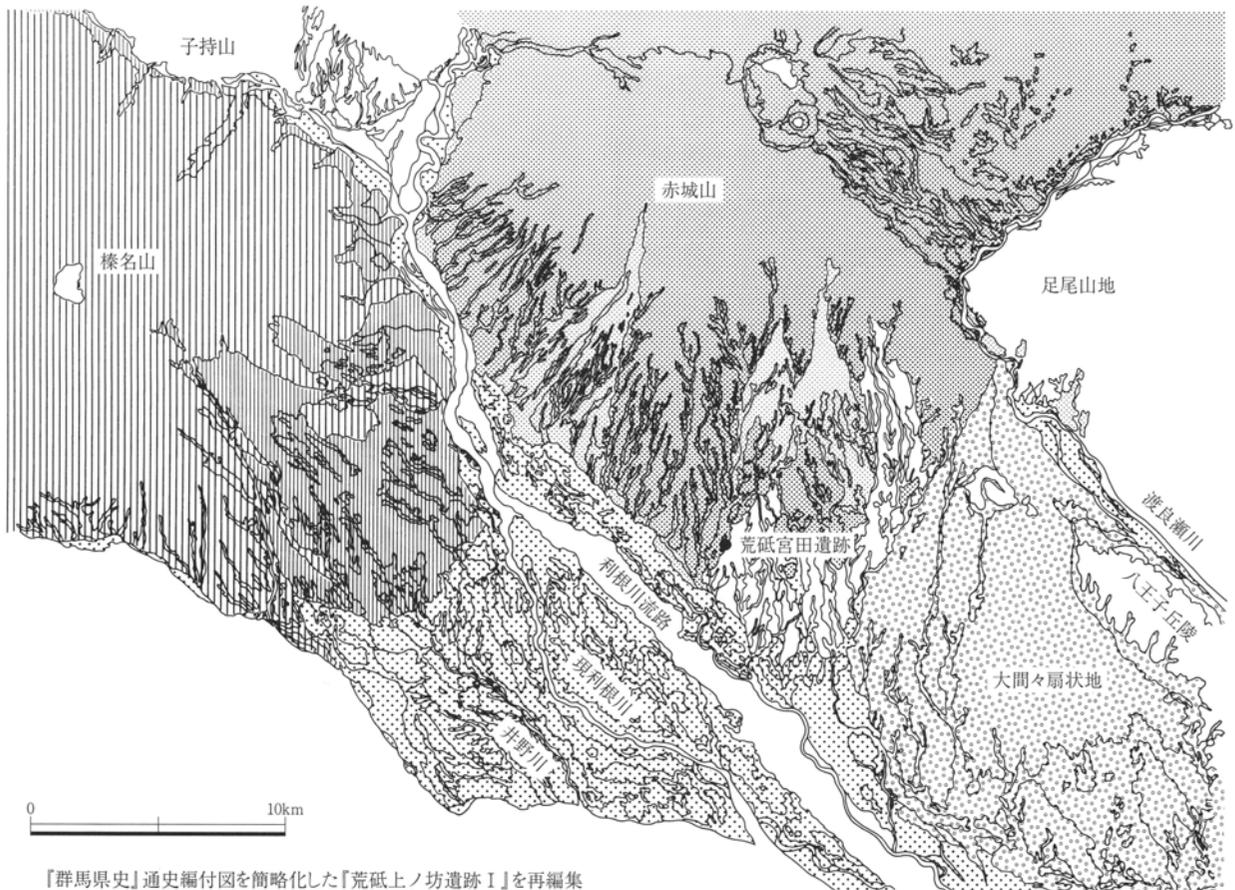
赤城山南麓の地形 荒砥宮田遺跡および荒砥前田遺跡は、県北の山地と南東平野部が接する群馬県中央部に位置する。県央地域には西に榛名山、東に赤城山があり、その裾野には丘陵性の台地が広がっている。遺跡はこのうち東側に位置する赤城山の南麓に形成された火山山麓扇状地端部にある。

赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山で、3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った火山活動はなく、火山山麓扇状地の形成期となっている。山麓の扇状地にはさらに新期の扇状地が一部にのるが、荒砥宮田遺跡はその西端にある。遺跡の西側を流下する荒砥川以西は同じ赤城山の山体で

も、基底に大胡火砕流が堆積する古い地形面である(第4図)。

山麓には荒砥川、宮川、神沢川、江龍川などの中小河川が流下している。これらの河川や台地端部からの湧水により火山山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に荒砥北部地区では帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。

遺跡周辺の地形はローム台地の原形面、砂壤土からなる微高地、沖積地に分類される。ローム台地はいわゆる暗色帯の堆積が認められ、その下に厚さ40cmのハードローム層があり、さらに下に直径20～30cmの礫を含む青白灰色砂礫層が堆積している。ローム台地に付随するように存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降雨



『群馬県史』通史編付図を簡略化した「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」を再編集

第4図 群馬県中央部の地形と荒砥宮田遺跡

1. 遺跡の位置と地形

災害等によって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。隣接する荒砥諏訪西遺跡は主にこの地形に立地する。

荒砥宮田遺跡の立地 荒砥宮田遺跡は中央のローム台地と、東西の沖積地に展開する。発掘した1区および2区は一連のローム台地で、古墳時代および平安時代の集落と、中近世の遺構群が重複して確認された。このローム台地には、始良丹沢パミスの層準である暗色帯とブロック状の浅間板鼻褐色軽石群が鍵層として堆積するローム層である。赤城山南麓地域の更新世ローム台地の一般的土層堆積である。しかしその下層に一般的に堆積が確認できる八崎軽石層ではなく、砂礫層が確認できた。荒砥川沿いに特有の層位と考えられるが、詳細は確認できなかった。旧石器は一部で暗色帯を中心に確認調査をおこなったが、旧石器は確認できなかった。

このローム台地の東側には台地を開析した帯状低地がある。試掘調査で設定したトレンチのすべてで浅間B軽石の堆積が認められた。2区の東谷地では、浅間B軽石が厚さ10~15cmで堆積していた。この谷の北側半分は幅8mの凹地状の堆積であるが、南側は浅間B軽石堆積範囲の幅が広くなり、西端には幅2mの畔に区切られた水路も検出されている。低地を横断するアゼは検出されなかったが、平坦面を造成しており、水田面であると考えた。またここには浅間C軽石が浅間B軽石層下40cmのところ厚さ10~20cmで堆積していた。浅間C軽石下面での土地利用については調査で判明しなかったが、古墳時代初頭には低地が存在していたことは明らかである。

この沖積地は現状では、2区の北側の低地とつながっている。しかし東側のローム台地には開析された帯状の低地が伸びており、東谷地の谷頭となる可能性が高い。この地点を調査した4区では、東半はローム台地になっており、浅間B軽石が埋没土の中位にある溝が確認された。本来は台地であったところに、浅間B軽石降下以前に東と北の双方の低地をつなぐために掘られた可能性もある。地形改変を受

ける前の地形環境の復元や、溝の性格については本書で検討したい。

1区・2区のあるローム台地の西側は、荒砥川まで平坦な低地で、川沿いに一部自然堤防状の微高地が形成されている。低地内の試掘調査のトレンチでは砂礫層が厚く堆積する地点と、それを切るように堆積する浅間B軽石層が検出される地点に大きく分かれた。このうち浅間B軽石層が確認できる地点は、第5図のように台地に沿った帯状の低地になっていると推定される。この低地は、現在の北原沼や諏訪沼を谷頭とする荒砥諏訪西遺跡東側の低地から、2区の北側・西側に廻り込んで、荒砥諏訪西遺跡1区の南側で、荒砥諏訪西遺跡西側の低地と合流し、1区の西側から南側に廻り込んでいる。1区南西部にはこの帯状低地がかかるものと見られるが、南東隅の一部での純層を確認できた。1区南西部では浅間B軽石下位に洪水砂層が堆積している。それを鋤込んだ畠や洪水砂層下の水田が広範囲に検出された。この洪水層の時期は調査では判明しなかったが、その後、南側に接する荒砥前田遺跡の発掘調査で、弘仁九(818)年の洪水堆積物と確認された。荒砥宮田遺跡の堆積物も同じ堆積物である可能性が高い。また3区および4区ではこの低地内で浅間B軽石直下面を調査した(第5図)。低地部で検出されたこれらの遺構は本書で報告した。さらに3区周辺の西側の沖積地内にも浅間B軽石層より古い砂礫層が堆積するが、成因等を明確にすることはできなかった。

荒砥前田遺跡の立地 荒砥前田遺跡は、荒砥宮田遺跡1区の南20mに位置する。荒砥宮田遺跡1区が立地するローム台地の南側に接する砂壤土性の微高地に立地する。

この微高地の原形面は、赤城山南麓地域に分布する砂壤土性の地形で、いくつかの発掘調査で、縄文時代前期から中期に形成されたことがわかっている。前橋市飯土井中央遺跡では砂壤土層の下から、表裏縄文をもつ縄文時代早期土器が出土した。粕川村安通洞遺跡では砂礫層の下位から縄文時代中期土器が、上位から後晩期の土器が出土している。安通洞遺跡

は粕川扇状地の形成による砂礫層の堆積と考えられている。これらの調査所見から明らかのように、赤城山南麓では縄文時代前期から中期にかけての時期に広範囲な河川作用があり、洪水堆積物がローム台地に貼り付くように残されているものと考えられている。

荒砥前田遺跡や荒砥宮田遺跡1区の南半部は、この洪水堆積物を原形面として、その上に黒色土が堆積した微高地部分である。それぞれの発掘区内で、ローム層が堆積した台地部分と接しており、時期ごとに遺構分布が異なる複雑な遺構分布を示している。

荒砥前田遺跡の発掘区東端は大きなローム台地に接しており、台地裾部には古代以来用排水路として機能していると考えられる溝が現代まで残っている。発掘区西端は微高地内とどまっており、荒砥宮田遺跡1区同様、荒砥川氾濫源との関係はつかめなかった。

荒砥前田遺跡では、浅間B軽石下、弘仁九(818)年の洪水堆積物下で水田が検出されており、荒砥宮田遺跡1区と連続する遺構面と判断した。またこれらの水田面より新しい掘立柱建物群を検出した。これらも荒砥宮田遺跡1区のローム台地上および南西低地部で検出した掘立柱建物群と同様の時期であり、両遺跡一体として遺跡をみていく必要がある。

弘仁九(818)年の洪水堆積物は、赤城山南麓の広い範囲で検出されている泥流や岩屑なだれ、逆転層などの調査と遺構の検出状況の総合的な研究から同定された洪水層で、赤城山麓の古代田畠遺構調査の鍵層として有効な土層である。この堆積物は荒砥宮田遺跡1区南西低地には堆積しているが、1区東低地内には堆積が確認できなかった。したがって、荒砥前田遺跡へは西側低地を流下したものと考えられる。

2. 周辺の遺跡

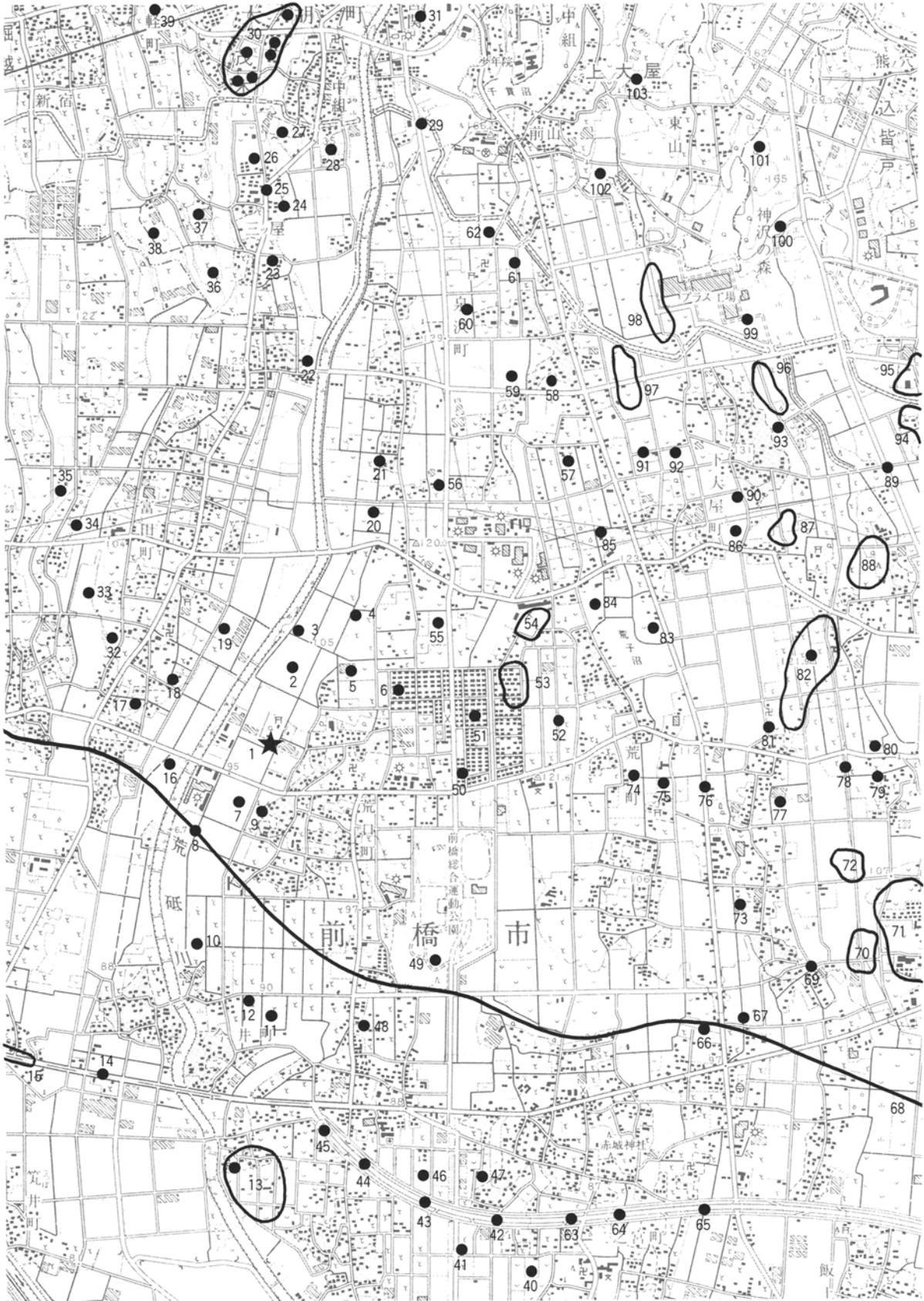
ここでは荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境についてふれておきたい。概観する範囲は、荒砥地域とこれに隣接する大胡町南部、荒砥川右岸の桂萱地域の一部を含めるが、荒砥川以西については現時点では地域内の遺跡分布の在り方を正しく反映させるほどの調査事例が知られていない(第6図)。

弥生時代中期後半の住居は、荒砥前原遺跡、荒砥島原遺跡、頭無遺跡、荒砥北三木堂遺跡、荒口前原遺跡で検出されている。後期になると、荒砥前原遺跡、鶴谷遺跡群B区、梅木遺跡、北山遺跡で住居の検出が報告されている。これら弥生時代の遺跡は、沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地している。この時期には居住域に接した沖積地の一部を生産域とする小規模な集落が形成されていたと考えられる。

古墳時代初頭から前期の集落は、弥生時代後期の遺跡分布からは一転、きわめて濃密な分布状況を呈し、荒砥地域のほぼ全域におよんでいる。その分布は大胡町域にもみられ、茂木山神Ⅱ遺跡、上ノ山遺跡、中宮関遺跡などが調査されている。遺跡の立地は、小河川の流域ごとにほぼ一定の間隔において集落が形成されている。そしてこれらは、小河川に沿って、あるいは、小河川の合流点を臨む台地縁辺や沖積地の谷頭周辺に立地していることが確認されている。当該期の集落は、小河川の流水や谷頭からの湧水に依拠して生産域を維持していたと思われる。

荒砥宮田遺跡の周辺には近接して、荒砥諏訪西遺跡(集落)、諏訪遺跡(方形周溝墓群)が位置する。上流域には北原遺跡、丸山遺跡が、下流域には荒砥前田Ⅱ遺跡、荒砥北原遺跡が、対岸には宮下遺跡があり、多数の住居が検出されている。

生産域の調査事例としては、二之宮千足遺跡や二之宮宮下東遺跡で浅間C軽石に埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡G区や荒砥宮川遺跡の微高地上では浅間C軽石を鋤込んだ畠が確認されている。荒砥上ノ坊遺跡では浅間C軽石に埋没した



第6図 荒砥宮田遺跡周辺の遺跡分布

第2章 遺跡の立地と環境

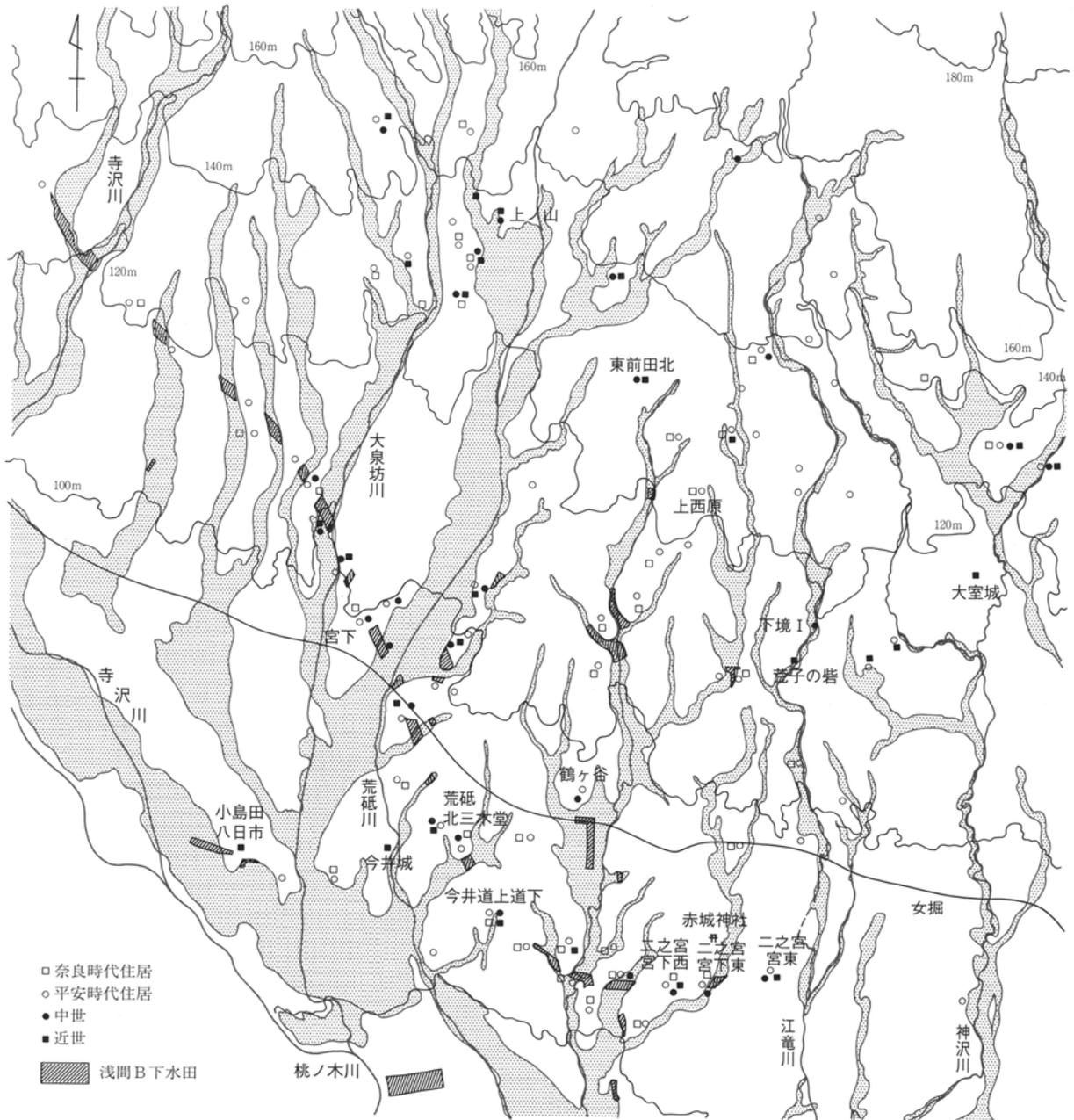
第2表 周辺遺跡の概要

No	遺跡名	弥生	古墳			奈	平	中	近	その他の遺構	遺跡の概要
		中後	前 住墓生	中 住墓生	後 住墓生	住	住生	世	世		
1	荒砥宮田遺跡		◎□	○	○○	○	○□	○	○	縄文前期住居	本報告書の遺跡 荒砥諏訪西遺跡に北接 県教委調査方形周溝墓13基 荒砥諏訪西遺跡東側台地上 前橋市教委調査 本報告書の遺跡
2	荒砥諏訪西遺跡		◎ □		○○		□	○	○	溝、土坑	
3	諏訪西遺跡		○	○	○					時期不明古墳2	
4	諏訪遺跡		□							A s-B以前の溝	
5	荒砥諏訪遺跡		□							A s-B以前の溝	
6	諏訪遺跡									A s-B以前の溝	
7	荒砥前田遺跡						T	○	○		
8	荒砥前田Ⅱ遺跡		◎	○			○	○	○		
9	荒口前原遺跡	○					○				
10	荒砥北原遺跡		□	○	○					縄文前・中期住居、 A s-B上畠	
11	荒砥北三木堂遺跡		○□		○○	○	○			中世墓坑	
12	荒砥北三木堂Ⅱ遺跡		□				○	○	○		
13	今井神社古墳群			○	○		○			縄文中期住居	
14	今井白山遺跡		○	○	○	○	○			今井神社古墳他、古墳3調査	
15	筑井八日市遺跡			○○			□			古墳時代中期の方形区画溝	
16	富田細田遺跡						T	○			
17	宮下遺跡		◎	○	○○	○	○	○		中世墓坑、寺院	
18	東原遺跡						○	○		中世墳墓群、寺院	
19	おとうか山古墳			○	○						
20	北原遺跡		◎□	○	○		○				
21	丸山遺跡		◎□	○	○					古墳時代中期居宅	
22	稲荷前遺跡				○						
23	山神遺跡				○			○	○	縄文後期住居	
24	小林遺跡				○	○	○	○	○	中・近世道状遺構	
25	茂木山神Ⅱ遺跡		○		○	○	○			縄文中期住居	
26	諏訪東遺跡						○			縄文中期住居	
27	西小路遺跡				○				○	縄文中期住居	
28	上ノ山遺跡		○□	○	○			○	○	古墳7	
29	下宮関遺跡			○							
30	天神風呂遺跡群			○	○	○	○			縄文前期住居	
31	中宮関遺跡		○				T				
32	富田西原遺跡		○	○			○	○	○	旧石器	
33	富田高石遺跡		○□	○	○			○	○		
34	富田漆田遺跡			○ FA	○	○	○□	○		平安須恵工房跡、窯跡	
35	富田下大日遺跡						○			古墳住居3	
36	稲荷窪A地点遺跡				○○	○				縄文中期住居	
37	稲荷窪B地点遺跡				○		○	○		縄文中・後期住居	
38	大日遺跡						○	○			
39	茂木大道下遺跡						○	○			
40	荒砥天之宮遺跡			○	○	○	○□			溜井	
41	荒砥宮川遺跡	○	○ □		○○	○	○□				
42	二之宮千足遺跡			□	□	○	○□	○		古代小鍛冶、中世墓坑	
43	二之宮洗橋遺跡				○	○	○				
44	二之宮谷地遺跡					○	○□			奈良溜井、特殊井戸	
45	今井道上道下遺跡				○	○	○	○	○	平安小鍛冶、中・近世 道路状遺跡	
46	荒砥洗橋遺跡				○	○	○□		○		
47	荒砥宮西遺跡				○	○	○				
48	荒砥大日塚遺跡				○	○	○□				
49	鶴ヶ谷遺跡群	○	○	○	○	○	○			中世墳墓	
50	下鶴谷遺跡					○	○			縄文前期住居、古代炭窯	
51	柳久保遺跡群		◎	○	○○	○	○			旧石器、縄文早期	
52	頭無遺跡	○			○	○	○			旧石器	
53	中鶴谷遺跡				○○	○	○				
54	荒子小学校校庭遺跡				○	○	○			古代須恵器窯跡	

2. 周辺の遺跡

No	遺跡名	弥生	古墳			奈	平	中	近	その他の遺構	遺跡の概要
		中後	前 住墓生	中 住墓生	後 住墓生	住	住生	世	世		
55	大久保遺跡				○	○					
56	新山遺跡		□	○	○						方形周溝墓2、古墳3
57	向原遺跡				○	○					
58	東原西遺跡			○							
59	東前田北遺跡			○						中・近世塚	
60	寺前遺跡			○							
61	寺東遺跡			○							
62	谷津遺跡			○	○○			○	○	縄文中期住居	方形周溝墓2、泉沢谷津遺跡 と同一遺跡
63	二之宮宮下西遺跡				○	○	○	○	○	中・近世墓坑	
64	二之宮宮下東遺跡		□		○	○	○○	○			
65	二之宮宮東遺跡						○□	○		古代小鍛冶	Hr- F A 下水田以降7期の水 田
66	荒砥上ノ坊遺跡		◎□□	○	○	○	○			縄文前期住居、As-B 上畠	方形周溝墓4
67	元屋敷遺跡						○			古墳住居16	
68	女堀						○			古代未完成用水路	
69	葭沼遺跡						○				
70	上蛭沼遺跡									弥生住居1、古墳住居 15、古墳1	
71	天神山古墳群				○						古墳39を調査
72	西大室丸山遺跡				○						古墳時代巨石祭祀
73	荒砥荒子遺跡			○	○	○	○□				古墳時代中期居宅
74	荒砥中屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡		○		○		○□			平安小鍛冶、As-B以 前の溝	
75	荒砥下押切Ⅰ・Ⅱ遺跡				○○	○	○				
76	舞台西遺跡				○						古墳4、埴輪円筒棺1、甕棺 1
77	舞台遺跡			○	○						舞台1号墳を含む古墳3
78	稲荷山Ⅱ遺跡						○		○		
79	地田栗Ⅲ遺跡		○	○	○						
80	富士山Ⅰ・Ⅱ遺跡				○		○		○	近世塚	直径38mの円墳
81	下境Ⅰ・Ⅱ遺跡		○	○	○			○		中世寺院、中世墓	
82	阿久山古墳群				○						古墳22調査
83	堤東遺跡		□				○			平安小鍛冶	方形周溝墓2(前方後方形1)
84	川籠皆戸遺跡		□				○				
85	上西原遺跡					○	○			基壇建物、掘立柱建物	勢多郡衙と付属寺院と推定さ れる遺跡
86	北田下遺跡		○				○				
87	明神山遺跡		◎□		○		○				
88	伊勢山古墳群				○						伊勢山古墳を含む古墳16
89	水口山遺跡		□		○						方形周溝墓2、古墳11
90	中畑遺跡						○				
91	村主遺跡		◎		○	○	○		○		
92	中山A・B遺跡		◎□		○	○	○				方形周溝墓2(前方後方形1)
93	阿弥陀井戸道上遺跡		○								
94	大稲荷遺跡				○					古墳住居10	
95	小稲荷遺跡		□		○○						
96	山王遺跡		○	○	○		○				
97	東原A・B遺跡		◎□				○	○			方形周溝墓17(前方後方形4)
98	上諏訪山A・B遺跡					○	○	○			
99	大道遺跡		◎		○		○			縄文後期住居・配石遺構	
100	上横俵遺跡		□		○		○			平安炭窯	方形周溝墓6、古墳27
101	熊の穴・熊の穴Ⅱ遺跡		◎		○○		○			旧石器、縄文前期住居	古墳17
102	上大屋下組遺跡		○							縄文前期土坑	
103	上大屋天王山遺跡		○					○			

住は住居、墓は墓域、生は生産域を表す。古墳の項、墓の□は方形周溝墓、□は円形周溝墓、○は古墳を、生の□はAs-C下の畠を表す。平安の項、生の□はAs-B下水田、□は818年洪水層下の水田、○は畠を表す。



第7図 古代～中近世の遺跡分布

島が検出されている。

この時期の集落には近接して周溝墓が築造される事例が多い。これらの遺跡では居住域とはその占地を区別し、群在する状況が普遍的に見られる。その中、上縄引遺跡1基、阿久山遺跡1基、堤東遺跡1基、中山A遺跡1基、東原B遺跡4基の合計8基、前方後方形周溝墓が検出されている。この他、荒砥川以西の富田高石遺跡でも1基検出されている。

上記のように、荒砥地域における前期の集落や周溝墓の検出例は、他地域に対して遜色のないものではないが現在のところ前期古墳の存在は知られていない。前橋天神山古墳や華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある大型古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は、5世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。

前期集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統

集落」となる。中・後期になると前期からの集落は占地の範囲を多少変えながら継続する。荒砥宮田遺跡も1区で6世紀代の住居が検出されており、居住の継続性が認められている。それとともに新たな地点に「第一次新開集落」の形成がなされる。荒砥天之宮遺跡や荒砥北三木堂遺跡などに代表される集落である。こういった集落変遷の背景には従来からの河川灌漑の整備とともに荒砥天之宮遺跡で検出された溜井の掘削に見られる湧水を人為的、かつ積極的に利用するといった灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられる。

中期の集落としては宮川上流域に丸山遺跡、北原遺跡、柳久保遺跡群や、荒砥川流域に荒砥宮田遺跡、荒砥前田Ⅱ遺跡のように前期から継続する遺跡と宮川下流域の荒砥北三木堂遺跡や荒砥天之宮遺跡のように5世紀後半になってから集落の形成が開始された遺跡がある。

また、荒砥荒子遺跡や梅木遺跡、丸山遺跡では、5世紀代、首長層の居宅と考えられる方形区画遺構が検出されている。このような遺構の存在は古墳に見られる被葬者の多様性が居住施設にも現れたものと思われる。

荒砥宮田遺跡では6世紀の集落を検出しているが本遺跡の周辺で同時期の集落が形成された遺跡としては荒砥諏訪西遺跡、荒砥北原遺跡、柳久保遺跡群、大久保遺跡、北原遺跡、丸山遺跡、新山遺跡などをあげることができる。古墳時代前期の集落は各河川の上流域に多く展開していたものが、中期になると上流域では減少、下流域の増加がみられ、居住域の範囲も拡大しているとの指摘がある。その傾向は6・7世紀になるとさらに強くなるという。宮川下流では荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡、二之宮谷地遺跡などで6世紀になり集落の形成が開始される。

古墳の動向をみると、6世紀になって、大室古墳群に前二子、中二子、後二子の3基の前方後円墳が築造される。小円墳は、5世紀後半に富田町東原古墳群や大胡町上ノ山古墳群をはじめ群集墳の形成がはじまり、6世紀、7世紀と小地域ごとに立地、形

成内容を変化させながらその形成が進行している。

荒砥宮田遺跡2区東谷地、荒砥前田遺跡で浅間B軽石下水田面を検出した。荒砥地域では浅間B軽石に埋没した水田は、多数の遺跡で調査事例が報告されており、浅間B軽石が降下した1108(天仁元)年の時点では、沖積地の大半が水田化されていたと考えられる(第7図)。

女堀は、荒砥地域を東西方向に横切る用水遺構で、調査結果から掘削工事が途中で中断されたことが確認された。堀の排土下からは畠が検出された。女堀は、この畠の直下に堆積する浅間B軽石の降下によって被害を受けた欠水地帯の農耕地、灌漑設備を復興することを目的に計画されたものと考えられる。

中・近世の遺跡、遺構の中で城郭としては、大室城、大室元城、赤石城、新土塚城、荒子の砦などの存在が知られる。本遺跡の南側1.6kmには今井城がある。荒砥川の右岸に築かれており、南北70m、東西60mの本丸と外郭、腰郭、寄居山と呼ばれる櫓台、堀、戸口の存在が確認できるとされる。その本城である大胡城は、本遺跡北方4.0kmの荒砥川右岸丘陵上に築城された並郭式の平丘城で、廃城前、近世初期には一辺約80mの正方形に区画された本丸を中心に7つの曲輪からなっていたとされる。

また、本遺跡から南東2.5kmの上武道路関連の調査においては、二之宮町地内で複数の館の存在が確認され、二之宮環濠遺跡群として認識されている。二之宮赤城神社は、良好な堀と土塁の存在から一辺70mの内郭と東西最大150m、南北125mの外郭からなる館の後身と考えられている。その西南350mには二之宮宮下西遺跡が位置し、二重堀の一部と戸口が検出され、一辺75~100m四方の主郭部と南側に副郭を有する構造の館が存在したと考えられている。二之宮宮東遺跡からも中・近世の堀・建物遺構が複数検出されたがこの中には12~14世紀に至る間に造られた礎石立の建物跡と池を有する庭園が含まれている。二之宮宮下東遺跡でも中世後半の館の一部が検出されている。また、今井道上道下遺跡では「あづま道」をはじめとした中・近世の道跡を検出した。

第3章 発掘調査の方法と概要

大胡町域の上ノ山遺跡では溝に取り囲まれた堅穴住居、掘立柱建物、土坑が検出されており、近世の所産と考えられている。

中世の墳墓を検出した遺跡としては、宮下遺跡、鶴ヶ谷遺跡群、下境Ⅰ遺跡、荒砥北三木堂遺跡が知られる。宮下遺跡は、本遺跡の西方、荒砥川右岸の台地東縁に位置する遺跡であるが、3群からなる59基の中世墓群が検出されている。これらは五輪塔や板碑、骨蔵器を伴い、骨片の出土がみられる。51号墓では貞和四(1349)年の紀年銘がある板碑が出土しており、墳墓群全体が14世紀代の所産とされる。

鶴ヶ谷遺跡群では、20基の墓が検出された。うち2基が骨蔵器を伴い、その他は素掘りの墓坑であった。板碑を伴う4号墓からは北宋銭が出土、14世紀代の所産と考えられている。

下境Ⅰ遺跡では古墳の前庭を再利用して墓域が形

成され、骨蔵器、五輪塔、板碑が出土している。板碑に文和三(1354)年、あるいは康安元(1361)年の紀年銘がみられる資料があることから、墳墓群の造営は、14世紀中頃から後半と考えられている。

荒砥北三木堂遺跡では、12基の火葬墓あるいは火葬跡を検出、焼骨片とともに北宋銭が出土している。

東前田遺跡では塚の調査が実施されている。

小島田八日市遺跡では出土品の中に石臼(粉挽き白・茶臼)・石鉢・五輪塔の未製品、磨き石と報告された砥石が存在する。これは荒砥諏訪西遺跡の出土品と共通しており、注目される。小島田八日市遺跡内で石製品が製作されていたことが考えられている。

大胡町の茂木山ノ前遺跡では樽に埋納されて備蓄銭約3万枚が、上大屋中組遺跡でも土坑(堅穴と報告)から43種942枚の古銭が出土している。

第3章 発掘調査の方法と概要

1. 荒砥宮田遺跡の調査方法と概要

グリッドの設定 調査の実施にあたっては第8図に図示したように荒砥宮田遺跡および荒砥諏訪西遺跡を含めた調査全体を一辺100mの方眼でカバーし、南側から北側に向かってA区、B区と順次R'区まで合計19区画の大グリッドを設定した。今回報告の荒砥宮田遺跡にかかわる区画はAからL区に相当する。

大グリッド設定の基点には荒砥宮田遺跡1区内にあった圃場整備の工所用杭を利用した。南北基本線には新設道路支道34号の西縁を、これに直交する東西基本線には耕道25-1の北縁を充てている。南北基線と国家座標(旧座標)の南北ラインとの偏角は東に約26度である。

大グリッドの中には一辺5mの方眼を設定、これ

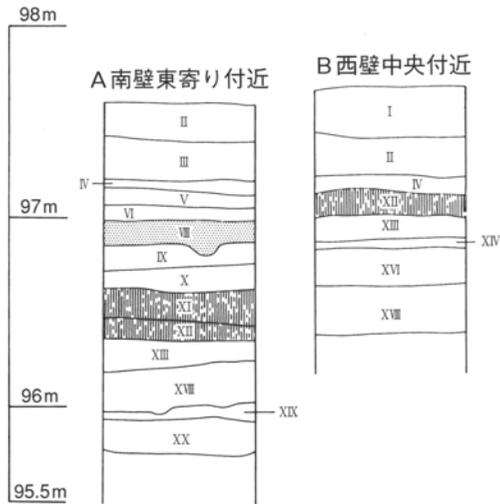
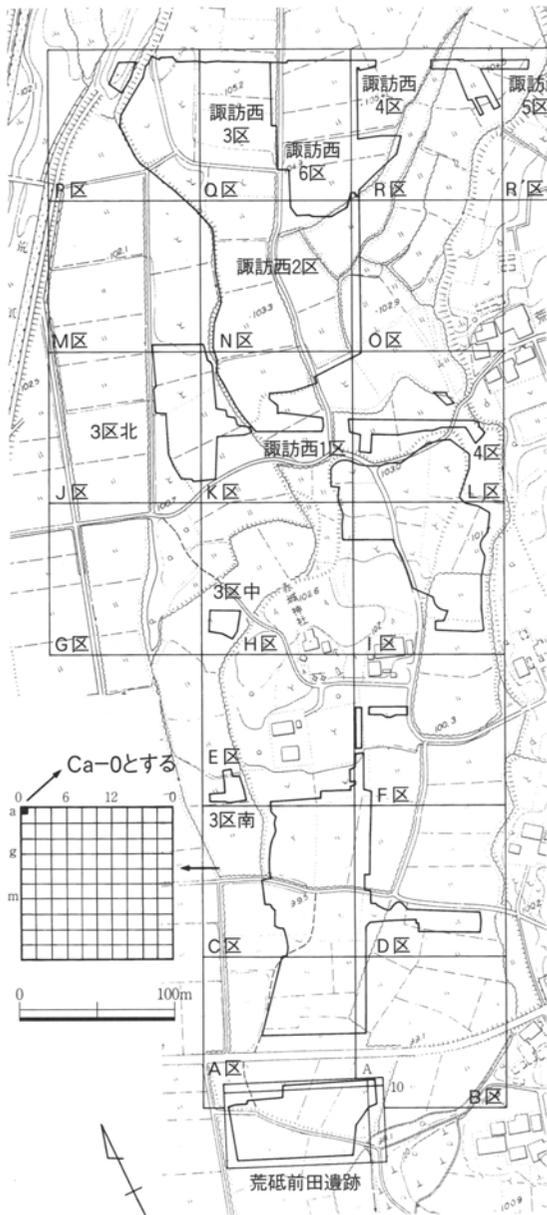
を小グリッドとした。グリッドの呼称は、大グリッドを独立した単位とし、北西隅に基点を設定し、その点をa-0とし、小グリッドは東西軸にアラビア数字を付し、西側から0から19まで、南北軸にアルファベットを付し、北側からaからtまでとし、第8図の凡例のように大グリッド(アルファベット)小グリッド(アルファベット-数字)でBa-0のように呼称した。

基本土層と遺構確認 1区南西低地はA地点(第9図以下同じ)の土層を示す。表土下は砂粒を多く含んだ灰褐色土が堆積し、その下層には南東隅の一部で浅間B軽石が堆積する。その直下で水田面と考えられる平坦な部分が確認できた。6層は洪水層でそれを鋤込んだ畠の痕跡が5層上面で確認できた。6層直下では傾斜地を開田した東西に長細い水田面を広範囲に検出した。

1. 荒砥宮田遺跡の調査方法と概要

第3表 各調査区の遺構

	区	住居	掘立柱建物	井戸	土坑	竪穴状遺構	溝	畠	水田	墓	周溝墓	古墳	その他
荒砥宮田遺跡	1区	46	29	67	284	28	88	1面	2面				
	1北区	5		2	8		4						
	2区	7		3	52	1	1		1面	28	1	1	
	3区												浅間B下面
	4区				1		6						浅間B下面・浅間C下面
合計	58	29	72	345	29	99	0	0	28	1	1		
荒砥前田遺跡	0	5	2	5			13	1面	2面				

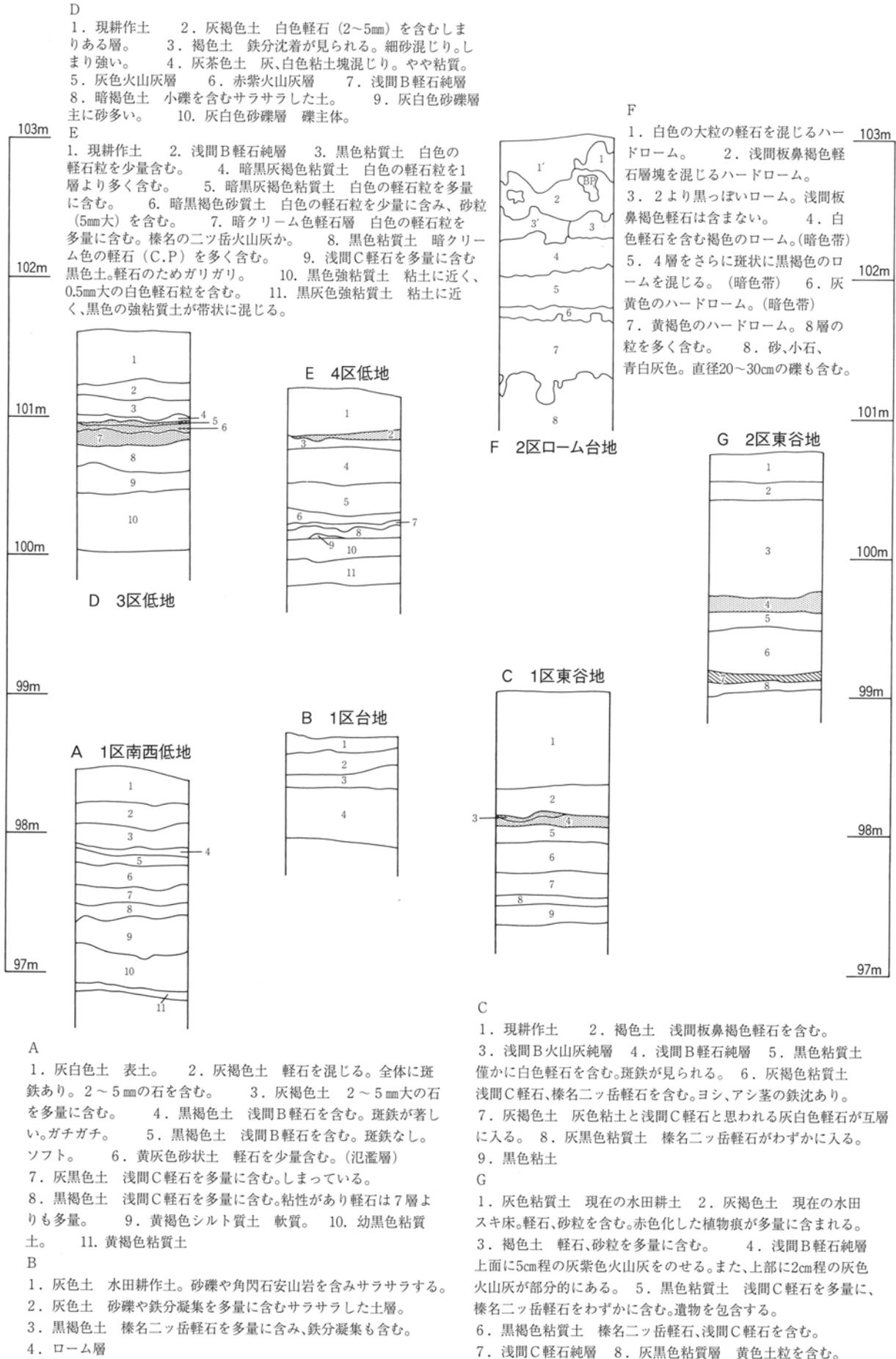


荒砥前田基本土層

- I. 灰色土層 現水田耕作土で、シルト質のしまりのある土。
- II. 灰褐色土層 現水田面の更に下面の水田耕作土。ややシルト質であるが、小砂礫を少量含む。下面は鉄分の沈着あり。
- III. 灰褐色土層 ほぼII層に類するが、ややしまりが少ない。水田耕作土。
- IV. 褐色土層 鉄分の沈着層。III層に類する。
- V. 黒褐色土層 かなり多くの浅間B軽石を含み、やや粘性をもつ。あまりしまりはない。水田耕作土と考えられる。
- VI. 黒褐色土層 ほぼV層に類するが、あまり粘性がない。
- VII. 褐色土層 浅間B軽石を多量に含んだ層であり、鉄分の沈着がみられる。
- VIII. 浅間B軽石層 上面は追分火山灰が部分的に残っている。
- IX. 黒色土層 砂礫を少量含むが、やや粘性ある土。
- X. 黒色土層 多量の小砂礫を含むしまりのない土。XI層が黒色化した感じの層。
- XI. 砂礫層 直径1cm前後の礫を含み、ラミナを呈す。5cmほどの大胡火砕流を含むこともある。
- XII. 砂層 ラミナを呈する。
- XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ヶ岳軽石を含む。(洪水層下水田耕作土)北東では非常に粘性を持ち、泥炭質となっている。
- XIV. 黒褐色土層 鉄分の沈着層であり、多くの浅間C軽石を含む。
- XV. 黒色土層 XIII層、XIV層よりも浅間C軽石は多く含まれており、粘性を若干もち、あまりしまりはない。
- XVI. 黒色粘質土層 ほとんど浅間C軽石を含まず、やや泥炭質である。しまりのある土。
- XVII. 黒灰色粘質土層 XVI層、XVII層の漸移層と言える層。粘性に富む。
- XVIII. 灰白色粘質土層 しまりのある土で、粘性に富む。遺跡南側では部分的に鉄分の沈着も見られる。
- XIX. 暗灰色土層 シルトに近い砂質土であり、あまりしまりはない。
- XX. 暗灰色シルト質土 かなりしまりのある土。

第8図 荒砥宮田・前田遺跡の発掘区と前田遺跡の基本土層

第3章 発掘調査の方法と概要



第9図 荒砥宮田遺跡の基本土層

1. 荒砥宮田遺跡の調査方法と概要

1区台地部はB地点の土層を示す。現耕作土の灰色砂質土と榛名二ツ岳軽石を含む黒褐色土を除去したローム層(4層)上面で古墳時代の住居や、中近世の遺構を確認した。1区東低地部はC地点の土層を示す。地表面下0.9mで浅間B軽石と火山灰の純堆積層が確認でき、その直下で水田面と推定される平坦面が検出された。ここでは下層に堆積すると予想された榛名二ツ岳軽石と浅間C軽石の純堆積層は確認できなかった。

2区台地部はF地点の土層を示す。厚さ15cmの表土の下に白色の大粒の軽石を含むハードローム層(1層)が堆積していた。この1層上面で縄文時代土坑、古墳時代前期および平安時代の住居等を検出した。東谷地へは緩やかに傾斜していくが、その緩斜面で古墳時代前期の土坑群を確認した。2区東低地部はG地点の土層を示す。現水田耕土の下層には1m近くの褐色土が堆積し、この下位に浅間B軽石と火山灰の純層(4層)が厚さ10cmほど堆積していた。この直下で谷沿いの水路や水田面と推定される平坦面を検出した。5層・6層は榛名二ツ岳軽石や浅間C軽石を含む黒色・黒褐色の粘質土が堆積し、水田耕土となっていた。その下層に厚さ5cmほどの浅間C軽石純層(7層)の堆積が確認できた。7層の堆積は2区東谷地調査区の南半部の谷中央に限られており、直下面の精査をおこなったが遺構は検出できなかった。

3区は低地部だけの調査区である。北方のD地点の土層を示す。厚さ50cmの現耕作土の下位に、下層の浅間B軽石を鋤き込んだ褐色土が堆積し、その下層に厚さ15cmの浅間B軽石純層(5～7層)が堆積していた。その直下で平坦面を検出した。明確なアゼは検出されなかった。水田面かどうかは断定できない。その下層は砂礫層が1m以上堆積し、浅間C軽石層の純層は3区では確認できなかった。また砂礫層の下層がどうなっているかは調査では確認できなかった。

東西に長い4区は、西側の6割が低地部、東側の4割が台地部であった。低地部はE地点の土層を示

す。厚さ30cmほどの現耕作土(1層)の下に厚さ5cmの浅間B軽石純層(2層)が確認された。その直下で緩斜面と平坦面を検出したが、アゼ等は検出されなかった。水田面であるかどうかは不明である。その下層に厚さ数cmの榛名二ツ岳火山灰(7層)が確認できたが、直下での精査は火山灰層が不明瞭で実施できなかった。さらに黒色粘質土を挟んで浅間C軽石層(9層)が堆積していたが、その直下は東西方向の溝状凹地であり、人為的な遺構かどうかは断定できなかった。4区台地はロームが堆積していたが、その上面で4条の溝を検出した。最も東にある5号溝には浅間B軽石が最下層に堆積していた。現況からみると、この5号溝は、北側の谷から2区東谷地に抜ける自然の谷地形である可能性もあるが、調査所見のみでは不明な点が多い。

遺構・遺物の記録 調査にあたっては、図面・写真および調査メモを記録した。図面は各遺構の断面図と平面図を作成した。各遺構の埋没状況については土層確認を行い、適時土層断面図を作成した。土層断面図はすべての遺構について記録できなかったが、調査メモで補足するようにした。古墳石室は10分の1、堅穴住居・溝・土坑等の遺構は20分の1、溝・古墳・水田・畠等については40分の1の個別の平面図を平板測量によって作成した。なお1区については個別の平面図ではなく、グリッド杭を利用して調査区を割り付け、20分の1の割り付け平面図を作成した。

遺構写真は35mmモノクロフィルムとカラースライドフィルムおよび、ブローニーモノクロフィルムを用いて地上撮影した。

調査の経過 1983(昭和58)年度の荒砥北部圃場整備事業に係わる埋蔵文化財調査は、荒口町、荒子町にわたる第4工区が対象となった。

前年度の実態を踏まえ、本格的な調査実施前に、分布調査、試掘調査を計画・実施した。工事行程と埋蔵文化財調査の進捗が整合性を有し、双方が円滑に進行するよう協議が重ねられたが、圃場整備対象面積が95.5haと膨大であったことなどの諸要因が

第3章 発掘調査の方法と概要

重なり、充分な環境の中での調査実施には至らなかった。調査はA工事の荒砥宮田遺跡とB工事の荒砥諏訪西遺跡が併行して実施された。荒砥宮田遺跡の調査経過の概略は次の通りである。

5月11～17日 前橋土地改良事務所から提示された施工計画に基づき、第4工区の圃場整備対象地内全域の遺跡分布調査を実施した。

5月下旬～7月上旬 分布調査の成果を整理、報告した。前橋土地改良事務所、荒砥北部土地改良区、群馬県教育委員会文化財保護課、事業団で調整を重ねた。本調査に先行して試掘調査を実施することを確認した。

7月8日 調査事務所設営。調査器材の搬入。当初は調査担当3名で対応。

7月13日 調査区確定のため、第4工区A工事対象地の試掘調査を開始した。

7月18日 第4工区B工事対象地の試掘調査を開始した。

7月22日 第4工区C工事対象地の試掘調査を開始した。

8月1～15日 試掘調査の記録を整理した。その結果、A・B・C工事対象地における要調査対象面積は、約13万7千m²が見込まれた。

8月19日 調査方針の打ち合わせを実施。

8月23日 1区表土掘削・除去作業開始。合わせて、1区の遺構確認調査を開始した。

9月19日 2区でも表土掘削除去作業開始。

9月29日 3区も併行して表土除去作業開始。

今年度、事業団はA・B工事対象地の調査に対応することが決定された。要調査対象面積は約7万m²。

10月1日 B工事対象地（荒砥諏訪西遺跡）表土掘削・除去作業開始。

10月6日 1区水田部分調査開始。2区の遺構確認作業および遺構調査開始。調査担当5名の体制になる。

10月8日 3区の浅間B軽石面精査開始。

10月11日 1区洪水砂下水田全景写真撮影。

10月12日 1区洪水砂下水田測量開始。2区東谷地

調査開始。

10月17日 2区東谷地浅間B軽石除去作業開始。

3区浅間B軽石下面全景写真撮影。

10月18日 1区洪水砂下水田調査終了。1区の調査は一時中断する。

10月21日 荒砥諏訪西遺跡、調査開始。以後、11月24日まで宮田遺跡と諏訪西遺跡を併行調査。

10月24日 2区1号墳全景写真撮影。2区東谷地浅間B下水田全景写真撮影。

10月28日 荒砥諏訪遺跡、試掘調査開始。以後、3遺跡を併行して調査する。

10月29日 2区東谷地両側溝群全景写真撮影。3区浅間軽石下面調査終了。

11月1日 4区表土掘削除去作業開始。

11月2日 4区浅間B軽石面精査開始。

11月9日 1北区調査開始。

11月11日 2区台地・東谷地調査終了。

11月18日 1北区調査終了。

11月21日 4区浅間C軽石下面調査。

11月22日 4区調査終了。この後荒砥諏訪西遺跡の調査に担当5名が集中。

12月23日 土地改良工事の行程に間に合わせるため、調査体制を増強。宮田遺跡1区を別班で調査再開。

1月以降は、担当者8名の体制になる。荒砥諏訪西遺跡も調査続行。

1月28日 荒砥宮田遺跡1区東谷地部、調査再開。

2月3日 荒砥諏訪西区の調査、全て終了。以後、調査体制の全てを荒砥宮田遺跡1区の調査に投入。

2月7日 1区68号溝全景写真撮影。

2月13日 荒砥宮田遺跡1区、調査終了。本年度の調査を全て終了した。

2月21日 調査器材の搬出、調査事務所の撤収。

2月14日～3月24日 記録図面・写真整理、土器洗浄・注記等の整理作業を実施。

3月24日 基礎整理作業を終了し、記録類・出土遺物を事業団へ搬出。

1. 荒砥宮田遺跡の調査方法と概要

発掘区の概要 今回の荒砥宮田遺跡の発掘調査によって、1区・1北区・2区・3区・4区の5カ所の調査区で検出した遺構は第3表に示すとおりである。このうち、縄文時代から古墳時代の遺構・遺物は既刊『荒砥宮田遺跡Ⅰ』で報告した。本書『荒砥宮田遺跡Ⅱ』では古代から中近世の遺構・遺物について報告する。

1区は中央のローム台地で、東側には浅間B軽石が堆積する帯状低地が、南西部には西側の浅間B軽石が堆積する沖積地が廻りこむ。台地上からは43軒の住居、掘立柱建物29棟、井戸67基、土坑338基、竪穴状遺構28基、溝99条、畠1面5カ所、水田2面が検出された。このうち掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構、溝と土坑の多くは、中近世のものと思われ、縄文時代から古墳時代の遺構と著しく重複して検出された。

縄文時代の遺構は、前期の住居1軒と土坑1基である。南西低地と台地縁辺には弥生時代終末期～古墳時代初頭と思われる長方形土坑が1基ずつ検出された。古墳時代前期の住居は16軒で、台地中央部に散在していた。古墳時代中・後期の住居は26軒、土坑8基である。また台地の東谷地では、古墳時代前期の遺物を出土した溝2条が検出された。住居の分布は、古墳時代前期の住居と重なる。これに対して、奈良・平安時代の遺構と確定できたものはない。

これらの遺構に重複して、1区の台地上では掘立柱建物29棟、井戸67基、土坑282基、竪穴状遺構28基、溝99条が密集して検出された。溝はいくつかの空間を区切るようにあり、その内部に掘立柱建物等の遺構が分布するが、遺物等から同時期であるかどうか確定することはできなかった。なかには井戸や竪穴状遺構が溝と重複するところがあり、中世から近世にかけて、継続して居住域として利用されたことがわかる。

溝は、方形区画の大規模な溝と、圃場整備直前の道路や地割りとトレースする小規模な溝がある。前者は、94号溝や72号・73号溝、68号溝、21号溝で、72号・73号溝と68号溝からは橋脚孔と推定される配

置の柱穴が検出された。後者は40・41号溝や42号溝、24号・30号溝、12・16・17号溝で、近年まで土地区画として意識されてきたことになる。特に42号溝は中世遺物を含み、さかのぼる可能性がある。

掘立柱建物は、台地上に23棟、後述する微高地部に6棟が検出された。これらの掘立柱建物には主軸方位に共通性が見られる建物群があり、特に1区の北部は溝との関係などから溝をともなった屋敷遺構と考えられる。1区中央には掘立柱建物は散在するにとどまり、低地部にかかる1区南部には別の掘立柱建物の集中部がある。

井戸・土坑は多くの遺構を検出したが、時期を特定して、他の遺構と確実に伴うと判断できた遺構はきわめて少ない。また竪穴状遺構は、一部が散在するが、その多くは42号・44号溝に挟まれた地点に集中する。この遺構の機能・用途は明確でない。竪穴状遺構の偏在は建物群の性格を示すことが予想されるが、結論を出すにはいたらなかった。

1区南西低地では、南東部の一部で浅間B軽石が残り、直下に水田面と思われる平坦面が検出された。浅間B軽石の下層には洪水砂があり、それを鋤き込んだ畠の畝溝跡5カ所と、洪水砂直下の水田を広範囲に検出した。水田は、巾の狭い長方形の水田面が並んだ傾斜地水田である。

1区東谷地内は、巾10mのトレンチ状の調査にとどまったが、浅間B軽石直下の平坦面を検出した。明確な畦・水路は検出されなかったので水田面とは断定できなかった。なお土壌のプラントオパール分析は実施していない。

1北区は古墳時代の住居5軒、時期不明の井戸2基、土坑8基、溝4条が検出された。住居以外の遺構の時期は確定できないが、1区の中近世遺構の分布の広がりと考えられる。

2区は1区と同様の台地で、古墳時代の住居5軒、方形周溝墓1基、古墳1基、古代の住居2軒、中近世のものと考えられる井戸3基、土坑80基、竪穴状遺構1基、時期不明の溝1条が検出された。

土坑は80基のうち、12基は縄文時代および古墳

第3章 発掘調査の方法と概要

時代の遺構で、第I分冊で報告した。7基は火葬跡であり、炭化材や焼人骨が出土した。また20基は土坑墓であり、古銭や五輪塔が出土した。一部には人骨がわずかに残るものもあった。残る38基は土坑で方形・隅丸方形・円形等に分けられる。出土遺物がないので断定できないが、形態等からみると土坑墓と酷似するものがある。2区は1区と対照的に墓域として土地利用されていたことになる。

2区東谷地では浅間B軽石と浅間C軽石の直下面が検出された。浅間B軽石下面の谷巾が広がる南半分では水路やアゼがあり、水田面と考えた。下位の浅間C軽石下面は直下面の精査を行ったが、帯状の凹地を検出したにとどまった。

3区は、1・2区のある台地西側の低地内の発掘区である。工事内容との調整の中で、3区画が調査された。いずれの発掘区でも浅間B軽石直下面を精査したが、水田面との確証は得られなかった。

4区は、道路新設の細長い発掘区である。中央から西側は低地であり、浅間B軽石直下で平坦面が、また下層の一部で浅間C軽石が検出されたが、その直下面を水田面と確定することはできなかった。

調査で出土した資料は60×37×15cmの遺物収納箱に68箱、68×48×34cmの収納箱に8箱、57×35×30cmの収納箱に2箱である。

本報告の中で資料化し、本文中に掲載した資料は619点である。資料の内訳は土器457点、鉄器12点、石器150点(うち68点は使用痕のない礫で写真・計測のみ)である。

2. 荒砥前田遺跡の調査方法と概要

グリッドの設定 調査の実施にあたっては第8図に図示したように調査区全体を一辺5mの方眼でカバーするグリッドを設定した。グリッド設定の基点は圃場整備工事用杭である。その南北基線と国家座標の南北ラインとの偏角は、西に約23度である。

グリッドは、南北軸に南側から0から11までのアラビア数字を付し、東西軸に東側からAからSまで

のアルファベットを付した。グリッドの呼称は、南東隅に基点を設定し、その点をあてた。

基本土層と遺構確認 基本土層は、南壁中央付近のA地点と、西壁中央付近のB地点を示す。

荒砥前田遺跡では、天仁元(1108)年に降下した浅間B軽石層と弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層が堆積しており、調査の鍵層となった。基本的な土層は、浅間B軽石より上層に、軽石を多く含む灰褐色土が堆積し、現水田耕作土まで連続する。浅間B軽石の下には小礫を含む黒色土があり、その下層に弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層が挟在する。その下層には榛名二ツ岳軽石(6世紀中葉降下)や浅間C軽石(4世紀初頭降下)を含む黒色土、軽石を含まない黒色土が堆積し、その下層には灰白色粘質土がある。

これらの土層はすべてが発掘区全域に堆積しているわけではない。A地点では、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層の下に堆積する黒色土のうち、浅間C軽石を含む黒色土層下半と浅間C軽石を含まない黒色土がみられなかった。またB地点では浅間B軽石とその上下層の堆積が見られなかった。

これは、浅間B軽石が残っているのは発掘区東部分のみで、西部分では削平されたものと考えられる。一方、浅間C軽石を含まない黒色土は、発掘区の西半分、荒砥川に近い方に堆積しており、東から西に向かって傾斜のある地形を反映しているものと考えられる。

調査では下記の4面で遺構を確認した。

1面は浅間B軽石層(Ⅷ層)下で、水田面を調査した。前述したように浅間B軽石の堆積は発掘区東半に限られていたため、水田面が確認できたのは東部にとどまった。

2面は弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)の下面で、畠の畝間と考えられる溝列、水田面、掘立柱建物、溝、土坑、井戸を確認した。これらの遺構は、同じ面で確認したが、土層断面の精査から下記のように概ね3時期に分けられる。

第1は溝の一部と掘立柱建物・井戸・土坑は、弘

2. 荒砥前田遺跡の調査方法と概要



第10図 荒砥宮田遺跡調査区の位置 (調査時)

第3章 発掘調査の方法と概要

仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)の上から掘り込んでいること、浅間B軽石層より上位の地層で覆われていることが判明した。掘立柱建物の柱穴の掘り込み面は未確定であるが、南壁土層断面から6号溝はV層下面、7号溝はIII層下面であることがわかる。浅間B軽石とこれらの遺構の直接的な関係は不明であるが、遺構の形態から、浅間B軽石より上層から掘り込まれた遺構と判断した。

第2は、畝の畝間と考えられる溝列である。これは上記の遺構と同様に弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)の上から掘り込まれているが、浅間B軽石層の下位にある黒色土(X層)で覆われており、その時期は洪水直後に近い時期と考えられる。

第3は、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)に直接覆われて検出された水田面である。

3面目は黒灰色粘土層(XVII層)あるいは灰白色粘質土層(XVIII層)上面で、土坑と溝を調査した。

以上のように、荒砥前田遺跡では遺構を確認したが、2面の3時期の遺構群は洪水層上での遺構確認が困難であったため、下位の洪水層下で確認した。これらの時期を重視して、次章では全体で5面の遺構面ごとに各遺構を報告することにする。

遺構・遺物の記録 調査にあたっては、図面・写真および調査メモを記録した。図面は各遺構の断面図と平面図を作成した。

各遺構の埋没状況については土層確認を行い、適時20分の1の土層断面図を作成した。土層断面図は発掘区壁を利用して、上下の土層との関連がわかるように記録した。

平面図は浅間B軽石層下水田40分の1、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層下水田50分の1、畝・掘立柱建物・溝・土坑等の遺構については40分の1の個別図を平板測量によって作成した。

遺構写真は35mmモノクロフィルムとカラースライドフィルムおよび、ブローニーモノクロフィルムを用いて地上撮影した。

調査の経過 1981(昭和56)年度の荒砥南部圃場整備事業に係わる埋蔵文化財調査は、全体で10haを越え

る広範囲が対象となったことから、他の遺跡の調査と併行して実施された。十分な環境の中での調査実施には至らなかった。荒砥前田遺跡の調査経過の概略は次の通りである。

1月6日 調査開始。調査事務所設営。調査器材の搬入。調査担当1名で対応。

1月7日 表土掘削・除去作業開始。合わせて遺構確認調査を開始した。

1月8日 浅間B軽石残存部は軽石直下調査。軽石がない部分は下層の洪水層を掘り下げて洪水層下水田の調査を開始した。

1月20日 水田調査終了。全景写真撮影。

2月2日 浅間B軽石層下水田測量。

2月9日 浅間B軽石層下水田の下層掘り下げ開始。

2月12日 洪水層下水田調査全域終了。

2月13日 洪水層下水田全景写真撮影。測量。

2月15日 南壁土層断面図測量。掘立柱建物柱穴掘り下げ調査開始。

3月16日 北壁・東壁土層断面測量。

3月18日 西壁土層断面測量。掘立柱建物写真撮影。溝・土坑・井戸調査。

3月19日 掘立柱建物平面図測量。

3月22日 溝調査。

3月23日 畝間遺構調査。

3月24日 平面図測量。

3月25日 調査終了。

発掘区の概要 荒砥前田遺跡の発掘調査によって検出した遺構は、第3表に示すとおりである。前述したように3面の遺構確認面のうち、一つが3つの時期に細分できることから、合計5時期の遺構群に分けて考えることが可能である。

1期は浅間B軽石堆積以降の遺構で、掘立柱建物5棟、溝3条、井戸2基、土坑3基が検出された。これらの遺構は中近世のものと考えられるが、出土遺物がほとんどなく、時期が明確でない。このうち掘立柱建物は中世のものと近世のものが混在していると考えられる。また掘立柱建物は荒砥宮田遺跡1区にも29棟が検出されており、関連が注目される。

2. 荒砥前田遺跡の調査方法と概要

井戸は埋没土の共通性から掘立柱建物に伴うと判断した。

2期は浅間B軽石直下で水田と溝を検出した。浅間B軽石が残っていたのは、発掘区の東部1/3程度の範囲である。アゼの残存も不良で、中央部の一部で確認できたにとどまった。

3期は浅間B軽石より古く、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)より新しい畝間の溝群を検出した。これらは浅間B軽石層の下位にある黒色土(X層)で埋まっている。下位水田が洪水層で埋まった後、その復旧としてつくられた畝の痕跡と考えられる。

4期は洪水層(XI・XII層)直下で水田面を検出した。発掘区ほぼ全域に傾斜に沿った棚田が検出されている。なお、東端の2号・4号溝は水田を埋めた洪水層で埋まっていない。土層断面からは浅間B軽石よ

り古く、洪水層(XI・XII層)より新しい溝である。この溝は厳密には水田に伴わないが、水田面東端、溝と接するところにもアゼがつくられていることから、同様な位置に水田面に伴う溝があったことは確実である。このような状況から、これらの溝は今回の調査では4期にいて作図した。

5期は溝6条と、土坑2基を検出した。洪水層(XI・XII層)下水田耕土の下位の遺構で、古墳時代前期および中期の土器が出土した。これらの溝群は、荒砥宮田遺跡1区の古墳時代前期集落との関連も視野に入ると、本遺跡における水田耕作の開始時期を決定する上で重要である。

荒砥前田遺跡で出土した資料は60×37×15cmの遺物収納箱に2箱である。また本報告の中で資料化し、本文中に掲載した荒砥前田遺跡の資料は29点である。資料の内訳は土器28点、石器1点である。



第11図 荒砥宮田遺跡調査区の位置 (現状)

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

1. 古代

(1) 概要

荒砥宮田遺跡の古代の遺構は、2区台地上で平安時代後期の竪穴住居2軒が、1・2・3・4区の傾斜地および低地部で浅間B軽石および洪水層直下面の一部で水田や畠が検出された。

検出された水田・畠は、1区で浅間B軽石直下水田、1区のみで弘仁九(818)年の地震に伴うと考えられる洪水層下の水田と、洪水層上の畠の畝間跡である。浅間B軽石は天仁元(1108)年降下と考えられている浅間山起源の降下軽石で、浅間山山麓はもとより、群馬県の平野部に大きな被害をもたらした。荒砥地域でも低地部を発掘調査すると、ほとんどの遺跡で浅間B軽石下の水田を検出することができる。埋没時期は中世初期に入るが、古代の遺跡分布との関連から古代には開田されていたと考えられるので、本書では古代の項で報告する。

また2区では古代の住居が2軒検出された。古代の遺構が検出されたのは2区のみで、1区北半部の台地上には明瞭な古代の遺構は検出されなかった。1区には中近世の遺構群が多量に重複しており、確認ができなかったことも考えられるが、古代の出土遺物はほとんどなく、奈良時代以降中世以前の台地上の土地利用は不明である。

(2) 1区の遺構と遺物

浅間B軽石直下面 (第12図 PL1)

1区の東谷地南東隅と、東谷地で浅間B軽石直下面が確認された。東谷地の直下面は西斜面を除き、平坦であった。アゼや水路は検出されなかったが、同じ谷の上流側2区で水田と思われる遺構が検出されていることから、1区東谷地の浅間B軽石直下面は水田であった可能性が高い。なお土壌のプラントオパール分析は実施できなかった。

また1区南東部では浅間B軽石層が検出されたので、軽石層を残して表土を除去した。その後人力で浅間B軽石層を除去していったところ、1区南東部の一角で、ほぼ水平な面を検出した。浅間B軽石層が明確に確認できたのは、第12図の南東部に図示した範囲である。一部にアゼ状の段や、格子状の溝が検出された。本面は水田耕作に関わると推定されるが、積極的に水田とする根拠は乏しいことから、直下面として記録した。ここでも土壌のプラントオパール分析は実施できなかった。

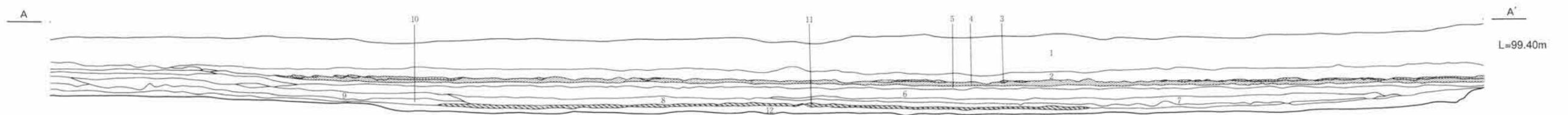
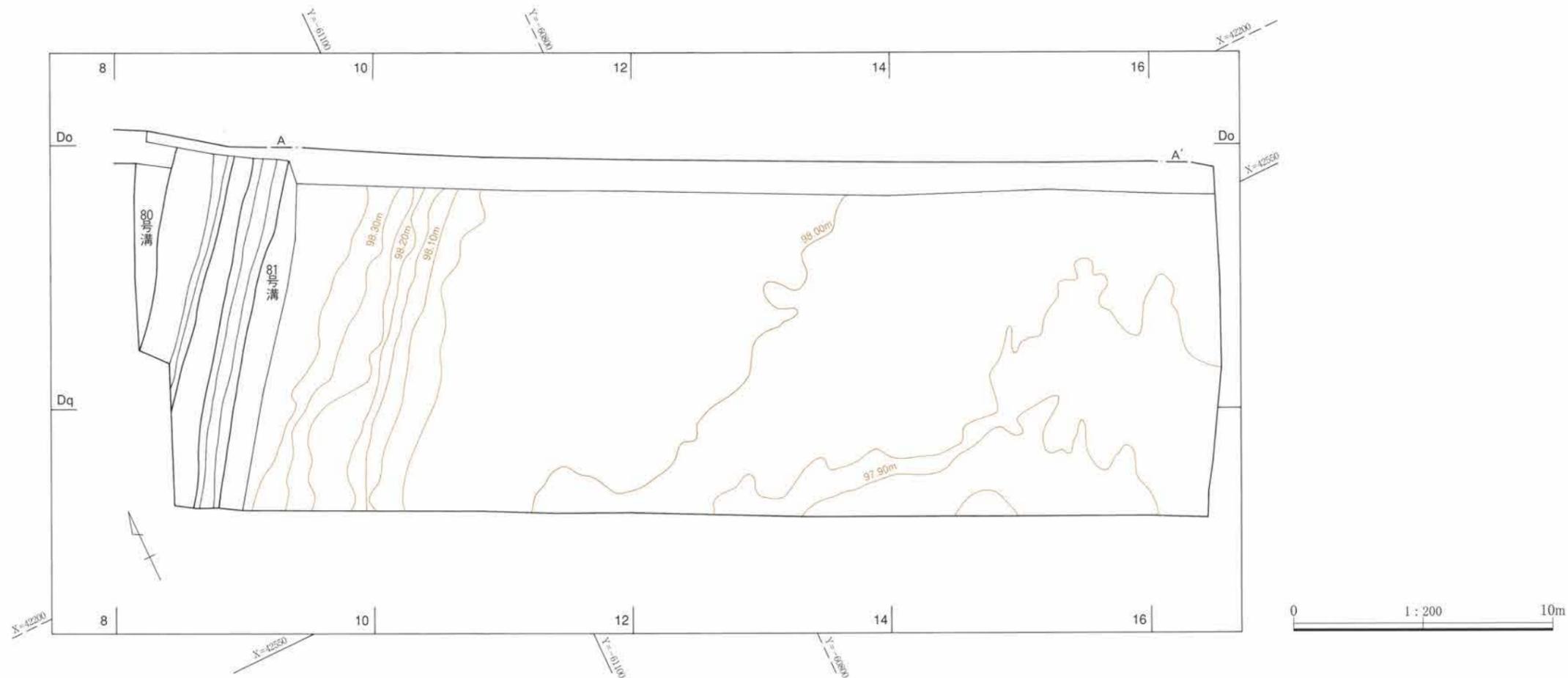
またAd・e-17・18グリッドで検出された10号溝は底面に浅間B軽石が堆積しており、上記直下面と関連する遺構である。しかし両者間には連続する浅間B軽石層を確認することができなかったため、詳細は不明である。

洪水層上畠 (第13・14図 PL2・3)

1区の西壁沿いを中心に畠の畝間溝の痕跡あるいは「耕作痕」と推定される小溝群が5単位検出された。これらの溝群は弘仁九(818)年の地震に伴うと考えられる洪水層を列状に掘り残していた。したがってこの畠の耕作期間は、弘仁九(818)年の地震に伴うと考えられる洪水以降、浅間B軽石降下(1108)以前と考えることができる。

第14図1号畠土層断面では、A-A'の6層、B-B'の5層が弘仁九(818)年の地震に伴うと考えられる洪水層である。この上位に堆積したそれぞれ5層・3層は灰黒色土で白色軽石を多く含む土層で、畠の耕作面を被覆・保存するものではない。この層位中に畠の耕作面は存在したと考えられるが、弘仁九(818)年の地震に伴うと考えられる洪水被災以後、浅間B軽石降下(1108)までの間に、耕作等の土壌攪乱によって視認できなくなっていると推定される。

したがって平面図は、いずれも弘仁九(818)年の

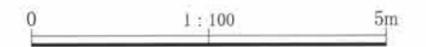


1区東谷地 A-A'

- 1. 現耕作土
- 2. 褐色土 浅間B軽石を含む。
- 3. 浅間Bテフラピンク色火山灰
- 4. 浅間Bテフラ軽石
- 5. 黒色粘質土 わずかに白色軽石を含む。斑鉄がみられる。
- 6. 灰褐色粘質土 浅間C軽石、榛名二ッ岳軽石を含む。ヨシ、アシ茎の鉄沈あり。

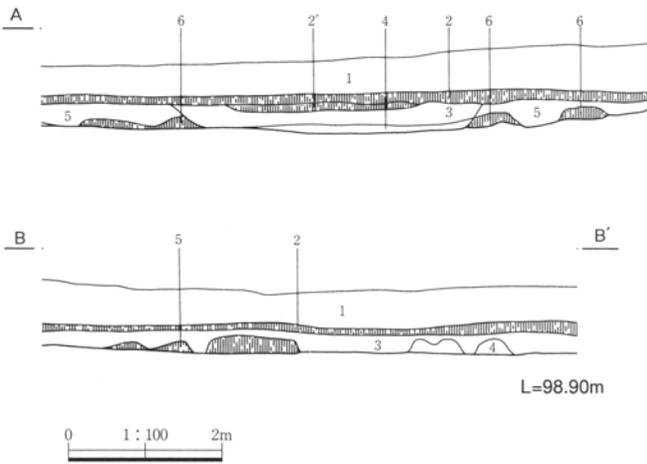
- 7. 灰黒色粘質土 榛名二ッ岳軽石らしきものがわずかに入る。
- 8. 灰褐色土 灰色粘土と浅間C軽石と思われる灰白色軽石互層に入る。
- 9. 灰褐色粘質土 浅間C軽石、榛名二ッ岳軽石混じり。茎類の鉄沈あり。
- 10. 黒色粘質土 浅間C軽石混じり。茎類の鉄沈あり。
- 11. 浅間C軽石
- 12. 黒色粘土

第12図 1区東谷地浅間B軽石直下面と土層断面



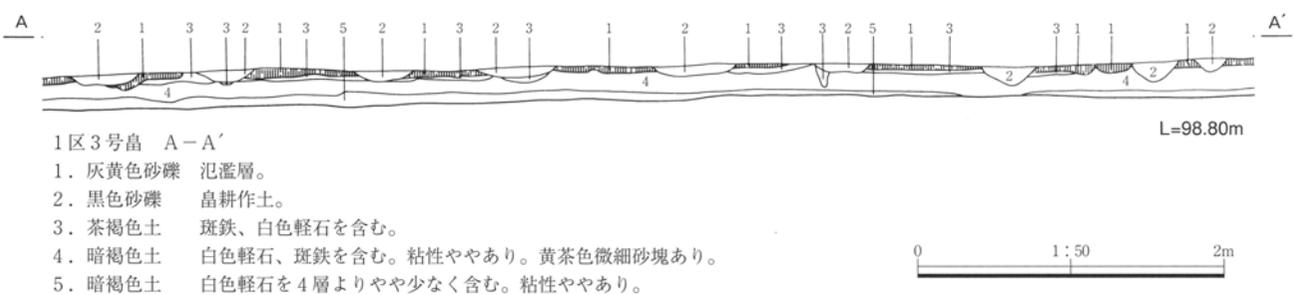
1. 古代

1号畠



- 1区1号畠 A-A'
1. 灰色土 榛名二ッ岳軽石を含む、水田の耕作土。
 2. 砂 鉄分を多量に含み、褐色を呈する。
 - 2'. 砂 2層との類似層。2層より鉄分凝集がやや少ない。
 3. 灰黒色土 砂礫（直径1cm）を多量に含む。
 4. 灰褐色土 砂礫（直径1cm）を多量に含む。黄褐色土粒も含む。
 5. 灰黒色土 榛名二ッ岳軽石を多量に含むサラサラした土層。
 6. 砂礫 直径1cm程の砂礫の層。
- 1区1号畠 B-B'
1. 灰色土 榛名二ッ岳軽石を含む、水田の耕作土。
 2. 砂 鉄分を多量に含み、褐色を呈する。
 3. 灰黒色土 榛名二ッ岳軽石を多量に含む、サラサラした土層。
 4. 灰黒色土 榛名二ッ岳軽石を多量に含む、しまった土層。
 5. 砂礫 直径1cmの砂礫の層。

3号畠



- 1区3号畠 A-A'
1. 灰黄色砂礫 氾濫層。
 2. 黒色砂礫 畠耕作土。
 3. 茶褐色土 斑鉄、白色軽石を含む。
 4. 暗褐色土 白色軽石、斑鉄を含む。粘性ややあり。黄茶色微細砂塊あり。
 5. 暗褐色土 白色軽石を4層よりやや少なく含む。粘性ややあり。

第14図 1区洪水層上畠土層断面図

地震に伴うと考えられる洪水層上面で記録した。溝群を構成する小溝の心芯間の距離は1号畠0.8~1.0m、2号畠北側で0.35~0.7m、南側で1.0~1.3m、3号畠0.9~1.2m、4号畠0.1m、5号畠2.0~2.2mである。1号・3号・4号畠と、1号畠、5号畠の3種の規格があることがわかる。溝の幅や深さは、被覆層で保存された耕作面でないことから原形をとどめていないので、計測値にはほとんど意味がないと考えられる。

埋没土は溝の内部と上層とに明確な差異が認められなかった。したがって、5単位の小溝群が同時期であるか、この地点にどのくらいの規模で畠作耕地が展開していたかを調査で明らかにすることはできなかった。しかしこの地点の土地利用が後述する洪水層下水田→洪水層上畠→軽石下水田と変化することは重要である。

出土遺物は無い。

洪水層下水田 (第15・16図 P L 3・4・36)

1区の畠耕土にあった洪水層を除去したところ、1区南西部の洪水層直下で水田面を検出した。洪水層は約4000m²の範囲で確認でき、アゼや水路等の施設は約3000m²の範囲で検出された。堆積していた洪水層は厚さ20cm、直径1cmほどの砂礫層で、水路底部まで入り込んでいた。

この水田面を覆う洪水層は第16図の土層断面A-A'の10層である。この砂礫層は前述した畠跡の耕作土になっていた砂礫層で、畠は水路まで埋まる洪水被災に遭遇した水田の復旧として、つくられたと考えられる。この洪水層は、第5章で報告する荒砥前田遺跡で検出された洪水層と同じものと見られる。

荒砥前田遺跡でも、上位から浅間B軽石下水田→洪水層上畠→洪水層下水田が検出されており、災害と復旧作業は広い範囲に及ぶことを予想させる。

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

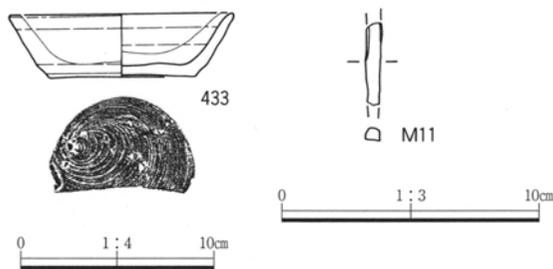
水田面は北から南にやや傾斜する地形に、棚田状の区画を造成している。水田面の最高点の標高は98.7m、最低点は97.55mで、標高差1.25mの間に8～10段の水田面が検出された。上位の水田面との比高は10～20cmである。

アゼは等高線にそって弧状をなし、ほぼ東西方向に長い帯状の水田面になっている。しかし発掘区が限られていたために、水田面の全形を把握できたものはなかった。水田面の大きさは短辺3.3～7.0m、長辺は最大30mである。

この水田域のほぼ中央を溝が北から南へ流下する。この溝が給排水のための溝と考えられる。溝の西側には幅0.5m、深さ0.4mで、上幅0.3m、下幅0.6mのアゼを伴っている。Ag-13グリッドで急に方向を西に向けるが、それ以西の走向は明確でない。屈曲部ではアゼを切っていることから、洪水被災時にこの形状になったとも考えられる。

水口は、溝の西側の区画と東側の区画で異なっている。屈曲部より上位は、西側区画東西アゼの最東部の溝に隣接する位置に、下位は東側区画の東西アゼの最西部に付けられていた。また溝の屈曲部の西側にはアゼが大きく弧状になる部分があり、弧の頂点の位置にも水口が確認された。北から南への給水系統と、東から西への給水系統があったとみられる。

出土遺物は破片資料が多く、図化できたものは少ないが、須恵器坏(433)と釘(M11)が耕作土中から出土している。溝や水田面に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。



第15図 水田耕作土出土遺物

(3) 2区の遺構と遺物

東谷地浅間B軽石下水田 (第17・18図 PL5)

2区の東谷地で浅間B軽石下の精査を行ったところ、谷巾が広がる発掘区南半分では、水路やアゼと平坦面を検出し、水田面として記録した。水田面を覆っていた浅間B軽石は、天仁元(1108)年に降下した浅間山起源の軽石層で、2区東谷地では厚さ20～30cmが堆積していた。

東谷地はIkラインまでは幅7m程の帯状である。谷内部の東寄りには幅1～1.5m、深さ20～25cmで溝状になっており、浅間B軽石が埋まっていた。溝の西側は帯状の傾斜した平坦面であったが、水田面を区切るためのアゼは検出されなかった。

一方、Ikラインより南側は幅14～16mに広がり、中央部は北から南へ傾斜するものの、平坦面が広がっていた。発掘区内では平坦面にアゼは検出されなかったが、谷頭の水田区画と推定される。

Ikラインより北側で、谷の東縁にあった溝は交叉して、西縁に移動している。また溝の東側にはアゼ状の盛り上がりがあり、水路として整備されたことも推定される。

出土遺物はなかった。また土壌のプラントオパール分析は実施できなかった。なお付図中の谷両側の溝群は浅間B軽石降下よりは新しく、出土する土器破片から近世以降の遺構と考えられる。

2区4号住居 (第19図 PL5・36 遺物観察表P. 273)

位置 Lq・r-10・11G

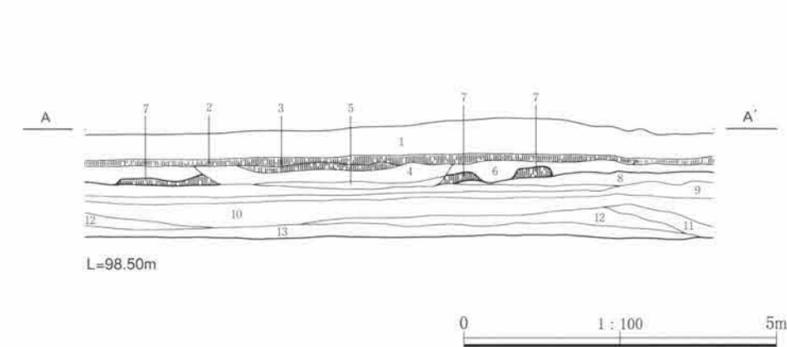
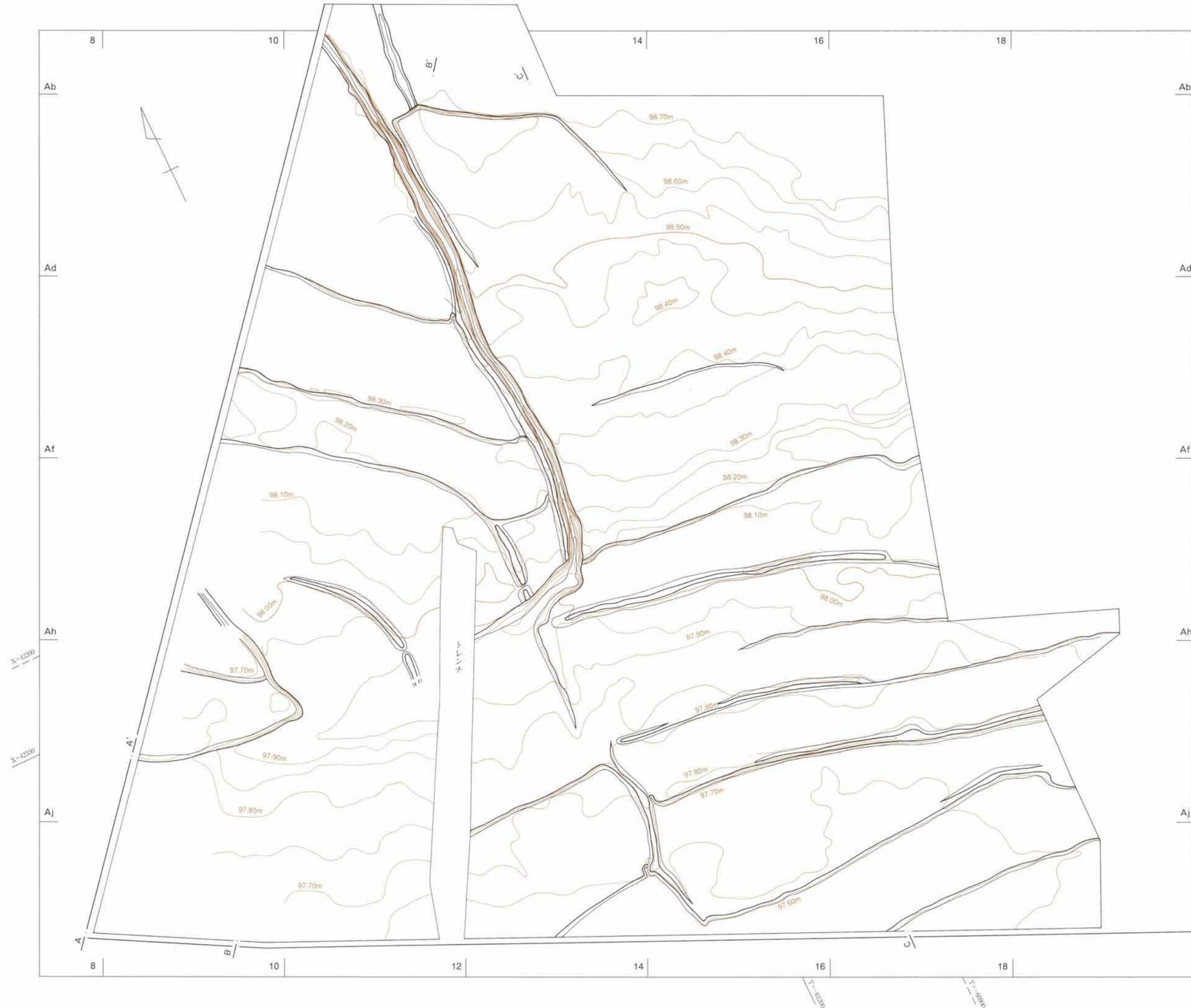
形状 隅丸正方形と推定されるが、北西隅および南東隅が攪乱によって壊されており、全形はつかめなかった。

規模 長軸4.15m 短軸3.45m 壁高0.1m

面積 12.85m² 長軸方位 N-10° -W

竈 住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.08m、燃焼部幅0.6m以上。袖の残存左右ともほとんど認められなかった。燃焼部からは土師器・須恵器破片が数片出土した。

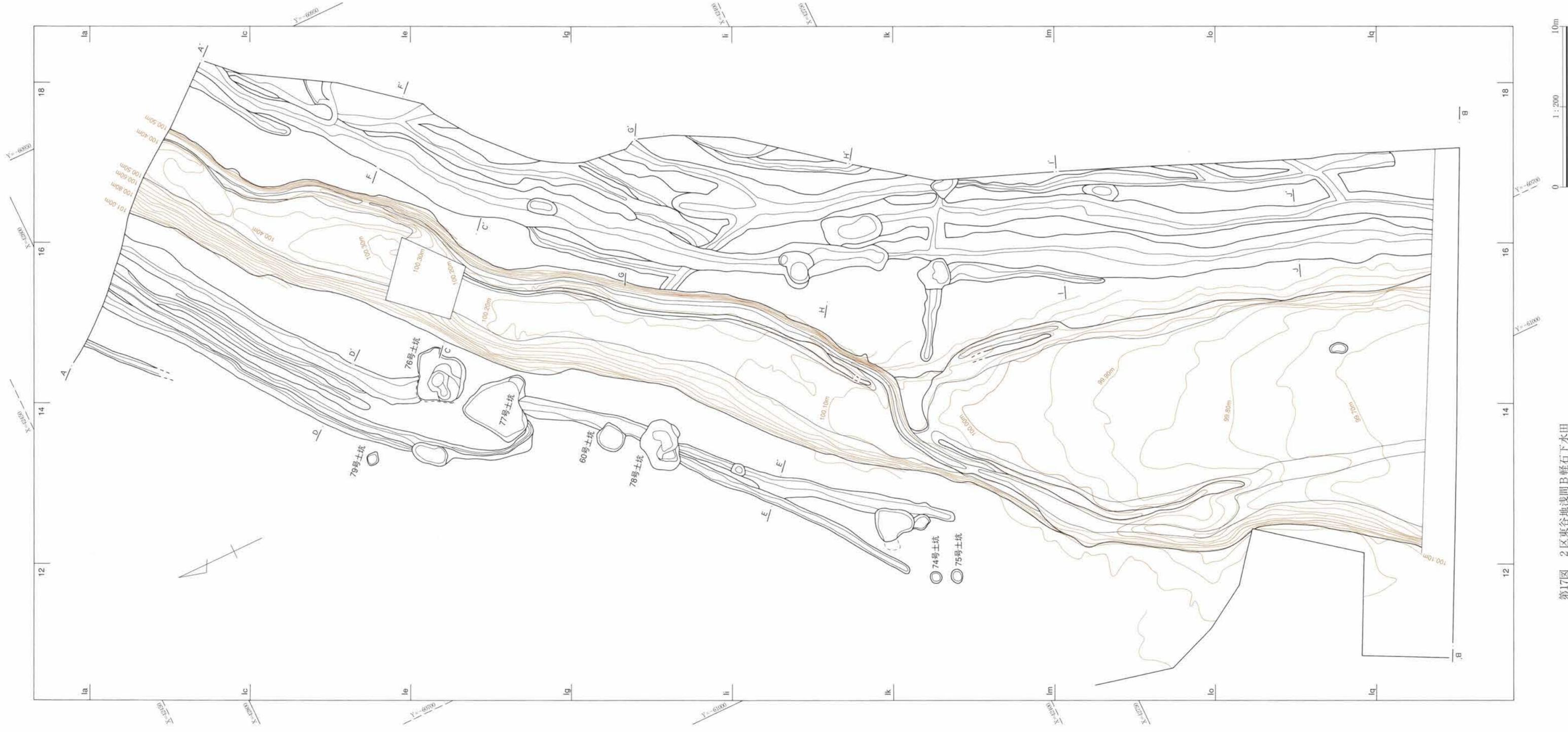
柱穴 検出されなかった。



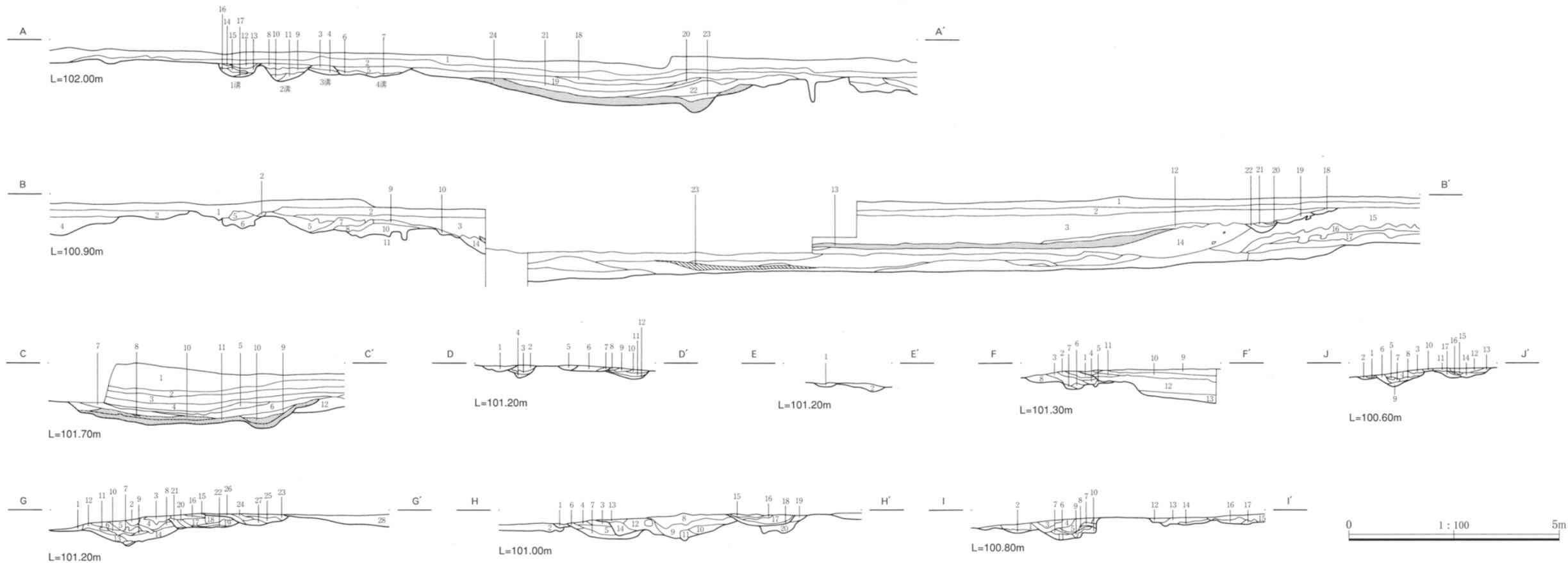
- 1区洪水層下水田 A-A'
1. 灰色土 榛名二ヶ岳軽石を含む、水田の耕作土。
 2. 砂 鉄分を多量に含み、褐色を呈する。
 3. 砂 2層との類似層。2層より鉄分凝集がやや少ない。
 4. 灰黒色土 砂礫（小粒 1×1×1cm）を多量に含む。
 5. 灰褐色土 砂礫（小粒 1×1×1cm）を多量に含み、黄褐色の粒も含む。
 6. 灰黒色土 榛名二ヶ岳軽石を多量に含む、サラサラした土層。
 7. 砂礫 小粒（1×1×1cm程）の砂礫の層。
 8. 黒褐色土 榛名二ヶ岳軽石と黄褐色の粒を多量に含む。
 9. 黒褐色土 榛名二ヶ岳軽石を多量に含み、更に黄褐色土塊を含む。
 10. 暗褐色土 榛名二ヶ岳軽石の小粒を含む、サラサラした土層。
 11. 灰黒色土 浅間C軽石を多量に含み、更に灰色砂層の塊と炭化物を含む。
 12. 灰黒色土 白色の小粒を多量に含む、やや粘性をおびた土層。
 13. 灰色土 灰白色の小粒を含み、更に鉄分凝集を含み、やや粘性をおびた土層。



第16図 1区洪水層下水田と土層断面



第17图 2区東谷地线間B 砦石下水田



2区東谷地浅間C軽石直下水田 北壁 A-A'

1. 灰色粘土 耕作土。
2. 鉄分凝集層
3. 褐色土 細かい白色軽石、ローム粒を多量に含む砂質の褐色土。
4. 黒色土 細かい白色軽石、ローム粒を多量に含む砂質の黒色土。
5. 黒褐色粘質土 細かい白色軽石、ローム粒を多量に含む。
6. 黒色土 細かい白色軽石、ローム粒、及び褐色粘質土小塊を含む。
7. 5層と砂の混土。
8. 黒褐色土 白色軽石、ローム粒を含む。
9. 黒色砂質土 浅間C軽石を含む。
10. 黒色土 軽石を含まない。
11. 黒褐色粘質土 軽石を含まない。
12. 黒色土 浅間C軽石を含む。
13. 12層と14層の混土。
14. 褐色粘質土 白色軽石を若干含む。
15. 黒色土 浅間C軽石を含む。
16. 灰褐色粘質土
17. 砂
18. 褐色土 白色軽石を含む。
19. 灰褐色土 細かい浅間C軽石を多量に含む。しまりあり。
20. 黒色粘質土 21層より黒い。
21. 黒色粘質土 白色軽石を多く含む。
22. 砂と褐色土の混土。
23. 攪乱された浅間B軽石。
24. 浅間B軽石

南壁 B-B'

1. 灰粘質土 現在の水田耕土。
2. 灰褐色土 現在の水田スキ床。軽石、砂粒を含む。赤色化した植物毛根痕が多量に含まれる。
3. 褐色土 軽石、砂粒を多量に含む。
4. 5層、9層の混土。最下部にラミナ砂層数枚あり。
5. 6層を主体とした各種混土。右岸のように明確な分離はできない。
6. 灰白色ラミナ堆積砂層
7. 灰色ラミナ堆積砂層。下面に粗いラミナ砂層が入る。
8. 灰色ラミナ堆積砂層。ローム塊を含む。
9. 灰色ラミナ堆積シルト層。6層を塊状に含む。
10. 黒褐色土 11層の混土。根による攪乱か？
11. 灰黄色粘質土 砂粒を多量に含むため、シャキシヤキ。
12. 黒褐色土 軽石、砂粒を多量に含む。
13. 浅間B軽石純層 上面に5cm程の灰紫色の火山灰をのせる。またその上部に2cm程の灰色火山灰が部分的に認められる。
14. 黒色粘質土 浅間C軽石を多量に、榛名二ッ岳軽石を僅かに含む。遺物（古式土師が主か？）を包含する。軽石は谷地右岸の立ち上がり付近では多量に含むが、下部、特に浅間B軽石下では僅かである。また、右岸立ち上がり付近では、直径1～2cm程の根（茎？）痕が多量に認められることから、浅間B軽石降下時のこの付近は、植物でおおわれていたものと思われる。浅間B軽石降下本層は、厚さ10cm程であり、その下は白色化している。
15. 黒色粘質土 軽石を全く含まない。遺物もなし。
16. 黒褐色粘質土 17層を塊状に含む。
17. 黄褐色粘質土
18. 20層を含むラミナ砂層
19. 20層を含むラミナ砂層
20. 灰黒色シルト質土
21. ラミナ砂層
22. 灰色粘質土 砂粒を多量に含む。
23. 浅間C軽石

中央 C-C'

1. 現耕作土
2. 草茶褐色土 黄色軽石。
3. 暗褐色土 白色軽石。粘性、しまりあり。
4. 暗褐色土 白色軽石。粘性、しまり3層よりやや弱い。
5. 暗褐色土 細砂を含む。
6. 灰褐色細砂
7. 灰色土 黒色粘質土。細砂ラミナ堆積。
8. 粕川テフラ 青色火山灰。
9. 軽石と火山灰の混じった層。
10. 浅間Bテフラピンク色火山灰
11. 浅間Bテフラ軽石
12. 灰褐色粘土 鉄分沈着あり。しまり、粘性強い。

西岸溝群 D-D'

1. 砂と小石。
2. 黒褐色土 砂、小石を混じる。
3. 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
4. 褐色粘質土
5. 黒褐色土 白色軽石、ローム粒を含む。
6. 黒色土 浅間C軽石を含む。
7. 黒色土 軽石を余り含まない。
8. 灰色砂
9. 黒色土 浅間C軽石を多量に含む。
10. 砂のラミナ
11. 砂と小石のラミナ
12. 砂と褐色土

E-E'

1. 砂
2. 黒色土 浅間C軽石混じり。

東岸溝群 F-F'

1. 褐色土塊とローム塊のマーブル状の堆積。
2. 黒色土 褐色粘質土塊を混じる。
3. 灰色シルトのラミナ
4. 小石と褐色土の混土
5. 黒色土 ローム粒を含む、浅間C軽石混じり。
6. 黒褐色粘質土
7. シルトと砂
8. 黒色土 浅間C軽石混じり。
9. 灰褐色粘質土 しまりあり。
10. 砂
11. 灰褐色粘質土 軽石を含まない。
12. 灰色粘質土 鉄分凝集が見られる。
13. 灰色粘質土 ローム粒を含む。斑鉄あり。

I-I'

1. 黒褐色土 細砂を含む。
2. 細砂と1層のラミナ堆積。
3. 褐色土 白色軽石を含むしまりのある砂質土。
4. 灰褐色土 ローム塊を含むしまりのある砂質土。
5. 黒褐色土 ローム塊と細かい白色軽石を含む。
6. 5層と砂の混土。
7. 4層と似るが、ロームの塊が大きい。
8. 灰色シルトと5層の混土。
9. 灰色シルトと砂の混土。
10. 灰色シルト 5層を少し含む。
11. 灰色シルト
12. 黒色土 砂質。
13. 小石を含むラミナ堆積。
14. 砂と褐色土のラミナ。
15. 灰褐色土 ローム塊を含む。
16. 小石を含む砂。
17. 黒褐色土 砂を含む。

G-G'

1. 砂
2. 黒色土 浅間C軽石を多量に含む。
3. 2層の塊とローム塊の混土。
4. 灰褐色土と軽石を含まない黒色土の混土。
5. 灰色シルト
6. 黒色土 軽石をほとんど含まない。
7. 砂と灰褐色土の混土。
8. シルトと小石のラミナ。
9. 6層と同じ。
10. 灰白色シルト
11. 6層と同じ。
12. 6層と灰白色シルトのラミナ。
13. 灰色シルトと砂と黒灰色のラミナ。
14. 灰色シルト 小石や砂を含む。
15. 黒色土 浅間C軽石を含む。
16. 15層と灰色シルトの混土。
17. 黒色土 白色軽石を少量含む。
18. 砂と灰白色シルトと17層のラミナ。
19. ローム塊、17層の塊、小石、砂の混土。
20. 灰褐色シルト
21. 20層と砂のラミナ。
22. ローム粒、17層の小塊と砂の混土。
23. 灰白色シルト ローム粒を含む。
24. 灰白色シルト
25. ローム塊、砂のラミナ。
26. 黒褐色粘質土 ローム塊を含む。
27. 黒褐色粘質土 砂、シルトの混土。
28. 耕作土

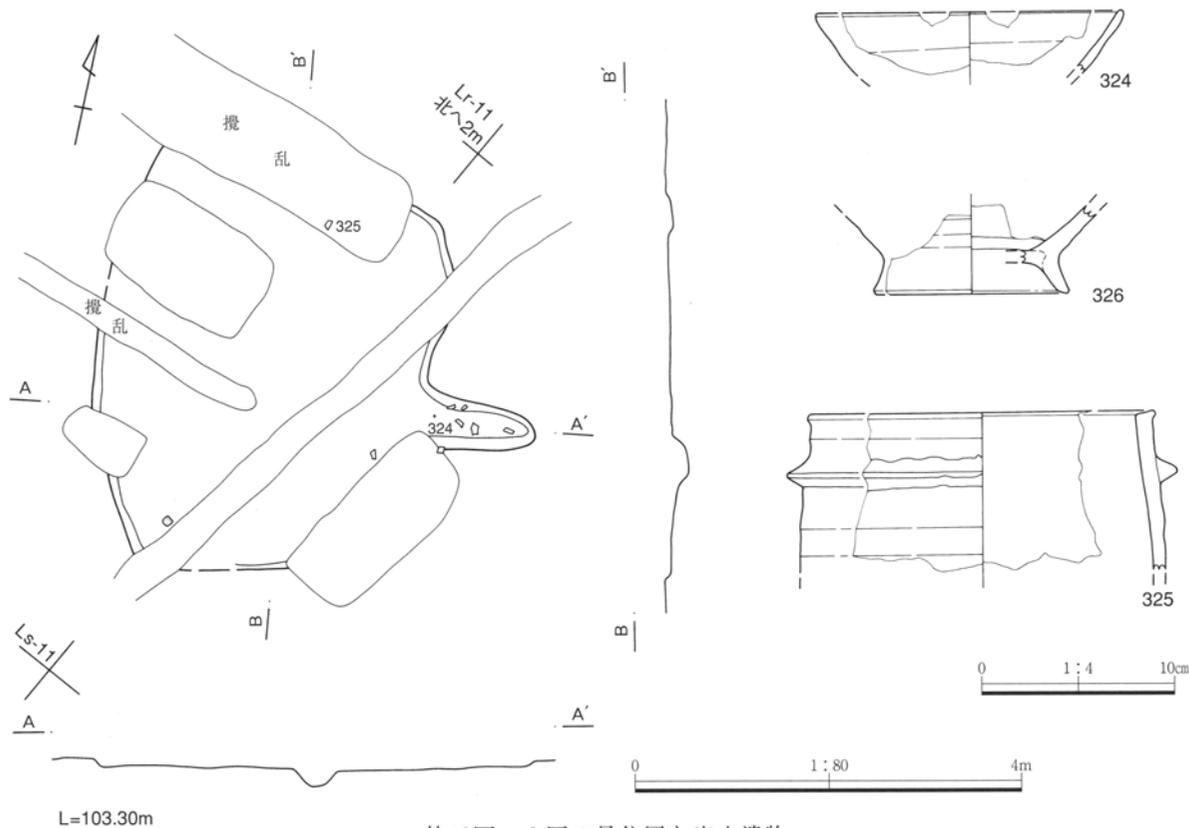
H-H'

1. 砂
2. 粘質黒色土 浅間C軽石を含む。
3. 灰色シルト ローム粒、灰褐色土塊を含む。
4. 黒色土 白色軽石を含む。砂質。
5. 砂と7層のラミナ。
6. シルトの塊を含む4層。
7. 灰色シルト
8. 白色軽石を含む黒色土と、砂と灰色シルトの斑状の堆積。
9. 砂と小石のラミナ。
10. 灰色土 褐色粘質土塊を含む。
11. 10層と砂のラミナ。
12. 黒色粘質土 シルト粒やローム粒を含む。
13. 小石を含む砂。
14. 砂と小石と灰色シルトのラミナ。
15. 砂のラミナ
16. 灰白色シルト
17. 黒色砂質土 シルトの塊を含み、白色軽石を混じる。
18. 砂のラミナ
19. 灰褐色土 砂とローム粒を含む。
20. ローム塊、小石、砂の混土。

J-J'

1. 黒灰色土 やや砂質。
2. ローム粒と砂の混土。
3. 黒色土 白色軽石を含む。
4. 白色軽石及びローム粒を含む、黒色土と灰褐色シルト層の混土。
5. ローム塊。
6. 黒褐色土 白色軽石と少量のローム粒を含む。
7. ローム粒を多量に含む。4層。
8. 灰褐色シルト
9. 砂のラミナ堆積。
10. 黒褐色土 白色軽石を多量に含む。
11. 褐色土 ローム大粒と砂を含む。
12. 砂のラミナ堆積。
13. 砂のラミナ堆積。砂粒は12層より大きい。
14. 砂のラミナ堆積。砂粒は13層より大きい。
15. 砂のラミナ堆積。砂粒は14層より大きい。
16. 灰褐色シルト
17. 砂のラミナ堆積。

第18図 2区東谷地浅間B軽石直下水田土層断面



第19図 2区4号住居と出土遺物

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

床面 多くの攪乱が床面を壊しているが、残存範囲では床面は平坦である。

遺物と出土状況 遺物の出土は少ない。竈燃焼部に若干集中する。須恵器碗(324)は竈使用面上2.5cmで出土した。須恵器羽釜(325)は北壁を壊す攪乱内から出土したが、時期的に住居に伴うと考えた。須恵器高台付碗(326)は住居埋没土中から出土した。

図化できた遺物のほかに土師器破片17点、須恵器破片4点が出土した。

所見 出土遺物から10世紀中葉の住居と考えられる。

2区7号住居 (第20図 PL5・36 遺物観察表P. 273)

位置 L o・p-4・5 G

形状 方形と推定されるが、北壁が調査区域外で検出できなかった。

規模 東西軸3.7m 南北軸3.0m以上 壁高0.29m

面積 測定不可 長軸方位 N-89°-E

竈 住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。燃焼部東端は攪乱によって壊されており、竈の全形は確認できなかった。確認長0.8m、燃焼部幅0.8m。袖の残存長は向かって左側が0.34m、右側の残存は認められなかった。残存する燃焼部は0.62m壁外に出ている。燃焼部には礫が数点と、土師器・須恵器破片が集中して出土した。

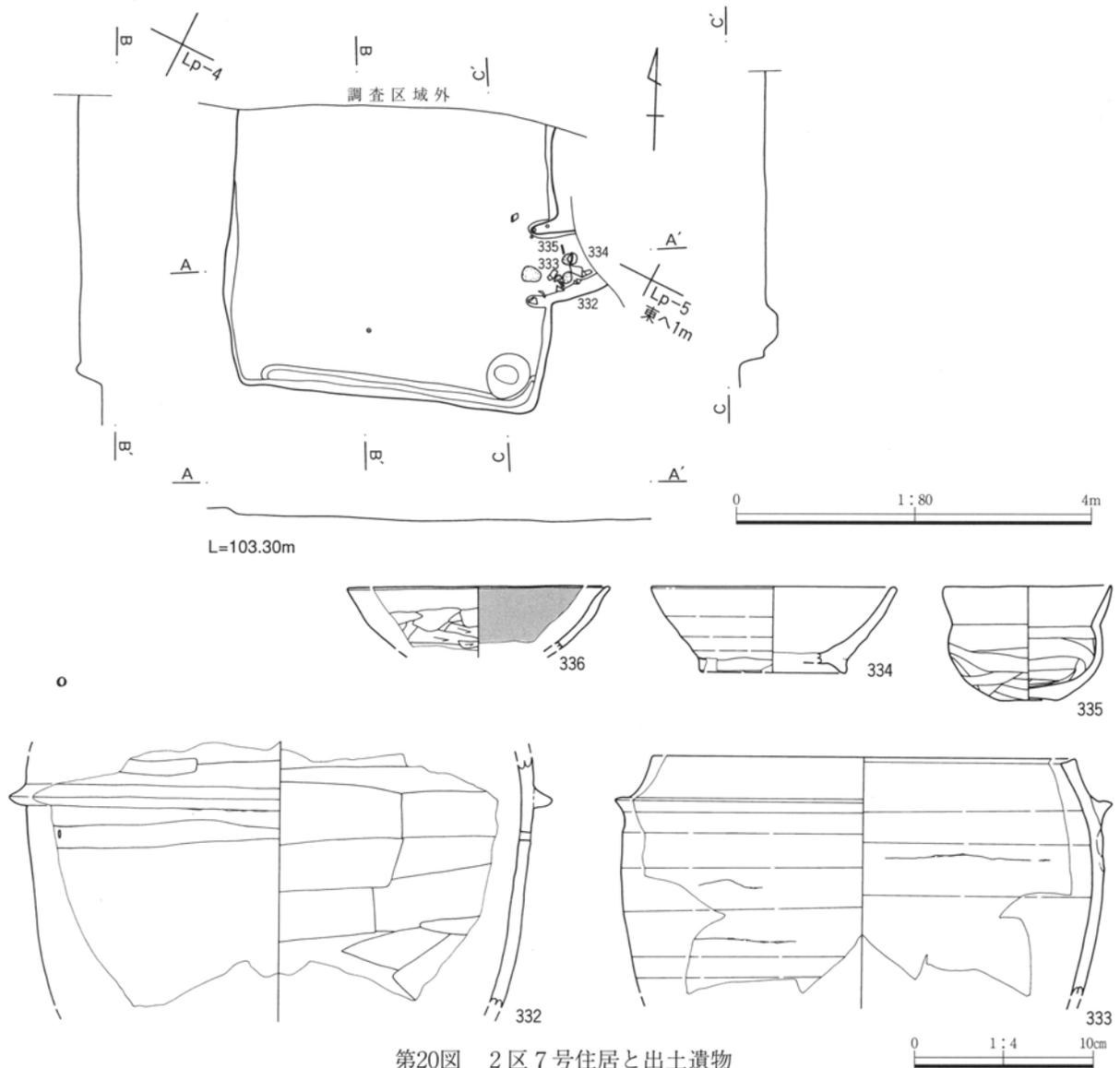
柱穴 検出されなかった。

周溝 南壁沿いのみ周溝が掘られていた。概ね幅は20cm、深さは4cmである。

貯蔵穴 南東隅に長径0.52m、短径0.48m、深さ0.17mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

床面 床面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 竈に遺物が集中して出土した。燃焼面から礫が出土しているが、支脚等の竈の施設として据えられたとの確認はとれなかった。土師器羽釜(332)と須恵器羽釜(333)は竈燃焼部使用面直上で出土した。須恵器碗(334)、土師器鉢(335)は竈使用面下から出土した。土師器坏(336)は貯蔵穴埋没



第20図 2区7号住居と出土遺物

土中から出土した。これらの図化できた遺物のほかに土師器破片28点、須恵器破片1点が出土した。また、貯蔵穴から鉄滓(M16、分析No3)が、埋没土中から鉄塊(M17、分析No2)、鉄滓(M18、分析No4)、羽口破片(M19、分析No5)が出土しているが、鉄生産関連遺構は検出されなかった。

所見 出土遺物から10世紀中葉の住居と考えられる。竈使用面下から出土した須恵器椀(334)、土師器鉢(335)はそれぞれ9世紀後半、7～8世紀の土器であるが、使用面直上に残された10世紀中葉の新しい土器を、本住居の時期とした。

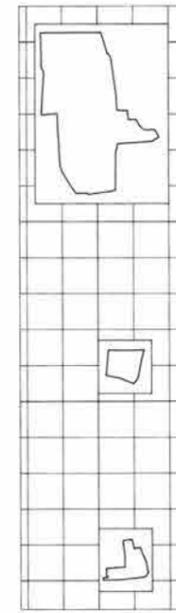
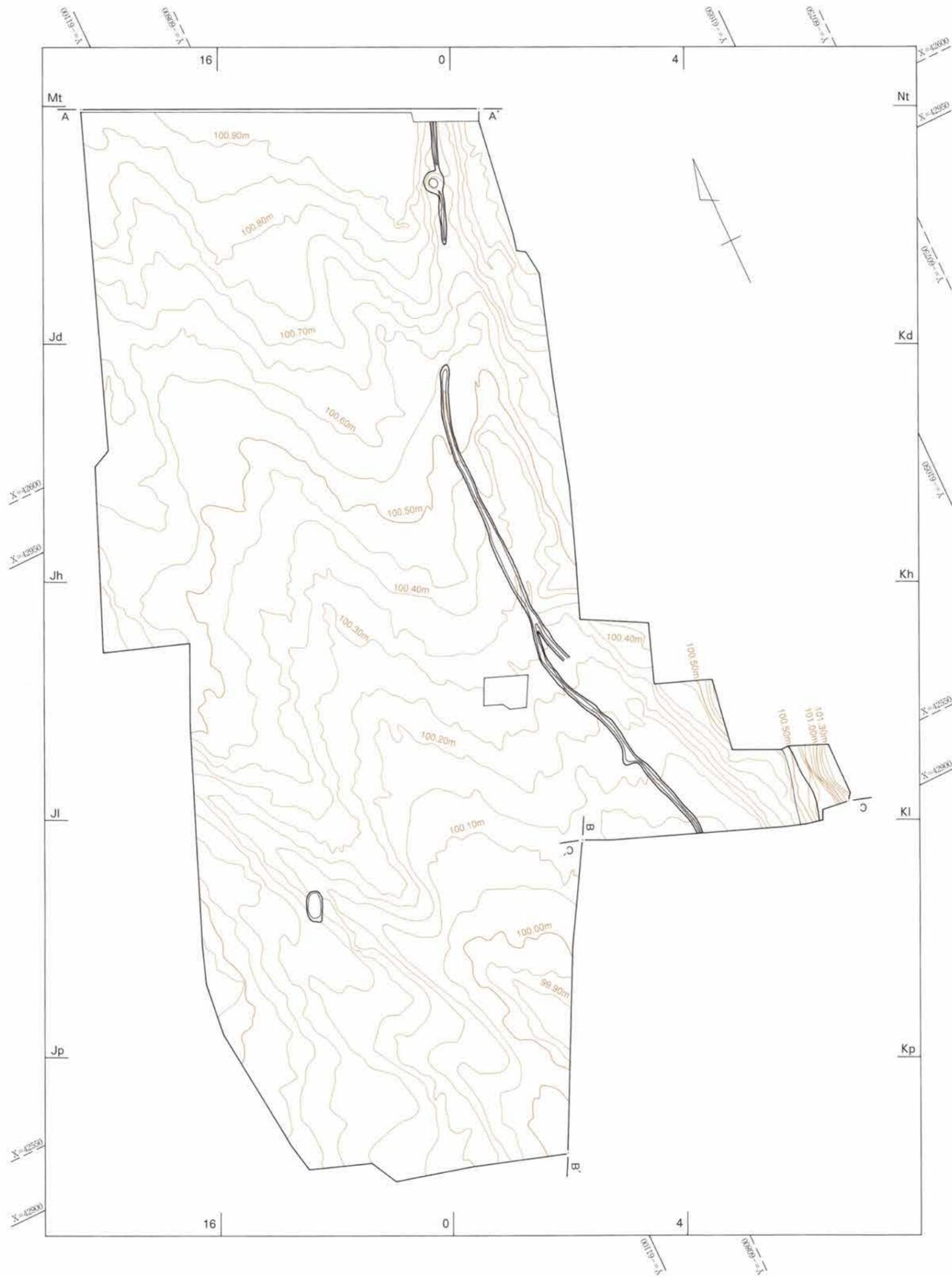
また土師器羽釜(332)には補修孔が開けられている。

(4) 3区の遺構と遺物

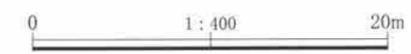
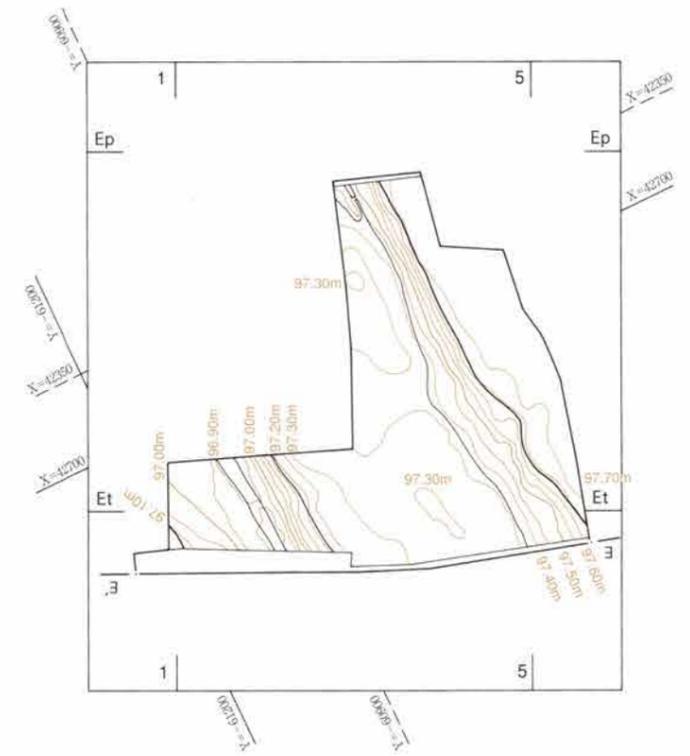
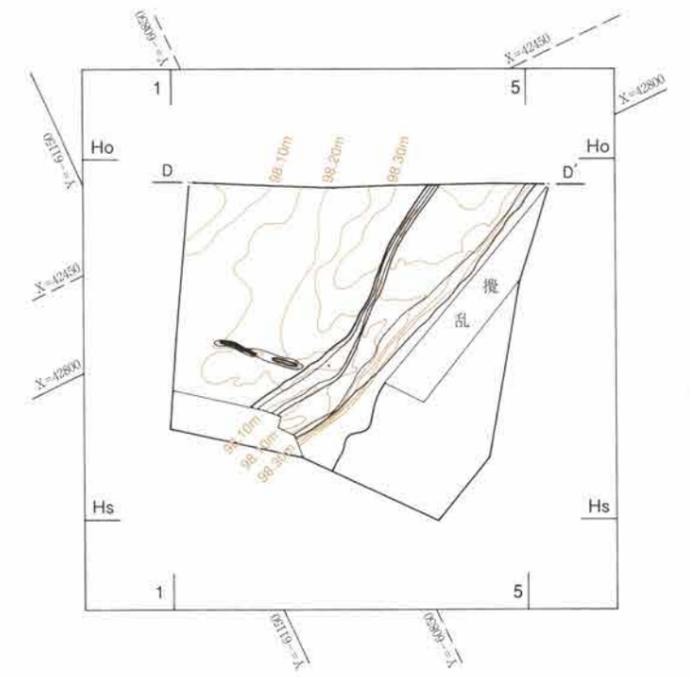
浅間B軽石下面 (第21・22図 PL6・7)

3区は、1・2区のある台地西側の低地内の発掘区で、3区画が調査された。北から北区-中区-南区と呼ぶ。いずれの発掘区でも厚さ5～15cm堆積した浅間B軽石層の直下面を精査したが、水田面との確証は得られなかった。また出土遺物は無い。

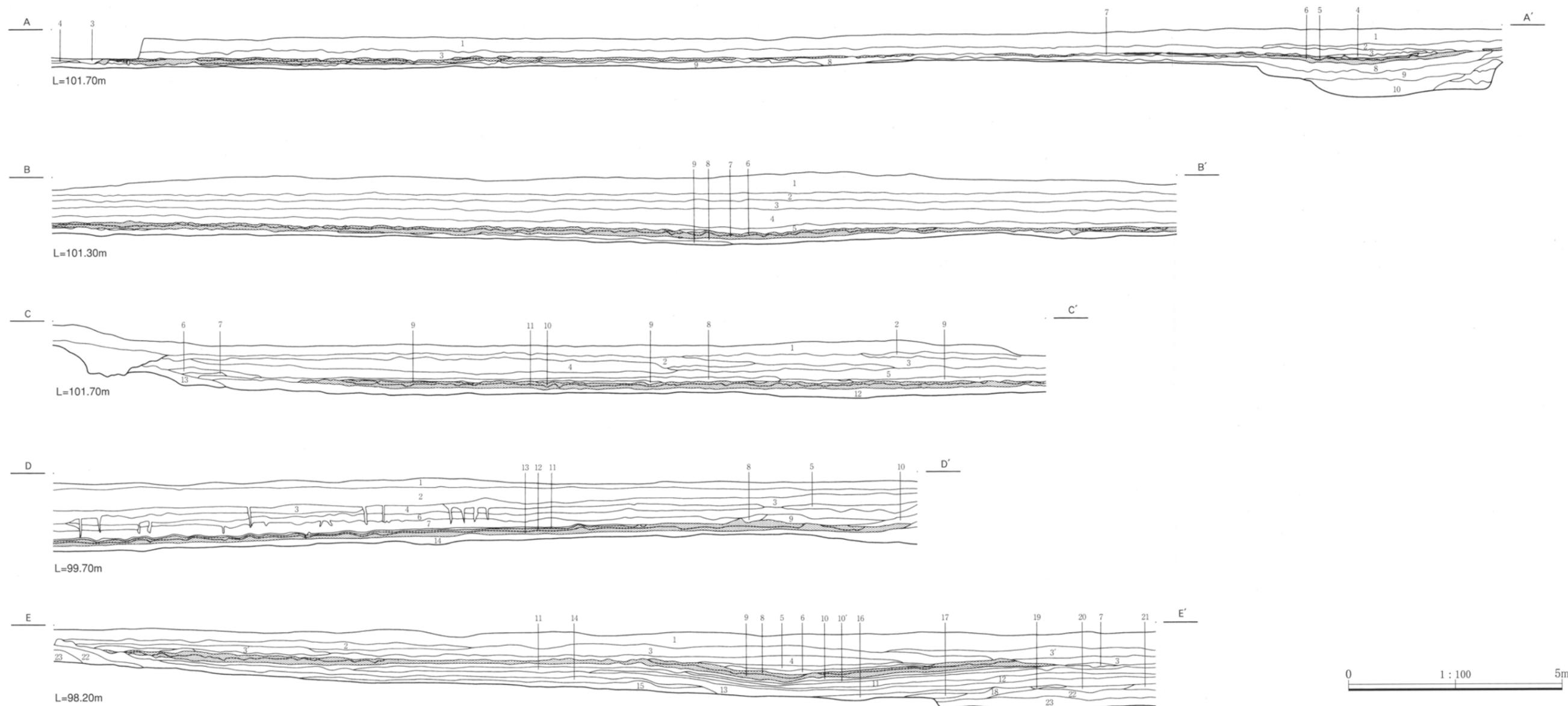
3北区は北から南に傾斜する緩斜面で、一部に氾濫礫層が露出していた。東部には溝状の凹みが確認できたが、水田区画等のものとは判断できなかった。3中区は東側に台地縁辺の段が確認でき、浅間B軽石は台地上には堆積していなかった。東部と南部に溝状の凹みが確認できたが、水田区画等のものとは



3区発掘区 位置図
S=1/4000



第21図 3区浅間B軽石下面



3区浅間B軽石下面 北部北壁 A-A'

1. 現耕作土
2. 灰褐色土 白色軽石 (2~5mm) を含むたたくしまった土層。
3. 褐色土 鉄分沈着が見られる。細砂混じり。しまり強い。
4. 灰茶色土 白色粘土塊混じり。やや粘質。
5. 浅間Bテフラピンク色火山灰
6. 浅間Bテフラ軽石
7. 茶褐色土 鉄分沈着が見られる。小石混じり。しまり弱い。
8. 暗褐色土 小礫を含むさらさらした土。
9. 灰白色砂礫 主に砂多い。
10. 灰白色砂礫 砂主体。

北部南壁 B-B'

1. 表土
2. 茶褐色土 鉄分凝集が著しい。
3. 暗褐色土 鉄分をわずかに含む。白色軽石、砂を含む。粘性、しまりあり。
4. 暗褐色土 白色軽石、黄土粒 (2~5mm) を含む。わずかに小石混じり。しまりあり。
5. 褐色土 鉄分沈着見られる。白色軽石を含む。粘性、しまりあり。
6. 浅間Bテフラピンク色火山灰
7. 浅間Bテフラ軽石
8. 黒色土 小礫混じり。黄土色塊をわずかに含む。粘性あり。
9. 灰色砂礫層

北部東壁 C-C'

1. 表土
2. 茶褐色土 鉄分凝集。
3. 暗褐色土 鉄分をわずかに含む。白色軽石、砂を含む。粘性、しまりあり。
4. 茶褐色土 鉄分凝集。白色軽石を含む。
5. 暗褐色土 白色軽石、黄土粒 (2~5mm) を含む。わずかに小石混じり。しまりあり。
6. 褐色土 鉄分凝集。白色軽石を少量含む。
7. 茶褐色土 鉄分凝集。
8. 褐色土 鉄分沈着見られる。白色軽石を含む。粘性、しまりあり。
9. 8層に粕川テフラの青色火山灰塊を含む。
10. 浅間Bテフラピンク色火山灰
11. 浅間Bテフラ軽石
12. 黒色土 小礫混じり。黄土色塊をわずかに含む。粘性あり。
13. 褐色土

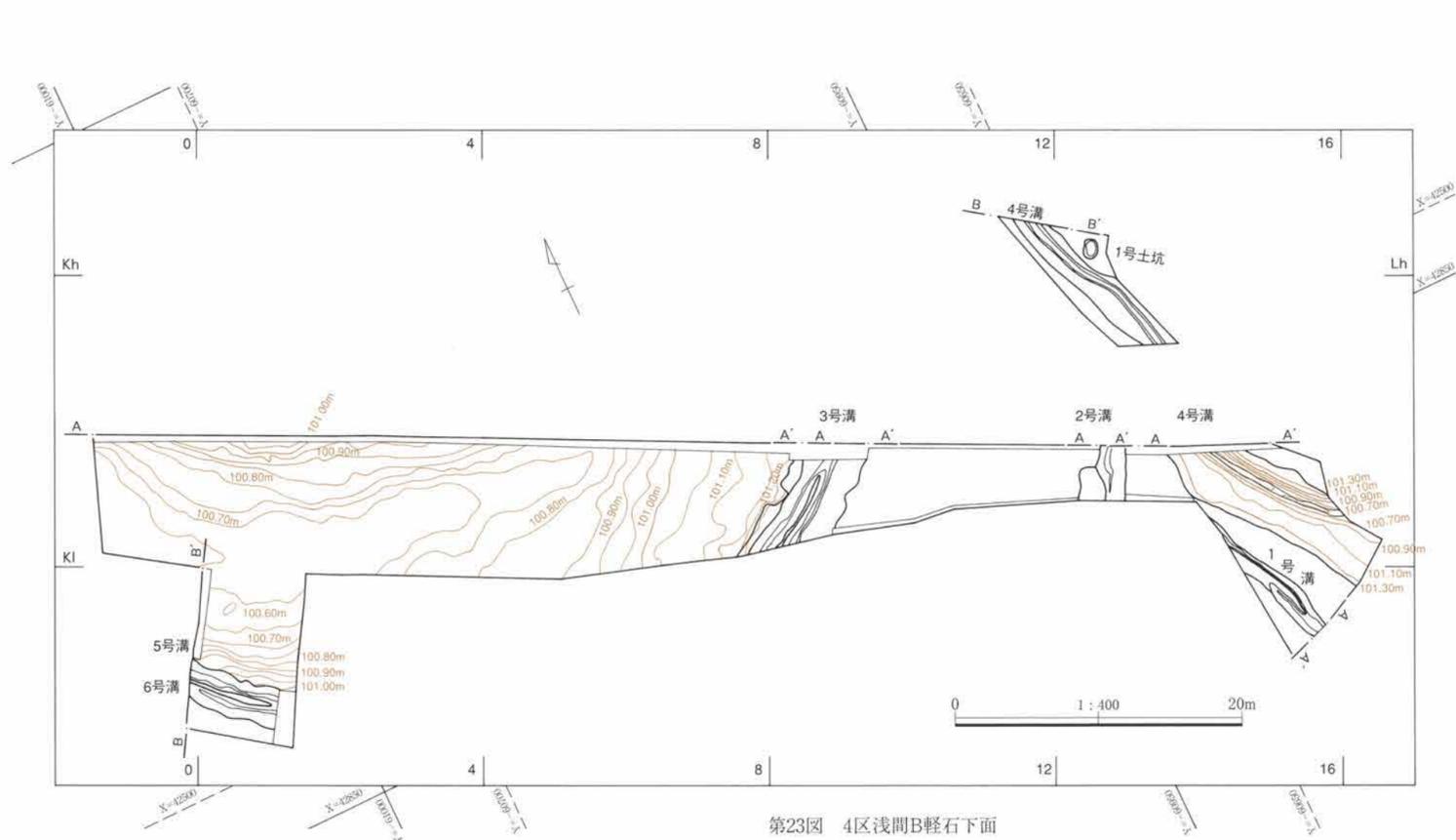
中央北壁 D-D'

1. 表土
2. 灰褐色土 鉄分凝集が上部に多く見られる。
3. 黄茶色土 黄土粒 (2~5mm)、白色軽石を含む。鉄分凝集。
4. 褐色土 黄土粒 (2~5mm)、白色軽石を含む。(やや茶色がかかる)
5. 黄褐色土
6. 黄茶色土 黄土粒 (2~5mm)、白色軽石を含む。細砂塊を含む。
7. 褐色土 黄土粒 (1~3mm)、白色軽石を含む。細砂塊を含む。斑鉄を含む。
8. 灰色細砂 褐色土塊状に入る。白色軽石含む。
9. 褐色土 灰色細砂、塊、白色軽石、小石を含む。
10. 灰白色細砂
11. 褐色土 浅間Bテフラ塊を含む。
12. 浅間Bテフラピンク色火山灰
13. 浅間Bテフラ軽石
14. 黒色粘質土 厚さ1cmほどの灰褐色粘質土が間層が入る。

南部南壁 E-E'

1. 表土
2. 褐色土 白色軽石、黄土粒、細砂を混じる。
3. 暗褐色土 白色軽石、黄土粒含む。粘性、しまりあり。
- 3'. 黒褐色土 3層より鉄分沈着がやや多く見られる。
4. 褐色土 (ややピンクがかかる) 灰塊を含み、粒が緻密。
5. 褐色土 細砂を含む。粘性あり。
6. 暗灰褐色粘質土 暗灰色粘質土塊を多量に含む。
7. 黄褐色土 浅間B軽石を混じる。
8. 浅間Bテフラピンク色火山灰
9. 浅間Bテフラ軽石
10. 黒色粘質土 灰白色粘質土、間層に1cm程の厚さで入る。
- 10'. 黒色粘質土
11. 灰色粘質土 灰白色粘質土、黒色粘土が塊状に入る。
12. 灰白色粘質土
13. 暗灰色粘質土 灰白色粘質土が帯状に所々はいる。
14. 黒色砂質土 やや粘性あり。(粒径1~3mm)
15. 灰色砂質土
16. 白色粘土
17. 灰褐色粘土 礫 (5~10cm) 細砂ラミナ状にはいる。
18. 黒褐色粘土
19. 灰褐色粘質土
20. 灰茶褐色砂 黒色粘土、灰白色粘土、細砂、小礫がラミナ状にはいる。
21. 黒褐色粘土
22. 灰褐色粘土
23. 灰色微細砂

第22図 3区浅間B軽石下面土層断面



第23図 4区浅間B軽石下面

4区浅間B軽石下面 西低地 A-A'

1. 耕作土
2. 現耕作土の斑鉄層。
3. 灰褐色土 白色軽石と黄色砂質土の小塊、砂粒を含む。斑鉄を帯びる。
4. 黒褐色土 5層に似るが、斑鉄が著しい。
- 4' 黒褐色土 4層よりやや黒い。
5. 黒褐色土 白色軽石と黄色砂質土粒を含む。砂質。
6. 黒褐色土 白色軽石と多量の浅間B軽石、黄色砂質土粒を含む。
7. 浅間B軽石純層。
8. 斑鉄を帯びた9層。
9. 黒色粘質土 浅間C軽石、FAを含む。
10. 灰黒色粘質土 浅間C軽石を含む。
11. 灰白色粘土 軽石をまったく含まない。
12. 灰白色粘土粒を含む。10層。
13. 灰白色粘土 紫がかった灰白色粘土。
14. 灰白色粘土 白色粘土の小塊を含む。13層。
15. 白色砂壤土
16. 黒褐色土 浅間C軽石を多量に含む。10層よりやや粘質。
17. 黒褐色土 浅間C軽石を多量に含む。
18. 灰褐色粘土 浅間C軽石を多量に含む。
19. 17層より浅間C軽石を多く含む。
20. 浅間C軽石
21. 砂

4区1号溝 A-A'

1. 耕作土
2. 黒色土 黄白色砂壤土小塊を含む。
3. 黒褐色砂質土
4. 灰色シルト
5. 砂礫

4区2号溝 A-A'

1. 耕作土
2. 灰褐色シルト
3. 灰褐色シルト 砂礫のラミナを含む。
4. 灰色シルト
5. 砂礫

西低地 B-B'

1. 暗褐色土 耕作土。
2. 暗褐色土 耕作土。鉄分凝集する部分あり。
3. 暗褐色土 細砂粒をまんべんなく含む。
4. 細砂質土 鉄分凝集が著しい。ラミナ状を呈する部分もある。
5. 小円礫と砂の混土層。円礫には軽石も含まれる。
6. 砂質土 小円礫は5層より少なくなる。
7. 暗茶褐色砂質土 鉄分凝集している。
8. 小円礫と砂の混土層。鉄分凝集している。
9. 砂質土と茶褐色ローム(二次堆積)の混土層。
10. 暗褐色土 赤褐色土粒を含む。
11. 黒褐色土 やや灰色味をおびる。
12. 暗褐色土 しまりなし。
13. 浅間B軽石層
14. 黒褐色土 粘性。
15. 黒褐色土 暗灰色味強い。
16. 黒褐色土 7層に類するが、浅間C軽石をまばらに含む。
17. FA層
18. 黒褐色土 浅間C軽石混土層。灰色味をおびる。
19. 浅間C軽石層
20. 黒褐色土 6層に比して、青みをおびる。
21. 黒褐色土 やや茶色味をおびる。
22. 黒褐色土 13層に類する。
23. 黒褐色土 13層、14層に比して、黒味強い。混入物なし。

4区3号溝 A-A'

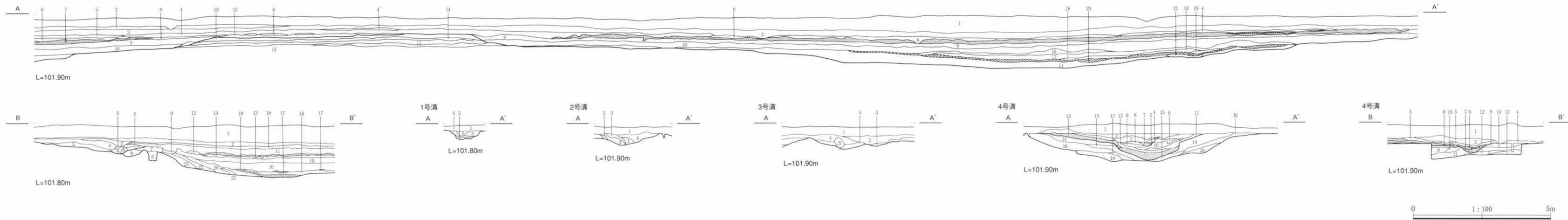
1. 耕作土
2. 灰褐色土 黄色砂壤土小塊を含む。砂質。しまりなし。
3. 灰褐色シルト しまりなし。
4. 灰褐色土 白色軽石と黄色砂質土の小塊、砂粒を含む。斑鉄を帯びる。
5. 砂礫

4区4号溝 A-A'

1. 耕作土
2. 斑鉄層
3. 灰褐色土 黄色砂質土小塊と白色軽石を含む。しまりあり。
4. 黄色砂質土塊
5. 褐色土 白色軽石を含む。砂質。
6. 砂のラミナ。
7. 黄白色砂
8. 5層と砂のラミナ。
9. 砂礫のラミナ。
10. 黒褐色粘質土 赤褐色の鉄分を凝集。
11. 砂
12. 青緑色の粘土を扶む砂のラミナ。
13. 浅間B軽石
14. 黒色粘質土 浅間C軽石、FAを含む。
15. 灰褐色シルト ローム粒を含む。
16. 灰黒色粘土 浅間C軽石を含む。
17. 砂
18. 灰白色粘土 軽石をまったく含まない。

4区4号溝 B-B'

1. 表土
2. 赤茶色土 斑鉄多量にあり。
3. 黄褐色土 黄色粘土塊、細砂ラミナ状にはいる。軽石混じり。
4. 黒褐色土 浅間B軽石を混じる。
5. 黒褐色土 浅間B軽石を混じる。砂質土。
6. 浅間Bテフラピンク色火山灰
7. 浅間Bテフラ軽石
8. 黒色粘質土
9. 黒色粘質土 榛名二ヶ岳軽石を多量に含む。
10. 灰褐色砂質土 浅間C軽石を多量に含む。ラミナ見られる。
11. 灰色砂質土
12. 灰黄白色砂礫
13. 灰黄色粘質土 浅間C軽石、細砂を多く含む。



第24図 4区浅間B軽石下面土層断面

判断できなかった。3南区は幅17m程の帯状の凹地に浅間B軽石が堆積していた。ここでも東側の台地上には浅間B軽石は堆積していなかった。谷の西側はさらに溝状に落ちこむ凹地になっていた。中央の平坦面を区切るアゼ等の施設は検出されなかった。

(5) 4区の遺構と遺物

西谷地浅間B軽石下面 (第23・24図 PL8)

4区は、道路新設の細長い発掘区である。中央から東半分、L区の8ラインから東はローム台地で、中近世以降と考えられる1～3号溝が検出された。また浅間B軽石で埋まった4号溝が発掘区東端で検出された。これについては後述する。

一方、8ラインから西側は低地になっており、地表下85cmで厚さ15cmの浅間B軽石、その下位に60cmの間層を挟んで厚さ10cmの浅間C軽石が堆積していた。調査では、天仁元(1108)年に降下した浅間B軽石層の直下を精査したところ、北から南、東から西に傾斜する緩斜面を検出した。この低地にアゼや水路等の施設は検出されなかった。低地の南端には5号・6号溝が検出されたが、浅間B軽石で埋まった溝ではない。時期は不明である。

4区4号溝 (第23・24図 PL8)

4区の東端で、浅間B軽石に埋まった4号溝を検出した。幅2～2.3m、深さ0.5mで、走向はほぼ南北方向である。北側にこの溝の延長を調べるために拡張して調査したところ、L区gラインまでその延長を確認することができた。遺物はほとんど出土しなかった。

荒砥宮田遺跡の周辺では、浅間B軽石で埋まった溝は4遺跡で検出されている。これらの溝は台地上を広域に掘られており、何らかの地域開発が古代に行われたことが推定される。これらの空間的な分析は後述する。

2. 中近世

(1) 概要

1区

1区では、発掘区の全域に中近世の遺構が、古墳時代遺構と重複して検出された。1区(付図1 PL22・23)で検出された遺構は、掘立柱建物29棟、溝88条、井戸67基、土坑338基、竪穴状遺構30基、土坑墓2基である。各遺構の時期は出土遺物から推定することが可能なものもあるが、ほとんどは中世から近世の遺物が混在して出土しており、遺構の時期を特定することは困難である。したがって本書では中近世の遺構として報告した。

1区は北側ほぼ2/3が台地部、南側1/3が低地部である。台地部はそのほぼ中央にある40・41号溝を境にして、さらに北側と南側に分割される。遺構の分布は1区全体におよぶが、台地部の北半部に遺構が密集している。台地部は方形に区切るように溝が掘られ、多くの掘立柱建物・井戸・土坑が溝内部あるいは溝と重複して掘られている。溝内部の施設として、個々の区画単位ごとの遺構群を把握することは、困難であった。低地部にかかる南部には目立った溝はないが、台地部との境に15号溝と18号溝が掘られている。

掘立柱建物は、調査時には9棟しか検出できなかったが、整理作業時に1/50の柱穴平面図を詳細に検討した結果、20棟の建物跡を追加確認することができた。最も北側の地域に溝内部の施設として19棟が密集し、中央の部分には散在している。また低地部の1区南西部に6棟の密集部がある。本書ではこれらの分布状況から、掘立柱建物を溝内部・散在部・南集中部の3地区に分けて記述する。これらの掘立柱建物は主軸方位によって4群の建物群にまとめることができるが、その状況は隣接する荒砥前田遺跡・荒砥諏訪西遺跡の建物群との関連も含めて、第7章で詳述した。

井戸は台地部全域に分布する。67基のうち、49基は台地北半に集中しており、溝で区切られた掘立柱

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

建物群（屋敷）の付属施設として井戸が掘られたものと推定できる。しかしどの建物群と同時に使用されていたかまでを特定することまではできなかった。井戸はすべて円形で、素掘りである。周囲に上屋等を想定させる構造を検出した井戸はない。

土坑は調査時には338基の土坑を調査・記録したが、埋没土層の確認や遺構図面の整理作業を経た段階で40基の土坑を、遺構から除外した。本書では282基の土坑を一覧表で示し、そのうち272基の遺構図面を掲載した。土坑は平面形によって円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形・方形・長方形・細長方形に分けられる。遺構図はこの形態ごとにまとめた。出土遺物はあまり多くない。

また調査時に土坑とした1区99号・153号土坑は、それぞれ6点、2点の古銭を出土しており、人骨その他の出土は見られないが、土坑墓として報告した。

竪穴状遺構は30基が検出されたが、大型円形のもの（3号・7号）は土坑として報告した。また、1号・2号は大型方形、その他は隅丸方形で突出部をもつものである。そのうち24基が43号溝の東側に並ぶように集中し、2基が1区北西部の62号溝東側にある。竪穴状遺構と42号溝との新旧関係は20号竪穴状遺構のみ記録できたが、溝の方が新しい。この竪穴状遺構群は入口と考えられる突出部を東側にしており、発掘区域外である東側の空間から使用されていたものであろう。方形に区画された屋敷の存在が想定できよう。

竪穴状遺構の機能は未解明である。18号や21号、24号竪穴状遺構のように日常什器が出土するものもあれば、28号竪穴状遺構のように古銭が出土して墓としての機能を推定させるものもある。形態や大きさも一様でなく機能を明確にすることは困難である。

土坑墓は、前述のように土坑として記録した2基の土坑を、出土遺物から土坑墓と判断した。1区では墓と確定できるのは、この2基のみであり、2区のように墓域を形成しているというような状況ではない。これら2基の土坑墓は1区北半遺構密集部の南西隅の近接した位置にある。出土遺物はいずれも

古銭で、永楽通寶を含むことから、15世紀以降の墓と考えられる。

1区には、中近世の遺構が多く重複し、出土遺物も混在しており、遺構の年代を確定するのが困難であった。特に北半の密集部は屋敷遺構が想定されるものの、掘立柱建物とその他の付属遺構の変遷を詳細に辿ることができるような成果は得られなかった。

1 北区

1 北区は1区の北側に連続する小発掘区で、土坑8基、溝4条を出した。土坑はいずれも方形で、1区で検出した形態と同様なものである。

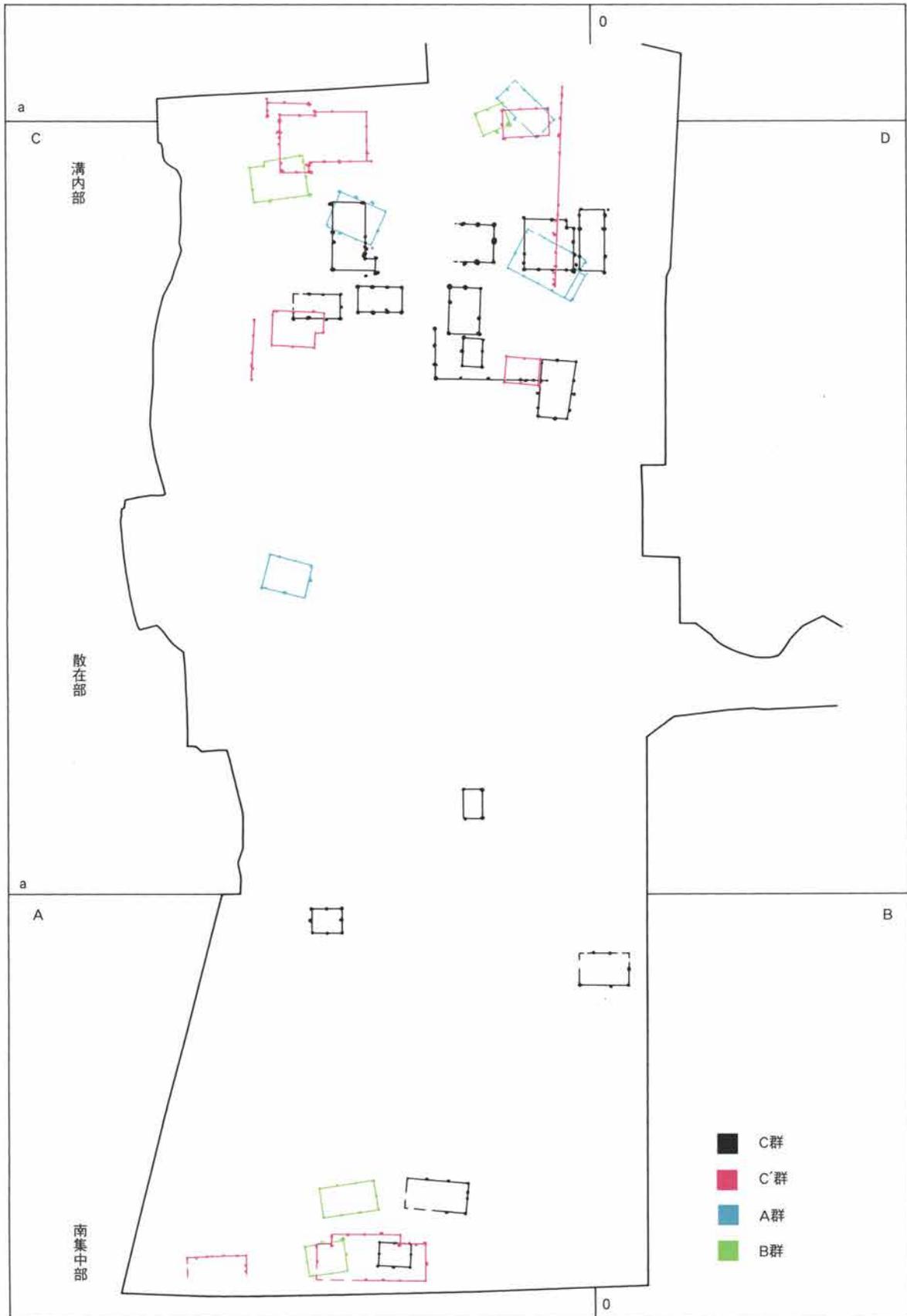
2 区

2区は1区と小支谷を隔てて北側にある台地上の発掘区である。中近世と考えられる遺構は、溝1条、土坑69基を検出した。このうち、炭化材や焼人骨が検出された7基は火葬跡と特定できるものである。また21基の土坑は骨・歯・古銭・五輪塔のいずれかが出土したことから土坑墓とした。残りの38基は墓としての根拠が希薄であると考え土坑として報告した。しかし出土遺物がないだけで、墓坑としたものと形態が酷似しているものがあることも事実であり、検討を要する。また1区で検出された突出部のある竪穴状遺構も1基検出されている。

2区には古墳時代前期および古代（10世紀代）の住居群が検出されているが、それ以降中世まで明確な土地利用は不明である。中世以降、1区と同様な屋敷としての土地利用でなく、墓域となったものと考えられる。

4 区

4区では浅間B軽石を埋没土の中位に挟む1号溝の北側延長を調査するため、拡張区を設定して調査した。ここでは1基の土坑を検出したが、時期は不明である。4区では台地上で6条の溝を検出したが、浅間B軽石より新しいこと以外、時期や性格についての所見は得られなかった。



第25図 1区の掘立柱建物位置図

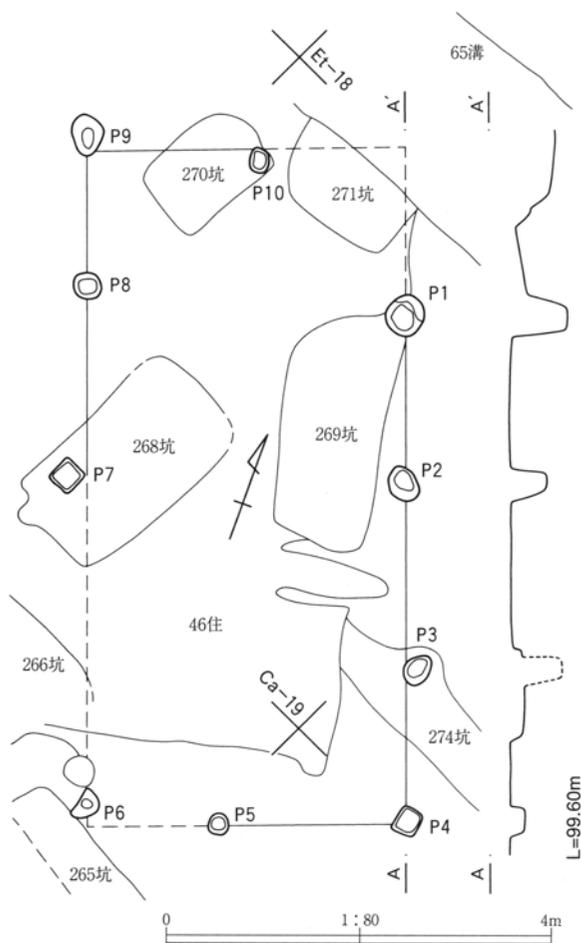
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

(2) 1区の遺構と遺物

A. 掘立柱建物跡

前述のように、1区では29棟の掘立柱建物を抽出した。ここではこれらの分布状況から溝内部・散在部・南集中部の3地区、主軸方向からA群・B群・C群・C'群に分けて記述する。

1区1号掘立柱建物跡		南北棟				
建物全体規模	2×4間	面積	23.64 m ²			
主軸方向	N-19°-W	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
(東辺)	P 1	44	40	56.5	楕円形	1.7
	P 2	39	29	36.5	楕円形	1.95
	P 3	35	26	40.5	楕円形	1.62
南辺 3.35	P 4	34	25	14	隅丸方形	1.98
	P 5	24	20	19.5	円形	1.4
西辺 7.0	P 6	33	22	26.5	半円形	3.45
	P 7	37	27	54	隅丸方形	2
	P 8	32	27	25	隅丸方形	1.56
	P 9	43	32	26.5	隅丸方形	1.8
(北辺)	P 10	28	20	57	楕円形	—



第26図 1号掘立柱建物跡

溝内部A群

1区1号掘立柱建物跡 (第26図 付図3)

位置 Et・Ca-18・19G 溝内部の北東隅部

主軸方位 N-19°-W 溝内部A群

重複 南西隅のP6が265号土坑と重複しているが直接的な新旧関係は不明である。また4号・7号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

形態 2×4間(3.35×7.0m・11尺×24尺)、面積23.64m²の南北棟。柱間は桁側1.56~2.0m、梁側1.4~1.98m。東辺はほぼ等間隔に柱穴が柱軸にのるがP3がやや外側に外れている。北角の柱穴は65号溝と重複しているため、失っている。南辺のP5は柱軸にのるが、中央より西に偏る。西辺はP7が柱軸より外側に外れ、P8・P9の柱間がやや短い。P6・P7間の柱穴は266号土坑との重複で検出できなかった。北辺はP10が柱軸から内側に外れている。柱穴は隅丸方形および楕円形で、長径24~44cm、短径20~40cm、深さ14~56.5cmと幅がある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区2号掘立柱建物跡 (第27図 付図3)

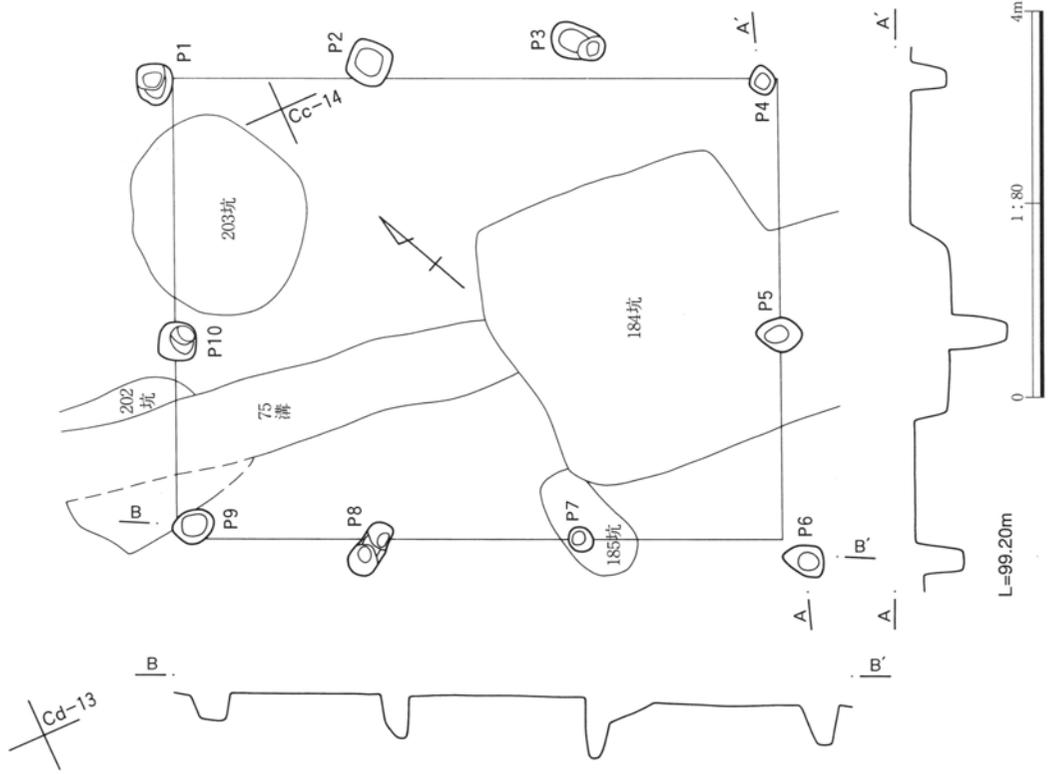
位置 Cc~e-18・19G 溝内部の東中央部

主軸方位 N-36°-W 溝内部A群

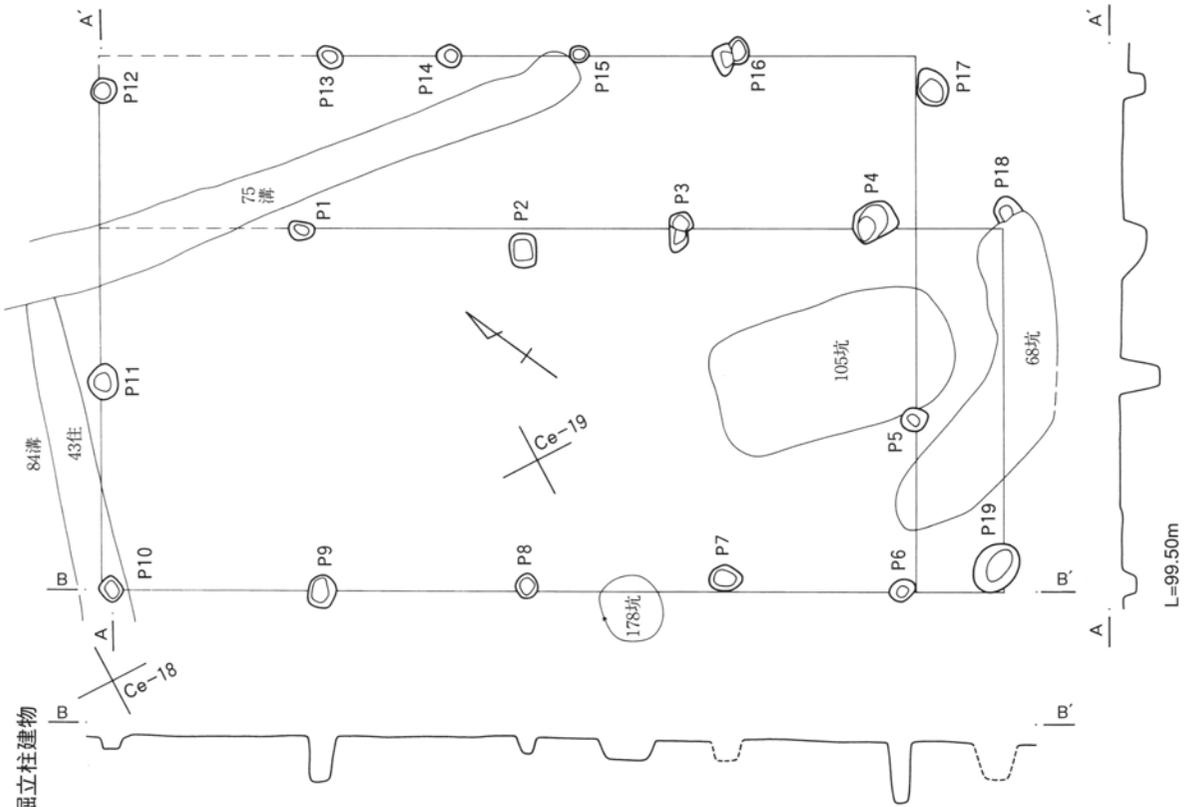
重複 75号溝と重複しているが直接的な新旧関係は不明である。また11号掘立柱建物跡・12号掘立柱建物跡と重複しているが直接的な新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は2×4間(3.81×8.22m・13尺×28.5尺)、面積51.13m²の南北棟。東側に2.2m、南側に1.0mの間隔をとって庇が付き、全体として6.01×9.22mの規模となる。柱間は桁側1.65~2.30m、梁側1.79~2.06m。東辺はP3・P4が北側に偏る以外はほぼ等間隔に柱穴があり、P2が内側に外れる以外は柱穴軸にのる。北角の柱穴は75号溝と重複しているため、失っている。南辺のP5は柱軸にのるが、両端のP4・P6はやや北に外れる。西辺はP7がやや内側に外れる以外は、ほぼ柱軸にのる。

3号掘立柱建物



2号掘立柱建物



第27图 2号·3号掘立柱建物跡

L=99.50m

L=99.20m

4m

1:80

0

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

っている。各柱穴はほぼ等間隔であるが、P6・P7間がやや短い。北辺はほぼ柱軸にのっている。東側の底の柱穴は身舎の東辺と対応する位置にない。柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形と楕円形のもの混在し、長径27~49cm、短径19~38cm、深さ15~64cmである。底部分の柱穴は長径19~55cm、短径17~44cm、深さ3~57cmで数値にばらつきがある。

A群中最大の建物であり、規模から屋敷遺構の主要建物に相当する。A群が溝による区画を有しない屋敷遺構である可能性を示す。

内部施設 無し 出土遺物 無し

建物全体規模	(2+1)×(4+1)間			面積	51.13㎡	
主軸方向	N-36°-W			庇	東・南	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
(東辺)	P1	27	19	17.5	楕円形	2.3
	P2	37	29	28.5	隅丸方形	1.65
	P3	45	20	17.5	不整形	1.95
南辺 3.81	P4	49	38	34.5	楕円形	2.06
	P5	29	25	15	円形	1.79
西辺 8.22	P6	27	22	64	楕円形	1.85
	P7	35	27	20.5	楕円形	2.05
	P8	26	23	17.5	円形	2.15
(北辺)	P9	35	29	46.5	楕円形	2.17
	P10	28	22	13	隅丸方形	2.18
東底 8.60	P11	38	32	41.5	楕円形	-
	P12	28	26	22	円形	2.4
	P13	28	22	28	楕円形	1.25
	P14	26	24	15.5	円形	1.32
	P15	19	17	4.5	円形	1.6
	P16	39	27	42	楕円形	2.1
	P17	42	33	51	楕円形	P4へ1.6
南底 3.70	P18	30	27	26	不整形	3.72
	P19	55	44	33.5	楕円形	P6へ1.0

建物全体規模	2×3間			面積	30.75㎡	
主軸方向	N-40°-W			庇	無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺 6.38	P1	45	37	28	楕円形	2.25
	P2	52	45	14	隅丸方形	2.2
	P3	58	36	40	楕円形	2
南辺 5.05	P4	31	25	37	隅丸方形	2.65
	P5	48	35	62	楕円形	2.4
西辺 6.46	P6	44	32	50	楕円形	2.4
	P7	28	25	29	円形	2.17
	P8	63	28	46	円形	1.9
北辺 4.67	P9	44	35	27	円形	2
	P10	44	40	71	円形	2.7

1区3号掘立柱建物跡 (第27図 付図3)

位置 Cc・d-13・14G 溝内部中央から西寄り
主軸方位 N-40°-W 溝内部A群

重複 8号掘立柱建物・75号溝と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 2×3間 (4.67~5.05m×6.38~6.46m・16尺×21尺)、面積30.75㎡の南北棟。柱間は桁側1.9~2.4m、梁側2~2.65m。東辺は外側に外れるP3を除き、ほぼ等間隔に柱穴が柱軸にのる。南辺はP5のみ柱軸にのり、P4・P6は内側・外側に外れる。P5の位置は北辺のP10と対応して、やや西に偏っている。西辺は外側に外れるP6を除き、ほぼ等間隔に柱穴が柱軸にのる。北辺はP9が内側に、P1が外側に柱軸から外れるが、P10は南辺のP5に対応する位置で柱軸にのっている。柱穴は隅丸方形および楕円形・円形で、長径28~63cm、短径25~45cm、深さ14~71cmと、特に深さに幅がある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区4号掘立柱建物跡 (第28図 付図3)

位置 Et・Ca-17・18G 溝内部の北東隅
主軸方位 N-86°-W 溝内部B群

重複 1号・7号掘立柱建物と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 1×2間 (2.90~2.96m×3.65~3.70m・10尺×13尺)、面積11.42㎡の東西棟。柱間は桁側1.62~2.09m、梁側2.9~2.96m。四角の柱穴は柱軸にのる。南辺のP5および北辺のP2は共に西にやや偏って対応する位置にあるが、いずれも柱軸からやや南側に外れる。柱穴は隅丸方形および円形で、長径33~66cm、短径29~46cm、深さ15.5~61cmである。ややP3が浅い。

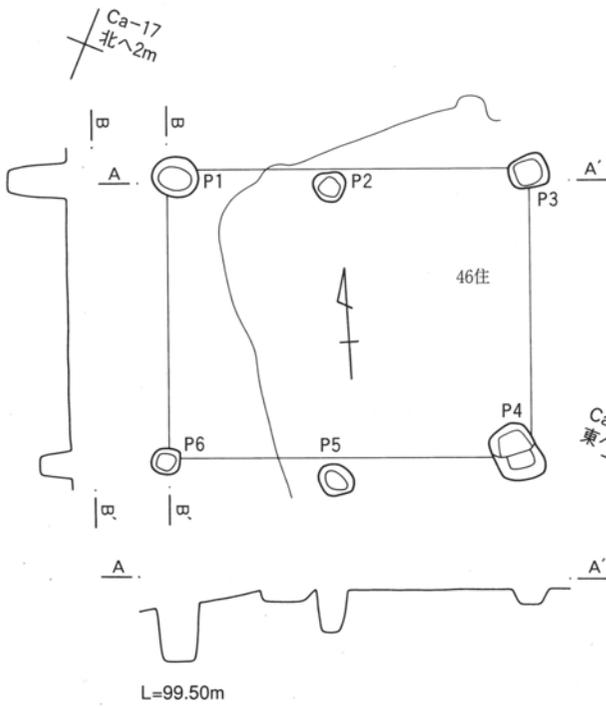
内部施設 無し 出土遺物 無し

1区5号掘立柱建物跡 (第28図 付図3)

位置 Cb-11・12G 溝内部の北西隅
主軸方位 N-72°-W 溝内部B群

重複 6号掘立柱建物と重複しているが、直接的な

4号掘立柱建物跡



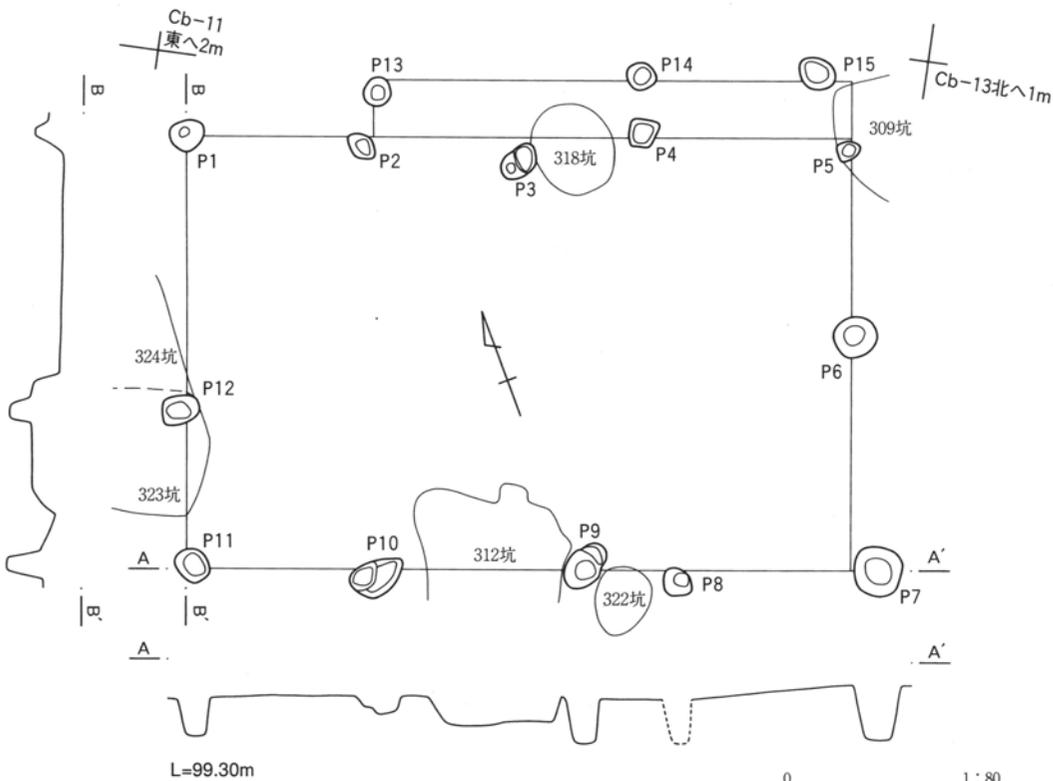
1区4号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	1×2間	面積	11.42 m ²			
主軸方向	N-86° -W	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 3.70	P 1	48	41	61	楕円形	1.62
	P 2	34	31	46	円形	2.09
東辺 2.90	P 3	43	32	15.5	隅丸方形	2.9
南辺 3.65	P 4	66	46	40	隅丸方形	1.91
	P 5	40	33	45	楕円形	1.78
西辺 2.96	P 6	33	29	46	隅丸方形	2.96

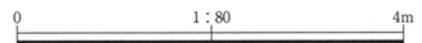
1区5号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	(2+1)×4間	面積	34.60 m ²				
主軸方向	N-72° -W	庇	北				
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 6.95	P 1	37	33	27	円形	1.87	
	P 2	35	24	11	楕円形	1.67	
	P 3	44	28	31.5	楕円形	1.26	
	P 4	37	28	17.5	隅丸方形	2.19	
東辺 4.42	P 5	25	20	27	円形	1.94	
	P 6	46	41	65	円形	2.49	
南辺 7.18	P 7	56	49	55	円形	2.07	
	P 8	35	28	44.5	不整円形	1	
	P 9	56	36	45.5	楕円形	2.2	
	P 10	60	36	18	楕円形	1.92	
	西辺 4.55	P 11	37	32	37.5	楕円形	1.65
		P 12	40	29	48.5	楕円形	2.9
	北庇 4.60	P 13	32	28	53	円形	2.76
P 14		32	27	28.5	円形	1.84	
P 15		40	33	29	楕円形	P 5 ~ 0.89	

5号掘立柱建物跡



第28図 4号・5号掘立柱建物跡



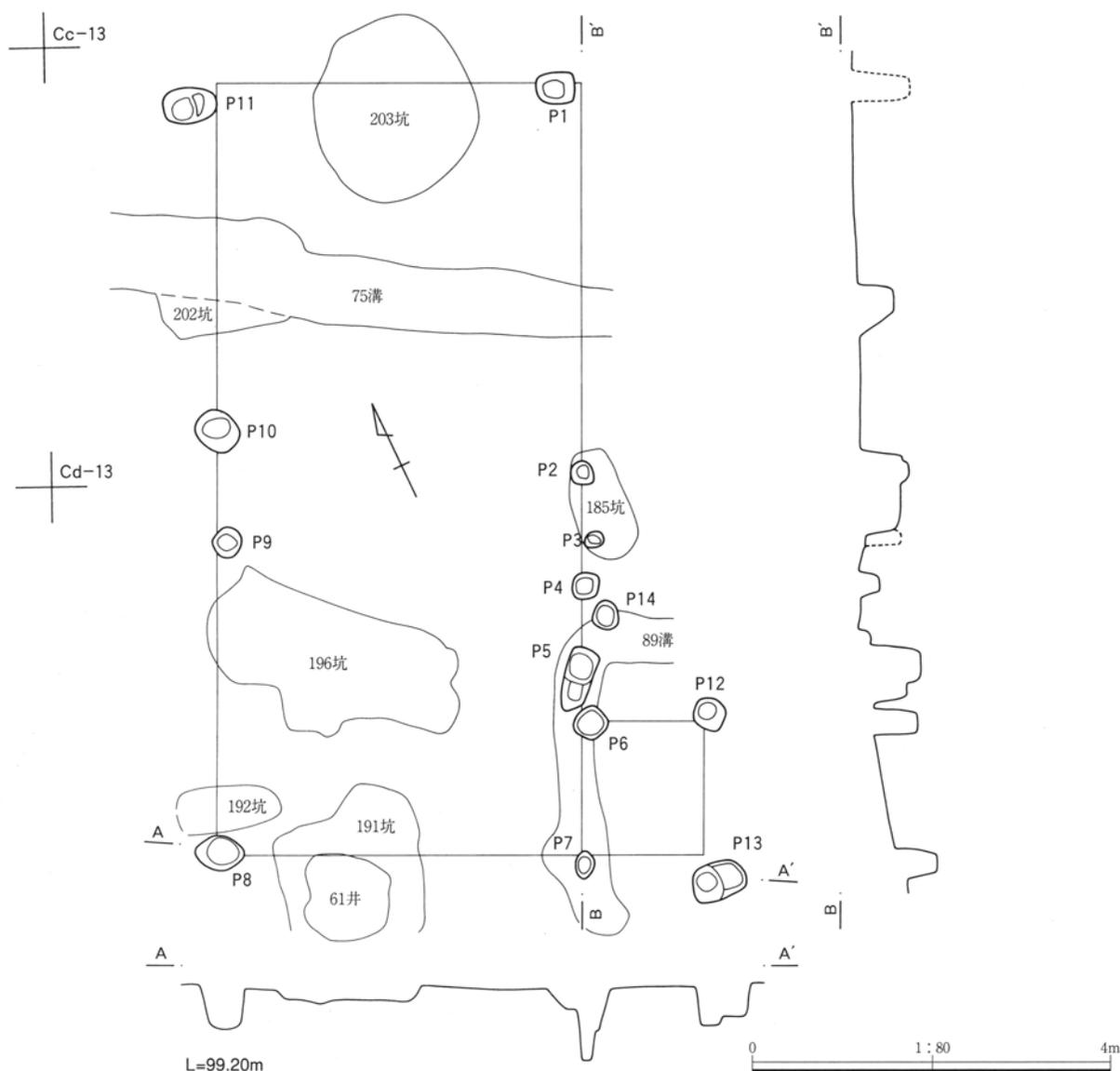
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

1区8号掘立柱建物跡 南北棟

建物全体規模	1×4間		面積		37.87㎡	
主軸方向	N-27°-E		庇		無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺 8.82	P 1	45	35	65	隅丸方形	4.35
	P 2	29	25	8	隅丸方形	0.75
	P 3	23	20	40	楕円形	0.55
	P 4	35	28	23	隅丸方形	1
	P 5	74	32	54	隅丸方形	0.55
	P 6	39	38	60	隅丸方形	1.6
南辺 4.06	P 7	32	22	57	楕円形	4.06
西辺 8.48	P 8	55	40	50	楕円形	3.5
	P 9	35	31	14.5	隅丸方形	1.3
	P 10	50	43	58	楕円形	3.67
北辺 4.1	P 11	60	40	66.5	楕円形	P 1へ4.1
張出 1.3	P 12	40	36	87	隅丸方形	1.9
	P 13	59	41	46.5	楕円形	P 7へ1.54
	P 14	33	27	54	楕円形	

新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は2×4間(4.42~4.55m×6.95~7.18m・15尺×23尺)、面積34.60㎡の東西棟。北側に0.89mの間隔をとって庇が付き、全体として5.01~5.44×6.95~7.18mの規模となる。柱間は桁側1~2.2m、梁側1.65~2.9m。北辺のP3・P5は柱軸から内側に外れている。東辺は南角P7が東側に外れる以外は柱軸にのる。南辺ではP9・P10・P11は柱軸にのるが、P8は外側に外れる。各柱穴間はほぼ等間隔であるが、P8・P9間は極端に短い。西辺はいずれの柱穴も柱軸にのっている。P12は西辺中央でなく南に偏る。庇の柱穴は身舎の北



第29図 8号掘立柱建物跡

辺とほぼ対応する位置にある。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形と楕円形のもの混在し、長径25~60cm、短径20~49cm、深さ11~48.5cmで、数値にばらつきがある。底部分の柱穴は長径32~40cm、短径27~33cm、深さ28.5~53cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区8号掘立柱建物跡 (第29図 付図3)

位置 Cc・d-13・14G 溝内部の中央部

主軸方位 N-27° -E 溝内部C群

重複 3号掘立柱建物と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は1×4間(4.06~4.10m×8.48~8.82m・約13.5尺×29尺)、面積37.87㎡の南北棟。南東角に東側に1.6×1.3mの張り出しが付く。柱間は桁側0.55~4.35m、梁側4.06m。東辺はいずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴の数は不規則で東辺の南側は数が多く柱間が狭い。柱穴を抽出しすぎていることも否めないが、柱穴の方向軸の一致から認定をおこなった。身舎部分の柱穴は隅丸方形と楕円形のもの混在し、長径23~74cm、短径20~43cm、深さ8~66.5cmで、数値にばらつきがある。底部分の柱穴は長径40~59cm、短径36~41cm、深さ46.5~87cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区9号掘立柱建物跡 (第30図 付図3)

位置 Ce・f-12・13G 溝内部の西中央部

主軸方位 N-64° -W 溝内部C群

重複 73号溝・13号掘立柱建物と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 2×3間(3.18×5.98m・10.5尺×20尺)、面積19.27㎡の東西棟。柱間は桁側1.75~2.38m、梁側1.46~1.72m。四角の柱穴のうち、北角は73号溝により失っている。他の三角は柱軸にのる。北辺の柱間は中央のP1・P2間が狭く、対応する南辺は中央のP6・P7が広がっている。東辺は角の

P3・P5は柱軸にのるが、P4は外側に外れる。南辺はP5・P7・P8は柱軸にのるが、P6は外側に外れる。西辺のP8は柱軸にのるが、北側2本の柱穴は73号溝により失っている。北辺のP1~P3は柱軸にのる。柱穴は方形および円形で、長径22~53cm、短径17~42cm、深さ15.5~55.5cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区10号掘立柱建物跡 (第30図 付図3 PL9)

位置 Ce-14・15G 溝内部の西中央部

主軸方位 N-63° -W 溝内部C群

重複 73号溝と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 1×3間(3.20~3.28m×5.56~5.58m・11尺×19尺)、面積18.70㎡の東西棟。柱間は桁側1.83~1.87m、梁側3.2m。ほぼすべての柱穴は柱軸にのる。東辺および南辺の柱穴は等間隔に掘られている。柱穴は楕円形および円形で、長径40~60cm、短径36~46cm、深さ46.5~93cmである。P8はやや小さいが、他は大きさが均一で揃っている。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区11号掘立柱建物跡 (第31図 付図3 PL9)

位置 Cc~e-18・19G 溝内部の東中央部

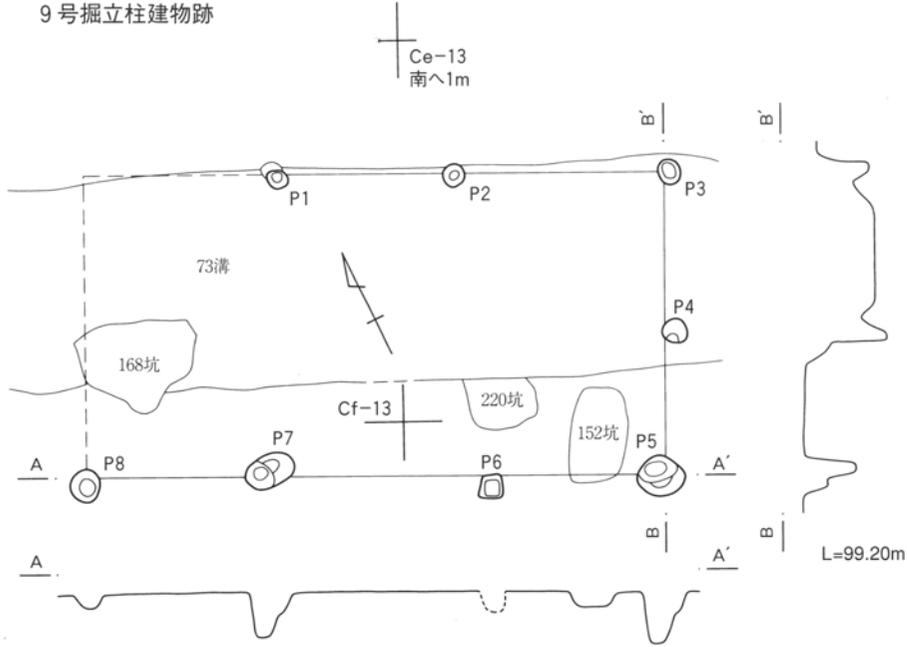
主軸方位 N-62.5° -W 溝内部C群

重複 75号溝と重複しているが直接的な新旧関係は不明である。また2号掘立柱建物跡・1号柱列と重複しているが直接的な新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は2×3間(4.80×5.46m・16尺×18尺)、面積40.65㎡の東西棟。北側に0.97m、東側に0.97m、南側に0.85mの間隔をとって庇が付き、全体として6.62×6.43mの規模となる。東側の12号掘立柱建物と庇を介して連結するものと見られるが2棟として扱う。柱間は桁側1.75~1.94m、梁側1.7~2.73m。北辺は北東角の柱穴は77号溝と重複しており、見落とした可能性が高い。P1~P3はほぼ等間隔にあり、柱軸にのる。東辺のP4は30cmほど南に偏り、やや外側に外れる以外、角のP3・

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

9号掘立柱建物跡

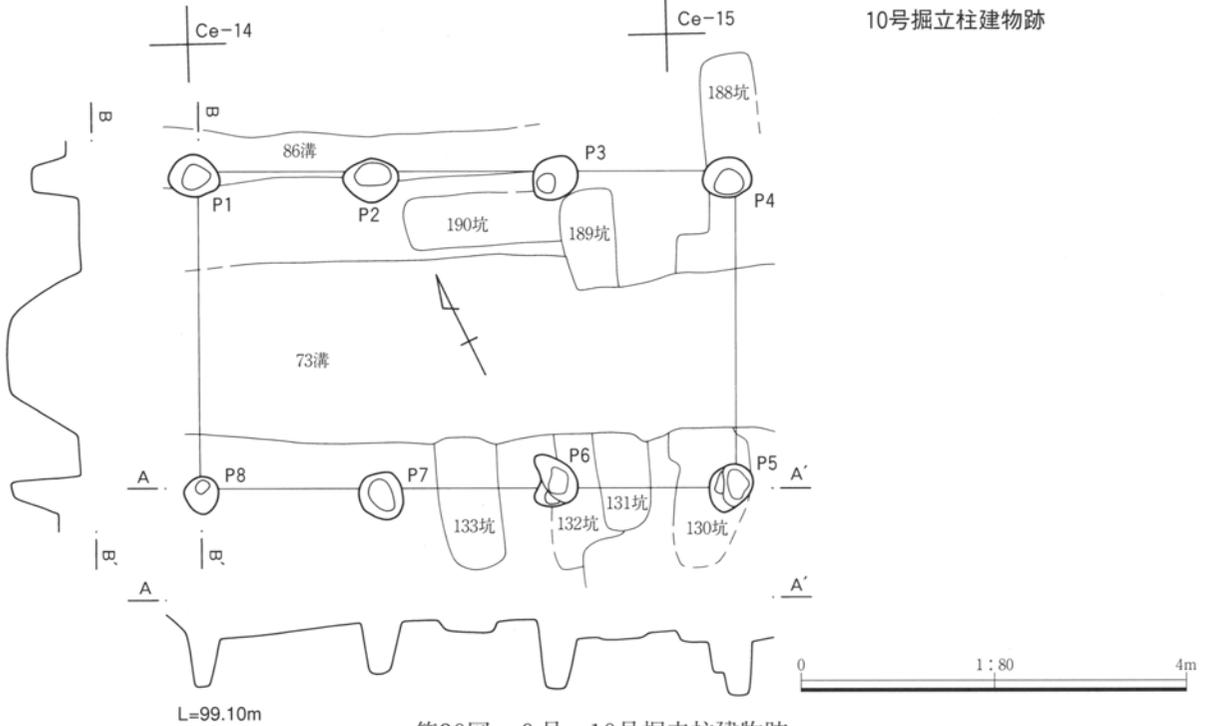


1区9号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	2×3間	面積	19.27 m ²			
主軸方向	N-64°-W	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
(北辺)	P 1	22	17	25	楕円形	1.85
	P 2	25	23	34	円形	2.25
東辺 3.18	P 3	27	24	38	楕円形	1.72
	P 4	27	25	55.5	円形	1.46
南辺 5.98	P 5	50	42	54	楕円形	1.75
	P 6	31	23	20	隅丸方形	2.38
(西辺)	P 7	53	34	48	楕円形	1.87
	P 8	35	31	15.5	円形	—

1区10号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	1×3間	面積	18.70 m ²			
主軸方向	N-63°-W	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 5.56	P 1	53	44	46.5	円形	1.85
	P 2	58	45	59.5	楕円形	1.83
東辺 3.20	P 3	53	44	93	楕円形	1.88
	P 4	51	42	155	楕円形	3.2
南辺 5.58	P 5	53	40	65.5	不整円形	1.85
	P 6	60	36	72.5	不整円形	1.85
西辺 3.28	P 7	51	46	54.5	楕円形	1.87
	P 8	40	36	56	楕円形	P 1へ3.28



第30図 9号・10号掘立柱建物跡

P 5は柱軸にのり。南辺はP 5～P 8ともに柱軸にのり、等間隔に掘られている。西辺のP 8は柱軸にのりが、P 9は内側に外れる。各柱穴はほぼ等間隔であるが、P 4・P 5間がやや短い。

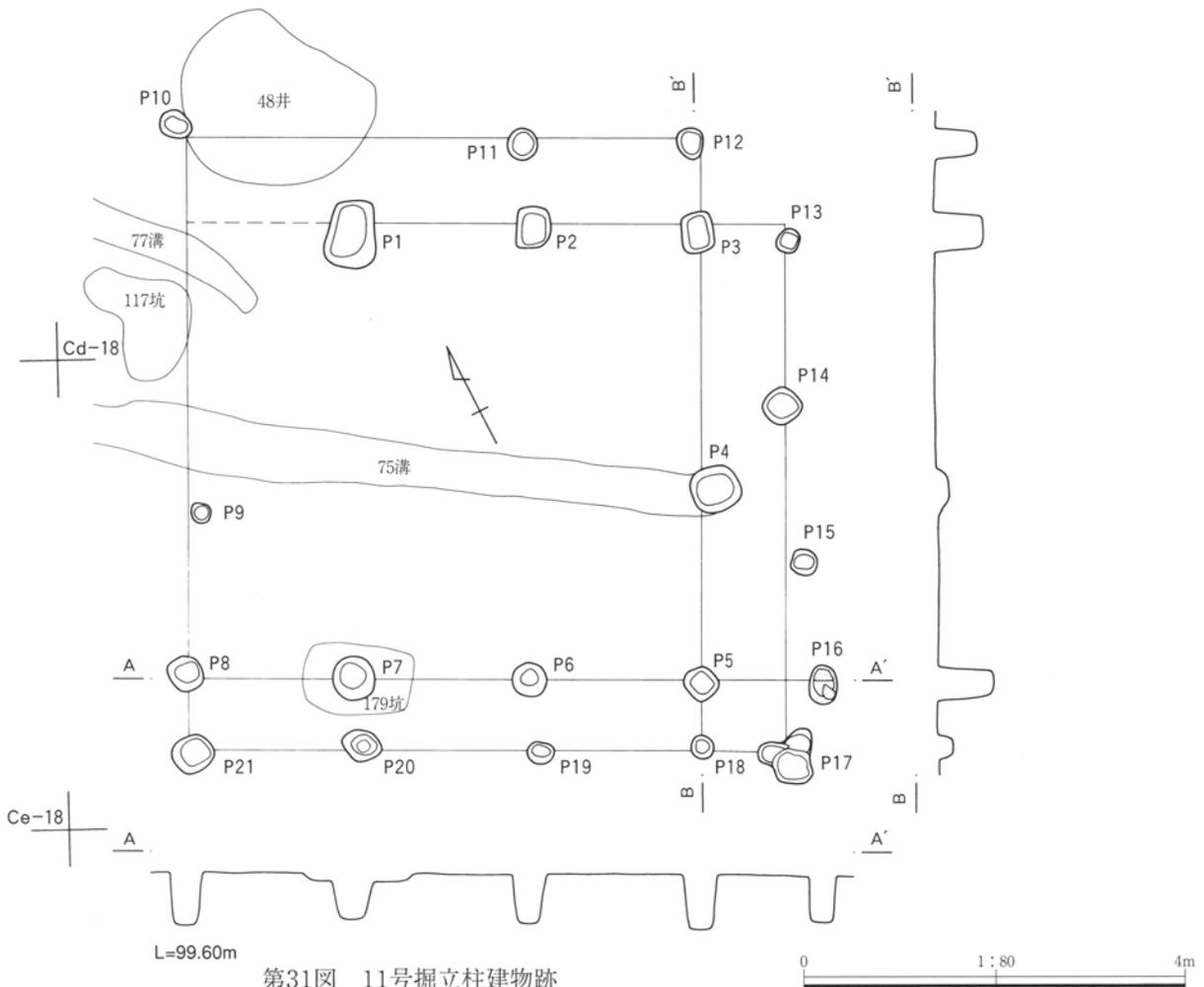
東側の庇の柱穴は身舎の東辺と対応する位置になく、身舎部分が2間であるのに対して3間となっている。これはむしろ東側の12号掘立柱建物の西辺に対応する可能性が高い。またP 15・P 16は柱軸から大きく外側に外れる。南北の庇の柱穴は身舎の側柱と対応する位置にある。

柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形と円形・楕円形のものが混在し、長径24～75cm、短径21～49cm、深さ10～58cmである。P 9が他に比べて小さく浅い。庇部分の柱穴は長径26～64cm、短径22～50cm、深さ15～54.5cmでばらつきがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区11号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	(2+2)×(3+1)間			面積	40.65 m ²	
主軸方向	N-62.5°-W			庇	北・東・南	
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
(北辺)	P 1	75	49	48	楕円形	1.94
	P 2	49	35	57	隅丸方形	1.75
東辺 4.80	P 3	47	33	49.5	隅丸方形	2.73
	P 4	56	49	13	隅丸方形	2.06
南辺 5.46	P 5	36	32	58	隅丸方形	1.82
	P 6	37	36	50.5	円形	1.87
(西辺)	P 7	48	44	39.5	円形	1.75
	P 8	40	35	55	隅丸方形	1.7
北庇 5.45	P 9	24	21	10	円形	4.13
	P 10	34	28	54.5	楕円形	3.68
東庇 5.60	P 11	34	31	38.5	円形	1.89
	P 12	34	27	42.5	円形	P3へ0.97
南庇 6.35	P 13	27	22	22.5	隅丸方形	1.75
	P 14	42	37	15	隅丸方形	1.68
	P 15	30	27	13.5	隅丸方形	1.3
	P 16	41	30	47	楕円形	0.85
	P 17	64	50	48.5	不整形円形	0.95
	P 18	26	25	15.5	円形	1.72
	P 19	28	24	42.5	楕円形	1.88
	P 20	42	34	45	楕円形	1.8
	P 21	45	37	30.5	隅丸方形	P8へ0.85



第31図 11号掘立柱建物跡

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

1区12号掘立柱建物跡(第32図 付図3)

位置 D c・d-19・0 G 溝内部の東中央部

11号掘立柱建物の東側に並立する。

主軸方位 N-26.5°-E 溝内部C群

重複 43号溝と重複しているが直接的な新旧関係は不明である。また2号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は1×3間(3.18~3.34m×6.88~7.42m・10.5尺×24尺)、面積24.99m²の南北棟。北側に0.75mの間隔をとって庇が付き、全体として3.44×7.63mの規模となる。西側の11号掘立柱建物と庇を介して連結すると見られるが、西庇は11号掘立柱建物に付属させた。柱間は桁側1.64~3.65m、梁側3.18~3.34m。東辺のP1~P4はほぼ柱軸にのるが、P4は南にずれる。P1・P2間とP3・P4間は等間隔であるが、P2・P3間はそれらの2倍になっている。南辺のP4は外側に外れ、P5はやや北側に偏る。西辺は4本とも柱軸にのるが、南端のP5は北側に偏る。P6・P7の位置は東辺のP3・P2に対応している。北辺のP8・P1は柱軸にのる。北側の庇の柱穴P9は、身舎の東辺P8と対応する位置にあるが、P10は身舎のP1と対応する位置になく、東に大きく外れている。

柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形と楕円形のもの混在し、長径27~54cm、短径23~44cm、深さ22~67cmである。庇部分の柱穴は長径26~30cm、短径20~23cm、深さ24~25.5cmで数値にばらつきがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区13号掘立柱建物跡(第32図 付図3)

位置 C c・d-16・17 G 溝内部の中央部

主軸方位 N-61.5°-W 溝内部C群

重複 75号溝と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 2×2間以上(4.74×3.84m以上)、梁間16尺の東西棟。柱間は桁側1.59~2.1m、梁側2.02~2.71m。西辺の柱穴は51号・78号溝により失して

いると考えられる。北辺は柱軸にのるが、P1・P2間はP2・P3間より狭い。東辺も柱軸にのるが、P3・P4間がP4・P5間より狭い。南辺はP5・P6は柱軸にのり、北辺のP2・P3とも対応する位置にある。しかし、P7は対応する北辺P1より東にあり、柱軸の外側にやや外れる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は方形および円形で、長径46~95cm、短径31~67cm、深さ22.5~60.5cmである。ばらつきがあるが、中でもP4が大きく、P5・P7が小さい。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区14号掘立柱建物跡(第33図 付図3 PL15)

位置 C b・c-16・17 G 溝内部中央やや南寄り

主軸方位 N-28°-E 溝内部C群

重複 72号・73号溝と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 2×3間(3.85~3.94m×5.88~6.0m・13尺×20尺)、面積23.88m²の南北棟。柱間は桁側1.98~2m、梁側3.85m。東辺は72号溝で失したと考えられる柱穴を除き、ほぼ等間隔でP1~P3が柱軸にのる。南辺は両端のP3・P4が柱軸にのり検出できたが、中央の柱穴は見落とした可能性が高い。西辺は42号井戸で失したと考えられる柱穴を除き、ほぼ等間隔でP4~P6が柱軸にのる。北辺はP6・P7・P1は等間隔で柱軸にのる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径34~65cm、短径27~58cm、深さ36~64.5cmである。P1・P4は特に小さい。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区15号掘立柱建物跡(第33図 付図3)

位置 C f・g-16・17 G 溝内部中央南東寄り

主軸方位 N-29°-E 溝内部C群

重複 なし

形態 1×2間(2.5~2.52m×3.45~3.62m・8尺×12尺)、面積8.76m²の南北棟。柱間は桁側1.45~2m、梁側2.5~2.52m。東辺はP1がやや南側・

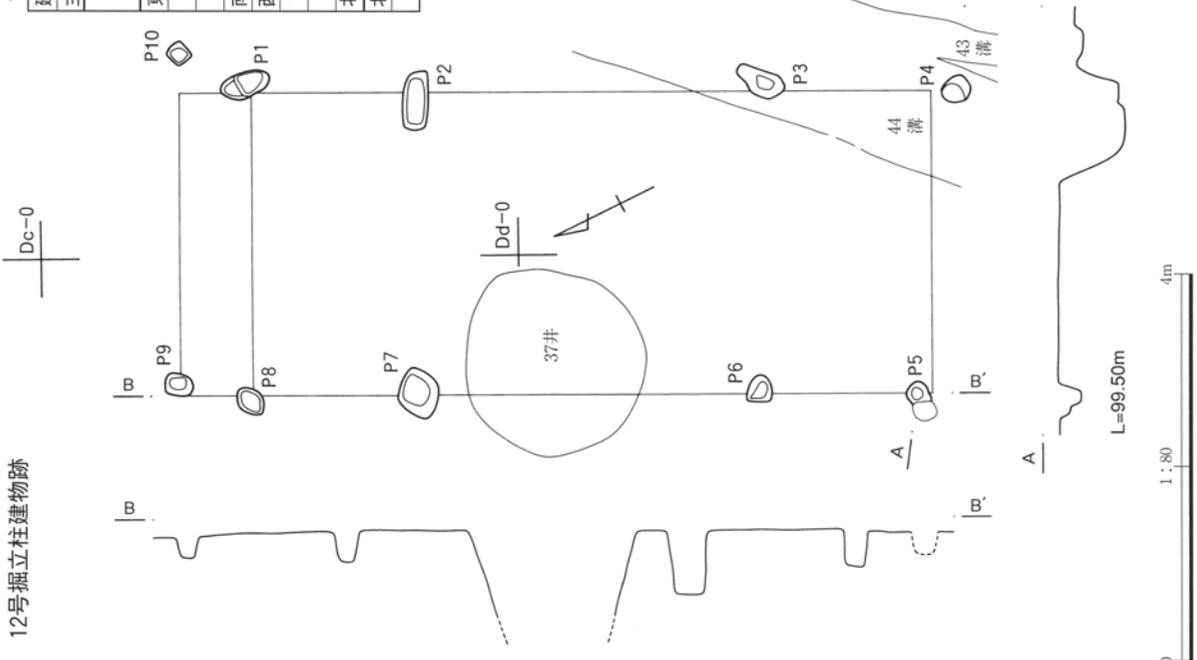
12号掘立柱建物跡

1区12号掘立柱建物跡 南北棟

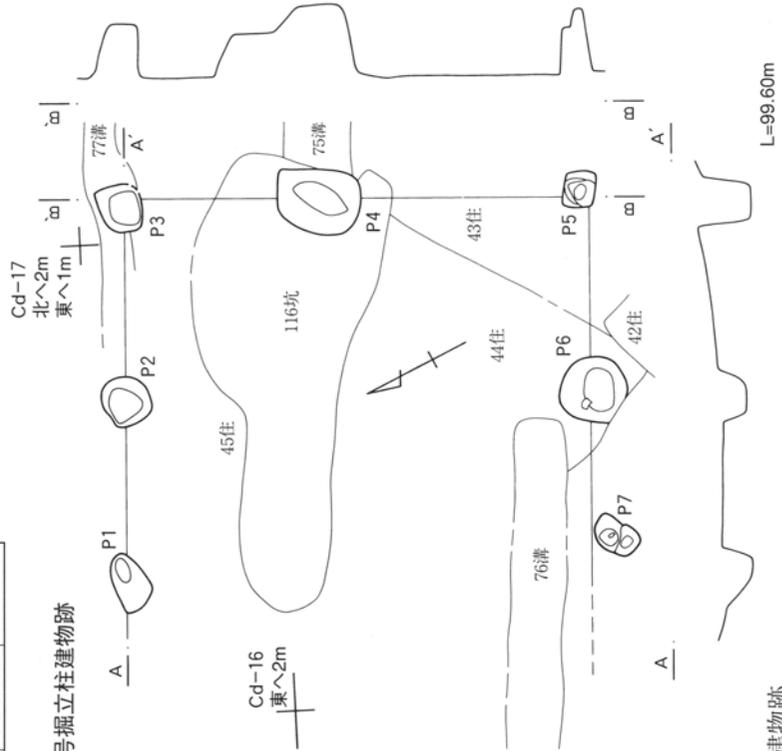
建物全体規模		1×(3+1)間		面積		24.99 m ²		北	
主軸方向	桁・梁行の規模 (m)	柱穴		規模 (cm)		形状	次柱穴との間隔 (m)		
		No	長径	短径	深さ		No	間隔 (m)	
東辺	7.42	P 1	53	27	37	楕円形	P 1	1.81	
		P 2	63	26	22	隅丸長方形	P 2	3.65	
		P 3	53	27	33	不整楕円形	P 3	1.97	
南辺	3.18	P 4	31	26	26.5	円形	P 4	3.18	
西辺	6.88	P 5	27	23	23	隅丸方形	P 5	1.64	
		P 6	30	25	29.5	不整楕円形	P 6	3.6	
		P 7	54	44	67	隅丸方形	P 7	1.73	
北辺	3.34	P 8	34	25	37	楕円形	P 8	P 1~3.34	
北底	3.46	P 9	30	23	24	隅丸方形	P 9	3.46	
		P 10	26	20	25.5	隅丸方形	P 10	P 1~0.75	

1区13号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模		2×2間以上		面積		測定不可	
主軸方向	桁・梁行の規模 (m)	柱穴		規模 (cm)		形状	次柱穴との間隔 (m)
		No	長径	短径	深さ		
(北辺)	4.74	P 1	60	31	37	楕円形	1.78
		P 2	54	48	27	円形	2.06
東辺	4.74	P 3	60	47	48	隅丸円形	2.02
		P 4	95	67	44	楕円形	2.71
(南辺)		P 5	46	33	60.5	隅丸円形	2.1
		P 6	72	66	57	楕円形	1.59
		P 7	51	32	22.5	楕円形	—

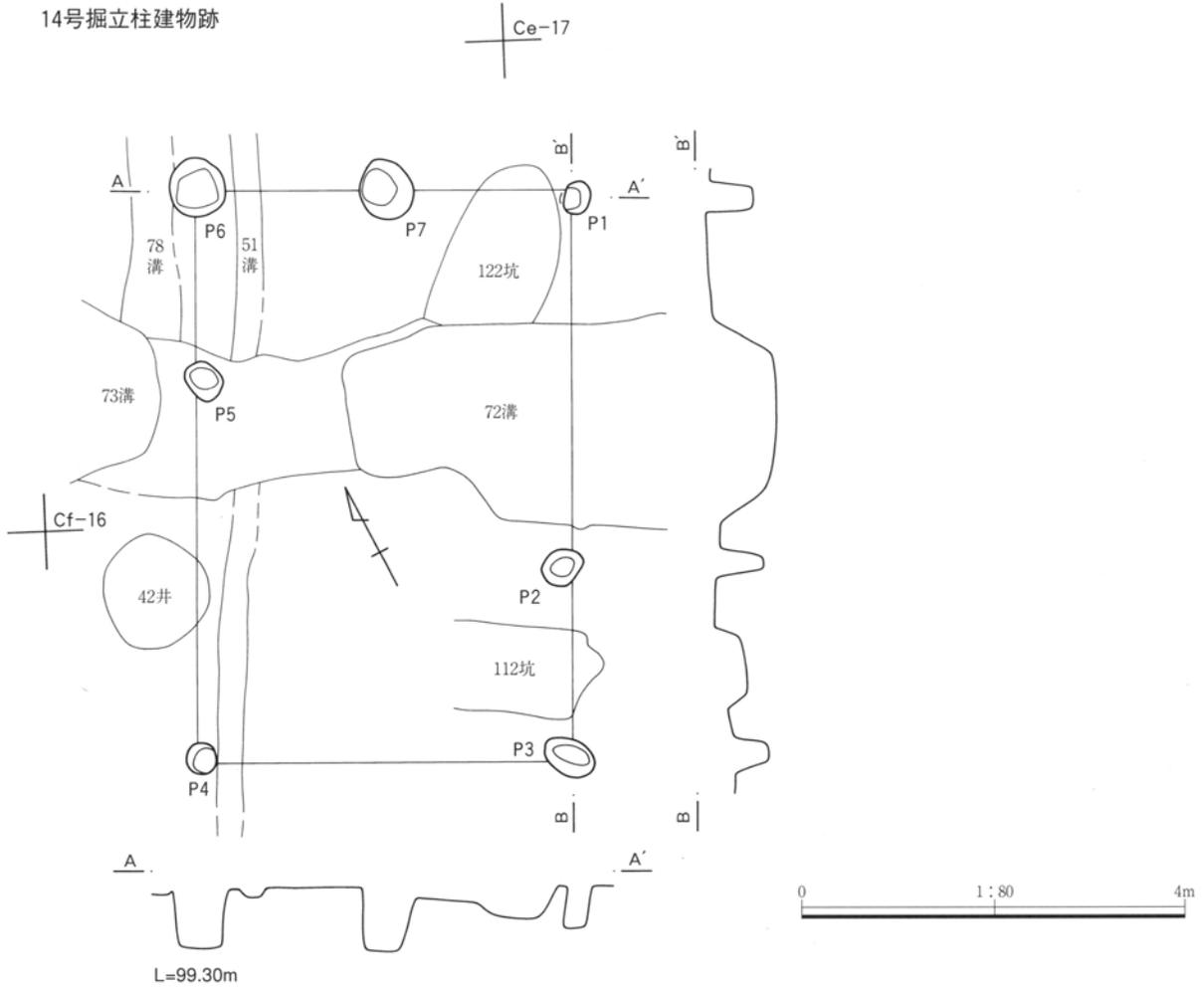


13号掘立柱建物跡

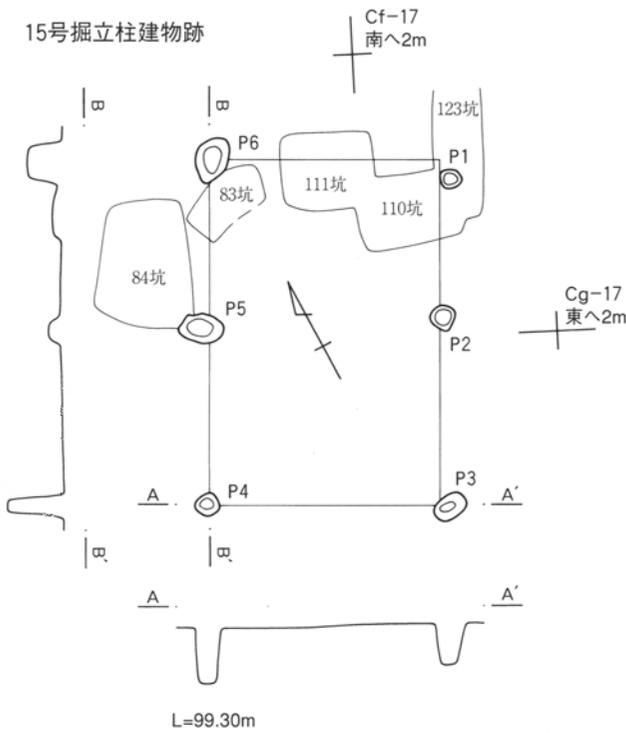


第32図 12号・13号掘立柱建物跡

14号掘立柱建物跡



15号掘立柱建物跡



1区14号掘立柱建物跡 南北棟

建物全体規模	2×3間	面積	23.88 m ²			
主軸方向	N-28°-E	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
	長径	短径	深さ			
東辺 5.88	P 1	36	27	44	楕円形	3.9
	P 2	45	35	48	楕円形	1.98
南辺 3.85	P 3	58	38	36	楕円形	3.85
西辺 6.0	P 4	34	32	44	円形	4
	P 5	43	35	41	楕円形	2
北辺 3.94	P 6	63	58	61.5	円形	1.92
	P 7	65	55	64.5	楕円形	P1へ2.02

1区15号掘立柱建物跡 南北棟

建物全体規模	1×2間	面積	8.76 m ²			
主軸方向	N-29°-E	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
	長径	短径	深さ			
東辺 3.45	P 1	24	19	10.5	楕円形	1.45
	P 2	27	25	14	円形	2
南辺 2.52	P 3	36	24	44	楕円形	2.52
西辺 3.62	P 4	26	23	59	円形	1.86
	P 5	46	31	13	楕円形	1.78
北辺 2.5	P 6	50	34	35	楕円形	P1へ2.5

第33図 14号・15号掘立柱建物跡

外側に外れている他はP2・P3ともに柱軸にのる。南辺も両端のP3・P4が柱軸にのる。西辺もほぼ等間隔でP4～P6が柱軸にのる。北辺のP6は角で柱軸にのるが、P1は前述のように外れている。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径24～50cm、短径19～34cm、深さ10.5～59cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区17号掘立柱建物跡 (第34図 付図3)

位置 Cg・h-18・19G 溝内部中央南東寄り

主軸方位 N-30° -E 溝内部C群

重複 16号掘立柱建物と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 2×4間(3.83～4.56m×6.9～7.4m・13～15尺×24.5尺)、面積31.39㎡の南北棟。柱間は桁側1.14～2.46m、梁側1.48～2.46m。東辺は43号溝と平行になるように軸方向を変えている。柱穴の間隔は不統一であるが、西辺の柱穴と概ね対応している。P1・P2・P5は柱軸にのるが、P3・P4は外側に外れる。南辺はP5～P7ともに柱軸にのるが、東辺が斜行した関係でP5・P6間は短くなっている。西辺はP7・P8・P1は柱軸にのるが、P9・P10は外側に外れている。間隔は東辺と対応する。北辺は南に偏るP11以外はP12・P1ともに柱軸にのる。柱間は等間隔である。

柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径25～46cm、短径20～38cm、深さ10～36.5cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区6号掘立柱建物跡 (第35図 付図3)

位置 Ca・b-11～14G 溝内部の北西部

主軸方位 N-65° -W 溝内部C'群

重複 5号掘立柱建物と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。北西隅を囲うように3号柱穴列があり、位置関係から伴うものと考えられる。

形態 3×5間(11.16～11.66m×6.22～6.4m・37

尺×20.5尺)、面積74.76㎡の東西棟。柱間は桁側0.5～4.32m、梁側0.73～2.4m。

北辺の東半分が0.5m北側に突きだし段差を造る。南辺の西側2間には南側に約1mの張り出しが設けられる。柱筋のとおりは概して良いが、南東角P10は大きく東に外れる。また西辺の南角もやや乱れており、P17・P22が東に外れている。南辺から約1.2m(4尺)内側に並ぶ柱穴列(P9～P31)が側柱で梁間3間となり南辺が庇と思わせるが、進んだ建物平面形から内側の柱穴列が入側柱である可能性もある。東辺から2間目の梁柱筋は、南北に通って建物を2分している。P40の北側に想定される柱は省略されていて、土間かもしれない。建物西側は間仕切りが多く、居室空間と考えられる。

柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径28～79cm、短径18～47cm、深さ10～49.5cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区7号掘立柱建物跡 (第36図 付図3 PL9)

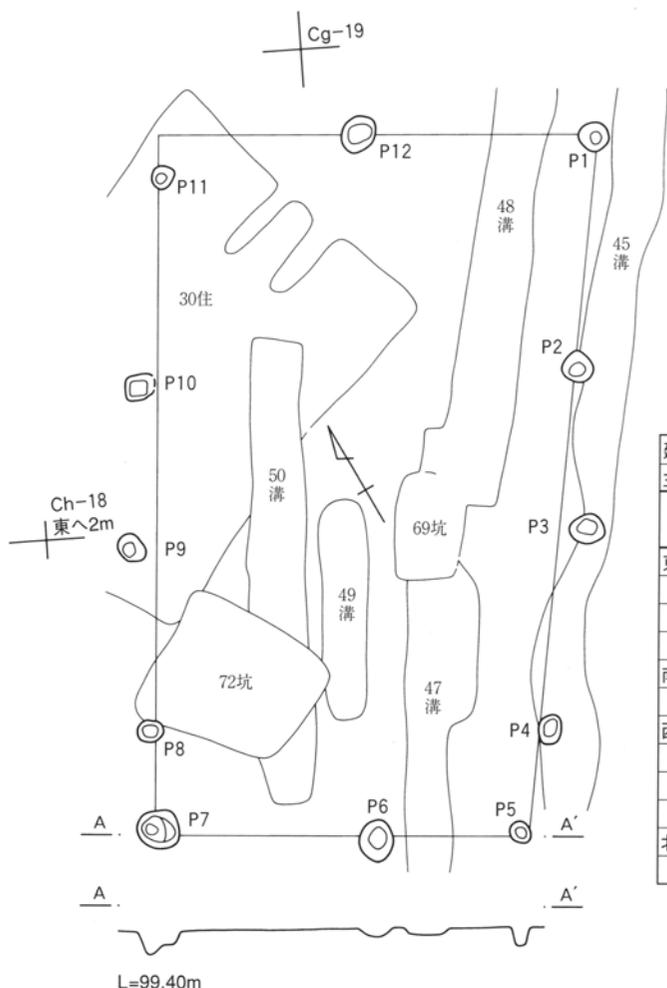
位置 Et・Ca-17・18G 溝内部の北東部

主軸方位 N-66.5° -W 溝内部C'群

重複 1号・4号掘立柱建物と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。

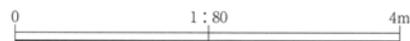
形態 2×3間(3.44～3.69m×5.95～5.97m・12尺×20.5尺)の総柱の東西棟。柱間は桁側1.55～2.35m、梁側1.63～1.9m。北辺はやや東にずれるP3以外はP1・P2・P4ともに柱軸にのる。柱の間隔はいずれも異なり、西にいくにしたがって広くなる。東辺の柱間はほぼ等間隔で、P4・P5・P6ともに柱軸にのる。南辺は西角のP9が南に外れる他はP6～P8ともに柱軸にのる。P7・P8の位置は北辺のP3・P2に対応している。西辺は南に外れているP9の他は、P10・P1は柱軸にのる。内側のP11は柱軸から西に外れるが、P12はかろうじて柱軸にのる。

柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形・隅丸方形で、長径22～50cm、短径20～35cm、



1区17号掘立柱建物跡 南北棟

建物全体規模	2×4間		面積	31.39㎡		
主軸方向	N-30°-E		庇	無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
東辺 7.4	P 1	32	30	31.5	円形	2.46
	P 2	34	29	18.5	円形	1.67
	P 3	37	30	36.5	楕円形	2.15
	P 4	33	24	27	円形	1.14
南辺 3.83	P 5	25	20	19	楕円形	1.48
	P 6	44	37	10	楕円形	2.36
西辺 6.9	P 7	46	38	25	楕円形	1.05
	P 8	27	24	17	楕円形	1.93
	P 9	33	25	24	楕円形	1.7
北辺 4.56	P 10	36	26	36	隅丸方形	2.24
	P 11	26	21	16	楕円形	2.13
	P 12	41	33	34	円形	P1へ2.46



第34図 17号掘立柱建物跡

深さ9～80.5cmである。深さにばらつきが大きく、掘り足らなかった可能性も残る。

内部施設 無し 出土遺物 無し

円形で、長径35～45cm、短径14～32cm、深さ18.5～37.5cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区16号掘立柱建物跡 (第36図 付図3)

位置 Cg-17・18G 溝内部の南東部

主軸方位 N-59°-W 溝内部C'群

重複 17号掘立柱建物・1号柱穴列と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 1×2間(3.35～3.54m×4.35～4.52m・11尺×14.5尺)、面積14.55㎡の東西棟。柱間は桁側2.05～2.4m、梁側3.35～3.54m。四角の柱穴は南東角のP4が外側に外れるほかは柱軸にのる。北辺は中央のP2がやや内側に外れる。柱の間隔はP1・P2間がやや長い。南辺のP5はほぼ中央にあり、柱軸にのる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は楕

1区18号掘立柱建物跡 (第37図 付図3)

位置 Et・Ca-17・18G 溝内部の北東部

主軸方位 N-61°-W 溝内部C'群

重複 9号掘立柱建物と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は2×2間(4.35～4.74m×5.1～5.41m・15尺×18尺)、面積27.79㎡の東西棟。東側に1.42mの間隔をとって庇が付き、全体として4.35～4.74m×6.52～6.83mの規模となる。柱間は桁側2.53～2.75m、梁側1.95～2.8m。北辺のP2・P3は柱軸にのるが、北角のP1は内側に外れている。P1の東側にはP10が柱軸にはのらないが、補

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

1区6号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模		3×5間			面積		74.76㎡	
主軸方向		N-65°-W			庇		無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺 11.16	P 1	35	25	12.5	方形	2.5		
	P 2	42	35	36	楕円形	2.07		
	P 3	39	33	25.5	楕円形	0.5		
	P 4	42	38	21.5	円形	2.27		
	P 5	28	18	22	楕円形	4.32		
東辺 6.4	P 6	28	22	39	楕円形	1.87		
	P 7	31	26	42	隅丸方形	1.85		
	P 8	32	28	10	隅丸方形	1.55		
	P 9	51	37	36.5	方形	1.25		
南辺 11.66	P 10	35	30	44	方形	2.7		
	P 11	30	26	25	円形	1.4		
	P 12	53	42	75	楕円形	1.92		
	P 13	38	34	49.5	隅丸方形	1.76		
	P 14	37	21	41	長方形	P16へ2.0		
	P 15	67	34	29.5	不定形	-		
	P 16	41	32	51	方形	1.75		
西辺 6.22	P 17	28	21	34	隅丸方形	2.4		
	P 18	31	25	28.5	楕円形	0.95		
	P 19	39	32	44	楕円形	0.73		
	P 20	79	40	43.5	楕円形	1.37		
	P 21	53	47	13	隅丸方形	P1へ0.8		
張出 3.50	P 22	44	31	60.5	方形	1.84		
	P 23	39	36	30	円形	1.67		
	P 24	74	35	11	隅丸長方形	P15へ0.87		
	P 25	30	25	23	円形			
	P 26	41	36	32.5	楕円形			
	P 27	23	17	28	小方形			
	P 28	20	15	18.5	小方形			
	P 29	21	14	21	小方形			
	P 30	21	13	23	小方形			
	P 31	38	35	53	円形			
	P 32	32	29	25.5	円形			
	P 33	38	34	36.5	楕円形			
	P 34	69	59	25	楕円形			
	P 35	75	36	17	隅丸長方形			
	P 36	23	21	23	円形			
	P 37	33	32	63.5	円形			
	P 38	31	22	14	隅丸方形			
	P 39	44	38	12	楕円形			
	P 40	27	25	25	楕円形			
	P 41	26	23	28	楕円形			
	P 42	30	23	33.5	方形			
	P 43	22	16	35.5	楕円形			
	P 44	36	22	27	方形			

助的な位置に掘られている。東辺は北角P3が西に、P4が東側に柱軸から外れる。P4の位置はP3からの距離とP5からの距離が5対3の位置にあり、中央でない。南辺ではP5・P6・P7はともに柱軸にのり、等間隔に掘られている。西辺はP4やP8に対応する柱穴は171号・172号土坑等により失したと考えられる。北角のP1が内側に外れている。P1の南側にはP9が柱軸にはのらないが、補助的

な位置に掘られている。庇の柱穴は身舎の東辺とほぼ対応する位置にある。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形と楕円形のもの混在し、長径21~48cm、短径21~32cm、深さ11.5~40cmである。庇部分の柱穴は長径30~38cm、短径24~30cm、深さ21.5~22cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区19号掘立柱建物跡(第37図 付図3)

位置 Cc~e-11・12G 溝内部の中央西部

主軸方位 N-26°-E 溝内部C'群

重複 86号・87号溝と重複するが、直接的新旧関係は不明である。

形態 2×4間(2.92m×8.44m・10.5尺×29.5尺)、面積27.74㎡の南北棟。柱間は桁側1.4~2.88m、梁側0.76~2.19m。桁側を5間と見ること可能で、桁側の柱間は概して狭い。北東角柱は土坑との重複で欠損した可能性がある。全体として側柱の通りは悪く、西辺中程のP7~P9は西に大きく外れる。間仕切りが多く、居室空間の存在が想定できる。柱数が北側桁方向に多い。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は隅丸方形と楕円形のもの混在し、長径23~61cm、短径20~44cm、深さ15~70cmで、大きなばらつきがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区20号掘立柱建物跡(第38図 付図3)

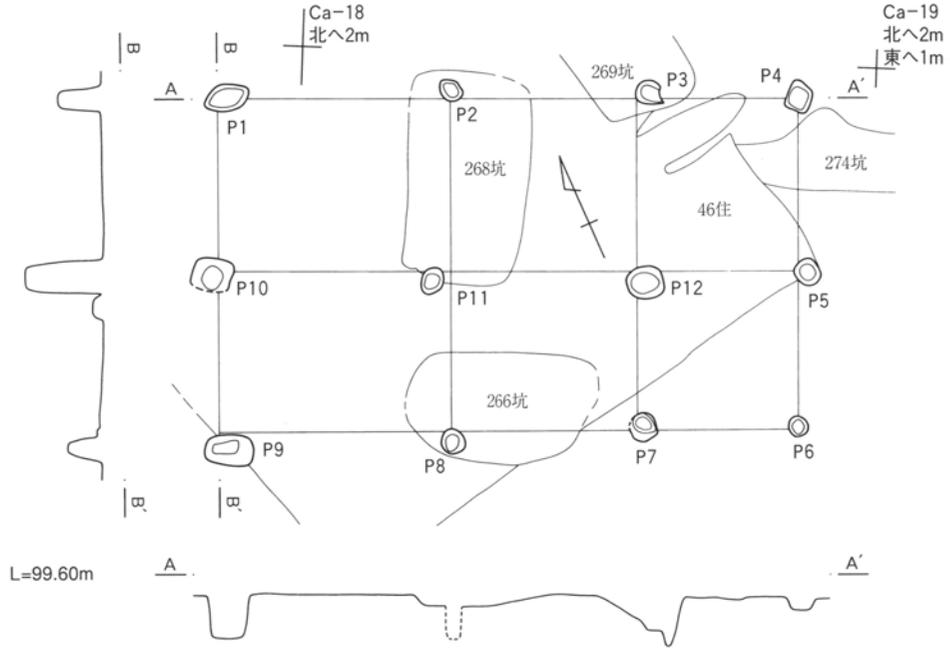
位置 C1-11・12G 散在部

主軸方位 N-50°-W 散在部A群

重複 なし

形態 2×2間(4.22~4.43m×5.4~5.62m・14尺×19尺)、面積24.63㎡の東西棟。柱間は桁側0.52~2.63m、梁側0.3~2.08m。桁側の柱配置は変則で、北辺では柱間2本でP1・P2の間隔が狭い。対して南辺は中央にP8を配置して柱間は大きい。東辺は梁側2間で、西辺は梁側1間とこちらも変則

7号掘立柱建物跡



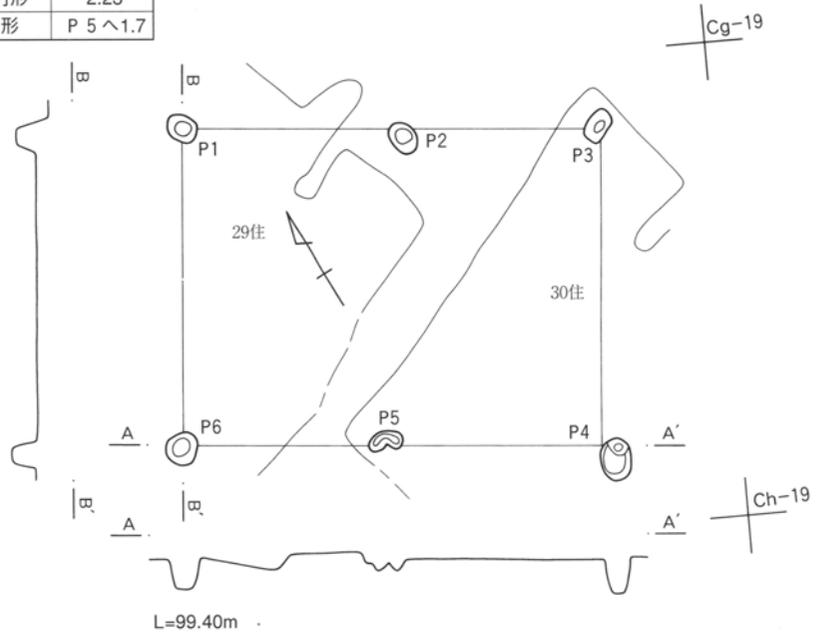
1区7号掘立柱建物跡 東西棟 総柱

建物全体規模	2×3間		面積			21.14 m ²
主軸方向	N-66.5°-W 庇 無し					
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 5.95	P 1	49	28	44.5	楕円形	2.33
	P 2	27	20	34.5	楕円形	2.08
	P 3	33	23	9	楕円形	1.55
東辺 3.44	P 4	35	27	12	隅丸方形	1.82
	P 5	30	25	48.5	円形	1.63
南辺 5.97	P 6	22	20	19.5	円形	1.62
	P 7	31	28	25.5	楕円形	2
西辺 3.69	P 8	27	24	52.5	円形	2.35
	P 9	50	31	36.5	楕円形	1.8
	P 10	48	35	80.5	隅丸方形	P 1へ1.9
	P 11	30	23	36.5	楕円形	2.23
	P 12	41	35	30.5	円形	P 5へ1.7

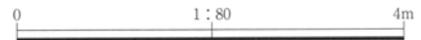
1区16号掘立柱建物跡 東西棟

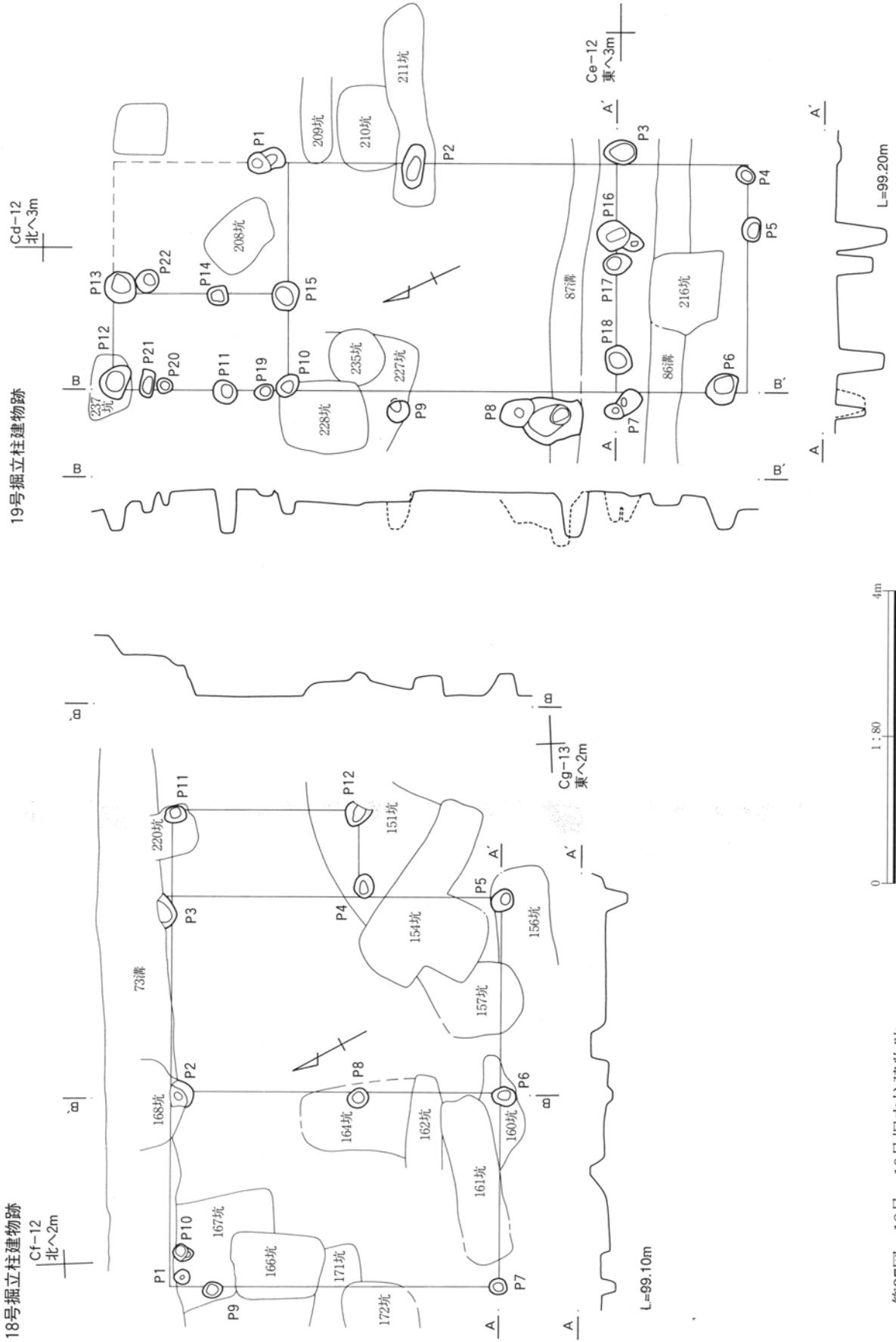
建物全体規模	1×2間		面積			14.55 m ²
主軸方向	N-59°-W 庇 無し					
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 4.35	P 1	35	27	24	楕円形	2.31
	P 2	36	26	19	楕円形	2.05
東辺 3.54	P 3	37	22	20	不整楕円形	3.54
南辺 4.52	P 4	45	32	37.5	楕円形	2.4
	P 5	36	14	18.5	不整楕円形	2.15
西辺 3.35	P 6	36	30	32.5	円形	P 1へ3.35

16号掘立柱建物跡



第36図 7号・16号掘立柱建物跡





第37図 18号・19号掘立柱建物跡

1区18号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	(2+1)×2間		面積		27.79 m ²	
主軸方向	N-61°-W		庇		東	
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 5.1	P 1	21	21	27	円形	2.53
	P 2	37	32	40	不整形円形	2.57
東辺 4.74	P 3	48	25	14.5	半円形	2.8
	P 4	35	28	22	楕円形	1.95
南辺 5.41	P 5	35	28	29.5	楕円形	2.75
	P 6	34	26	9.5	楕円形	2.68
西辺 4.35	P 7	25	22	20	円形	P1へ4.36
	P 8	29	25	11.5	楕円形	P6へ2.0
	P 9	29	24	23	円形	P1へ0.45
	P 10	28	21	29	円形	P1へ0.35
東庇 2.55	P 11	30	24	22	隅丸方形	2.55
	P 12	38	30	21.5	楕円形	—

1区19号掘立柱建物跡 南北棟

建物全体規模	2×4間		面積		27.74 m ²		
主軸方向	N-26°-E		庇		無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
(東辺)	P 1	52	28	42.5	楕円形	2	
	P 2	61	29	53.5	楕円形	2.88	
	P 3	45	34	17.5	楕円形	1.77	
南辺 2.92	P 4	28	21	22	楕円形	0.76	
	P 5	33	25	28	楕円形	2.19	
西辺 8.44	P 6	49	40	42	不整形円形	1.4	
	P 7	38	27	39.5	楕円形	1.46	
	P 8	50	38	39	楕円形	1.7	
	P 9	31	29	34	円形	1.52	
	P 10	36	26	28	楕円形	P19へ0.32	
	P 11	35	31	60	円形	P20へ0.86	
	(北辺)	P 12	49	35	29	楕円形	1.34
		P 13	45	44	65.5	円形	1.36
	P 14	30	25	15	隅丸方形	P15へ0.93	
	P 15	40	39	26.5	円形	P1へ1.9	
	P 16	46	40	70	隅丸方形	0.4	
P 17	40	29	51	楕円形	1.35		
P 18	41	37	64.5	隅丸方形	P7へ0.7		
P 19	27	22	8.5	楕円形	P11へ0.53		
P 20	23	21	19	円形	0.25		
P 21	38	20	29	楕円形	P12へ0.45		
P 22	32	30	35.5	円形	—		

である。

柱痕跡は確認できなかった。柱穴は楕円形および円形で、長径21~49cm、短径17~40cm、深さ6~41.5cmで、ばらつきがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区21号掘立柱建物跡 (第38図 付図3)

位置 A・Bb・c-19・0G 散在部
主軸方位 N-64°-W 散在部C群

重複 なし

形態 2×3間(4.12m×6.20m・14尺×21尺)、面積26.14m²の東西棟。柱間は桁側2.04~2.24m、梁側2.04m。四角の柱穴のうち、北西角・北東角は検出できなかった。北辺は中央のP1・P2のみ検出された。柱軸にのる。東辺はP3・P4のみが柱軸にのる。南辺は両角のP4・P6は柱軸にのるが、P5は南に外れる。西辺はP6のみが検出された。P6は柱軸にのるが、北側2本の柱穴は11号溝により失っている。北辺のP1・P2は柱軸にのる。柱穴は方形および楕円形で、長径25~44cm、短径22~38cm、深さ10~35cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区25号掘立柱建物跡 (第39図 付図3)

位置 Cr・s-16・17G

主軸方位 N-26°-E 散在部C群

重複 なし

形態 1×1間(2.16~2.40m×3.71~3.82m・8尺×12.5尺)、面積9.15m²の南北棟。柱間は桁側3.71~3.82m、梁側2.16~2.40m。東辺はP1・P2は柱軸にのる。南辺は西側のP3が東にやや偏る。西辺のP4は柱軸にのる。北辺のP4・P1は柱軸にのる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径36~48cm、短径23~43cm、深さ31~71.5cmである。

1×1間構造の建物は認定が難しいが、本遺構は重複がないことで可能となった。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区26号掘立柱建物跡 (第39図 付図3 PL9)

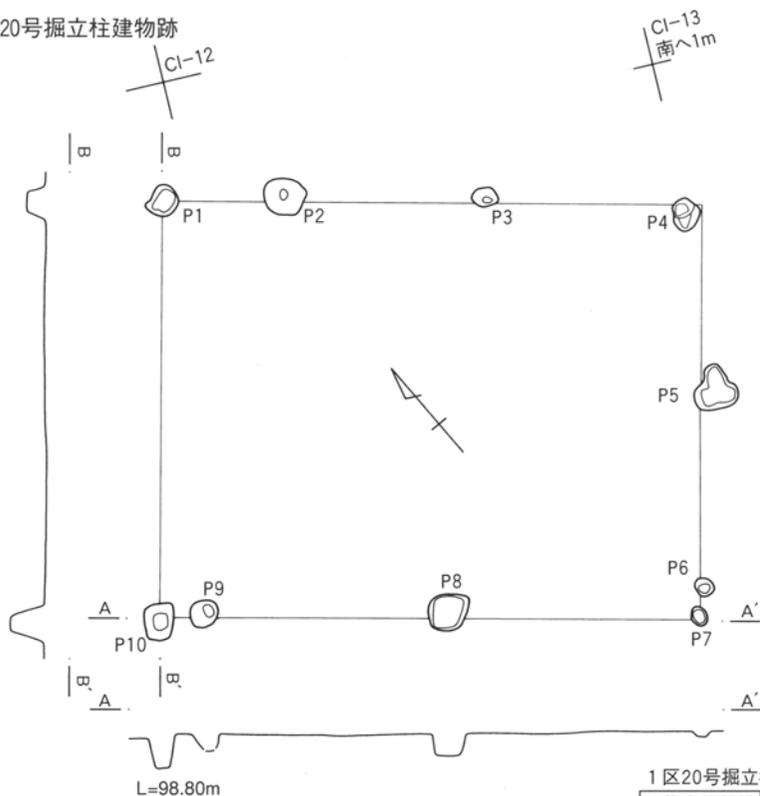
位置 Aa-12・13G

主軸方位 N-64°-W 散在部C群

重複 18号溝と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

形態 2×2間(3.08~3.14m×3.90m・10.5尺×13尺)、面積12.46m²の東西棟。柱間は桁側1.9~2m、梁側1.44~1.7m。四角の柱穴は柱軸にのる。

20号掘立柱建物跡



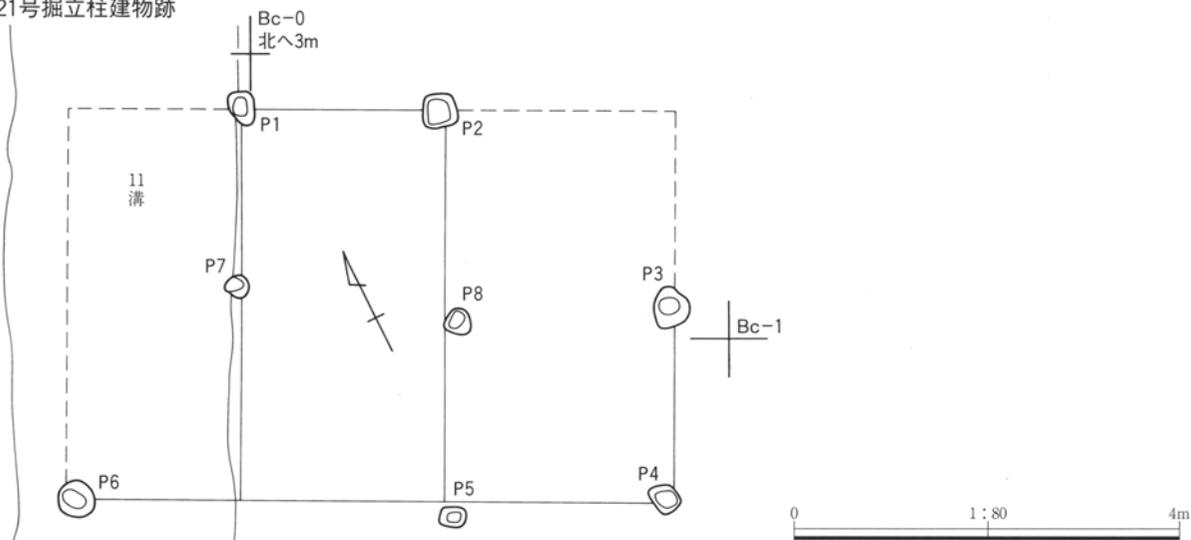
1区21号掘立柱建物跡 東西棟 総柱?

建物全体規模	2×3間	面積	26.14 m ²			
主軸方向	N-64°-W	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
(北辺)	P 1	38	27	32	楕円形	2.04
	P 2	41	34	10	隅丸方形	P 8へ2.23
(東辺)	P 3	44	38	28	楕円形	2.04
南辺 6.20	P 4	36	26	22	隅丸方形	2.24
	P 5	28	22	35	楕円形	P 6へ3.97
(西辺?)	P 6	40	37	11.5	楕円形	—
	P 7	25	23	21.5	楕円形	P 1へ1.88
	P 8	29	27	35	楕円形	P 5へ2.08

1区20号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	2×2間	面積	24.63 m ²			
主軸方向	N-50°-W	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 5.40	P 1	34	29	19	不整楕円形	1.23
	P 2	44	38	22	円形	2.11
	P 3	28	19	17	楕円形	2.07
東辺 4.22	P 4	36	28	22	楕円形	1.87
	P 5	48	40	15	不整楕円形	2.08
	P 6	22	18	6.5	楕円形	0.3
南辺 5.62	P 7	21	17	6	楕円形	2.63
	P 8	49	40	24.5	隅丸方形	2.48
	P 9	32	26	17.5	楕円形	0.52
西辺 4.43	P 10	43	30	41.5	隅丸方形	P 1へ4.43

21号掘立柱建物跡



第38図 20号・21号掘立柱建物跡

北辺の柱穴はほぼ等間隔で3本とも柱軸にのる。東辺も柱軸にのるが中央のP4はやや北側に偏る。柱の間隔はP4・P5間がやや長い。南辺の3本はほぼ等間隔で柱軸にのる。西辺はほぼ等間隔であるが中央のP8は外側に外れる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径27~53cm、短径25~39cm、深さ23~47cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区23号掘立柱建物跡 (第40図 付図3 PL9)

位置 Ah・i-13・14G

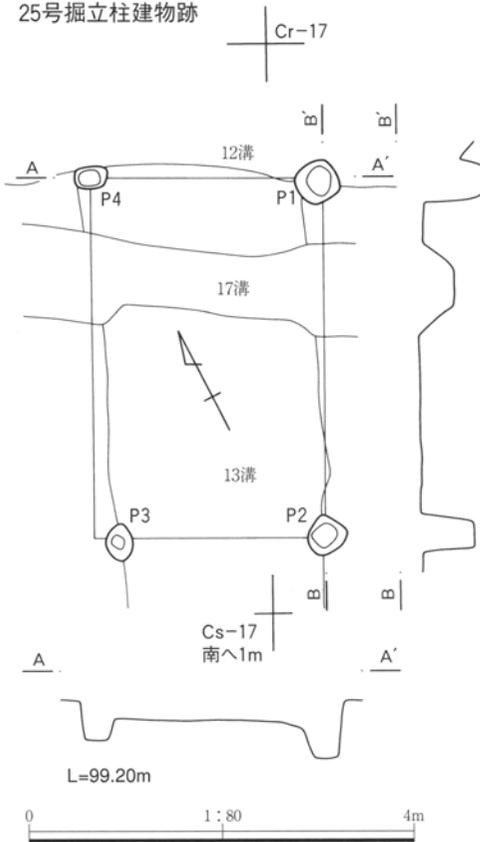
主軸方位 N-72.5° -W 南集中部B群

重複 無し

形態 3×2間(6.98~7.08m×3.76~3.79m・23.5尺×12.5尺)、面積26.45㎡の東西棟。柱間は桁側2.26~2.45m、梁側1.8~1.95m。四角の柱穴は柱軸にのる。北辺のP1~P4はほぼ等間隔に柱軸にのる。東辺も柱軸にのるが中央のP5がやや南に偏る。南辺は4本とも柱軸にのるが、P8・P9間がやや短い。西辺は中央の柱穴が検出漏れとなった。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径27~35cm、短径22~31cm、深さ22.5~39cmで、ばらつきが少ない。

内部施設 無し 出土遺物 無し

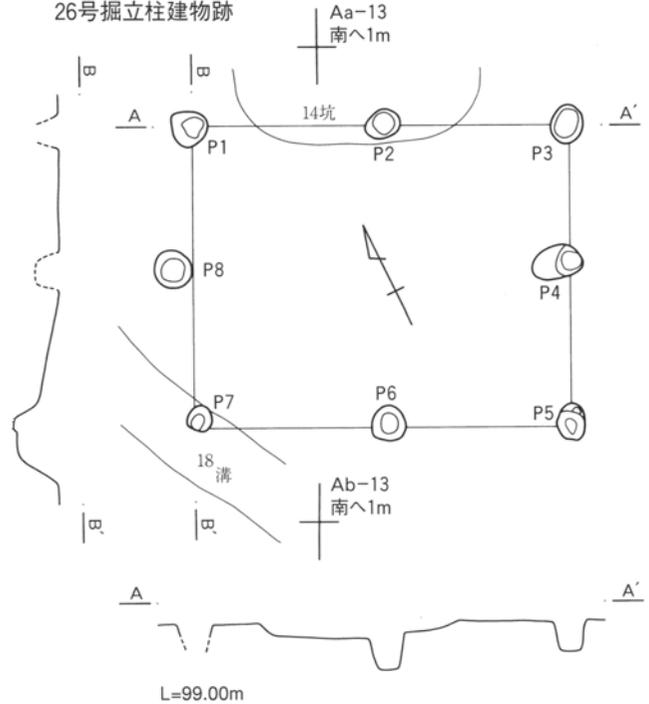
25号掘立柱建物跡



1区25号掘立柱建物跡 南北棟

建物全体規模	1×1間	面積	9.15㎡
主軸方向	N-26° -E	庇	無し
桁・梁行の規模(m)	柱穴 No	規模(cm) 長径 短径 深さ	形状 次柱穴との間隔(m)
東辺 3.71	P1	48 43 62	円形 3.71
南辺 2.16	P2	43 34 55	円形 2.16
西辺 3.82	P3	38 29 71.5	円形 3.82
北辺 2.40	P4	36 23 31	楕円形 P1へ2.40

26号掘立柱建物跡

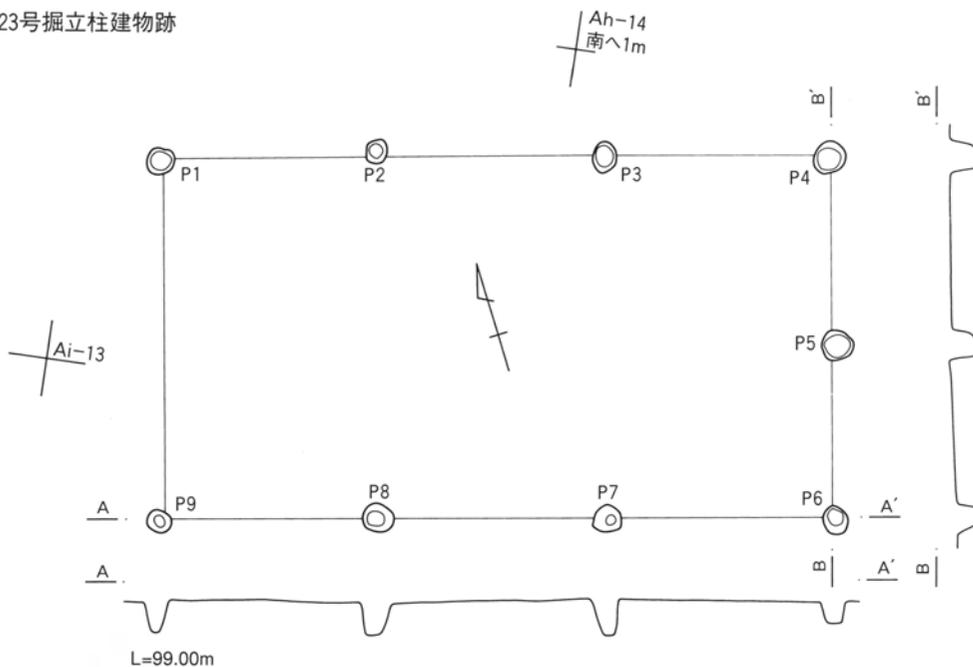


1区26号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	2×2間	面積	12.46㎡
主軸方向	N-64° -W	庇	無し
桁・梁行の規模(m)	柱穴 No	規模(cm) 長径 短径 深さ	形状 次柱穴との間隔(m)
北辺 3.90	P1	40 38 ?	不整円形 2
	P2	38 30 39	楕円形 1.91
東辺 3.14	P3	42 34 28.5	楕円形 1.44
	P4	53 33 43	円形 1.7
南辺 3.90	P5	37 29 ?	楕円形 1.9
	P6	37 35 47	円形 2
西辺 3.08	P7	27 25 24	円形 1.58
	P8	42 39 23	円形 P1へ1.53

第39図 25号・26号掘立柱建物跡

23号掘立柱建物跡



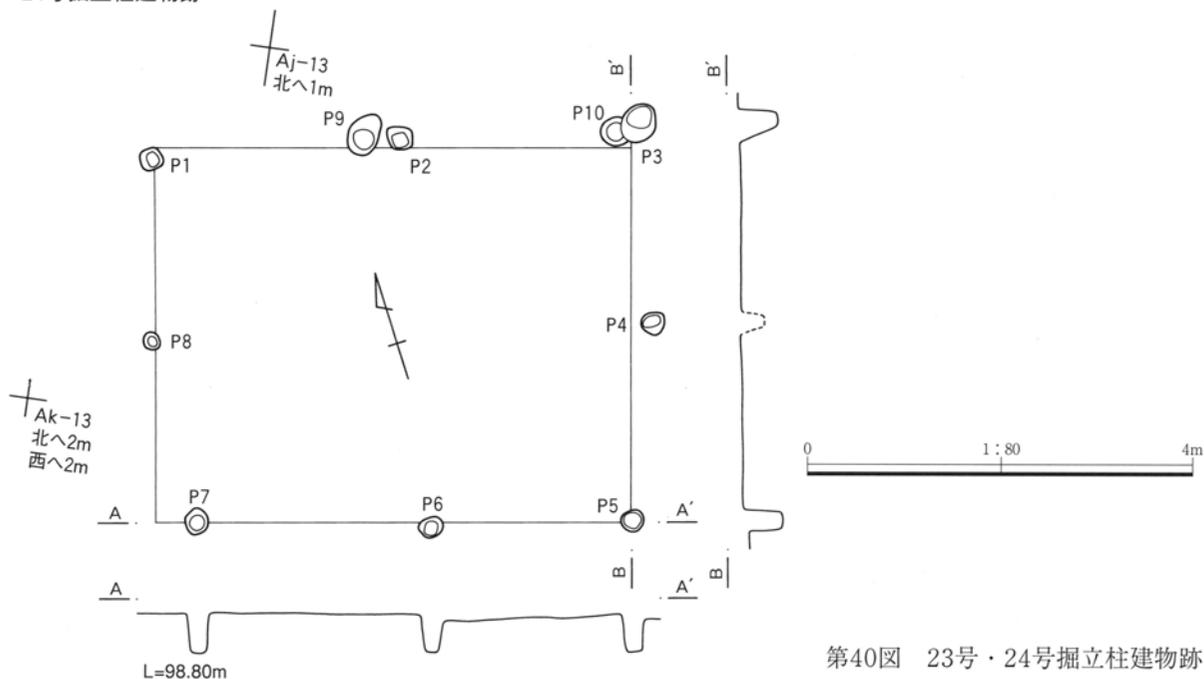
1区23号掘立柱建物跡 東西棟

遺物全体規模	3×2間	面積	26.45 m ²	
主軸方向	N-72.5°-W	庇	無し	
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)	形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径 短径 深さ		
北辺 6.98	P 1	31 28 33	円形	2.26
	P 2	27 22 35	円形	2.38
	P 3	33 25 28.5	楕円形	2.34
東辺 3.76	P 4	35 31 26.5	円形	1.95
	P 5	34 31 28	楕円形	1.8
南辺 7.08	P 6	30 26 22.5	楕円形	2.36
	P 7	32 28 39	円形	2.45
	P 8	33 28 32.5	楕円形	2.26
西辺 3.79	P 9	27 22 32	円形	P 1へ3.79

1区24号掘立柱建物跡 東西棟

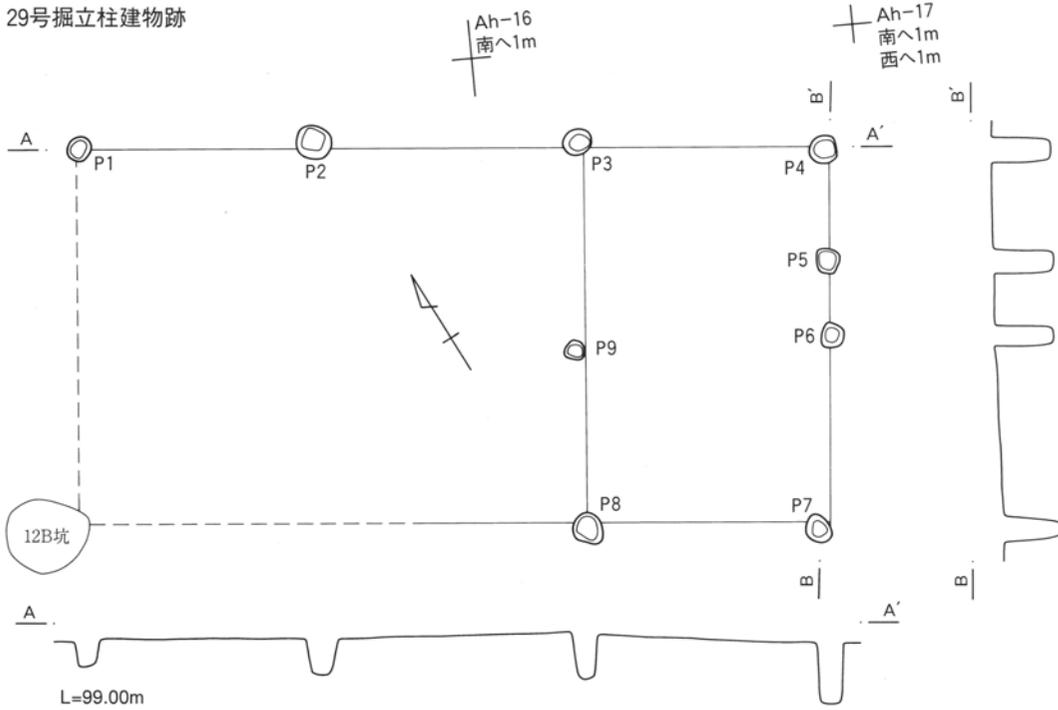
建物全体規模	2×2間	面積	19.62 m ²	
主軸方向	N-72°-W	庇	無し	
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)	形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径 短径 深さ		
北辺 5.12	P 1	25 22 34.5	隅丸方形	P 2へ2.61
	P 2	30 25 37.5	楕円形	2.51
東辺 4.22	P 3	42 34 40.5	楕円形	2.13
	P 4	25 22 26	楕円形	2.1
南辺 4.54	P 5	24 22 39.5	楕円形	2.1
	P 6	25 21 38.5	楕円形	2.44
西辺 3.85	P 7	28 24 40.5	円形	1.97
	P 8	19 16 9.5	円形	P 1へ1.91
	P 9	47 33 37.5	楕円形	P 2へ0.37
	P 10	30 29 37.5	円形	—

24号掘立柱建物跡



第40図 23号・24号掘立柱建物跡

29号掘立柱建物跡



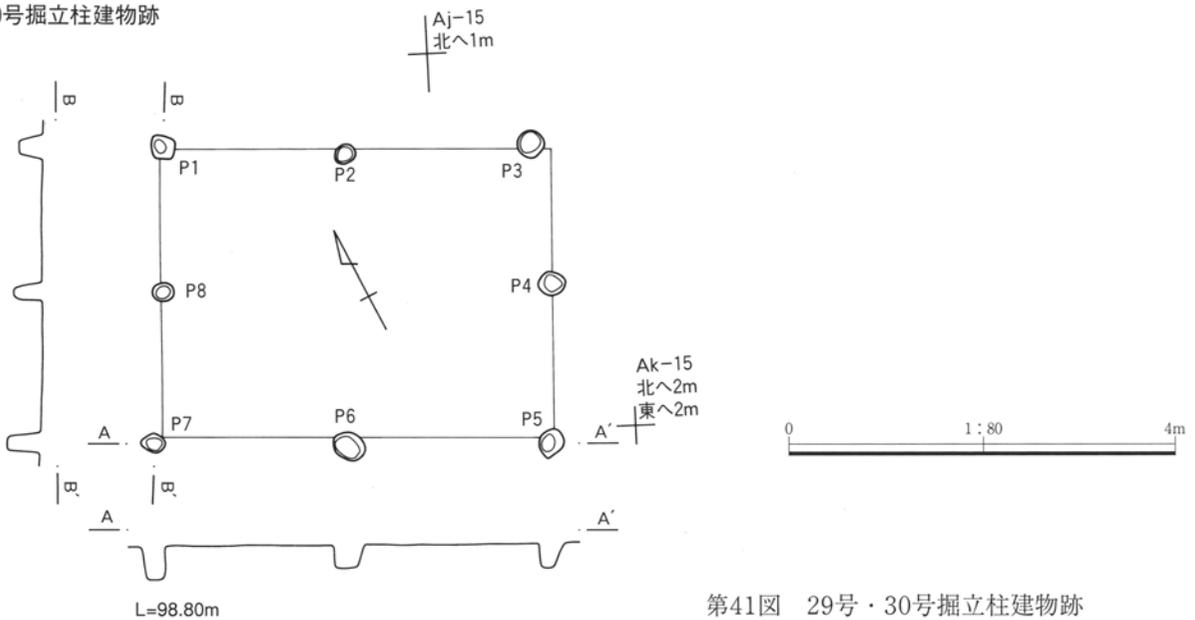
1区29号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	3×2間		面積	30.97 m ²		
主軸方向	N-59°-W		庇	無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 7.80	P 1	27	25	26.2	円形	2.45
	P 2	39	34	37.5	隅丸方形	2.79
	P 3	31	27	48.5	楕円形	2.55
東辺 3.98	P 4	32	30	62	楕円形	1.16
	P 5	30	24	62	楕円形	0.78
	P 6	27	23	61.5	円形	2.04
(南辺)	P 7	31	27	71	楕円形	2.44
	P 8	35	30	30	楕円形	1.87
	P 9	22	20	22.5	楕円形	P 3へ2.17

1区30号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	2×2間		面積	12.39 m ²		
主軸方向	N-62°-W		庇	無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 3.86	P 1	30	24	24	隅丸方形	1.93
	P 2	22	19	23	円形	1.93
東辺 3.16	P 3	29	27	42.5	円形	1.48
	P 4	28	26	31	円形	1.68
南辺 4.14	P 5	32	26	25	楕円形	2.12
	P 6	35	28	24.5	楕円形	2
西辺 3.13	P 7	26	20	35	楕円形	1.6
	P 8	23	20	27	楕円形	P 1へ1.53

30号掘立柱建物跡



第41図 29号・30号掘立柱建物跡

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

1区24号掘立柱建物跡 (第40図 付図3)

位置 Aj・k-12・13G

主軸方位 N-72°-W 南集中部B群

重複 無し

形態 2×2間(3.85~4.22m×4.54~5.12m・13尺×17尺)、面積19.62m²の東西棟。柱間は桁側2.1~2.51m、梁側1.91~2.13m。柱軸からやや外れる建物である。北辺のP1~P3はほぼ等間隔にあるが、P1は南側に偏り、P2・P3は外側に外れている。東辺のP3~P5もほぼ等間隔にあるが、柱軸にのるのは南東角のP5のみで、P3・P4は外側に外れる。南辺は3本とも柱軸にのるが、南西角のP7は東に偏り、P6の位置は中央より東に寄っている。西辺は南西角のP7が東に偏り、北西角のP1がやや南に偏っているが、中央のP8は等間隔で柱軸にのる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は隅丸方形・円形および楕円形で、長径19~47cm、短径16~34cm、深さ9.5~40.5cmで、P8が極端に小さい。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区29号掘立柱建物跡 (第41図 付図3 PL9)

位置 Ah・i-16・17G

主軸方位 N-59°-W 南集中部C群

重複 南西角に12B号土坑が重複するが、直接的新旧関係は不明である。

形態 3×2間(7.80m×3.98m・26.5尺×13尺以上)、面積30.97m²の東西棟。柱間は桁側2.44~2.79m、梁側0.78~2.04m。南西部は土坑との重複もあり、南西角・西辺・南辺の一部の柱穴が未検出となった。北辺はP1~P4がほぼ等間隔にあり、柱軸にのる。ただし、桁側の柱間が長すぎることから、北辺が柱穴列で伸びていて、建物はP3以下で構成される1×2間の南北棟である可能性もある。

柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径22~39cm、短径20~34cm、深さ22.5~71cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区30号掘立柱建物跡 (第41図 付図3 PL9)

位置 Aj・k-14・15G

主軸方位 N-62°-W 南集中部C群

重複 無し

形態 2×2間(3.16m×3.86m・10尺×14尺)、面積12.39m²の東西棟。柱間は桁側1.93~2.12m、梁側1.48~1.68m。四角の柱穴のうち、北東のP3はやや西に偏るが、他は柱軸にのる。北辺のP1~P3はほぼ等間隔である。東辺はP4がやや北に偏るが、P4・P5は柱軸にのる。南辺はほぼ等間隔で柱軸にのる。西辺もほぼ等間隔で柱軸にのる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径22~35cm、短径19~28cm、深さ23~42.5cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

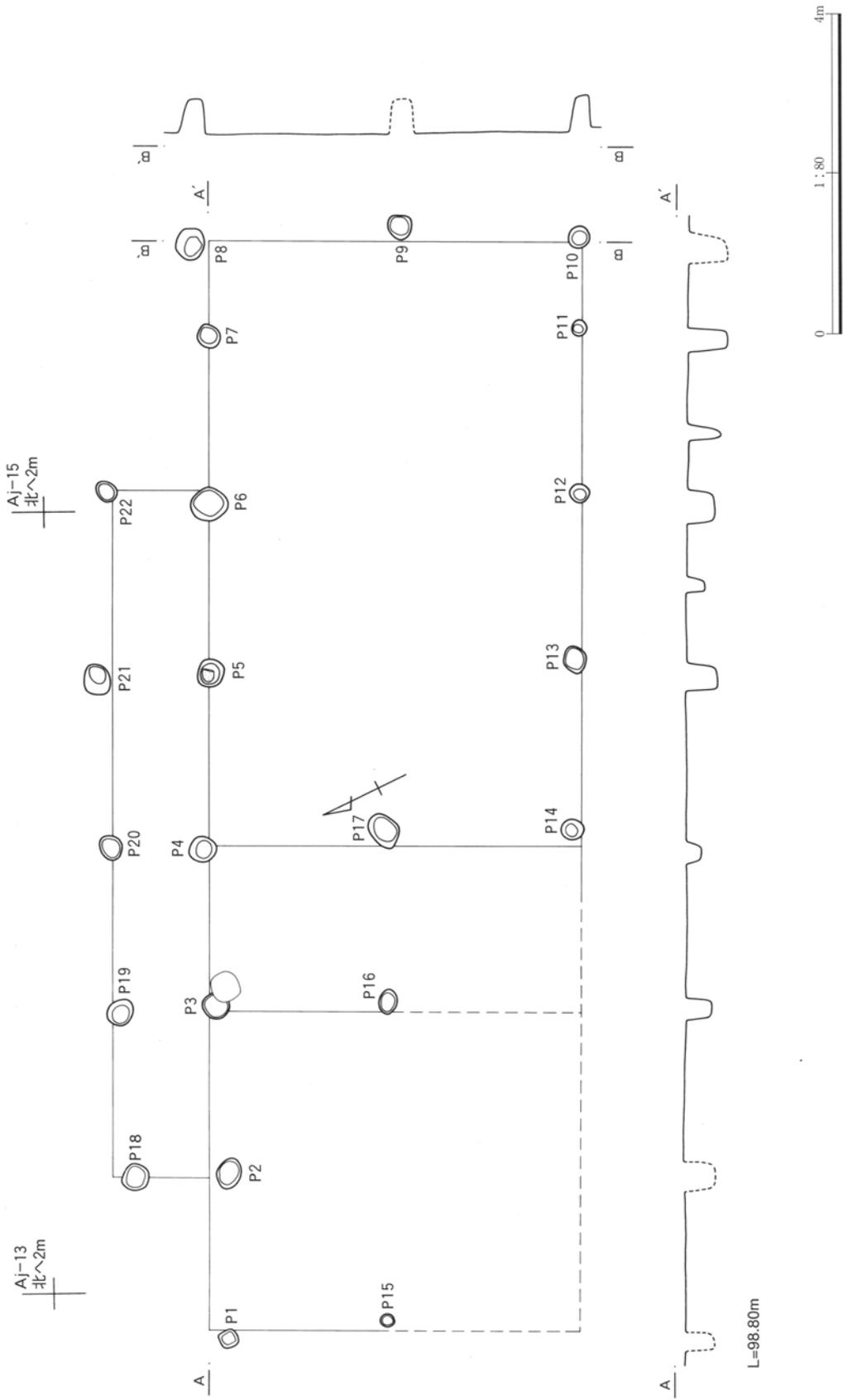
1区27号掘立柱建物跡 (第42図 付図3 PL9)

位置 Aj・k-12~15G

主軸方位 N-63°-W 南集中部C'群

重複 24号・30号掘立柱建物と重複するが、直接的新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は7×2間(13.96m×4.87m・39.5尺×16尺)、面積76.04m²の東西棟。北側に1.3mの間隔をとって庇が付き、全体として13.96×6.17mの規模となる。庇は北辺全面でなく、中央の4間分のみ付いている。柱間は桁側1.16~2.25m、梁側2.02~2.61m。北辺P1からP7はほぼ等間隔で、柱軸にのるが、P7・P8間はやや短くなっている。またP8はやや外側に外れる。東辺はほぼ等間隔であるが、P8が北に外れ、中央のP9も東に外れる。南辺は、南西角を含め西半分の柱穴が検出できなかった。P10~P14の柱穴は北辺と対応した位置にあり、柱軸にのっている。西辺は南西角を欠き、北西角のP1も南にずれる。中央のP15は小さく、西辺の中央でなく北に偏った位置にある。庇の柱穴は身舎の北辺と対応する位置にあるが、西端のP18はやや南にずれている。P16・P17は梁側の間柱の位置にあるが、間仕切りであると同時に構造上棟持ちと



第42图 27号掘立柱建筑物跡

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

1区27号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	7×(2+1)間	面積	76.04 m ²				
主軸方向	N-63°-W	庇	北				
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 13.96	P 1	25	22	35.5	隅丸方形	2.12	
	P 2	38	29	38.5	楕円形	2.13	
	P 3	35	32	32	円形	2	
	P 4	36	32	22	円形	2.25	
	P 5	37	33	38.5	楕円形	2.18	
	P 6	48	43	35	隅丸方形	2.15	
	P 7	32	28	46.5	楕円形	1.16	
東辺 4.87	P 8	41	34	47.5	楕円形	2.61	
	P 9	33	30	43	円形	2.25	
(南辺)	P 10	28	27	51	円形	1.16	
	P 11	21	18	42	円形	2.1	
	P 12	25	23	35	円形	2.12	
	P 13	36	29	32	隅丸方形	2.2	
	P 14	31	26	39	円形	P17へ2.35	
	(西辺)	P 15	17	15	33	円形	P1へ2.02
		P 16	32	23	30.5	楕円形	P3へ2.18
		P 17	47	34	26.5	楕円形	P4へ2.3
	北庇 8.80	P 18	35	33	36.5	円形	2.1
		P 19	36	31	30	楕円形	2.12
P 20		33	27	29	楕円形	2.19	
P 21		40	32	44	楕円形	2.37	
P 22		28	23	59	円形	P6へ1.3	

して配置された傾向も見える。

柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形と円形・楕円形のもの混在し、長径17~48cm、短径15~43cm、深さ22~51cmである。庇部分の柱穴は長径28~40cm、短径23~33cm、深さ29~59cmで数値にばらつきがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区28号掘立柱建物跡 (第43図 付図3)

位置 A j - 9 ~ 11 G

主軸方位 N-66°-W 南集中部C'群

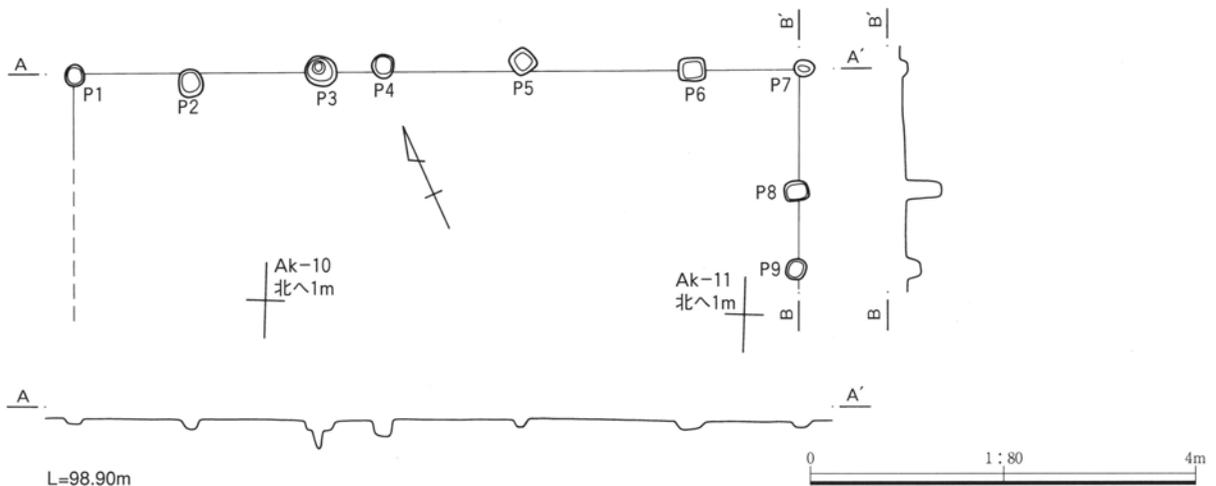
重複 無し

形態 6×2間以上(7.62m×1.36m以上・25.5尺×7尺以上)の東西棟。柱間は桁側0.67~1.78m、梁側0.8~1.28m。南半分が検出できなかった。北辺は間隔にばらつきがあり、P2は内側、P5は外側にやや外れている。東辺は柱軸にのるが、間隔は異なっている。柱数が多く、概して柱間が狭い傾向がある。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は隅丸方形と楕円形・円形のもの混在し、長径22~34cm、短径18~31cm、深さ7~38cmで、ばらつきがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

1区28号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	6×2間以上	面積	測定不可			
主軸方向	N-66°-W	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 7.62	P 1	23	19	8	円形	1.21
	P 2	29	25	11	円形	1.35
	P 3	34	31	30.5	楕円形	0.67
	P 4	25	22	17	円形	1.45
	P 5	30	25	8	隅丸方形	1.78
	P 6	31	24	10	隅丸方形	1.16
(東辺)	P 7	22	18	7	楕円形	1.28
	P 8	26	20	38	隅丸方形	0.8
	P 9	24	21	14.5	円形	-



第43図 28号掘立柱建物跡

B. 溝 (第44~64図 付図1 P L10~16・36~44
遺物観察表P.273~278・283~286)

1区では90条の溝が検出された。これらの溝には、自然地形に沿って台地の縁に掘られた溝、圃場整備直前の地割りと一致する溝、台地内部を方形に区画する直線的に掘られた溝等がある。ここではこれらの区分によって、方向や形態が近似した群ごとに記述する。記述にあたって、方向や規模、位置関係、埋没土の特徴、出土遺物の他、全体構造にかかわる点について留意した。しかし本調査の工程は限られており、すべての遺物の出土位置や新旧関係、埋没土の土層断面等のすべてを記録できなかったことは否めない。したがって、溝の時期については確定できないので、記述した溝群や関連性を触れた他の遺構がすべて同時期に存在したとはいえない。

自然地形に沿った溝

15号・18号溝は台地部の南西裾部を北西から南東の方向に掘られている。15号溝は幅1.01m、深さ0.65m、調査長34.8mである。これが台地縁辺であることは、1区南西部で検出された古代水田の範囲がこの溝の南側であることからわかる。埋没土は15号溝の記載(第47図)が残るが、軽石とローム粒を含む灰色土・黒色土であり、溝底面に砂の堆積はない。低地部で検出された818年の地震に伴う洪水層は検出されなかった。15号溝は19号、14号溝と、18号溝は19号溝と重複するが、新旧が判明しているのは19号溝が新しく、15号溝が古いという関係だけである。15号・18号溝ともに出土遺物はない。

20号溝は台地の西端をほぼ南北方向に掘られている。緩やかに蛇行し台地西裾を廻っている。幅3.5m、深さ0.71mの葉研掘りの溝で、調査長は32.8mである。埋没土は軽石粒やローム粒を含む黒色土であるが、底面付近の一部に砂の堆積が認められている。21号溝と重複するが、21号溝の方が新しい。出土遺物は18世紀後半の瀬戸碗と17世紀と見られる瀬戸天目碗(473)の破片が出土しているのみである。調査では溝の一部しか掘ることができなかったが、北側は赤城神社北方、2区との間にある谷の東縁の

溝につながると推定される。南側は先述の15号溝・あるいは18号溝につながると推定される。

なお洪水層下水田に伴って検出された溝は18号溝の南西部をやや南へ方向を変えて掘られている。この溝は水田用水であるが、水源の特定は難しいが、圃場整備前の地割りと比較すると、北西方向から流下する荒砥川低地からの水路との関連が推定できる。2区東谷地には818年の洪水堆積物は検出されていないので、2区東谷地-20号溝からの配水は考えられない。

82号溝は1区台地東縁を南北方向に掘られている。規模は幅1.2m、深さ0.32m、調査長13.9mである。埋没土はローム粒を含む褐色土、軽石粒を含む黒色土である。出土遺物はない。

83号溝も1区台地東縁を南北方向に掘られた溝である。規模は幅2.25m、深さ1.0m、調査長6.92mである。埋没土は軽石粒・ローム粒を含む灰褐色土主体で中層に灰色砂のラミナ堆積が見られた(第51図)。出土遺物はない。

82号・83号溝にほぼ平行して圃場整備直前にも水路があり、台地上東縁に掘られる溝の位置は継続していたものと考えられる。

80号・81号溝は1区台地東縁のさらに東側の低地沿いを北から南に掘られている。『荒砥宮田遺跡I』ではこの溝を周辺から出土している4世紀の土器を重視して、古墳時代の溝として報告した。しかし4世紀の土器は溝の埋没土中の出土であること、遺物の精査によって80号溝から中世の瀬戸おろし皿破片が出土していることが判明したことから、既報告の時期を中世以降と修正する。

圃場整備直前の地割りと一致する溝

40号・41号溝は、1区台地のほぼ中央を東西に掘られている。40号溝には圃場整備直前の水路が重複し、南側の41号溝は埋まって道路になっていた。土層断面の観察でも、40号溝が41号溝より新しい(第48図)。規模は東端断面でみると40号溝は幅1.8m、深さ0.89m、調査長は62.0mである。41号溝は幅2.9m、深さ1.47m、調査長62.1mである。



第44図 1区溝と圃場整備直前の地割り

埋没土は軽石粒やローム粒を含む灰褐色土で、砂が堆積していたのは圃場整備直前の用水路部分だけであった。掘削当初の機能は用水路ではなかったと考えられる。

出土遺物はすべて2条の溝の埋没土一括で取り上げている。263点の土師器・須恵器の他、192点の中近世および近現代の土器が出土している。また石鉢破片(第55図S170)や砥石(S173・S174・S175)が出土している。その中で中世と見られる土器は常滑甕胴部破片2点、可能性のある瀬戸天目茶碗の破片1点のみであり、そのほとんどは近世～現代の遺物である。このような土器の出土状況から掘削は近世以降と考えられる。

台地内部を方形に区画する溝

荒砥宮田遺跡I区の台地は、中世から近代にかけて、方形を基調にした地割りが重なってきたものと思われる。その区画の痕跡は溝として残されているが、出土遺物が混在していること、土層断面の記録が網羅出来ていないこと等の理由から、その変遷を詳細に復元することはできない。ここではその足がかりとするため、それぞれの走向が近似する主な溝群のまとめりに記述する。

91号溝は1区北西部で検出された。溝内部B群の掘立柱建物の主軸方向と近似する溝である。走向はほぼ南北方向である。規模は幅1.34m、深さ0.4m、調査長19.8mである。出土遺物は全く無いので、時期は不明である。溝内部の西側を一時期画する溝と見られる。5号建物の他、259号・261号土坑と主軸方位がほぼ一致する。

14号溝は1区中央やや南側で検出された。91号溝とほぼ直交する位置にあり、走向はほぼ東西である。規模は幅2.97m、深さ0.45m、調査長38.3mである。南集中部の掘立柱建物と主軸方位が一致する。出土遺物は全く無いので、時期は不明である。

62号溝は溝内部C群の掘立柱建物の主軸方向と近似する溝である。北端は94号溝に切られている。南端はやや東に廻り込んでおり、建物群を囲むような位置形状である。幅1.4m、深さ0.73m、調査長35.6

mである。出土遺物は、混入と見られる土師器16点の他、17世紀と見られる瀬戸・美濃天目碗(第54図493)と中世内耳鍋胴部破片が埋没土中から出土した。

43号溝は溝内部C群の掘立柱建物と同時期と考えられる。これはC群内の17号掘立柱建物の東辺が本溝と平行になるように変形されていることによる。44号溝と重複しているが、土層断面の観察から本43号溝が古いことがわかっている。南端は40・41号溝に切られるところまでしか検出できなかった。それより南が不明である。

本溝は出土遺物がなく時期を明確にしたいが、時期を考える上で示唆的なのは、溝の東側に並ぶ堅穴状遺構である。これらの一部からは中世の遺物が多く出土している。これらの堅穴状遺構が中世ならば、重複せず平行する位置にある43号溝も同時期の可能性は高い。同じように溝内部C群との関連が示唆される62号溝の東側にも堅穴状遺構が2基並ぶことが共通している。

98号溝は43号溝の南延長線上にあり、同一の溝の可能性が高いと思われる。幅1.13m、深さ0.64m、調査長70.2mである。出土遺物は全く無い。さらに南には5号堅穴状遺構が北部の遺構群の延長にあり、98号溝以南にも同様の土地区画が続いていた可能性もある。

37号溝は43号溝とほぼ直交する位置にある。両溝の交点付近には古墳時代前期の19号住居があり、両者の関係を確認できていない。37号溝は幅0.8m、深さ0.58m、調査長18.7mである。出土遺物は無い。本溝は堅穴状遺構群を含む区画南限の溝である可能性があるが、1基だけ南に離れて5号堅穴状遺構があり、確定はできない。

19号溝は1区中央やや南側で検出された。43号溝にほぼ直交し、37号溝に平行する。規模は幅1.82m、深さ0.72m、調査長50.8mである。出土遺物は無いので時期は不明である。南集中部C群の掘立柱建物の主軸方向に一致する。

44号溝は先述した43号溝と若干方位を変えて同様のところにある。44号溝の方が新しい。北端は発掘

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

区域外で不明である。南端は西に折れて72号溝・73号溝として記録した溝と一連の溝と考えられる。さらに73号溝西端には連続はしないが、南に折れる59号溝があり、これも関連するかもしれない。これらの溝は、溝内部C'群の掘立柱建物群との関連を考えることも可能であるが、13号掘立柱建物北辺との距離が至近であることは一考を要する。

44号溝は幅1.73m、深さ0.68m、調査長37.1mである。72号溝は幅2.28m、深さ0.77m、調査長16mである。73号溝は幅2.3m、深さ1.05m、調査長27.2mである。72号溝と73号溝の間には掘り残しによる土橋が残されている。土橋の幅は1.6m、長さ2.03mである。44号溝の出土遺物は無い。72号溝は混入と考えられる縄文土器4点、土師器150点、須恵器5点が出土しているが中近世の土器の出土はない。敲き石(第62図S268)、磨り石(S275)、粉挽き臼(S276・S277)等の石製品が出土している。73号溝は土師器28点のほか、瀬戸・美濃陶器のすり鉢(17世紀、江戸)、碗(17世紀末～18世紀)、黄瀬戸折縁皿(第61図495、14世紀中葉から後葉)、かわらけ(494、中世)、内耳鍋胴部破片・底部破片が埋没土中から出土している。遺物からは時期を確定することは困難といわざるを得ない。

59号溝は幅1.31m、深さ0.75m、調査長16.2mで、73号溝と北端で重複するが新旧関係は不明である。出土土器や石器はなく、埋没土中から寛永通寶(第63図M34)が出土している。

75号溝は44号・72号・73号溝の区画の内側(北側)に72号・73号溝にほぼ平行してある。75号溝にも中央やや東寄りに土橋が残されており、ちょうど南側の72号・73号溝の土橋の北側にある。これらの溝が同時にあったかどうかは不明であるが、二重の堀に囲まれた区画を想定することも可能である。

75号溝の規模は幅1.36m、深さ0.81m、調査長43.1mである。出土遺物は混入と考えられる土師器9点と、瀬戸美濃反皿(第63図499、17世紀)、中世の軟質陶器焙烙(496)、内耳鍋(497)、かわらけ(498)、砥石(S195)が埋没土中から出土している。

本溝も出土遺物から時期を決定する決め手を欠くが、72号・73号溝と出土傾向は同様である。

またこれらの溝による区画内部の東部には、方向が一致する61号・245～251号・255号・256号・265号・274号土坑があり、一定の間隔で平行してあり、区画の存在を想定させる。

42号溝は44号溝のほぼ4m東側に平行する。44号溝のように西に折れず、そのまま南にのびている。南部分は33号溝として記録した。42号溝は前述した堅穴状遺構群に重複しているが、20号堅穴状遺構との重複関係から、42号溝の方が新しいことが判明している(第49図)。出土遺物は混入と考えられる土師器12点と、瀬戸美濃鉄絵皿(第54図478、17世紀前半)、中世軟質陶器内耳鍋(479他3点)、焙烙1点、かわらけ(477)、砥石(S176)等が出土している。

94号・20号・68号溝は、比較的幅が広く深い溝である。いずれも方形区画の隅部が検出された。

94号溝は1区北西隅で検出された。区画溝の南東隅が検出された。規模は幅3.29m、深さ2.39m、調査長14.2mである。91号溝と重複するが、94号溝の方が新しい。埋没土は軽石とローム粒を含んだ褐色土である。砂の堆積はない。出土遺物は混入と考えられる土師器43点、須恵器2点のほか、44点の中近世以降の土器が出土した。陶器は17世紀前半と見られる黄瀬戸鉢(第64図539・540)や中世の常滑甕(543・546)等が出土しており、磁器の出土は無い。軟質陶器は中世から江戸にかけての内耳鍋・焙烙・すり鉢が埋没土中から出土した。石製品は砥石(S196・S197・S198)がまとまって出土した。出土した土器にはやや時間幅があり、溝の時期を確定することはできない。

21号溝は1区中央の台地西縁で検出された。方形区画の北東部が検出されたものと推定される。規模は幅2.43m、深さ1.15m、調査長36.9mである。東辺には掘り残しの土橋がある。20号溝と重複しているが、土層断面から本21号溝の方が新しいことがわかっている(第47図)。出土遺物は混入と考えられる縄文土器1点、土師器32点、須恵器1点のほか、

中世と見られる瀬戸美濃おろし皿(第54図474)、焙烙(475)、火鉢(476)、石鉢(S169)が出土している。江戸期の可能性のある焙烙破片も出土しているが、比較的中世の遺物がまとまっており時期を示唆するが、確定的ではない。

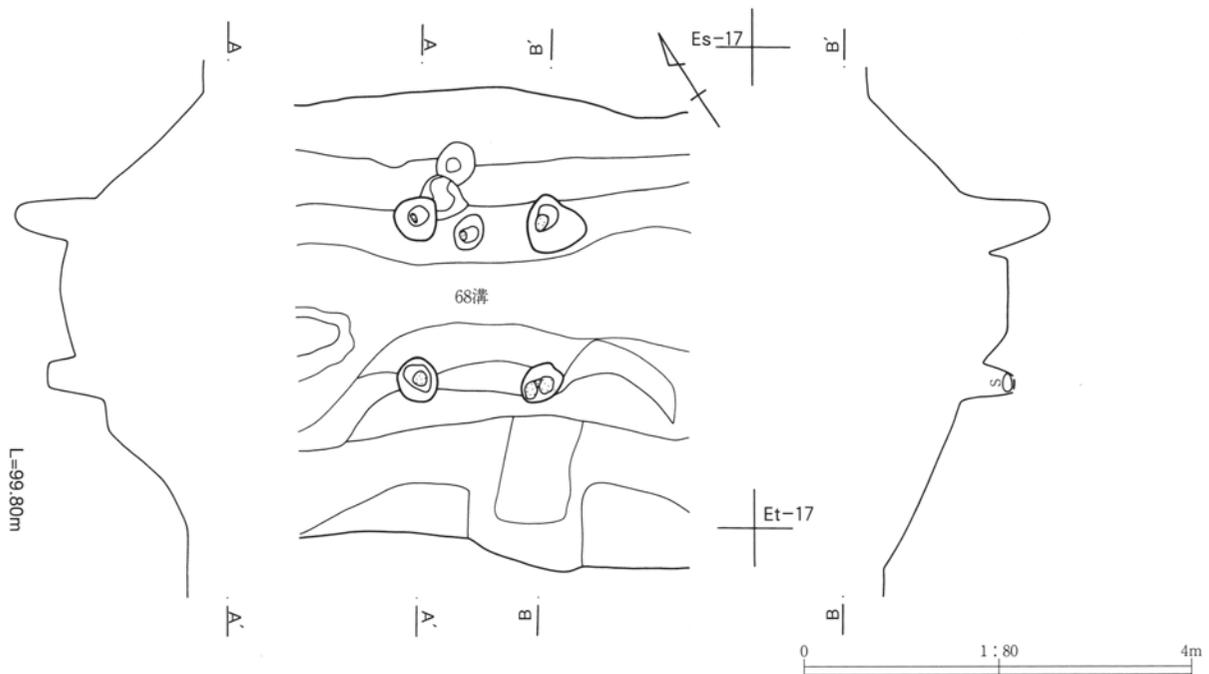
68号溝は1区北辺で検出された溝で、東半分を調査できた。区画溝の南東隅にあたる。65号溝、67号溝と重複するがいずれの溝より古い(第50図)。底面中央に掘り残り部分があり、2条の溝になっているが、同時に掘られたものと土層断面からは判断できる。埋没土はローム粒を含む茶色土であるが、中に灰色砂層の記載がある。67号溝は、68号溝の北縁に沿って掘られており、68号溝以来の地割りを残す時期に掘られたと考えられる。

出土遺物は混入と考えられる土師器223点、須恵器24点の他、中近世以降の陶器33点、磁器4点、軟質陶器118点が埋没土中から出土した。陶器には12～13世紀のものと思われる常滑の片口鉢(第56図513)や甕(517)や、17世紀を中心とする瀬戸美濃皿類(505～511)がある。磁器は江戸期の肥前青磁皿(512)や17世紀前葉から中葉の肥前碗(514)や15世紀と見られる中国白磁皿(515)がある。軟質陶器は中

世と見られる内耳鍋破片(第57図516・525・528・529)や江戸期まで下ると見られる焙烙(519・520・521・522・523・524・526)も埋没土中から出土している。また16世紀と見られるかわらけの完形品(第56図530)がEs-17グリッドの底面上16.5cmのところで出土している(PL14)。出土遺物には時間的に幅があり、68号溝の時期の決め手を欠くが、完形のかかわらけが底面付近で出土しており、68号溝の時期に近いものと推定する。また多くの砥石(第58図S181～S192)や、軽石製の円形砥石(S258)磨り石(第59図S193・S266・S180・S267)や敲き石(S179・S280)、粉挽き臼(第60図S194・S206)、五輪塔空風輪(S279・S177)、水輪(S178)、台石(S281)などの石製品・石造物が出土した。

また発掘区西端の底面に4基の橋脚柱穴が検出された。橋脚の幅は1.33m、長さは1.67mである。前述した72号・73号溝の土橋の方向との関連性が考えられるが、若干本溝の橋が西にずれている。橋の方向と位置が一致するのは、後述する52号・53号溝と66号溝の間の空間であり、これが橋につながる側溝をもつ道の可能性も考えられよう。

この52号・53号溝や66号溝は比較的幅が狭く、浅い



第45図 1区68号溝 橋脚ピット

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

溝が直線的に掘られている。同様な形態を示す溝は、1区北半部を東西に二分しさらに南北に三分割するような配置を見せ、内部を区画するように見える。これらの溝を北から順に記述する。

52号・53号溝は1区ほぼ中央に南北方向に掘られている。52号溝の規模は幅0.38m、深さ0.52m、調査長は26.2mである。53号溝の規模は幅0.7m、深さ0.75m、調査長は全体で46.4mである。この溝は40・41号溝で切れとぎれるが、南側の延長線上には30号・29号溝がある。これらは規模や方向が一致することから、一連の溝の可能性もある。そうすると全体の調査長は85.5mとなる。

心芯間で4.5～5m隔てて、東側には66号溝がある。規模は幅0.63m、深さ0.14m、調査長は20mである。66号溝も72号・73号溝でとぎれるが、南側には51号溝があり、一連の溝と考える。全体の調査長は102.3mとなる。

出土遺物は52号・53号・30号・29号溝は混入と考えられる土師器3点のほか、中世から江戸と考えられる瀬戸美濃の碗の破片、中近世の焙烙破片、近現代の鍋破片が出土しているのみである。66号・51号溝は混入と考えられる土師器1点のほかは出土遺物が無い。

埋没土の記載は無く、68号溝との比較等はできない。68号溝底面近くで出土したかわらけの時期が中世とすれば、橋使用の時期もその前後となり、52号・53号・30号溝と66号・51号溝を側溝とする道の時期もそのころになるが、決め手に欠ける。

52号・53号溝の西側には、平行する93号溝、88号溝があり、ほぼ直交する87号・86号溝と、25号・26号溝、27号・28号溝が三分するような位置に掘られている。北側の区画には96号溝や方形に廻る89号溝があり、内部の区画に関係するように見える。中央の区画には東西方向の85号・64号溝、方形に廻る54号・55号・56号・58号溝があり、内部区画を推定させる。南側の区画には溝はない。これらの溝はいずれも幅0.35～0.83m、深さ0.16～0.52mで共通する。埋没土は記載がなく詳細は不明である。出土遺物は

無い。

66号・51号溝の東側も西側と同様に、南北を三分する位置に79号・39号溝が、さらには南側にやや狭い間隔をおいて36号溝がある。北側の区画には内部を区画する溝はない。中央の区画には45号・46号・47号・48号・71A号溝が方形にL字形にあり内部を区画している。これらの溝はいずれも幅0.57～0.9m、深さ0.15～0.31mで共通する。埋没土は記載がなく詳細は不明である。出土遺物は46号溝に土師器6点、47号溝に土師器4点が出土しているほか、46号溝に15世紀頃と考えられるかわらけ(第54図480)や軟質陶器破片が出土しているのみである。

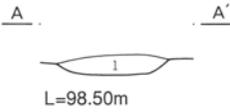
その他の溝

以上区画を想定できる溝以外に、いくつかの溝が存在する。溝内部のなかには後述する細長方形土坑と形態的に区別できないものも溝として記録したものがあつた。これについては溝の記述からはずすとことし、溝一覧表(P.260～261)に明記した。

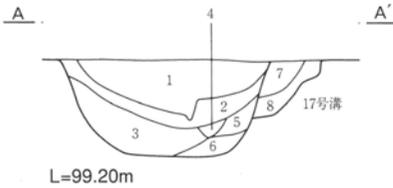
また、1区中央部にある11号・13号・38号溝はそれぞれ幅2.86m、深さ0.48m、幅2.78m、深さ0.76m、幅2.30m、深さ0.20mの形態の一定した溝である。断面形も箱形で、他と異なる。埋没土も表土に似た軽石細粒を多く含む灰色土であることから、新しい時期の耕作に関わる痕跡と考えたい。

Cqラインから南には、緩やかに湾曲する東西方向の12号・16号・17号・32号溝が掘られている。これらは台地を東西に掘り込んでおり、圃場整備前の地割りとも一致しない。また直線的に掘られた他の区画溝とも異なっている。それぞれの規模は12号溝が幅1.7m、深さ0.82m、調査長30.4m、16号溝が幅1.42m、深さ0.31m、調査長30.1m、17号溝が幅1.14m、深さ0.45m、調査長29.6m、32号溝が幅1.2m、深さ0.43m、調査長5.48mである。12号溝の埋没土は軽石粒・ローム粒を含む灰色土、17号溝は軽石粒・ローム粒を含む灰褐色土層の中部に砂層を挟む。16号溝は記載がなく不明である。17号溝は12号溝より古い。出土遺物は12号溝で混入と

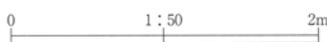
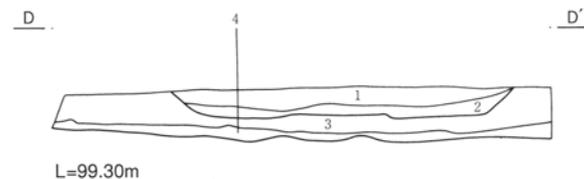
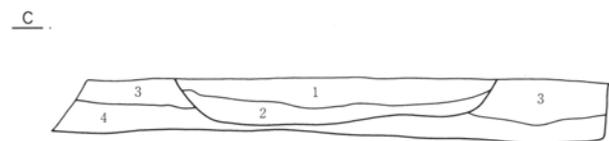
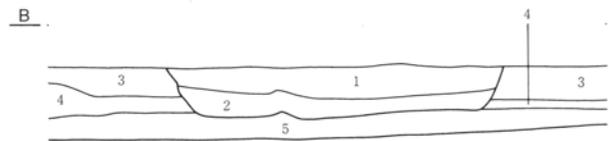
10号溝



12号溝



13号溝



1区10号溝 A-A'

1. 浅間B軽石 榛名二ツ岳軽石を含む黒色土が塊で入っている。

1区12号溝 A-A'

- 12号溝
1. 灰色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒、鉄分凝集を含む粘性をおびた土層。
 2. 灰色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒とを多量に含む。
 3. 灰黄褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの小塊と粒を多量に含み、ローム粒が層をなしている。
 4. 灰色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を含み、やや粘性をおびた土層。
 5. 灰色土 榛名二ツ岳軽石と鉄分凝集を含む。
 6. 灰色土 榛名二ツ岳軽石と鉄分凝集、ロームの小塊を含む。
- 17号溝
7. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石と鉄分凝集、ロームの小塊を含む。
 8. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石と鉄分凝集、ロームの小塊を含み、更にローム粒を多量に含む。

1区13号溝 A-A'

13号溝

1. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。
 2. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。1層よりやや粘性を帯びる。
 3. 砂 褐色を呈する。
- 15号住居
4. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム小塊と粒及び鉄分凝集とを含む。
 5. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム小塊と粒を多量に含む。

1区13号溝 B-B'

13号溝

1. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。
2. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。1層よりやや粘性をおびる。

17号溝

3. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石（親指頭大）粒を多量に含む。
4. 砂
5. 褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム塊を含むしまりのない土層。

1区13号溝 C-C'

13号溝

1. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。
2. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。1層よりやや粘性をおびる。

14号溝

3. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石（親指頭大～小粒子）を多量に含むしまった土層。
4. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石（粒子は小さい）を含み、ローム塊を多量に含む。

1区13号溝 D-D'

13号溝

1. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。
2. 灰色土 浅間B軽石と鉄分凝集を多量に含む。1層よりやや粘性をおびる。

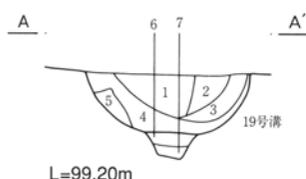
19号溝

3. 褐色土 榛名二ツ岳軽石を多量に含み、更にローム粒を含むサラサラした土層。
4. 褐色土 榛名二ツ岳軽石を多量に含み、更にロームの小塊と粒を多量に含む、ややしまりのない土層。

第46図 1区溝の土層断面 (1) 10・12・13号溝

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

15号溝



1区15号溝 A-A'

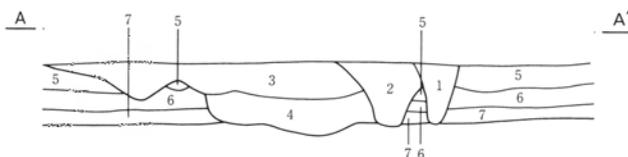
19号溝

1. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石を多量に含むサラサラした土層。
2. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を多量に含むサラサラした土層。
3. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を多量に含むサラサラした土層。
4. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒、ロームの小塊を多量に含むサラサラした土層。
5. ローム

15号溝

6. 灰色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を含むサラサラした土層。
7. 黒色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を含むサラサラした土層。

20号溝



1区20号溝 A-A'

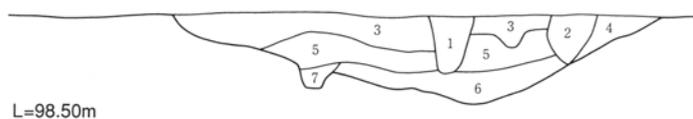
21号溝

1. 暗褐色土 浅間C軽石等の軽石を多く含み、黒色土の塊も混入する。上部からの攪乱。
2. 暗褐色土 浅間C軽石等の軽石を含み、ローム、明褐色土の小塊を含む。
3. 黒褐色土 浅間C軽石等の軽石を多く含む。
4. 黒褐色土 浅間C軽石等の軽石を多く含む。焼土をやや多く含む。

20号溝

5. 黒色土 浅間C軽石を多量に含む。浅間C軽石が殆ど純層で入っている。
6. 黒色土 粒密で粘性やや強い。
7. 黒褐色土 黒色土中にロームの小塊が混入する。

B

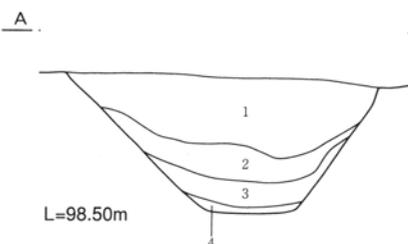


B'

1区20号溝 B-B'

1. 暗褐色土 浅間C軽石等の軽石を多く含み、黒色土の塊も混入する。攪乱。
2. 暗褐色土 浅間C軽石等の軽石を含み、ローム、明褐色土の小塊を含む。
3. 黒色土 浅間C軽石を多量に含む。浅間C軽石が殆ど純層で入っている。
4. 明褐色土 ロームと砂の小塊を少量含む。
5. 黒色土 粒密で粘性がやや強い。
6. 黒褐色土 黒色土中にロームの小塊が混入。西半部に砂が少量堆積する。
7. 暗褐色土 軽石等を少量含み、ロームの小塊等を多く含む。

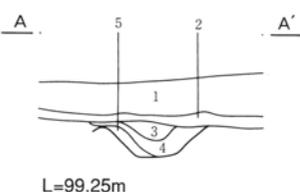
21号溝



1区21号溝 A-A'

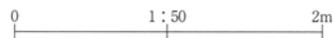
1. 黒褐色土 ローム塊(直径5mm) 榛名二ツ岳軽石(直径5mm)を全体に含む。一部分でローム流入土がある。
2. 黒褐色土 ローム塊(直径0.5~3cm)を混入。わずかに粘性がある。
3. 褐色土 2層に類似。
4. 黄褐色土 ローム層の2次堆積。

24号溝

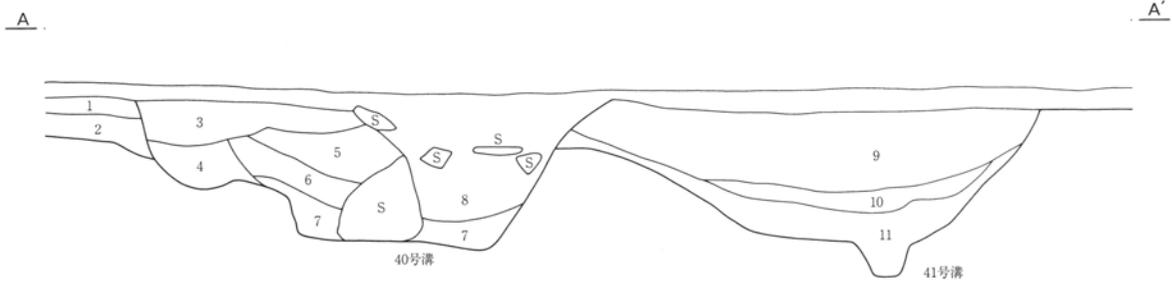


1区24号溝 A-A'

1. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を含む。
2. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒と鉄分凝集を含む。
3. 砂 鉄分のため褐色を呈する。
4. 灰褐色土 砂とローム粒を含む。
5. 灰褐色土 鉄分凝集とローム粒を含む。

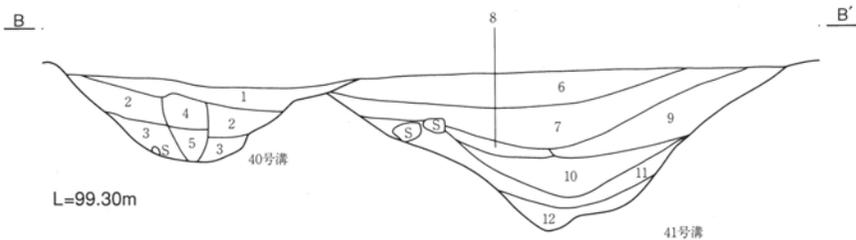


第47図 1区溝の土層断面(2) 15・20・21・24号溝



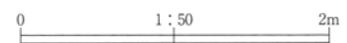
1区40号・41号溝 A-A'

- 地山
1. 暗灰色土 榛名ニッ岳軽石と鉄分凝集を含む。
 2. 暗灰色土 榛名ニッ岳軽石と鉄分凝集とロームの小塊と粒を多量に含み、ロームが層をなしているところもある。
- 40号溝
3. 暗灰色土 榛名ニッ岳軽石と鉄分凝集とロームの小塊と粒と炭化物を含む。
 4. 暗灰色土 榛名ニッ岳軽石と鉄分凝集とロームの小塊を含むしまりのない土層。
 5. 暗褐色土 榛名ニッ岳軽石と鉄分凝集を含み更にローム塊を多量に含む。
 6. 暗灰色土 榛名ニッ岳軽石と鉄分凝集とロームの小塊を含む。
 7. 砂 土管等が入っている。
 8. 暗褐色土 ローム塊やコンクリート等を含む。
- 41号溝
9. 灰褐色土 榛名ニッ岳軽石と鉄分凝集とロームの小塊と粒を含む。
 10. 暗灰色土 鉄分凝集とロームの粒を含み、やや粘性をおびる。
 11. 灰褐色土 ローム粒を多量に含む。



1区40号・41号溝 B-B'

- 40号溝
1. 暗灰色土 鉄分凝集を含む耕作土。
 2. 暗灰色土 鉄分凝集、ローム塊、砂を含む。
 3. 暗灰色土 ロームの小塊を多量に含む。
 4. 暗灰色土 ローム塊と砂を含む。
 5. 暗灰色土 ロームの小塊を含み、やや粘性をおびる。
- 41号溝
6. 灰褐色土 榛名ニッ岳軽石とローム塊を多量に含む。
 7. 暗灰色土 榛名ニッ岳軽石とローム塊と鉄分凝集を含む。
 8. 黄褐色土 ロームが埋土となったもの。
 9. 暗灰色土 ローム塊を多量に含む。
 10. 暗灰色土 ロームを含み粘性をおびる。
 11. 黄褐色土 3の類似層。3層よりやや暗い。
 12. 暗灰色土 非常に粘性が強い。

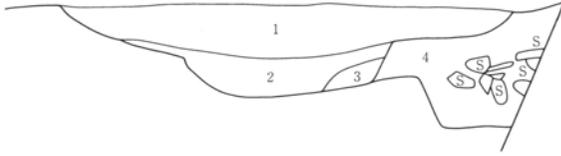


第48図 1区溝の土層断面 (3) 40・41号溝

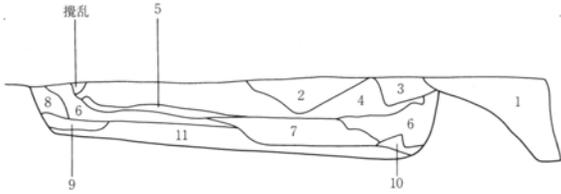
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

42号溝

A



B



L=99.50m

1区42号溝 A-A'

A'

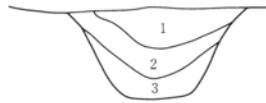
- 42号溝
1. 暗灰色土 榛名二ツ岳軽石、鉄分凝集、ローム粒を含むしまった土層。
 2. 暗灰色土 榛名二ツ岳軽石を含み、更にロームの小塊と粒とを多量に含む。
 3. 暗灰色土 ロームの小塊と粒とを多量に含む、サラサラした土層。
- 55号土坑
4. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石を含み、更にローム粒と小塊を多量に含む。石と共に一度に埋土した状態である。

B'

- 1区42号溝 B-B'
- 42号溝
1. 灰色土 ローム粒混入。浅間C軽石を少量含む。
- 20号竖穴
2. 灰褐色土 浅間C軽石を少量含む。
 3. 灰褐色土 浅間C軽石とローム粒を少量含む。
 4. 灰褐色土 浅間C軽石を少量含む。1層より黒みが強い。
 5. 灰褐色土 ローム塊を含む。浅間C軽石を少量含む。1層より黒みが強い。
 6. 灰褐色土 浅間C軽石を少量含む。1層より黒みが強い。ローム粒をしま状に含む。
 7. 紫灰色土 浅間C軽石、炭化物を少量含む。浅間B軽石を多量に含む。
 8. 紫灰色土 浅間C軽石、炭化物、ローム粒を少量含む。浅間B軽石を多量に含む。
 9. 灰褐色土 浅間C軽石と榛名二ツ岳軽石とロームの混土。
 10. 灰褐色土 ローム塊。
 11. 褐色土 浅間C軽石と榛名二ツ岳軽石を含む。

44号溝

A



L=99.60m

A'

1区44号溝 A-A'

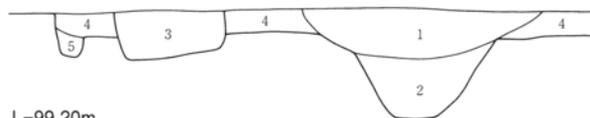
1. 暗灰色土 榛名二ツ岳軽石、鉄分凝集を含む。
2. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石、ローム塊、黒褐色土塊を含む。
3. 灰褐色土 地山崩落土。

59号溝

A



B



L=99.20m

A'

1区59号溝 A-A'

- 59号溝
1. 暗黄褐色土 ロームの大塊を多量に含む。
 2. 黒褐色土 ローム小塊を少量含む。
 3. 暗黄褐色土 ロームの小塊を多く含む。
 4. 暗黄褐色土 ロームの大小の塊を多く含む。
- 170号土坑
5. 明褐色土 ロームと褐色土の小塊が混在。

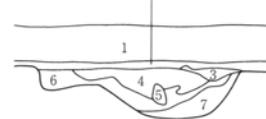
B'

1区59号溝 B-B'

- 59号溝
1. 暗褐色土 ローム小塊を少量含む。
 2. 暗褐色土 ローム小塊をやや多く含む。
- 60号溝
3. 暗褐色土 ロームと褐色土が小塊で混在。
- 38号住居
4. 黒褐色土 浅間C軽石を含む。黒色土中にロームの大小の塊が混入。
5. 暗黄褐色土 ロームの大小の塊が混入。

82号溝

A

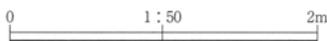


L=99.50m

A'

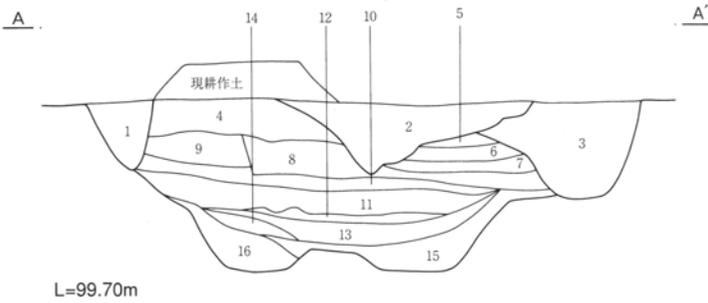
1区82号溝 A-A'

1. 現耕作土
2. 鉄分凝集層
3. 褐色土
4. 黒色土 浅間C軽石、榛名二ツ岳軽石を含む。
5. 黒色土塊
6. 褐色土 わずかに細砂、黄色軽石、浅間C軽石を含む。やや粘質土。
7. 褐色土 細砂、黄土塊等混じる。



第49図 1区溝の土層断面 (4) 42・44・59・82号溝

65号~68号溝

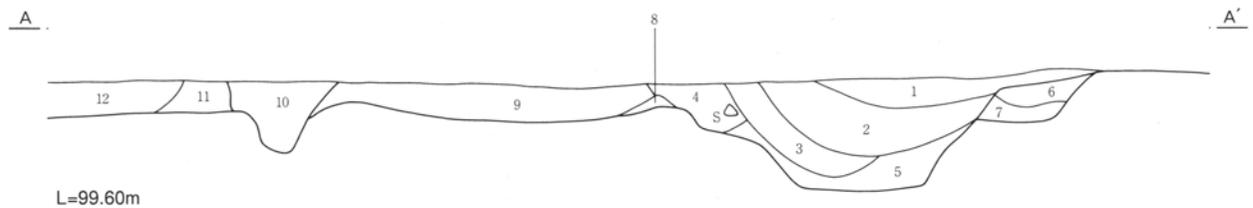


1区68号溝 A-A'

攪乱

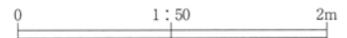
1. 茶褐色土 ポソボソしている。
65号溝
2. 茶色土 ローム粒、褐色粒を含む。
67号溝
3. 黄色土主体。灰色土塊を含む。
68号溝
4. 茶色土 ローム粒、褐色粒を含む。やや粘性あり。
5. 黄茶色土 ローム粒をわずかに含む。粘性あり。
6. 灰茶色土 ローム粒をわずかに含む。粘性あり。
7. 黄茶色土 ローム粒をやや多く含む。
8. 灰茶色土 白色粘土粒塊、灰色粘土粒塊を含む。
9. 茶色土 茶褐色粘土塊、ローム粒を含む。
10. 灰色土（やや茶色） 灰色粘土と茶色粘土粒の互層。
11. 茶色土（やや灰色） ローム粒、白色軽石、細砂等を含む。
12. 灰色砂層
13. 灰色粘土 わずかにローム粒を含む。
14. 茶色土（やや灰色）
15. 黄茶色土 粘性あり。灰色土と黄色土、茶色土の互層。
16. 黄茶色土 13層よりやや明るい。粘性あり、ふかふかしている。

44(72)号・48号・71号溝



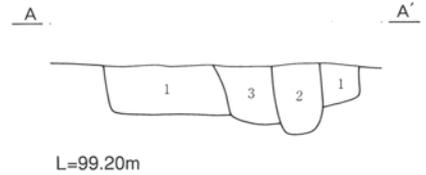
1区44号・48号・71号溝 A-A'

- 44号(72号)溝
1. 褐色土 砂質。
2. 茶褐色土 砂質。ローム塊、ローム粒を均一で多量に含む。角閃石安山岩が一部に入る。
3. 暗褐色土 砂質。4層からローム層をのぞいた土層。
4. 攪乱土層 ローム塊、石等を含む。砂質。
- 41号住居
5. 暗黄褐色土 僅かに粘性がある。ローム塊、角閃石安山岩を含む。
6. 褐色土 砂質。ローム塊、礫混入。
7. 褐色土 シルト質。一部にローム塊を含む。
- 106号土坑
8. 茶褐色土 ローム塊をわずかに含む。
9. 暗茶褐色土 ローム塊、角閃石安山岩を全面に均一包含。砂質土層である。
- 71号溝
10. 茶褐色土 全体均一角閃石安山岩混入。砂質土層。
- 48号溝
11. 黄褐色土 全体にローム塊を均一に含む。しまりのない土層。
12. ローム塊



第50図 1区溝の土層断面 (5) 64~68・44(72)・48・71号溝

64号溝

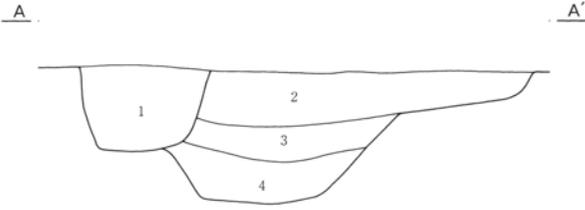


1区64号溝 A-A'

103号土坑

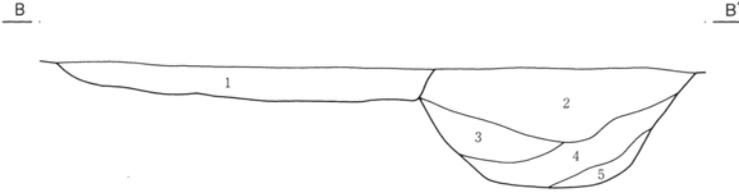
1. 明褐色土 ロームの大小の塊を多量に含む。
ピット
2. 暗褐色土 ローム小塊を多量に含む。
64号土坑
3. 明褐色土 ロームをやや多く含む。

73号溝



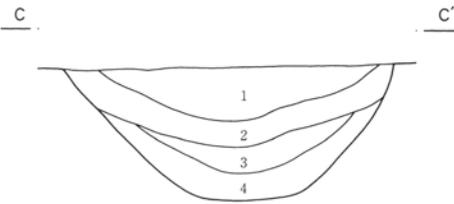
1区73号溝 A-A'

- 168号土坑
 1. 褐色土 ローム小塊をやや多く含む。
 73号溝
 2. 褐色土 ローム小塊を少量含む。
 3. 暗黄褐色土 ロームの大小の塊を多く含む。
 4. 明褐色土 ロームの大小の塊を少量含む。



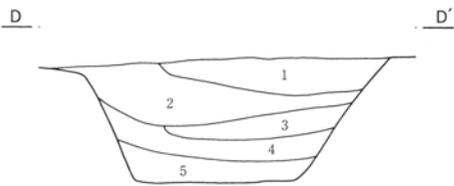
1区73号溝 B-B'

- 137号土坑
 1. 褐色土 ロームの大小の塊を少量含む。
 73号溝
 2. 明褐色土 ローム小塊をやや多く含む。
 3. 褐色土 ローム小塊を少量含む。
 4. 暗褐色土 ローム小塊を少量含み、粘性が強い。
 5. 暗黄褐色土 ローム粒が堆積。



1区73号溝 C-C'

1. 明褐色土 ロームと褐色土の小塊が混じり合っている。2層よりロームの量が多い。
 2. 明褐色土 ロームと褐色土の小塊が混じり合っている。
 3. 黄褐色土 ロームの大塊が混入。
 4. 暗黄褐色土 ローム粒と暗褐色土粒が相互にラミナ状に堆積。

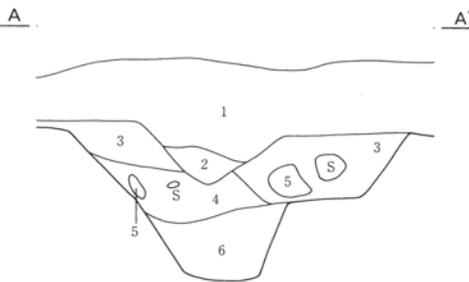


1区73号溝 D-D'

1. 灰褐色土 榛名二ッ岳軽石とローム粒を含む。
 2. 灰褐色土 榛名二ッ岳軽石を含み、更にロームの小塊を多量に含む。
 3. 灰黒色土 榛名二ッ岳軽石とローム粒を含むしまりのない土層。
 4. 灰黒色土 榛名二ッ岳軽石とローム粒を含む。
 5. 灰黒色土 榛名二ッ岳軽石とローム粒と黒色土の小塊を含む。

L=99.30m

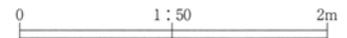
83号溝



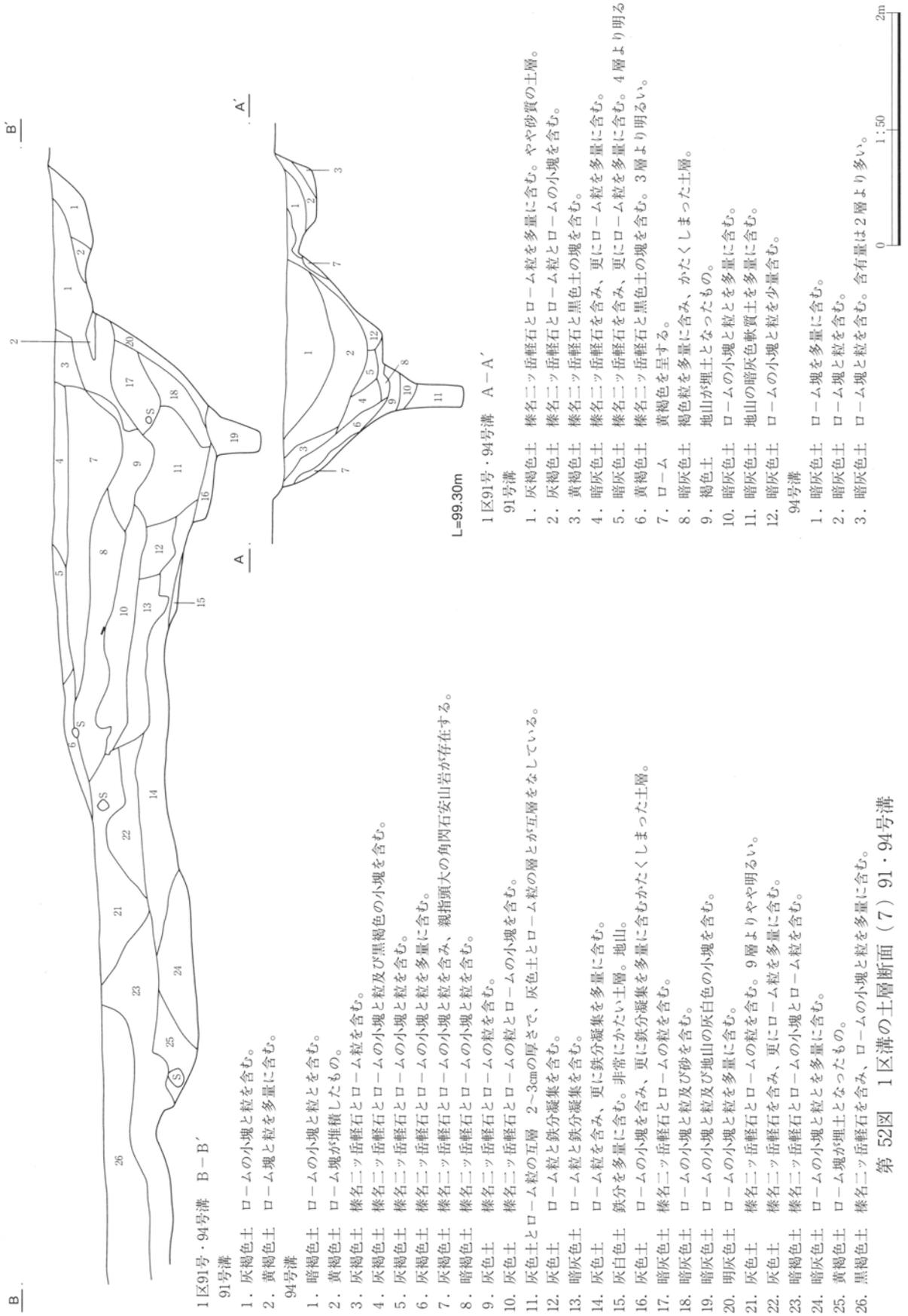
1区83号溝 A-A'

1. 現耕作土
 2. ラミナ堆積の灰色細砂
 3. 灰褐色土 黄色軽石、ローム粒、白色軽石を含む。粘質土。
 4. 灰褐色土 黄色軽石、ローム粒、白色軽石、細砂小塊混じり。粘質土。
 5. 褐色土塊
 6. 黄褐色土 地山の黄色土主体。灰色土帯状に入る。

L=99.70m



第51図 1区溝の土層断面 (6) 73・83号溝



1区91号・94号溝 B-B'

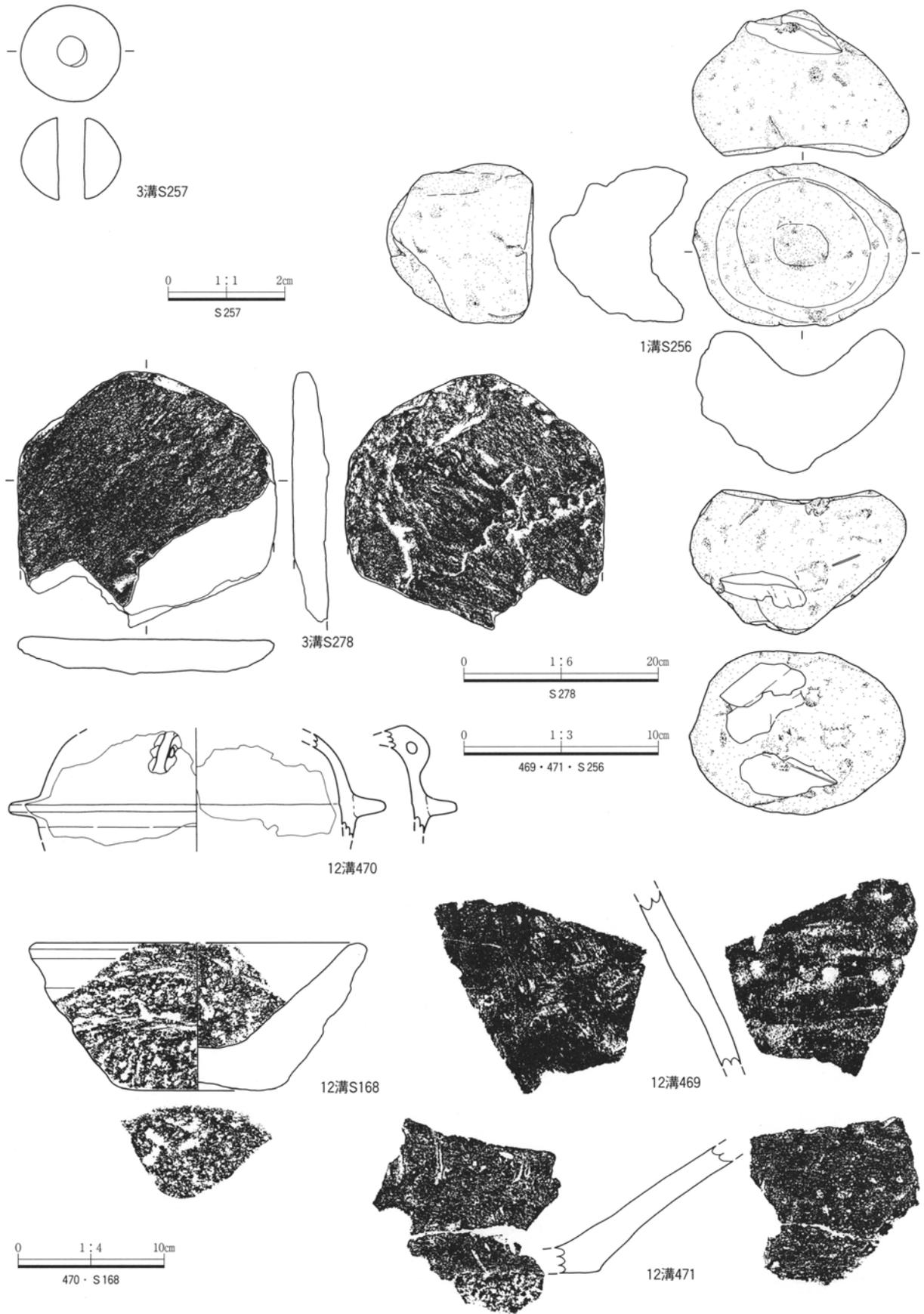
91号溝

- 1. 灰褐色土 ロームの小塊と粒を含む。
- 2. 黄褐色土 ローム塊と粒を多量に含む。

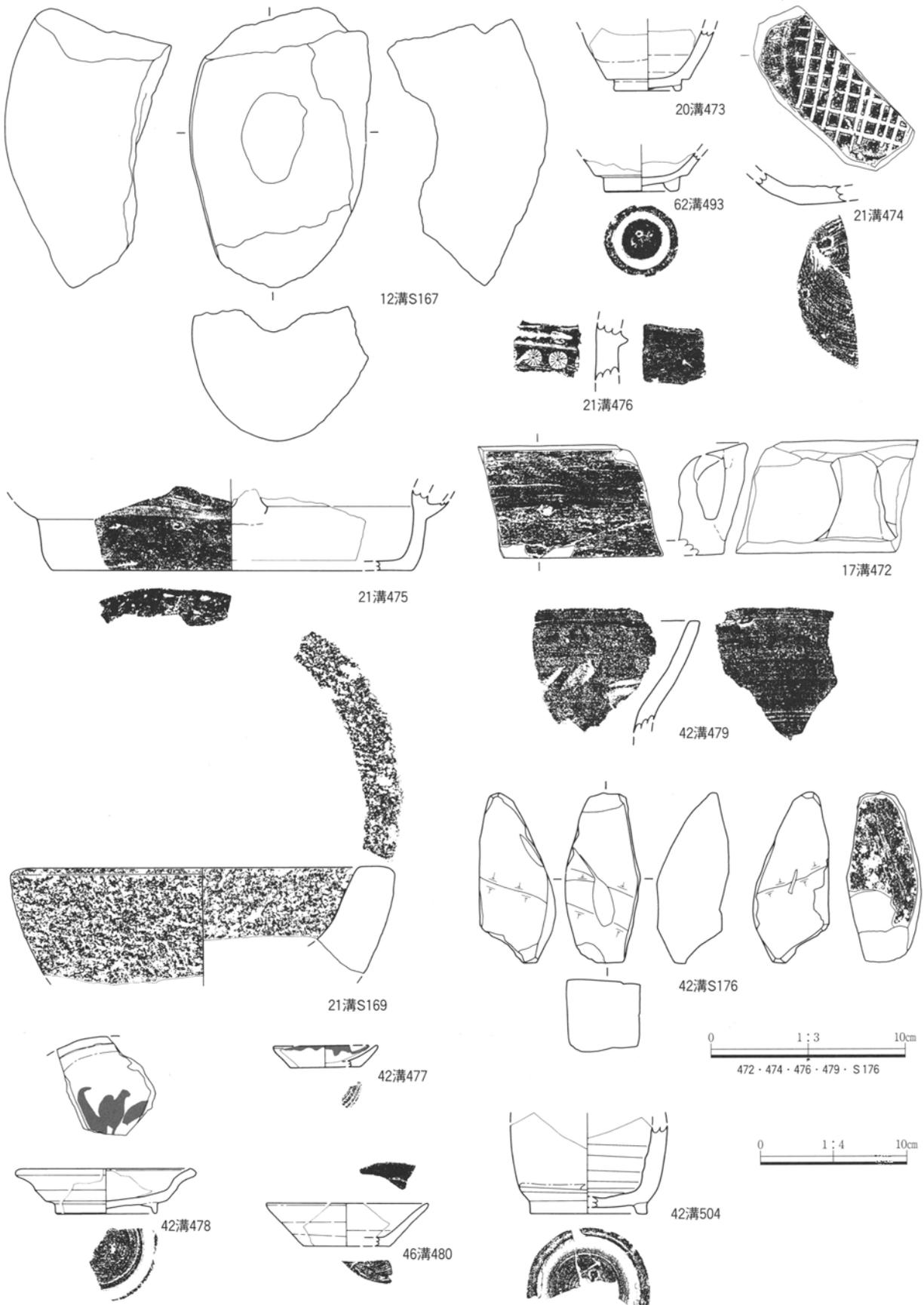
94号溝

- 1. 暗褐色土 ロームの小塊と粒とを含む。
- 2. 黄褐色土 ローム塊が堆積したもの。
- 3. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を含む。
- 4. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの小塊と粒及び黒褐色の小塊を含む。
- 5. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの小塊と粒を含む。
- 6. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの粒を多量に含む。
- 7. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの粒と粒を含む、親指頭大の角閃石安山岩が存在する。
- 8. 暗褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの小塊と粒を含む。
- 9. 灰色土 榛名二ツ岳軽石とロームの粒を含む。
- 10. 灰色土 榛名二ツ岳軽石とロームの粒とロームの小塊を含む。
- 11. 灰色土とローム粒の互層 2~3cmの厚さで、灰色土とローム粒の層とが互層をなしている。
- 12. 灰色土 ローム粒と鉄分凝集を含む。
- 13. 暗灰色土 ローム粒と鉄分凝集を多量に含む。
- 14. 灰色土 ローム粒を含む、更に鉄分凝集を多量に含む。
- 15. 灰白色土 鉄分を多量に含む。非常にかたい土層。地山。
- 16. 灰色土 ロームの小塊を含む、更に鉄分凝集を多量に含む。かたくしまった土層。
- 17. 暗灰色土 榛名二ツ岳軽石とロームの粒を含む。
- 18. 暗灰色土 ロームの小塊と粒及び砂を含む。
- 19. 暗灰色土 ロームの小塊と粒及び地山の灰白色の小塊を含む。
- 20. 明灰色土 ロームの小塊と粒を多量に含む。
- 21. 灰色土 榛名二ツ岳軽石とロームの粒を含む。9層よりやや明るい。
- 22. 灰色土 榛名二ツ岳軽石を含む、更にローム粒を多量に含む。
- 23. 暗褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの小塊とローム粒を含む。
- 24. 暗灰色土 ローム塊が埋土となつたもの。
- 25. 黄褐色土 榛名二ツ岳軽石を含む、ロームの小塊と粒を多量に含む。
- 26. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石と粒を多量に含む。

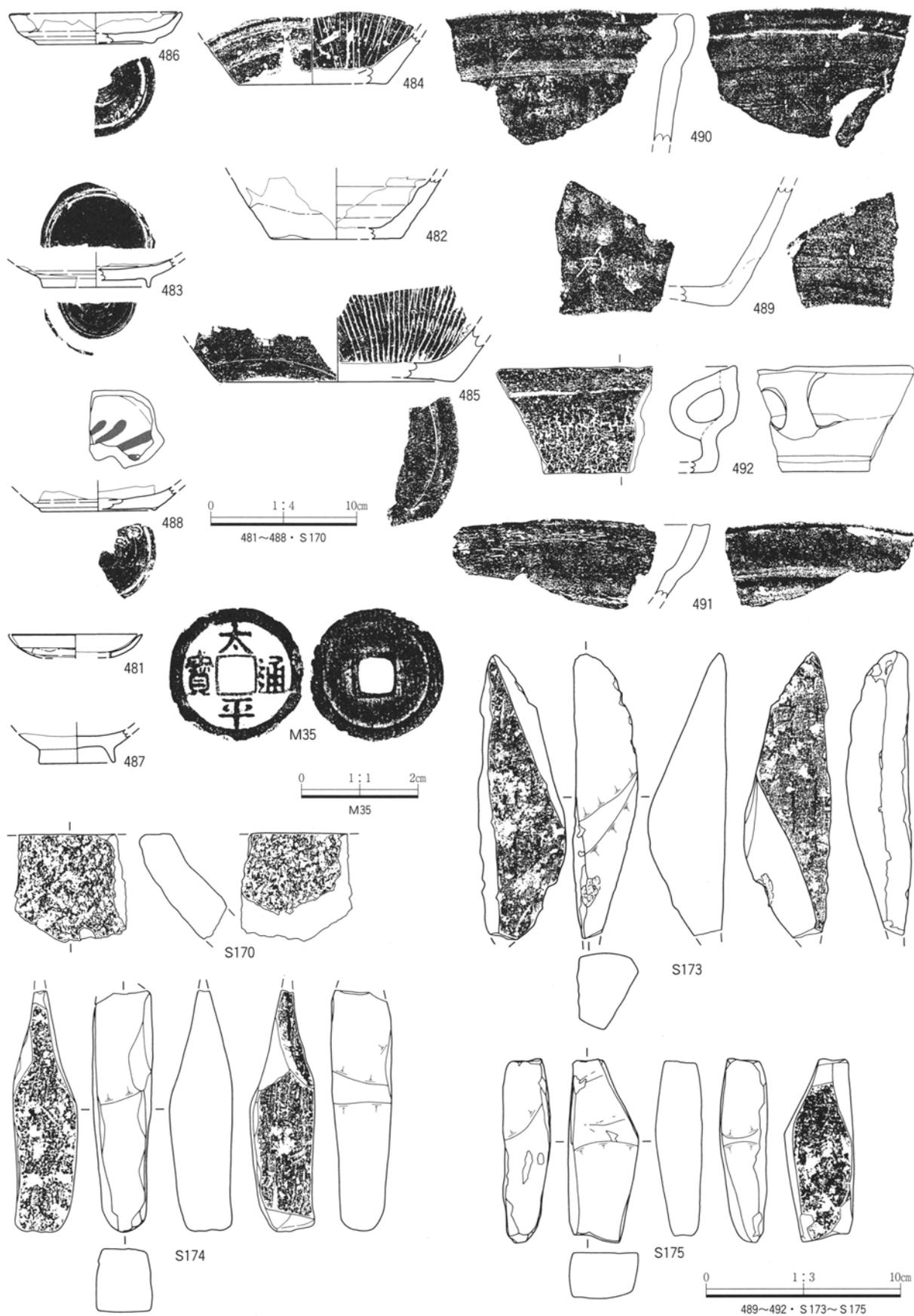
第 52図 1区溝の土層断面 (7) 91・94号溝



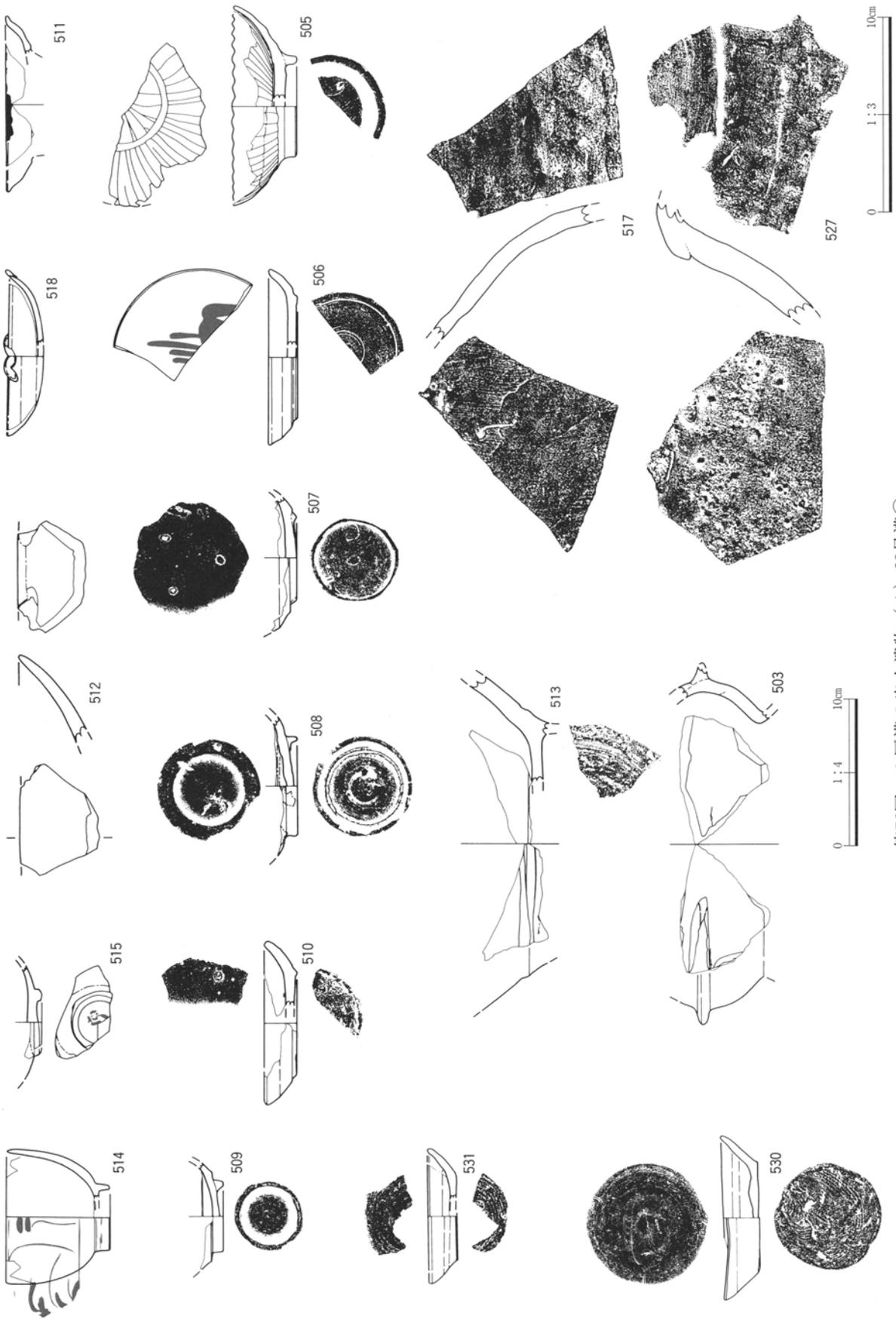
第53図 1区溝の出土遺物(1) 1・3・12号溝



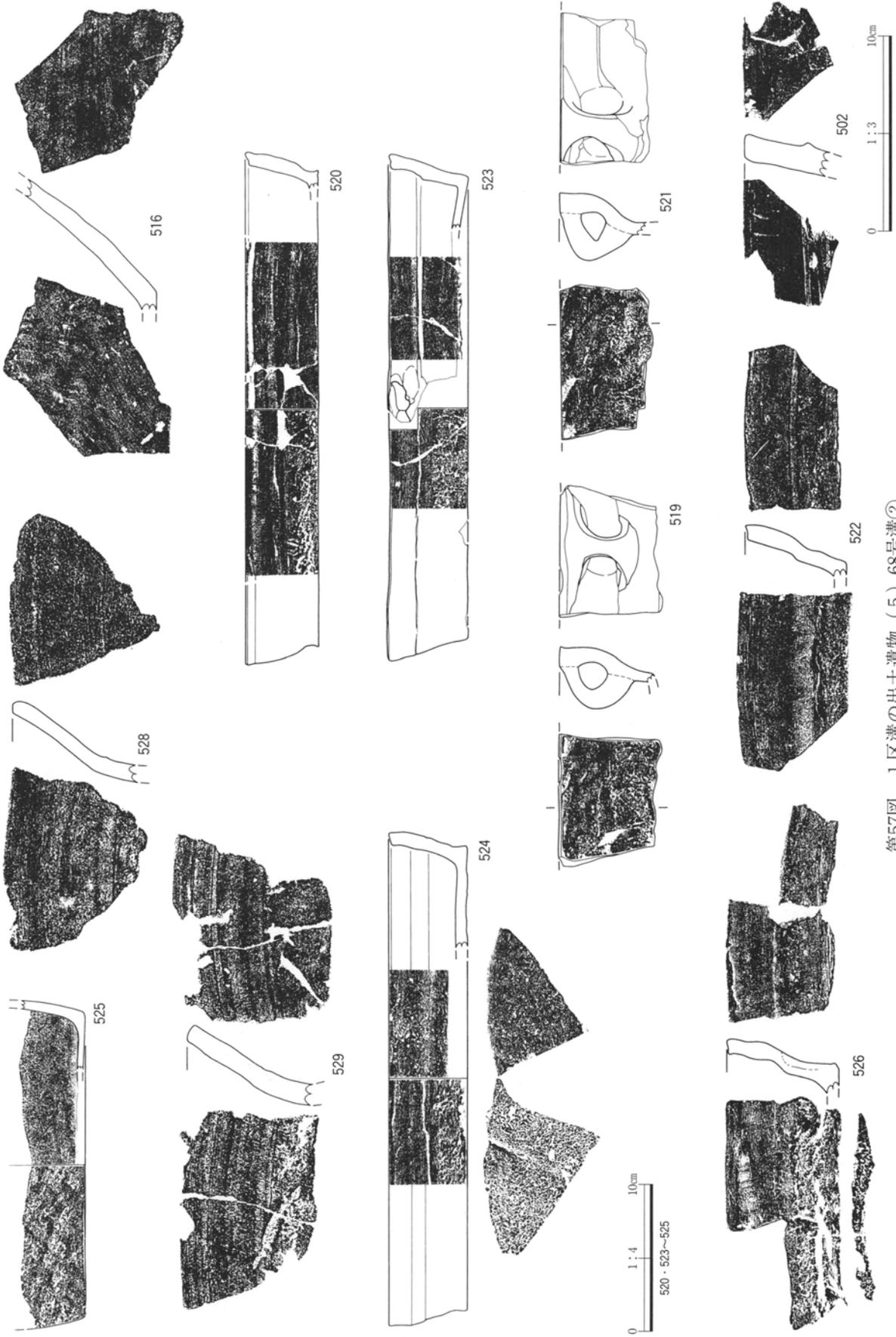
第54図 1区溝の出土遺物(2) 12・17・20・21・42・46・62号溝



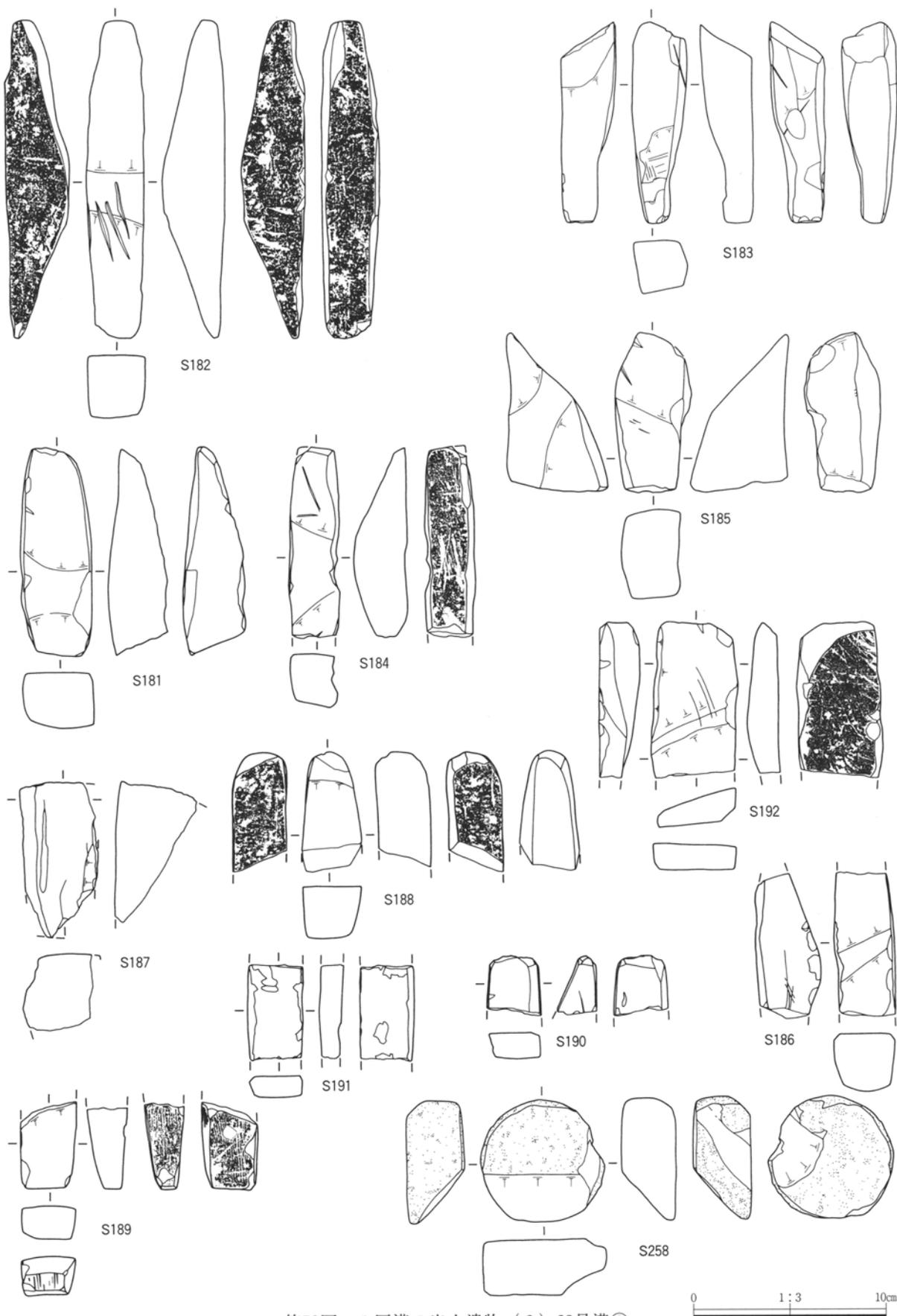
第55図 1区溝の出土遺物(3) 40・41号溝



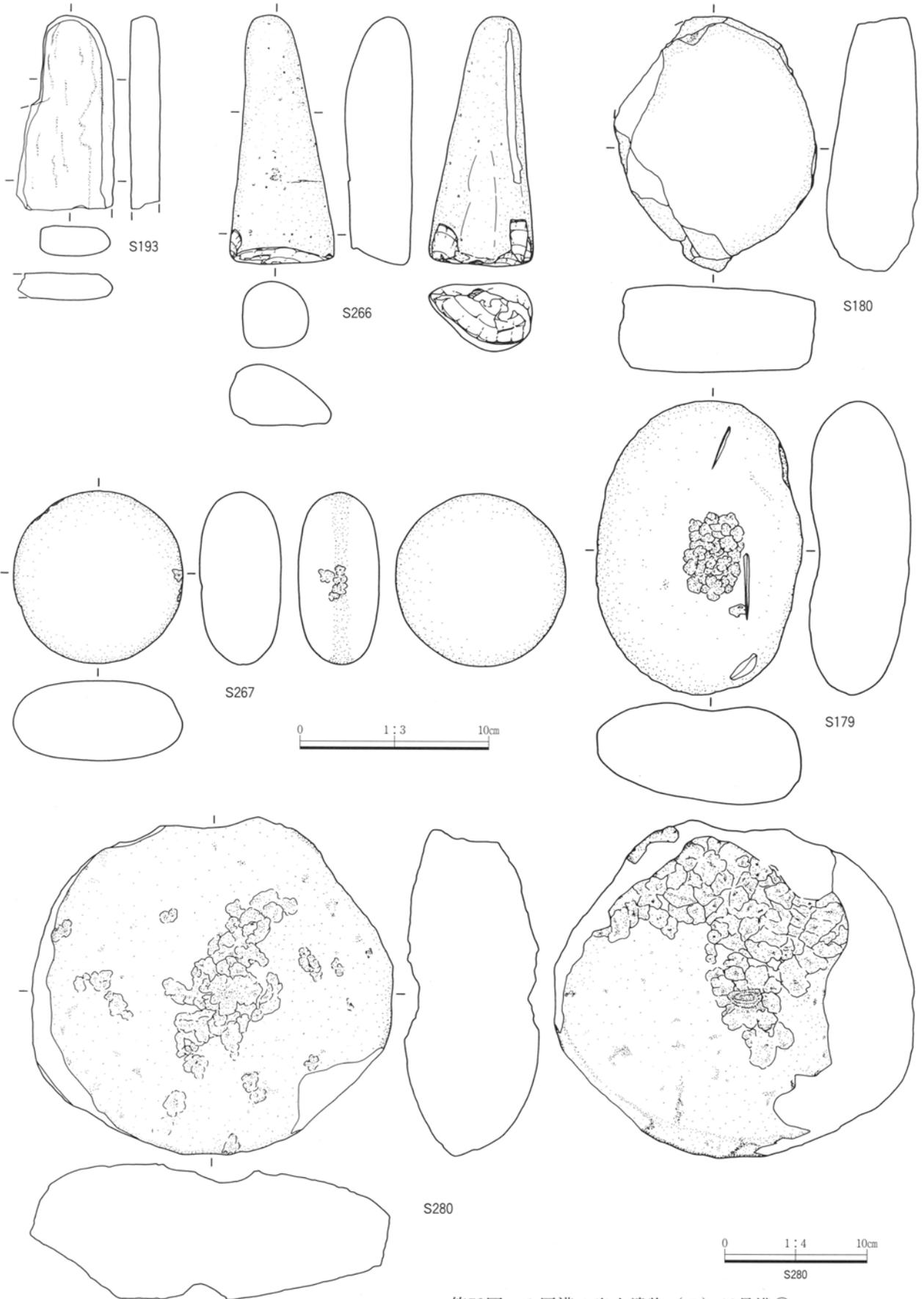
第56図 1区溝の出土遺物(4) 68号溝①



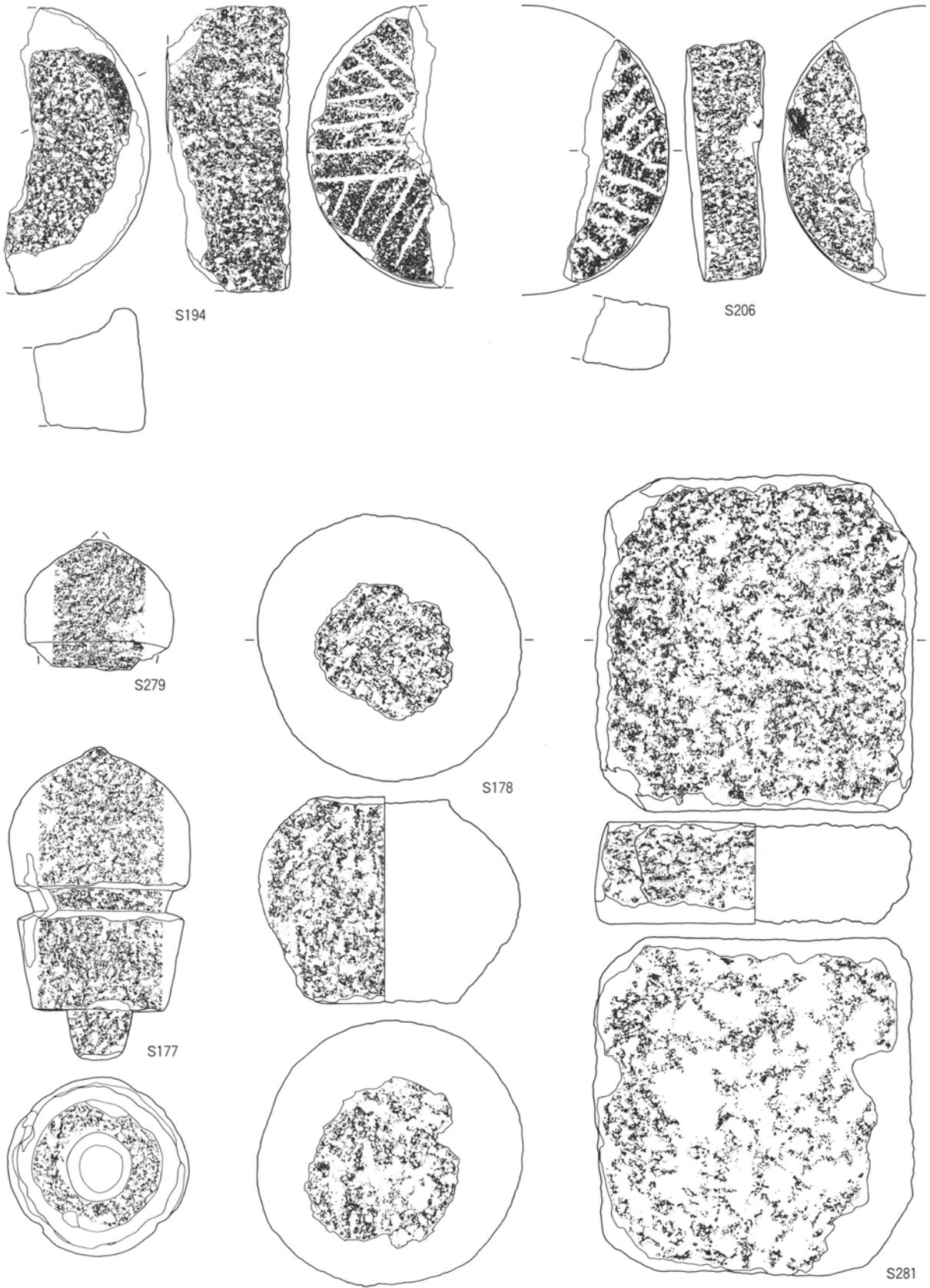
第57図 1区溝の出土遺物 (5) 68号溝②



第58図 1区溝の出土遺物(6) 68号溝③

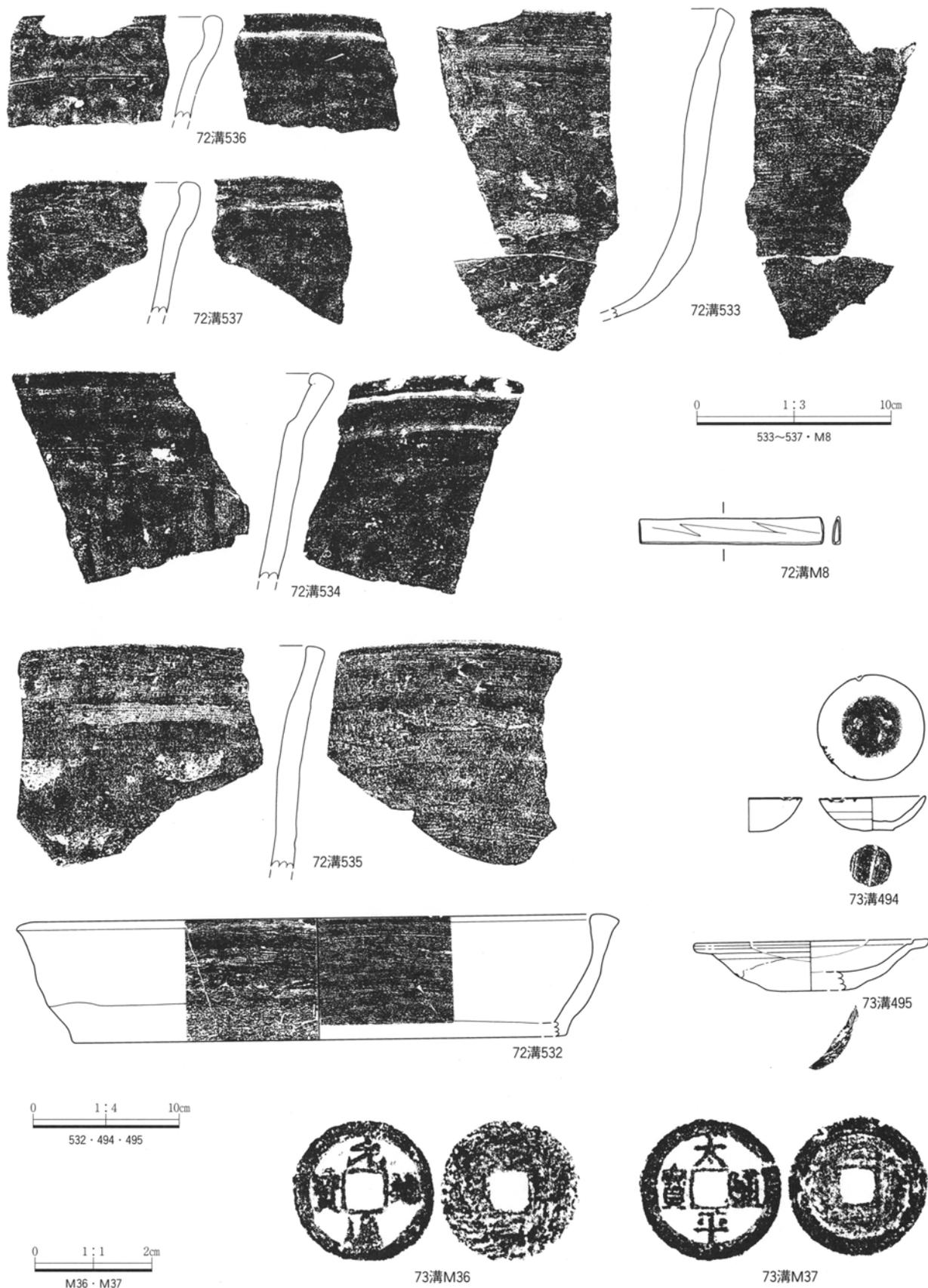


第59図 1区溝の出土遺物(7) 68号溝④

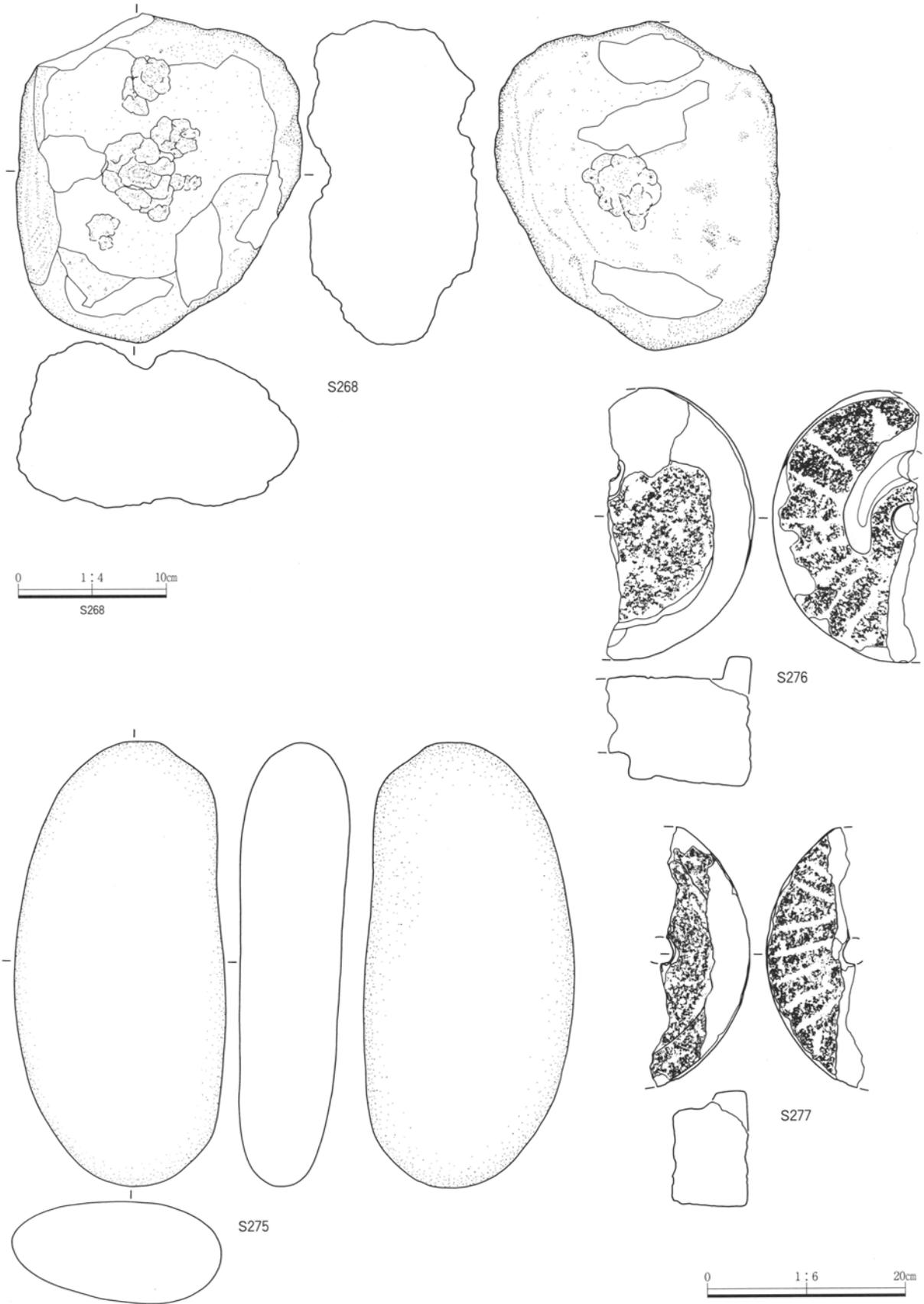


第60図 1区溝の出土遺物 (8) 68号溝⑤

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物



第61図 1区溝の出土遺物(9) 72・73号溝



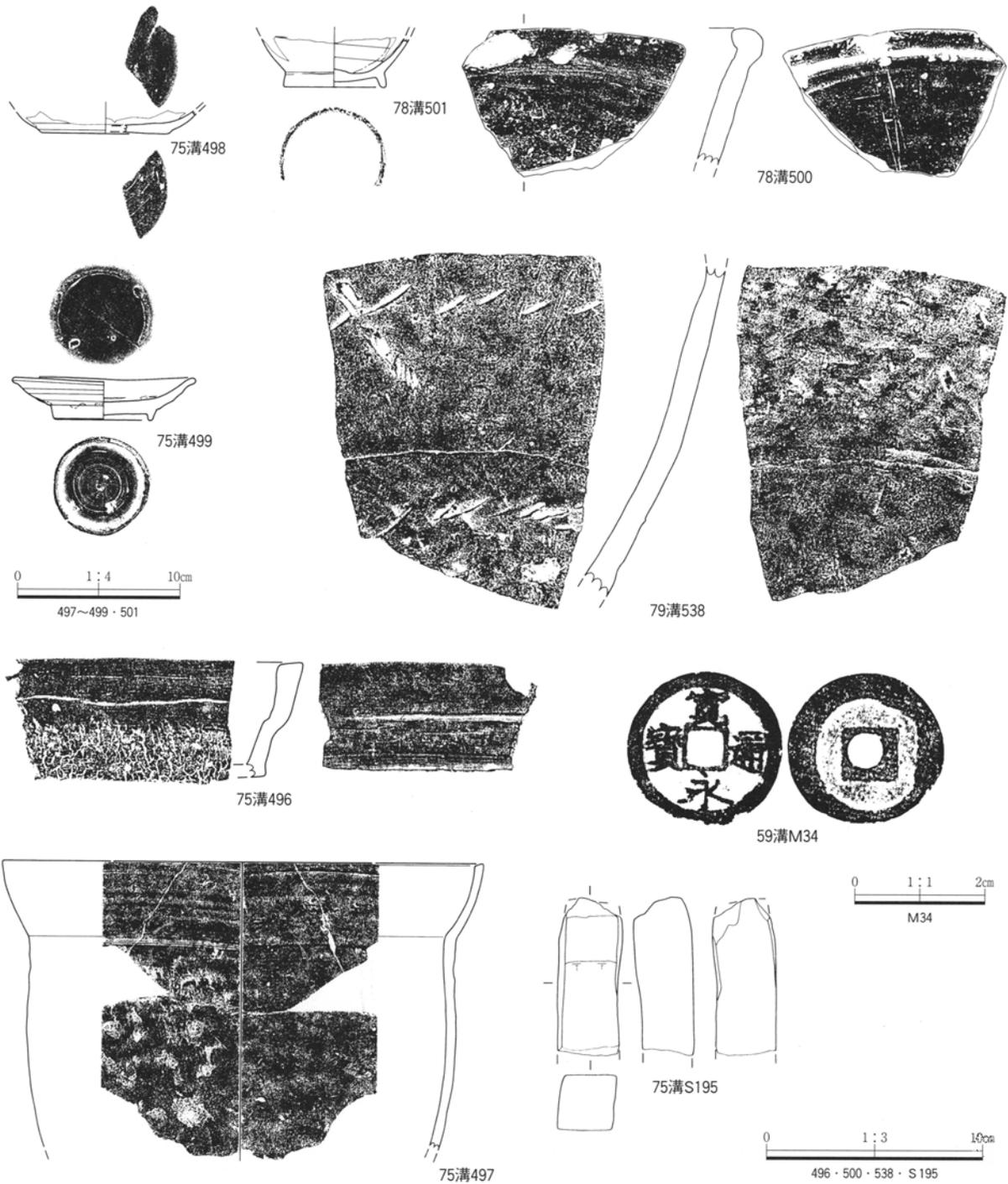
第62図 1区溝の出土遺物 (10) 72号溝

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

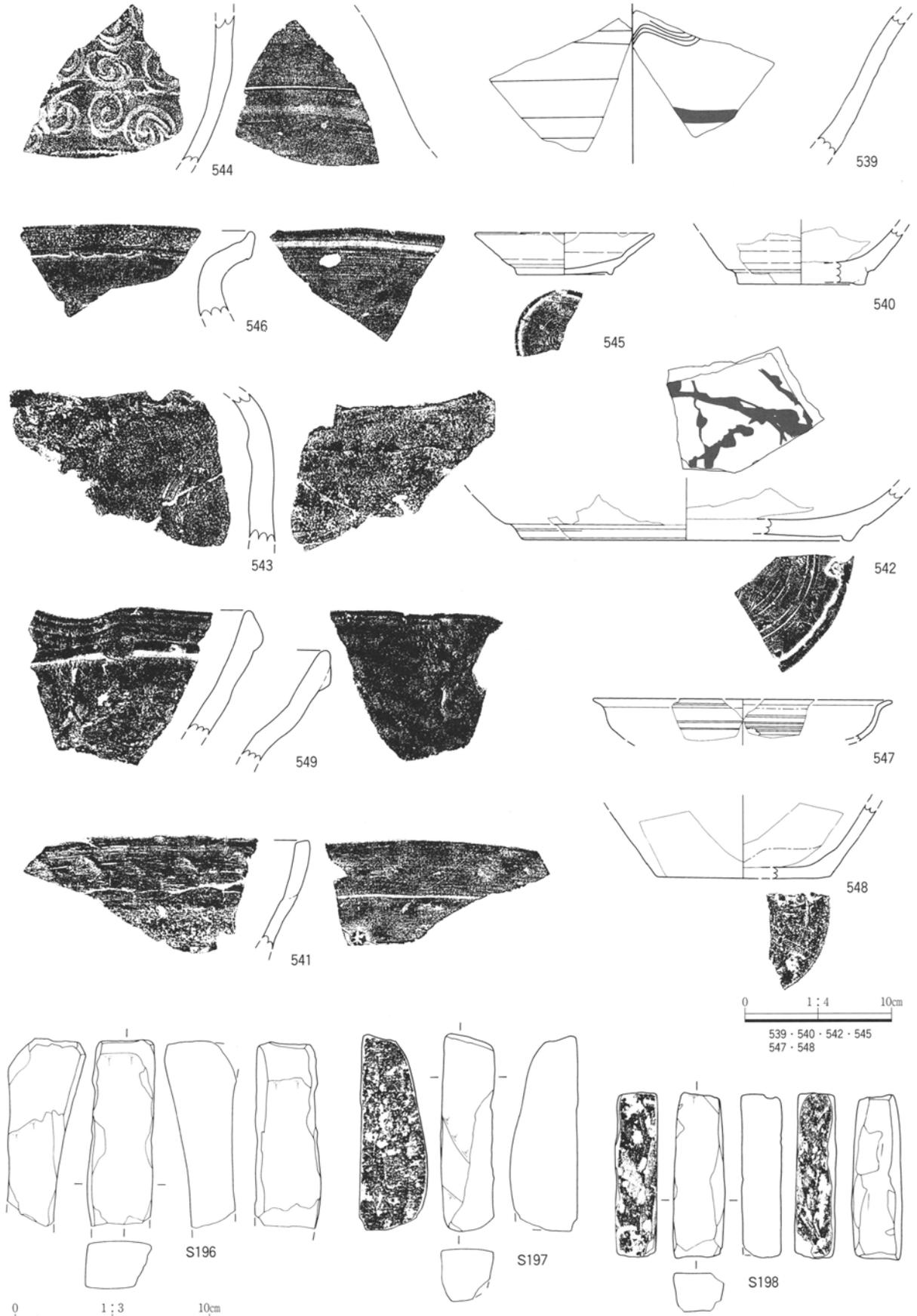
見られる土師器22点、須恵器4点のほか、中世と見られる常滑甕(第53図469)や鉢(471)、茶釜形の軟質陶器(470)と江戸から近現代と見られる鍋破片、石鉢(S168)が出土している。17号溝からは江戸と見られる焙烙破片(第54図472)が出土している。16号

溝の出土遺物は無い。

また1区中央部にある24号溝も走向が他と異なる溝である。中央部を南北方向に掘られた52・53号-30号溝の南の延長とも考えられるが、走向が西にずれることは地割りとは考えにくい。



第63図 1区溝の出土遺物 (11) 59・75・78・79号溝



第64図 1区溝の出土遺物 (12) 94号溝

C. 井戸 (第65~67図 付図1 PL11・16~18・21・44~46 遺物観察表P.278・286~288)

荒砥宮田遺跡1区で検出された井戸は67基である。前述のように1区は中近世を通して、溝に区画された掘立柱建物群が屋敷を形成してきたところである。これらの井戸はその屋敷に付随するものと考えられるが、井戸の確実な時期が決定できないことから、どの建物にどの井戸が伴うかを判断することは難しい。ここでは、個々の井戸としての調査結果を記載するにとどめたい。

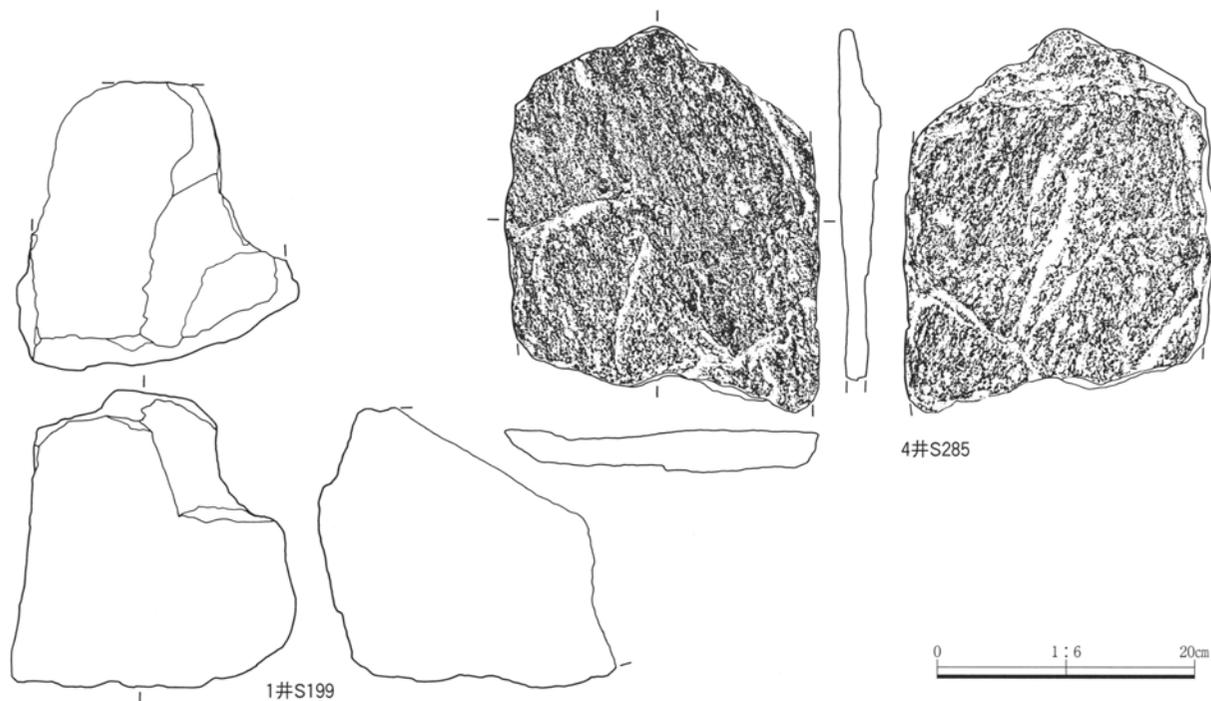
また煩雑さを避けるため、個々に井戸について記述することはさげ、形態や規模、出土遺物について特徴的な事項を記述する。第65~77図には、主な出土遺物図と平断面図の集成を掲げた。規模の計測値は巻末に一覧表にまとめた。なお埋没土や出土遺物の出土位置の記録は網羅できなかった。

井戸の平面形は円形あるいは楕円形で、円筒状に掘られている。すべて素掘りの井戸で、上屋構造等を推定できるものもなかった。

出土遺物のうち、土器の出土は少ない。9基の井戸から合計23点が出土しただけである。比較的時期がわかる陶器は36号井戸から江戸時代と見られる製

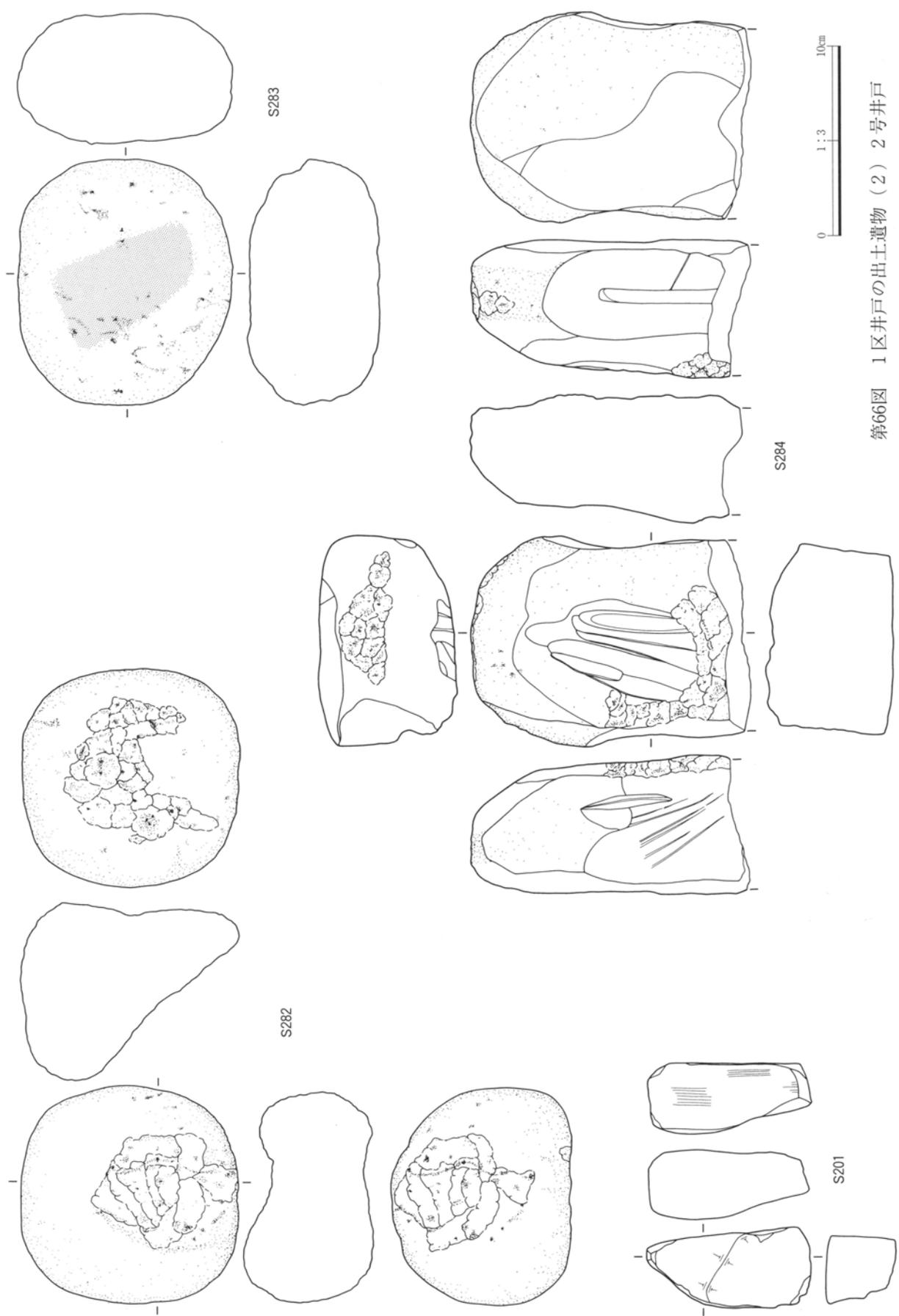
作地不詳の徳利(第67図560)、48号井戸から17世紀から18世紀と見られる瀬戸美濃皿(第67図561)・碗(562)、65号井戸から17世紀後半と見られる志野丸皿破片、66号井戸から11~13世紀と見られる瀬戸美濃壺の破片が出土している。軟質陶器は中世と見られる内耳鍋(第68図563)が53号井戸から、17~18世紀とみられる鍋(第69図564)が66号井戸から、その他、焙烙やかかわらけの小破片が井戸から出土している。

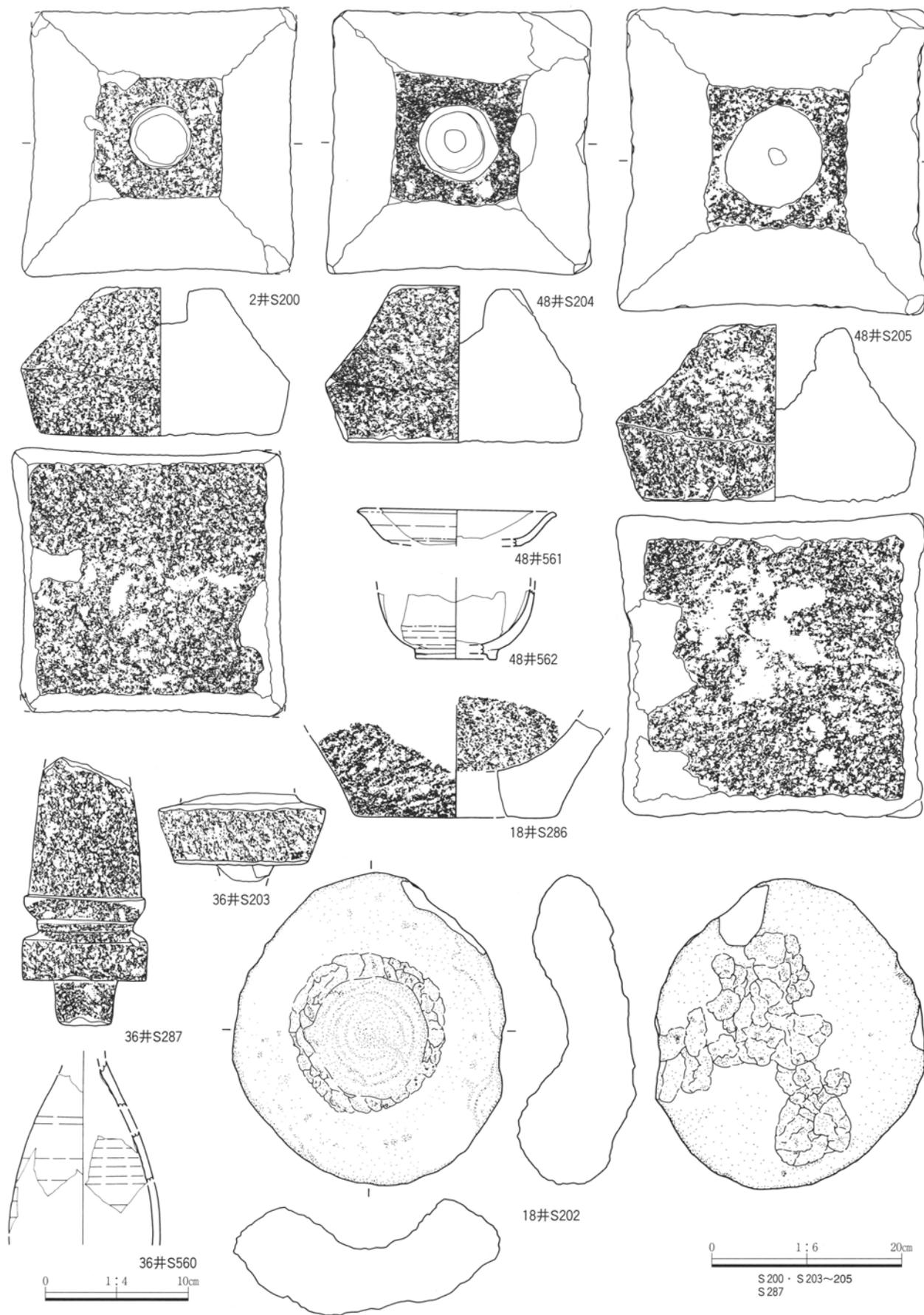
石造物の出土量は多く、取り上げてきたもので自然石以外についてはすべて掲載した。4号井戸や67号井戸からは板碑が出土しているが、時期のわかる破片ではない。2号井戸や48号井戸からは五輪塔の火輪が出土している。また2号井戸からは大型の砥石の半欠や敲打痕が著しく残る大型の石器が出土している。この敲打痕のある石器は18号井戸や54号井戸、61号井戸にも出土している。特に18号井戸の第67図S202は磨り面の凹みも顕著で特徴的な石器である。このほかに粉挽き臼の破片(53号井戸 第68図S288・59号井戸 第69図S291)や石鉢(53号井戸第68図S289)、砥石(61号井戸 第69図S292)といった日常生活用品も出土している。



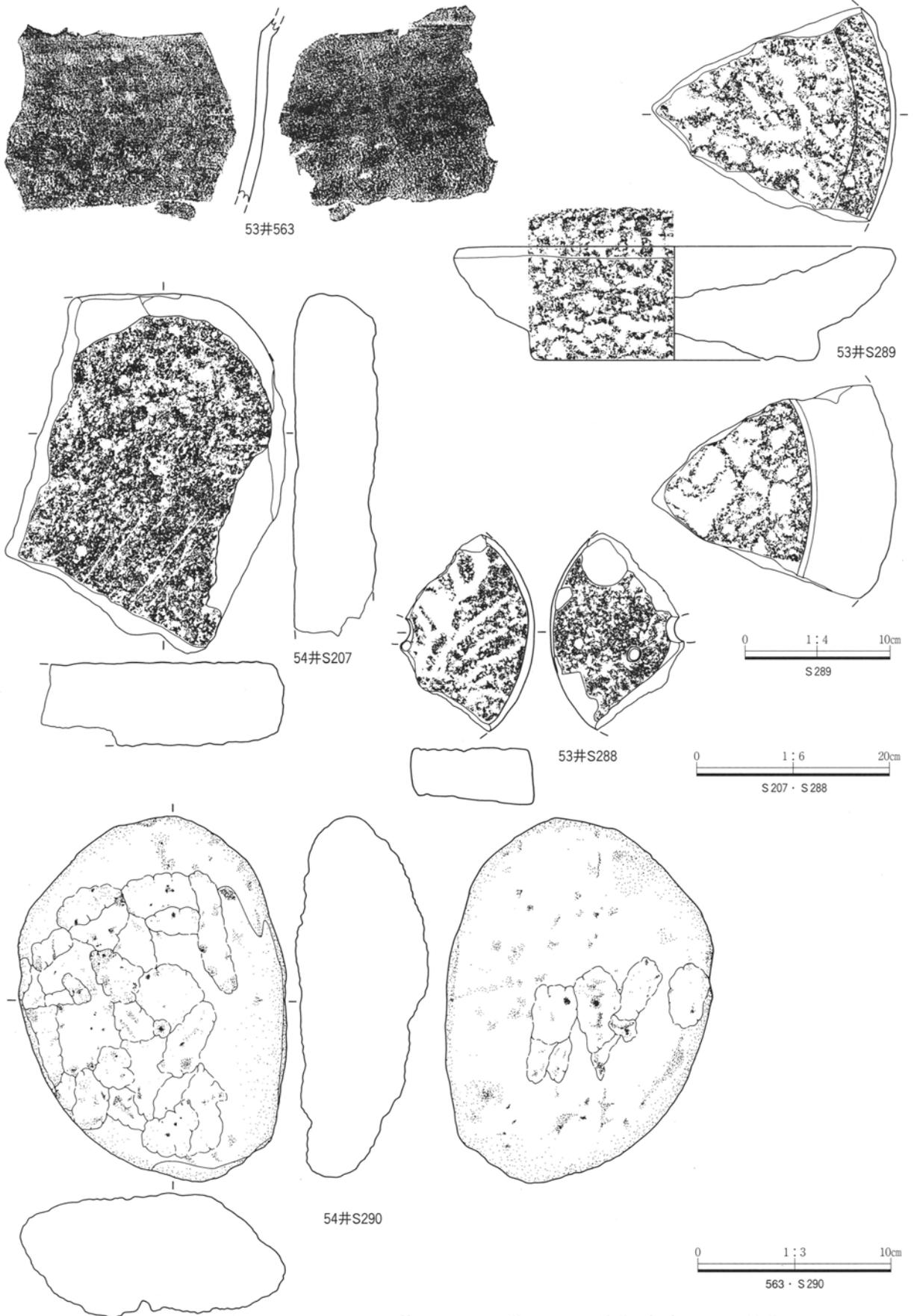
第65図 1区井戸の出土遺物(1) 1・4号井戸

第66図 1区井戸の出土遺物(2) 2号井戸

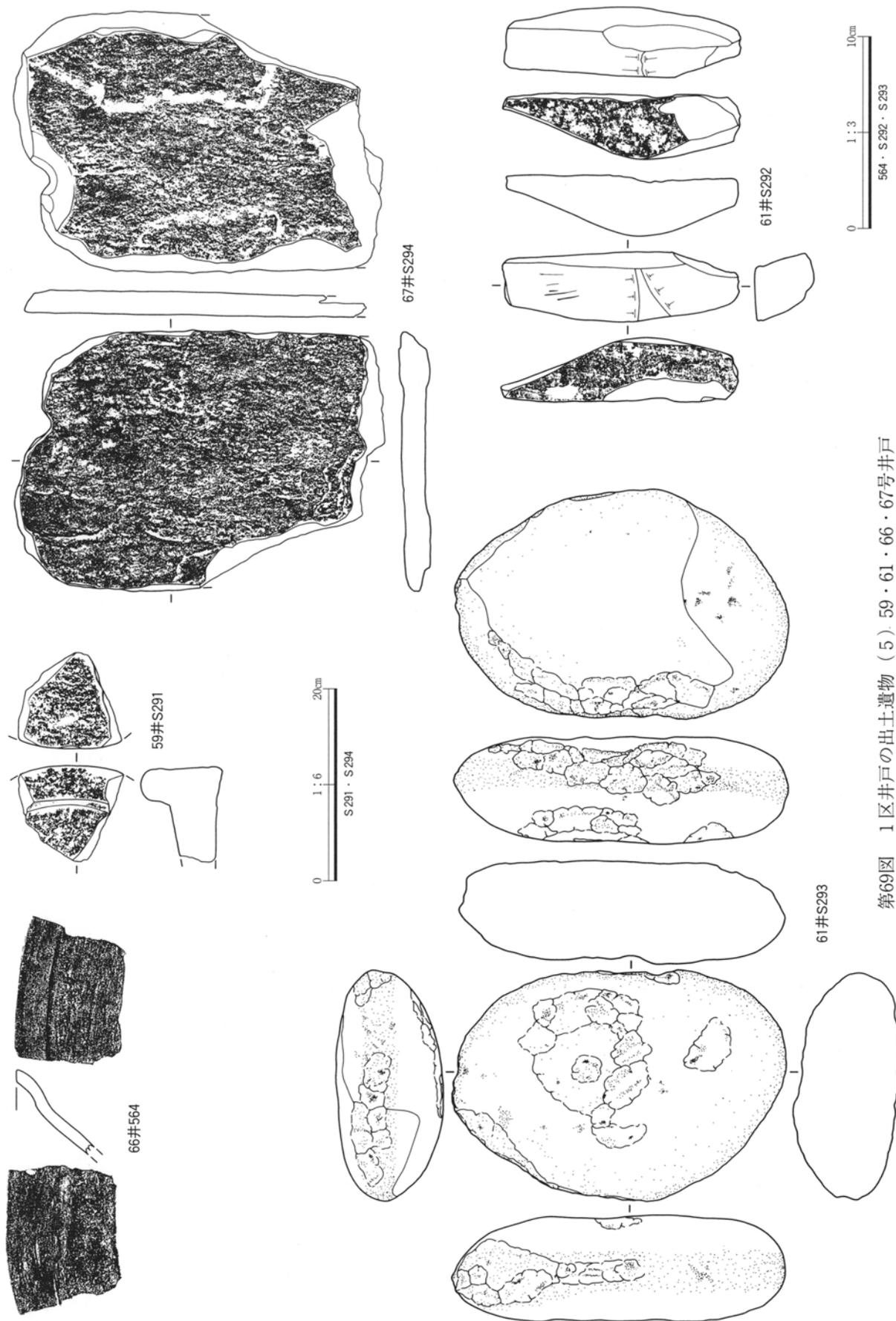




第67図 1区井戸の出土遺物(3) 2・18・36・48号井戸

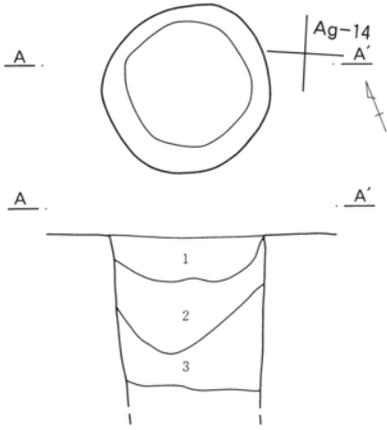


第68図 1区井戸の出土遺物(4) 53・54号井戸



第69図 1区井戸の出土遺物(5) 59・61・66・67号井戸

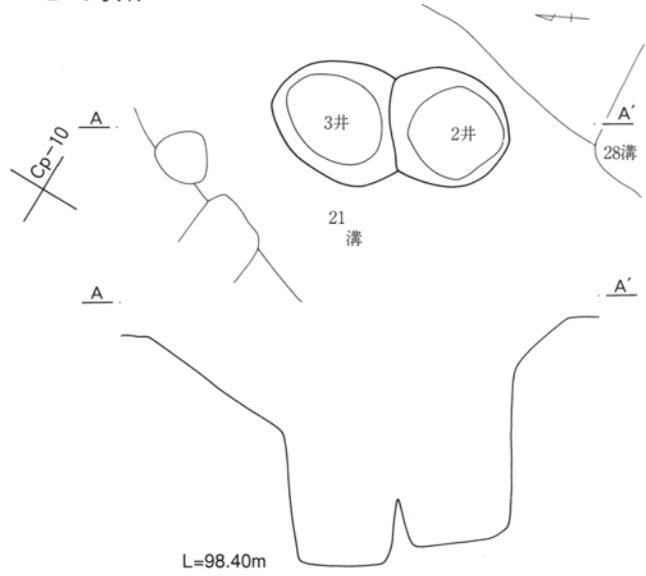
1号井戸



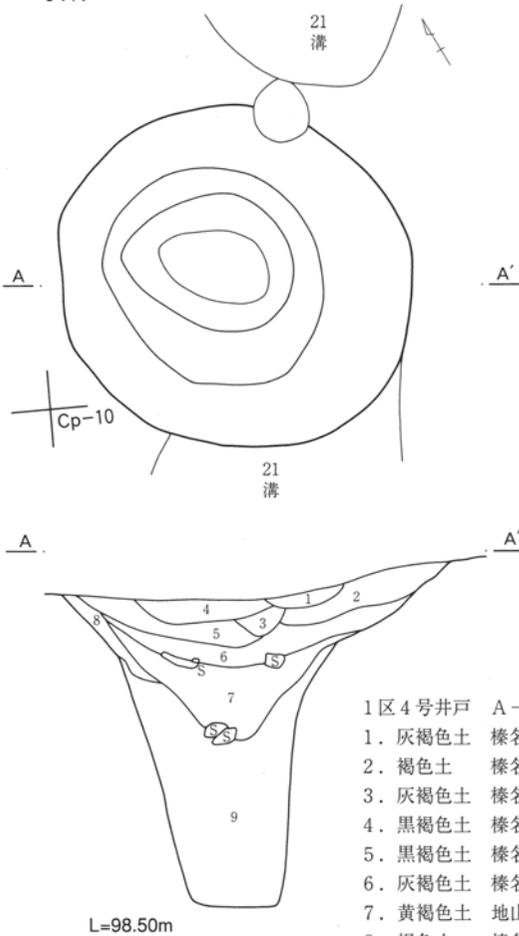
1区1号井戸 A-A'

1. 暗灰色砂 浅間B軽石、砂礫を少量含む。
2. 暗灰色砂 灰白色砂塊、及び砂礫を含む。1層より暗い。
3. 暗灰色砂 2層より暗い砂層で、2層の底面より1m以上深い。

2・3号井戸



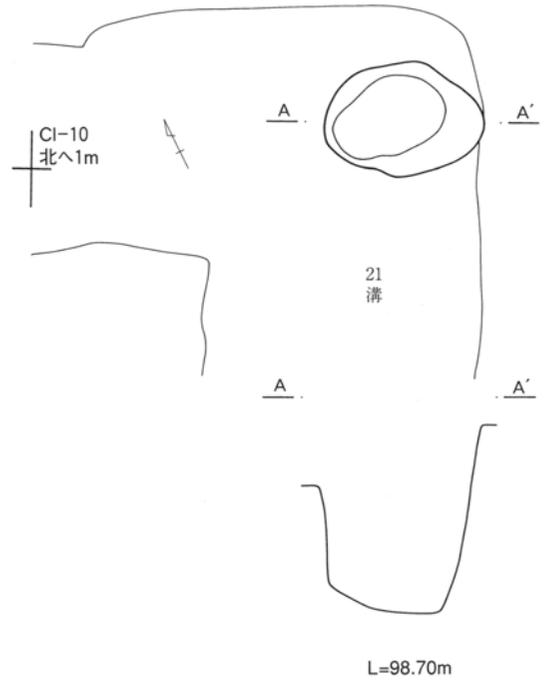
4号井戸



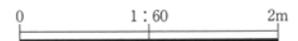
1区4号井戸 A-A'

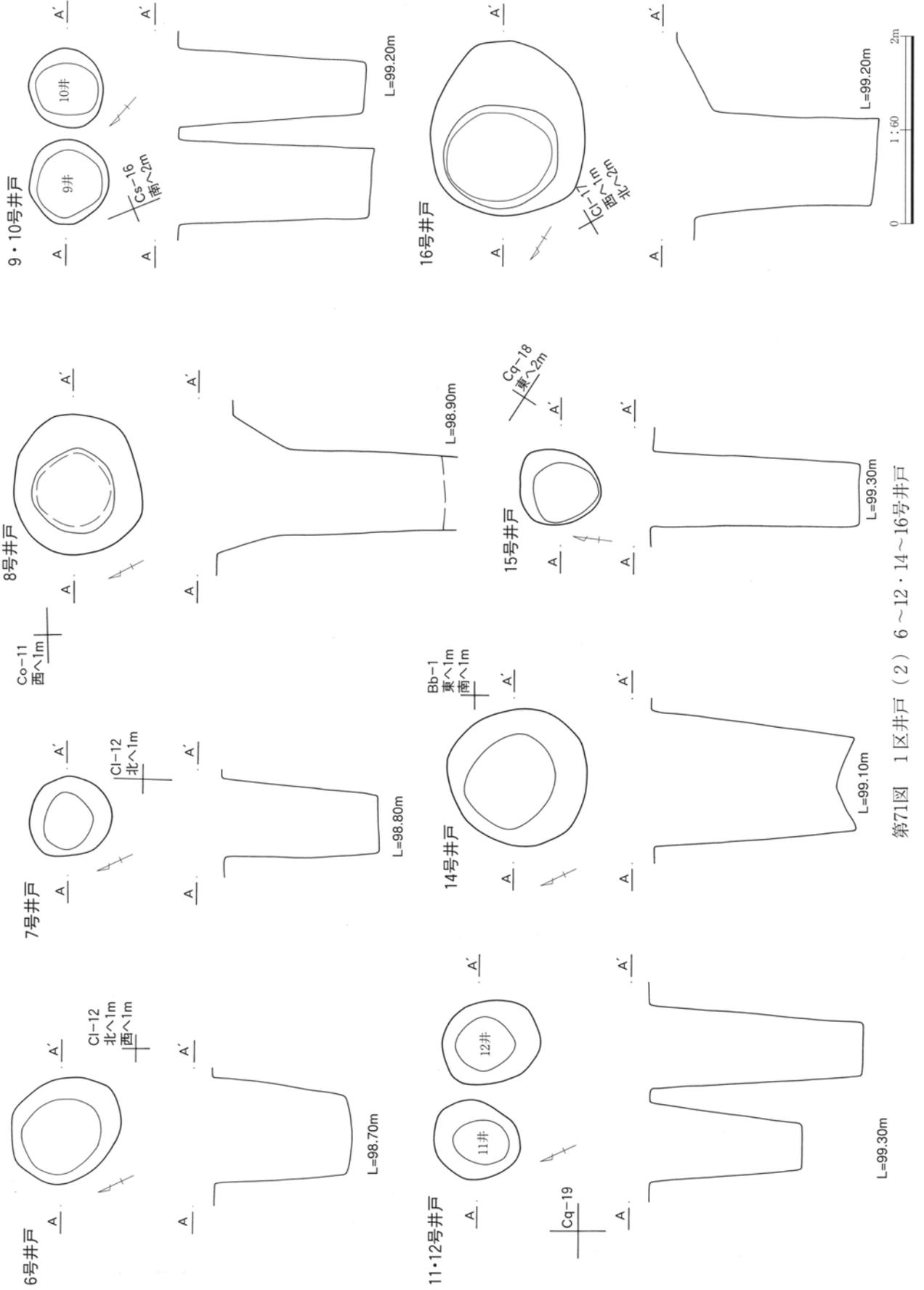
1. 灰褐色土 榛名二ッ岳軽石、炭化物を含む。
2. 褐色土 榛名二ッ岳軽石、ローム塊を含む。
3. 灰褐色土 榛名二ッ岳軽石を含み、更にローム塊を少量含む。
4. 黒褐色土 榛名二ッ岳軽石、ローム塊を含む。
5. 黒褐色土 榛名二ッ岳軽石、ローム塊を含む。4層よりやや明るい。
6. 灰褐色土 榛名二ッ岳軽石を含み、更にローム塊を少量含む。3層よりやや明るい。
7. 黄褐色土 地山のロームが堆積したもので、粒が粗い。
8. 褐色土 榛名二ッ岳軽石とローム塊を少量含むサラサラした土層。
9. 灰黄色土 灰褐色土とロームとの互層。サラサラしている。

5号井戸

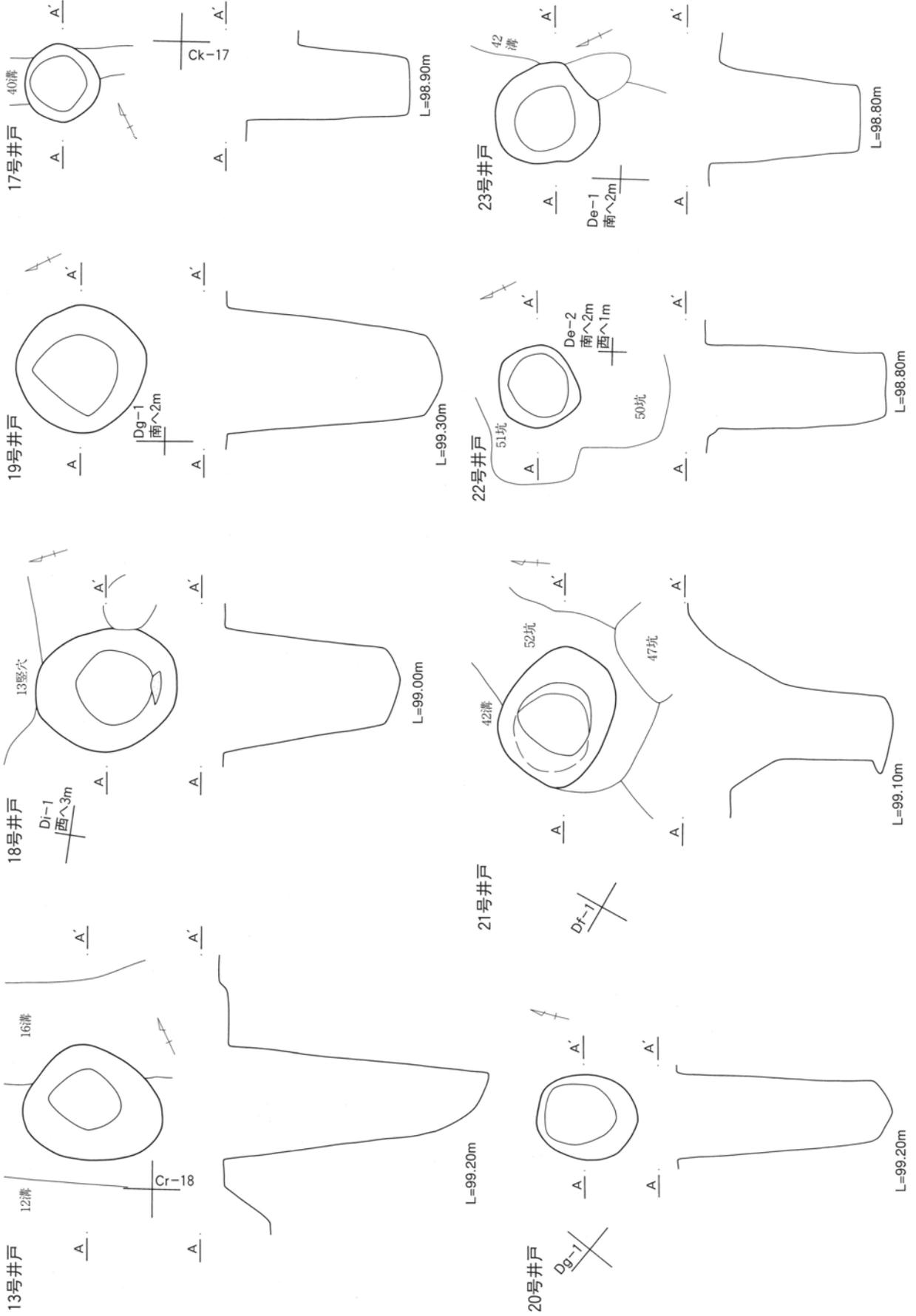


第70図 1区井戸 (1) 1・2・3・4・5号井戸

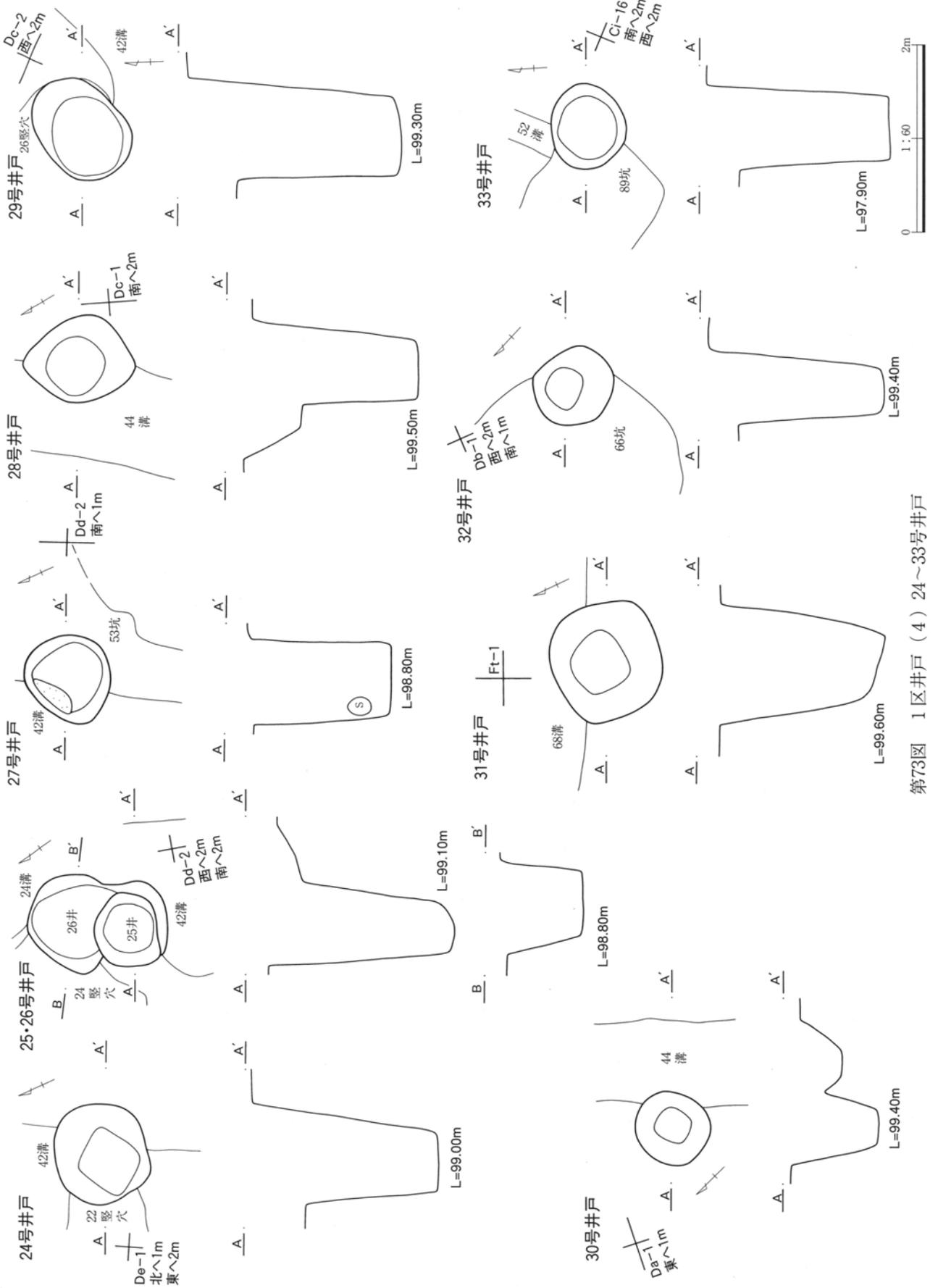




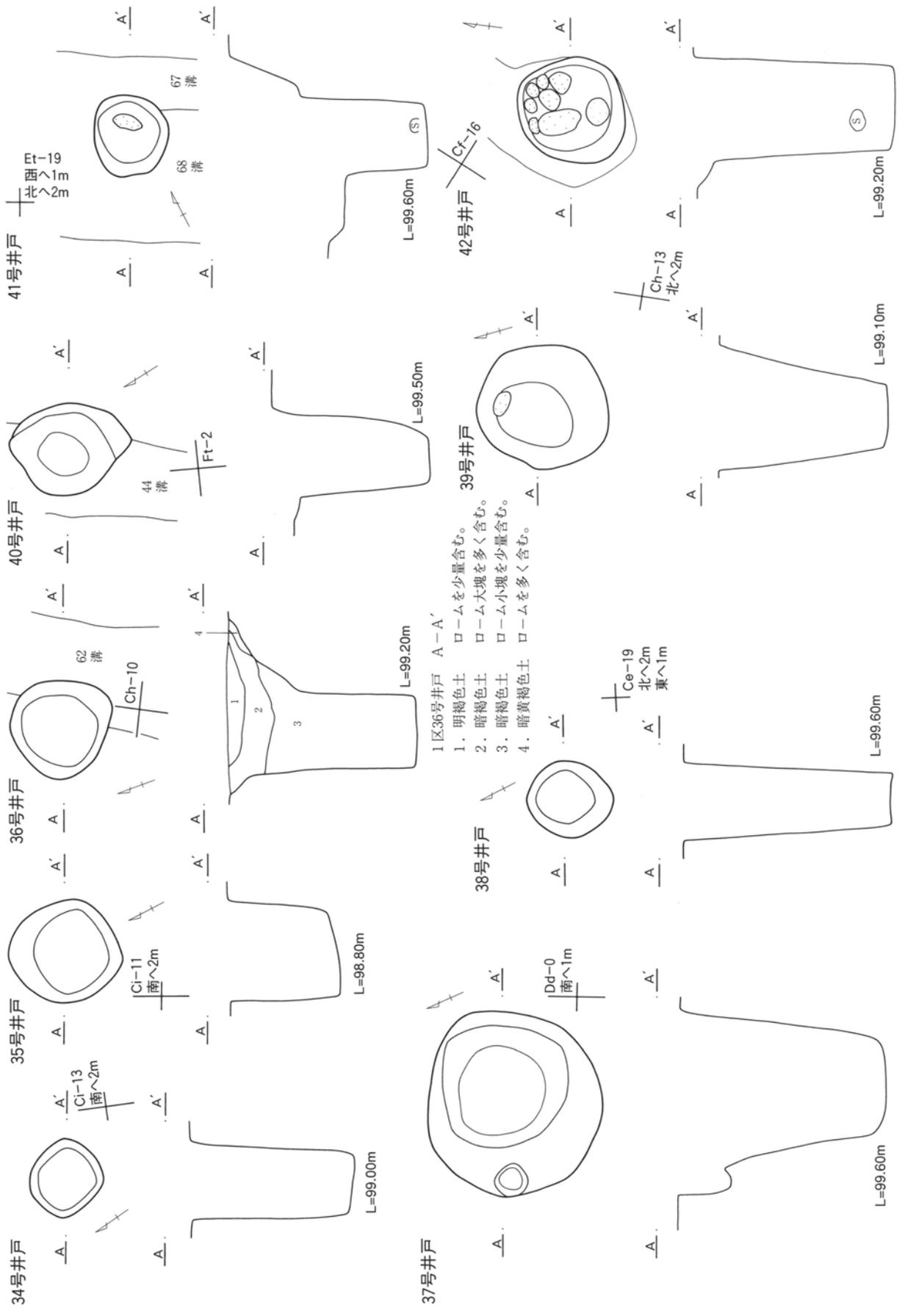
第71図 1区井戸 (2) 6~12・14~16号井戸



第72図 1区井戸 (3) 13・17~23号井戸

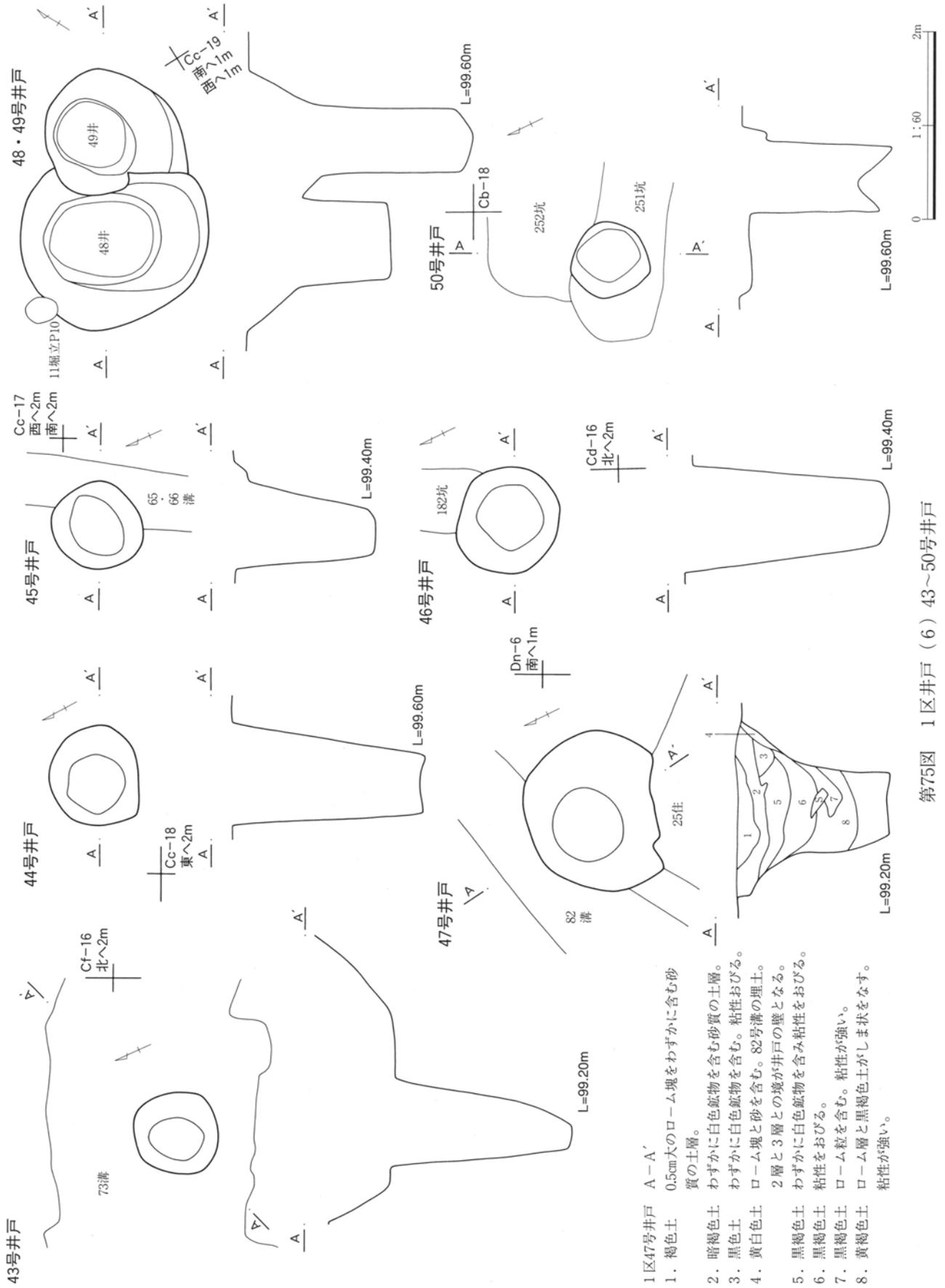


第73図 1区井戸 (4) 24~33号井戸



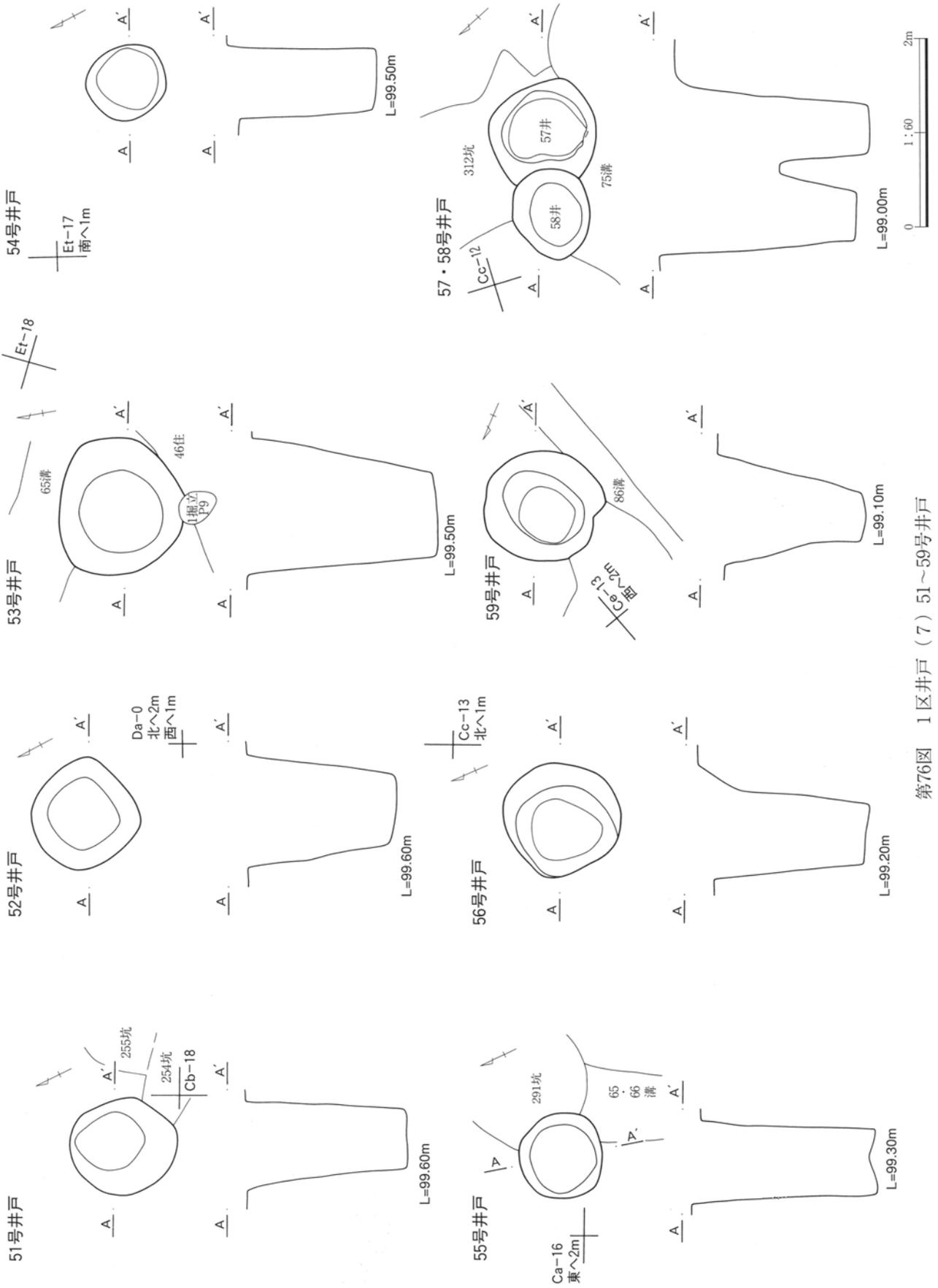
- 1区36号井戸 A-A'
1. 明褐色土 ロームを少量含む。
 2. 暗褐色土 ローム大塊を多く含む。
 3. 暗褐色土 ローム小塊を少量含む。
 4. 暗黄褐色土 ロームを多く含む。

第74図 1区井戸 (5) 34・38・40~42号井戸

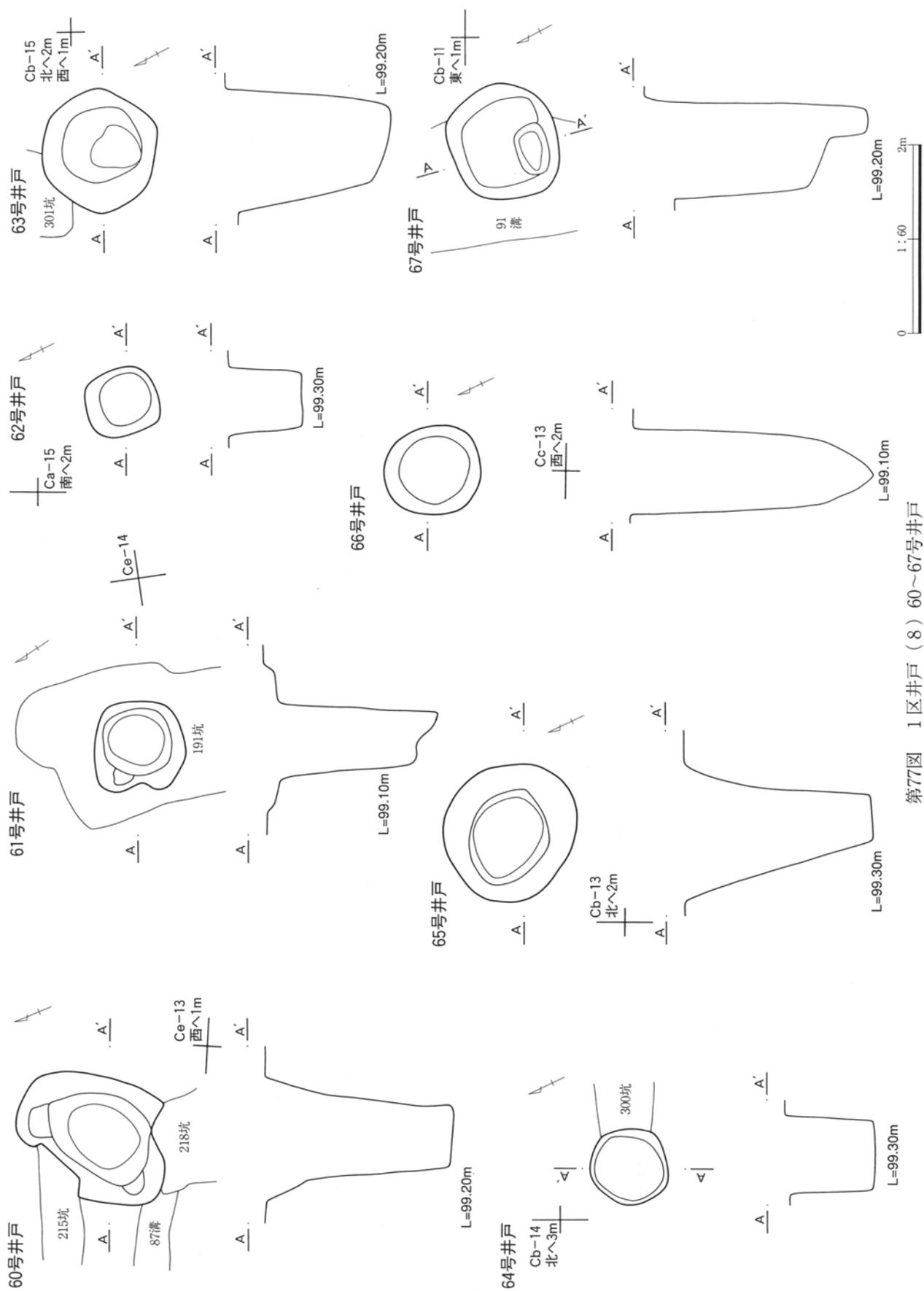


第75図 1区井戸(6) 43~50号井戸

- 1区47号井戸 A-A'
1. 褐色土 わずかに白色珪物を含む砂質の土層。
 2. 暗褐色土 わずかに白色珪物を含む砂質の土層。
 3. 黒色土 わずかに白色珪物を含む。粘性おびる。
 4. 黄白色土 ローム塊と砂を含む。82号溝の埋土。2層と3層との境が井戸の壁となる。
 5. 黒褐色土 わずかに白色珪物を含み粘性をおびる。
 6. 黒褐色土 粘性をおびる。
 7. 黒褐色土 ローム粒を含む。粘性が強い。
 8. 黄褐色土 ローム層と黒褐色土がしま状をなす。粘性が強い。



第76図 1区井戸(7) 51~59号井戸



第77図 1区井戸(8) 60~67号井戸

D. 土坑 (第78~99図 付図1 P L18~20・46・47)

遺物観察表P.278・279・289)

本遺跡1区で検出された中近世と見られる土坑は282基である。調査時には縄文時代・古墳時代の土坑を除く329基の土坑を調査したが、整理作業を経て、不明あるいは定形的でないものを除き、また検討の結果、土坑墓や堅穴状遺構とすべきと判断したものを除くと282基になる。

前述のように1区は中近世を通して、溝に区画された掘立柱建物群が屋敷を形成してきたところである。これらの土坑も、その屋敷に付随するものが多く含まれていると考えられるが、出土遺物も少なく、土坑の確実な時期が決定できないことから、建物に付随する土坑を特定することは難しい。

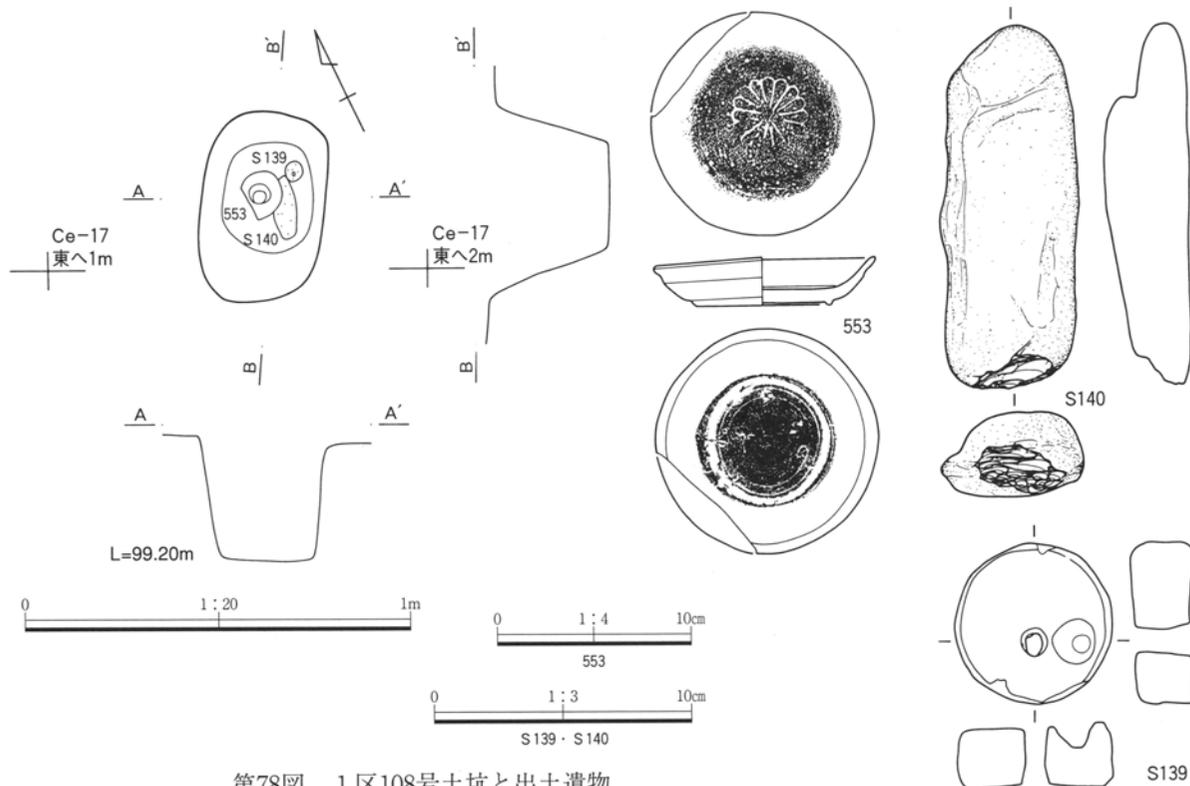
以上のようなことから、土坑を個々に記述することは煩雑になるので、土坑についての記述は下記のようにした。土坑の平面形態から5つに分類し、第78~99図に、主な出土遺物図と平断面図の集成を掲げた。形態・規模の計測値は巻末に一覧表にまとめた。土坑として記録したが検討の結果土坑からはずしたものや、記録不明で欠番とせざるを得なかった

ものは、一覧表に明記した。埋没土や出土遺物の出土位置の記録は網羅できなかった。

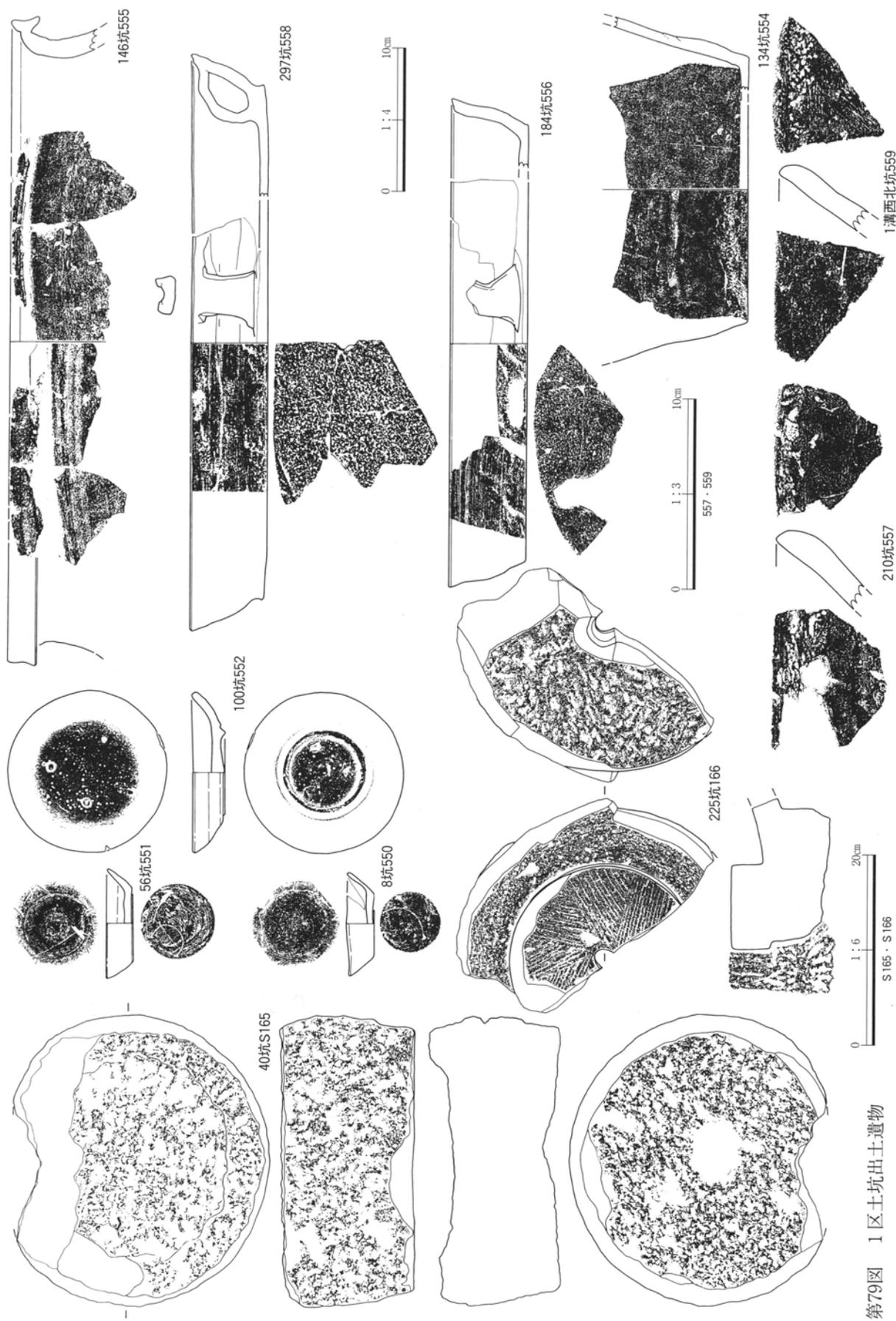
土坑の平面形は①円形、②楕円形、③隅丸方形、④方形、⑤長方形、⑥細長方形の6種に分けられた。それぞれ規模の幅がある。大型の円形・楕円形・方形のものは墓等の特別な用途がある可能性もあるが、出土遺物等から裏付けられなかった。長方形・細長方形の土坑は、区画溝と平行あるいは直交する方向に掘られているものがあり、当時の地割りと関係した土坑と考えられるが、確証がない。

また1区で検出された溝90条のうち、25条は長さ10mに満たないものである。形態的には土坑で分類した細長方形と変わらないものが多い。調査時には溝としているので煩雑さをさけるため、本報告書では溝のまま遺構一覧表に記載し、個々の記述も省略した。これらの遺構も、細長方形の土坑と同様に方形区画の溝に平行・直交するものが多く、屋敷を構成していた遺構群あるいは、屋敷地以降の地割りに沿って掘られたものと考えられる。

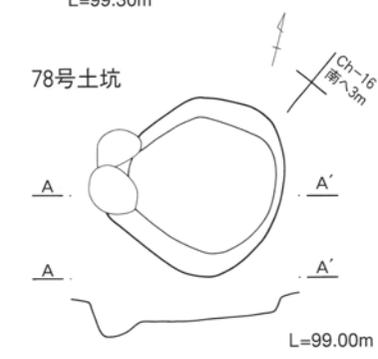
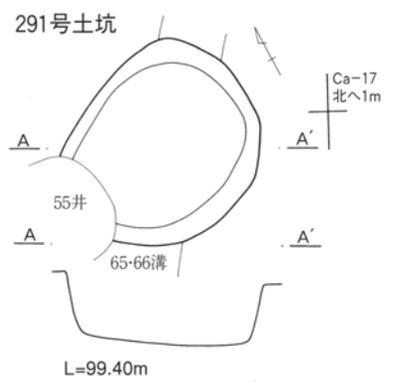
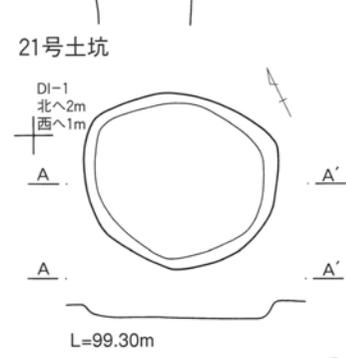
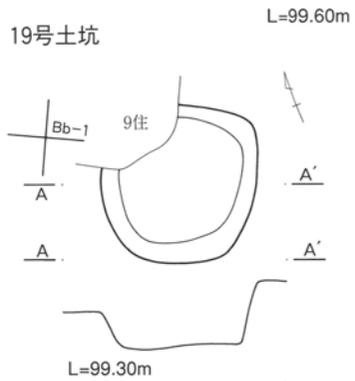
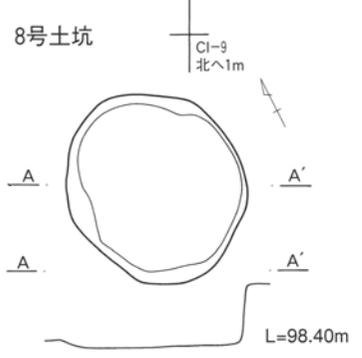
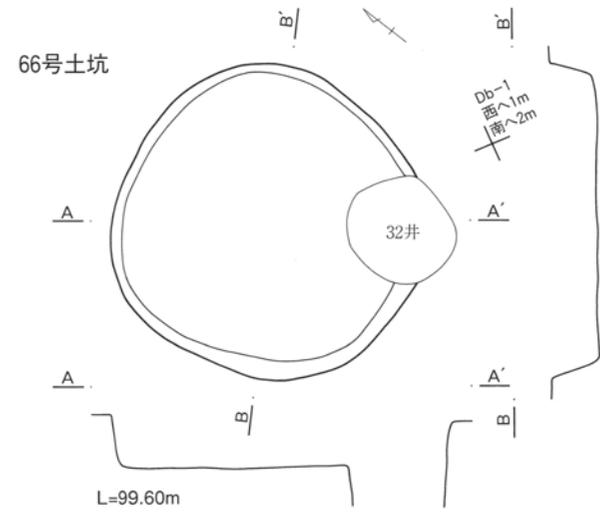
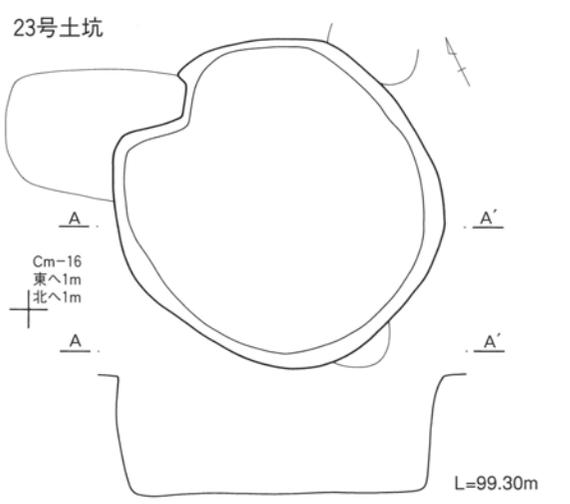
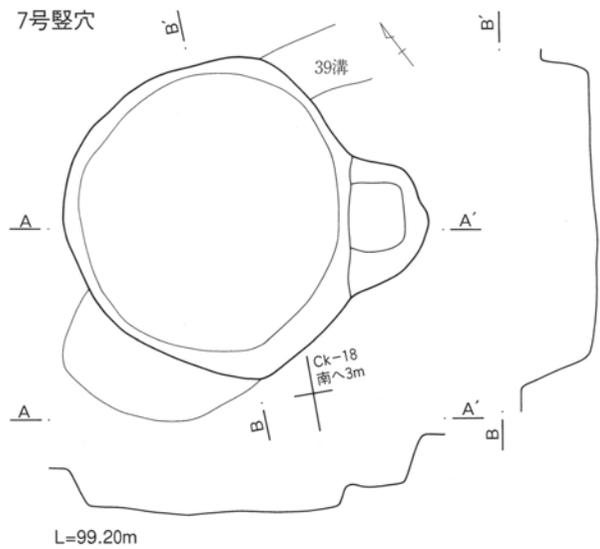
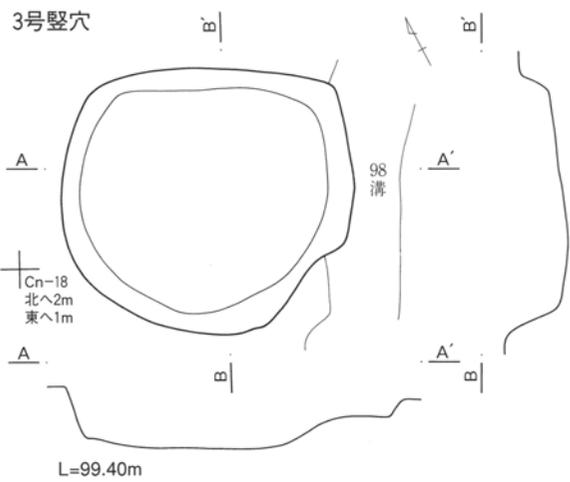
土坑の出土遺物はあまり多くない。このうち土器は図示した遺物の他、16基の土坑から32点中近世



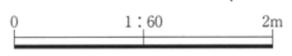
第78図 1区108号土坑と出土遺物



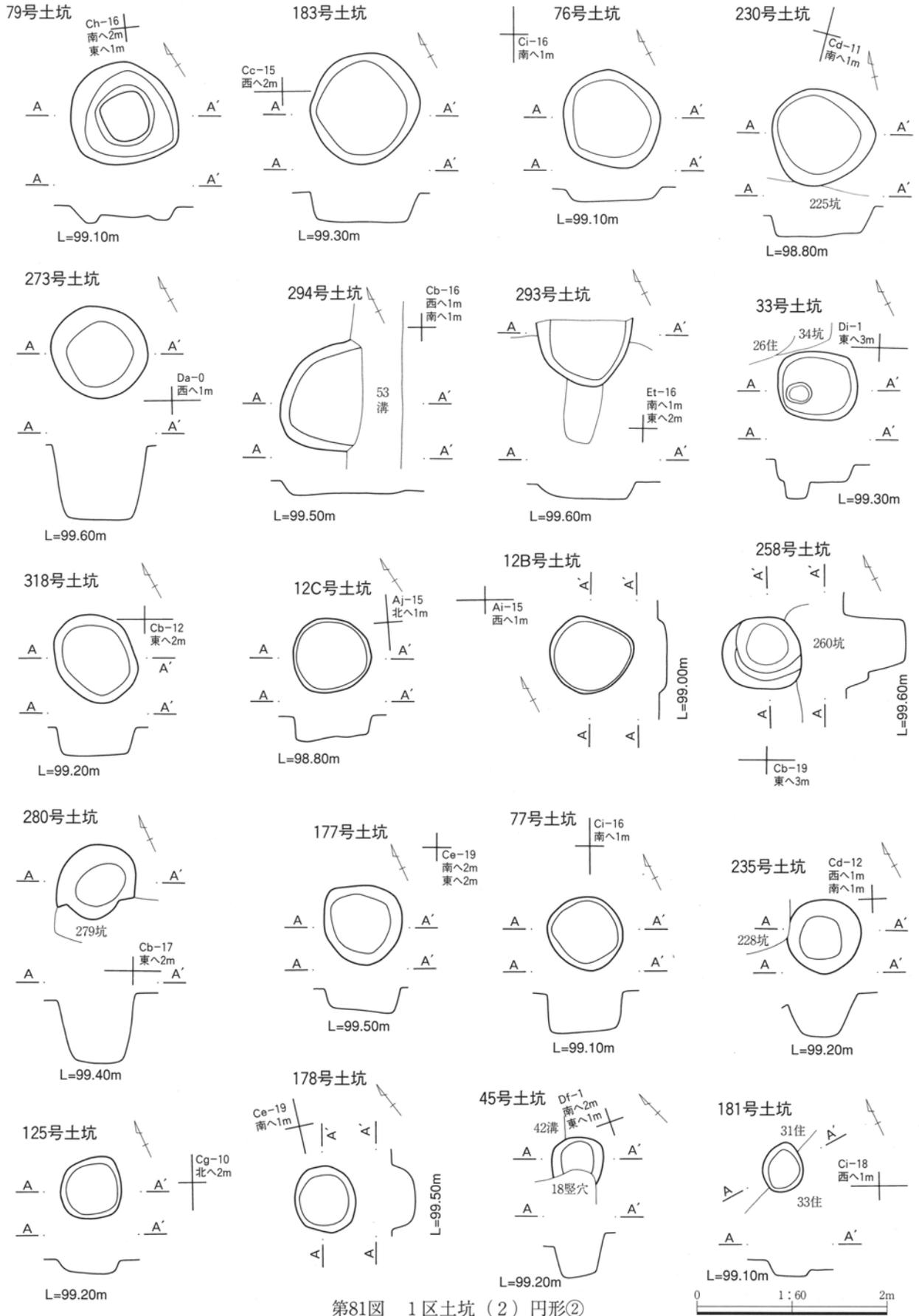
第79図 1区土坑出土遺物



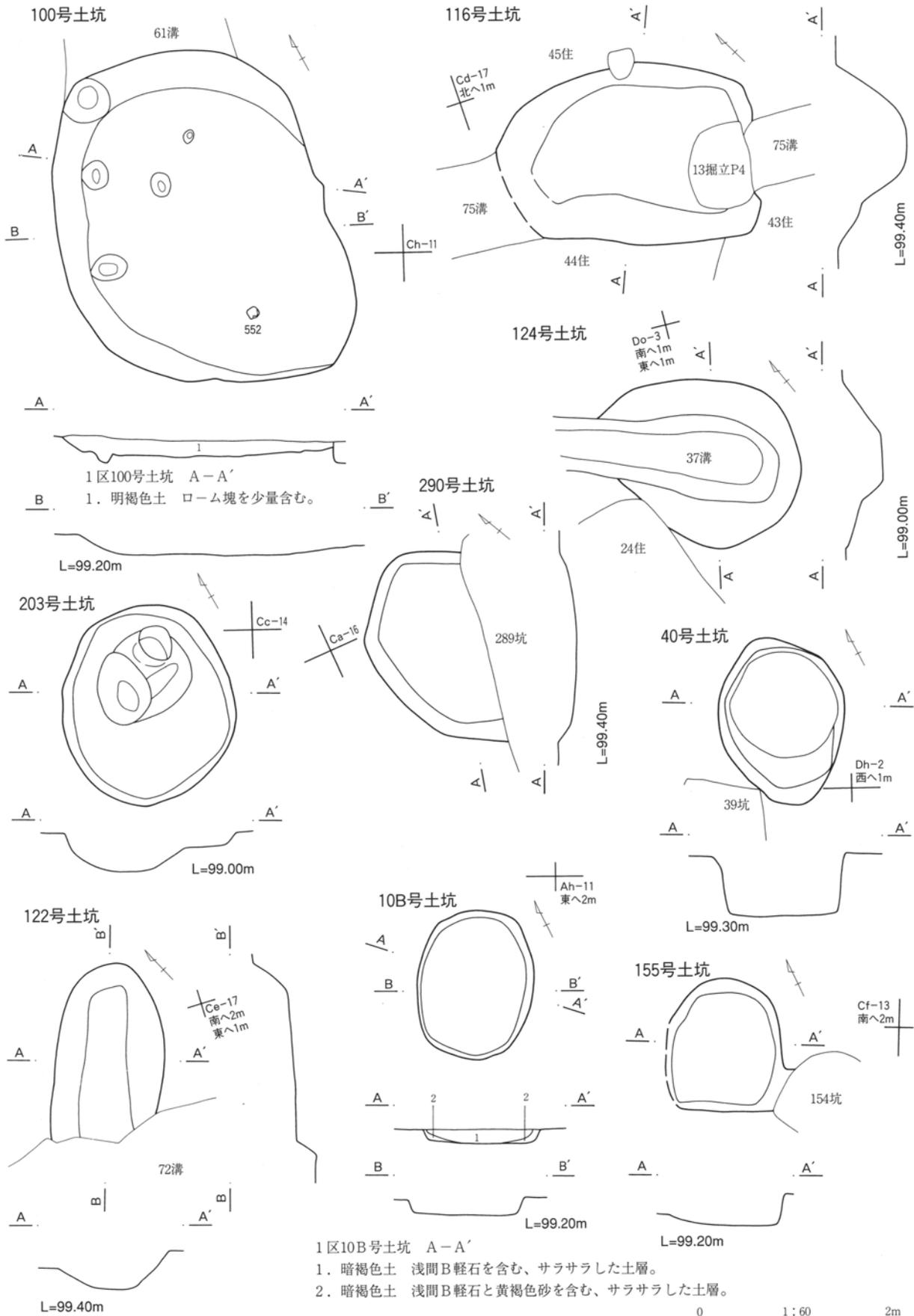
第80图 1区土坑(1)円形①



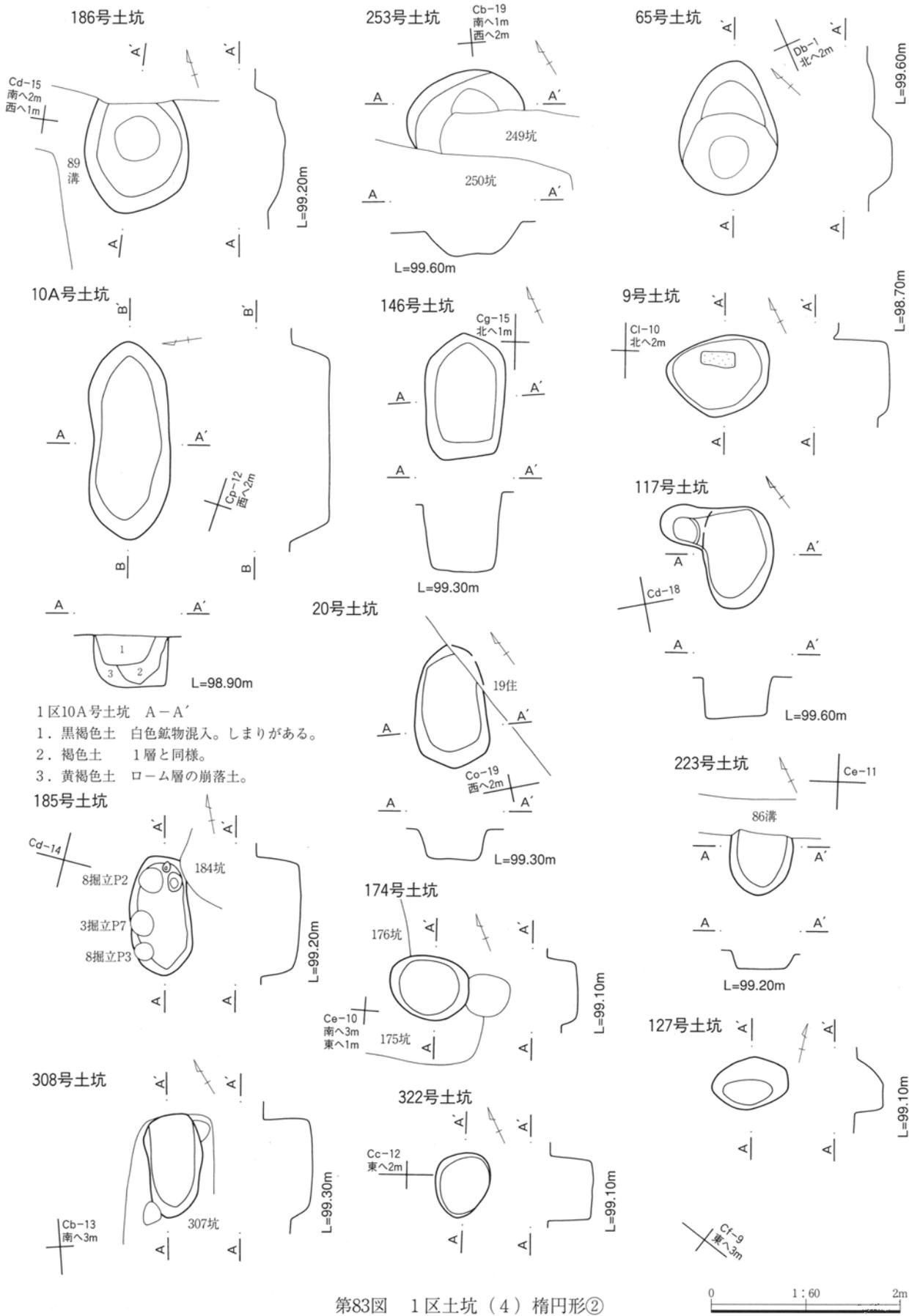
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物



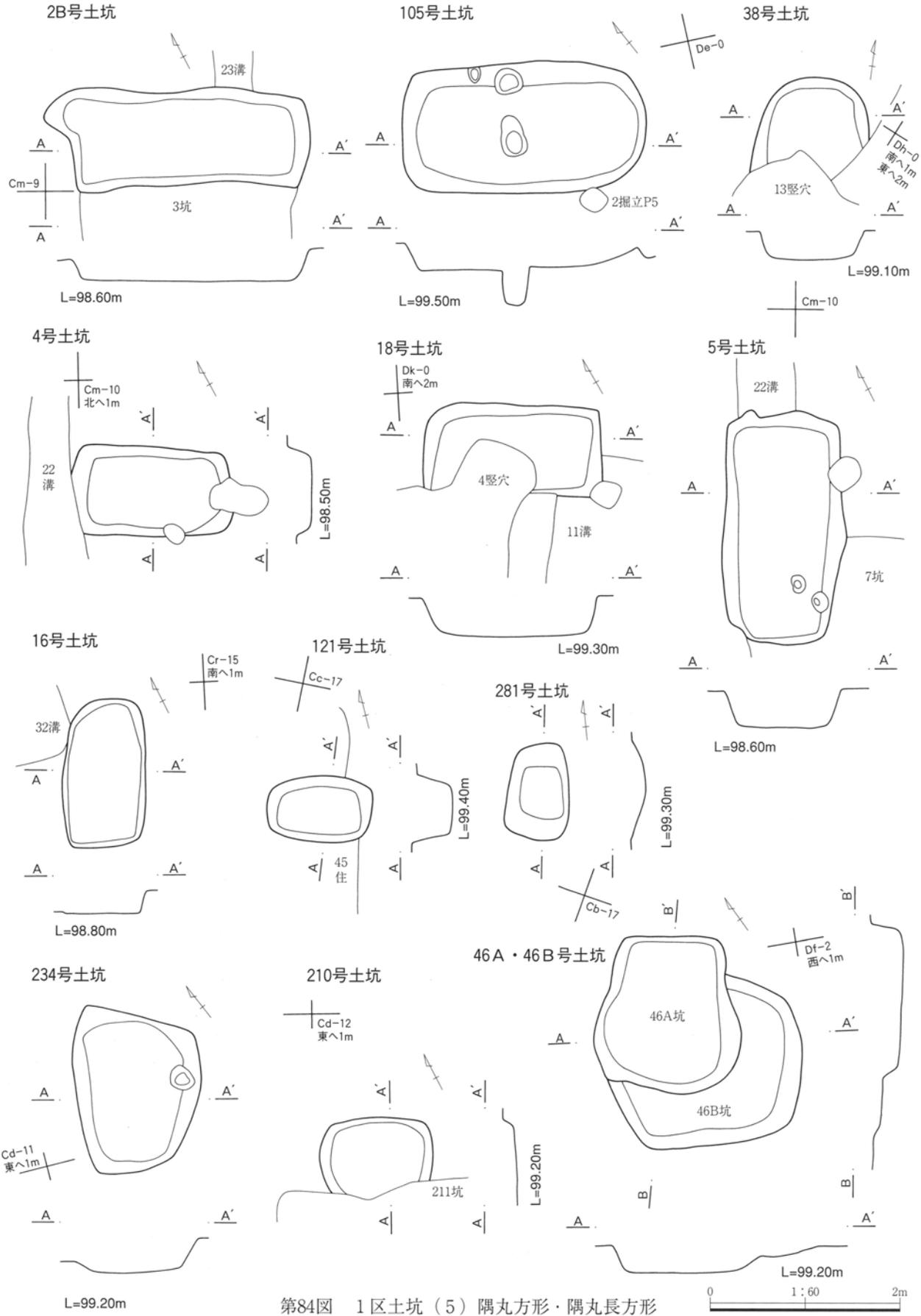
第81図 1区土坑 (2) 円形②



第82図 1区土坑(3) 楕円形①

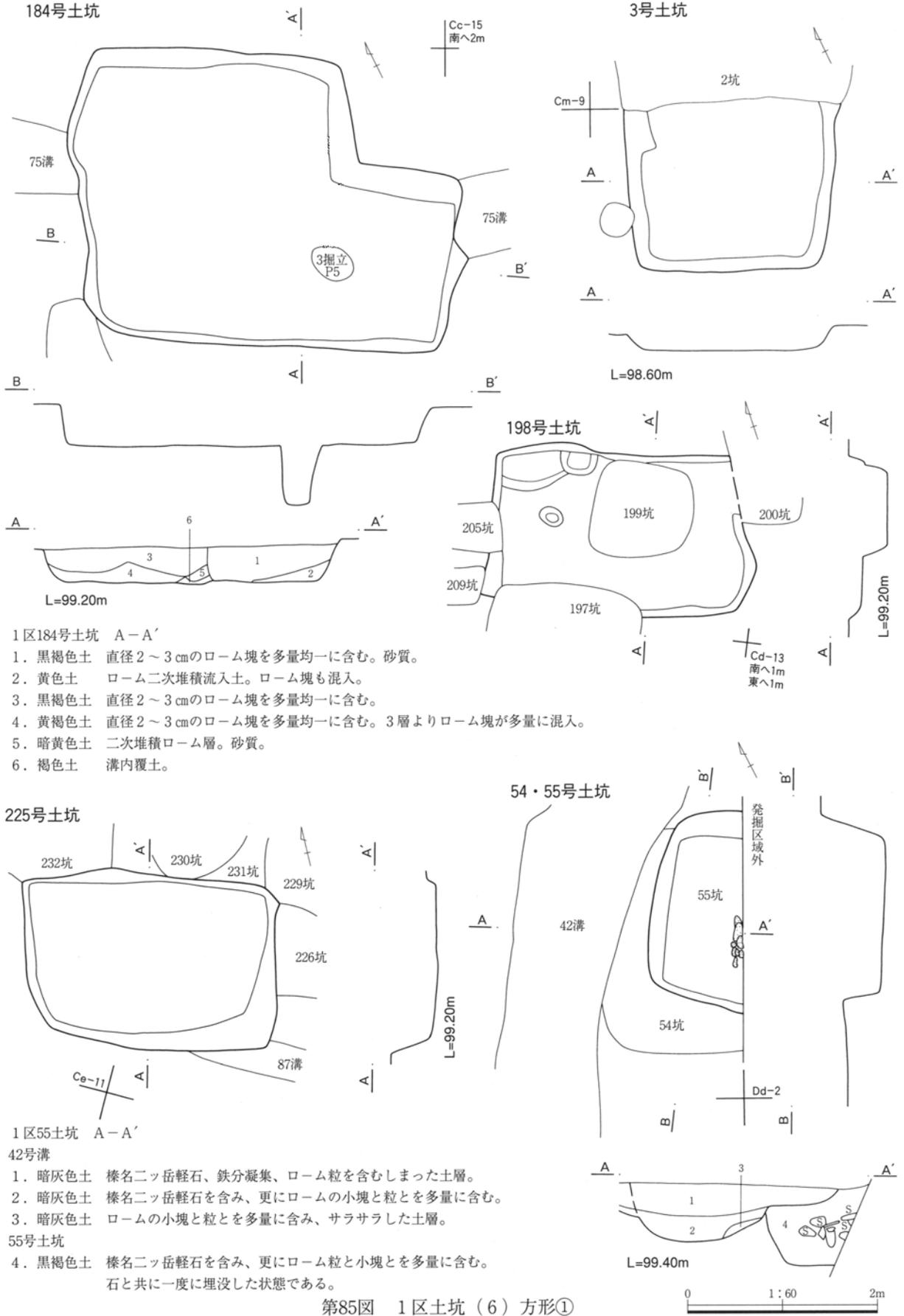


第83図 1区土坑(4) 楕円形②



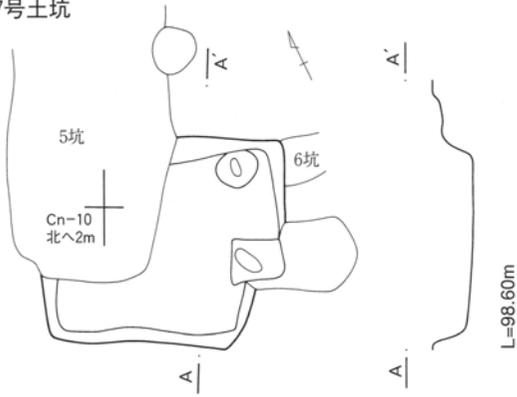
第84图 1区土坑(5) 隅丸方形・隅丸長方形

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

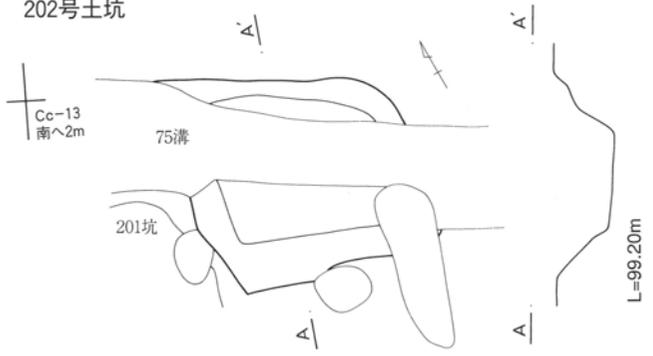


第85図 1区土坑(6)方形①

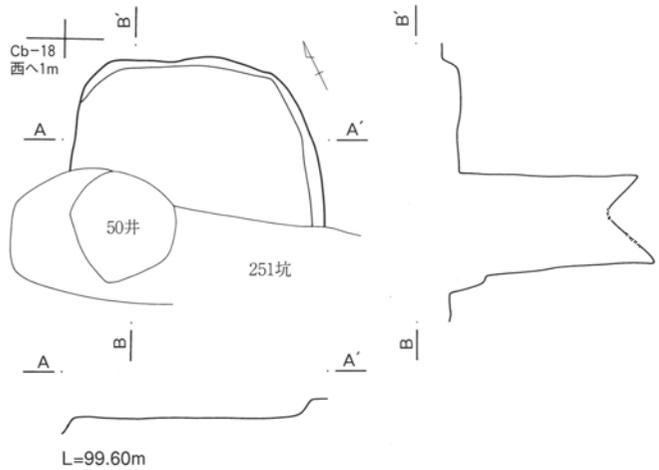
7号土坑



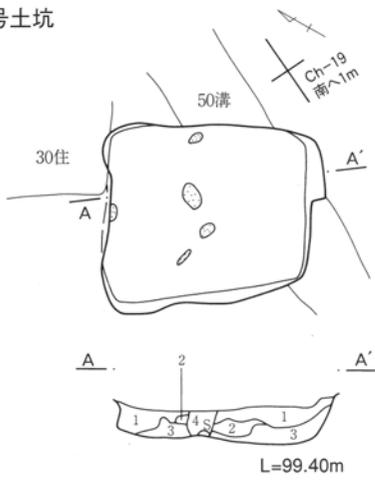
202号土坑



252号土坑



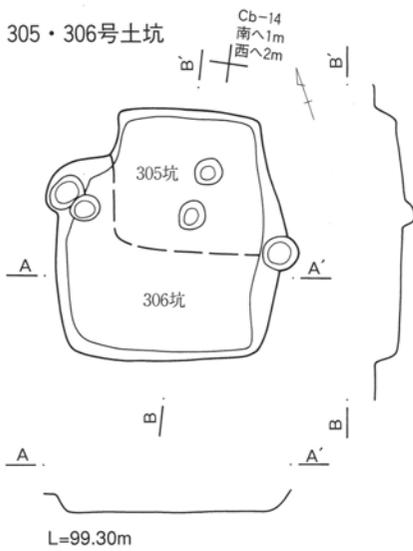
72号土坑



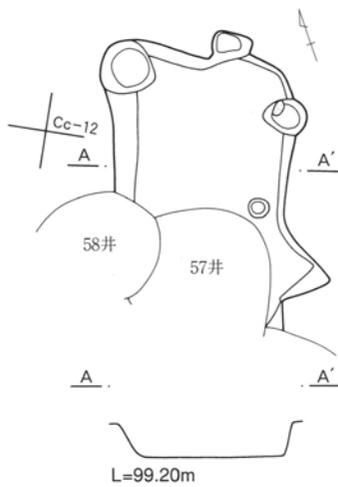
1区72号土坑 A-A'

1. 茶褐色土 榛名二ツ岳軽石、角閃石安山岩（直径2～3mm）を含む、しまった土。わずかに木炭を含む。
2. 暗褐色土 榛名二ツ岳軽石、角閃石安山岩（直径2～3mm）を含む、しまった土。
3. 黄褐色土 ローム崩落土。
4. 攪乱

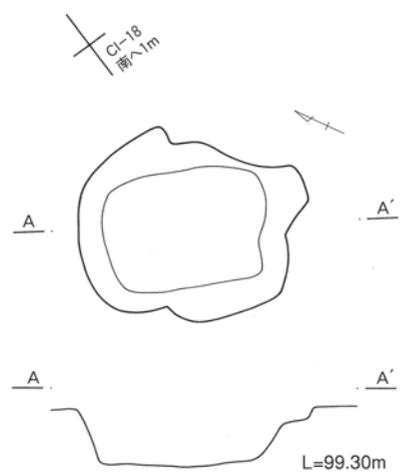
305・306号土坑



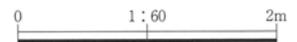
312号土坑



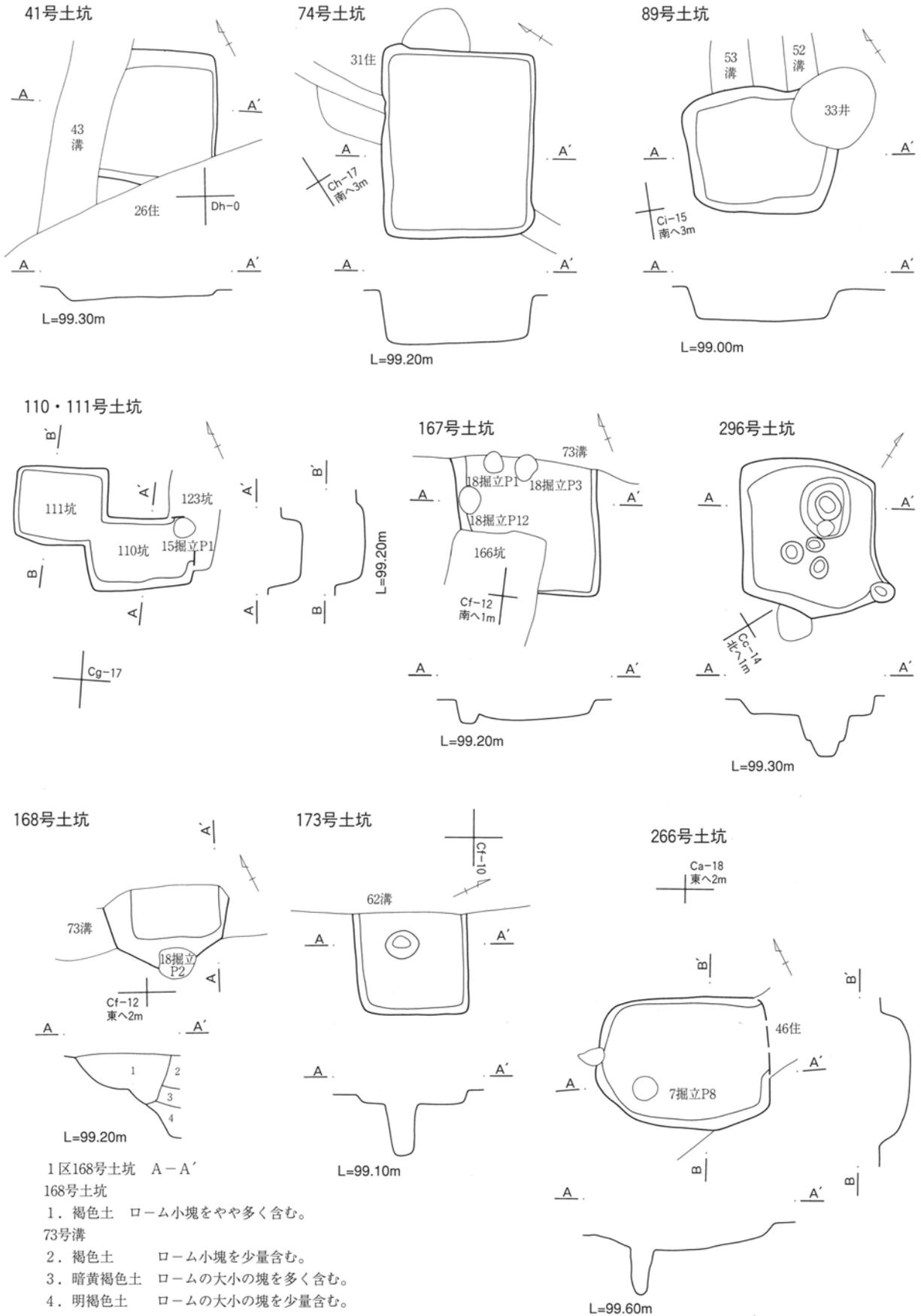
22号土坑



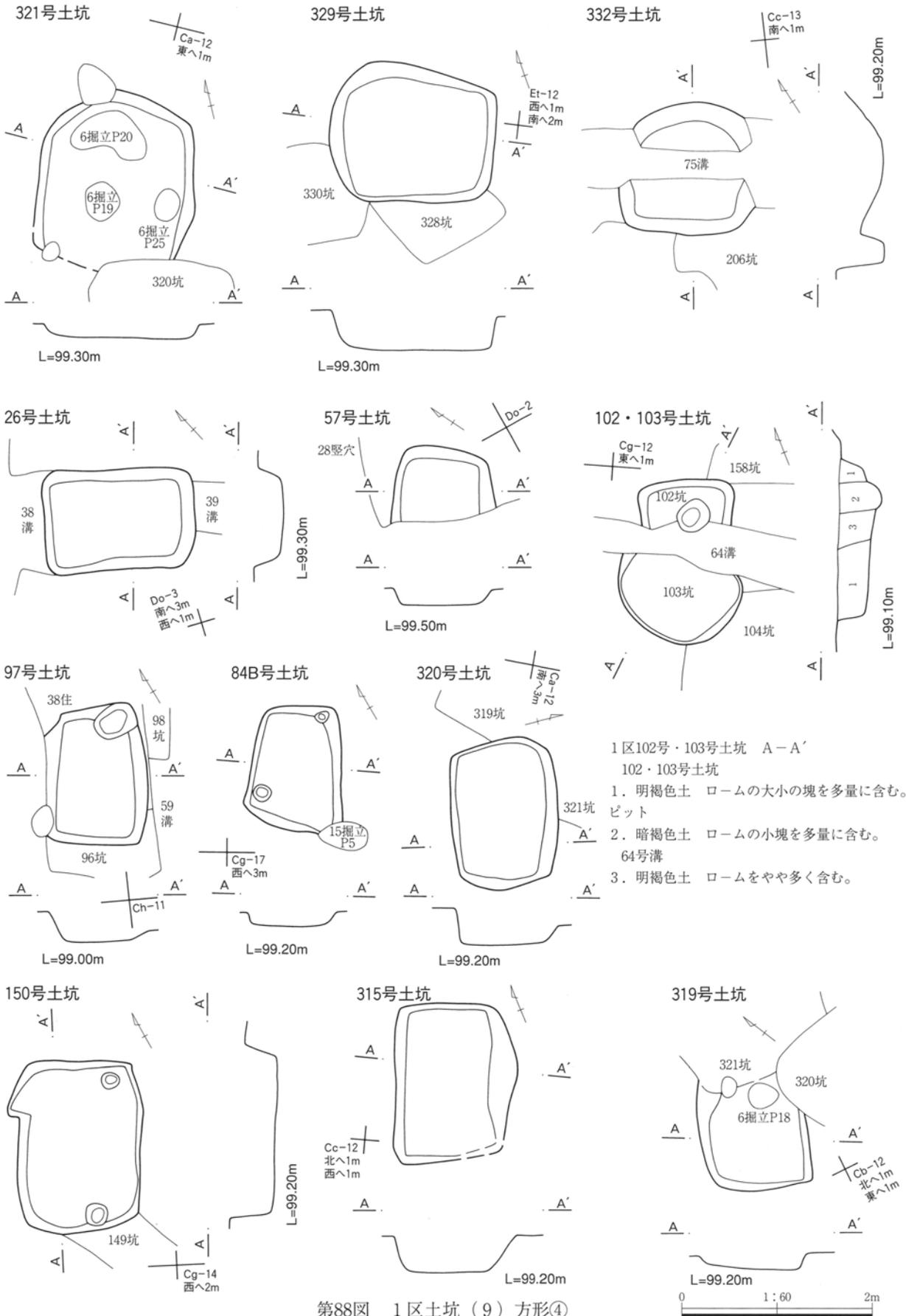
第86図 1区土坑(7) 方形②



第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

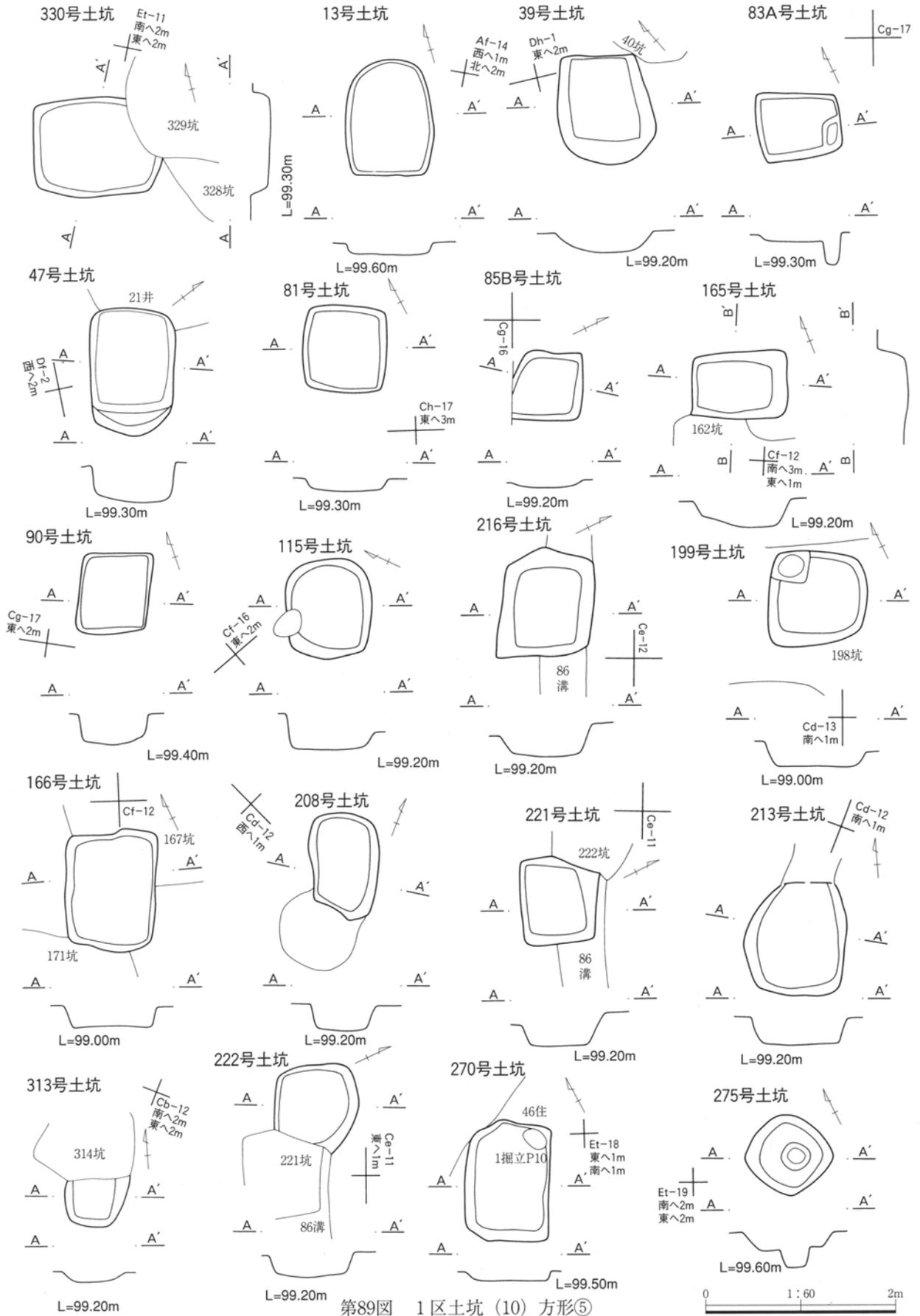


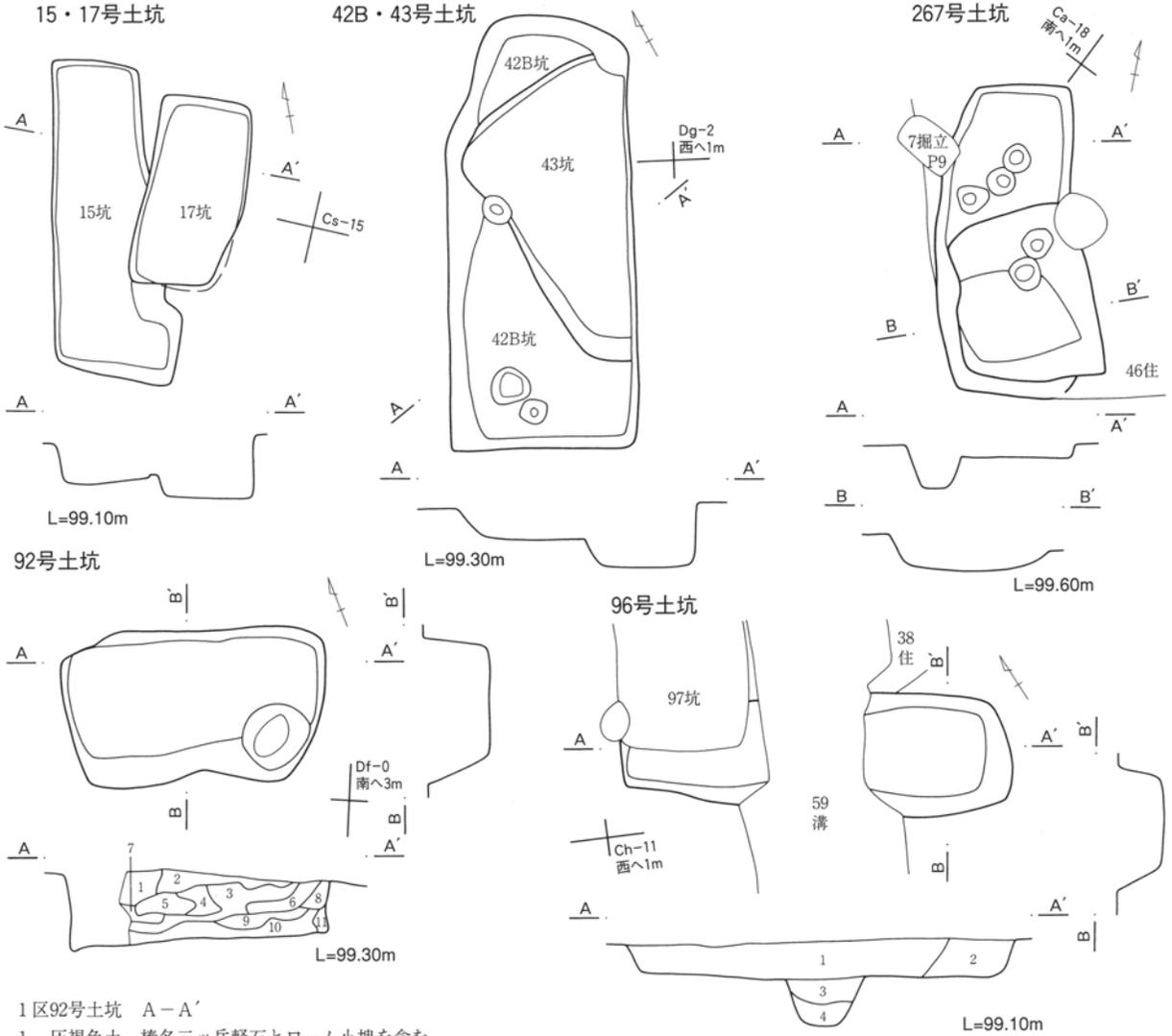
第87図 1区土坑(8)方形③



第88図 1区土坑(9)方形④

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物





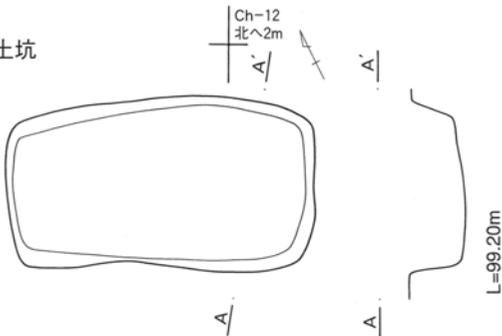
1区92号土坑 A-A'

1. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とローム小塊を含む。
2. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石を含み、ロームの小塊を多量に含む。
3. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石を多量に含み、ロームの小塊を含む。
4. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石を多量に含み、ロームの小塊を含む。3層より明るい。
5. 黄褐色土 ローム塊。
6. 灰褐色土 榛名二ツ岳軽石とロームの塊を含む。ローム塊が全体の1/3程度になる。
7. 灰褐色土 4層の類似層。4層より暗い。
8. 黄褐色土 ローム塊。
9. 灰黒色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を含む。
10. 灰黒色土 榛名二ツ岳軽石とローム粒を含む。9層より暗い。
11. 黄褐色土 灰褐色土の塊を含む。

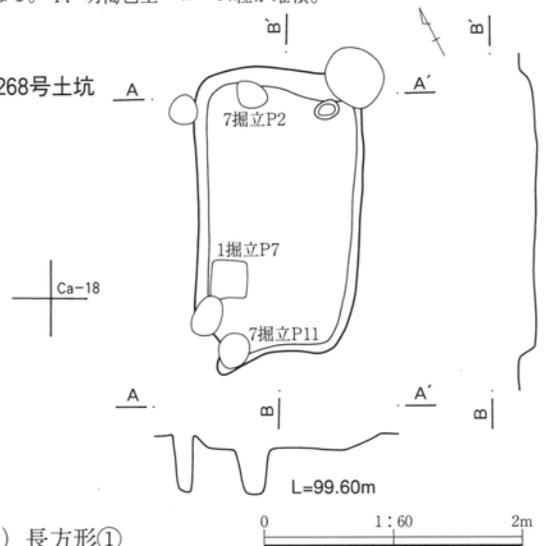
1区96号土坑 A-A'

1. 明褐色土 ロームと褐色土が小塊でまじり合っている。
2. 明褐色土 1層と同様でロームの量が多い。
3. 黒褐色土 ロームの小塊を少量含む。
4. 明褐色土 ローム粒が堆積。

93号土坑

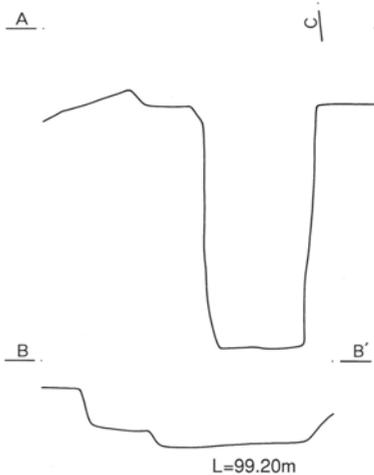
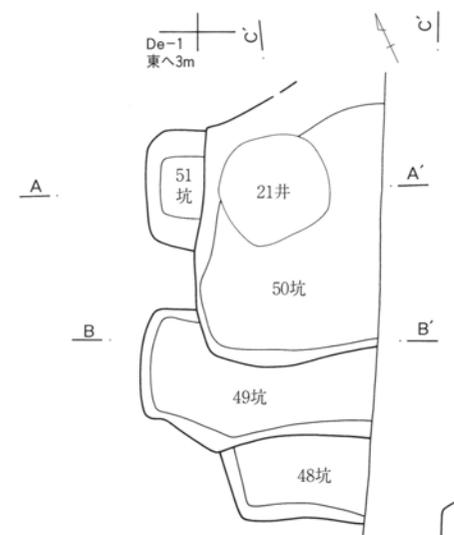


268号土坑

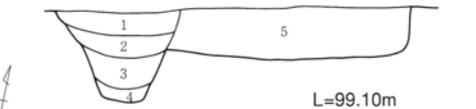
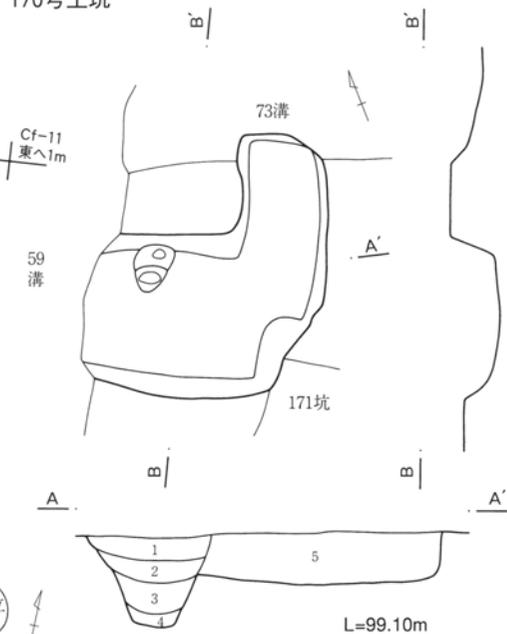


第90図 1区土坑 (11) 長方形①

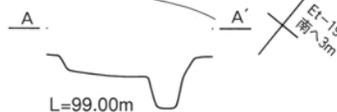
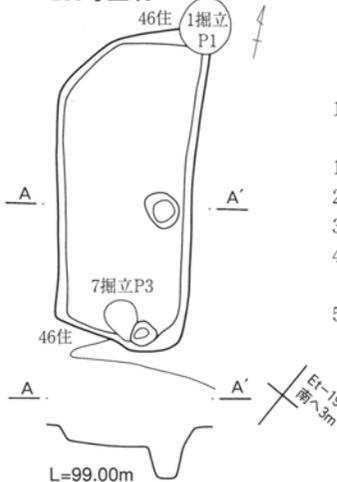
48・49・50・51号土坑



170号土坑



269号土坑

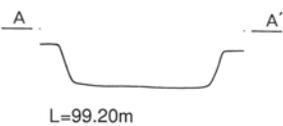
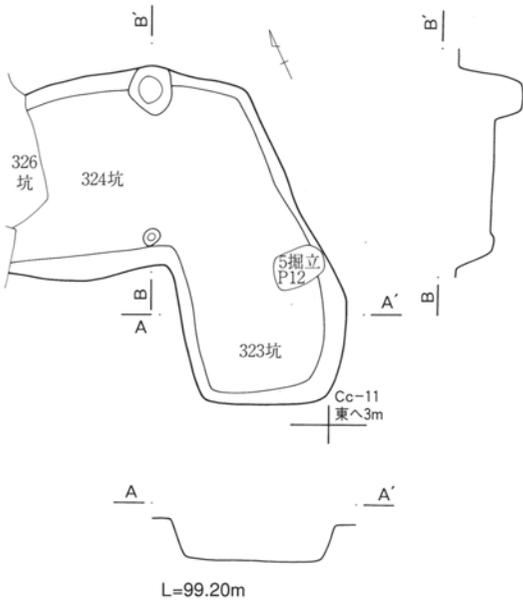


1区170号土坑 A-A'

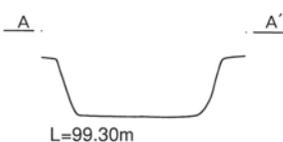
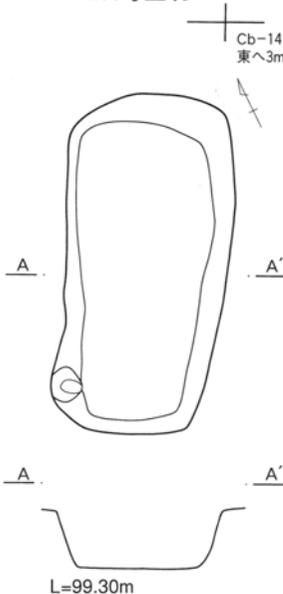
59号溝

- 1. 暗黄褐色土 ロームの大塊を多量に含む。
 - 2. 黒褐色土 ロームの小塊を少量含む。
 - 3. 暗黄褐色土 ロームの小塊を多く含む。
 - 4. 暗黄褐色土 ロームの大小の塊を多く含む。
- 170号土坑
- 5. 明褐色土 ロームと褐色土が小塊で混じり合っている。

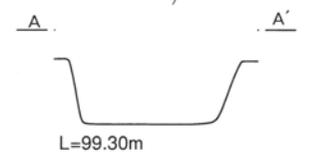
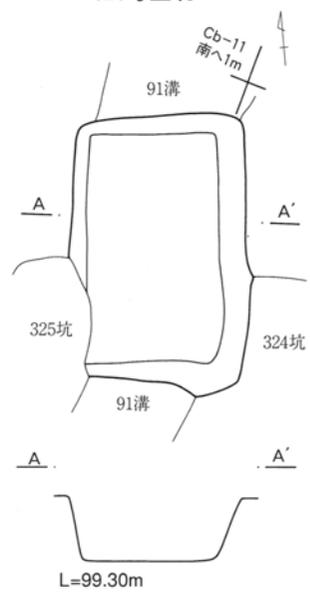
323・324号土坑



295号土坑

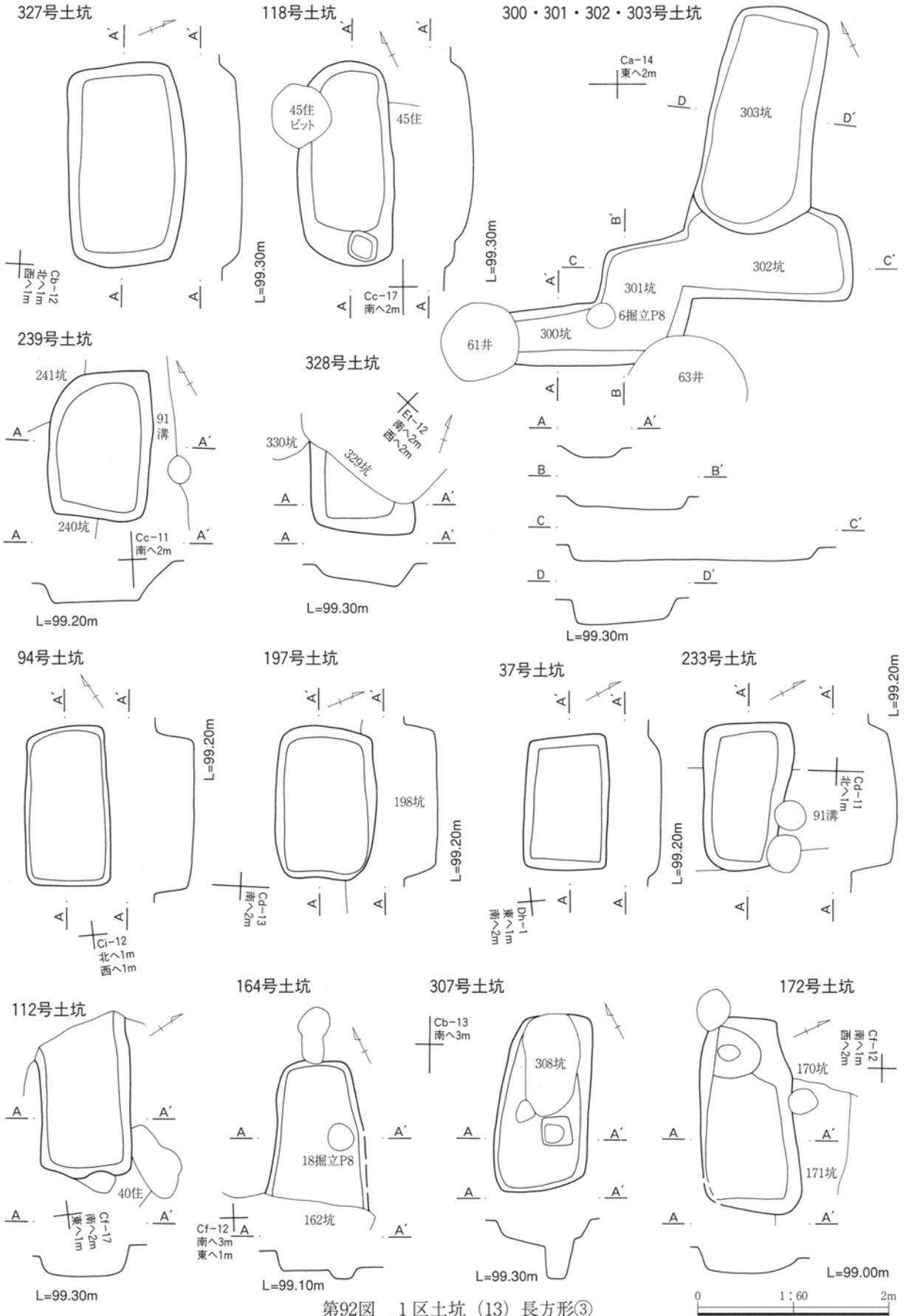


326号土坑

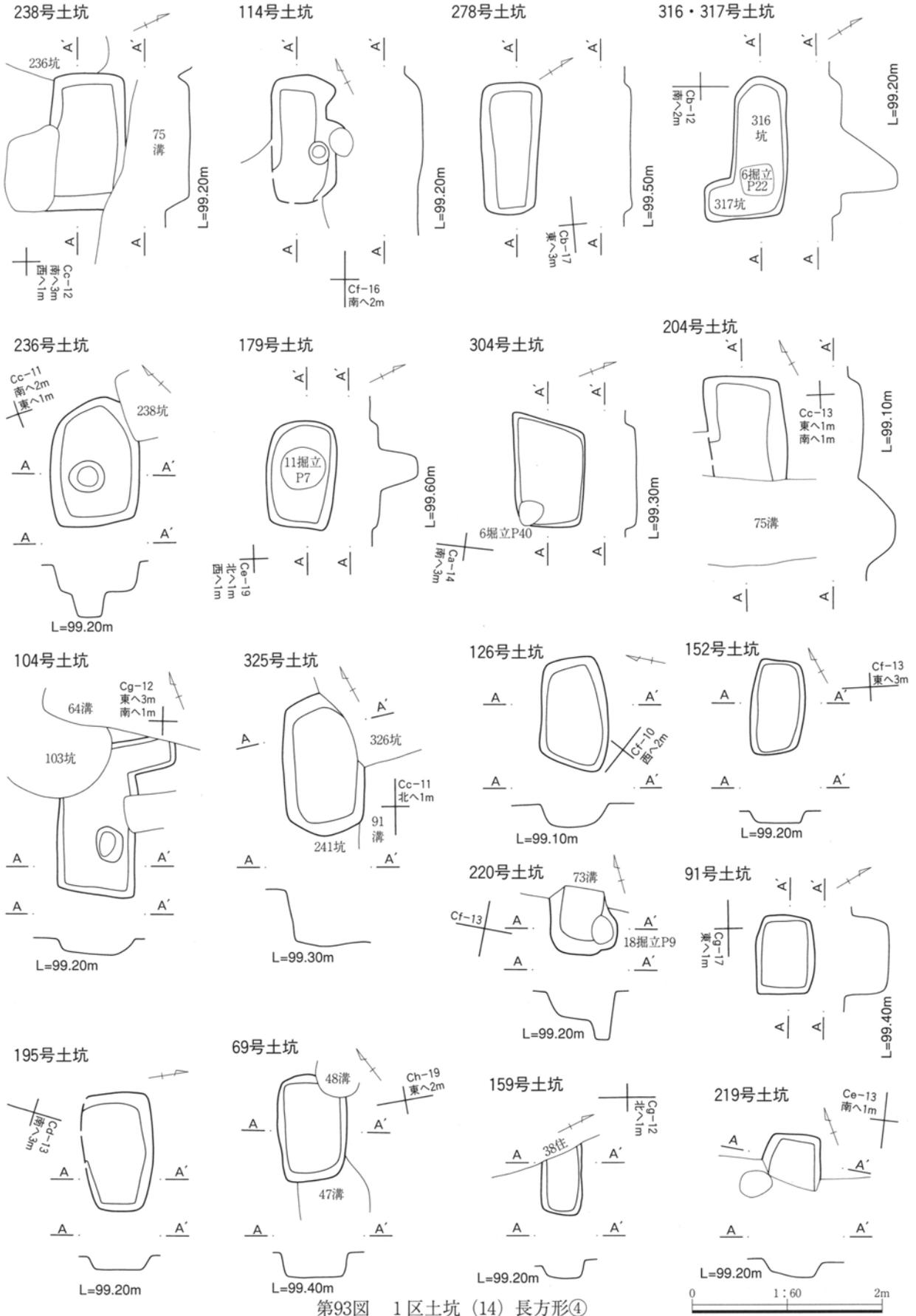


第91図 1区土坑 (12) 長方形②

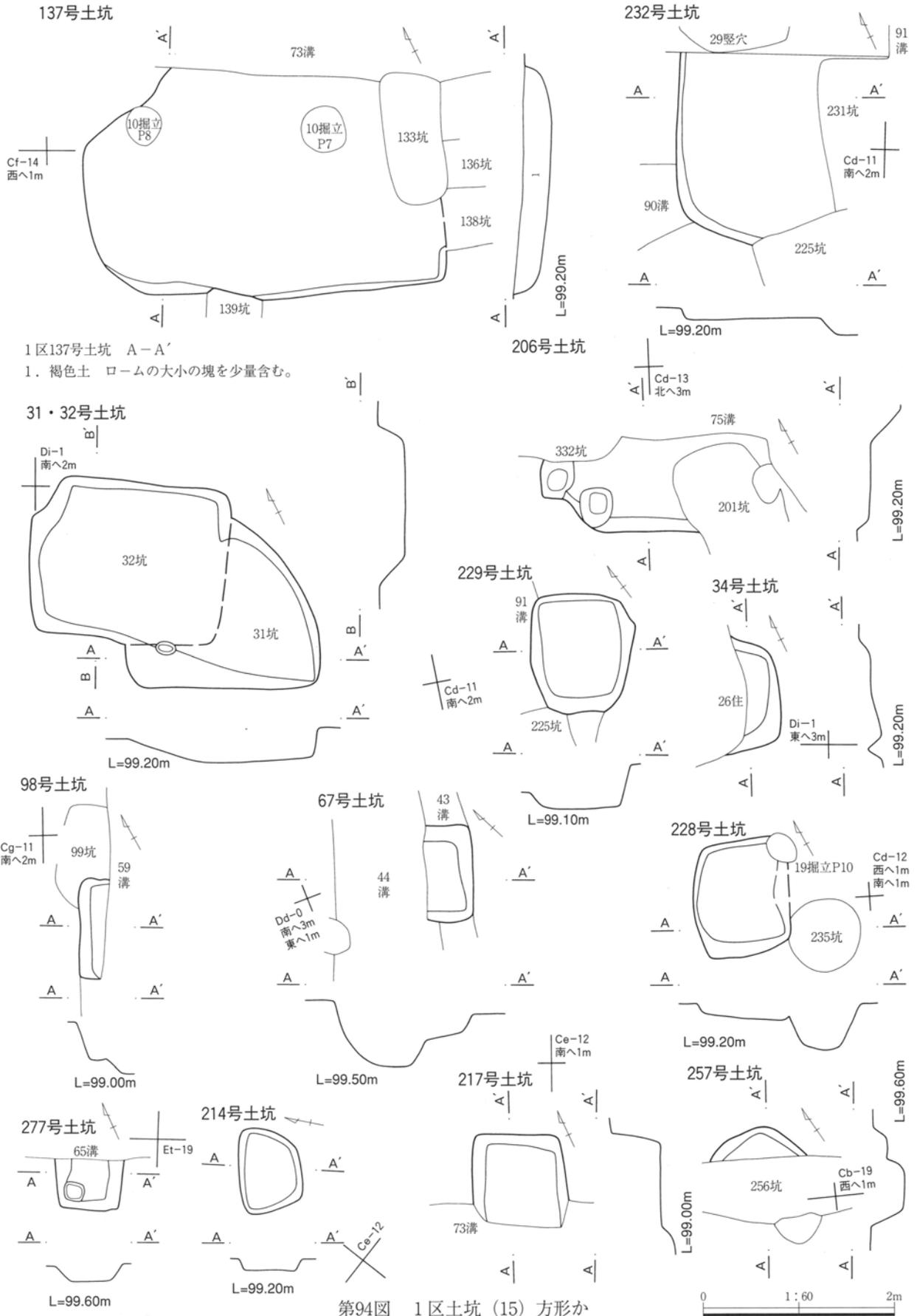


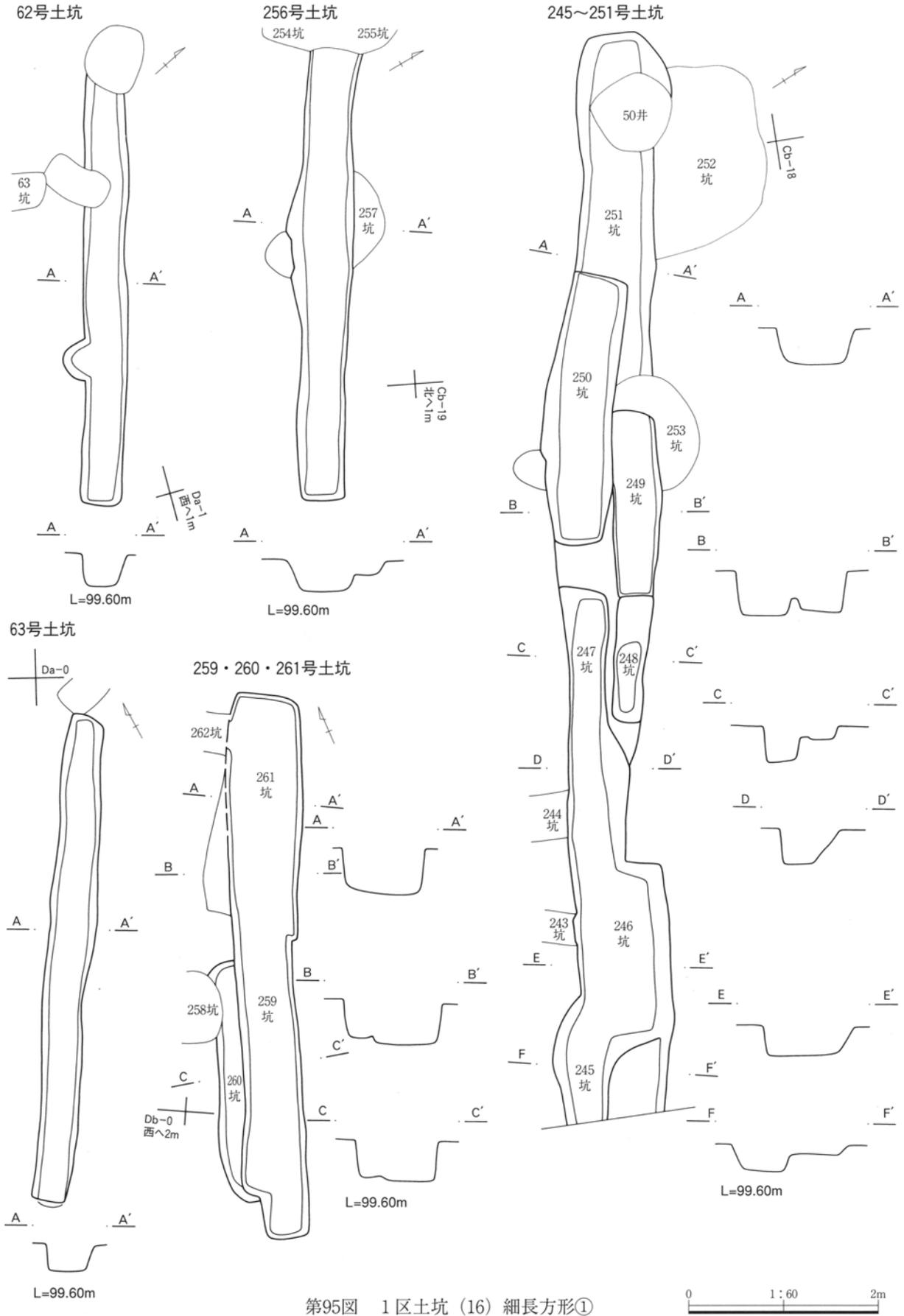


第92図 1区土坑 (13) 長方形③



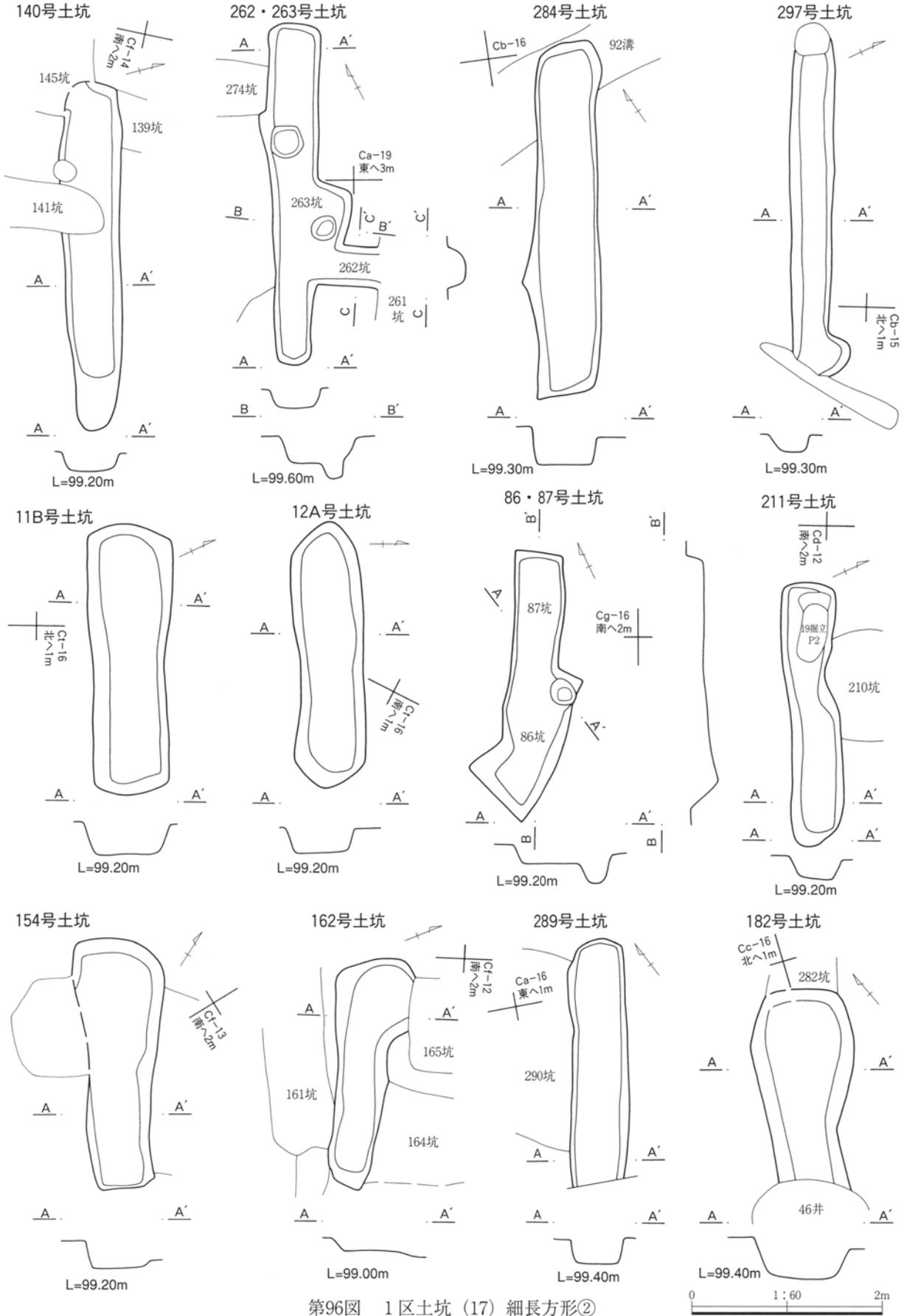
第93図 1区土坑 (14) 長方形④

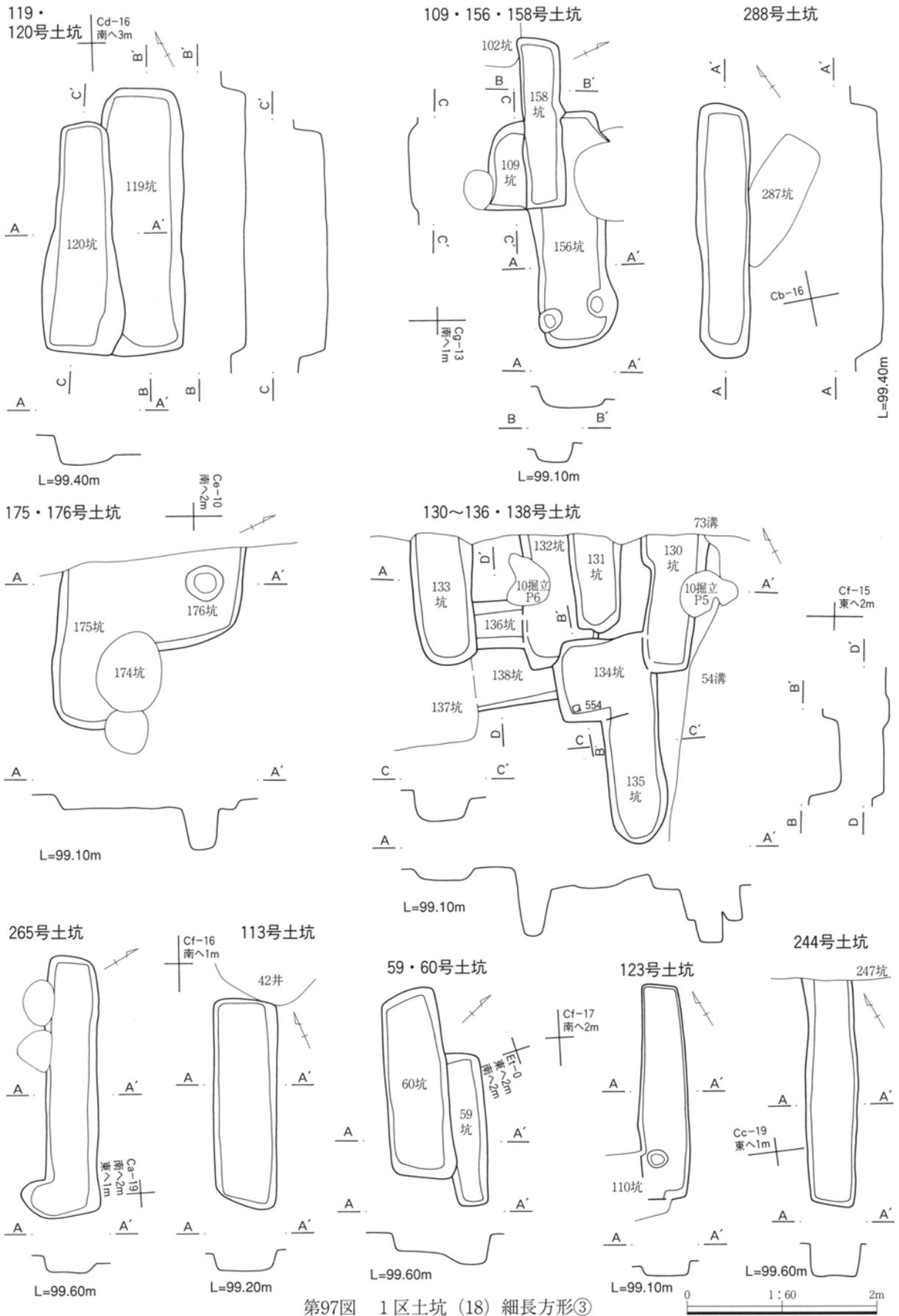




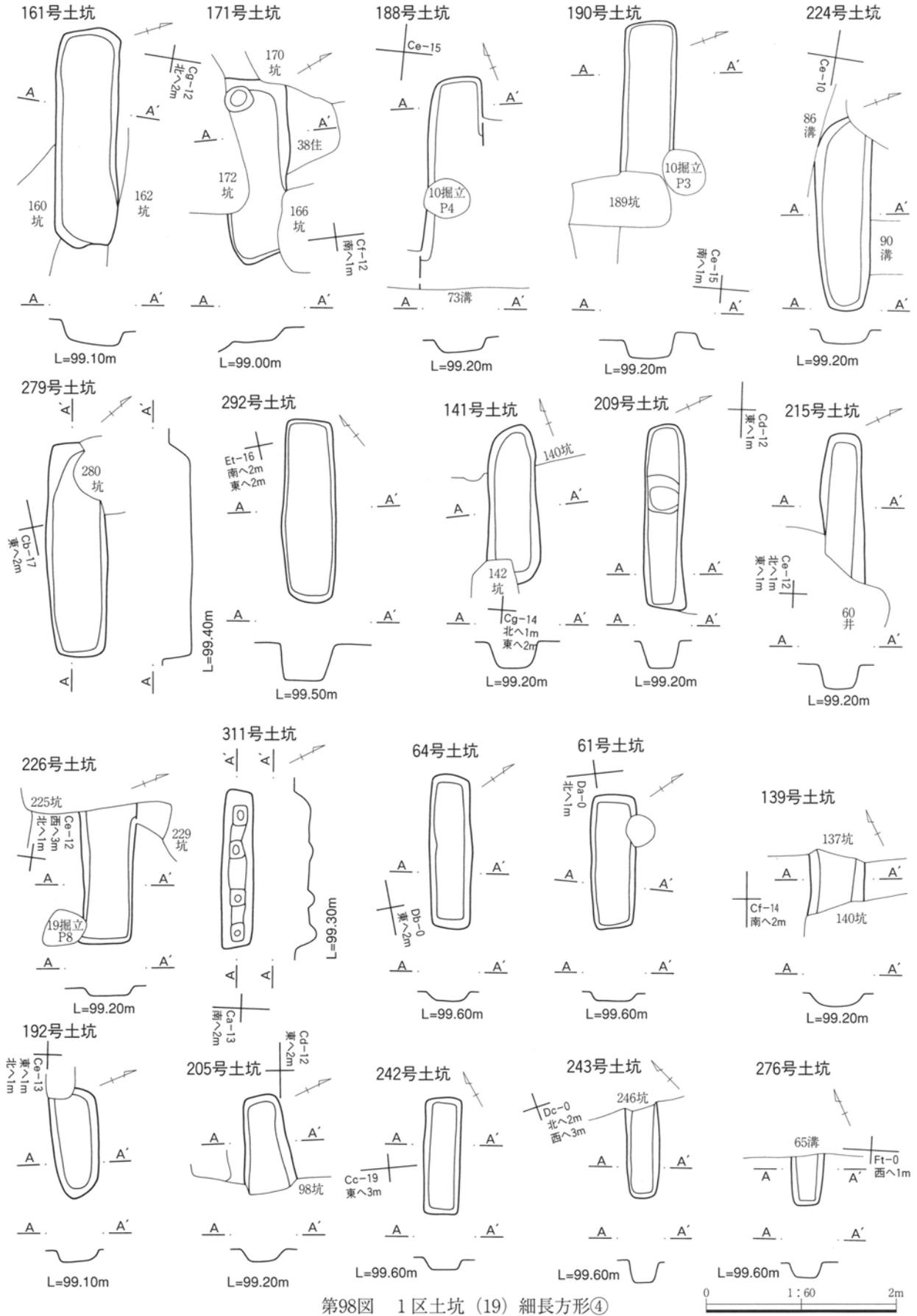
第95図 1区土坑(16)細長方形①

2. 中近世





2. 中近世



第98図 1区土坑(19)細長方形④

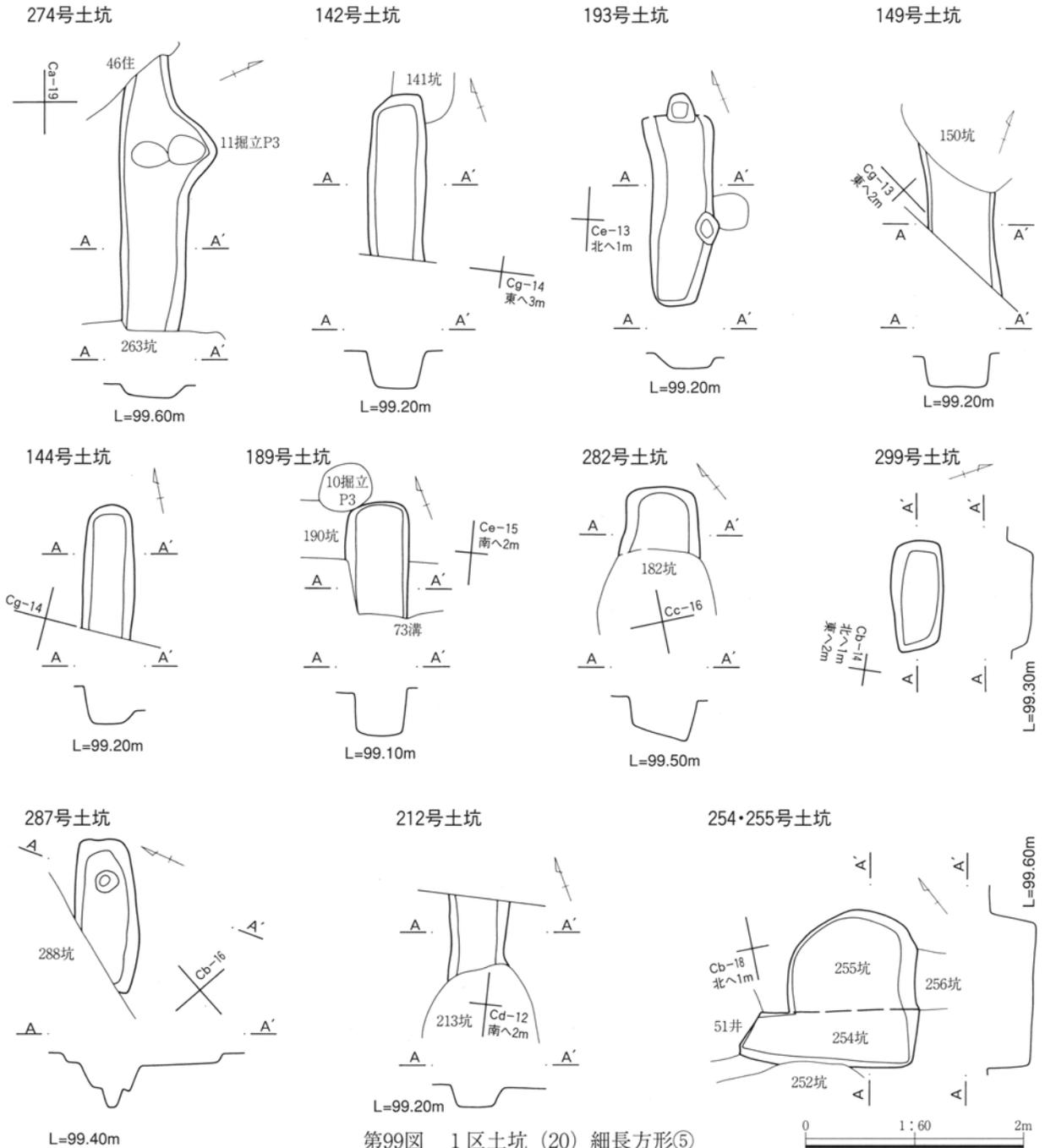
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

の土器破片が出土したのみである。埋土中出土の遺物が多い中で、出土地点の明確な遺物は、8号土坑の15世紀と見られるかわらけ(第79図550)、100号土坑の17世紀と見られる瀬戸美濃丸皿(第79図552)、108号土坑の17世紀と見られる瀬戸美濃丸皿(第78図553)、134号土坑の中世とみられる軟質陶器内耳鍋(第79図554)がある。

第78図に図示した108号土坑は小型の隅丸方形の

土坑であるが、553の丸皿の下から敲き石(S139)と紡錘車(S140)が出土した。これらの石器は混入として第I分冊に掲載したが、出土状態を再検討した結果、本土坑で共伴していると判断して再録した。埋没土中からは146号土坑から13世紀後葉と見られる常滑甕が出土している。

石器は40号土坑から粉挽き臼、225号土坑から茶臼の破片が出土している。



第99図 1区土坑(20)細長方形⑤

E. 竪穴状遺構

(第100～113図 付図1 P.L20・21・

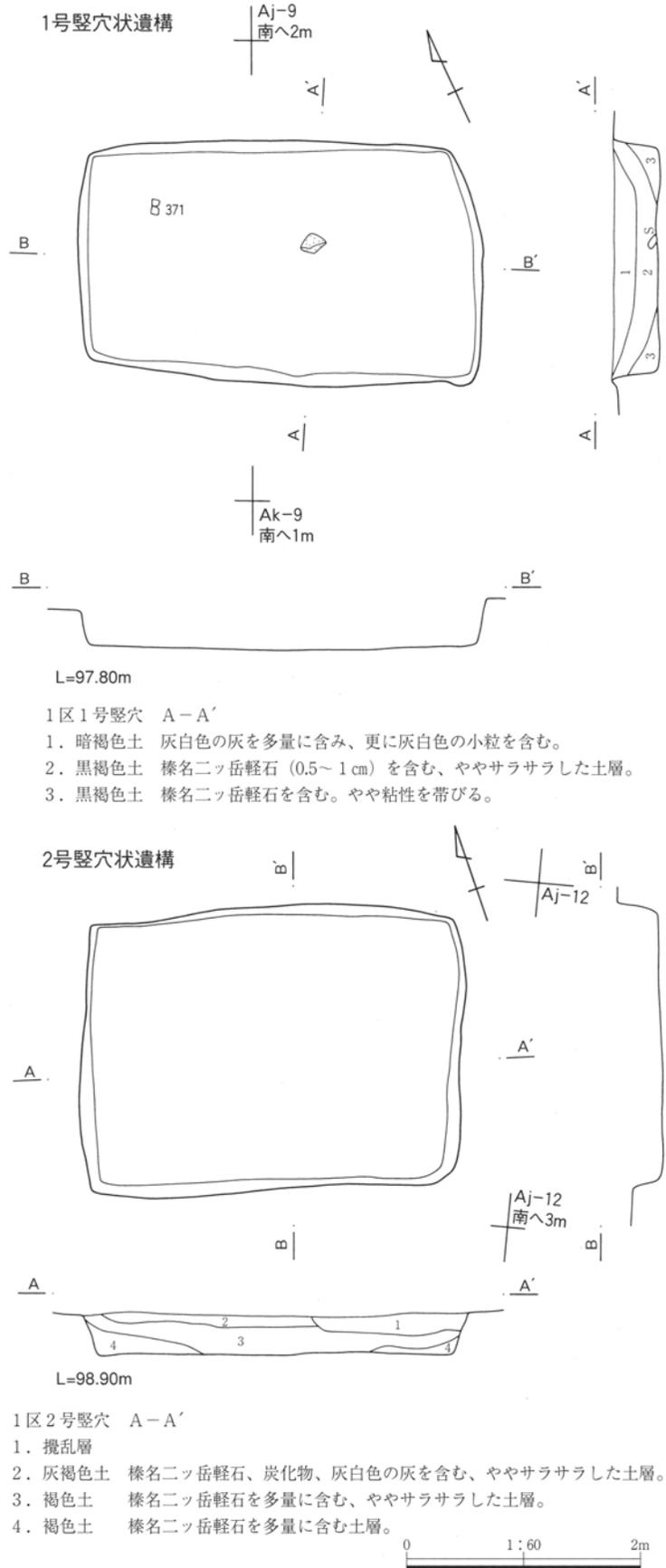
47～49 遺物観察表P.280・281・289・290)

1区で検出された竪穴状遺構は28基である。この竪穴状遺構には形態の異なる2種を扱った。一つは大型の長方形で、1区の掘立柱建物散在部に2基のみ検出された。もう一つは方形を基調にした掘り込みに帯状の突出部が付設された竪穴で、26基が検出された。

長方形の1号・2号竪穴状遺構は、第100図に示したように、角の角張った長方形である。1号竪穴状遺構が長軸3.48m、短軸2.11m、深さ0.42m、短軸方位N-66°-W、2号竪穴状遺構が長軸3.25m、短軸2.43m、深さ0.40m、短軸方位N-72°-Wで1号の方がやや狭い。埋没土はいずれも白色軽石が目立つ黒褐色土で、上層に灰・炭化物が混入していることが共通する。

これらの遺構は1区南端部の掘立柱建物南集中部にある。1号竪穴状遺構は28号掘立柱建物の西1mにあり、短軸方位が建物の主軸方位とほぼ一致する。2号竪穴状遺構は28号竪穴状遺構の東0.6mにあるが、短軸方位は4.6m東にある24号掘立柱建物の主軸方位に一致する。これらの位置関係から、1号・2号竪穴状遺構は掘立柱建物と併存あるいは関連のある遺構と考えられる。

しかし、中近世に関わる出土遺物は無く、掘立柱建物との関係は可能性を示唆するにとどまる。なお、1号竪穴状遺構からは、弥生時代終末期の甕形土器破片が出土している。『荒砥宮田遺跡I』P.32ではこの遺物を重視して、1号竪穴状遺構を弥生時代終末期と報告したが、2号竪穴状遺構との類似性や掘立柱建物との位置関係から、中近世の遺構の可能性が高いので、報告を



第100図 1区竪穴状遺構 (1) 1・2号竪穴状遺構

修正したい。

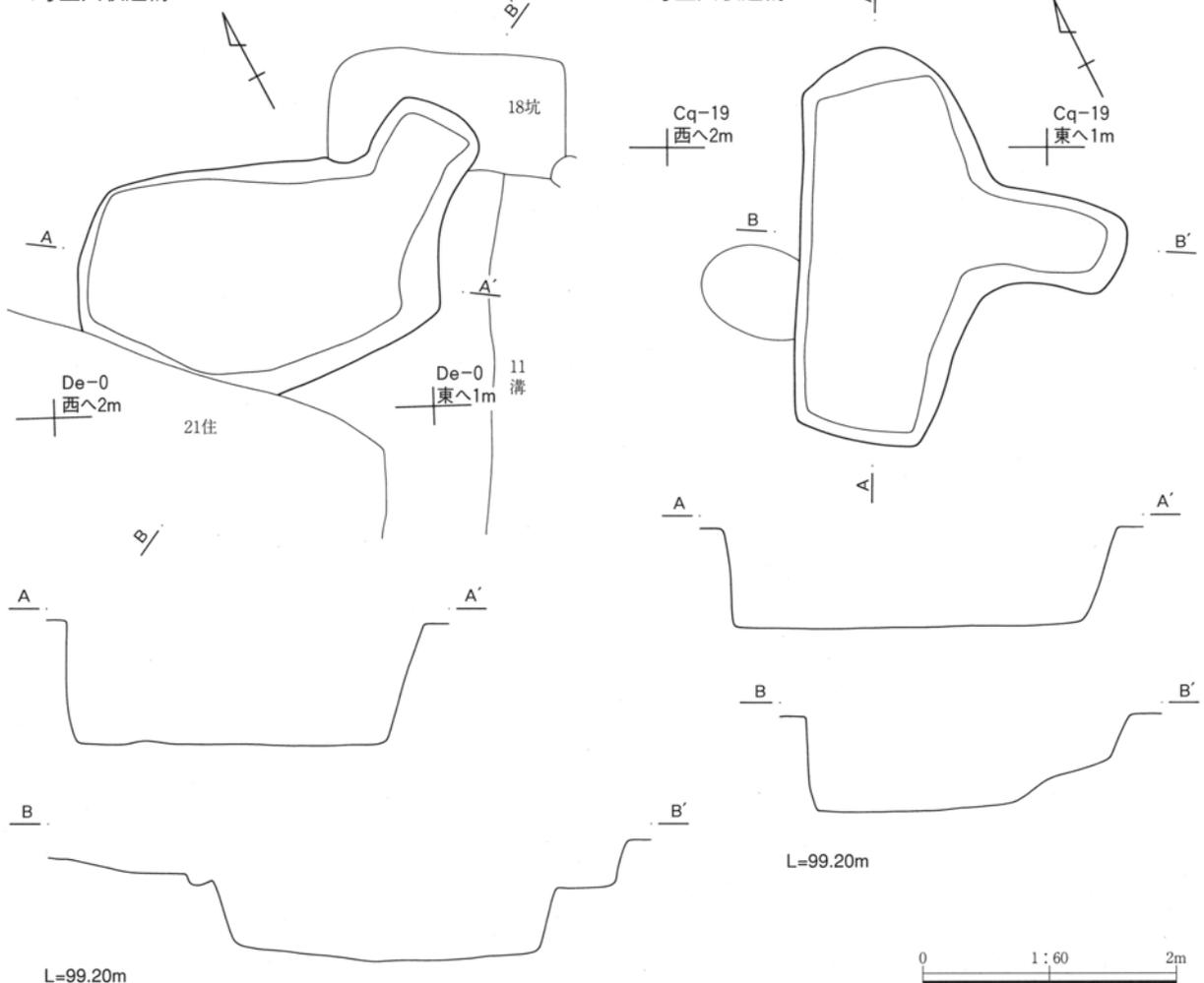
方形を基調にした掘り込みに帯状の突出部が付設された竪穴状遺構は、26基が検出された。そのうち24基は43号溝の東側に列状に並んで集中し、他の2基は1区北西部の62号溝の東側に並んで検出された。数に大きな違いがあるが、溝に沿って並ぶのは共通したあり方である。竪穴状遺構群は突出部を東側にして並んでいる。突出部を入口と考えれば、溝を背にして発掘区域外である東側の空間に開口していることになる。東側の調査対象除外地域は東側低地に向かって緩やかな斜面である。竪穴状遺構が東側の開口部から使用するとすれば、もう一つ方形区画された屋敷の存在を想定することも可能である。

同様に62号溝の東側にある2基の竪穴状遺構も、突出部を東にして並存する。これらも、その位置関

係から62号溝を西境とする区画内の施設と考えられる。

これらの竪穴状遺構の時期は、後述するように中世の遺物が多く出土していることから、幅があるが中世の時期に掘削されたものと推定される。また、43号溝東で検出された竪穴状遺構群は、42号溝と重複している。この新旧関係は、20号竪穴状遺構のみ記録できたが、42号溝の方が新しい。したがって42号溝が区画する地割りよりも古いことが推定される。42号溝は溝の項でも検討したが、72号・73号溝と連なる44号溝と平行する位置にあり、屋敷地の推定も可能と考えられる。詳細は第7章に譲るが、竪穴状遺構群はより古い43号溝に区画される屋敷に伴うと考えられることになる。

竪穴状遺構の機能は未解明である。18号や21号、5号竪穴状遺構



第101図 1区竪穴状遺構 (2) 4・5号竪穴状遺構

24号竪穴状遺構のように、日常什器が出土するものもあれば、28号竪穴状遺構のように古銭が出土して、墓としての機能を推定させるものもある。しかし、今回の調査では形態や大きさも一様でなく、機能を明確にすることはできなかった。

以下に各竪穴状遺構について記述するが、個々のグリッドや規模・主軸方位は巻末の遺構一覧にまとめ、遺構の特徴や調査所見について述べる。

4号竪穴状遺構(第101図)は竪穴状遺構群の南端にあり、竪穴状遺構同士の重複はない。やや胴の張る長方形で北東隅に突出部がある。重複する18号土坑との新旧関係は不明である。出土遺物はない。

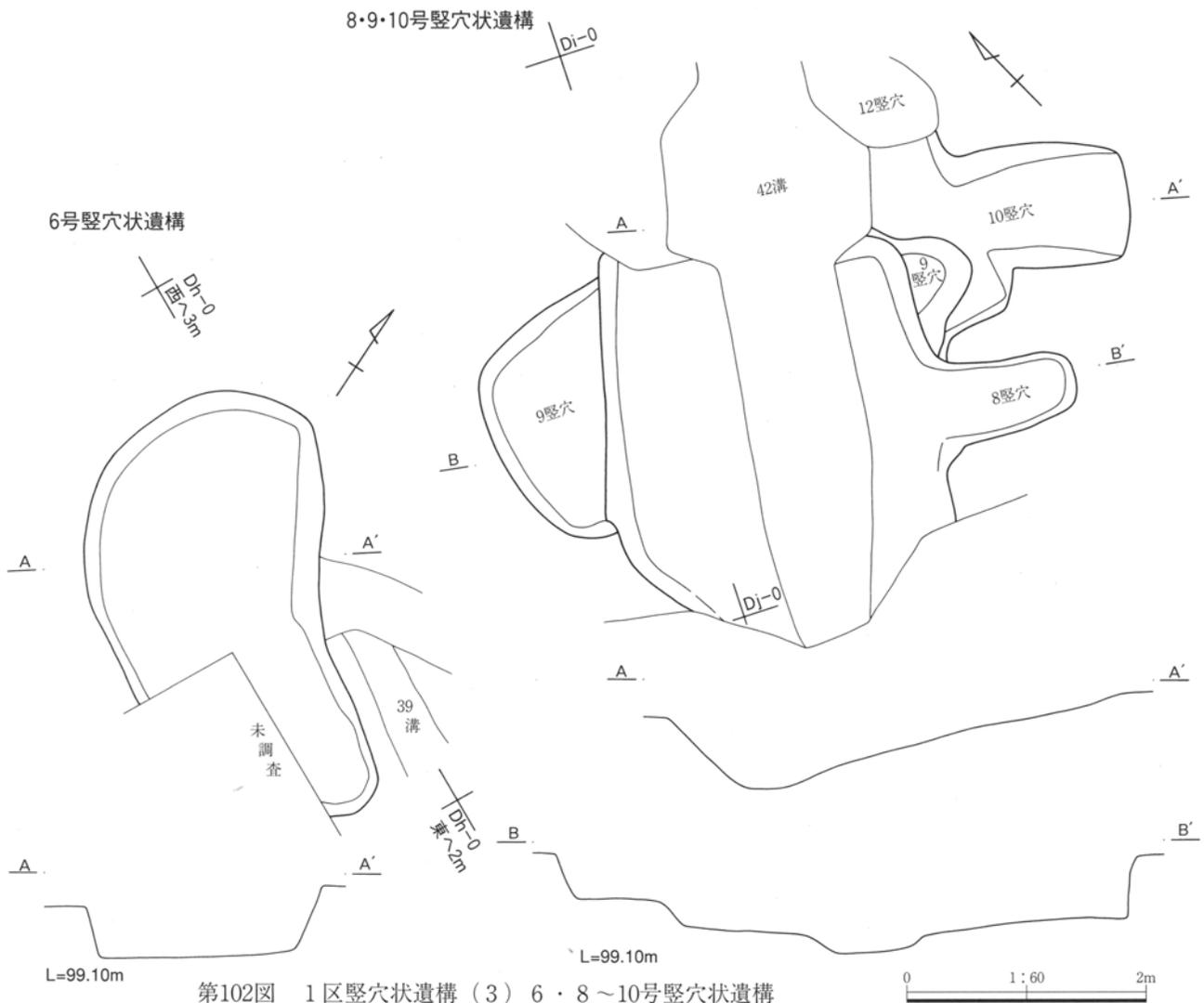
5号竪穴状遺構(第101図)は竪穴状遺構群の延長線上に1基だけ27mほど離れてあった。竪穴状遺構同士の重複はない。長方形の東長辺の中央に突出部

がある。出土遺物はない。

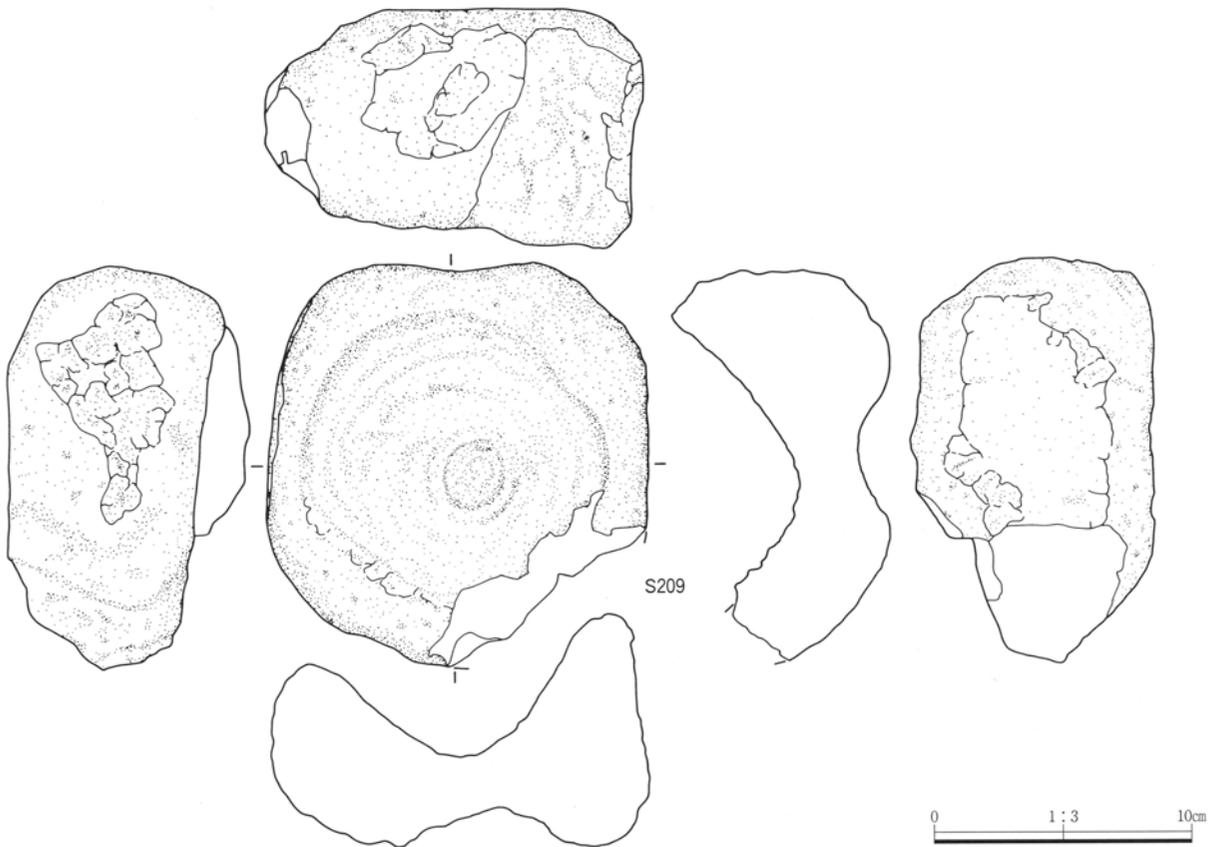
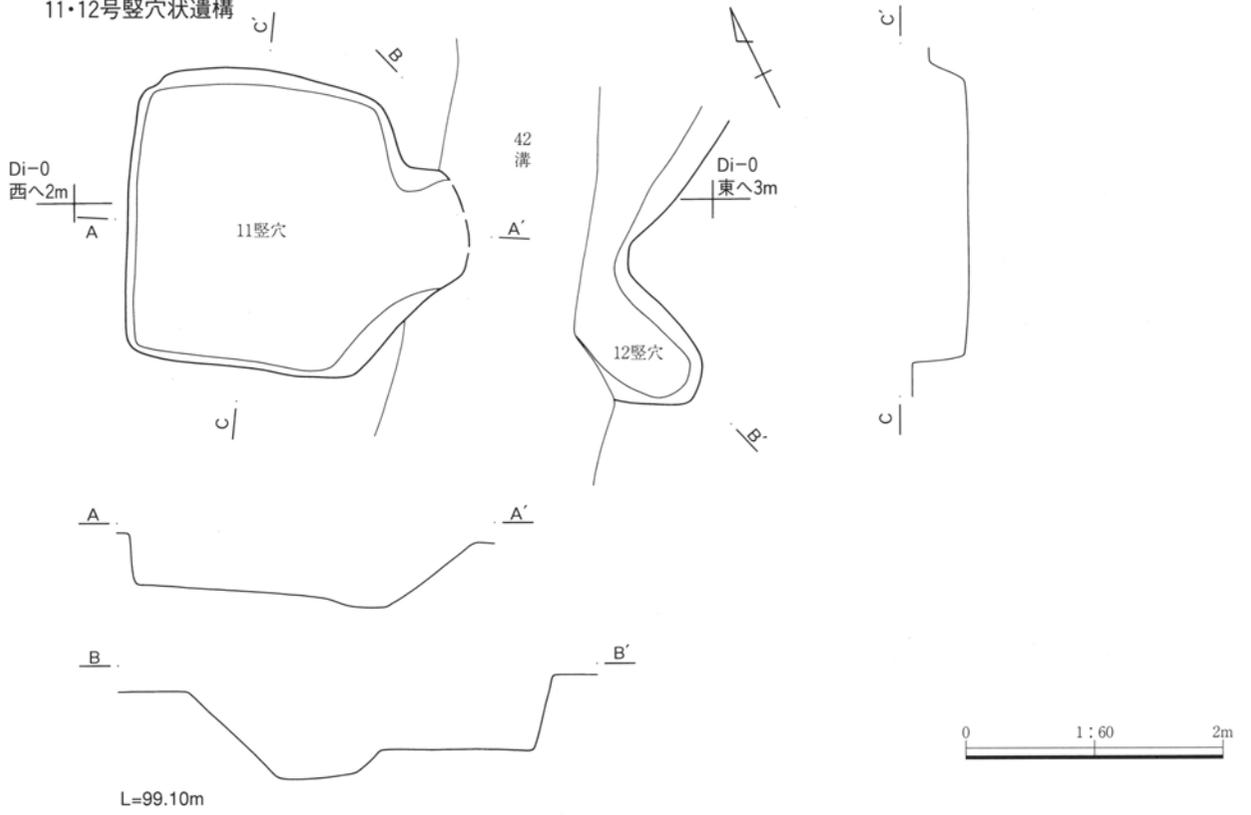
6号竪穴状遺構(第102図)は竪穴状遺構群の南部にあり、竪穴状遺構同士の重複はない。全体に楕円形に近く、南東部は未調査で突出部も明確でないが、東部が突出部となると推定した。出土遺物はない。

8号～10号竪穴状遺構(第102図)は竪穴状遺構群の南部にあり、11号～13号竪穴状遺構を含めた6基の重複竪穴状遺構群の一部である。新旧関係の記録はない。主軸方位がほぼ共通し、東辺に突出部をもつ。最も深い8号竪穴状遺構の平面形は隅丸方形である。出土遺物は無い。

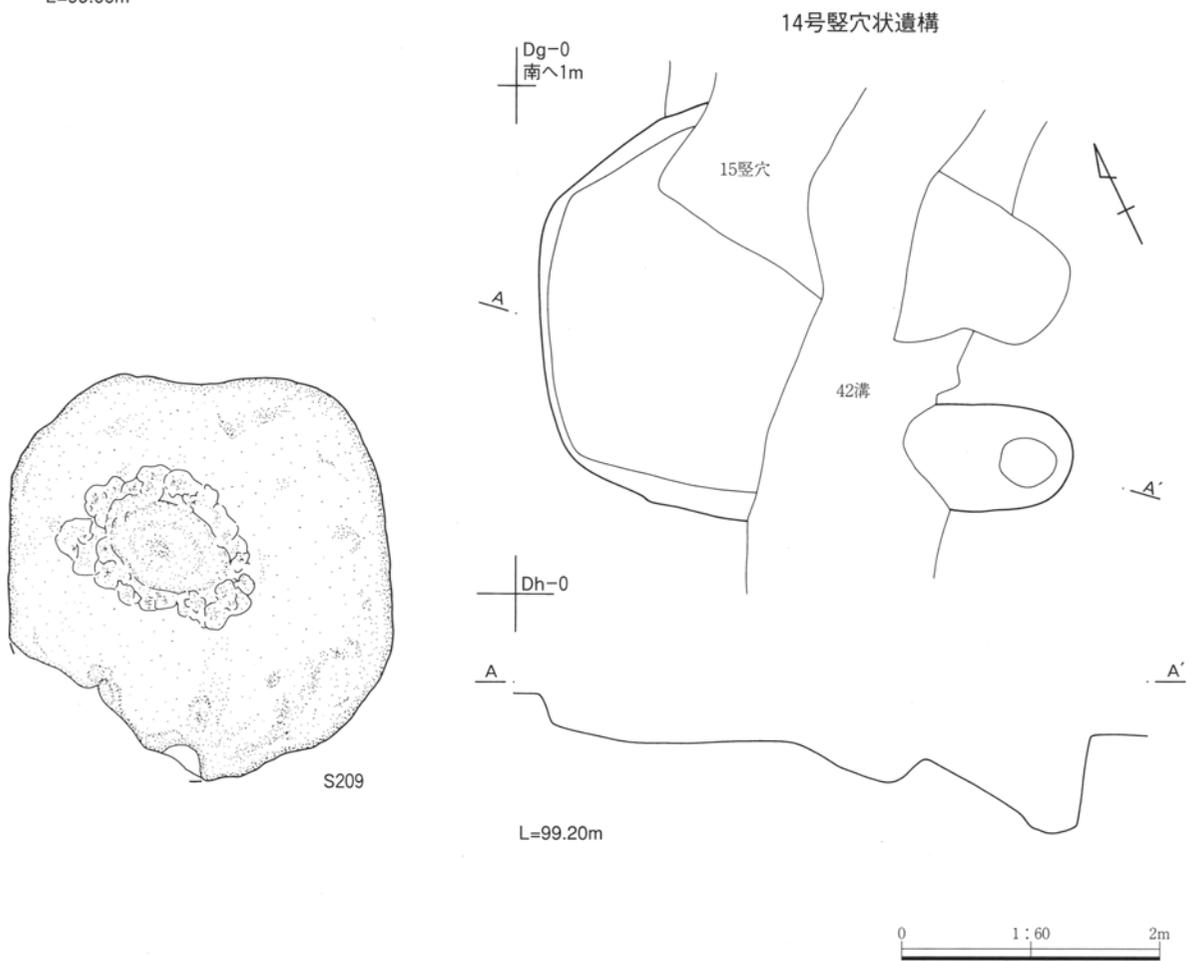
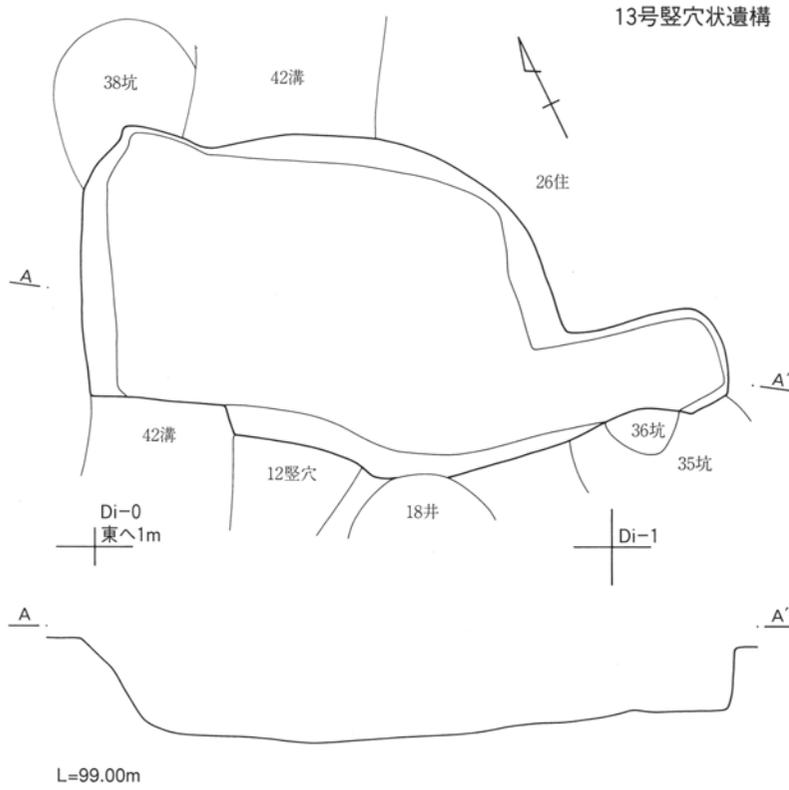
11号・12号竪穴状遺構(第103図)は8号～10号竪穴状遺構の北側に重複する。新旧関係は不明である。11号竪穴状遺構は隅丸正方形で、東辺にある突出部が42号溝により切られている。12号竪穴状遺構



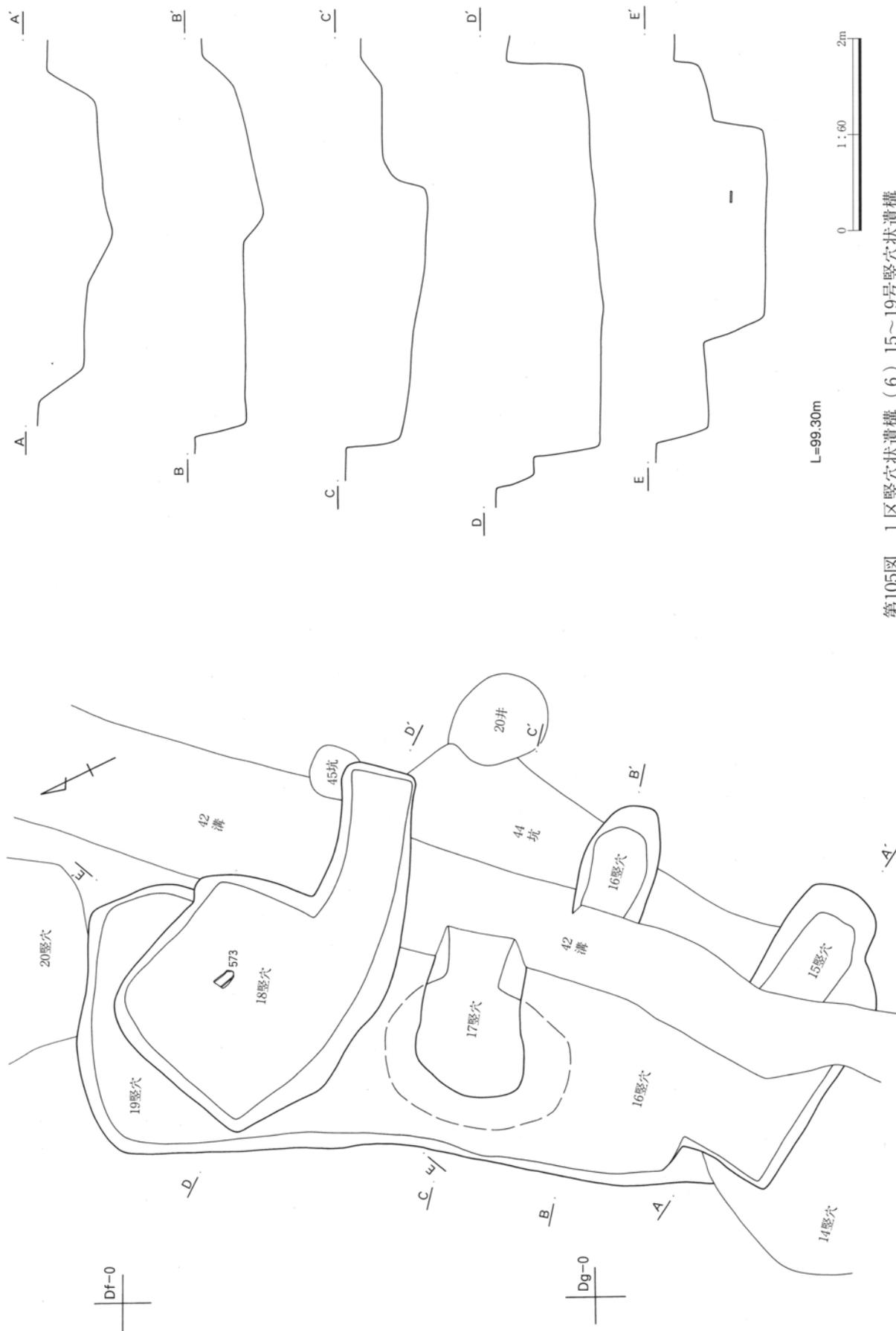
11・12号竪穴状遺構



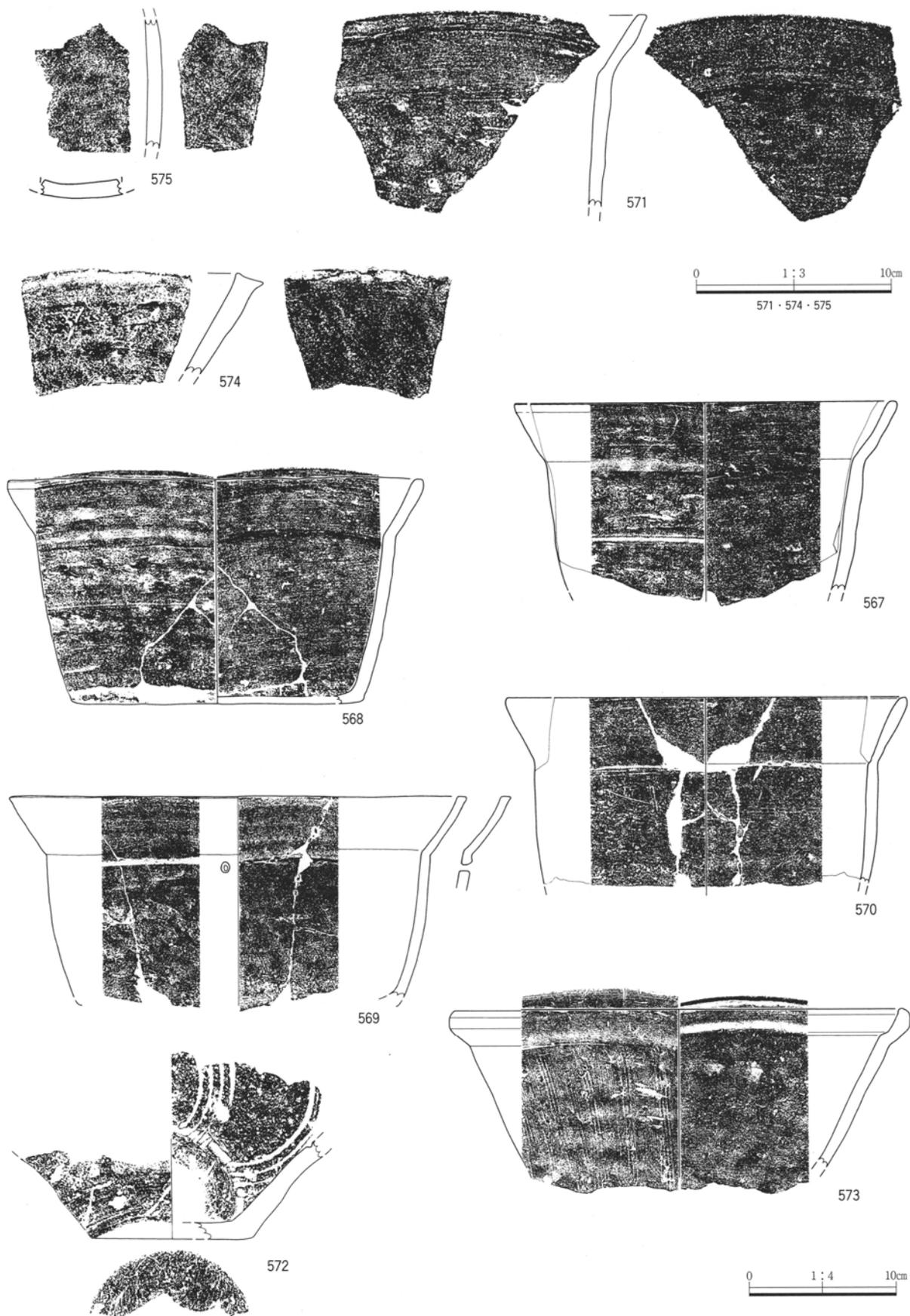
第103図 1区竪穴状遺構(4) 11・12号竪穴状遺構と出土遺物



第104図 1区竖穴状遺構 (5) 13・14号竖穴状遺構



第105図 1区竪穴状遺構(6) 15~19号竪穴状遺構



第106図 1区18号竖穴状遺構出土遺物

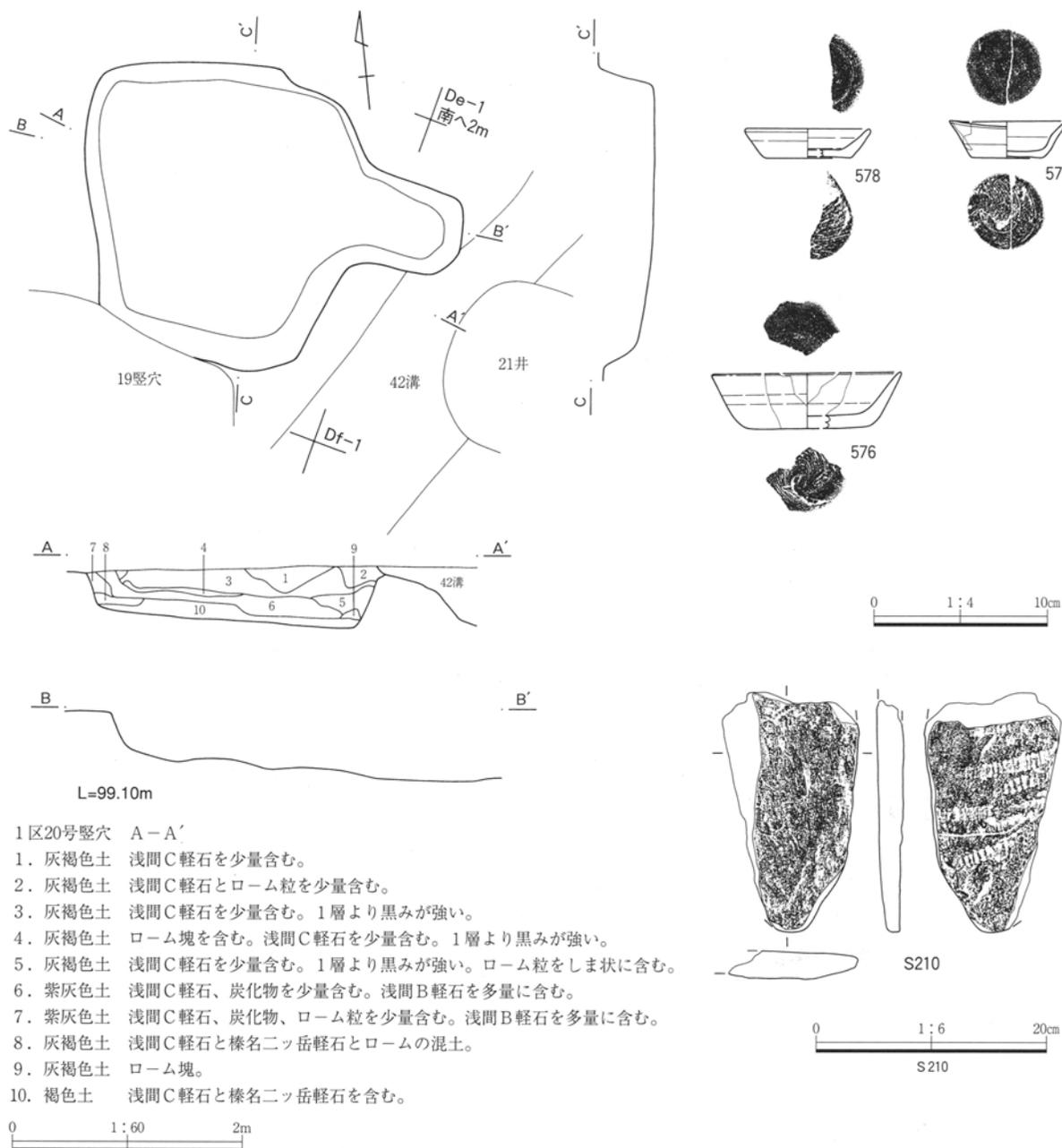
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

は突出部が残るが、全体形状は不明である。11号堅穴状遺構から混入の土師器・縄文土器が出土しているが、時期を示す土器は出土していない。また11号堅穴状遺構から凹み石(第103図S209)が出土した。四方の凸部分を敲き、方形に成形した礫の上下面の中央に敲打痕とその後の同心円状の磨り痕が残る。特に上面の磨り面は大きく深く凹む。この種の石器は他に楕円形の礫をそのまま使用したものや磨り面が深く及んで貫通しているものが遺跡内から出土している。

ている。

13号堅穴状遺構(第104図)は8号~13号堅穴状遺構群の北端に重複する。新旧関係の記録はない。やや胴の張る長方形で南東隅に突出部がある。土師器破片が出土しているが混入と考えられる。

14号堅穴状遺構(第104図)は堅穴状遺構群の南部にあり、11号~13号堅穴状遺構を含めた6基の重複堅穴状遺構群の一部である。新旧関係の記録はない。不定形な隅丸方形と推定され、南東隅に突出部



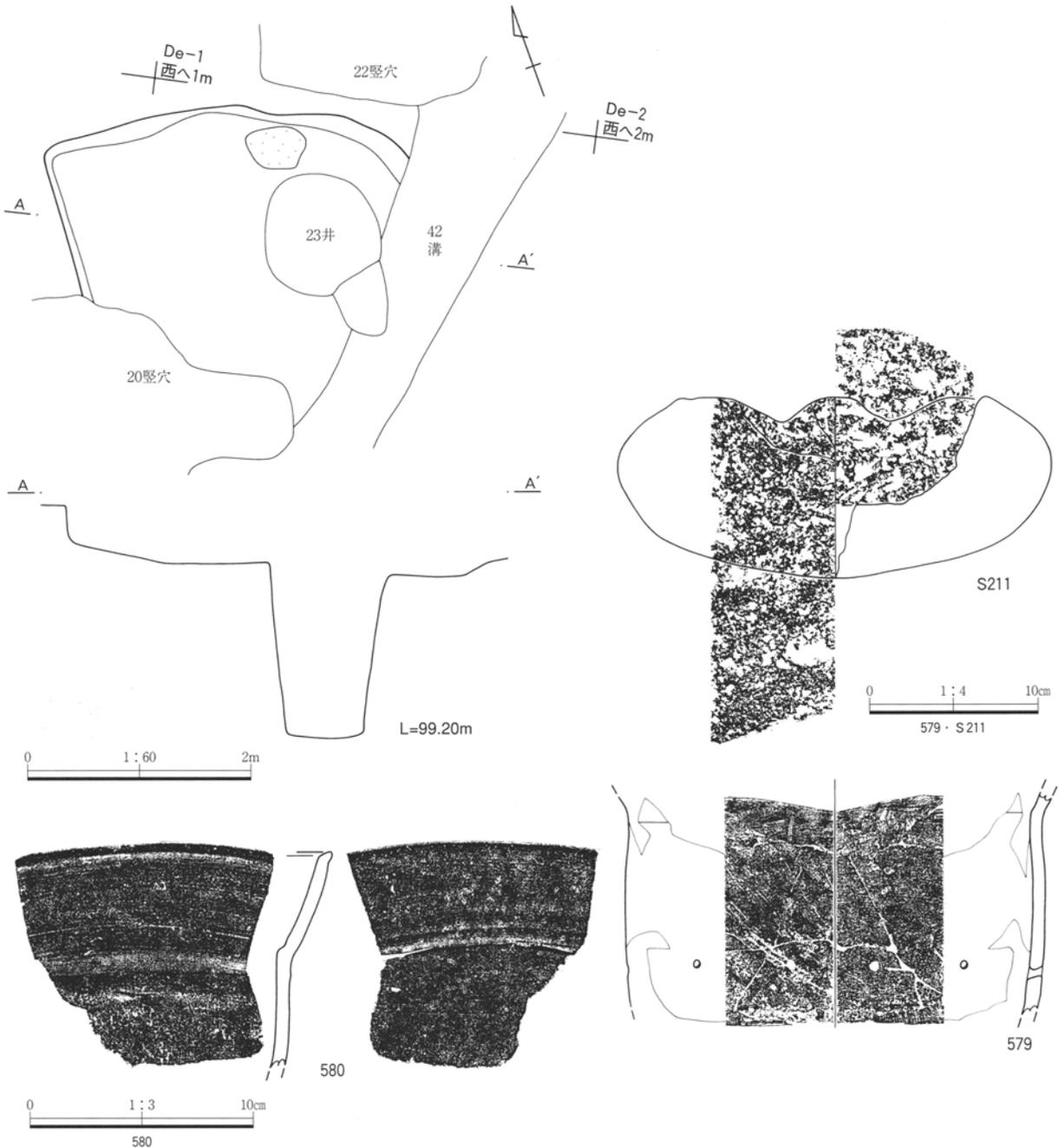
第107図 1区堅穴状遺構(7)20号堅穴状遺構と出土遺物

がある。出土遺物はない。

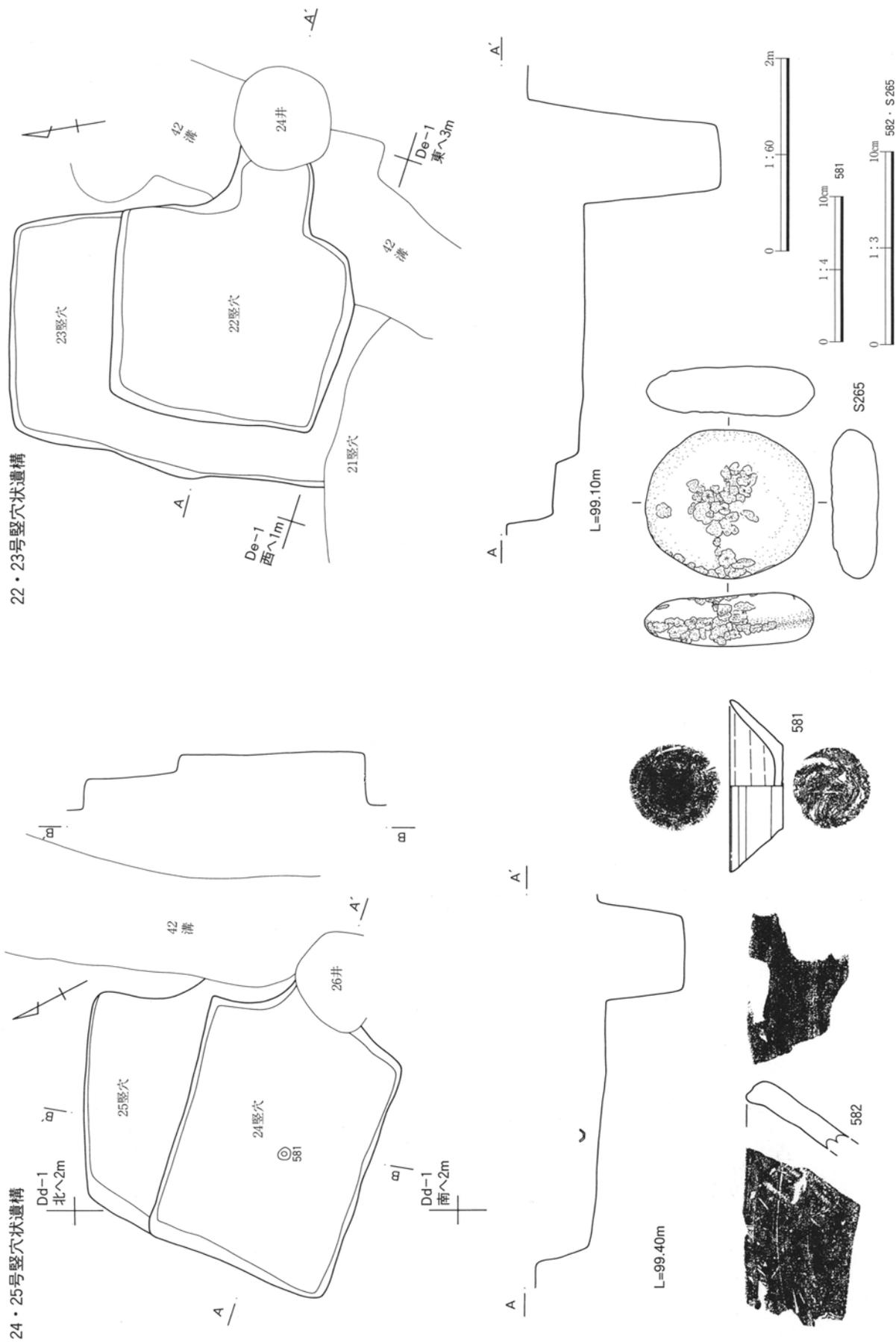
15～19号竪穴状遺構(第105図)は19号竪穴状遺構の北側にはさらに20号から26号竪穴状遺構が重複している。新旧関係の記録はない。全形のわかるのは18号竪穴状遺構のみで、他は42号溝や重複により全形を失している。いずれも東側に突出部があるが、19号竪穴状遺構のみ突出部は確認できなかった。18号竪穴状遺構は隅丸正方形で南東隅に他と比較して長い突出部がある。15号～17号・19号竪穴状遺構に

は出土遺物がない。18号竪穴状遺構には、まとまった土器が出土している。概ね15～17世紀の内耳鍋(第106図567・568・569・570・571・573)やすり鉢(572)と常滑片口鉢(574)である。

20号竪穴状遺構(第107図)は竪穴状遺構群の中央部にある。南側に19号竪穴状遺構が重複している。新旧関係の記録はない。隅丸の台形で、東辺のほぼ中央部に突出部がある。混入と考えられる土師器22片と、図示したかわらけ3点(576・577・578)と板碑



第108図 1区竪穴状遺構(8) 21号竪穴状遺構と出土遺物



第109図 1区竖穴状遺構(9) 22~25号竖穴状遺構と出土遺物

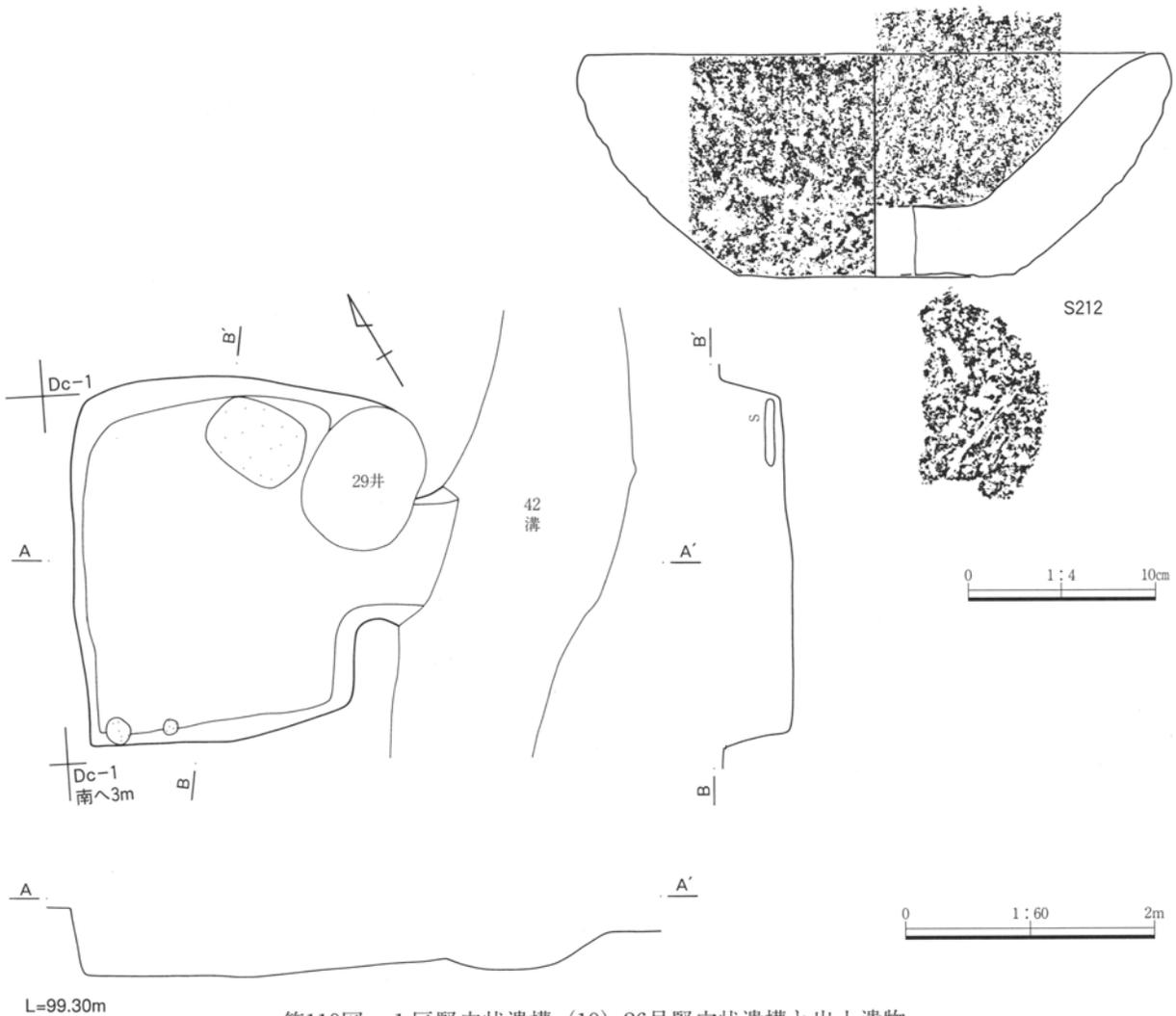
破片(S210)が出土した。かわらけはいずれも中世と見られる。また内耳鍋・焙烙の破片が出土している。

21号竪穴状遺構は南に20号竪穴状遺構が重複する。(第108図)また23号井戸が重複するが、いずれも新旧関係の記録はない。全形は南東部が42号溝に切られているため不明である。突出部も検出できなかったが、竪穴状遺構群に並んでいることと断面形状が類似することから、竪穴状遺構と判断した。混入と思われる土師器・須恵器のほか、内耳鍋(第108図579・580)、焙烙、すり鉢破片や石鉢(S211)が出土している。内耳鍋は14世紀後半から16世紀のものと思われる。

22号・23号竪穴状遺構は重複して検出された。(第109図)南側に21号竪穴状遺構が重複する。22号竪穴状遺構は正方形に近く、東辺ほぼ中央に突出部が

ある。突出部先端に24号井戸が重複するが、新旧関係の記録はない。出土遺物はない。23号竪穴状遺構は他の竪穴状遺構に比べて大型の長方形で、特徴的である。突出部は検出できなかった。埋没土中から土師器2点・須恵器2点が出土したのみである。

24号・25号竪穴状遺構も重複して検出された。(第109図)24号竪穴状遺構は長方形で東辺中央に突出部があるが、26号井戸が重複する。新旧関係の記録はない。埋没土中から8点の土師器・須恵器破片と21点の中近世の土器が出土した。図示したのは14世紀と見られる軟質すり鉢(第109図582)、かわらけ(581)である。かわらけは中央部底面上10cmで出土した。また、上面と側縁に敲打痕のある敲き石が出土した。25号竪穴状遺構は南半を24号竪穴状遺構にきられていて全形は不明である。新旧関係の記録は



第110図 1区竪穴状遺構 (10) 26号竪穴状遺構と出土遺物

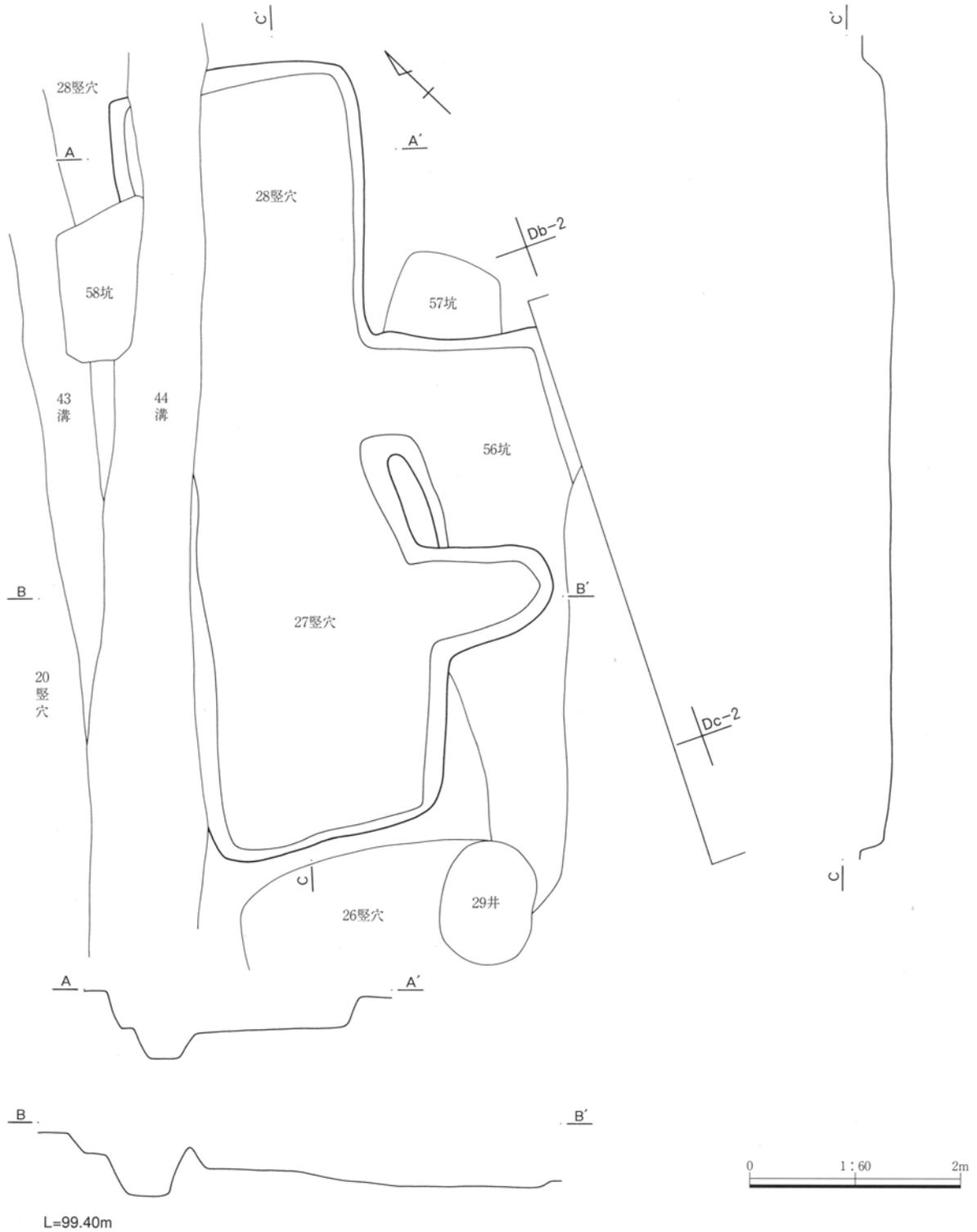
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

ない。東辺に突出部がある42号溝に切られていて出土遺物はない。

26号竪穴状遺構は竪穴状遺構群の北部に検出された。(第110図)隅丸方形で東辺中央に突出部がある。先端は42号溝に切られている。また29号井戸が重複

するが、この新旧関係の記録はない。埋没土中から土師器・須恵器破片8点のほか、内耳鍋の破片が16片出土した。また石鉢(第110図S208)が出土したが、これは68号溝埋没土内の破片と接合した。

27号・28号竪穴状遺構は重複竪穴状遺構群の北

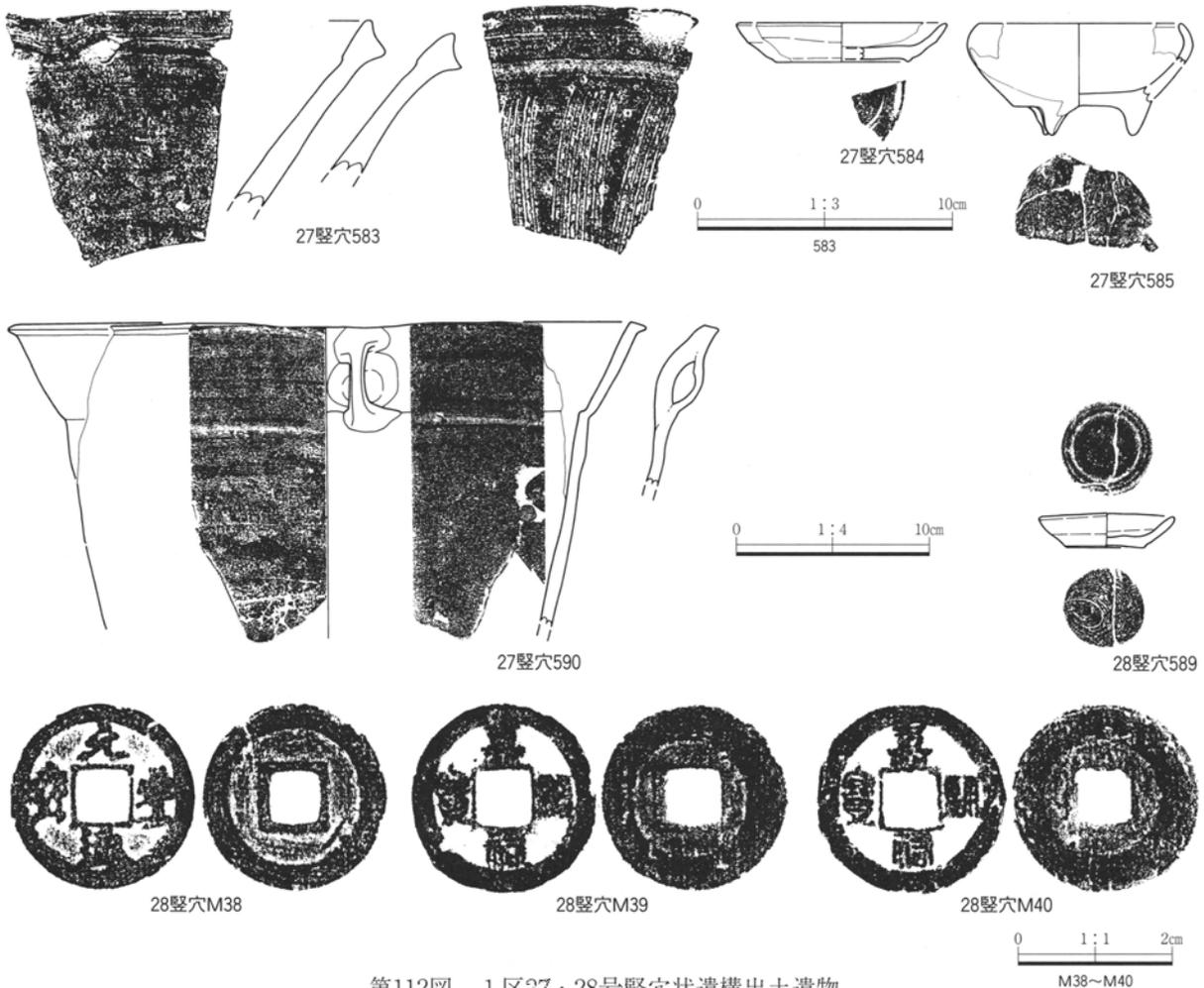


第111図 1区竪穴状遺構 (11) 27・28号竪穴状遺構

端で検出された(第111図)。重複するが、新旧関係の記録はない。北西部で44号溝が、東側には56号土坑が重複するが、これらも新旧関係の記録はない。ともに隅丸長方形と推定され、27号堅穴状遺構は東辺のほぼ中央に突出部がある。28号堅穴状遺構の突出部は不明である。27号堅穴状遺構の出土遺物は25片の土師器の他、11片の中近世土器が埋没土中で出土した。第112図583は17世紀前半と見られる丹波すり鉢である。また17世紀後半と見られる瀬戸美濃志野丸皿、中世の軟質香炉や15世紀と見られる内耳鍋も出土した。28号堅穴状遺構では42片の土師器・須恵器破片のほか、内耳鍋破片1点と、14~15世紀と見られるかわらけ(第112図587)と古銭3枚(M38・M39・M40)が出土した。589は30号堅穴状遺構で出土した破片と接合した。

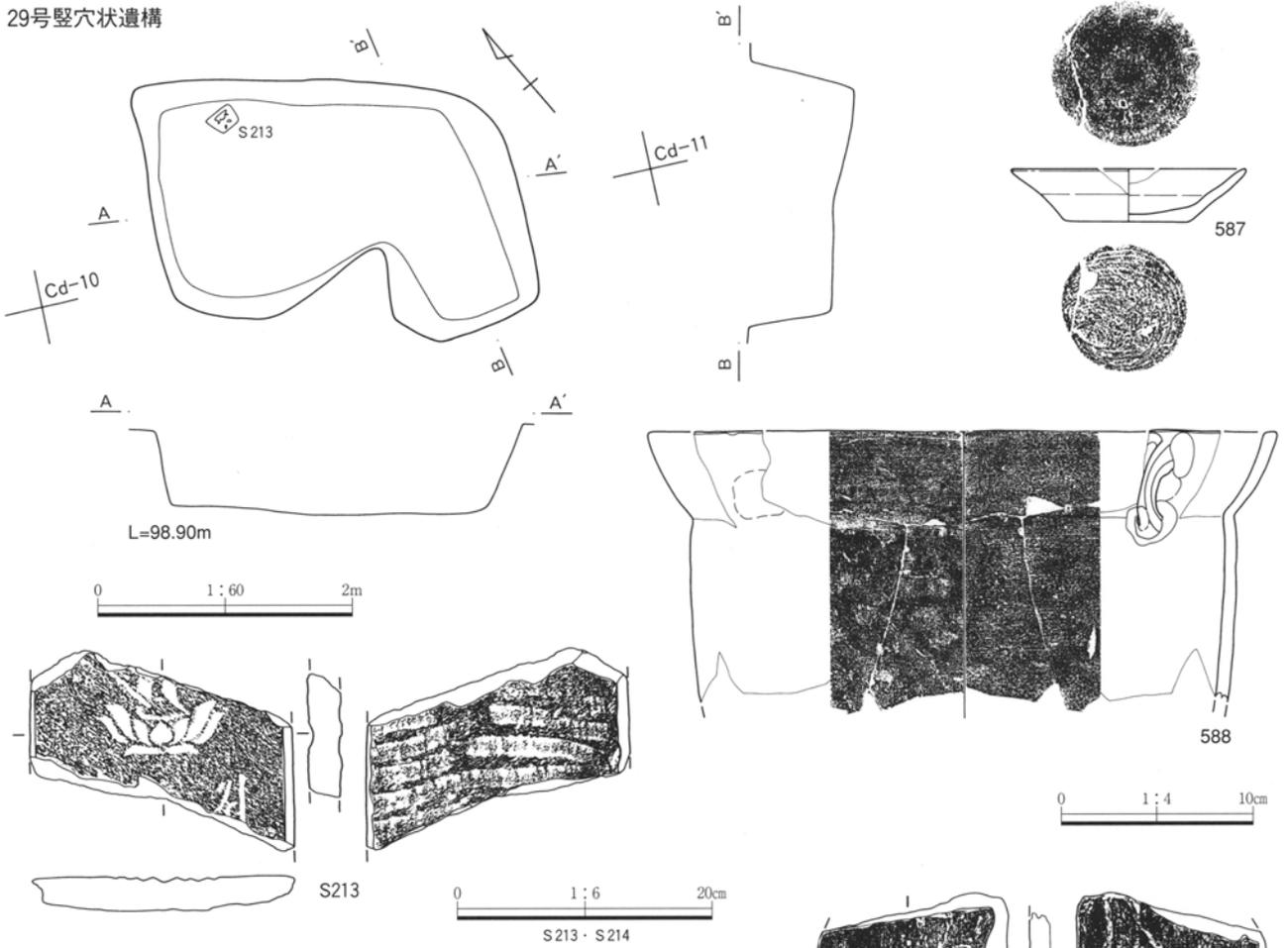
29号堅穴状遺構は62号溝東側で、後述する30号堅穴状遺構の南側に並んで検出された。(第113図)不定形な方形で南東隅に南側を向いて突出部がある。2片の土師器のほか、9片の中近世の土器が出土した。陶器は瀬戸美濃皿破片が出土している。また14~15世紀と見られるかわらけ(第113図587)、15~16世紀と見られる内耳鍋(588)が出土した。また板碑破片(S213)も出土した。

30号堅穴状遺構は、29号堅穴状遺構北側に検出された。(第113図)西側は62号溝と重複するが、新旧関係の記録はない。不定長方形で東辺の中央に突出部がある。2片の土師器のほか、5片の軟質陶器が出土している。図示できたのは中世と見られるすり鉢(591)である。また板碑破片(S214)が出土した。

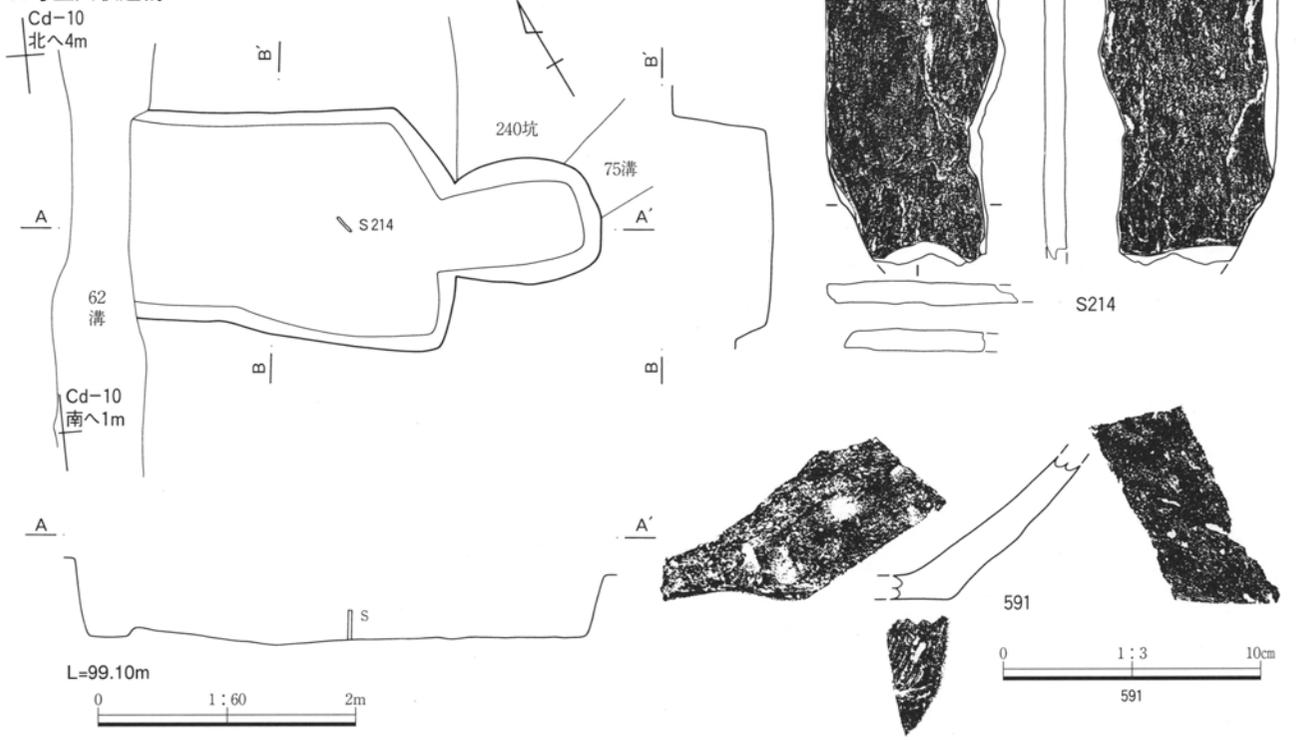


第112図 1区27・28号堅穴状遺構出土遺物

29号竪穴状遺構



30号竪穴状遺構



第113図 1区竪穴状遺構 (12) 29・30号竪穴状遺構と出土遺物

F. 土坑墓 (第114図 PL49)

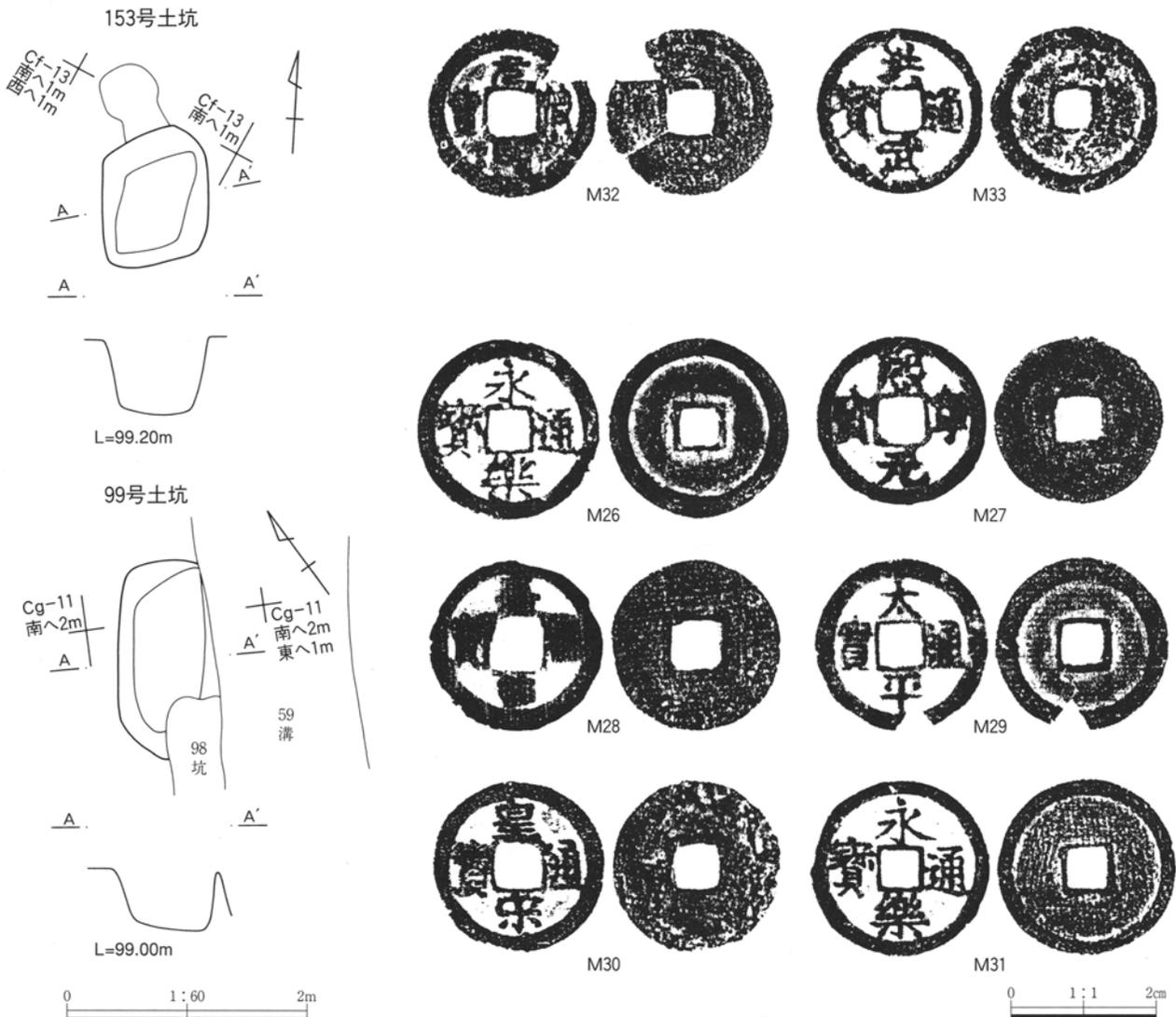
1区で検出された土坑のうち99号土坑・153号土坑の2基に複数枚の古銭が出土した。人歯骨の出土や、その他の遺物の出土はないが、ここでは土坑墓として報告した。これらの2基の土坑墓は溝内部南西部にある。

99号土坑はCg-11グリッドに位置し、長軸1.12m、短軸0.52m以上、深さ0.355mの隅丸長方形である。98号土坑・59号溝と重複するが、新旧関係の記録はない。埋没土も不明である。出土遺物は6点の古銭(永楽通寶2枚、□寧元寶1枚、皇宋通寶1枚、太平通寶1枚、不明1枚)のみである。

153号土坑はCf-13・14グリッドに位置し、長軸

0.75m、短軸0.585m、深さ0.435mの隅丸台形である。北側に小ピットが重複するが、新旧関係の記録はない。埋没土も不明である。出土遺物は2点の古銭のみである。確認できた古銭は、洪武通寶1枚、不明1枚である。

いずれの土坑の古銭も北宋銭であるが、本銭と模鑄銭の区別はできなかった。また本遺跡では2区に中近世の墓域がみつまっている。ここでは火葬跡と土坑墓の両者が検出されている。1区ではこの2つの土坑に古銭のみが出土したにとどまるが、2区と比較すれば土坑墓である可能性は高いと思われる。しかし屋敷地のなかに立地する点で2区の土坑墓とは異なっている。



第114図 1区土坑墓 99・153号土坑と出土遺物

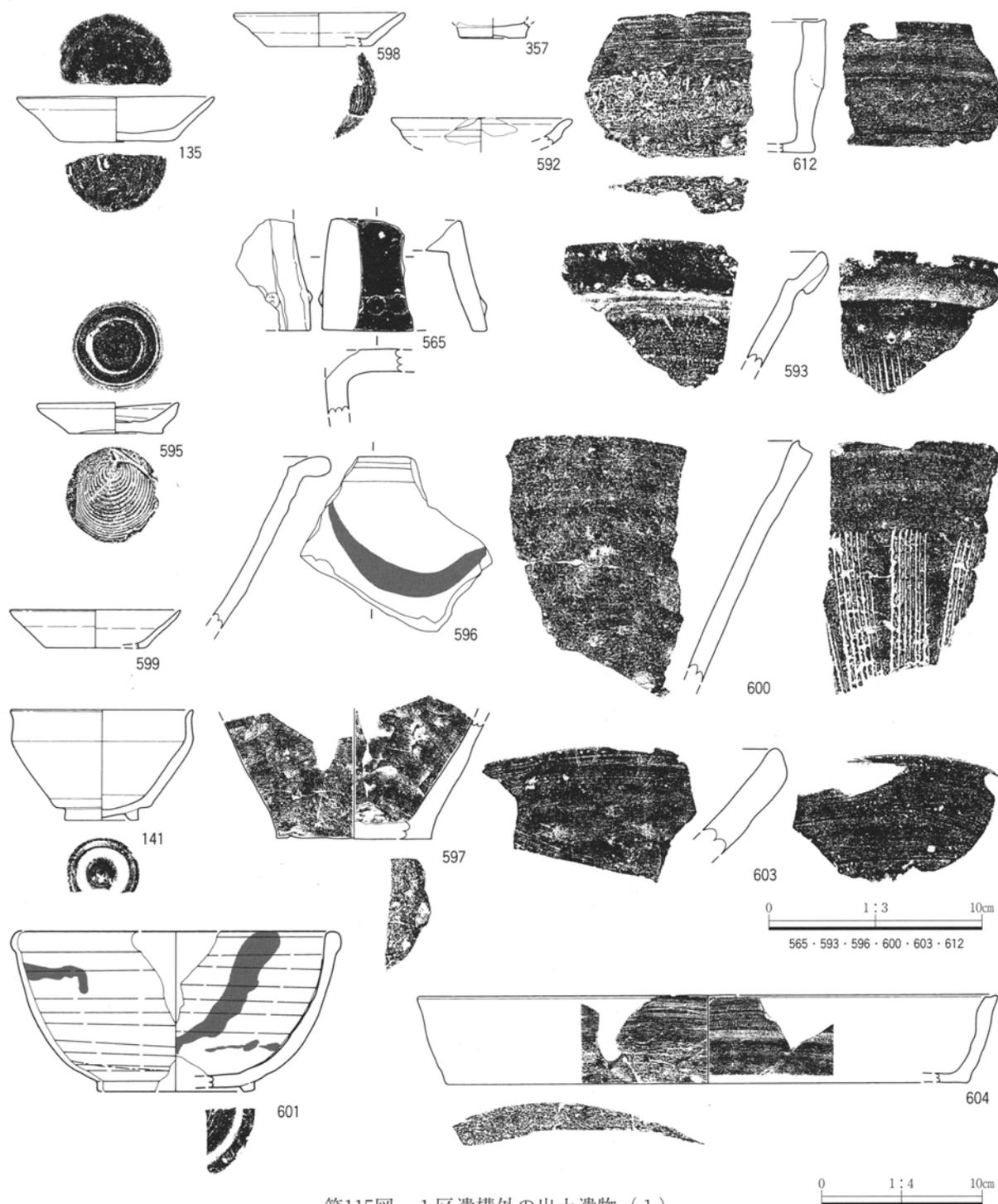
第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

G. 1区遺構外出土遺物 (第115~117図 PL50~52
遺物観察表P281・282・290・291)

1区で遺構に伴わない形で出土した古代、中近世の遺物は須恵器1点、陶器34点、磁器1点、軟質陶器160点、石製品14点である。

須恵器坏(第115図135)は1区20号住居埋没土中か

ら出土した。陶器では1区20号住居埋没土中から出土した天目茶碗(141)、Da-1グリッドで出土した鉄絵皿(596)、De-1グリッドで出土した常滑壺(597)、表面採集した片口鉢(601)を図示した。軟質陶器はCi-12グリッド・De-1グリッド・Df-0グリッドで出土したかわらけ(595・598・599)や、



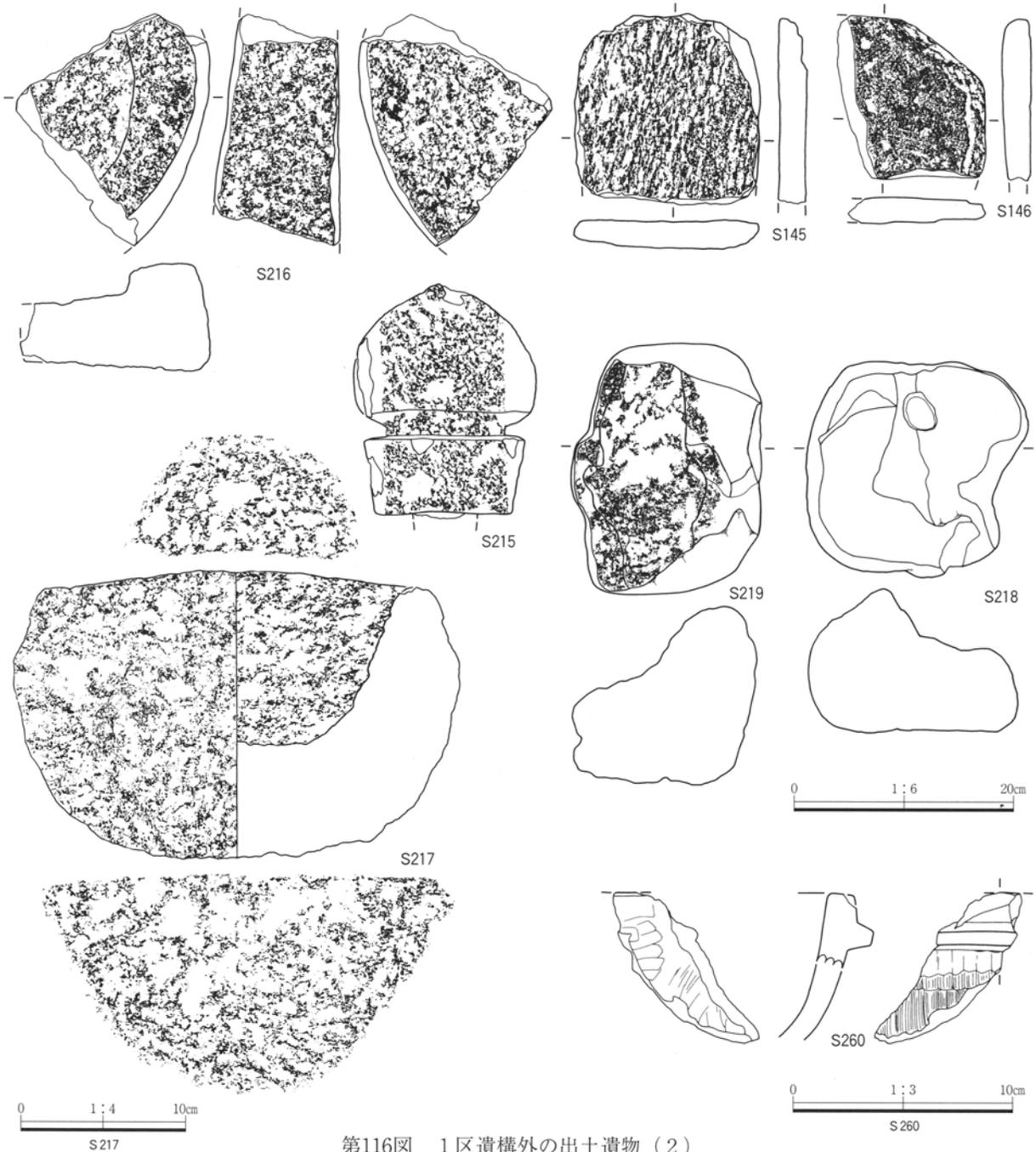
第115図 1区遺構外の出土遺物(1)

表面採集や27号住居埋没土で出土した焙烙(604・612)、33号住居埋没土や表面採集したすり鉢(593・600・603)を図示した。

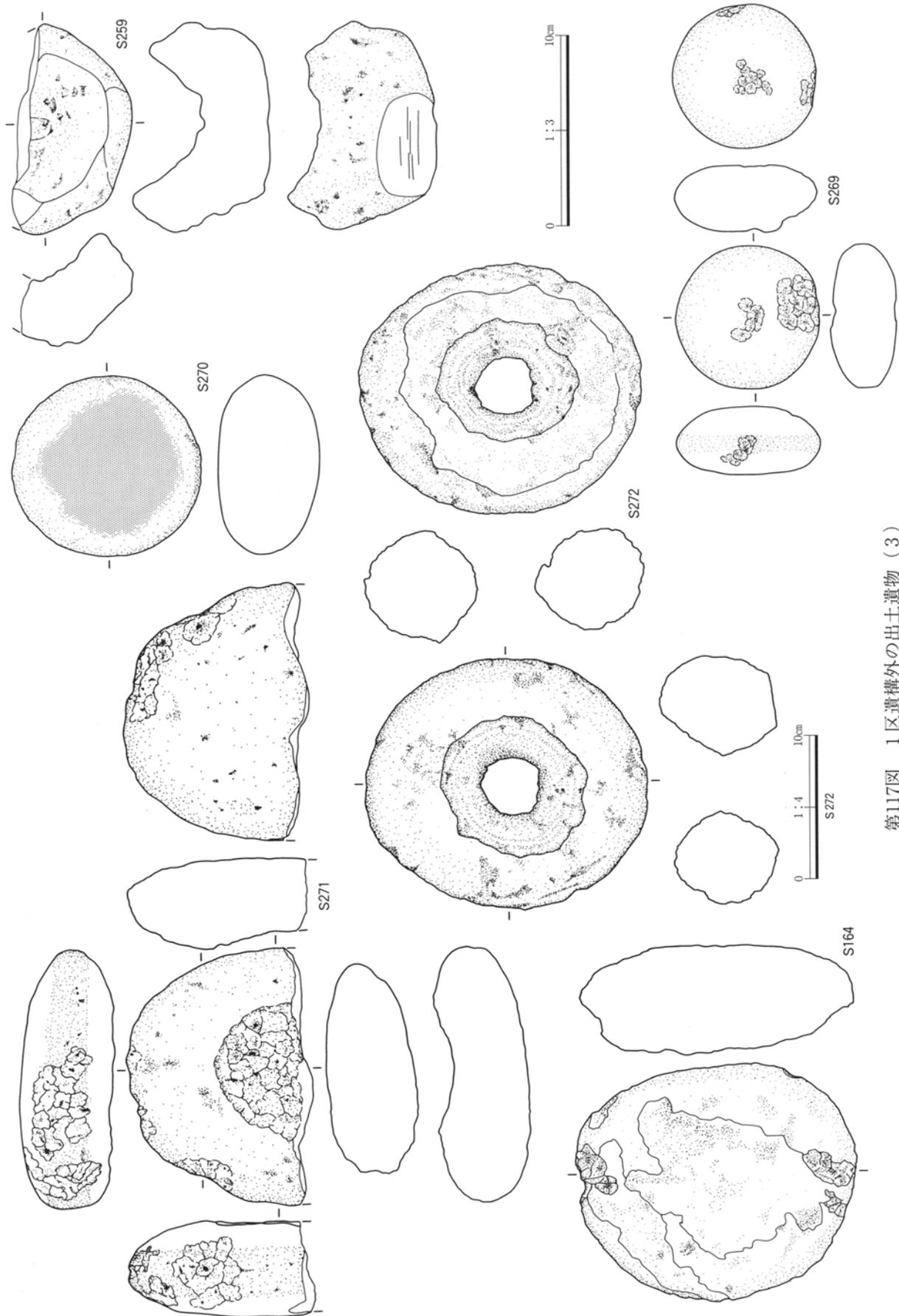
石製品では1区81号溝から出土した板碑(第116図S145・S146)、表面採集した粉挽き臼(S216)・石鉢(S217)・五輪塔(S215)のほか、デイサイト質砂岩に方形のくぼみを加工した石(S218・S219)や、滑石製の石鍋口縁部破片(S260)が特筆される。

また比較的大型の礫や軽石の中央部を敲打または

磨って使用したと考えられる礫石器が出土している。第117図S164・S271は大型扁平礫の側縁や表面に敲打痕による凹みが残る。S272は扁平の礫の中央を同心円状に磨り、ドーナツ状に穿孔している例である。S259は掌に入るくらいの軽石の中央を磨った結果凹みができた石器である。底面付近も平坦面をつくるように成形されている。これらの石製品の用途は未解明であるが、近年赤城山南麓では類例が増えている。



第116図 1区遺構外の出土遺物(2)



第117図 1区遺構外の出土遺物(3)

(3) 1北区の遺構と遺物

A. 土坑 (第118図)

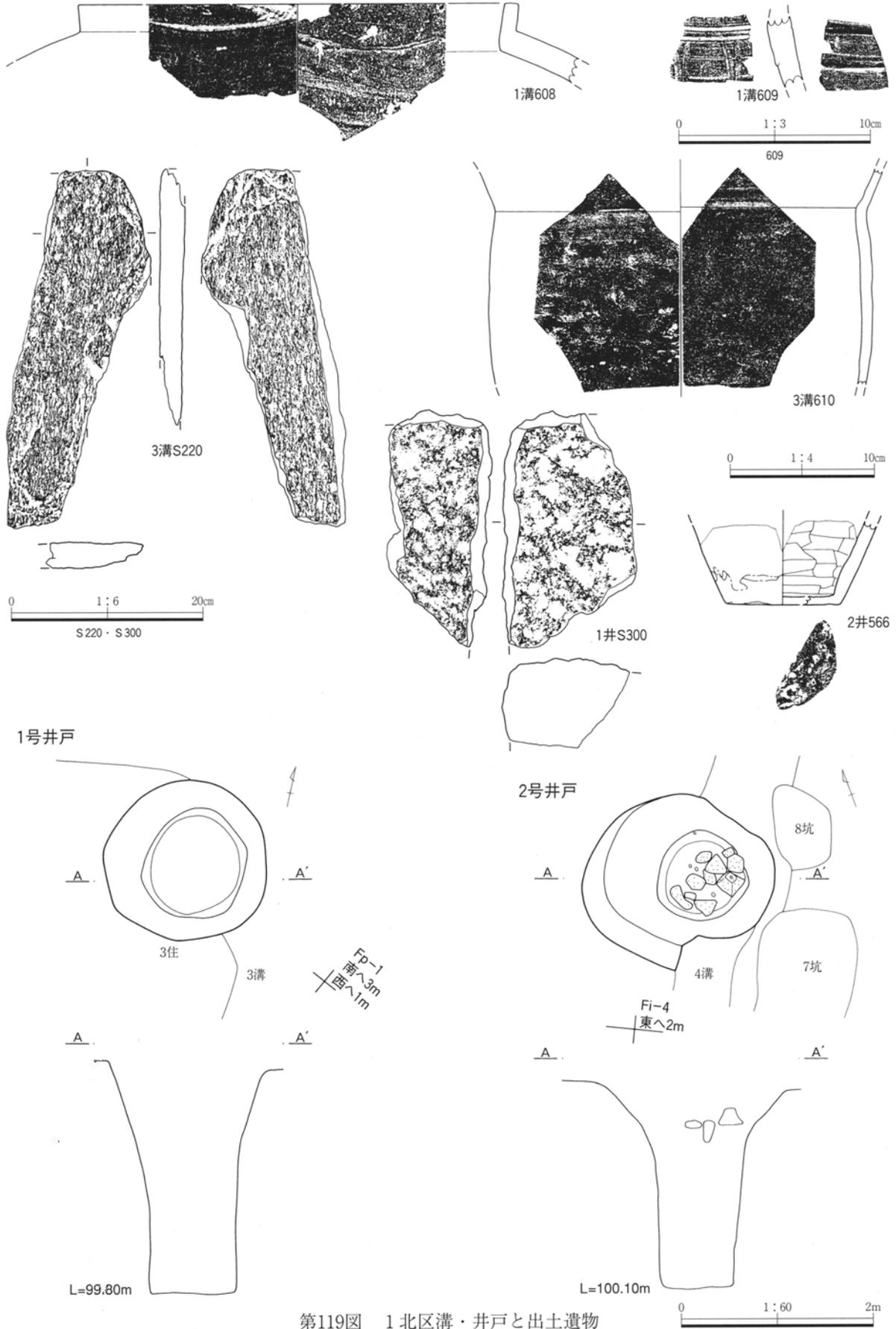
1北区では方形の土坑4基、隅丸長方形の土坑2基、細長方形の土坑1基が検出された。長方形の土坑のうち7号土坑は、埋没土の観察から2号住居(古墳時代後期)より新しく、2号井戸より古い。土坑からの出土遺物はほとんど無いことから、その時期を決し難い。形態の類似性からこれらの土坑は1区の土坑群と同様の時期のものと推定される。

B. 溝 (第119図 付図1 PL52)

遺物観察表P.282・291)

溝は4条が断片的に検出された。これらの溝が1区に展開する屋敷遺構の溝とどのように関連するかは明確にできなかった。1号溝からは軟質陶器甕(第119図608)や瀬戸美濃錆釉の瓶子破片(609)が出土している。3号溝からは軟質陶器内耳鍋(610)や板碑破片(S220)が出土している。いずれも中世の遺物であり、時期的には1区68号溝との関連が考えられる。





第119図 1北区溝・井戸と出土遺物

C. 井戸 (第119図 PL52 遺物観察表P.282・291)

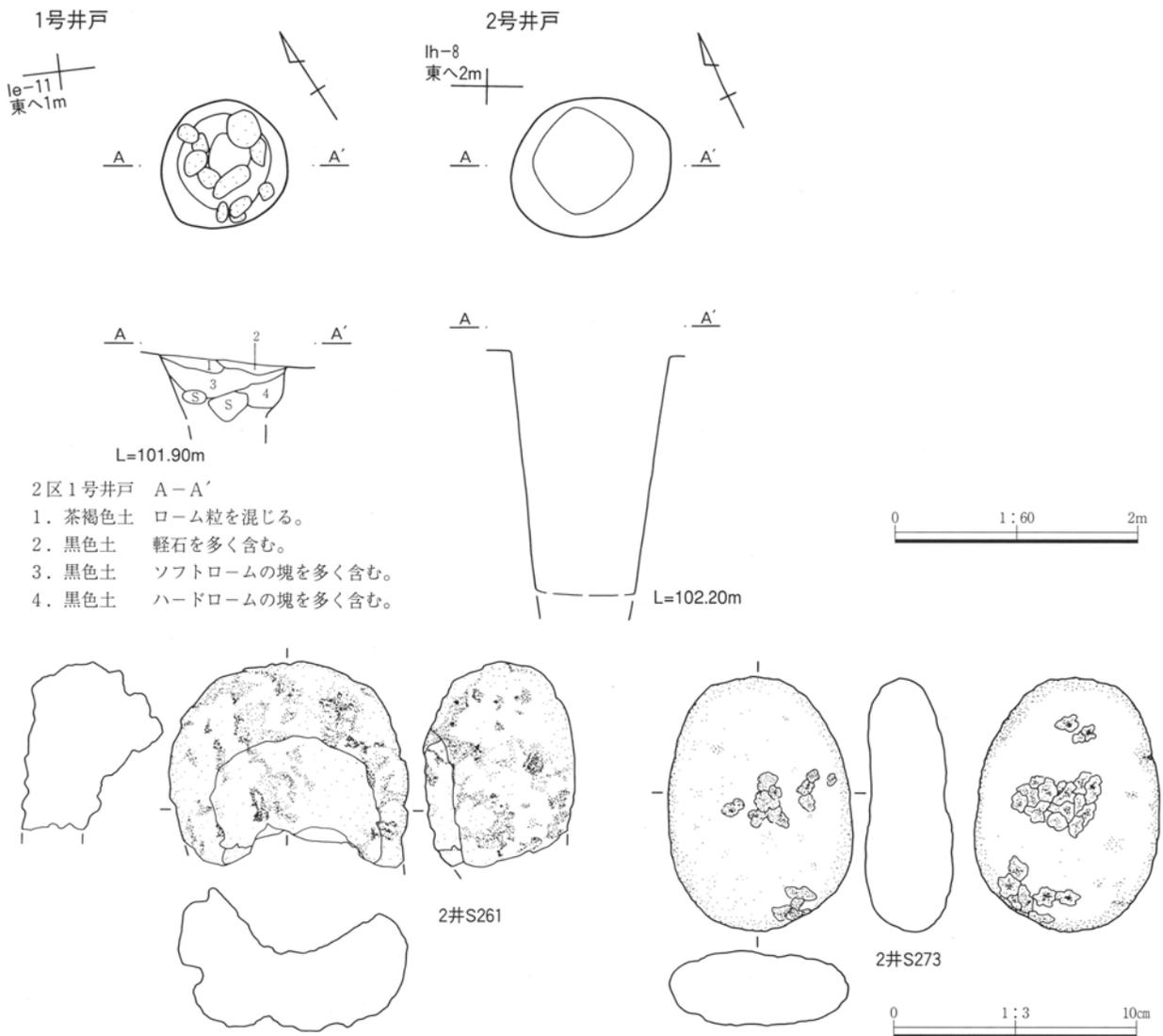
井戸は2基が検出されている。1号井戸は円形素掘りの井戸で、3号溝西に近接して掘られていた。厚みが10cm前後の板状の石材が出土している。塔類の台石の未製品とみているが、詳細は不明である。

2号井戸は、4号溝・7号土坑に重複して検出された。新旧関係は不明である。円形の素掘りの井戸で埋没土上層には、大形礫や五輪塔火輪が出土した。また埋没土上層から瀬戸美濃灰釉の瓶子底部破片(13~15世紀)が出土している。

(4) 2区の遺構と遺物

A. 井戸 (第120図 PL23・52)

2区では2基の井戸が検出された。1号井戸は台地東縁に近い5号住居(古墳時代前期)の東壁に重複していた。井戸の方が後出で、上層から礫が多数出土した。いずれも自然石である。調査期間が限られていたことから、底面を確認するにいたらなかった。2号井戸は6号住居(古墳時代前期)の南西側に検出された。重複遺構はない。本井戸も1号井戸と同様に底面を確認できなかった。埋没土中から軽石製の凹み石(S261)、粗粒輝石安山岩の敲き石(S273)が出土している。軽石製の凹み石は1区でも中世と推定される遺構から出土している。

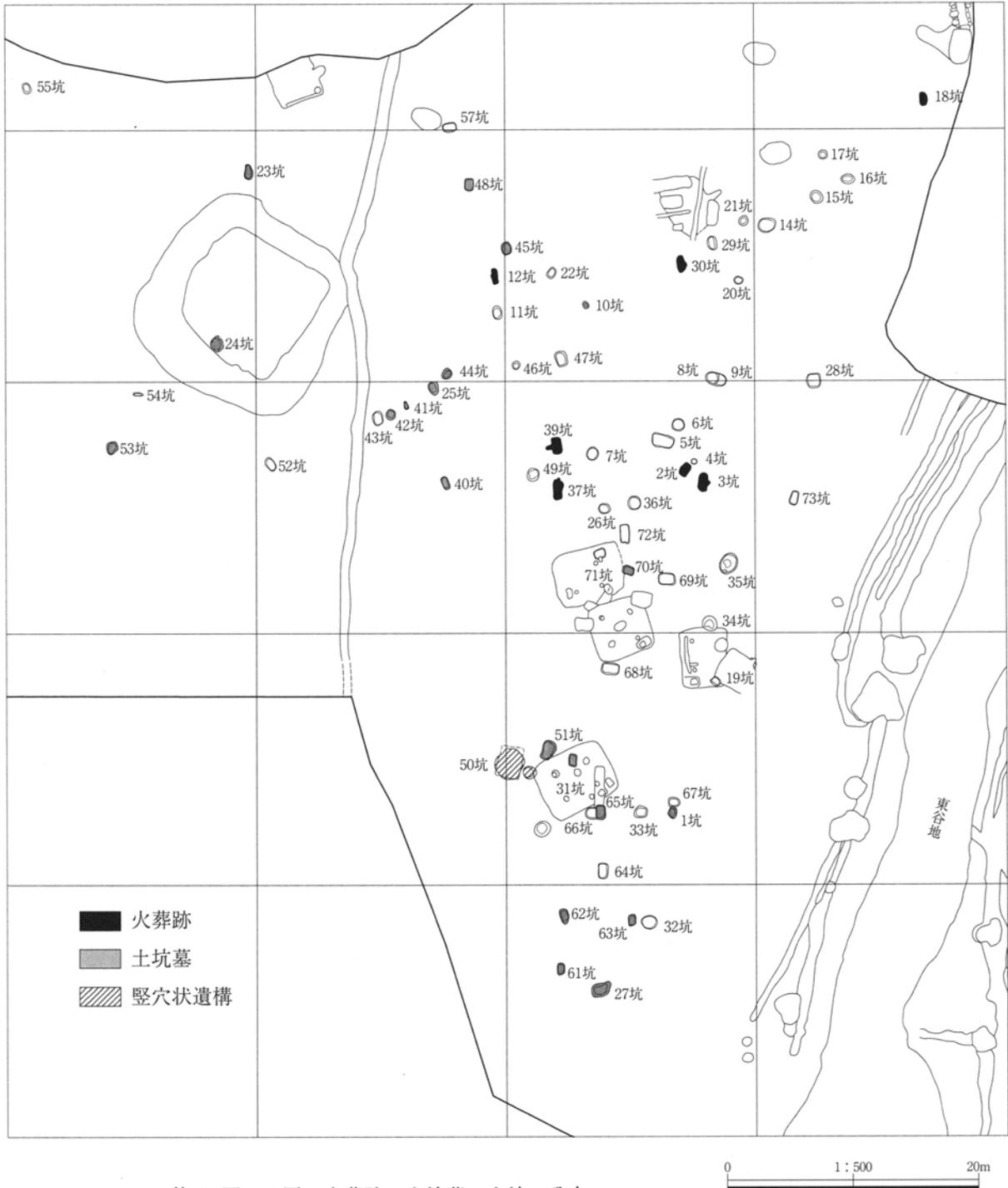


第120図 2区1・2号井戸と出土遺物

B. 2区の土坑

2区では81基の土坑を調査したが、これには4種の遺構が第121図のように混在していた。第1に火葬跡で7基が検出された。2区の中央やや北東部に集中している。第2は竪穴状遺構で隅丸方形の土坑の東辺に突出部がある。1区では28基が検出されたが、2区では中央やや南側に1基が検出された。

第3は土坑墓で21基が確認された。これらには人骨・人歯・古銭・五輪塔のいずれかが出土している。人歯骨はいずれも焼骨でなく、埋没土には炭化物が混入しないことで火葬跡と区別される。また人歯骨が出土しない土坑でも古銭あるいは五輪塔が出土しているものがあり、ここではこれらも土坑墓とした。台地上の全体に分布している。



第121図 2区の火葬跡・土坑墓・土坑の分布

第4は土坑で、先の3種のどれにも該当しないものである。これらも台地全体に分布している。土坑のなかには出土遺物がないだけで、土坑墓と形態が酷似しているものがあるが、墓としての積極的根拠が希薄であることから、本書では土坑とした。

以上のように2区では、土坑の調査から、中央やや東北部にある火葬跡とその周辺の台地全体に広がる土坑墓群で墓域を形成していた。後述するように遺構に伴わない形で出土した五輪塔や石塔類が凹地や台地縁辺部に片づけられた状態で出土していることも墓域の存在を示唆している。

B-1. 火葬跡 (第122~125図 PL28~30)

火葬跡は長さ1.2~1.6m、幅0.6~0.8mの隅丸方形の土坑で、長辺の中央に突出部をもつもの(2号・3号・30号・39号土坑)と、明瞭な突出部のないもの(12号・18号・37号)がある。突出部は換気坑と考えられるが、2号・39号土坑は西側、3号・30号土坑は東側の長辺にある。埋没土には炭化材および焼骨

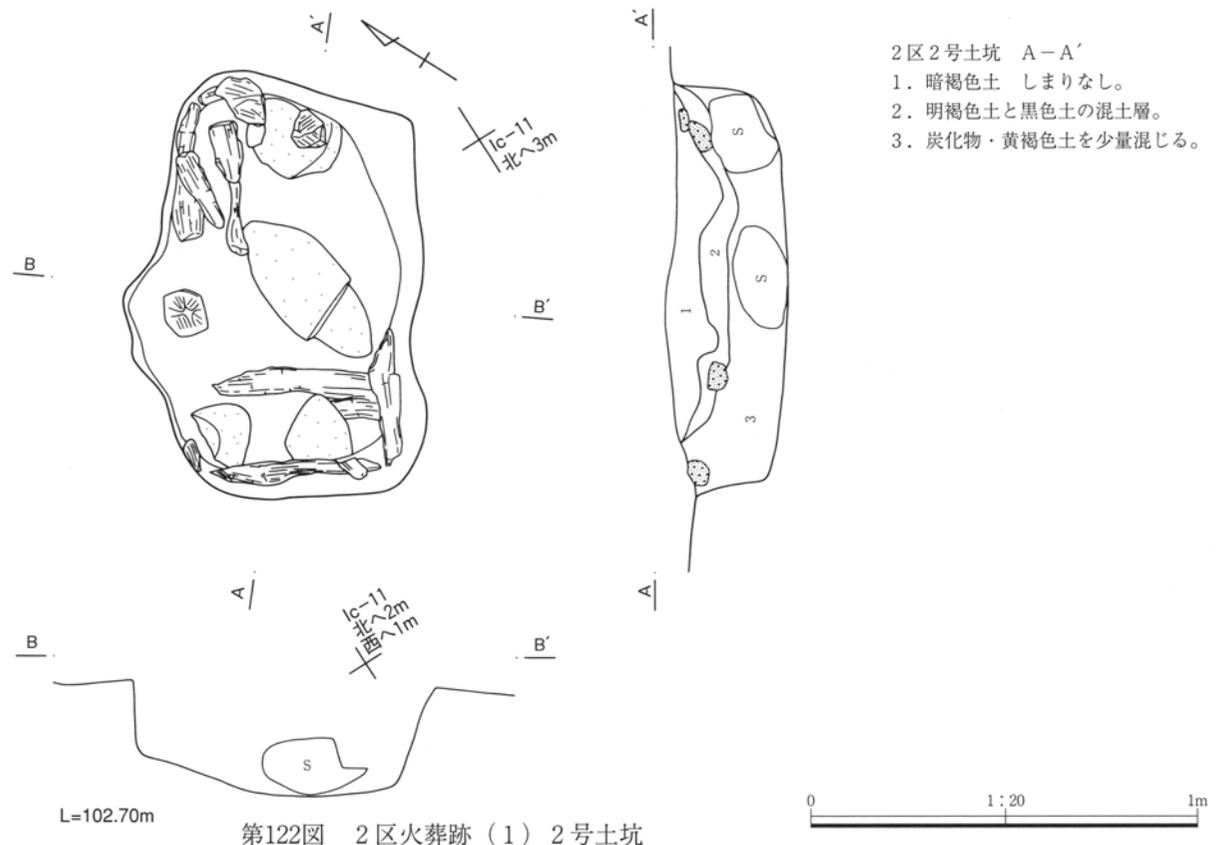
が多量に混じり、壁の一部は焼土化していた。

出土遺物は焼骨・炭化材・礫のみで、副葬品は出土していない。本遺構が埋蔵施設ではなく、埋葬に備えた遺骨処理の施設であったことを物語る。焼骨については、土坑墓に埋葬された人歯骨とともに、第7章に基本的観察と特徴を記載した。

2号土坑(第122図)は長軸中央および南西隅に4個の礫が置かれ、周囲に炭化材が遺存している。礫は遺体の置く台として施設されたものと推定される。他の6基の火葬跡は底面が凹地状になっているのに対して、2号は平坦で、遺体下面への火の回りを考慮したものとする。

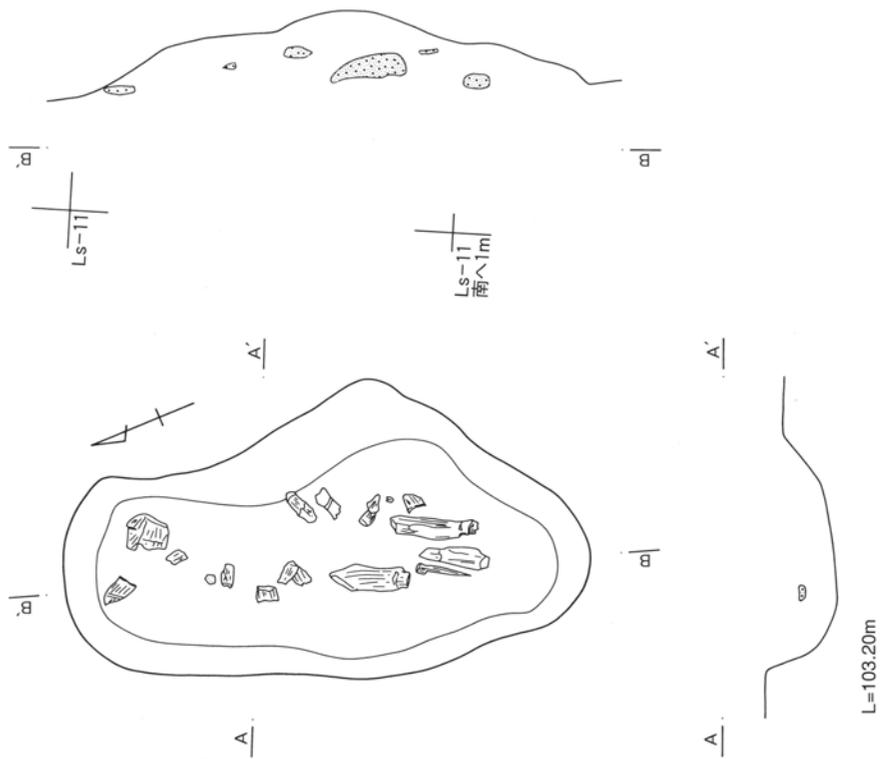
3号・30号土坑(第123図)は東辺中央に突出があり、規模や形態が似ている。埋没土中に炭化材や少量の骨片が出土している残存状態も同様である。

39号土坑(第124図)は長い突出部が西辺中央にあり、特徴的である。炭化材の残存は多くないが、長辺の壁が焼土化していた。底面中央は凹地状で、骨片が比較的多く出土した。

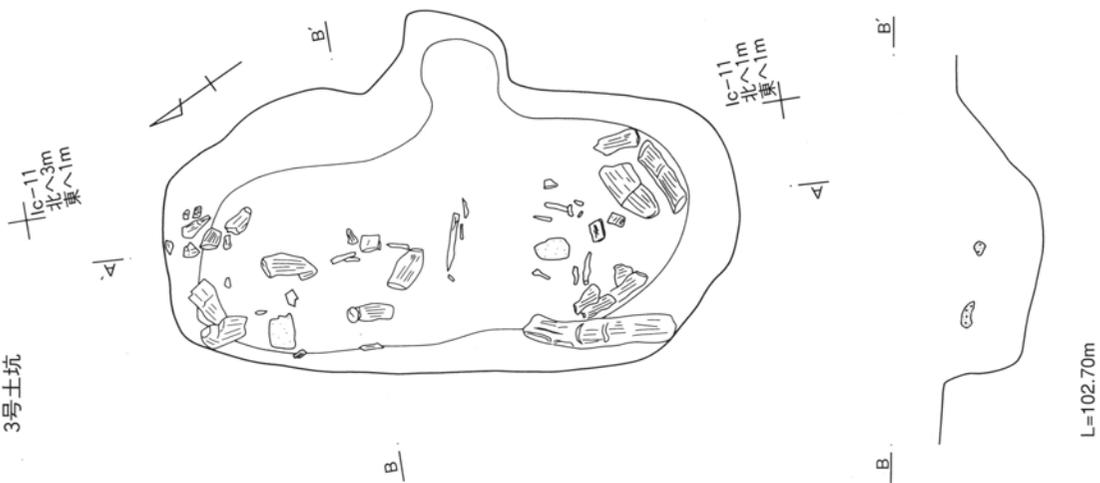


第122図 2区火葬跡(1) 2号土坑

30号土坑



3号土坑



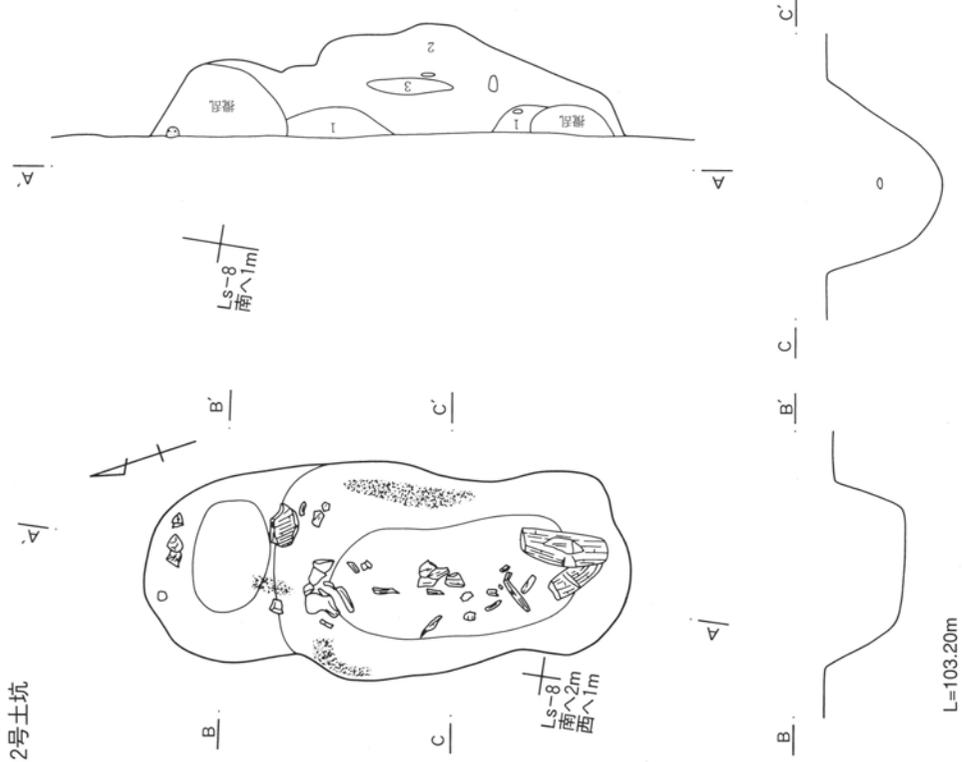
2区3号土坑 A-A'

1. 明褐色土
2. 茶褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
3. 炭化物 骨片を含む。
4. 黄茶褐色土 塊状にはいる。
5. 炭化物と茶褐色土の混土層。骨片を多量に含む。



第123図 2区火葬跡 (2) 3・30号土坑

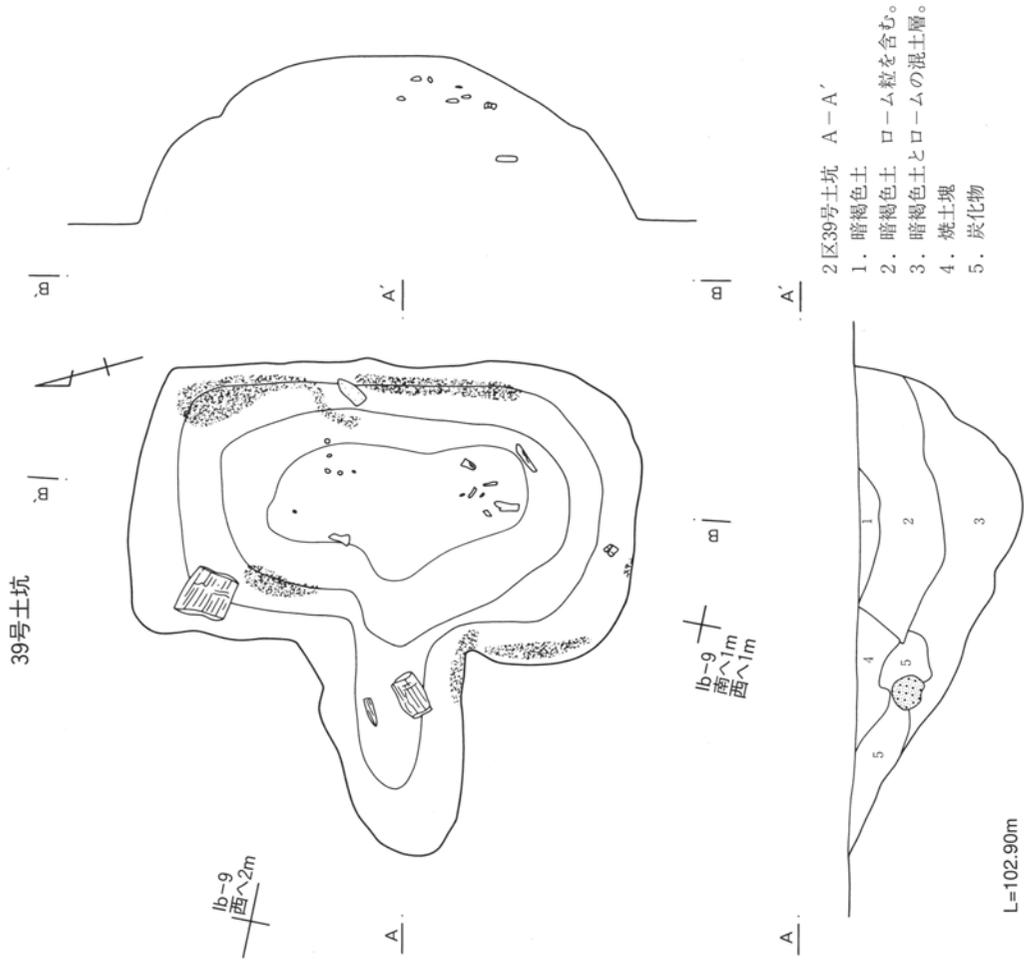
12号土坑



- 2区12号土坑 A-A'
1. 暗褐色土 やや砂質。
 2. 茶褐色土 骨片を含む。
 3. 炭化物



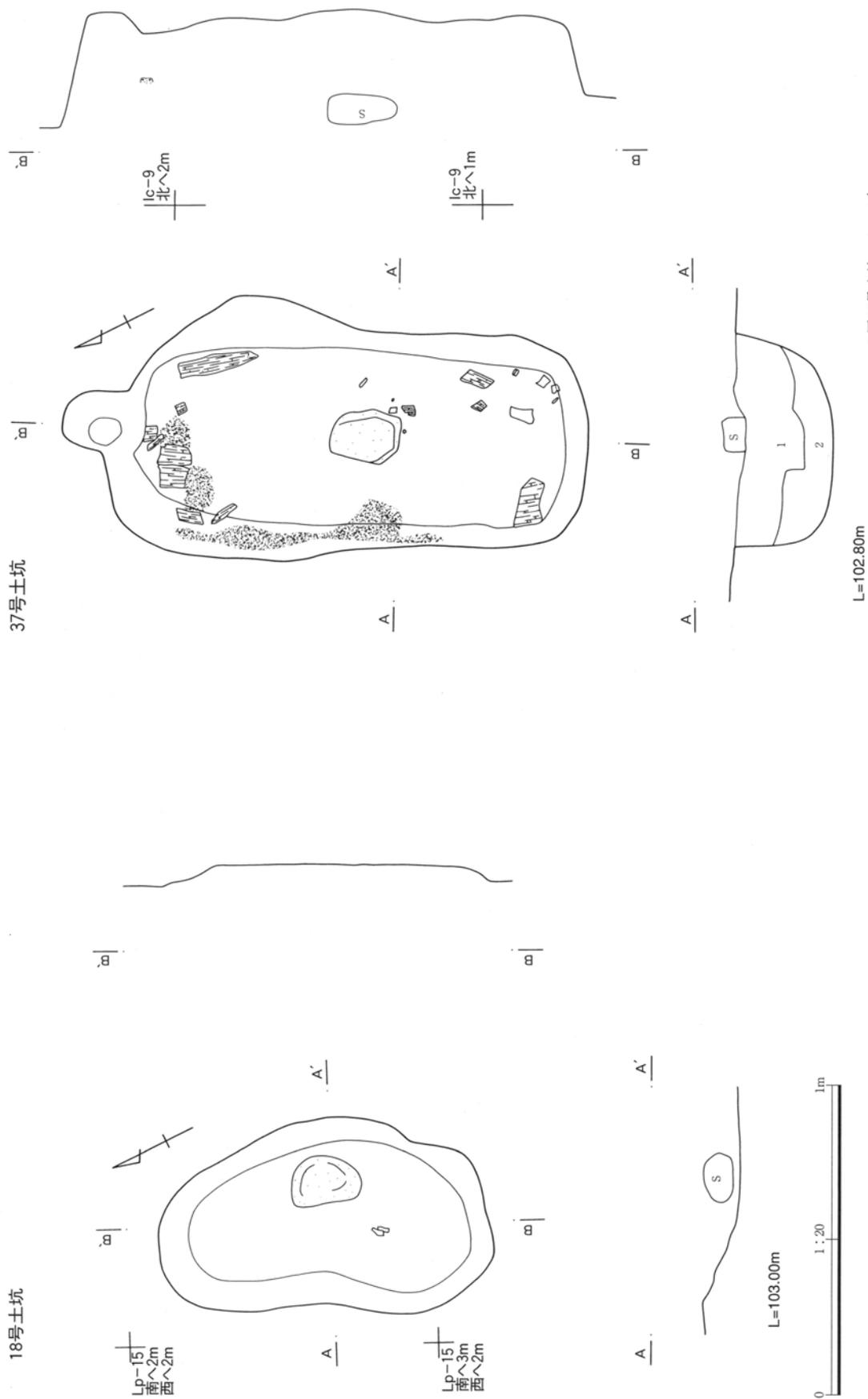
39号土坑



- 2区39号土坑 A-A'
1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土 ローム粒を含む。
 3. 暗褐色土とロームの混土层。
 4. 焼土塊
 5. 炭化物

L=102.90m

第124図 2区火葬跡(3) 39・12号土坑



第125図 2区火葬跡(4) 18・37号土坑

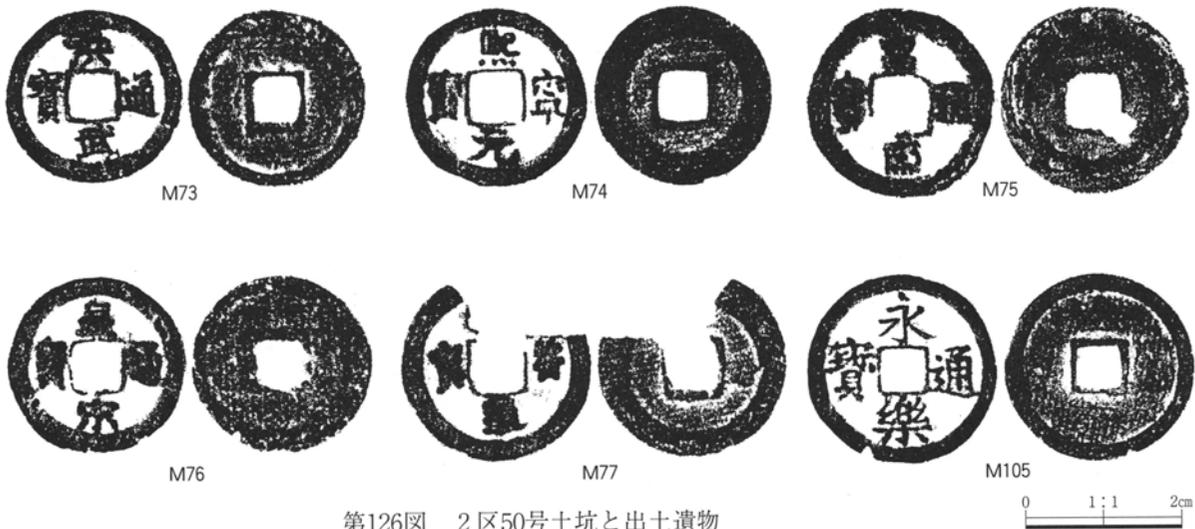
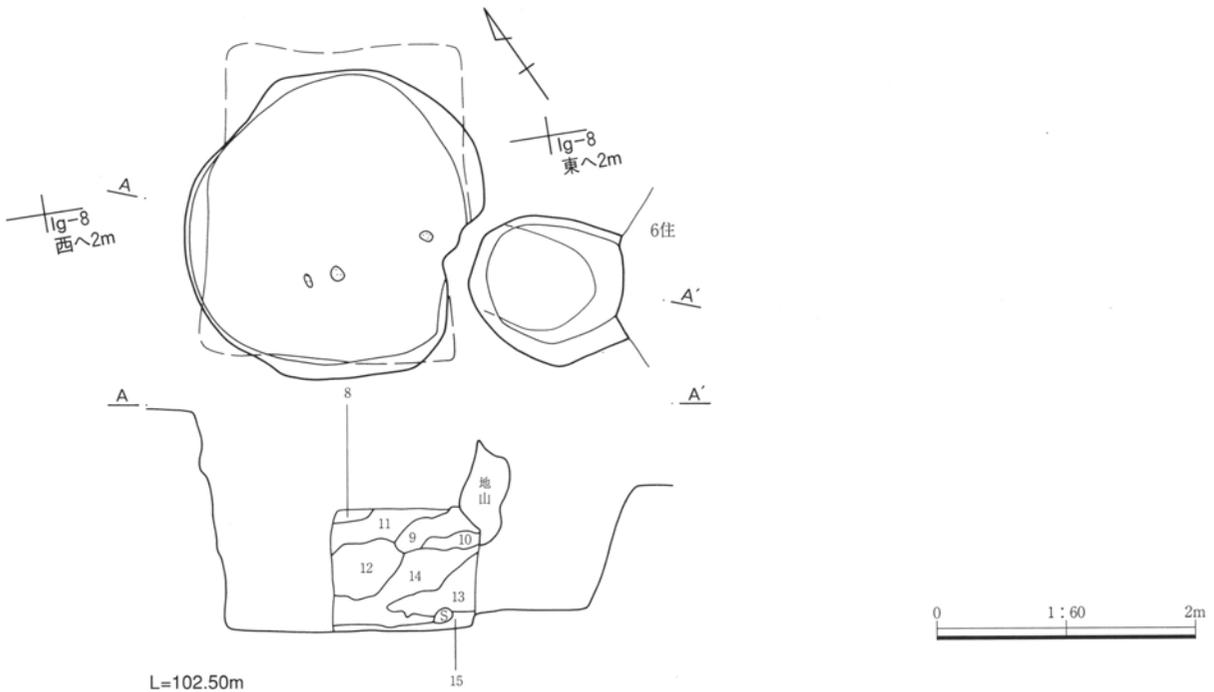
12号土坑(第124図)は突出部のないもので、北側の短辺にも攪乱があり、全長はやや短くなるものと見られる。長軸にそって骨片と炭化材が残存していた。北と東の壁の一部は焼土化していた。

18号・37号土坑(第125図)は中央に礫を残す。18号土坑は中央やや東側の底面付近に礫が出土した。また本土坑には炭化材の図示はないが、調査所見では炭化物の残存があり、火葬跡と考えた。37号土坑は埋没土上位に礫が残る。北および西壁の一部が焼土化していた。

B-2. 竪穴状遺構(第126図 PL27・52・53)

2区では1基のみ竪穴状遺構が検出された。50号土坑である。確認面ではほぼ円形であるが、2mほど掘られた底面では2.0×2.2mの隅丸方形に掘られている。南東部には幅0.8m程の突出部が掘られ、突出部の上位には地山のローム層が掘り残されている状態であった。なお本土坑の埋没土の詳細については記録が散逸し、遺憾ながら土層注記を掲載できなかった。

埋没土中からは土師器9点、弥生土器1点、縄文



第126図 2区50号土坑と出土遺物

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

土器1点の他、古銭6枚が出土した。土師器等は混入の遺物と考えられるが、古銭は本土坑の時期や機能を考える上で重要な遺物であろう。

竪穴状遺構は1区でも30基が出土している。これらは屋敷の西側を区画する溝の内側に平行して並ぶように何度も掘り直されている。突出部は東側にあり、東側の空間から使用されたものと推定できる。出土遺物には内耳鍋等の日用雑器が卓越するものや板碑が出土するもの等が混在しており、一様ではなかった。一方、2区では1基が単独で検出されており、古銭が出土することなど対照的である。竪穴状遺構の機能解明については、検出状態や出土遺物のさらなる詳細な検討が必要であろう。

B-3. 土坑墓 (第127~134図 PL31~35・52~55)

遺物観察表P.282・292)

2区で検出した土坑のうち、人歯骨・古銭・小型土器・石塔類を出土したものの21基を土坑墓とした。第33表には1区の土坑墓、2区の竪穴状遺構(50号)も併載している。

25号・40号・42号・45号・48号土坑は取り上げられる状態で人歯骨が出土した土坑で、25号・48号を除く3基で古銭も出土していることから、墓として掘られたものと判断した。平面形は42号土坑が円形である他は、ほぼ方形である。埋葬された人歯骨については第7章で詳述した。

1号・10号・23号・24号・38号土坑は人歯骨を出土したが、細片化していたために調査時に取り上げることができなかった土坑墓である。これらにも24号土坑を除き古銭が出土しており、墓と判断した。

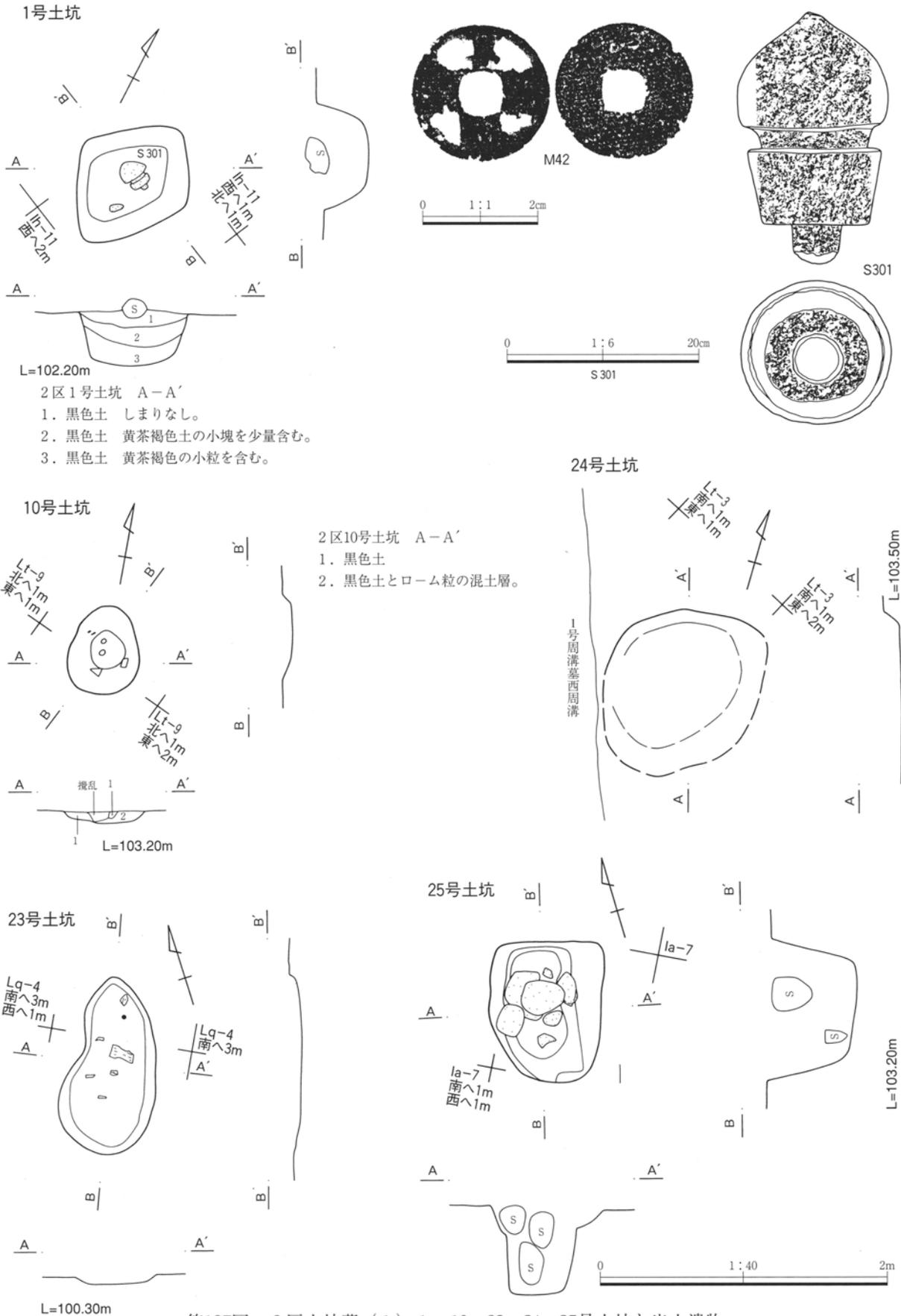
1号土坑は方形、他は楕円または円形である。

27号・31号・41号・44号・53号・61号・62号・63号・65号土坑は、人歯骨の出土が確認できなかったものである。しかし、すべてに古銭が出土しており、形態も上記の人歯骨が出土した土坑と同類であることから、土坑墓と判断した。平面形は、円形の44号土坑、楕円形の53号土坑を除き、整った方形である。31号土坑からは14世紀と見られるかわらけ(第128図605)が出土した。もう1点かわらけが出土しているが、所在不明のため遺憾ながら図示できなかった。27号・53号・61号土坑からは五輪塔の空風輪や火輪が上層から出土している。傍らに立てられた塔類が片づけられる過程で、土坑墓に落ちこんだものと考えられる。人歯骨が出土した1号土坑からも空風輪が出土している。

51号土坑は上層から五輪塔が出土した。埋没土中からは図示しなかったが、14世紀と思われるすり鉢の口縁部破片も出土している。70号土坑は整った方形で、刀子が出土した。51号・70号土坑ともに人歯骨・古銭の出土はないが、上記のような遺物が出土していることや形態が似ていることから、土坑墓として報告した。なお、70号土坑出土の刀子は所在不

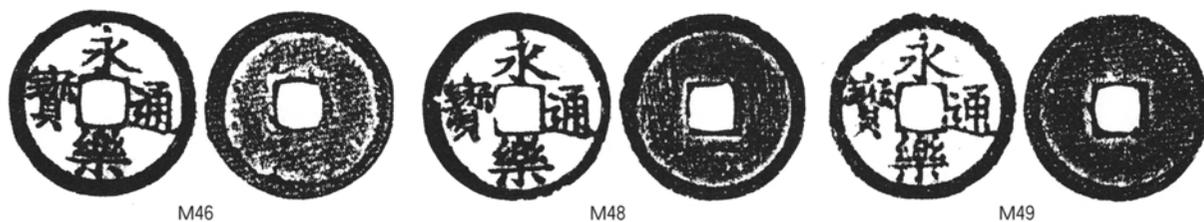
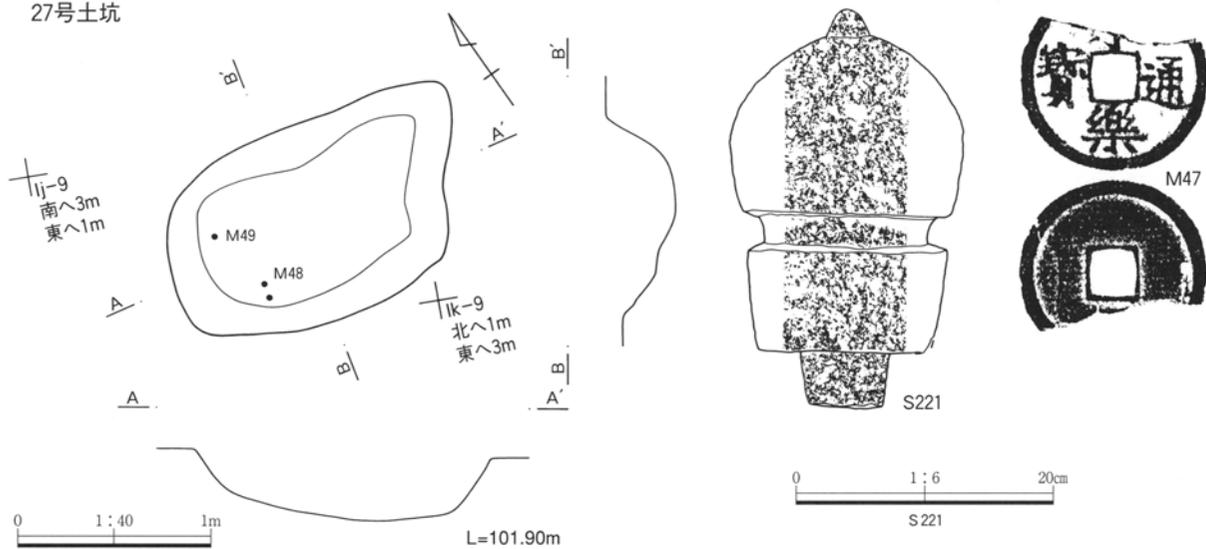
第4表 荒砥宮田遺跡の土坑墓の出土遺物

区	土坑番号	遺構図	遺構写真	歯骨	歯骨出土したが 取上出来ず	歯骨出土無し	金属製品	石製品	土器
2区	25土坑	第127図	P L 31	四肢骨片				円礫	
2区	40土坑	第129図	P L 32	左右側頭骨片・遊離歯冠12			古銭(M56~62)		
2区	42土坑	第129図	P L 33	頭蓋骨・遊離歯15			古銭(M65)	礫	
2区	45土坑	第130図	P L 33	四肢骨片			古銭(M69~72)		
2区	48土坑	第130図	P L 33・34	遊離歯12					
2区	50土坑	第126図	P L 27	頭蓋骨・永久歯3・右大腿骨			古銭(M73~77・105)		
2区	1土坑	第127図	P L 31		○		古銭(M42)	五輪塔(S301)	
2区	10土坑	第127図	P L 31		○		鉄片(M21・22)		
2区	23土坑	第127図	P L 31		○		古銭(M43~45)		近現代の瓦破片
2区	24土坑	第127図	-		○				
2区	38土坑	遺構図不明	P L 32		○				
2区	27土坑	第128図	P L 31			○	古銭(M46~49)	五輪塔(S221)	
2区	31土坑	第128図	P L 32			○	古銭(M50~55)		14世紀かわらけ(605)
2区	41土坑	第129図	P L 32			○	古銭(M63~64)		
2区	44土坑	第130図	P L 32			○	古銭(M66~68)		
2区	53土坑	第132図	P L 34			○	古銭(M78~80)	五輪塔(S303・S224)	
2区	61土坑	第132図	P L 34			○	古銭(M81~83)	五輪塔	
2区	62土坑	第133図	P L 35			○	古銭(M84~93)		
2区	63土坑	第134図	P L 35			○	古銭(M94~98)		
2区	65土坑	第134図	P L 34			○	古銭(M99~102)		
1区	99土坑	第114図	-			○	古銭(M26~31)		
1区	153土坑	第114図	-			○	古銭(M32~33)		
2区	51土坑	第131図	P L 34			○		五輪塔(S222・S223・S302)	14世紀すり鉢口縁破片
2区	70土坑	第131図	P L 35				刀子(所在不明)		

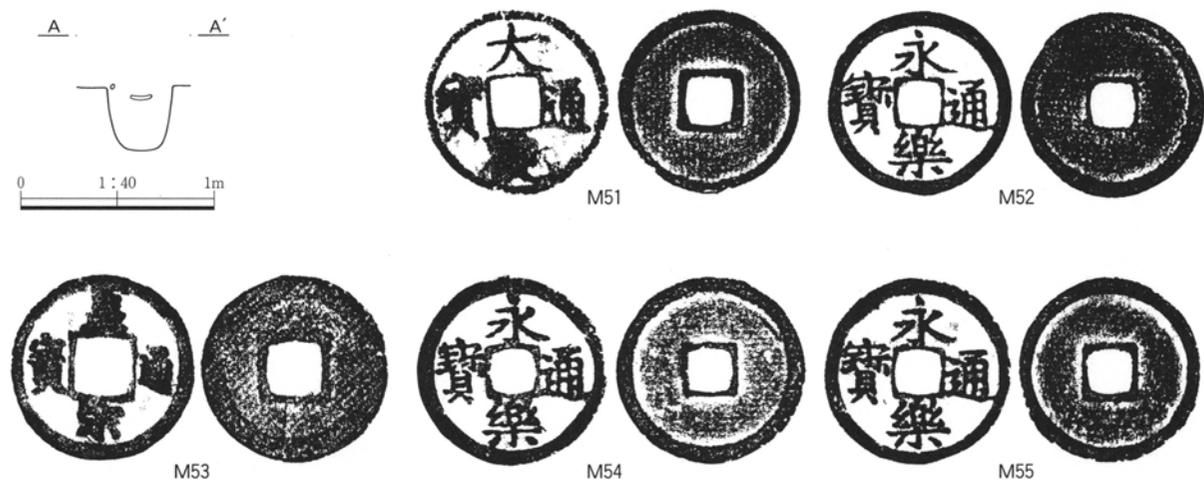
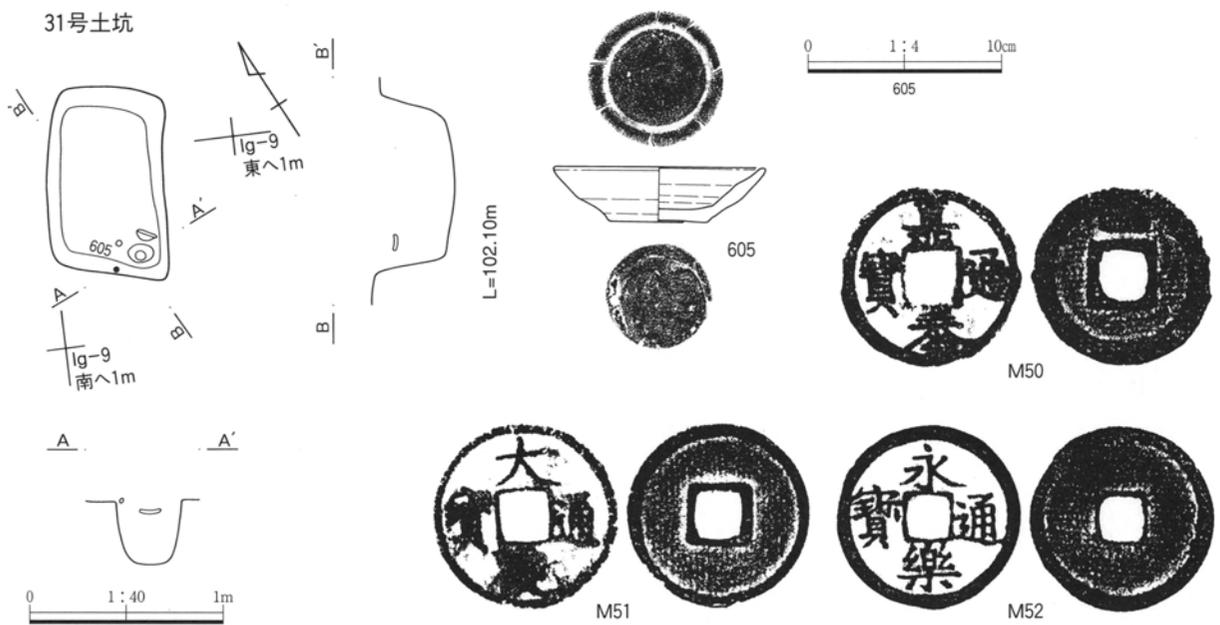


第127図 2区土坑墓(1) 1・10・23・24・25号土坑と出土遺物

27号土坑

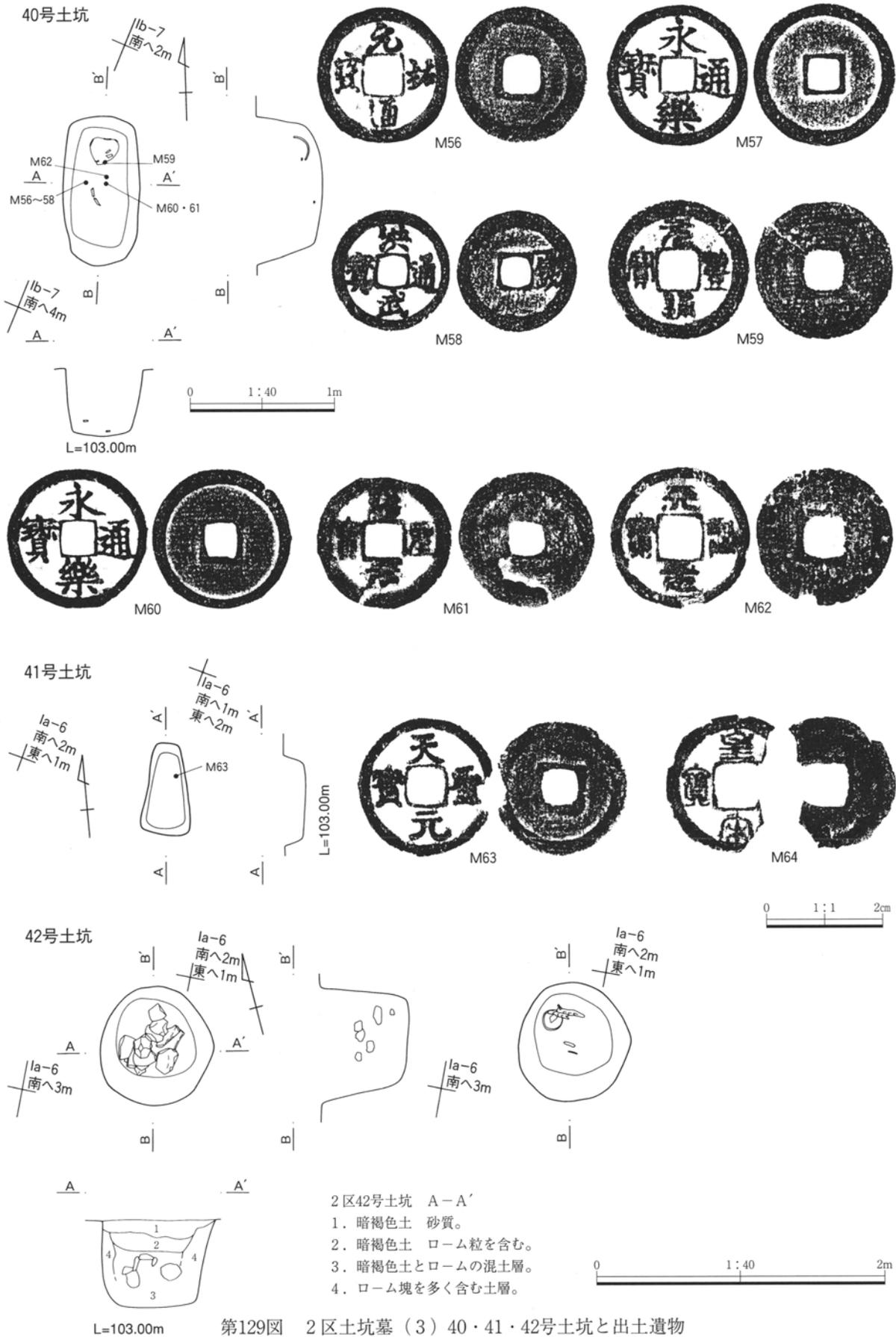


31号土坑



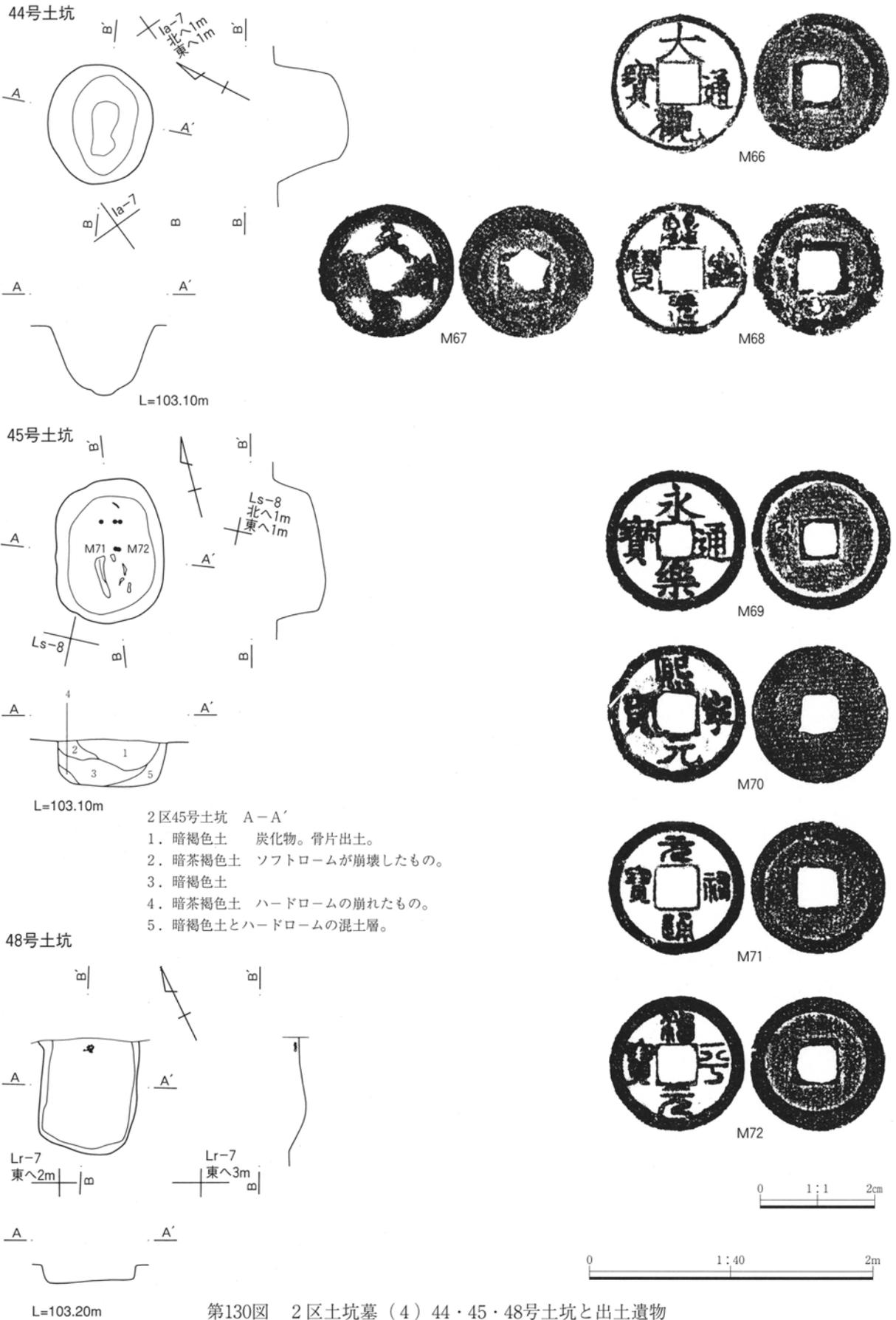
第128図 2区土坑墓(2) 27・31号土坑と出土遺物



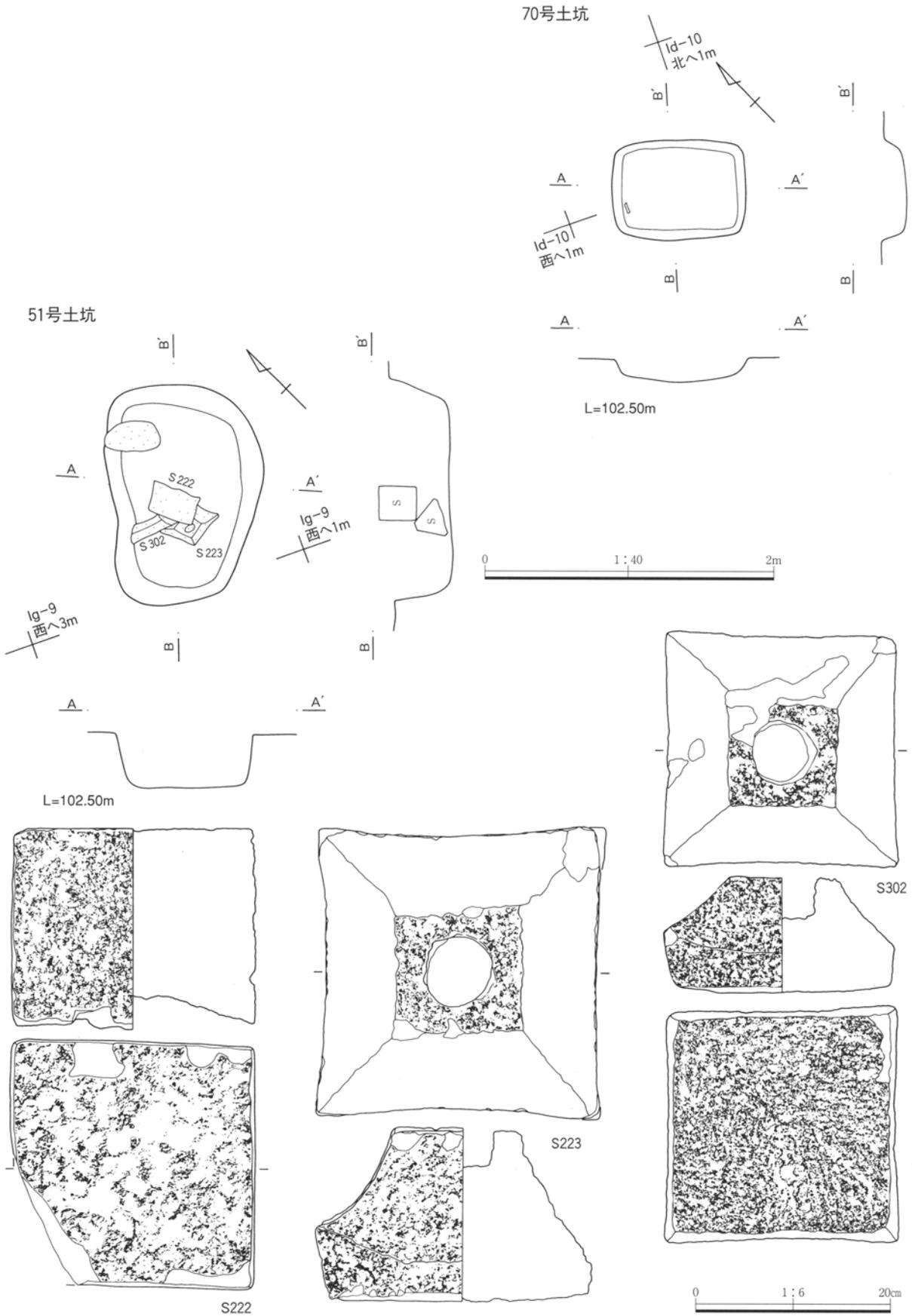


第129図 2区土坑墓(3) 40・41・42号土坑と出土遺物

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

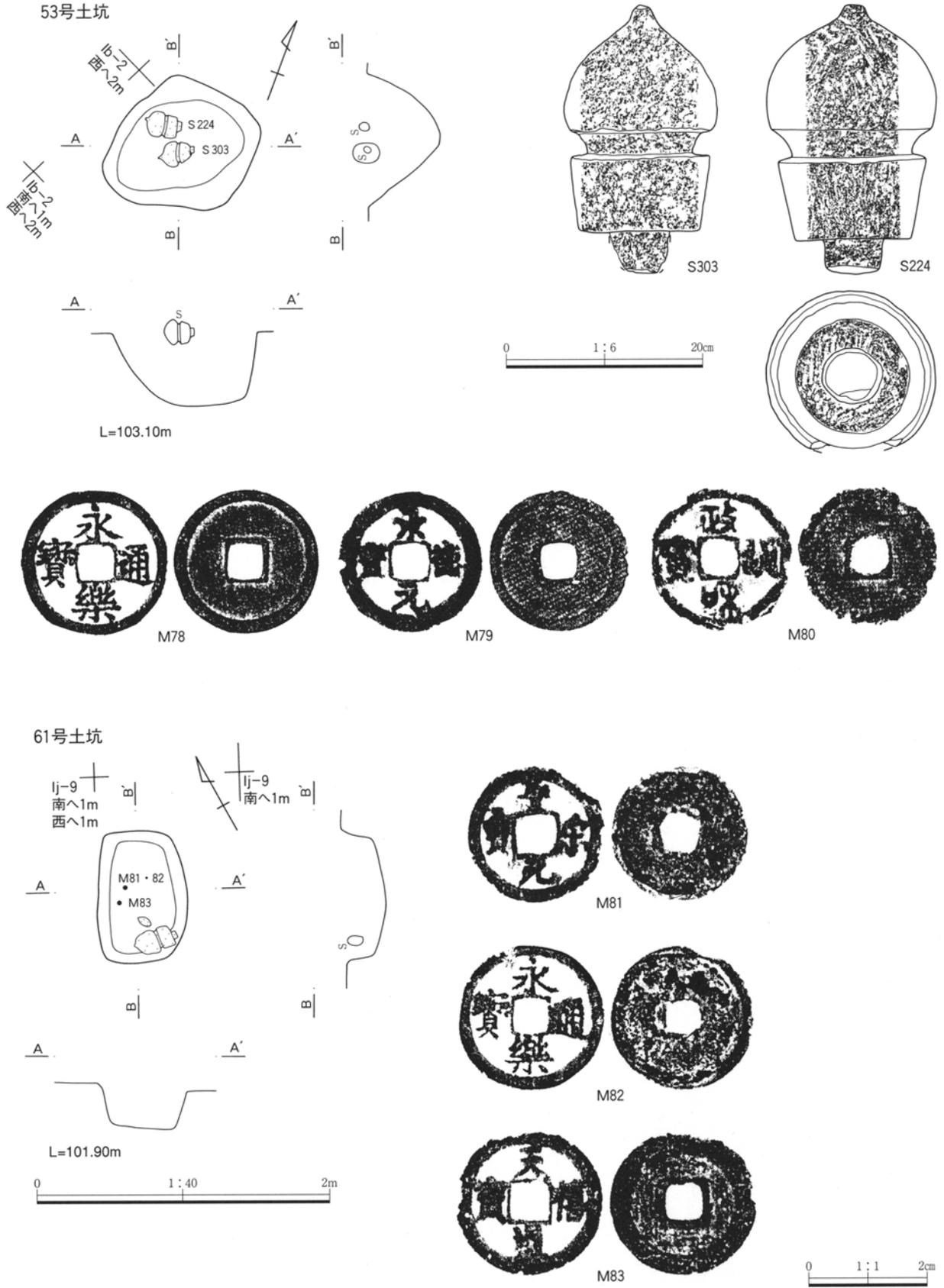


第130図 2区土坑墓(4) 44・45・48号土坑と出土遺物

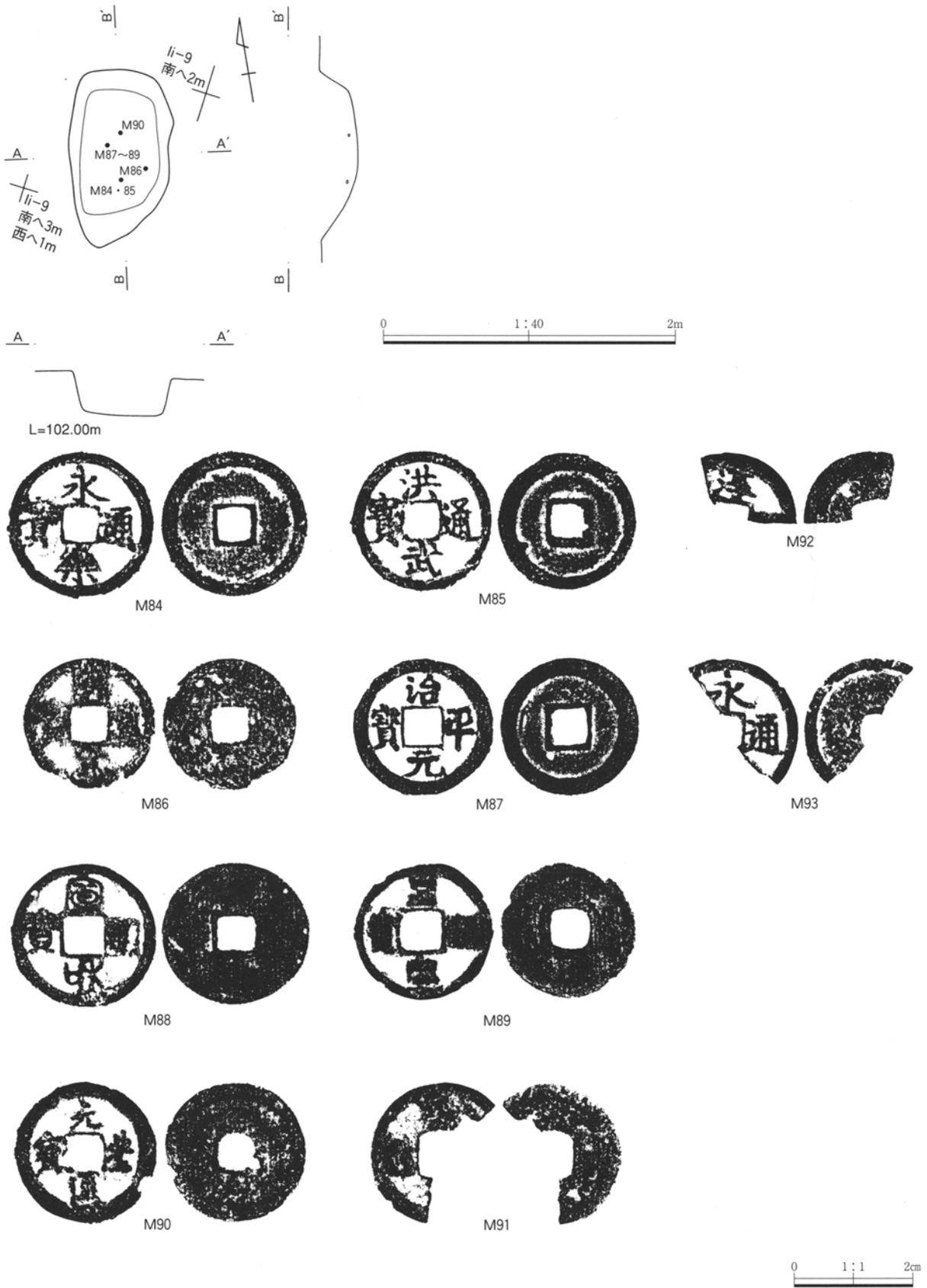


第131図 2区土坑墓(5) 51・70号土坑と出土遺物

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物



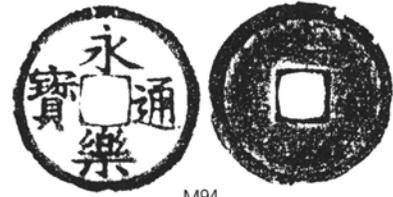
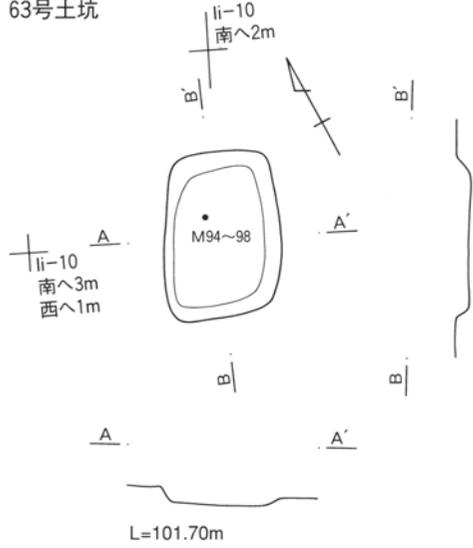
第132図 2区土坑墓(6) 53・61号土坑と出土遺物



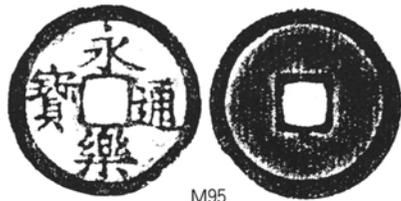
第133図 2区土坑墓(7)62号土坑と出土遺物

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

63号土坑

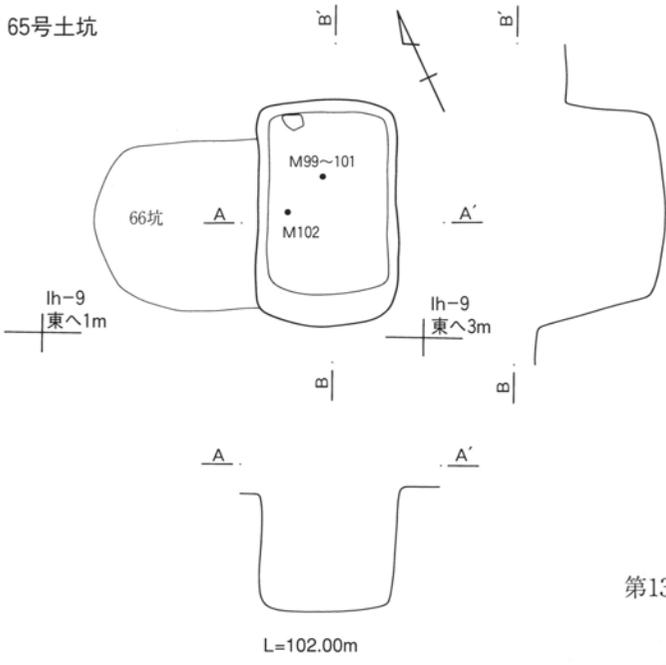


M94

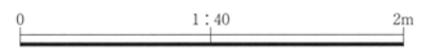


M95

65号土坑



M102



第134図 2区土坑墓(8) 63・65号土坑と出土遺物

明のため、遺憾ながら副葬品としての検討や、図化はできなかった。

これら土坑墓の時期は断定しがたい。土坑の形態は円形のものや方形のものがあるが、これだけでは時期決定の決め手にはならないだろう。

出土遺物には古銭・塔類・土器がある。出土した土器は4点で31号土坑から出土したかわらけ2点(605他)と、51号土坑から出土したすり鉢口縁部破片、23号土坑から出土した近現代のものと思われる瓦破片のみである。瓦は混入と考えられる。かわらけとすり鉢は埋没土中からの出土であり、土坑に伴

うと即断できる状況ではない。

出土した古銭は合計47枚である。永楽通寶が17枚でもっとも多く、他の宋銭が17種28枚、銭名が読めないもの6枚、錆着のため不明のもの6枚である。分類では本銭と模鑄銭の区別が困難であり、1点のみ模鑄銭の可能性のあるもの(2区40号土坑M58)を抽出できたにとどまった。古銭の同定や古銭による墓の時期決定、副葬品として古銭の位置づけ等に迫るために、今後の基礎調査の実現を期したい。

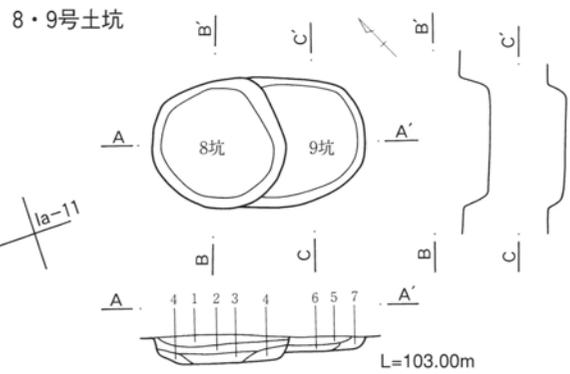
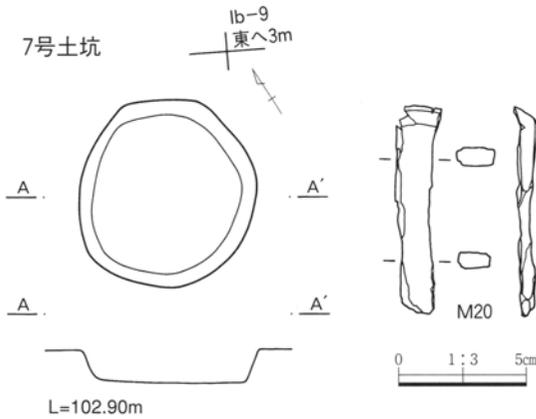
さらに墓域の周囲には遺構外の遺物で図示したように、塔類が出土している。なかでも異形板碑(第

140図S254)は注目されるが、その意匠はやや新しい様相である。しかし、2区墓域から少量であるが板碑破片が出土していること、出土した古銭には寛永通寶は1枚しかないこと、近世墓に特徴的にみられる皿類の副葬が見られないことを考慮すれば、2区台地が中世から墓域となっていた可能性は高いと推定する。今後、本遺跡の成果を中近世の墓制に位置づけるには、土坑の形態や埋葬方法を地域全体のかなで再検討する手続きがまだ必要であろう。

B-4. 土坑 (第135~137図 PL24~28・52)

2区で検出した土坑のうち、火葬跡や竪穴状遺構、土坑墓と判断できないものを土坑とした。平面形が円形(第135図)、楕円形(第136図)、方形(第137図)に分けられる。出土遺物はほとんど無く、土師器の細片が混入した形で出土しているのみである。

特に方形の土坑は、形態が土坑墓に酷似するが、人歯骨はもちろんのこと、古銭・五輪塔等の出土はみられなかった。



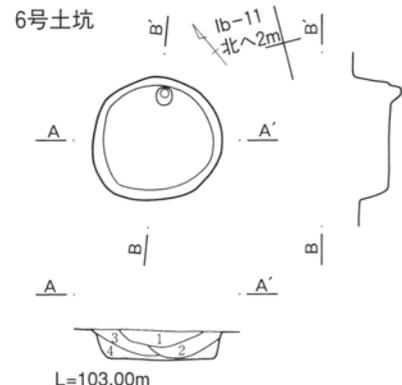
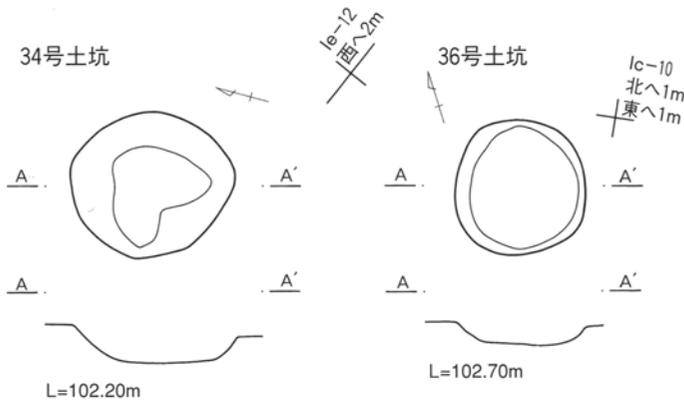
2区8・9号土坑 A-A'

8号土坑

1. 黒褐色土 軽石を多く含む。
2. 黒褐色土 軽石を多く含む。茶褐色土粒をやや混入。
3. 黒褐色土 軽石を多く含む。茶褐色土の小塊を含む。
4. 黒褐色土と茶褐色土の混土層。

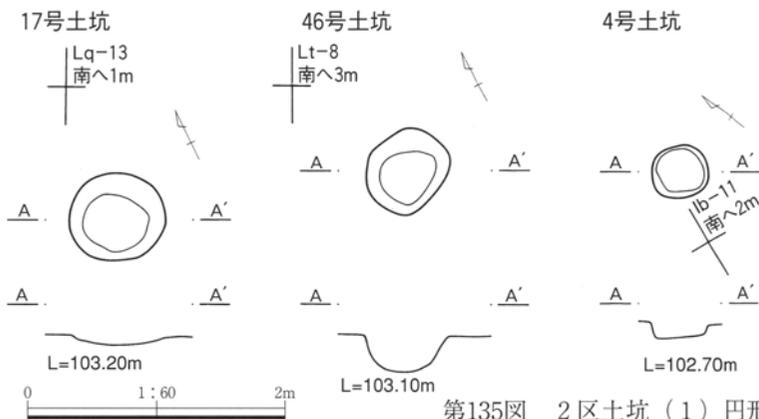
9号土坑

5. 茶褐色土 軽石を少量含む。
6. 茶褐色土と明褐色土の混土層。
7. 茶褐色土



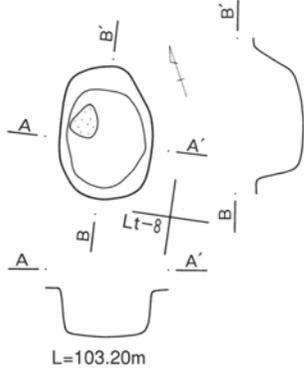
2区6号土坑 A-A'

1. 暗褐色土 黒色味強い。
2. 黒褐色土 1層より黒色味強い。
3. 黄茶褐色土塊。
4. 暗褐色土 茶色味あり。

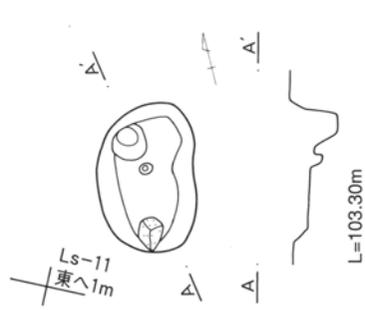


第135図 2区土坑(1)円形

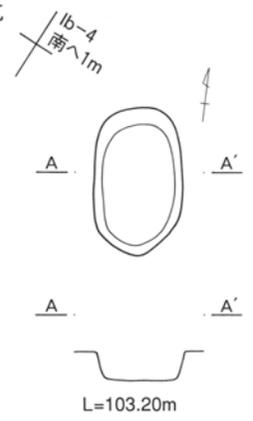
11号土坑



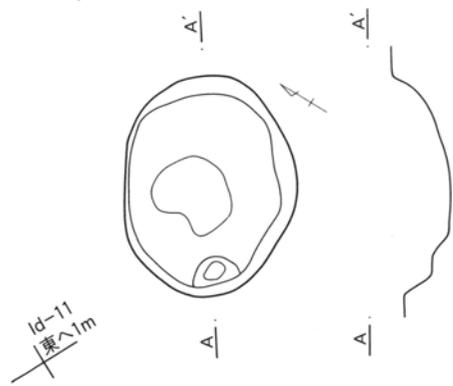
29号土坑



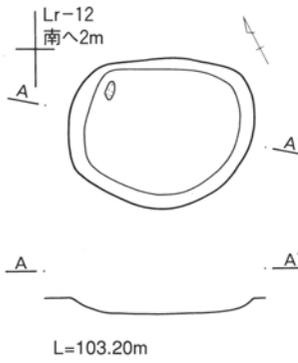
52号土坑



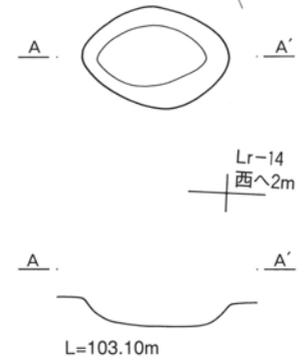
35号土坑



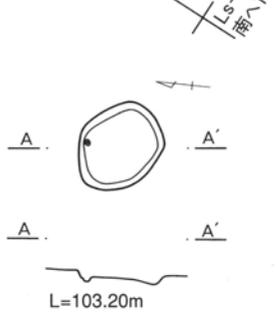
14号土坑



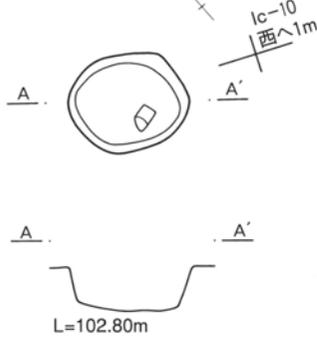
16号土坑



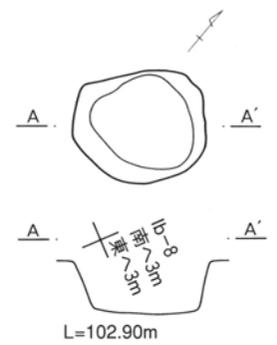
20号土坑



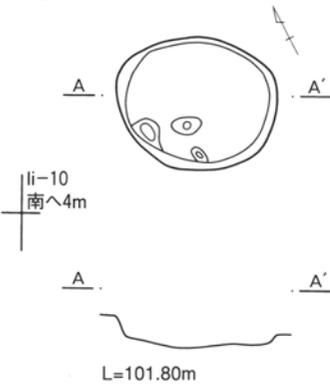
26号土坑



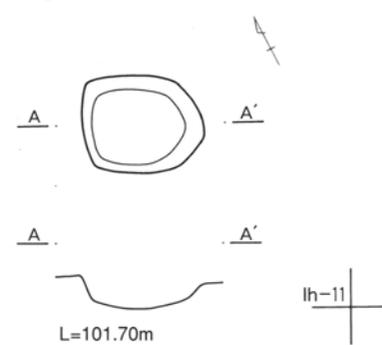
49号土坑



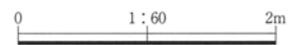
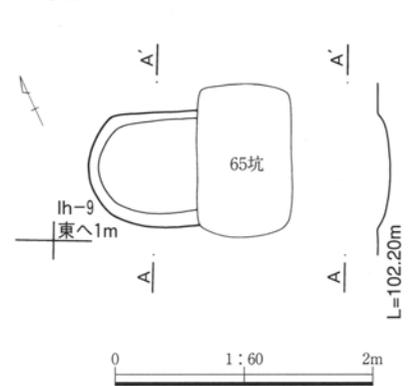
32号土坑



67号土坑

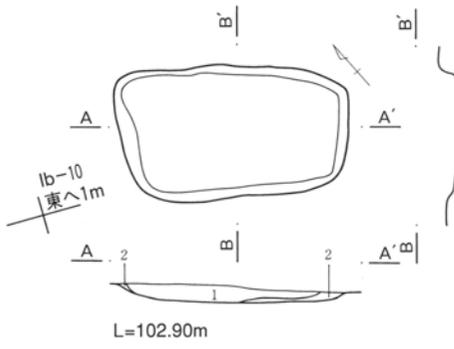


66号土坑

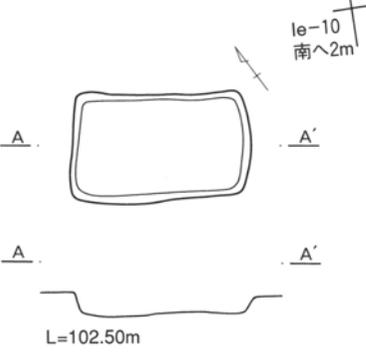


第136図 2区土坑(2) 楕円形

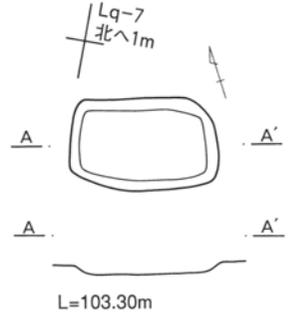
5号土坑



68号土坑



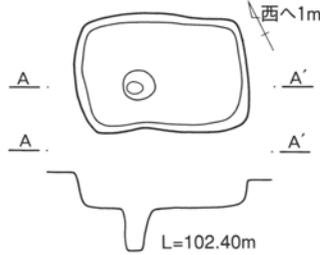
57号土坑



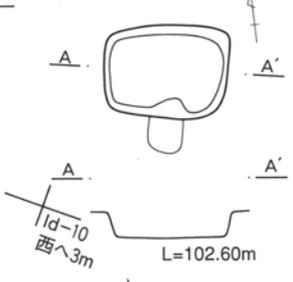
2区5号土坑 A-A'

1. 黒色土と暗褐色土が小塊で混土状態をなしている。軽石を少量含む。
2. 明褐色土 黒色土粒をやや含む。

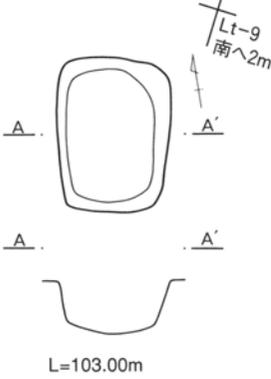
69号土坑



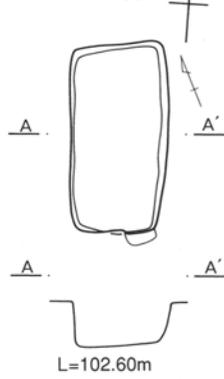
71号土坑



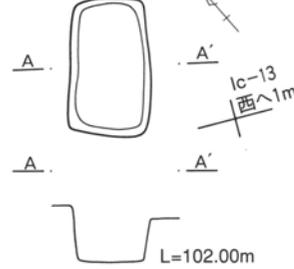
47号土坑



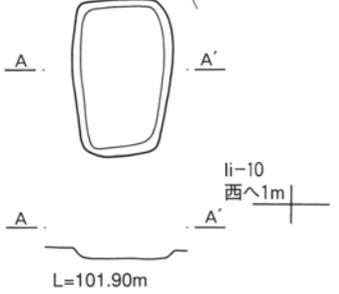
72号土坑



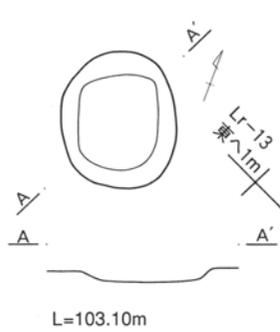
73号土坑



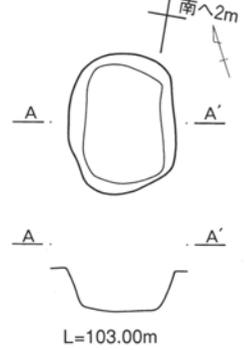
64号土坑



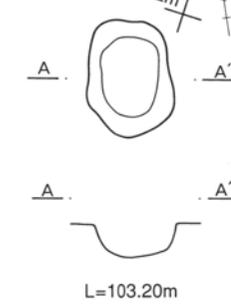
15号土坑



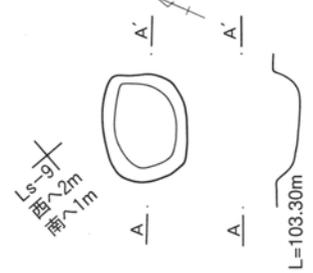
43号土坑



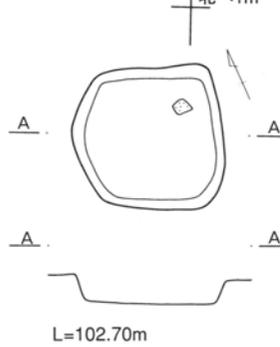
55号土坑



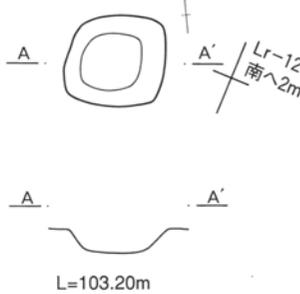
22号土坑



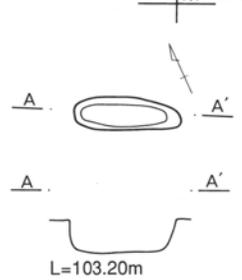
28号土坑



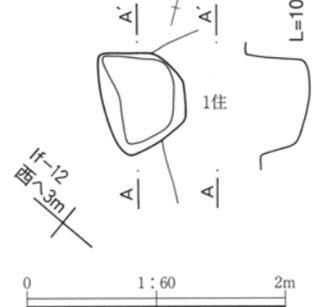
21号土坑



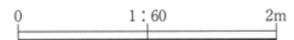
54号土坑



19号土坑



第137図 2区土坑 (3) 方形



C. 溝

台地中央部に1号溝(付図4)が、東谷地の東西縁に数条の溝群(第17図)が検出されたが、時期を決定できる遺物の出土は無い。東谷地東西縁の溝からは次項の遺構外の遺物第138図で図示した土器が出土しているが、決め手に欠き詳細は不明であるといわざるを得ない。

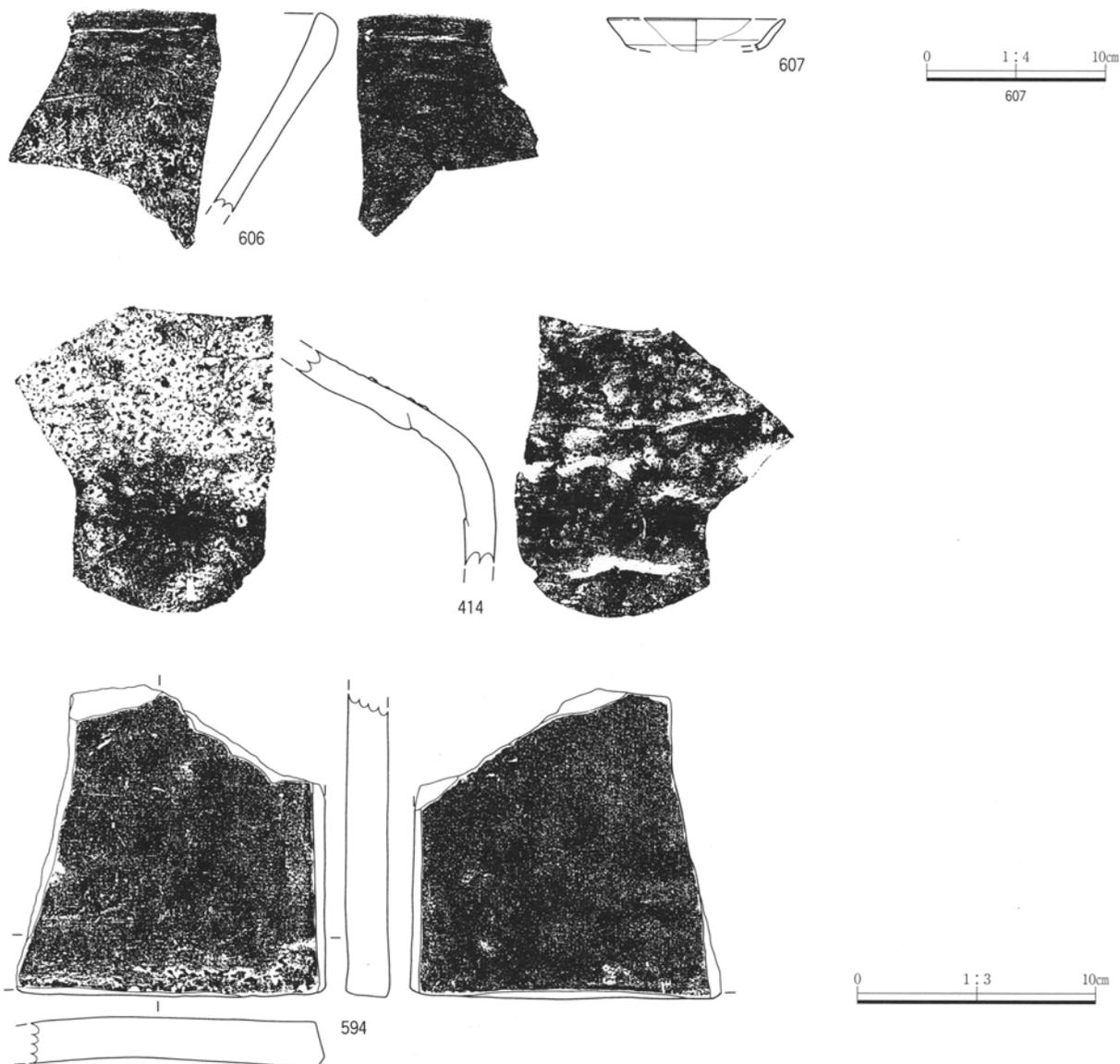
また、馬歯が東谷地東溝群の土層断面G・H間とH・I間で出土している。出土層位は明らかでない。観察の結果、いずれも死亡年齢約5歳の大型馬および小型馬と推定された。

D. 遺構外の出土遺物(第138~145図 PL55~59)

遺物観察表P.282・292~294)

2区の遺構に伴わない形で、多数の遺物が出土している。ここでは中近世の主な遺物について遺物種ごとに図示した。

土器は2区東谷地東西縁の溝から出土したもの、4号住居埋没土中から出土したものを図示した。第138図607は12世紀と見られる中国同安窯系の青磁皿破片である。西溝埋没土中から出土した。606は中世と見られる軟質陶器すり鉢、414は12~13世紀と見られる常滑甕の肩部破片である。両者共に東溝



第138図 2区遺構外の出土遺物(1)土器

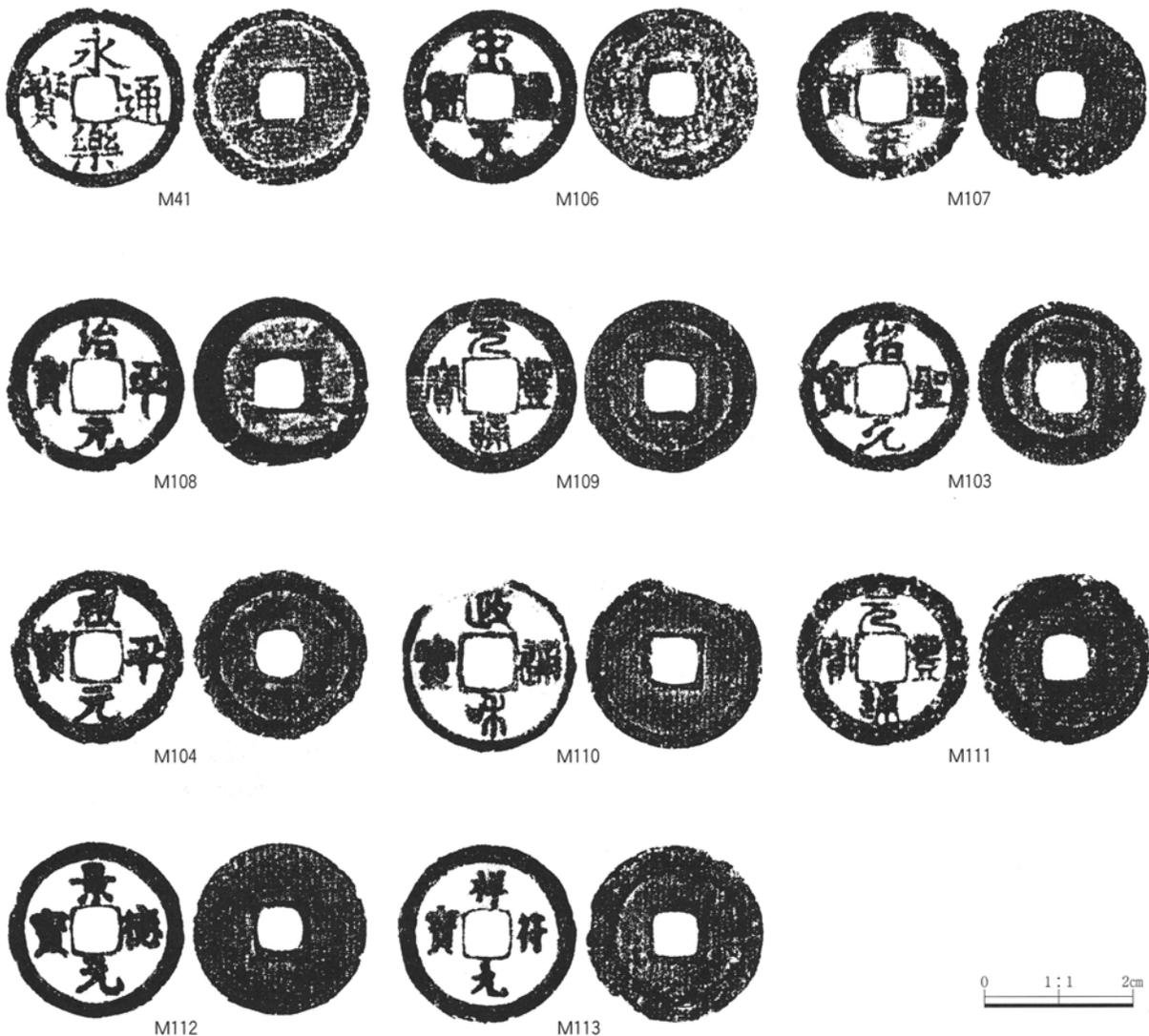
埋没土中から出土した。594は軟質の瓦で2区4号住居埋没土から出土した。

古銭は、11点が遺構に伴わない状態で出土した。いずれも北宋銭であるが、土坑墓出土のものと同様に、これらの古銭も本銭と模鑄銭の区別はできなかった。銭種は永楽通寶(M21)、宋通元寶(M106)、皇宋通寶(M107)、治平元寶(M108)、元豊通寶(M109)、紹聖元寶(M103)、咸平元寶(M104)、政和通寶(M110)、元豊通寶(M111)、景德元寶(M112)、祥符元寶(M113)の11種である。これらの古銭はほとんどが、方形周溝墓の凹地や台地縁辺に片づけられた五輪塔や板碑と共に出土している。本来は土坑墓に副葬されていたものが散乱したものと考えられよう。

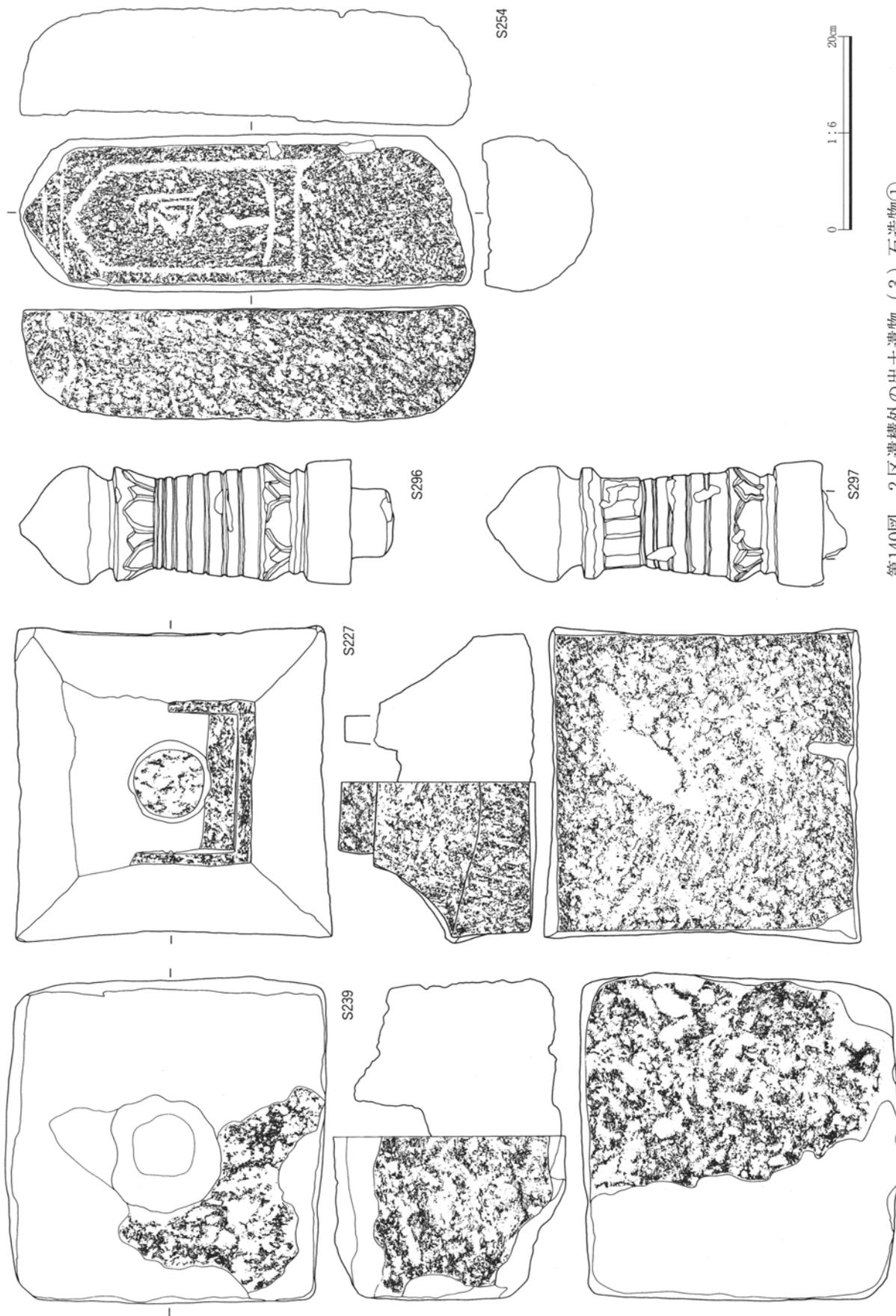
石像物は石塔・五輪塔の塔類や、石鉢・粉挽き白

の未製品等が出土している。塔類の出土数が多く、異形板碑1基、五輪塔空風輪12個、火輪8個、水輪3個、地輪2個、宝塔相輪2個、宝塔屋蓋1個、骨蔵器1個で合計29個にのぼる。また小破片であることから実測しなかったが、緑泥片岩製の板碑破片がIh-9グリッドやLt-7グリッドで出土している。これらの塔類は方形周溝墓の周溝上層に落ちこんでまともな状態で出土したもの、台地の縁辺から出土したものがある。これらも墓域に立てられていたものが片づけられたものであろう。

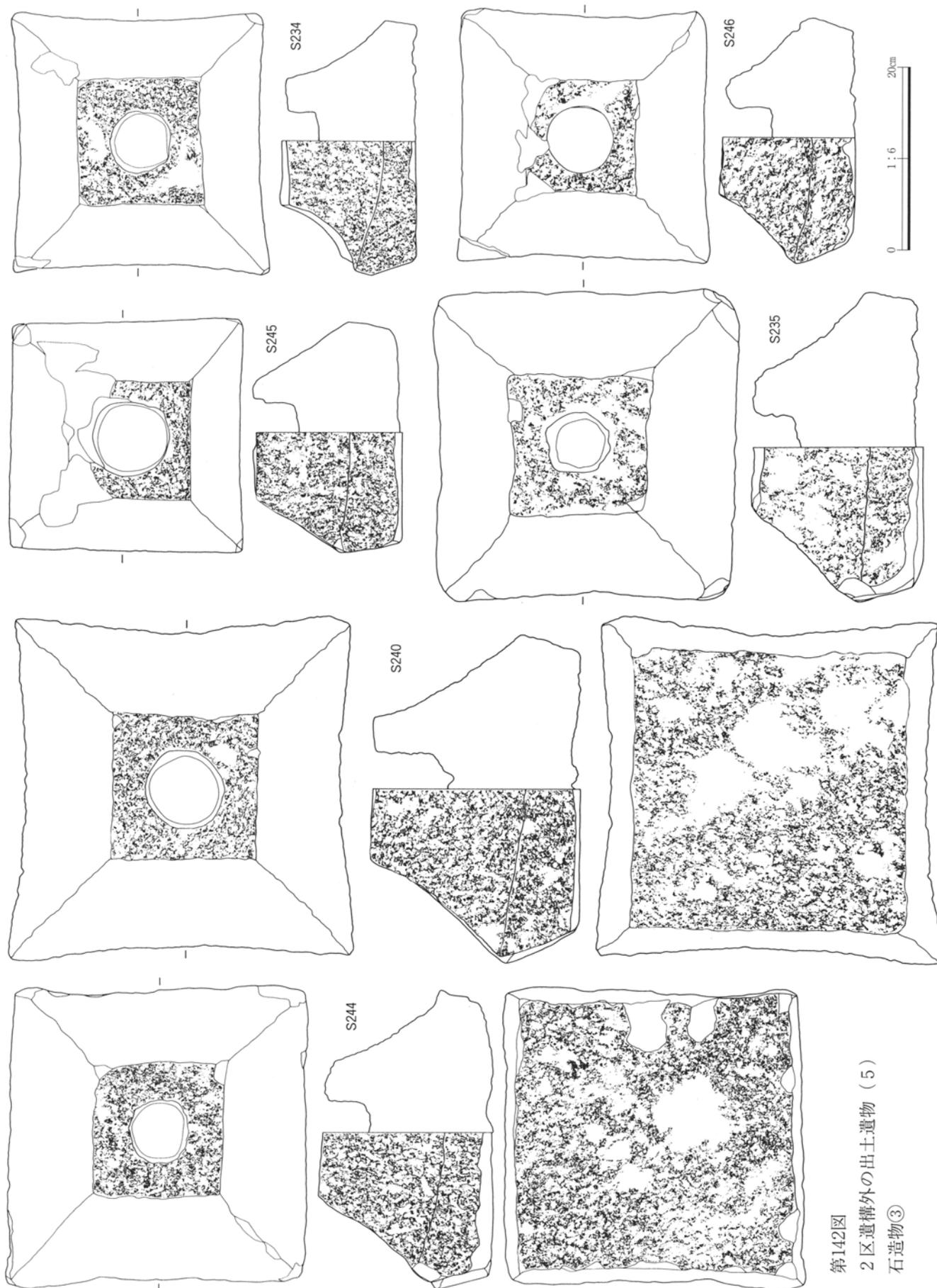
石鉢や粉挽き白の破片は、表面採集で取り上げられている。2区は墓域として利用されていたが、日常生活品や未製品が出土することの背景は他に遺構もなく、明確にできなかった。



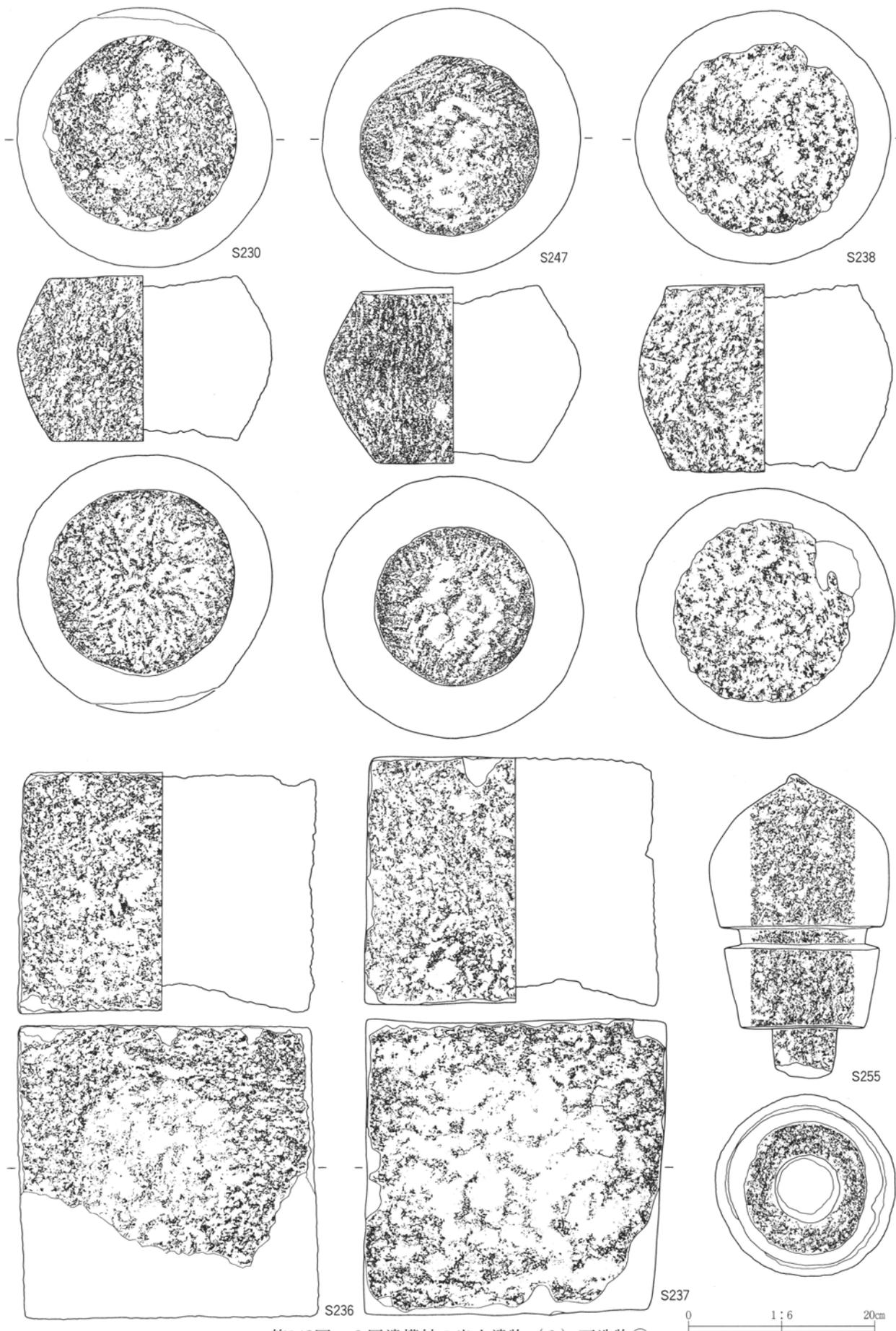
第139図 2区遺構外の出土遺物(2) 古銭



第140図 2区遺構外の出土遺物(3) 石造物①



第142図
2区遺構外の出土遺物(5)
石造物③



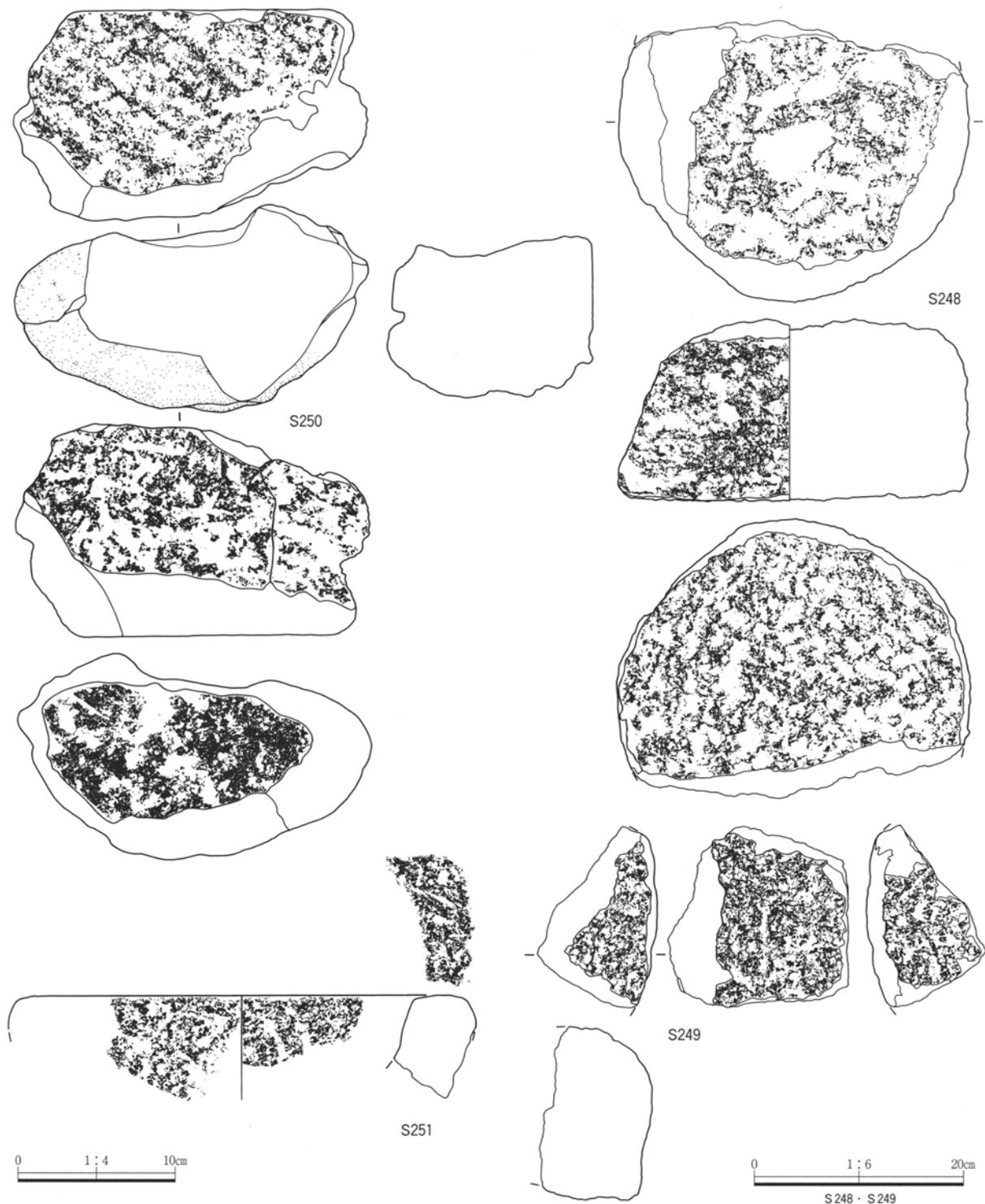
第143図 2区遺構外の出土遺物(6) 石造物④

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

第140図S254は舟形石塔に板碑形式の刻文を施した石塔で類例の少ないものである。S227は上面に段を形成した石塔の屋蓋である。S296・S297は宝塔のうちでも赤城塔と呼ばれる地域型の塔の相輪で、友華を陽刻あるいは線刻する。S239は他と同じ粗粒

輝石安山岩であるが、やや軟質である。穿たれた孔が小さいが類例からすれば、骨蔵器と考えられよう。

第141図の空風輪はすべて粗粒輝石安山岩で、仕上げの粗密はあるが、いずれも平滑に仕上げられている。S241は特に大型で、全体の仕上げも丁寧であ



第144図 2区遺構外の出土遺物(7)石製品①

る。第141・142図に掲げた火輪もすべて粗粒輝石安山岩である。大きさにばらつきがあり、縁の跳ね上がり方も一様でない。第143図の水輪・地輪も粗粒輝石安山岩製であるが、大きさはほぼ一様である。

第144図の石製品は、S250・S251が石鉢、S248・S249が粉挽き臼である。S248が北東隅で出土した他は、表面採集である。S250は自然石の一面を平に整形し、その反対の面を削り込んでいる。鉢状容器の未製品の可能性があるが詳細は不明である。S251は石鉢の口縁部破片である。使用痕跡等は見られない。

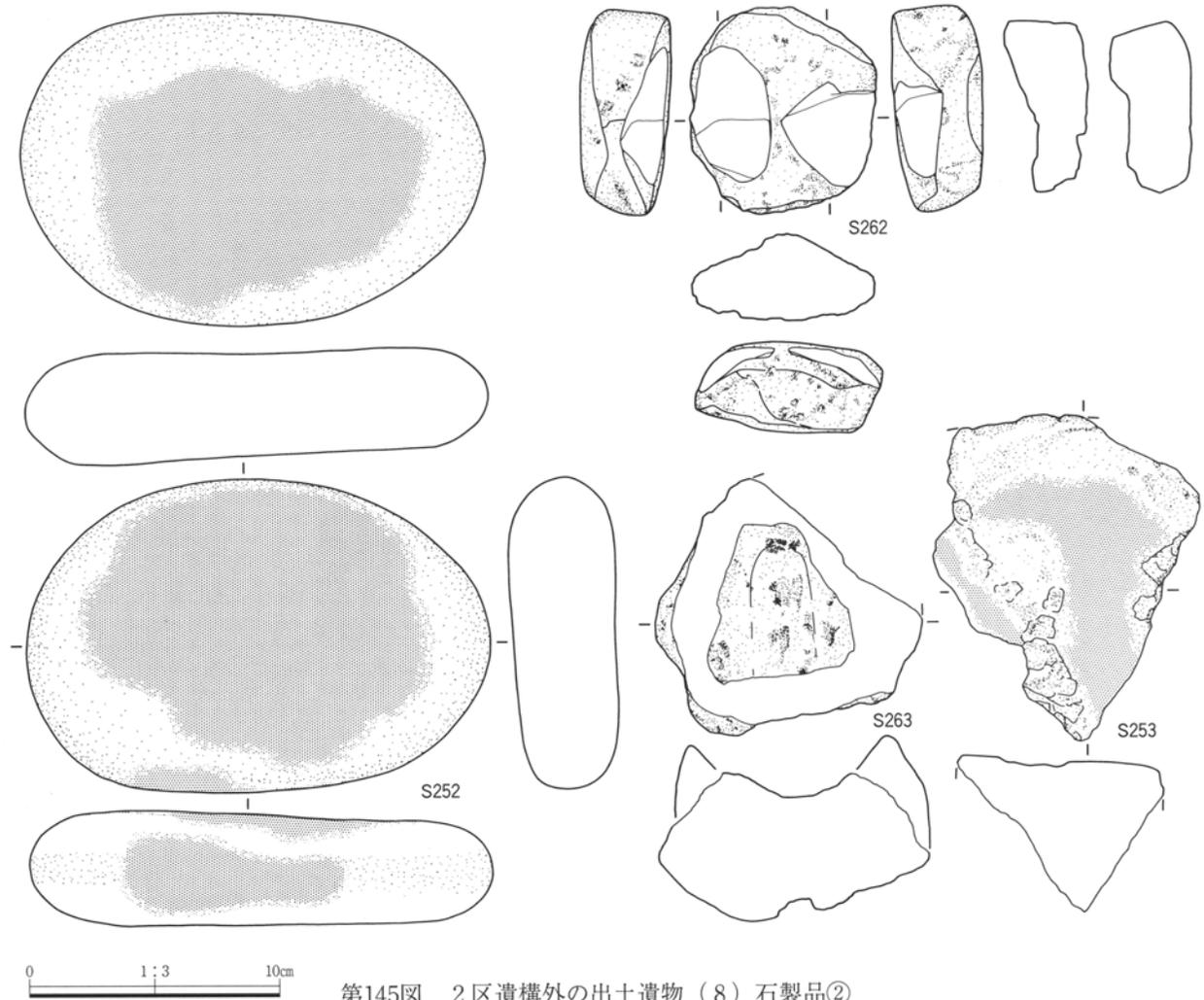
S249は粉挽き臼下臼の、S248は粉挽き臼の未製品である。いずれも粗粒輝石安山岩である。これらも台地縁辺に片づけられていた。

第145図は磨り石(S252)、軽石製砥石(S262)、軽石鉢(S263)、磨り面のある礫(S253)の破片である。

いずれも表面採集で取り上げられた。S252は扁平な礫の表裏面と右側縁に磨り面が残る。S262は円盤状に整形された軽石の表面に2カ所の鋭利な研磨面が残る。凹みは直線的である。

S263は軽石の周縁が欠損したものと見られる。この鉢状の軽石は荒砥宮田遺跡内で4個出土している。「軽石鉢」と呼んだが、底部は整形されていないので容器としての機能は無いと思われる。凹みの内面は回転によって磨られたとみられる痕跡が残り、全体の大きさは掌に入るほどであることから、手をもって対象物の凸面にかぶせるようにして磨ったものと推定している。

S253は平滑面を1つ残す石製品の破片である。その平滑面はよく磨かれている。原形や使用用途は不明である。



第145図 2区遺構外の出土遺物(8)石製品②

第4章 荒砥宮田遺跡の遺構と遺物

第145・146図に示した石製品は、日用雑器あるいはその未製品であり、墓域内でこれらの遺物が出土していることは説明が困難である。発掘区から除外された部分や削平された部分での遺構が不明であることから、2区台地全体の中近世における土地利用は墓域にとどまらない可能性もある。

(5) 4区の遺構と遺物

A. 土坑 (第146図 PL35)

4区東端に検出された浅間B軽石で埋まっている4号溝の北側の延長を確認するために設定した拡張区で土坑を1基検出した。出土遺物は無く、時期は特定できない。楕円形の土坑で、形態的には1区や2区で検出された楕円形の土坑と同様のものである。

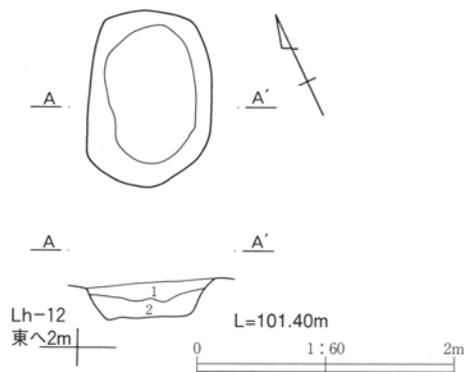
埋没土は浅間C軽石や榛名二ツ岳軽石と視認された軽石を含むことから、やや古い様相を示すが、純堆積層でないことから、時期を決める鍵層とはならない。

B. 溝 (第23・24・146図 PL 8・60)

遺物観察表P.283)

4区では6条の溝が検出された。4区東端の低地部にある4号溝は浅間B軽石で埋まった溝で、古代の項(P. 45)で報告した。その南に平行する1号溝は砂礫・黒褐色砂質土で埋まった溝で、混入と見ら

1号土坑



4区1号土坑 A-A'

1. 褐色土 浅間B軽石、黄色粘土粒を含む。しまりあり。
2. 黒褐色土 榛名二ツ岳軽石、浅間C軽石混じり。しまり、粘性あり。

れる土師器・須恵器破片3点の他、12~13世紀と見る常滑甕破片(第146図611)を出土した。本溝と浅間B軽石との関連は不明である。

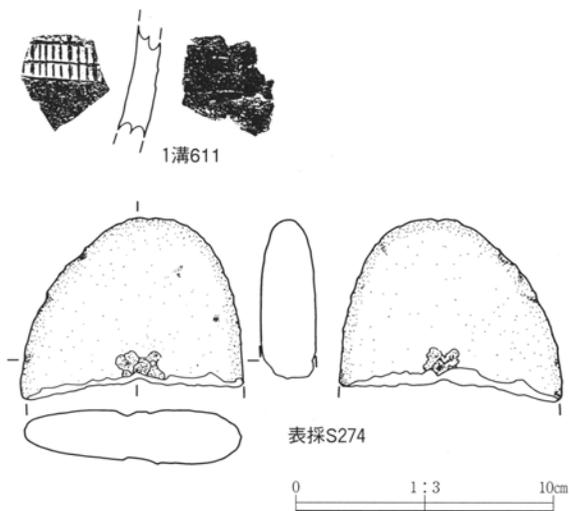
4区の南西低地部にある5号・6号溝は4区と2区を区切る低地の南縁にある溝である。土層断面の検討からは浅間B軽石層よりも新しい層位で掘り込まれていると見られるが、混入と見られる土師器・縄文土器破片が数点出土したのみで時期を決定することはできなかった。

台地部にある2号溝は灰褐色シルトと砂礫層で埋まった溝である。出土遺物はなく、時期は不明である。3号溝は台地部西端に掘られた溝で、浅間B軽石層より上位の灰褐色土(第24図3号溝セクション4層)の上から掘り込まれている。中世以降の溝と考えられる。出土遺物はない。

C. 遺構外の出土遺物

(第146図 PL60 遺物観察表P.294)

4区では出土遺物は少なかったが、表面採集の敲き石(S274)を図示することができた。薄い円盤状の粗粒輝石安山岩の表裏面中央に敲打痕が残る。1区や2区の中近世の遺構から出土した敲き石と同類のものである。



第146図 4区の遺構と表土遺物

第5章 荒砥前田遺跡の遺構と遺物

1. 中近世 (第153図)

(1) 概要

荒砥前田遺跡の中近世の遺構はいずれも浅間B軽石堆積以降の遺構で、1面で掘立柱建物5棟、溝3条、井戸2基、土坑3基が検出された。これらの遺構は本来軽石層あるいは洪水層上面で確認できる遺構であるが、軽石や砂礫層状面での確認が不明瞭で、遺構確認を確実にするため、水田調査実施後に記録をおこなった。発掘区東半部は、現代まで使われている溝が台地西端にある以外は、ほぼ平坦で遺構は検出されなかった。

掘立柱建物は中世のものと近世のものが混在していると考えられる。また掘立柱建物は荒砥宮田遺跡1区にも29棟が検出されており、関連が注目される。

溝は掘立柱建物群の東側に3条が一部重複しながら発掘区を斜行していた。6号溝は浅間B軽石が多く含まれた黒褐色土で埋没土が覆われているが、埋没土にも軽石を多量に含んでおり、軽石降下後の遺構である。一方、7A号・7B号溝は浅間B軽石が多く含まれた黒褐色土層を掘り込んでいることから6号溝より新しい。7A号溝の走向は1号・2号掘立柱建物の柱筋とほぼ一致しており、同時期の可能性も考えられる。

井戸は埋没土の共通性から掘立柱建物に伴うと判断できるが、どの建物にどの井戸が付随するのかわかるとは確定できない。土坑は円形や長方形のものがあるが、いずれも浅く、出土遺物も無い。機能を確定するにはいたらなかった。

(2) 掘立柱建物

1号掘立柱建物跡 (第147・153図 PL61)

位置 Q・R-1~3G 前田C群

主軸方位 N-24°-E

重複 東底部分が一部3号掘立柱建物と重複する。

埋没土の観察による新旧関係の確定はできなかった。

形態 身舎部分は2×3間(4.14~4.19m×6.4~6.46m・14尺×21尺)の総柱構造で南北棟。柱間は桁側2.1~2.2m、梁側2~2.1m。東西南側に1.1m程の庇が付き、北側は1.1m程の庇と孫庇が付き、4面庇となる。全体として6.34~6.5m×9.69~9.78mの規模である。面積は63.51㎡。柱間は桁側・梁側とも約2.1m(7尺)で均一である。柱筋の通りも良く規格性が非常に高い。

柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形・楕円形・円形のもの混在し、長径38~62cm、短径30~52cm、深さ11~33.5cmである。庇部分の柱穴は長径25~53cm、短径21~46cm、深さ9.5~37cmで数値にばらつきがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

2号掘立柱建物跡 (第148・153図 PL61)

位置 L~O-5~7G 前田C群

主軸方位 N-65°-W

重複 無し

形態 身舎部分は2×6間(4.14~4.22m×14.4m・14尺×42尺)の総柱構造で東西棟。柱間は桁側で東西の両端1間部分を除いて、桁側2.04~2.21m、梁側1.9~2.2m。桁側・梁側ともに約2.1m(7尺)で均一である。両端の柱間は2.98~3.06mで、ともに約3mで幅約1mの庇部分を取り込んだ数値である。柱配置から見て東西両辺は庇とは言えないが、庇を意識していることは間違いなく、機能的には同じだろう。南側には1.1m程離れて庇が付く。北側の庇は幅約1mで南側より若干狭い。更に北側には東端1間部分を除いて、約1.4m離れて孫庇が付くが、P41~P47の柱配置に乱れがある。更に約2.2m離れて北側に張り出しが付くが、柱配置は庇の配置に近い。全体として14.4~14.48m×10.2mの規模である。面積は119.32㎡と本遺跡最大で、特別な

建物である。柱筋の通りも良く規格性も非常に高い。

柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は隅丸方形・楕円形・円形のものが混在し、長径28~54cm、短径25~48cm、深さ7.5~55cmである。庇部分の柱穴は長径25~68cm、短径20~52cm、深さ9~59cmで数値にばらつきがある。

内部施設 無し

出土遺物 無し

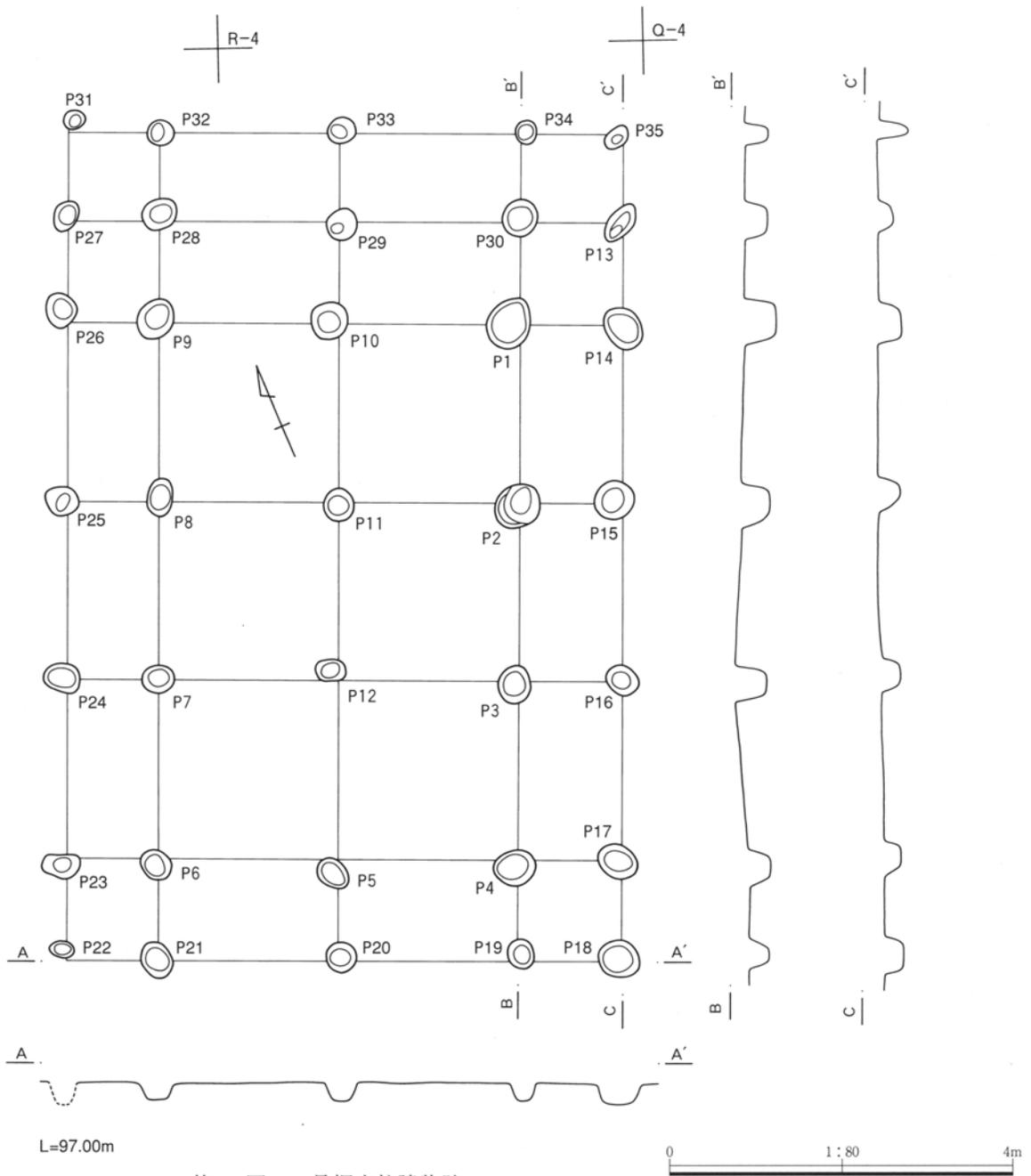
3号掘立柱建物跡 (第149・153図 PL61)

位置 P・Q-2~5 G 前田C'群

主軸方位 N-23°-E

重複 無し

形態 3×7間(5.0~5.24m×14.04~14.12m・17尺×47尺)の南北棟。北側・南側に約1m離れて庇が付き、北側には更に変則でL字形の張り出しが付く。全体として5.0~5.18m×18.28mの規模である。



第147図 1号掘立柱建物跡

1. 中近世

面積は88.12m²。柱間は桁側1.84~2.36m、梁側0.98~2.1m。内部柱の内、梁方向のものは柱筋をそろえるが、桁側については西辺から約1m入れるものや北側から約2mのもの、逆に東辺から約2mに入るものと、変化に富んでいる。基本的には間仕切りとなる柱となり、全体に居室空間を形成している。柱の省略が無く柱数は多いが整然とした柱配置である。

柱痕跡は確認できなかった。身舎部分の柱穴は円形と楕円形のもの混在し、長径24~51cm、短径24~47cm、深さ13~47cmである。内部の柱穴は長径28~54cm、短径22~48cm、深さ19~65.5cmである。庇部分の柱穴は長径23~64cm、短径20~47cm、深さ

11~58cmである。張り出し部の柱穴は長径12~28cm、短径10~25cm、深さ8~21.5cmで、張り出し部の柱穴は細い。

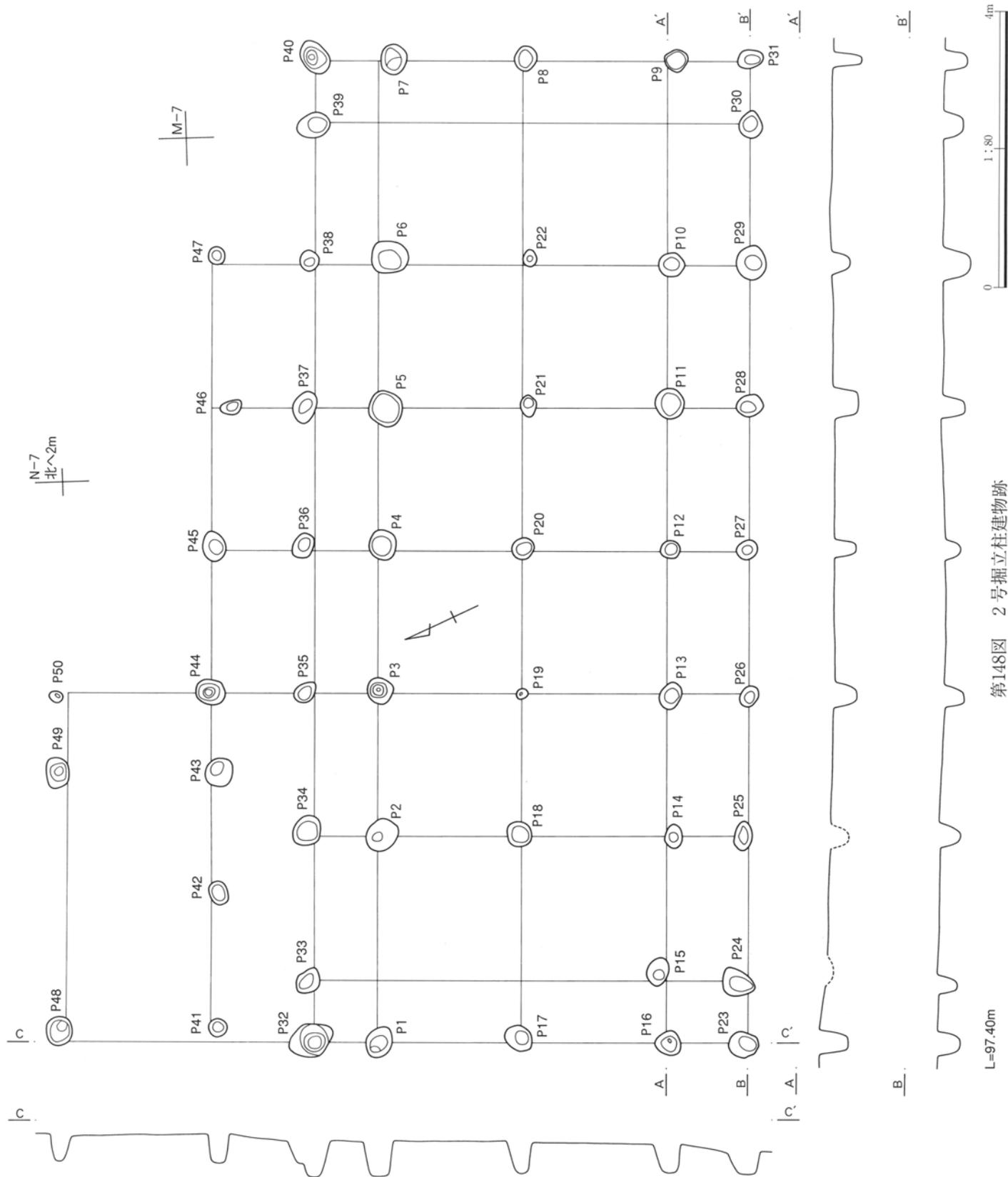
内部施設 無し 出土遺物 無し

前田1号掘立柱建物跡 南北棟

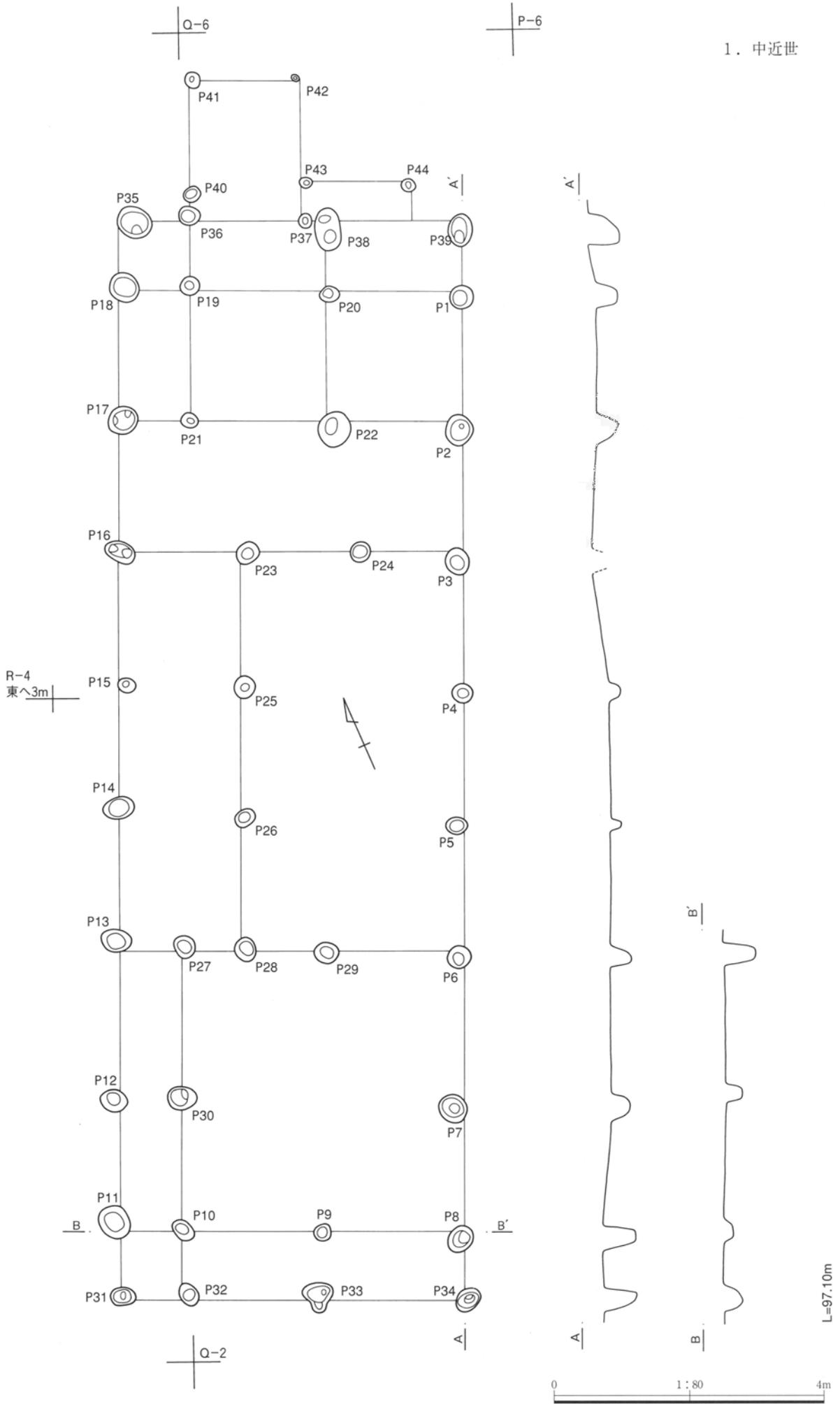
建物全体規模	(2+2)×(3+3)間		面積	63.51 m ²		
主軸方向	N-24°-E		庇	南・西・北		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
東辺 6.4	P 1	62	50	33.5	楕円形	2.1
	P 2	58	52	32.5	円形	2.1
	P 3	46	40	36	円形	2.12
南辺 4.19	P 4	50	42	25	楕円形	2.1
	P 5	41	32	11	楕円形	2.06
西辺 6.46	P 6	40	32	25	楕円形	2.2
	P 7	38	34	38	円形	2.18
	P 8	45	30	26	楕円形	2.2
北辺 4.14	P 9	50	42	26.5	楕円形	2
	P 10	46	45	32	円形	2.14
	P 11	40	36	22.5	円形	2
東庇 9.69 (北孫庇まで)	P 12	36	26	25	隅丸方形	P5へ2.4
	P 13	52	28	26	楕円形	1.16
	P 14	53	42	25.5	楕円形	2.02
	P 15	48	46	27	円形	2.12
	P 16	38	32	19	楕円形	2.12
	P 17	49	38	19	楕円形	1.16
	南庇 6.4	P 18	50	46	22	円形
P 19		36	32	20	円形	2.14
P 20		37	36	20	円形	2.14
P 21		45	36	17	楕円形	1.12
西庇 9.78 (北孫庇まで)	P 22	29	21	26	楕円形	1
	P 23	46	28	31	楕円形	2.2
	P 24	46	34	31	隅丸方形	2.05
	P 25	42	36	24	楕円形	2.3
	P 26	40	35	29	楕円形	1.08
	P 27	38	28	22	楕円形	1.12
北庇 6.50	P 28	43	37	21.5	楕円形	2.1
	P 29	38	35	39.5	円形	1.16
	P 30	44	40	26.5	円形	P13へ1.1
	P 31	25	24	9.5	円形	0.98
北孫庇 6.34	P 32	32	31	25	円形	2.12
	P 33	34	30	21	円形	2.18
	P 34	29	24	27	円形	1.08
	P 35	32	23	37	楕円形	P13へ1.08

前田2号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	(2+4)×(6+2)間		面積	119.32 m ²			
主軸方向	N-65°-W		庇	南・北			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
北辺 14.40	P 1	48	37	51	楕円形	3.06	
	P 2	54	48	55	楕円形	2.12	
	P 3	40	38	47	円形	2.14	
	P 4	46	40	36.5	円形	2.08	
	P 5	49	48	26	隅丸方形	2.21	
	P 6	52	47	38.5	隅丸方形	2.98	
東辺 4.14	P 7	46	40	45	楕円形	1.9	
	P 8	38	32	30.5	楕円形	2.2	
南辺 14.40	P 9	35	33	39	隅丸方形	3.04	
	P 10	38	35	26.5	円形	2.06	
	P 11	44	42	33	円形	2.12	
	P 12	28	25	28.5	円形	2.16	
	P 13	42	32	30	楕円形	2.1	
	P 14	36	28	24.5	楕円形	2.04	
	P 15	42	35	7.5	楕円形	1	
	西辺 4.22	P 16	39	35	41	不整形円形	2.16
		P 17	42	37	45.5	楕円形	P1へ2.08
	南庇 14.48	P 18	40	38	41	円形	2.08
P 19		19	16	10.5	円形	2.13	
P 20		34	32	16	円形	2.15	
P 21		33	24	13	楕円形	2.1	
P 22		25	22	17	楕円形	P8へ2.94	
P 23		44	38	31	円形	0.9	
P 24		50	38	25.5	楕円形	2.18	
P 25		42	27	30	楕円形	2.04	
P 26		32	28	26	楕円形	2.16	
P 27		30	28	20.5	円形	2.1	
P 28		40	32	33.5	楕円形	2.12	
P 29		50	43	39	楕円形	2.05	
P 30		42	35	27.5	楕円形	0.96	
P 31		39	26	33	楕円形	P9へ1.1	
北庇 14.5	P 32	68	52	53	楕円形	0.98	
	P 33	44	32	41.5	楕円形	2.18	
	P 34	48	42	41	楕円形	2.06	
	P 35	38	27	46	楕円形	2.2	
	P 36	38	30	37.5	隅丸方形	2.08	
	P 37	48	34	22.5	楕円形	2.08	
	P 38	32	28	44.5	円形	2.02	
	P 39	48	38	59	楕円形	1	
	P 40	52	38	38	楕円形	P7へ1.2	
	北孫庇11.35	P 41	28	27	44	円形	1.98
P 42		34	28	23	楕円形	1.86	
P 43		44	42	35	円形	1.18	
P 44		42	36	25.5	隅丸方形	2.14	
P 45		46	36	43.5	楕円形	2.1	
P 46		34	20	9	楕円形	2.24	
P 47		25	23	14.5	円形	P38へ1.36	
北張出 4.85	P 48	42	40	38.5	隅丸方形	3.75	
	P 49	46	34	40.5	隅丸方形	1.1	
	P 50	20	17	10.5	円形	P44へ2.22	



第148図 2号掘立柱建物跡



第149图 3号掘立柱建物跡

第5章 荒砥前田遺跡の遺構と遺物

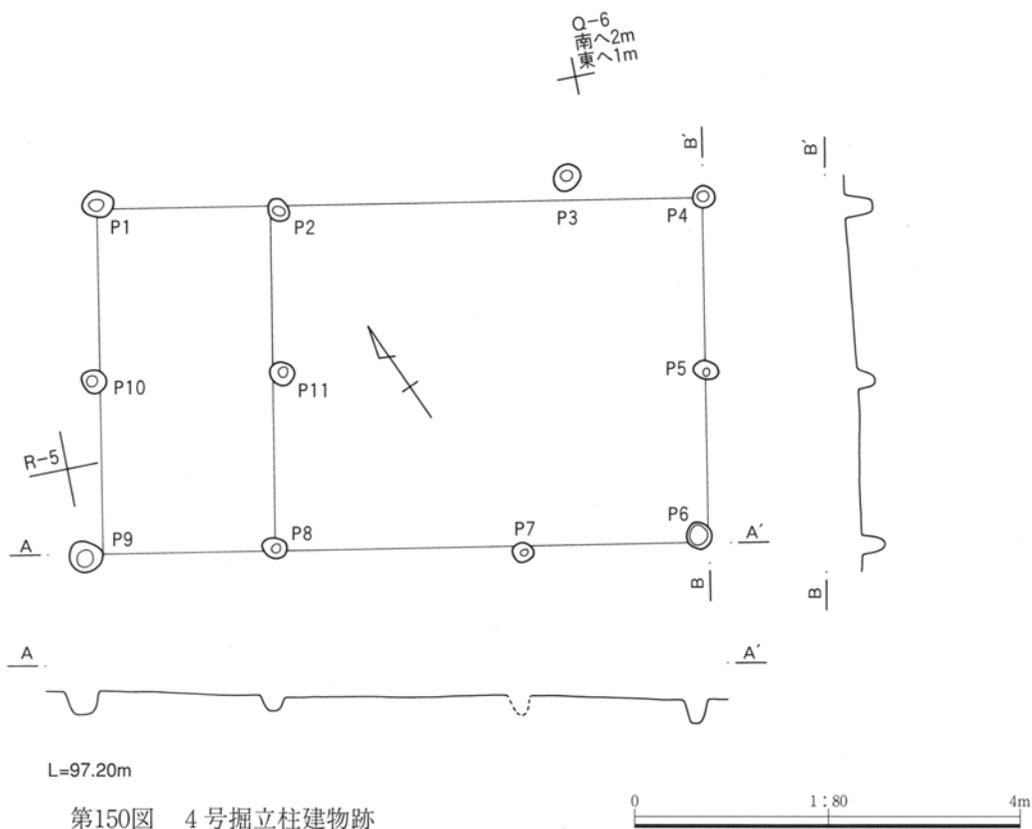
前田3号掘立柱建物跡 南北棟

建物全体規模	3×(7+2)間			面積	88.12 m ²		
主軸方向	N-23° -E			庇	南・北		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
東辺 14.12	P 1	38	36	28.5	円形	1.96	
	P 2	47	44	31	楕円形	2.04	
	P 3	39	37	?	円形	1.94	
	P 4	31	29	16.5	円形	1.98	
	P 5	34	26	14.5	楕円形	2	
	P 6	36	32	28.5	円形	2.22	
	P 7	44	42	26	円形	1.96	
南辺 5.24	P 8	48	38	47	楕円形	2.1	
	P 9	28	25	23	円形	2.1	
	P 10	37	28	13	楕円形	1	
西辺 14.04	P 11	51	47	29	円形	1.84	
	P 12	40	34	32	楕円形	2.36	
	P 13	46	34	40.5	楕円形	2	
	P 14	48	34	31	楕円形	1.86	
	P 15	24	28	25.5	楕円形	2	
	P 16	48	30	27	楕円形	1.95	
	P 17	48	40	25.5	楕円形	2	
	北辺 5.0	P 18	46	43	22	円形	0.98
		P 19	29	28	40	円形	2.08
	P 20	31	24	38.5	楕円形	P1へ1.94	
	P 21	28	22	22.5	楕円形	2.18	
P 22	54	48	52	楕円形	P2へ1.9		
P 23	36	30	29.5	円形	1.68		
P 24	32	30	19	円形	P3へ1.48		
P 25	34	32	30.5	円形	1.98		
P 26	32	26	35	楕円形	P28へ2		
P 27	35	31	31	円形	0.92		
P 28	38	32	27	円形	1.2		

	P 29	38	32	65.5	円形	P6へ1.98
	P 30	44	34	29	楕円形	P10へ2
南庇 5.18	P 31	38	28	55	楕円形	1
	P 32	38	29	11	楕円形	1.9
	P 33	47	44	40	不整形円形	2.26
	P 34	40	30	48	楕円形	P 8へ0.9
北庇 4.86	P 35	50	47	58	円形	0.8
	P 36	31	28	14.5	円形	1.7
	P 37	23	20	20	円形	0.26
	P 38	64	38	36.5	楕円形	1.98
	P 39	48	34	47	楕円形	P 1へ1
北張出 2.05	P 40	28	22	21.5	楕円形	1.72
	P 41	26	25	17	円形	1.54
	P 42	12	10	8	円形	1.56
	P 43	20	16	8	円形	1.5
	P 44	20	22	9	円形	-

前田4号掘立柱建物跡 東西棟

建物全体規模	2×3間			面積	22.74 m ²	
主軸方向	N-57° -W			庇	無し	
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
北辺 6.32	P 1	32	28	20.5	楕円形	1.9
	P 2	26	20	20	楕円形	3.01
	P 3	29	26	29	円形	1.44
東辺 3.56	P 4	24	23	28	円形	1.84
	P 5	27	19	17.5	楕円形	1.72
南辺 6.40	P 6	30	26	25.5	円形	1.82
	P 7	22	20	20.5	円形	2.58
	P 8	26	22	14.5	円形	2
西辺 3.70	P 9	34	32	22.5	円形	1.86
	P 10	26	24	15.5	円形	P1へ1.86
	P 11	28	24	15	円形	P8へ1.86



4号掘立柱建物跡 (第150・153図)

位置 P・Q-4・5G 前田C"群

主軸方位 N-57°-W

重複 無し

形態 2×3間(3.56~3.70m×6.32~6.40m・12尺×21尺)、面積22.74m²の東西棟。柱間は桁側1.44~3.01m、梁側1.72~1.86m。四角の柱穴は南西角のP9がやや外側に外れるほかは、柱軸にのる。北辺は柱間が一定でなく、特にP3はP4との間が極端に短くなっている。東辺はほぼ等間隔で柱軸にのる。柱軸にのるのが柱間が一定でない。P8は北辺P2に対応する位置にあるが、P7はP3と対応しない。西辺はP9がやや外側に外れるが、中央のP10は等間隔の位置にある。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は円形および楕円形で、長径22~34cm、短径19~32cm、深さ14.5~29cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し

5号掘立柱建物跡 (第151・153図)

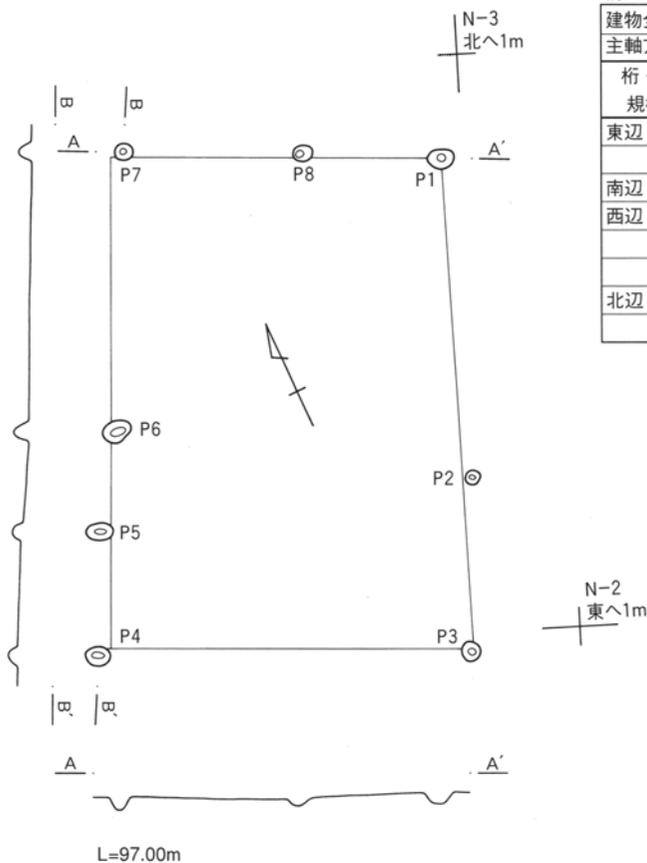
位置 N-2G 前田C"群

主軸方位 N-22°-E

重複 無し

形態 2×3間(3.36~3.95m×5.12~5.22m・11.5~13尺×17尺)、面積18.62m²の南北棟。柱間は桁側1.05~3.32m、梁側1.50~3.95m。東辺と西辺の北角から2間めの柱穴がないのは、故意の省略も考慮される。平面形が台形で、柱穴の配置も不規則で、あまり程度のよい建物ではない。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は楕円形及び円形で、長径17~30cm、短径14~22cm、深さ5~25cmである。

内部施設 無し 出土遺物 無し



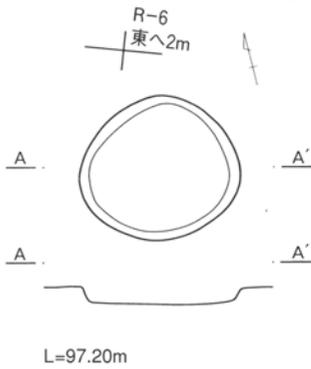
第151図 5号掘立柱建物跡

前田5号掘立柱建物跡 南北棟

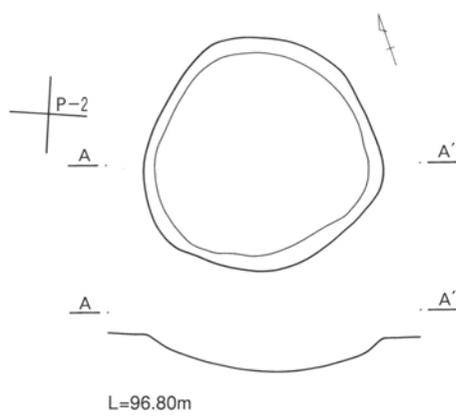
建物全体規模	2×3間		面積	18.62 m ²		
主軸方向	N-22°-E		庇	無し		
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺 5.12	P 1	28	21	12	楕円形	3.32
	P 2	17	14	12	円形	1.8
南辺 3.95	P 3	22	20	25	円形	3.95
西辺 5.22	P 4	28	20	10	楕円形	1.27
	P 5	29	20	10	楕円形	1.05
	P 6	30	22	16.5	楕円形	2.9
北辺 3.36	P 7	20	18	12	円形	1.87
	P 8	21	17	5	円形	P1へ1.5

0 1:80 4m

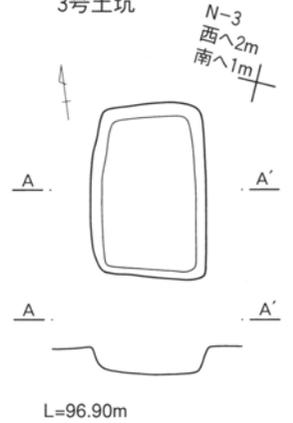
1号土坑



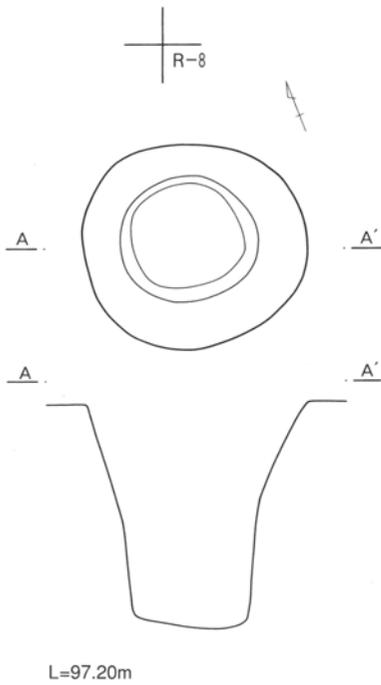
2号土坑



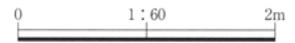
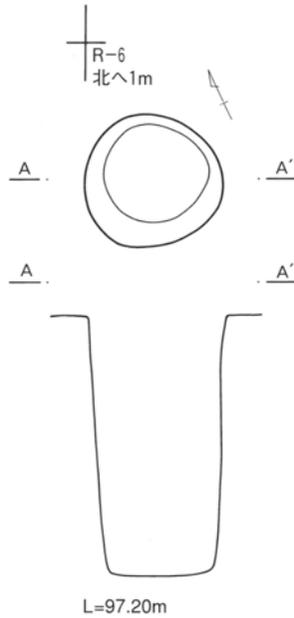
3号土坑



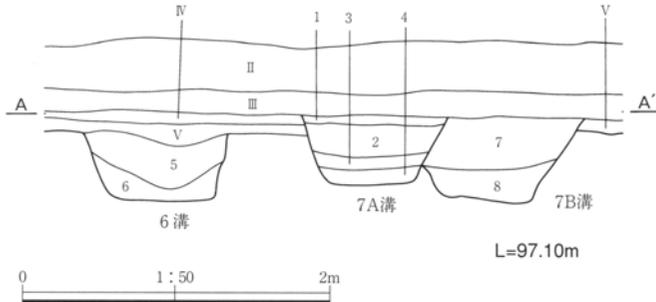
1号井戸



2号井戸



6・7A・7B号溝



6・7A・7B号溝 A-A'

- II. 灰褐色土層 現水田面の更に下面の水田耕作土。ややシルト質であるが、小砂礫を少量含む。下面は鉄分の沈着あり。
- III. 灰褐色土層 ほぼIIに類するが、ややしまりが少ない。水田耕作土。
- IV. 褐色土層 鉄分の沈着層。III層に類する。
- V. 黒褐色土層 かなり多くの浅間B軽石を含み、やや粘性をもつ。あまりしまりは少ない。水田耕作土と考えられる。

7A号溝

- 1. 褐色土層 浅間B軽石及び砂礫をかなり多く含んだ層。しまりのある土。(可能性としてV層上面よりの切り込みということも考えられる。)
- 2. 黒褐色土層 多量の小砂礫を含んだ層。しまりのない土。
- 3. 黒色土層 2層よりやや黒味の多い土で、腐植土がより多く含まれる。砂礫がかなり含まれる。
- 4. 砂礫層 XII層が攪乱された感じの層。

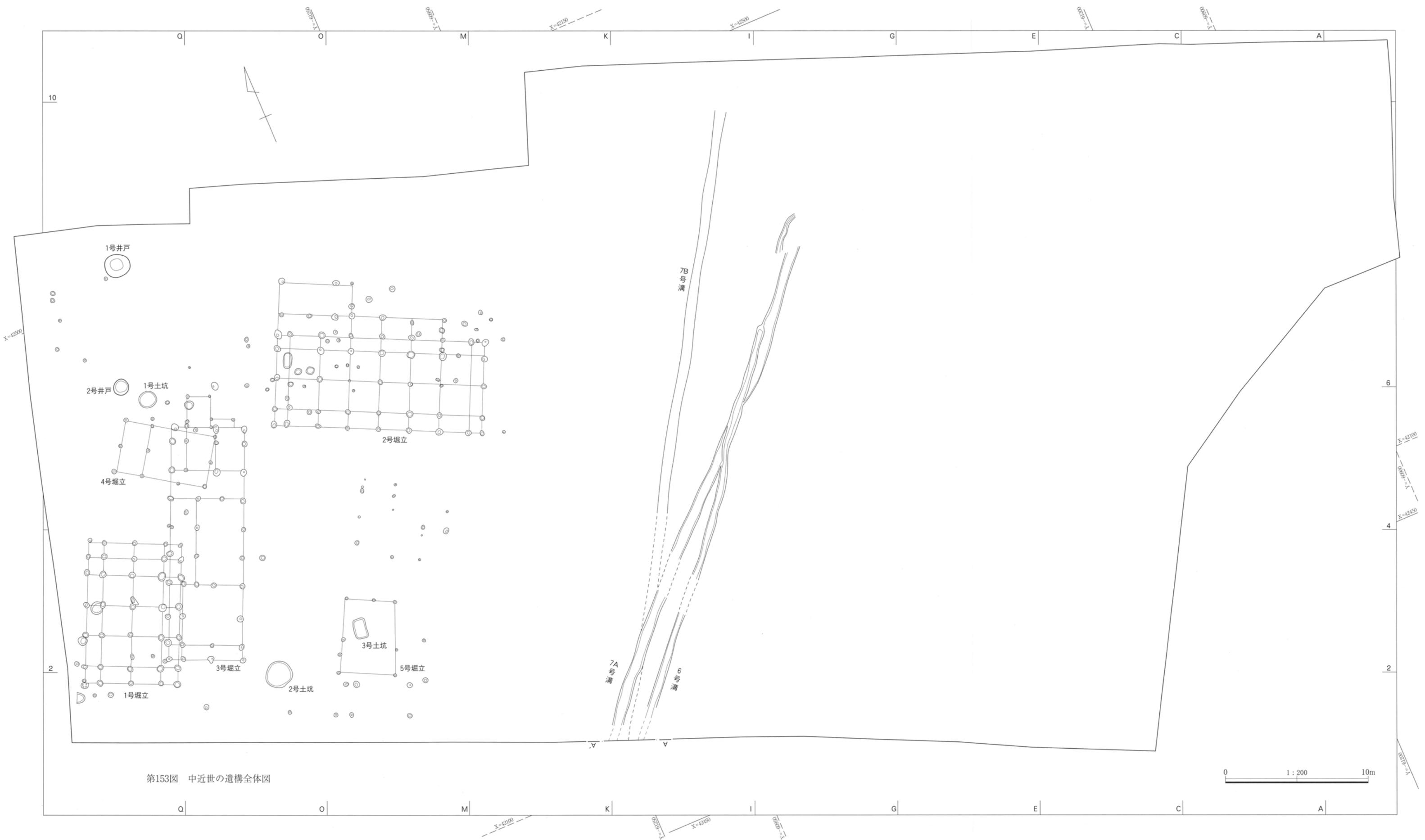
6号溝

- 5. 黒褐色土層 多量の浅間B軽石を含む。底部に黒灰色土がレンズ状堆積を示す。
- 6. 砂層 ラミナ堆積を示すが、黒灰色土を部分的にはさむ。

7B号溝

- 7. 黒褐色土層 III層に類する土で、かなり多量の砂礫を含み、軽石も少量含む。ややしまりのある土。
- 8. 黒色土層 多量の小砂礫を含んだ、しまりのない土。

第152図 中近世の土坑・井戸・溝



第153図 中近世の遺構全体図

0 1 : 200 10m

(3) 土坑 (第152・153図 PL62)

1号・2号土坑は円形、3号土坑は方形である。いずれも確認面から浅く、掘立柱建物群との関係も確定できなかった。出土遺物はほとんどない。

(4) 井戸 (第152・153図 PL62 遺物観察表P.299)

1号・2号の2基の井戸が検出された。平面形は円形で、1号は上半部がやや広がる。埋没土は掘立柱建物と共通することから、同様の時期の遺構と考えられる。1号井戸からは混入と考えられる土師器1点が出土したのみである。2号井戸からは土師器甕底部(第152図17)の他、土師器細片が1点出土した。図示した土師器甕も混入の可能性が高い。

(5) 溝 (第152・153図 PL62)

6号・7A号・7B号溝の3条が検出された。これらの溝は発掘区のほぼ中央にやや走向を違え、一部重複して群在している。

7A号溝は3条のうち最も新しい溝で7B号溝を切っている。ほぼ直線的な走向で、規模は幅0.6～0.81m、深さ0.54m、調査長37.2mである。調査では上場のみ記録にとどまった。埋没土は浅間B軽石を多く含む黒褐色土で、最下層には砂礫層が堆積していた。出土遺物はない。7A号溝の走向は1号・2号掘立柱建物の柱筋とほぼ一致しており、同時期の可能性も考えられる。出土遺物はない。

6号溝は7A号溝とは走向を異にして、やや蛇行する。規模は幅0.36～0.62m、深さ0.45m、調査長30.6mである。浅間B軽石が多く含まれた黒褐色土で埋没土が覆われており、さらに埋没土中に浅間B軽石を多量に含んでいることから軽石降下以降の溝である。6号溝も最下層に砂層を堆積している。出土遺物はない。

7B号溝は浅間B軽石が多く含まれた黒褐色土層を掘り込んでいるが、7A号溝に切られている。規模は幅0.6～0.8m、深さ0.43m、調査長45.1mである。他の2条の溝からさらに北東方向に傾く走向である。出土遺物はない。

2. 古代

(1) 概要

荒砥前田遺跡で検出された古代の遺構は、3面の遺構確認面に亘っていた。最も上面は浅間B軽石降下前後の遺構面である。浅間B軽石層が残る発掘区の東部1/3程度の範囲では軽石層直下で水田と溝を検出した。また東台地斜面上部では軽石が残っていなかったために軽石降下との新旧関係は不明な溝も検出された。溝の時期は不明であるが、軽石降下よりは新しいと推定される。浅間B軽石直下の水田面の残存状態は不良で、アゼの一部が確認できたにとどまった。

次の面は浅間B軽石より古く、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)より新しい畝間の溝群を検出した。これらは浅間B軽石層の下位にある黒色土(X層)で埋まっている。下位の水田が洪水層で埋まった後、その復旧としてつくられた畝の痕跡と考えられる。

さらに下面で、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)直下で水田面を検出した。発掘区のほぼ全域にわたって傾斜に沿った傾斜地水田が検出されている。なお、東端の5号溝は水田を埋めたものと同じ洪水層で埋まっていない。土層断面からは浅間B軽石より古く、洪水層(XI・XII層)より新しい溝と観察された。したがって、この溝は厳密には水田に伴わないが、水田面東端では、溝に添うように畦がつくられていることから、5号溝と同様な位置に水田面に伴う溝があったことは確実である。このような状況から、これらの溝は今回の調査では水田面とともに作図した。

これらの3面の遺構が同一地点に重層して検出されたことは、各面の遺構が具体的にわかると同時に、災害復旧にあたった人々の所作が有機的に判明する点で重要である。同一の遺構面は、北側で調査した荒砥宮田遺跡や、西側で上武道路建設に伴って調査された荒砥前田Ⅱ遺跡でも検出されており、空間的な分析も今後可能になるだろう。

(2) 浅間B軽石下水田

(第154図 PL63 遺物観察表P.299)

表土下0.7mに堆積した厚さ10~15cmの浅間B軽石層直下で、2条の溝とともにアゼの一部を検出した。アゼはG・H-4・5グリッドで等高線に沿ったやや長い東西アゼ2条と、それにほぼ直行する短いアゼ1条が検出された。アゼの幅は50~72cm、高さは2~8cmで残存状況は不良である。これらのアゼの残存状況から、水田面は北東から南西に向かう緩傾斜面に、長軸が等高線に沿った細長い水田面が棚田状につくられていたと推定される。

溝は発掘区東側にある台地西縁を廻るような位置で検出された。溝の埋没土には2種類があり、掘削・形成時期が2期以上あることを示している。1号溝と2号溝は浅間B軽石で埋没している。土層断面A-A' (第154図)、C-C' (第157図)では厚さ10cmほどの軽石層が落ち込んでいた。1号溝は幅0.73~2.92m、深さ0.44m、調査長46.9m、2号溝は幅0.45~2.42m、深さ0.29m、調査長37.3mである。2号溝の北端は三つ又に分かれているが、最も南側の土層断面にかかる流路で計測した。3号溝は1号溝より新しい溝で、ラミナ堆積の砂層とローム層の互層で埋まっていた。幅0.49~0.93m、深さ0.1m、調査長8.12mである。4号溝は浅間B軽石層との関係は不明であるが、ラミナ堆積の砂層と黒褐色土の互層で埋まっていた。幅0.53~1.33m、深さ0.14m、調査長11.4mである。

この遺構面での出土遺物は、遺憾ながら出土位置が不明なものが多い。特に溝出土の遺物は調査時の溝番号の記録が十分でなく、帰属遺構が明確でない。第154図に示した須恵器坏底部(18)は浅間B軽石直下水田の耕作土から出土した。他に縄文土器1点、土師器細片73片、須恵器1点、混入と考えられる陶器破片1点が出土している。

溝の出土遺物は縄文土器2点、土師器6点、須恵器1点のほか、第154図に示した土師器坏(2)、軟質陶器鉢破片(1)、陶器常滑甕頸部破片(3)、同底部破片(4)が混在していた。前述した中近世の遺構

との関連も考慮すべき時期の遺物であるが、直接の関係はつかめなかったため、ここで報告した。

浅間B軽石の堆積が確認できたのは発掘区東側の1100㎡に限定される。水田面の検出も一部にとどまったが、本来は発掘区全体に浅間B軽石直下水田が展開していたものと推定される。後世の耕作によって攪乱を受けたものと考えたい。また検出された溝はいずれも浅く蛇行が著しいことから、水田域の基幹水路の可能性は少ないと考えられる。発掘区の東側には現在まで使われている水路があり、浅間B軽石降下時点では発掘区外の現水路に近い位置まで基幹水路は移動していたのであろう。

(3) 洪水層上畠

(第155図 PL64 遺物観察表P.299)

H~L-7~10グリッドで畠の畝間溝の下半部と考えられる溝群を検出した。南北方向の溝が14条、東西方向の溝が3条である。またI-7~9グリッドでは、幅0.8~1.3m、長さ9.8mにわたって鋤によると推定される痕跡が検出された。耕作痕跡と思われる。

これらの溝群や耕作痕跡は土層断面A-A' (第155図)によれば、浅間B軽石層との直接の関係は不明であるが、浅間B軽石層より下層の黒色土層(X層)に覆われており、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層(XI・XII層)を切っている。また下層の洪水層下水田の耕作土(XIII層)上面まで達していた。溝の埋没土は砂質の灰褐色土である。以上の土層観察により、この畠は洪水層の上位より耕作されていると判断された。

畠の幅は、溝の心芯間で0.8~1.0mのところと、2.0~2.3m前後のところがある。畠幅の違いは、作物・耕作単位・耕作時期などの違い、あるいは作業途中の状況などを示す可能性がある。しかし本遺跡では盛り上げられた畠の上半部はX層堆積以前に削平されたものと見られ、耕作面を確認できなかったことから詳細な結論を得るには至らなかった。

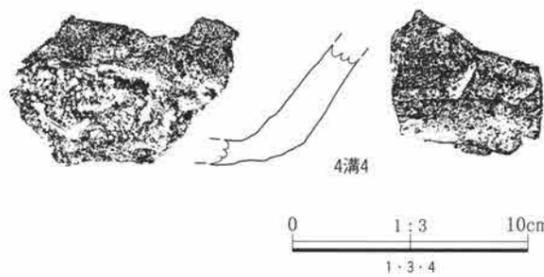
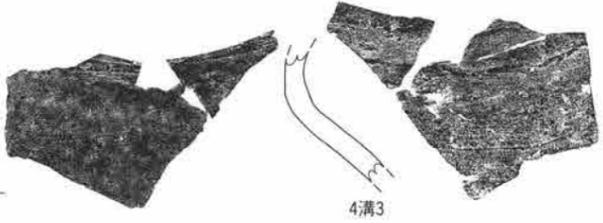
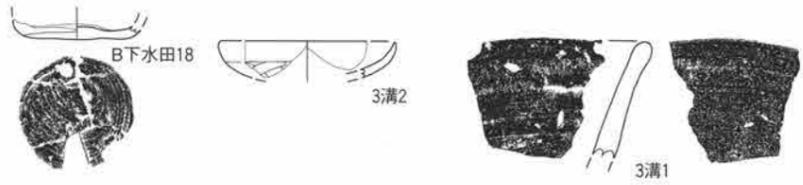
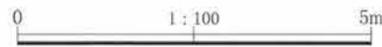
関連する出土遺物は少なく、第155図に示した須



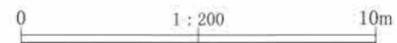
L=97.80m

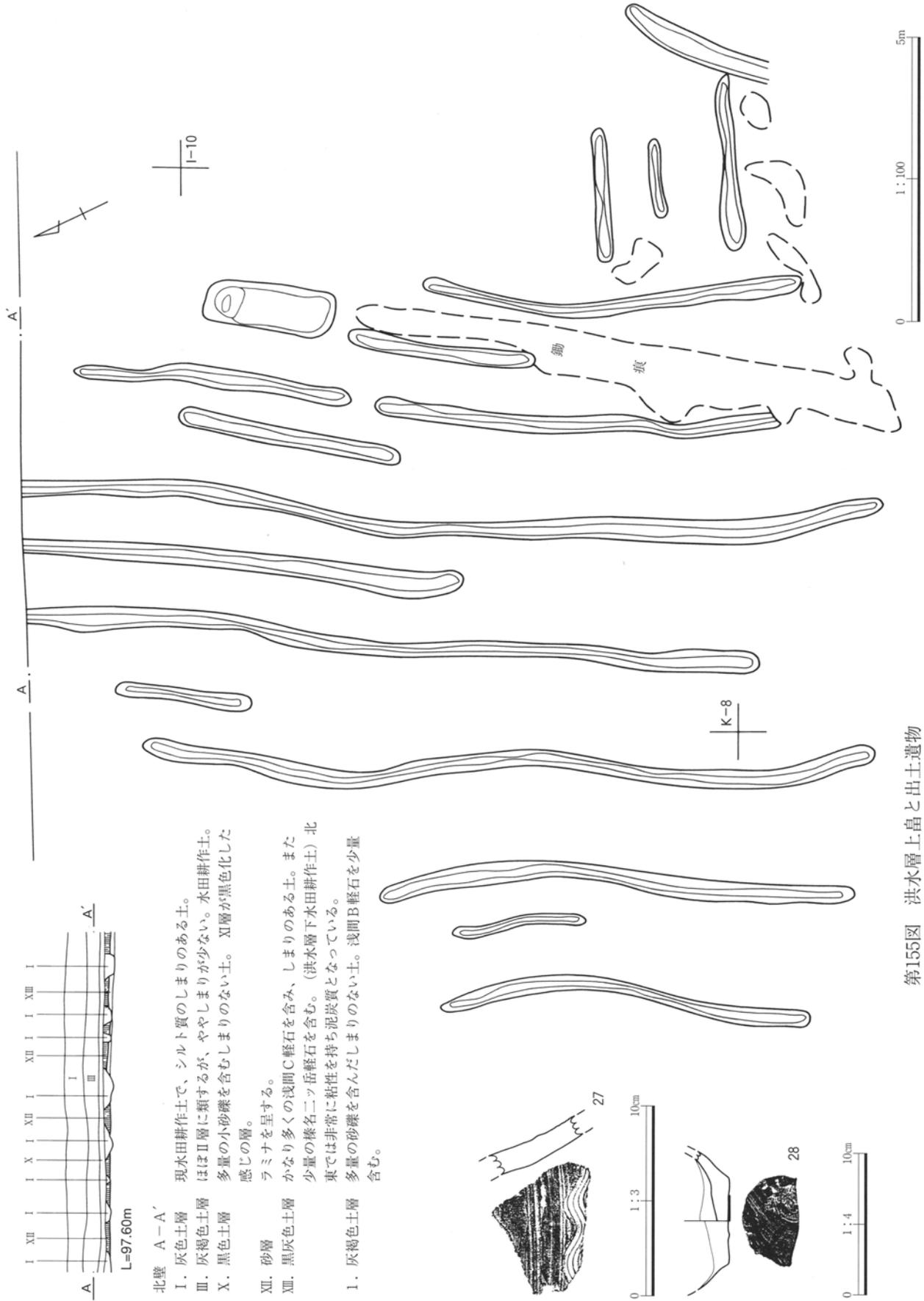
東壁 A-A'

- I. 灰色土層 現水田耕作土で、シルト質のしまりのある土。
- III. 灰褐色土層 ほぼII層に類するが、ややしまりが少ない。水田耕作土。
- V. 黒褐色土層 かなり多くの浅間B軽石を含み、やや粘性をもつ。あまりしまりはない。水田耕作土と考えられる。
- VI. 黒褐色土層 ほぼV層に類するが、あまり粘性がない。
- VIII. 浅間B軽石層 上面は追分火山灰が部分的に残っている。
- 1. 黄灰色砂と褐色土のラミナ状堆積。



第154図 浅間B軽石下水田と出土遺物





- 北壁 A-A'
- L=97.60m
- I. 灰色土層 現水田耕作土で、シルト質のしまりのある土。
 - III. 灰褐色土層 はほII層に類するが、ややしまりが少ない。水田耕作土。
 - X. 黒色土層 多量の小砂礫を含むしまりのない土。XI層が黒色化した感じの層。
 - XII. 砂層 ラミナを呈する。
 - XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ヶ岳軽石を含む。(洪水層下水田耕作土)北東では非常に粘性を持ち泥炭質となっている。
 - I. 灰褐色土層 多量の砂礫を含んだしまりのない土。浅間B軽石を少量含む。

第155図 洪水層上島と出土遺物

恵器甕肩部破片(27)、須恵器鉢底部破片(28)が畝部分から出土した。27は多段の沈線の間に櫛描波状文を施す須恵器の破片である。6世紀から8世紀の時期が考えられるが、小破片のため確定できない。畝耕作土に混入した遺物と考えられる。28は軟質な焼成の破片でほとんど類例をみない遺物である。ロクロの使用や軟質の焼成から平安時代後半期のものと考えられる。28は鋤痕跡を埋めていた土層から出土しており、弘仁九(818)年以降、天仁元(1108)年以前と考えられる本畠の年代観とも合致する遺物である。

この畠の下位には、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層で埋まった水田面が埋没している。水田を埋めた洪水層の上位から掘り込まれた畠は、下位の水田が洪水層で埋まった後、その復旧としてつくられたものと考えられる。

(4) 洪水層下水田 (第156~158図)

PL60・64~67 遺物観察表P.299・300)

T~S-1~10グリッドで洪水層直下から形状のわかる20区画を含む水田域と、東端に掘られた用水路と見られる溝(5号溝)1条を検出した。

水田面を埋めていた洪水層は荒砥川の氾濫によるものと推定され、厚さ10cm前後の灰色砂(XII層)と粒径5~10mm大の輝石安山岩や軽石を主体とする厚さ20cm前後の礫(XI層)から構成されている。近年の赤城山麓の調査成果から、この洪水層は弘仁九(818)年の地震に伴う泥流であることがわかっている。

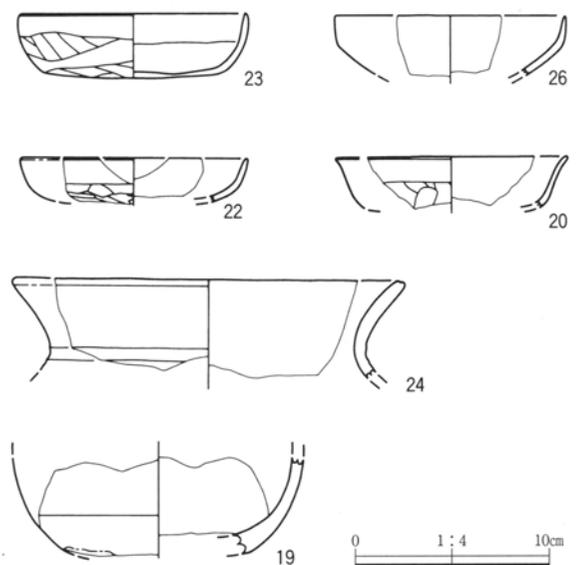
水田区画は、北から南に傾斜する緩斜面に南北方向に縦アゼの区画を施し、その中を傾斜に合わせて横に区切るアゼをつくっている。縦アゼによる区画の幅は一様でなく微妙な水田面の傾斜によって変化させている。M~Oグリッドでは幅20.6m、D~Lグリッドでは最大幅40.6mで縦アゼがある。M~Oグリッドでは、水田耕土下層の溝と重なる位置に带状の凹地が残っていた。これは下層の土層堆積の影響を受けたものと推定される。この地点では本水田耕作時にも微妙な傾斜があり、格子を基調にした水

田区画が崩れたり、縦アゼの幅が狭くなったものと考えられる。

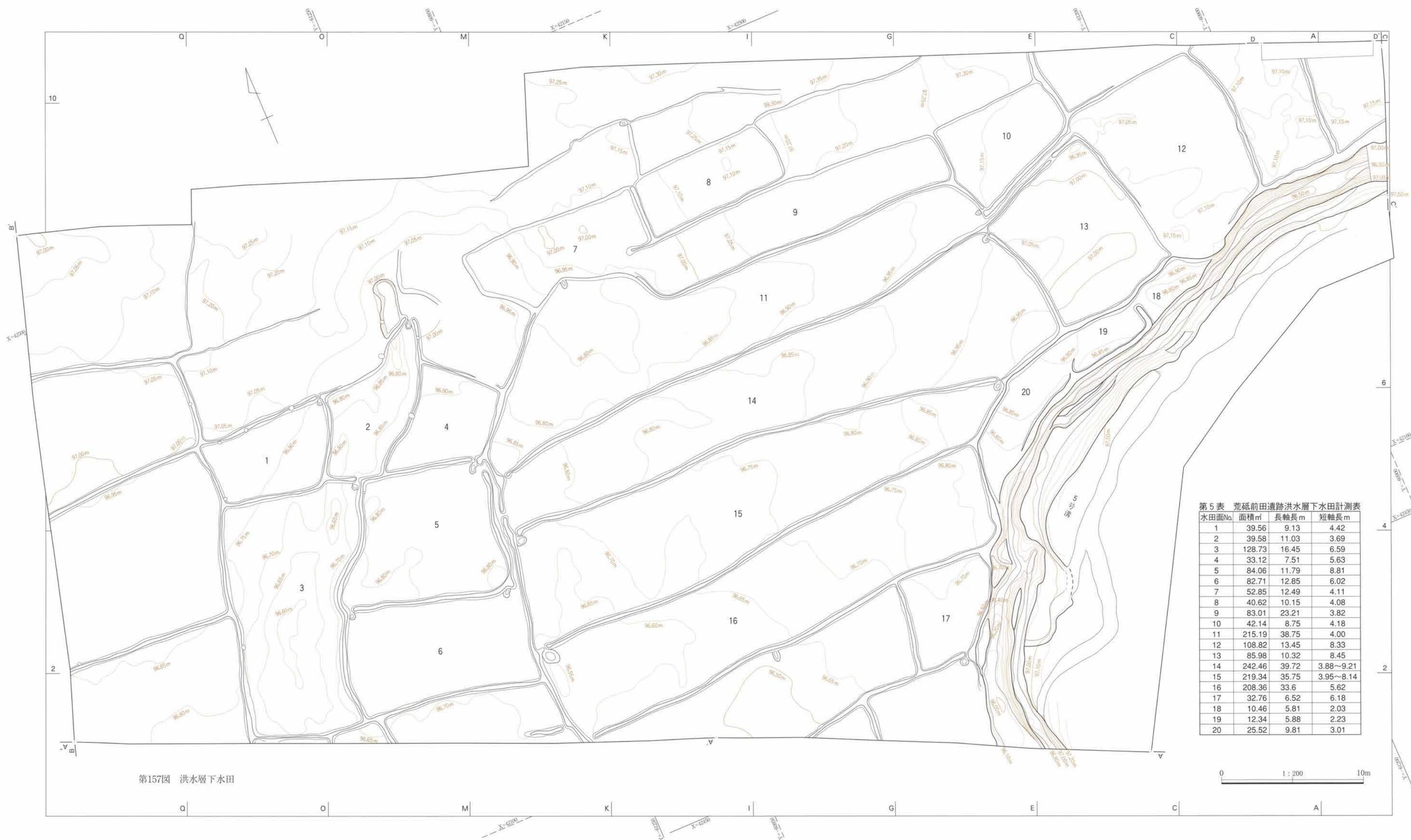
横アゼの位置は、その地点の傾斜によって決まるものと推定される。発掘区内では横アゼで区切られる水田面の幅は最大17m(P-1~4グリッド付近)、最小3.5m(F-6グリッド付近)であった。水口は横アゼに施設されていた。水口の位置は横アゼの中央でなく、東西どちらかの端か、両端である。縦アゼで区切られた範囲のなかで、掛け流しによる配水がおこなわれていたことがわかる。

また、D・E-8・9グリッド、L-3・4グリッドの2カ所でアゼが二重にあり、その間が溝状になる部分が検出された。いずれも片側のアゼに水口が設けられている。上位の水田から直接水が入るのではなく、一度溝の中に水を引き込んでから、下位の水田あるいはさらに次の水田に水を入れている。類例には「温め」と呼ばれる水温調節のための小溝が知られているが、本遺跡の例では温める溝の長さが極端に短い。ここでは極端に面積が増える区画への配水を効率的にするために、掛け流しだけでなく大きい区画への迂回水路を設けたと考えられる。

各区画の形状・規模は、第4表にまとめたが、長方形を基調として最大32×8m(面積157m²)から最小4×2m(面積7m²)のものまであり、一定してい



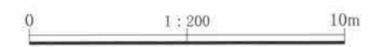
第156図 洪水層下水田出土遺物

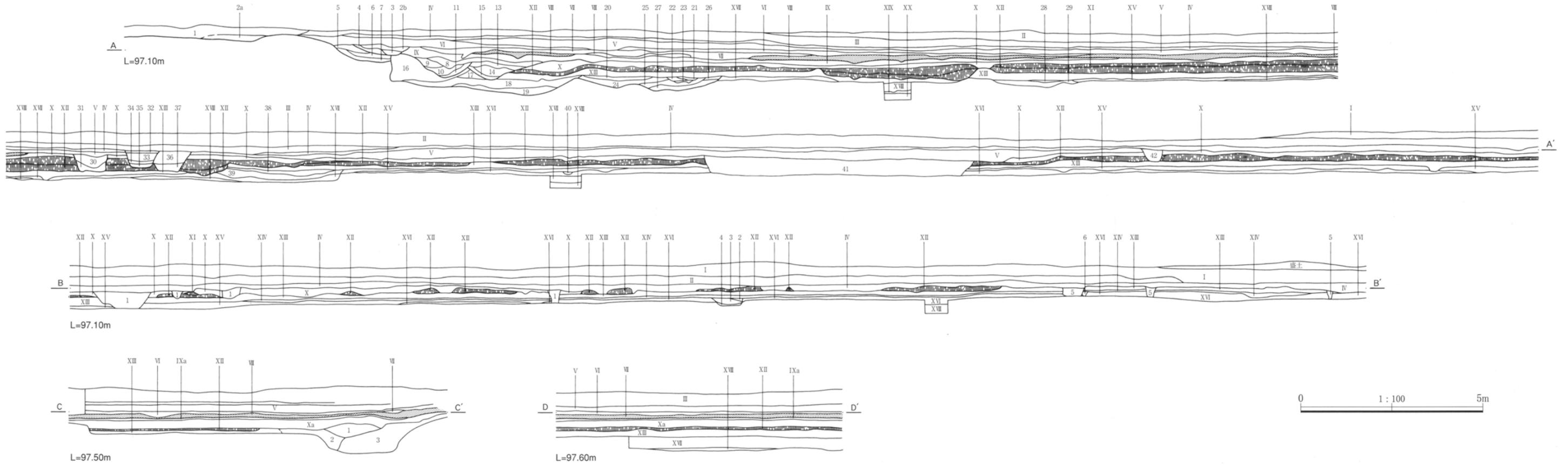


第5表 荒砥前田遺跡洪水層下水田計測表

水田面No	面積㎡	長軸長m	短軸長m
1	39.56	9.13	4.42
2	39.58	11.03	3.69
3	128.73	16.45	6.59
4	33.12	7.51	5.63
5	84.06	11.79	8.81
6	82.71	12.85	6.02
7	52.85	12.49	4.11
8	40.62	10.15	4.08
9	83.01	23.21	3.82
10	42.14	8.75	4.18
11	215.19	38.75	4.00
12	108.82	13.45	8.33
13	85.98	10.32	8.45
14	242.46	39.72	3.88~9.21
15	219.34	35.75	3.95~8.14
16	208.36	33.6	5.62
17	32.76	6.52	6.18
18	10.46	5.81	2.03
19	12.34	5.88	2.23
20	25.52	9.81	3.01

第157図 洪水層下水田





洪水層下水田（4面） A-A'・B-B'・C-C'・D-D'

- I. 灰色土層 現水田耕作土で、シルト質のしまりのある土。
- II. 灰褐色土層 現水田面の更に下面の水田耕作土。ややシルト質であるが、小砂礫を少量含む。下面是鉄分の沈着あり。
- III. 灰褐色土層 ほぼII層に類するが、ややしまりが少ない。水田耕作土。
- IV. 褐色土層 鉄分の沈着層。III層に類する。
- V. 黒褐色土層 かなり多くの浅間B軽石を含み、やや粘性をもつ。あまりしまりはない。水田耕作土と考えられる。
- VI. 黒褐色土層 ほぼV層に類するが、あまり粘性がない。
- VII. 褐色土層 浅間B軽石を多量に含んだ層であり、鉄分の沈着がみられる。
- VIII. 浅間B軽石層 上面は追分火山灰が部分的に残っている。
- IX. 黒色土層 砂礫を少量含むが、やや粘性ある土。
- IXa. 黒色粘質土層 浅間B軽石下水田の耕作土中にあると思われる。南側のIX層に対応するが粘質土である点が異なる。泥炭質。
- X. 黒色土層 多量の小砂礫を含むしまりのない土。XI層が黒色化した感じの層。
- Xa. 灰褐色粘質土 斑文状の鉄分の沈着が認められる。（植物の根か）かなり多くの砂粒を含み、あまりしまりが少ない土。
- XI. 砂礫層 直径1cm前後の礫を含み、ラミナを呈す。5cmほどの大胡火砕流を含むこともある。
- XII. 砂層 ラミナを呈する。
- XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ヶ岳軽石を含む。（洪水層下水田耕作土）北東では非常に粘性を持ち、泥炭質となっている。
- XIV. 黒褐色土層 鉄分の沈着層であり、多くの浅間C軽石を含む。
- XV. 黒色土層 XIII層、XIV層よりも浅間C軽石は多く含まれており、粘性を若干もち、あまりしまりはない。
- XVI. 黒色粘質土層 ほとんど浅間C軽石を含まず、やや泥炭質である。しまりのある土。
- XVII. 黒灰色粘質土層 XVI層、XVII層の漸移層と言える層。粘性に富む。
- XVIII. 灰白色粘質土層 しまりのある土で、粘性に富む。遺跡南側では部分的に鉄分の沈着も見られる。
- XIX. 暗灰色土層 シルトに近い砂質土であり、あまりしまりはない。
- XX. 暗灰色シルト質土 かなりしまりのある土。

南壁 A-A'

- 1. ロームと黒色土の攪乱層。
- 2a. ローム塊と砂の混土層。砂層はラミナを呈する。
- 2b. 黒褐色土と砂層の交互層。砂層はラミナを呈する。
- 3. ローム塊および粒子と砂層との互層。砂層はラミナを呈す。
- 4. 浅間B軽石の交互層。
- 5. 黒灰色粘質土層 浅間C軽石をかなり多量に含み粘性に富む。ローム粒子が若干含まれる。
- 6. ローム及び白色粘土（地山）と砂の混土層。
- 7. ローム・黒褐色土・砂との混土層。
- 8. 灰褐色土層 多量のローム粒子、砂を含む。やや粘性あり。
- 9. 黄灰色土層 多量のローム粒子を含む。黒色粘質土塊を含む。
- 10. 黒色土とローム塊が互層をなす。ラミナ状の堆積であり、細砂もかなり含む。
- 11. 黒灰色粘質土 ローム粒子を塊状に含む。粘性ある土。
- 12. 黄色土層 ローム塊の堆積。
- 13. 灰色土層 かなり粘性のあるしまった土で、多くのローム粒子を含む。
- 14. 黄灰色土層 ハードロームがくすんだ色になったもの。少量の黒灰色土を含む。
- 15. 黒灰色土層 かなり多くの細砂を含む。やや粘質土。
- 16. 暗黄色土 かなりしまりのあるロームで岩窟面に相当すると思われる。
- 17. 黒灰色粘質土 部分的に細砂がラミナ状を呈す。しまりは少ない。
- 18. 黒灰色粘質土 17層よりも粘質性に富む。
- 19. 黄色粘質土と砂との混土層 ラミナを呈す。
- 20. 黒色粘質土 かなり多量の浅間C軽石を含み、しまりのある土。
- 21. 黒灰色土層 黒色土と砂層との互層。ラミナ状呈す。
- 22. 黄灰色砂層 ラミナを呈し、榛名二ヶ岳軽石を含む。
- 23. 榛名二ヶ岳火山灰層
- 24. 黒灰色粘質土 部分的に細砂のラミナ堆積あり。しまりは少ない。
- 25. 黒灰色粘質土 多量の浅間C軽石を含み、部分的に集中する箇所あり。しまりの少ない土。
- 26. 黒色粘質土層 わずかの浅間C軽石を含む。しまりのある土。

- 27. 黒色粘質土層 26層に類するが、しまりのない土。
- 28. 黒色粘質土 少量の浅間C軽石を含む。
- 29. 細砂層 かなり固くしまっており、多量の浅間C軽石を含む。
- 30. 黒褐色土層 多量の浅間B軽石を含む。底部に黒灰色土がレンズ状堆積を示す。（6号溝）
- 31. 砂層 ラミナ堆積を示すが、黒灰色土を部分的にはさむ。（6号溝）
- 32. 褐色土層 浅間B軽石及び砂礫をかなり多く含んだ層。しまりのある土。（5号溝）（可能性としてV層上面よりの切り込みということも考えられる。）
- 33. 黒褐色土層 多量の小砂礫を含んだ層。しまりのない土。（5号溝）
- 34. 黒色土層 33層よりやや黒味の多い土で、腐植土がより多く含まれる。砂礫がかなり含まれる。（5号溝）
- 35. 砂礫層 XII層が攪乱された感じの層。（5号溝）
- 36. 黒褐色土層 III層に類する土で、かなり多量の砂礫を含み、軽石も少量含む。ややしまりのある土。（7号溝）
- 37. 黒色土層 多量の小砂礫を含んだ、しまりのない土。（7号溝）
- 38. 黒色土層 やや灰色がかった色調で粘性ある土。浅間C軽石を含む。
- 39. 黒色土層 多量の浅間C軽石を含み、部分的に集中する。38層より粘性あり。
- 40. 黒色土層 多量の小砂礫を含んだしまりの少ない土。
- 41. 黒灰色土層 多量の小砂礫を含んだしまりの少ない土。
- 42. 黒灰色土層 41層に類する。

西壁 B-B'

- 1. 黒灰色土層 多量の小砂礫を含んだしまりのない土。XII層、XIII層の攪乱と見られる。
- 2. 黒灰色土層 かなりの粘性としまりのある土。浅間C軽石を多く含み、炭化物・焼土粒を若干含む。（4号土坑）
- 3. 黒色土層 浅間C軽石を多量に含み、ややしまりのある土。（4号土坑）
- 4. 炭灰層 炭化物と灰の堆積層であり、底部は焼土化している。（4号土坑）
- 5. 黒灰色土層 多量の小砂礫を含んだ層。しまりのない土。
- 6. 黒灰色土層 多量の浅間C軽石を含んだしまりのある土。

C-C'

- 1. 黒灰色土層 かなりの粘性を帯び、下部はローム塊や軽石（榛名二ヶ岳軽石か）が互層をなし、ラミナを呈する。（3号溝）
- 2. 黒色粘質土層 地山のXIIIと軽石（浅間C軽石か）・砂とが互層をなす。
- 3. 黄灰色土層 地山の粘質ロームがくずれ込んだ感じの層。

第158図 洪水層下水田土層断面



第159図 古墳時代遺構全体図

0 1:200 10m

ない。方形区画を基本にしながらも、微妙な傾斜に対応した区画が行われたものであろう。

水田耕作土(XIII層)は、黒泥土に近い粘質土で、多量の榛名山起源の軽石と浅間C軽石を含む。

5号溝は水田域の東端に掘られた用水路で、幅0.73~3.21m、深さ0.51m、調査長52.68mである。土層断面A-A'ではいくつかの埋没土の単位があり、同じ流路で数回掘り直されたものと考えられる。法面にも掘削のズレによる段が幾重にも残っていた。埋没土は黒色土とロームとラミナ堆積の砂が互層になっている部分が多い。水田面を埋めている洪水層が直接溝を埋めている状況ではなかった。したがって厳密には埋没時の溝は水田面に伴うものではないことになる。しかし、C・D-5~7グリッドでは5号溝の北縁に沿ったアゼが残っていることから、水田面に伴う溝も5号溝とほとんど同じ位置にあり、その後掘り返されたのが5号溝ということになる。ただし浅間B軽石が降下した天仁元(1108)年には5号溝上層に軽石がほとんど水平に堆積していることから、5号溝が掘り返された時期は弘仁九(818)年以降、天仁元(1108)年の間に限定されることになる。

水田面に直接かかわるといえる出土遺物はきわめて少ないが、水路内および水田面上で8世紀末から9世紀初頭とみられる土師器坏(第156図20・22・23・26)、土師器甕(24)の比較的大型の破片が出土している。洪水層を弘仁九(818)年とする年代観と矛盾しない。しかし、水田耕土内出土遺物には第156図19に示した陶器天目碗破片も混在している。これは浅間B軽石直下の水田廃絶後、掘立柱建物等の居住域に転換した際に混入した遺物と見られる。この他に図示しなかったが、水田耕土中から土師器76点、須恵器3点、弥生土器1点の細片が出土した。

3. 古墳時代

(1) 概要

古墳時代の遺構は、溝6条と土坑2基を検出した。これらの遺構は洪水層下水田耕土(XIII層)を除去し、黒色粘質土(XVI層)上面で確認した。これらの遺構からは古墳時代前期および中期の土器が出土している。周辺では、北側に隣接する荒砥宮田遺跡1区や西側に隣接する荒砥前田II遺跡3区で古墳時代前期集落も確認されている。これらとの関連も視野に入れると、本遺跡における古墳時代の遺構は洪水層下水田の耕作開始時期を決定する上で重要である。

(2) 溝(第159~161図 PL60・68 遺物観察表P.300)

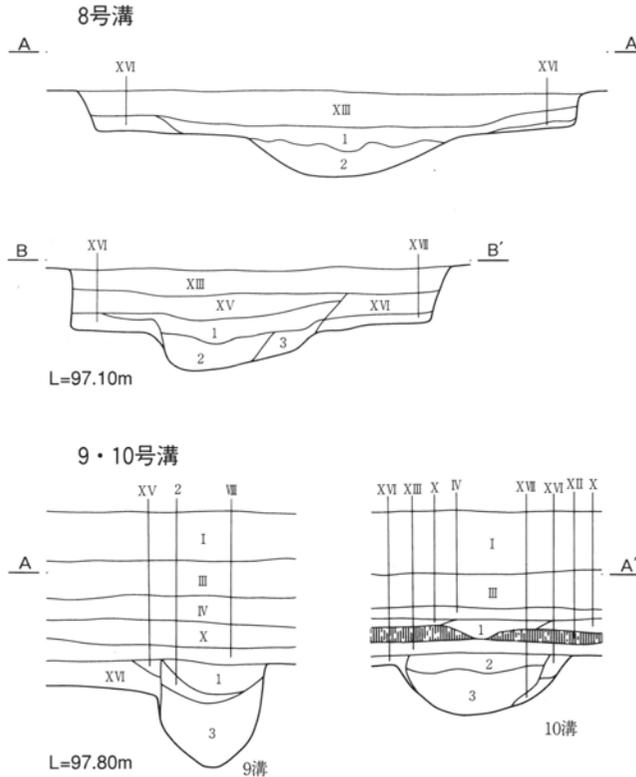
8号から13号溝の6条の溝が検出された。これらの溝は発掘区中央に一部重複しながら分布している。走向はほぼ北から南に向かう8号・9号・13号溝と北東から南西に向かう10号・11号・12号溝の3条に分けられる。

8号溝は幅0.87~2.46m、深さ0.32m、調査長39.3mで北西端は未検出である。砂礫層と浅間C軽石を多量に含む黒褐色土で埋まっていた。出土遺物は図示しなかったが土師器細片50点、須恵器1点のほか、土師器大型壺底部破片(第160図6)、坏破片(5)が底面付近で出土している。また埋没土中から鉄製刀子(M1)、鉄製鎌(M2)が出土した。

9号溝は幅0.56~1.95m、深さ0.66m、調査長49.8mで緩やかに蛇行している。浅間C軽石を含む粘質の黒色土で埋まっていた。底面付近には浅間C軽石の純堆積が一部に見られた。出土遺物は埋没土中層から6世紀後半の土師器坏(第160図14)が出土した。また底面付近から4世紀後半と見られる土師器埴(7~10)、壺(11・12)、S字甕(13)の破片が出土した。他に図示できなかった土師器破片8点が埋没土から出土した。

10号溝は幅0.71~1.04m、深さ0.39m、調査長10.5mで、9号溝と重複するが新旧関係は不明である。溝の南端にあたる。埋没土は下半部は細かい砂

第5章 荒砥前田遺跡の遺構と遺物



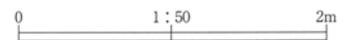
- 8号溝 A-A'・B-B'
- XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ツ岳軽石を含む。(洪水層下水田耕作土)北東では非常に粘性を持ち、泥炭質となっている。
- XV. 黒色土層 XIII層、XIV層よりも浅間C軽石は多く含まれており、粘性を若干もち、あまりしまりはない。
- XVI. 黒色粘質土層 ほとんど浅間C軽石を含まず、やや泥炭質である。しまりのある土。
- XVII. 黒灰色粘質土層 XVI層、XVII層の漸移層と言える層。粘性に富む。
1. 黒褐色土層 かなり多量の浅間C軽石を含み、やや砂質を帯びる。しまりのある土。
2. 砂礫層 非常に固くしまった砂で、底部付近には大型の礫(5cm)を含む。
3. 黒褐色土層 浅間C軽石を多量に含み、XVII層塊を含むしまりのある土。1層に類する。

- 9・10号溝 A-A'
- 9号溝
- I. 灰色土層 現水田耕作土で、シルト質のしまりのある土。
- III. 灰褐色土層 ほぼII層に類するが、ややしまりが少ない。水田耕土。
- IV. 褐色土層 鉄分の沈着層。III層に類する。
- X. 黒色土層 多量の小砂礫を含むしまりのない土。XI層が黒色化した感じの層。
- XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ツ岳軽石を含む。(洪水層下水田耕作土)北東では非常に粘性を持ち、泥炭質となっている。
- XV. 黒色土層 XIII層、XIV層よりも浅間C軽石は多く含まれており、粘性を若干もち、あまりしまりはない。
- XVI. 黒色粘質土層 ほとんど浅間C軽石を含まず、やや泥炭質である。しまりのある土。
1. 黒色土層 かなり粘性をもつ。またしまりのある土。浅間C軽石を多量に含み、榛名二ツ岳軽石も含む。
2. 黒灰色土層 しまりのある土。浅間C軽石を少量含む。
3. 黒色粘質土 かなり粘性をもつが、しまりのない土。浅間C軽石が多量に含まれる。また底部付近には純層の浅間C軽石も部分的に見られる。

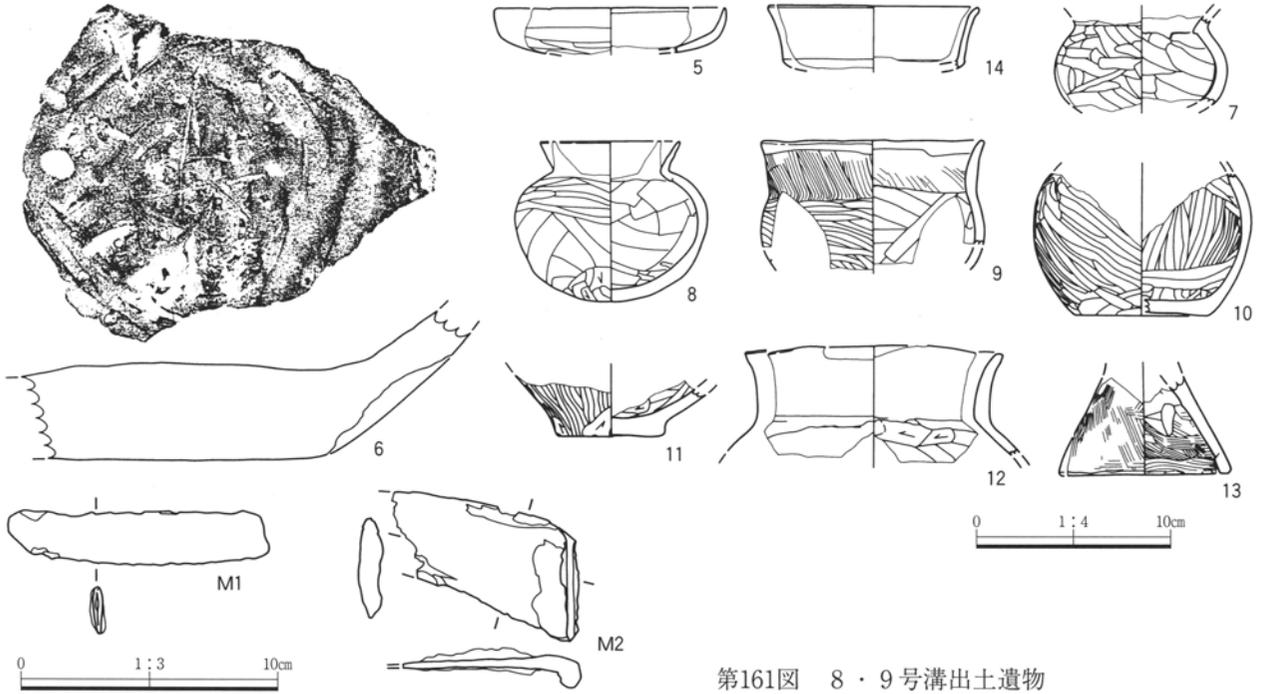
- 11号溝
-
- A A'
- L=97.10m
- 10号溝
- I. 灰色土層 現水田耕作土で、シルト質のしまりのある土。
- III. 灰褐色土層 ほぼII層に類するが、ややしまりが少ない。水田耕作土。
- IV. 褐色土層 鉄分の沈着層。III層に類する。
- X. 黒色土層 多量の小砂礫を含むしまりのない土。XI層が黒色化した感じの層。
- XIII. 砂層 ラミナを呈する。
- XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ツ岳軽石を含む。(洪水層下水田耕作土)北東では非常に粘性を持ち、泥炭質となっている。
- XVI. 黒色粘質土層 ほとんど浅間C軽石を含まず、やや泥炭質である。しまりのある土。
- XVII. 黒灰色粘質土層 XVI層、XVII層の漸移層と言える層。粘性に富む。
1. 砂層 大胡火砕流の小軽石を含み、ラミナを呈す。
2. 黒褐色土層 浅間C軽石をかなり多く含み、しまりのある土。
3. 黒灰色細砂層 きめの細かい砂が堆積。ラミナを呈す。

- 11号溝 A-A'
- XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ツ岳軽石を含む。(洪水層下水田耕作土)北東では非常に粘性を持ち、泥炭質となっている。
- XVII. 黒灰色粘質土層 XVI層、XVII層の漸移層と言える層。粘性に富む。
- XVIII. 灰白色粘質土層 しまりのある土で、粘性に富む。遺跡南側では部分的に鉄分の沈着も見られる。
1. 黒灰色土層 多量の浅間C軽石を含み、しまりのある土。XIII層に類する。
2. 黒色粘質土 しまりのある土。
3. 黒色粘質土 2層に類する。

第160図 8～11号溝土層断面

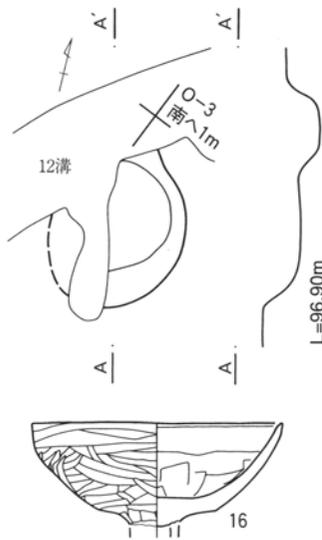


3. 古墳時代

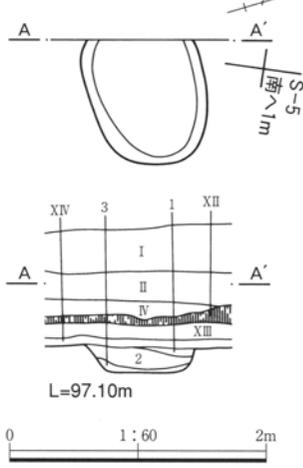


第161図 8・9号溝出土遺物

5号土坑

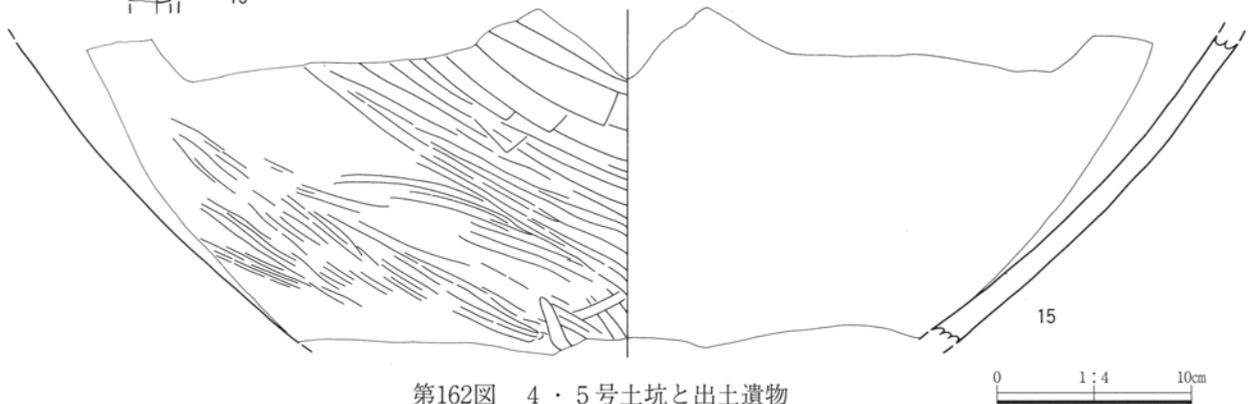


4号土坑



4号土坑 A-A'

- I. 灰色土層 現水田耕作土でシルト質のしまりのある土。
 - II. 灰褐色土層 現水田面の更に下面の水田耕作土。ややシルト質であるが、小砂礫を少量含む。下面は鉄分の沈着あり。
 - IV. 褐色土層 鉄分の沈着層。III層に類する。
 - XII. 砂層 ラミナを呈する。
 - XIII. 黒灰色土層 かなり多くの浅間C軽石を含み、しまりのある土。また少量の榛名二ッ岳軽石を含む。(洪水層下水田耕作土)北東では非常に粘性を持ち、泥炭質となっている。
 - XIV. 黒褐色土層 鉄分の沈着層であり、多くの浅間C軽石を含む。
1. 黒灰色土層 かなりの粘性としまりのある土。浅間C軽石を多く含み、炭化物・焼土粒を若干含む。
 2. 黒色土層 浅間C軽石を多量に含みややしまりのある土。
 3. 炭灰層 炭化物と灰の堆積層であり、底部は焼土化している。



第162図 4・5号土坑と出土遺物

層で、上半部は浅間C軽石を多く含む黒褐色土である。出土遺物はない。

11号溝は幅0.38～0.96m、深さ0.67m、調査長9.4mで北半分は調査できなかった。8号溝と重複するが、11号溝のほうが新しい。多量の浅間C軽石を含む黑色粘質土で埋まっていた。出土遺物はない。

12号溝は幅0.45～1.1m、深さ0.81m、調査長21.3mで、底面は凹凸が著しい。埋没土は不明である。出土遺物はない。

13号溝は幅0.75～1.35m、深さ0.4m、調査長11.8mで、大きく蛇行する。南端部は検出できなかった。埋没土は不明である。出土遺物はない。

(3) 土坑

(第159・162図 PL60・68 遺物観察表P.301)

4号・5号土坑の2基の土坑が検出された。

4号土坑は楕円形で、西端は発掘区域外のため未検出である。埋没土は浅間C軽石を多量に含む黒色土で、底面には厚さ3～7cmの炭灰層が堆積しており、底面は焼土化していた。遺物は土師器細片3点のほか、土師器大型壺胴下半部破片(第162図15)が出土している。底面の炭や焼土の状況や、大型壺の破片が出土していることから何らかの用途があったと推定されるが、断定するにはいたらなかった。

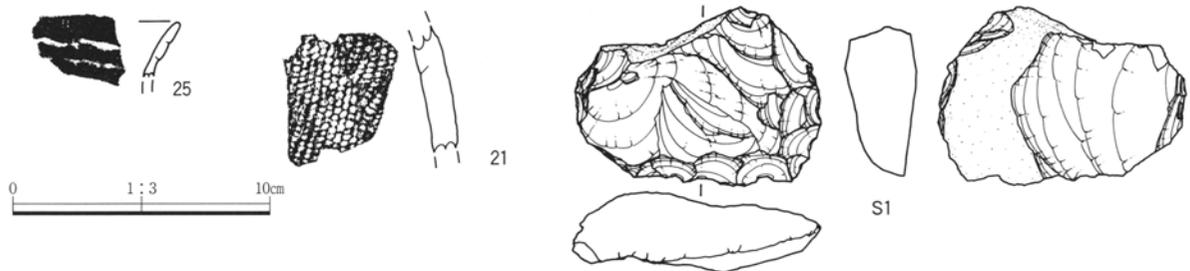
5号土坑は12号溝と重複していることから全体形状は不明であるが、不定形な楕円形と推定された。埋没土は記載がなく不明である。埋没土から土師器高坏の坏部(第162図16)が出土している。9号溝底面出土の土器群と同様の時期のものと考えられる。

(4) 遺構外の出土遺物(第163図 遺物観察表P.301)

ここでは遺構に伴わない形で出土した遺物のうち、古墳時代以前のもを図示した。

第163図25は赤井戸式土器壺口縁部破片で、洪水層下水田耕作土下位の浅間C軽石のブロック中から出土した。21は称名寺I式の深鉢胴部破片で、RL単節の充填縄文が施されている。S1はスクレーパーで縄文時代の石器である。

これらの遺物が示す時期の遺構は確認できなかったが、周辺の遺跡との関連を考える際には重要な遺物と考えられよう。



第163図 遺構外の出土遺物

第6章 自然科学分析報告

1.出土遺物の形状と組成からみた荒砥宮田遺跡における平安時代の鉄器製作活動について

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

群馬県前橋市に所在する荒砥宮田遺跡は、県営荒砥北部圃場整備事業に伴い昭和58年に発掘調査された遺跡である。調査の結果、4～6世紀代および10世紀代に比定可能な住居跡が確認され、いずれの住居跡からも鉄器、鉄滓が検出された。4～6世紀代の住居跡から出土した方形鋏・鋤先をはじめとする鉄器ならびに鉄滓については既に金属考古学的調査が行われ、時代の経過とともに鉄器または鉄器地金の供給地域が変化した可能性があること、既に古墳時代に遺跡内またはその周辺で鋼の製造が行われていた可能性のあることが指摘された¹⁾。

前橋市およびその周辺地域に所在する平安時代の遺構から出土した鉄関連資料の金属考古学的調査例は古墳時代に比べ豊富で、鉄・鉄器の生産状況、とりわけ鉄器製作の素材となった原料鉄の生産と流通に関する検討がなされている²⁾。本誌38頁に記載されているとおり、荒砥宮田遺跡の平安時代の遺構から出土した鉄滓は鉄関連遺構に伴うものではなく、遺構との関係をふまえその成因を推定することは不可能である。鉄器についても時代特定が可能な共伴遺物は未検出であり、その金属考古学的調査結果を基準資料として扱うことは難しい。ここでは当該地域における鉄器の普及状況を解明するための基礎資料を得ること、これまでに行われた当該地域出土鉄器の金属考古学的調査結果と比較することを目的として、10世紀代に比定される住居跡から出土した鉄塊、鉄滓、および土坑から出土し時期特定が困難な鉄器の金属考古学的調査を実施した。以下に、荒砥宮田遺跡出土遺物の金属考古学的調査結果について報告する。

2 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は、鉄器1点、鉄塊1点、鉄滓2点、羽口先端部と推定される資料1点の合計5資料である。調査資料の概要は表1に示すとおりである。

3 調査試料の摘出

鉄器についてはダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル(以下、ハンドドリルという)を使って、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、約0.5gの試料を摘出した。鉄塊および鉄滓については、ハンドドリルで深さ1～2cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約1gの試料を切り取った。それぞれの資料から摘出した試料をさらに2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。

4 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鋼製鉄器・鋼塊中の非金属介在物、および鉄滓中の鉱物相をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(E PMA)で分析した。研磨面の5割を超える領域がメタルで構成されているNo1およびNo2から摘出した試料については、ナイトール(硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5ml溶液)で腐食した後、組織観察した。

化学分析用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセト

第6章 自然科学分析報告

ンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾燥し、ほぼメタルからなる試料、またはメタルと錆が混在した試料については直接、錆、鉄滓についてはメノー乳鉢で粉碎した後テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe(全鉄)、Cu(銅)、マンガン(Mn)、リン(P)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、チタン(Ti)、けい素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)の12元素を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)で分析した。

5 調査結果

5-1 鉄器・鉄塊の化学組成

表2、表3にNo1、No2から抽出した試料の化学成分分析結果を示す。No1およびNo2のT.Feはそれぞれ96.01%、90.25%で、主としてメタルからなる試料が分析されている。No1からは0.019%のCo、No2からは0.01%を上回るCu、Ni、およびCoが検出されている。分析試料がほぼメタルによって構成されていること、銅をはじめとする鉄以外の金属を素材とする資料の固着がみられなかったことを考慮すると¹⁾、それぞれの試料から検出されたCu、Ni、およびCoのほとんどが錆化前の地金に含まれていたとみることができる。

5-2 鉄器・鉄塊の組織観察結果

No1およびNo2から抽出した試料の中心部分はほぼメタルによって構成されていたので、ナイタールで腐食し、組織観察した。No1はその全域がわずかに腐食されている(図1a₁・b₁)。マクロエッチング組織領域R₁内部はほぼフェライト(α Fe)からなり、炭素量約0.1%の鋼が配されている(図1c₁)³⁾。マクロエッチング組織領域R₂内部には灰色を呈する粒状領域(Wus)、やや暗灰色を呈する柱状領域(Fa)、および微細な粒子を内包する黒色領域(Ma)によって構成される非金属介在物がみられる。EPMAによる分析によって領域Wusはウスタイト(化学理論組成FeO)、領域FaはFeO-MgO-SiO₂系で(図1d₁₋₃)、マグネシウムを固溶した鉄カンラン石[2(Fe,Mg)・SiO₂]と推定された。

No2のマクロエッチング組織はほぼ全域が黒く腐食されている(図2a₁・b₁)。マクロエッチング組織領域R₁内部は初析セメントイト(PCm)と黒色を呈するパーライト[α Feとセメントイト(Fe₃C)の共析組織]、マクロエッチング組織領域R₂内部は網目状に析出した初析セメントイトとパーライトからなる(図2b₂₋₃)。炭素量0.8%を上回る過共析鋼である³⁾。メタルには灰色のFe-Ti-Al-Mg-O系領域(XT)とFeO-CaO-Al₂O₃-K₂O-MgO-SiO₂系のガラス質ケイ酸塩(G1)からなる非金属介在物が見出された(図2c_{1,2})。上記組織観察結果を整理すると、表2・3右欄のとおりとなる。

5-3 鉄滓・羽口先端の化学組成

No3およびNo4のT.Feはそれぞれ46.88%、51.51%で、他に12~15%のSi、1~4%のAlを含有する。酸化鉄に富む鉄滓である。No5に含有されるT.Feは3.36%で、主成分はSi、Alである。No5を除く2点の鉄滓は酸化鉄と粘土状物質の反応生成物、No5は羽口先端部破片が溶融または部分溶融した資料と推定される(表4)。

5-4 鉄滓から抽出した試料の組織観察結果

No3およびNo4のマクロ組織にはいたるところに空隙がみられる。No3のマクロ組織内部はウスタイト(Wus)、灰色をしたFe-Ti-Al-Mg-O系化合物(XT)、暗灰色をしたFe-Al-O系化合物(Ha)、暗灰色のFe-Si-O系

化合物 (Fa: 鉄かんらん $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ と推定される)、やや暗灰色をしたFe-Ca-Si-O系化合物[(Fe,Ca)-かんらん石と推定される]、および微細な化合物を内包する黒色領域(Ma)、No4のマクロ組織枠内部はウスタイト(Wus)、暗灰色のFe-Si-O系化合物 (Fa: 鉄かんらん $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ と推定される)、および微細な化合物を内包する黒色領域(Ma)からなる。No5のマクロ組織枠内部はガラス化した領域(G1)の中に酸化鉄(Fe-O系化合物)が残存する(図3)。上記組織観察結果は表4最右欄に示すとおりである。

6 考察

6-1 鉄器・鉄塊の分類

No1には炭素量約0.1%の鋼が配されている。ただし摘出した極一部の試料に基づく調査結果のため、資料全体の断面構造は不明である。当該遺跡の古墳時代の遺構から出土した方形鋏・鋤先の製作に共析鋼(炭素量約0.8%の鋼)に近い組成の鋼、および過共析鋼(炭素量約0.8%以上の鋼)が配されていたこと¹⁾、古墳出土刀剣の中に人為的に炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて作刀したと推定される資料がみられること⁴⁾、および奈良時代の直刀の中にも炭素量の高い鋼を心金としその両側を炭素量の低い鋼で挟んだ断面構造を有するものが確認されていること⁵⁾を加味すると、No1についても炭素量の異なる鋼が配されていた可能性がある。この点については当該資料またはそれとほぼ同形態の資料から、広領域に調査試料を摘出し確認する必要がある。

No2は過共析鋼である。この小鉄塊は使用不能と判断され廃棄された資料と推定されるが、同時に遺跡内では亜共析鋼に加え、共析鋼またはそれを上回る炭素量の鋼が製造されていた可能性があることを示している。この点については生産工房とそこから検出される道具、および鉄塊の組成を吟味して確かめる必要がある。

6-2で述べるように、古代には複数の鋼製造法があった可能性がある。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、製造される鋼の組成は変化する。従って、表2および表3の分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。表2、表3の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度鉄中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。図4aはNo1およびNo2から摘出された2試料の $(\text{mass}\% \text{Co})/(\text{mass}\% \text{Ni})$ と $(\text{mass}\% \text{Cu})/(\text{mass}\% \text{Ni})$ を、図4bは $(\text{mass}\% \text{Ni})/(\text{mass}\% \text{Co})$ と $(\text{mass}\% \text{Cu})/(\text{mass}\% \text{Co})$ を求めプロットしたものである。これまで錆化した資料の場合には、埋蔵環境下からの富化を考慮して、Ni、Coが0.01%以上含有されているものを選別してプロットした。No1はメタル試料で、埋蔵環境からの分析値に対する影響はない。No1のNi含有量は0.005%であるが、表4に掲げるNo5(羽口先端部)の5倍に上ることを考慮すると、No1から検出されたNiもそのほとんどが原料鉱石に起因するとみることができる。そこで図4aにはNo1の値もプロットした。なお、図では非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されたものを黒丸(●)、鉄チタン酸化物が見出されなかったものを白丸(○)、非金属介在物が見出されなかったものを白三角(△)で示した。また、図には既の実施した方形鋏・鋤先¹⁾、および7世紀中葉から10世紀前半に比定される前橋市およびその周辺遺跡から出土した鉄器・鉄塊の値(表5)もプロットしてある。なお、表5のNo12については図4a、bの枠外の離れた位置に分布する。No17、No18は錆化した試料で前者のNi含有量は0.002%、後者のCo含有量は0.007%と低レベルにある。No12、No17、およびNo18についてはそれぞれ図4a・b、図4a、および図4bへのプロットを見合わせた。図4a・bおよび表5から以下の4点を指摘できる。

① No1およびNo2は図4aでは左方上、図4bでは左方下のほぼ近接した位置にプロットされる。No1および

No2の非金属介在物組成に差異がみられるため、それぞれの生成経路は異なっていたと推定されるが、始発原料は同じであった可能性が高い。

- ② 方形鋏・鋤先から抽出した資料の分布域とNo1およびNo2の分布域は異なる。当該遺跡における鉄器または鉄器地金(鉄器を製作するための原料鉄)の獲得方法が、古墳時代と平安時代では異なっていた可能性が高い。
- ③ 図4aにおいてNo1およびNo2とNo13、No6、No9、No14、およびNo16はそれぞれ原点を通る同一直線上にあり、図4bではそれぞれ左下方にはほぼまとまって分布する。前者の3資料、および後者の4資料の始発原料は同じであった可能性がある。図4aにおいてNo7、No10、およびNo18の3資料も原点を通る同一直線上に分布する。図4bにおいて上記3資料は左下のほぼ同一直線上にある。No7をはじめとする3資料はNo6をはじめとする4資料に近接して分布するため、7資料すべての始発原料は同じであるとみることでもできる。この点については類例の蓄積を待って判断する必要がある。
- ④ No8、No11、No12、およびNo9はそれぞれ単独に分布する。これら4資料の始発原料はいずれも異なっていて、今回検討した資料の中には同じ始発原料を用いて製作されたとみなすことのできる鉄器はみられない。

③、④に基づけば、8世紀から10世紀にわたり原料鉄を供給し続けた地域が複数存在したものと推定される。鉄器の場合、利用価値を失った資料の再利用も考えられるため、考古学的研究結果に基づく推定時期と地金の組成を直ちに関連づけて議論することは危険である。この点については、型式学的検討がなされ、時代特定が可能な製品鉄器についての金属考古学的研究結果の蓄積を図ったうえで、さらに検討を進める必要がある。

6-2 古代における鋼の製造

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石⁶⁾)を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を抽出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある⁸⁾。製錬炉で直接に鋼が作り出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における鋸押法⁹⁾によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄[炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄(主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている)]を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶⁸⁾と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので(溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1~0.2%の鋼を溶融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある³⁾)、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述の事情によるものと推察される。

一方、夥しい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鑄造鉄器の普及が示すように¹⁰⁾、遅くとも9世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち炉内で生成した銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている¹¹⁾。得られた銑鉄を溶解し鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造方法は銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼(鉄)法¹²⁾に位置づけられる。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶⁹⁾がよく知られている。たたら吹製鉄

には銑押法と鋤押法の2つの方法がある。後者における生産の主目的物は鋤鉄(主として鋼からなる鉄塊)、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に鋤鉄もできる。銑押法において鋤鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから熔融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焰にふれ酸化され、鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鋤鉄とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上ののせられ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2段階の操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている¹³⁾。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質が異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とはほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化によって局所的に銑鉄の脱炭が図られるが、溶銑(熔融した銑鉄)を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている^{14)~18)}。この方法の場合、溶銑の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

上記から明らかなように、古代には鉄に関する生産設備として少なくとも①製錬炉、②溶解炉、③精錬炉、④鍛冶炉の4つがあった可能性がある。さらに、製錬炉としては主として銑鉄を生産するための炉と鋼を生産するための炉が、精錬炉については銑鉄を局所的に熔融し脱炭して鋼を製造するための炉と、溶銑を準備した後それを脱炭して鋼を製造するための炉が、鍛冶炉については精錬鍛冶炉と鍛錬鍛冶炉または小鍛冶炉があった可能性があり、検出された炉跡の残存状況、出土資料の形状と組成でただちに生産内容を決定することはきわめて危険である。まず、生産設備の復元を可能な限り行い、生産に使用された道具類の使用方法について検討する。その結果に共伴して出土した資料の形状や組成、最終製品の組成を加味し、生産活動内容の推定を行う必要がある。以下ではこの点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、鉄塊、鉄滓の成因と羽口の使用方法について検討する。

6-3 鉄滓の成因と羽口の使用方法

既述のとおり、金属考古学的調査を行った鉄塊、鉄滓は2区7号住居跡から出土している。鉄関連炉は未検出なため、遺構に基づく成因推定はできない。ここでは金属考古学的調査した資料の形状と組成を基に、鉄滓の成因と羽口の使用方法について検討する。

表4の3資料のうち、No5は溶融または部分溶融した羽口先端部と推定されている。摘出した試料の組織観察によって、局所的に酸化鉄(Fe-O系化合物)が残存することが確認された。操作の過程で揮発した酸化鉄が羽口先端部に付着した可能性がある。No3およびNo4はともに塊状滓で、前者は黒褐色を呈し全域がほぼガラス化している。後者は黒褐色領域の中に錆が混在する。

5-4に述べた組織観察結果および表4の化学組成を加味すると、No3およびNo4は酸化鉄に富んだ鉄滓と粘土状物質が反応して生成した資料と推定され、錆が混在するNo4についてはその生成過程で、鉄と鉄滓とが接触した状態が存在したと思われる。6-2に基づけば、製錬、精錬鍛冶、精錬、または小鍛冶操作での生成が考えられる。製錬または精錬鍛冶過程での生成を想定した場合、No4の始発原料については、脈石中に鉄チタン鉱物を含まない岩鉄鉱を考える必要がある。No3には局所的に鉄チタン酸化物が混在する。化学成分分析によって明らかにされたTi含有量は1.56%と少量であり(表4)、使用された原料鉱石中に局所的に鉄チタ

ン鉱物が混在していたか、あるいは炉壁等の生産設備の素材中に混在していた鉄チタン鉱物が溶融または部分溶融し、鉄滓として排出されたものと考えられる。遺跡内およびその周辺に鉄鉱石資源が賦存しないこと¹⁾を加味すると、遺跡内またはその周辺で鉄鉱石を始発原料とする製錬が実施されていたことを指摘することは難しい。Na3およびNa4とほぼ同じ組成の鉄滓が混在した組成不均一な鉄塊の供給があり、それを素材として精錬鍛冶がなされていたと考えることによって、Na3およびNa4の精錬鍛冶過程における生成の説明が可能となる。

ある程度純化された鋼を加熱・鍛造して目的とする器形へと造形する小鍛冶操作では、鋼を過熱・鍛打した際に剥離した酸化鉄が火焔炉内に入り、炉底部で炉材粘土と反応し、Na3およびNa4とほぼ同じ組成の鉄滓が生成する可能性がある。Na3およびNa4については火焔炉底部で生成した鉄滓の一部とみることもできる。精錬操作では銑鉄中の炭素を低減(脱炭)し、鋼の製造が図られる。脱炭の方法として、6-3で述べた近世たたら吹製鉄における大鍛冶に加え、溶銑を準備した後それを空気酸化して、あるいは造滓材を併用しながら空気酸化する方法が提案されている(近世たたら吹製鉄における大鍛冶では固体銑鉄を部分溶融した後空気酸化して脱炭が施されるが、銑鉄をあらかじめ溶融状態にするという点で差異がある)。空気酸化によって銑鉄中の炭素とともに鉄そのものも酸化され一部は揮発する。造滓材として粘土状物質が使用された場合、揮発した酸化鉄と粘土状物質が反応し、Na3およびNa4と同じ組成の鉄滓が生成する。

Na3およびNa4の形状と組成に基づけば、製錬産物の供給を前提とした精錬鍛冶¹⁹⁾、精錬、または小鍛冶過程での生成を考えることができる。ここで考慮しなければならないことに、局所的に酸化鉄が残存する羽口先端部(Na5)の検出がある。精錬における溶銑の脱炭には、溶銑に空気を送り込むための道具が不可欠である。局所的に酸化鉄が残存するNa5は溶銑に空気を送り込むために使用された道具の可能性がある。Na1およびNa2については、炭素量の異なる鋼を人為的に製造するために、造滓材の組成を変えるなどして生成した資料とみることができる。Na1からNa5の形状と組成を総合的にみた場合、遺跡内およびその周辺では炭素量の異なる鋼の製造を目的とする精錬が行われていたと考えることができるが、この点については今後の発掘調査の進展に伴う、生産遺構、道具、生産物等の検出を待つて解明を図る必要がある。

7 まとめ

荒砥宮田遺跡から出土した遺物の金属考古学的調査をとおして、当該遺跡における古墳時代と平安時代とでは鉄器獲得方法が異なっていることが判明した。平安時代には当該遺跡またはその周辺で鋼の製造が行われていたことは確実で、炭素量の異なる鋼の造り分けを目的とした、造滓材を使用しての空気酸化による銑鉄の脱炭が行われていた可能性を考えることができた。北関東地域の平安時代出土鉄器の組成、鉄関連遺構の検出状況、およびそこから出土する鉄関連遺物の金属考古学的調査結果の蓄積を図り、それらの結果を比較検討することによって、平安時代における鉄器製作とその普及の実態がみえてくるにちがいない。

註

- 1) 『荒砥宮田遺跡Ⅰ』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2003年。
- 2) 『荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1997年。
- 3) 『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社、1968年。
- 4) 俵国一『日本刀の科学的研究』日立印刷、1982年。
- 5) 赤沼英男、木村克則「東北地方北部終末期古墳出土直刀の材質と製法」岩手県立博物館研究報告、7、1989年、pp.63-74。

- 6) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている⁷⁾。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して扱うことには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 7) 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、丸善、1981年。
- 8) 大澤正巳「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、8、1984年、pp.36-40。
- 9) 河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990年、p.11。
- 10) 五十川伸矢「古代・中世の鑄鉄鑄物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992年、pp.1-79。
- 11) 関清「古代末の北陸-富山湾岸部の遺跡群-」季刊考古学、57、1996年、pp.57-60。
- 12) 空気酸化により銑鉄中の炭素を低減した場合、操作方法によってはただちに α Feに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製鉄器によく使用される亜共析鋼が銑鉄を精錬してただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼(鉄)法という表現を用いた。
- 13) 村上英之助「村上・中澤の往復書簡」たたら研究、36・37、1996年、pp.78-88。
- 14) 福田豊彦「近世における『和鉄』とその技術-中世の『和鉄』解明のために-」『製鉄史論文集たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、2000年、pp.195-228。
- 15) 福田豊彦「近世前期、和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999年、pp.15-24。
- 16) 赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄をみる」ふえらむ、Vol.2 No 1、社団法人日本鉄鋼協会、1997年、pp.44-51。
- 17) 赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集 たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、2000年、pp.553-576。
- 18) 赤沼英男「中世後期における原料鉄の流通とその利用」『鉄と銅の生産の歴史』株式会社雄山閣、2002年、pp.97-115。
- 19) 遺跡直轄の製錬所が別途確保されていて、そこで生産された組成不均一な鉄塊が精錬鍛冶場に運び込まれていた、あるいは組成不均一な鉄が広域的に流通していたことを前提として、精錬鍛冶の実施が可能となる。流通品は価値換算を容易に行えるよう、組成や形状が規格化されている必要がある。組成が不均一で形状が不定形な鉄が商品として広域的に流通していたとは考えにくい。精錬鍛冶の実施には、遺跡直轄の製錬所の確保が不可欠であったと筆者は考える。

表1 調査資料の概要

No.	検出遺構		資料番号	資料名	外觀形状	推定時期
	遺構名	層位				
1	2区7土坑	埋土	M20	釘	-	不明
2	2区7住居	埋土	M17	鉄塊	板状。錆中にメタルが混在。	10世紀
3	2区7住居	貯蔵穴	M16	鉄滓	塊状。黒褐色を呈し赤錆が混在。	10世紀
4	2区7住居	埋土	M18	鉄滓	塊状。錆と黒褐色を呈する鉄滓が混在。	10世紀
5	2区7住居	埋土	M19	羽口先端	灰褐色を呈し発砲している。	10世紀

注) Noは分析番号。検出遺構、資料番号、資料名、推定時期は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・小島敦子氏による。

表2 No.1釘の分析結果

化学組成 (mass%)		Cu・Ni・Co三成分比															
T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Si	Ti	Ca	Al	Mg	V	マイクロ組織	n.m.i.	Cu*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni**(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)
96.01	0.006	0.005	0.019	<0.001	0.04	<0.001	0.001	0.40	0.003	0.015	<0.001	Pa(約0.1)	Wus, Fa, Ma	3.00	0.93	0.33	0.32

注1) No.は表1に対応。化学成分分析はICP-AES法による。

注2) Paはパーライト。括弧内の数値はマイクロエッチング組織から推定される炭素量。

注3) n.m.i.は非金属介在物組成。Wus:ウスタイト(化学理論組成FeO)、Fa:FeO-MgO-SiO₂系化合物、Ma:マトリックス。

表3 No.2鉄塊の分析結果

化学組成 (mass%)		Cu・Ni・Co三成分比															
T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Si	Ti	Ca	Al	Mg	V	マイクロ組織	n.m.i.	Cu*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni**(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)
90.25	0.013	0.014	0.042	<0.001	0.07	0.003	0.003	0.31	<0.001	<0.001	0.005	Pa(>0.8)	X T, G I	3.00	0.93	0.33	0.31

注1) No.は表1に対応。化学成分分析はICP-AES法による。

注2) Paはパーライト、Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。括弧内の数値はマイクロエッチング組織から推定される炭素量。noは見いだされず。

注3) n.m.i.は非金属介在物組成。X T:主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物、G I:ガラス質ケイ酸塩。

表4 鉄滓・羽口先端の分析結果

No.	化学組成 (mass%)											鉱物組成		
	T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	鉱物組成	
3	46.88	0.003	0.012	<0.001	0.003	0.11	1.56	14.9	1.72	3.91	1.10	0.125	Wus, X T, Ha, Fa, O I, Ma	
4	51.51	0.022	0.047	0.007	0.016	0.10	0.496	12.8	0.950	1.65	0.413	0.032	Wus, Fa, Ma	
5	3.36	0.003	0.028	0.001	0.002	0.04	0.397	36.1	0.614	7.37	0.542	<0.001	Fe-O系化合物、G I	

注1) No.は表1に対応。化学成分分析はICP-AES法による。

注2) Wus:ウスタイト(化学理論組成FeO)、X T:Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ha:Fe-Al-O系化合物、Fa:FeO-MgO-SiO₂系化合物、O I:Fe-Ca-Si-O系化合物、

G I:ガラス質ケイ酸塩、Ma:マトリックス。